沼津市文化財調査報告書　第 104 集

高尾山古墳発掘調査報告書

2012

沼 津 市 教 育 委 員 会

沼津市文化財調査報告書　第 104 集

高尾山古墳発掘調査報告書

2012

沼 津 市 教 育 委 員 会

巻頭カラー図版 1

平成 20 年度調査状況（北東から）

平成 21 年度調査状況（東から）

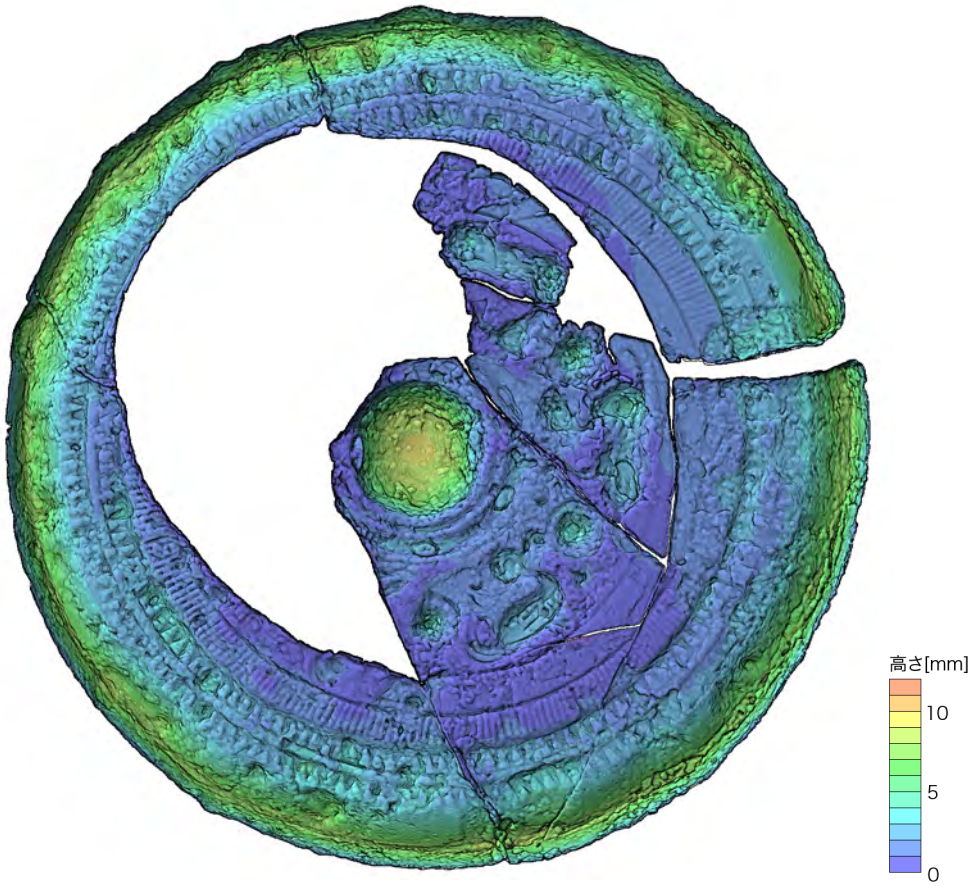
巻頭カラー図版２

平成 21 年度調査終了状況（北から）

主体部遺物出土状況（１）

巻頭カラー図版３

主体部遺物出土状況（２）



３次元レーザースキャナーによる画像（ＰＥＡＫＩＴ／1/ 1）

外来系土器

壺・甕類の口縁部

例　言

1．本書は静岡県沼津市東熊堂字北方に所在する高尾山古墳の発掘調査報告書である。

2．発掘調査は、沼津市建設部街路課（現在：道路建設課）が計画する都市計画道路沼津南一色線の建設に伴い、予定地内に分布する埋蔵文化財の記録保存を目的として実施された。

3．本古墳は小野真一によって古墳であることが主張され、高尾山穂見神社が鎮座していることから、「高尾山古墳」と命名された（小野真一 1978『目でみる沼津市の歴史』緑星社出版部 p.31）。ところがその後に作成された『沼津市文化財分布地図』（沼津市教育委員会 1982）には、なぜか「辻畑古墳」として掲載されており、またその間の経緯を示す記録も残されていない。しかし古墳の立地する小字名は「北方」であり、「辻畑」はその北側の地名である。

今回の調査開始時には「辻畑古墳」の名称が用いられ、新聞等の報道もこれに従っていたが、報告書を刊行するにあたり、発見時の名称である「高尾山古墳」を正式なものとすることにした。なおこの変更については、平成 23 年 6 月 23 日付け「沼教文第 182 号」で静岡県教育委員会に向けて協議し、同年 6 月 29 日付けの「教文第 437 号」で受理する旨の通知があった。

4．発掘調査の期間は以下のとおりである。

第 1 次試掘調査	平成 17 年 7 月 12 日～ 13 日
第 2 次試掘調査	平成 19 年 7 月 6 日～ 13 日
本調査（平成 20 年度）	平成 20 年 4 月 18 日～ 6 月 19 日　9 月 3 日～ 3 月 30 日
本調査（平成 21 年度）	平成 21 年 4 月 6 日～ 12 月 7 日

5．発掘調査の関係者は以下のとおりである。

事業主体者　沼津市教育委員会	教　育　長	工藤達朗	
	教 育 次 長	村上益男	
事業担当者　沼津市教育委員会	文化振興課		
	課　　長	上原正之	
	副　参　事	鈴木裕篤	
	課 長 補 佐	後藤　豊	
調査担当者（平成 20 年度）	文化財調査係長（学芸員）	高尾好之	
	指 導 主 事	厚地淳司	小林明正　渡邉　均
	事　務　員	剣持直樹	
調査担当者（平成 21 年度）	文化財調査係長（学芸員）	高尾好之	
	指 導 主 事	渡邉　均	倉地　憲

6．整理事業は沼津市教育委員会文化振興課が担当し、平成 22 年度・23 年度事業として実施した。整理事業の関係者は以下のとおりである。

事業主体者　沼津市教育委員会	教　育　長	工藤達朗
	教 育 次 長	海瀬　治

事業担当者　沼津市教育委員会	文化振興課	
	課　　長	宮下義雄
	課長補佐	山口正文（H22）
		勝又惠三（H23）
整理担当者	文化財調査係長(学芸員)	山本惠一
	主　　幹（学芸員）	池谷信之
	臨時嘱託	矢田晃代　北佳奈子　増島　淳
	整理補助員	工藤みさ子　笹原伊津子　関ちづる
		目黒上子　守屋智子　佐藤花奈子
		高林千明

7．本書の執筆者については目次に示したほか、第Ⅵ章・第Ⅶ章についてはそれぞれのタイトル下に記名した。

8．発掘調査と本報告書の執筆にあたり、以下の各氏・各機関よりご指導およびご教授をいただいた。記して深く感謝の意を示す次第である。
赤澤徳明・新井　悟・石野博信・伊藤雅文・入江文敏・植松章八・大塚淑夫・実盛良彦・白井久美子
杉山拓己・鈴木一有・鈴木敏則・鈴木とよ江・諏訪間順・瀬川裕市郎・田口一郎・田中　裕
辻　真人・寺前直人・長屋幸二・贄　元洋・西川修一・西島庸介・西松賢一郎・花井祐美子
土生田純之・久田正弘・平野五郎・福島志野・北條芳隆・向坂鋼二・安中哲徳・吉井英勝・横山　真
若狭　徹・渡辺　周・清水町教育委員会

9．本書では実測図以外に３次元レーザースキャナーによる画像（PEAKIT）を掲載している。この方法は３次元情報をもとに得られた特徴線抽出図と陰影図を重ねあわせるものであるが、凸形状の強調方法とデジタル上で生成した陰影との重ね方によって、様々な画像を得ることができる。特に銅鏡については、その重要性を考慮して４種類の画像を提示した。巻頭カラー図版３下のものは、２つの情報にさらに高さのデータを加えて表現した。また第 27 図～ 28 図には加工方法を変えた３種類のモノクロ画像を掲載した。

10．写真図版（PL.12 ～ PL.28）には、鉄器の部分拡大写真を掲載した。使用した機器は沼津市文化財センター所有の「Nakaden Focus Studio」である。

11．本書に係わる高尾山古墳の発掘調査資料および出土遺物は、沼津市教育委員会文化振興課文化財調査係（沼津市文化財センター〒 410-0873　沼津市大諏訪 46-1）で保管している。

目　次

巻頭カラー
例言
第Ⅰ章　位置と環境 …… 1
　1．立地環境 ……（池谷・矢田） 1
　2．堆積環境 ……（池谷・矢田） 1
　3．歴史的環境と周辺遺跡 ……（池谷・矢田） 4

第Ⅱ章　調査経過 …… 10
　1．調査に至る経緯 ……（高尾）10
　　a．試掘調査に至る経緯 …… 10
　　b．第 1 次試掘調査（平成 17 年度）…… 10
　　c．第 2 次試掘調査（平成 19 年度）…… 12
　　d．本調査に至る経緯 …… 12
　2．調査の経過 ……（高尾）13
　　a．平成 20 年度調査の経緯 …… 13
　　b．平成 21 年度調査の経緯 …… 13

第Ⅲ章　遺構 …… 15
　1．墳丘と周溝 ……（池谷）15
　　a．墳丘と周溝の層位的所見 …… 15
　　b．墳丘の形状 …… 15
　　c．周溝 …… 18
　2．埋葬施設 ……（高尾）34
　　a．埋葬施設の検出状況 …… 34
　　b．副葬品の出土状況 …… 35

第Ⅳ章　遺物 …… 44
　1．棺内の遺物 …… 44
　　a．鏡 ……（滝沢・平林）44
　　b．槍 ……（滝沢・平林）47
　　c．鉄鏃 ……（滝沢・平林 ）50
　　d．鉇 ……（滝沢・平林）53
　　e．勾玉 ……（池谷）58
　　f．朱 ……（池谷）58
　2．棺外の遺物 ……（池谷）58
　　a．棺上出土土器 …… 58
　　b．棺外および墳丘出土遺物 …… 60
　3．周溝および周辺の遺物 ……（池谷）62

a．玉類 …… 62
b．土器 …… 62
c．土製模造品 …… 87

第Ⅴ章　その他の遺構と遺物 …… 99
1．弥生時代～古墳時代 ……（北） 99
a．遺構と遺物の分布状況 …… 99
b．住居址 …… 99
c．溝状遺構 …… 99
d．不明遺構 ……103
2．律令時代 ……（北）103
a．遺構と遺物の分布状況 ……103
b．住居址 ……104
c．遺構外出土遺物 ……106
3．近世以降 ……（北）107
a．遺構 ……107
b．出土遺物 ……107

第Ⅵ章　発掘調査の成果と課題
1．高尾山古墳の墳丘と周溝について　山本恵一 ……119
2．高尾山古墳の出土土器について　渡井英誉 ……122
3．副葬品からみた高尾山古墳　滝沢　誠・平林大樹 ……147
4．高尾山古墳周辺における集落の動態と古墳築造の背景　佐藤祐樹 ……159
5．東駿河～伊豆北部の外来系土器について　岩本　貴 ……167
6．高尾山古墳から見えてくる東海系文化　赤塚次郎 ……181
7．高尾山古墳の評価をめぐる二・三の問題　寺沢　薫 ……185
8　高尾山古墳とその被葬者　大塚初重 ……199

第Ⅶ章　自然科学的分析
1．主体部棺底付近から出土した炭化材の年代と材同定　パリノ・サーヴェイ株式会社 ……207
2．高尾山古墳の繊維遺物について　伊藤美香 ……212
3．高尾山古墳出土大廓式土器の産地　増島　淳 ……216
4．高尾山古墳出土の赤色顔料の分析と東海西部系土器の産地推定　池谷信之 ……220

挿図目次

第 1 図　高尾山古墳位置図 …… 2
第 2 図　高尾山古墳周辺地形図 …… 3
第 3 図　愛鷹山麓の標準的土層 …… 4
第 4 図　弥生時代後期～古墳時代初頭の主要遺跡分布図 …… 5・6
第 5 図　古墳周辺地形図 …… 8
第 6 図　試掘トレンチ設定状況 …… 11
第 7 図　墳丘と周溝の層位的関係 …… 15
第 8 図　墳丘想定図 …… 16
第 9 図　墳丘・周溝計測図 …… 17
第 10 図　墳丘全体図 …… 19・20
第 11 図　セクションベルト設定図 …… 21
第 12 図　周溝土層断面図（1） …… 22
第 13 図　周溝土層断面図（2） …… 23
第 14 図　周溝土層断面図（3） …… 24
第 15 図　周溝土層断面図（4） …… 25
第 16 図　周溝内遺物出土状況分割図 …… 30
第 17 図　周溝内遺物出土状況図（1） …… 31
第 18 図　周溝内遺物出土層位状況図（1） …… 32
第 19 図　周溝内遺物出土層位状況図（6） …… 33
第 20 図　主体部周辺遺物分布状況 …… 36
第 21 図　主体部周辺遺物垂直分布 …… 37
第 22 図　主体部および構築墓坑実測図 …… 38
第 23 図　主体部遺物出土状況 …… 39・40
第 24 図　主体部土器出土状況 …… 41
第 25 図　主体部内炭化物出土状況 …… 43
第 26 図　銅鏡実測図 …… 44
第 27 図　銅鏡の３次元レーザースキャナーによる画像（1） …… 45
第 28 図　銅鏡の３次元レーザースキャナーによる画像（2） …… 46
第 29 図　槍１実測図 …… 48
第 30 図　槍２実測図 …… 49
第 31 図　鉄鏃法量の分布 …… 50
第 32 図　長三角式の構造 …… 50
第 33 図　鉄鏃実測図（1） …… 51
第 34 図　鉄鏃実測図（2） …… 52
第 35 図　鉇実測図 …… 53
第 36 図　槍・鉇の３次元レーザースキャナーによる画像 …… 55
第 37 図　鉄鏃の３次元レーザースキャナーによる画像（1） …… 56
第 38 図　鉄鏃の３次元レーザースキャナーによる画像（2） …… 57

第 39 図　勾玉実測図 …… 58
第 40 図　棺上出土土器実測図 …… 59
第 41 図　棺外および墳丘出土土器実測図 …… 61
第 42 図　玉類実測図 …… 62
第 43 図　周溝および周辺出土土器（1） …… 63
第 44 図　周溝および周辺出土土器（2） …… 64
第 45 図　周溝および周辺出土土器（3） …… 66
第 46 図　周溝および周辺出土土器（4） …… 67
第 47 図　周溝および周辺出土土器（5） …… 69
第 48 図　周溝および周辺出土土器（6） …… 70
第 49 図　周溝および周辺出土土器（7） …… 71
第 50 図　周溝および周辺出土土器（8） …… 72
第 51 図　周溝および周辺出土土器（9） …… 73
第 52 図　周溝および周辺出土土器（10） …… 74
第 53 図　周溝および周辺出土土器（11） …… 76
第 54 図　周溝および周辺出土土器（12） …… 78
第 55 図　周溝および周辺出土土器（13） …… 79
第 56 図　周溝および周辺出土土器（14） …… 81
第 57 図　周溝および周辺出土土器（15） …… 83
第 58 図　周溝および周辺出土土器（16） …… 84
第 59 図　周溝および周辺出土土器（17） …… 85
第 60 図　周溝および周辺出土土器（18） …… 86
第 61 図　弥生時代～近世以降遺構分布状況 ……100
第 62 図　第 1 号・第 2 号住居址実測図 ……101
第 63 図　溝状遺構等実測図（1） ……102
第 64 図　溝状遺構等実測図（2） ……103
第 65 図　第 1 号不明遺構実測図 ……104
第 66 図　第 2 号・第 3 号不明遺構実測図 ……105
第 67 図　第 3 号～第 5 号住居址実測図 ……106
第 68 図　遺構外出土遺物実測図（1） ……108
第 69 図　遺構外出土遺物実測図（2） ……109
第 70 図　防空壕 3 実測図 ……110
第 71 図　遺構外出土遺物実測図（3） ……111
第 72 図　遺構外出土遺物実測図（4） ……112

付図 1　周構内遺物出土状況図（2）
付図 2　周構内遺物出土状況図（3）
付図 3　周構内遺物出土状況図（4）
付図 4　周構内遺物出土状況図（5）
付図 5　周構内遺物出土状況図（6）
付図 6　周構内遺物出土層位状況図（2）

付図７　周構内遺物出土層位状況図（３）
付図８　周構内遺物出土層位状況図（４）
付図９　周構内遺物出土層位状況図（５）

挿表目次

第 1 表　周溝内土層断面註記一覧（1）…… 26
第 2 表　周溝内土層断面註記一覧（2）…… 27
第 3 表　周溝内土層断面註記一覧（3）…… 28
第 4 表　鉄鏃属性観察表（1）…… 54
第 5 表　鉄鏃属性観察表（2）…… 54
第 6 表　鉄鏃属性観察表（3）…… 54
第 7 表　棺上出土土器観察表 …… 58
第 8 表　棺外および墳丘出土土器観察表 …… 60
第 9 表　周溝内および周辺の土器観察表（1）…… 88
第 10 表　周溝内および周辺の土器観察表（2）…… 89
第 11 表　周溝内および周辺の土器観察表（3）…… 90
第 12 表　周溝内および周辺の土器観察表（4）…… 91
第 13 表　周溝内および周辺の土器観察表（5）…… 92
第 14 表　周溝内および周辺の土器観察表（6）…… 93
第 15 表　周溝内および周辺の土器観察表（7）…… 94
第 16 表　周溝内および周辺の土器観察表（8）…… 95
第 17 表　周溝内および周辺の土器観察表（9）…… 96
第 18 表　周溝内および周辺の土器観察表（10）…… 97
第 19 表　周溝内および周辺の土器観察表（11）…… 98
第 20 表　弥生時代溝状遺構土層一覧表（1）……113
第 21 表　弥生時代溝状遺構土層一覧表（2）……114
第 22 表　律令時代土器観察表 ……115
第 23 表　律令時代土製品観察表 ……116
第 24 表　近世以降陶磁器観察表 ……116
第 25 表　近世以降その他の遺物観察表 ……116

第Ⅰ章　位置と環境

1．立地環境

沼津市は静岡県東部の中核的都市であり、現在の中心市街地は狩野川の北岸に形成されている。伊豆半島のほぼ中央部に発する狩野川は、天城連山の雨水を集めて田方平野を北上する。田方平野は縄文時代前半には駿河湾に接続する「古狩野湾」となっており、狩野川は現在の伊豆の国市大仁付近で、黄瀬川は沼津市大岡付近で「古狩野湾」に注いでいたものと考えられている。しかしその後の海退や沖積作用によって、沼沢地からさらに陸地へと変化したために、狩野川は田方平野を蛇行しながら海への出口を求めて北進することになった。現在は南下してくる黄瀬川と沼津市大岡で合流し、香貫山の北側を抜けて駿河湾に注いでいる。

狩野川河口から約 17㎞遡った伊豆の国市千歳橋付近でも、その川面の平均的標高はわずか 9.5 ｍであり、中下流域の流れはきわめて緩やかである。かつて伊豆の国市大仁神島橋までは川舟の往来があったといわれ、伊豆の国市韮山四日町付近には、かつての河岸の名残である護岸が残されている。

本遺跡の所在する沼津市は、江戸時代には東海道沼津宿の宿場町として、またその後半は沼津水野藩の城下町としても発展した。特に現在の市街地南側の上土から川廓、さらに三枚橋にかけては、狩野川に沿うようにして近世東海道が敷設されており、陸上交通と狩野川水運、さらに駿河湾海運の交差点という条件がその発展の基礎にあった。

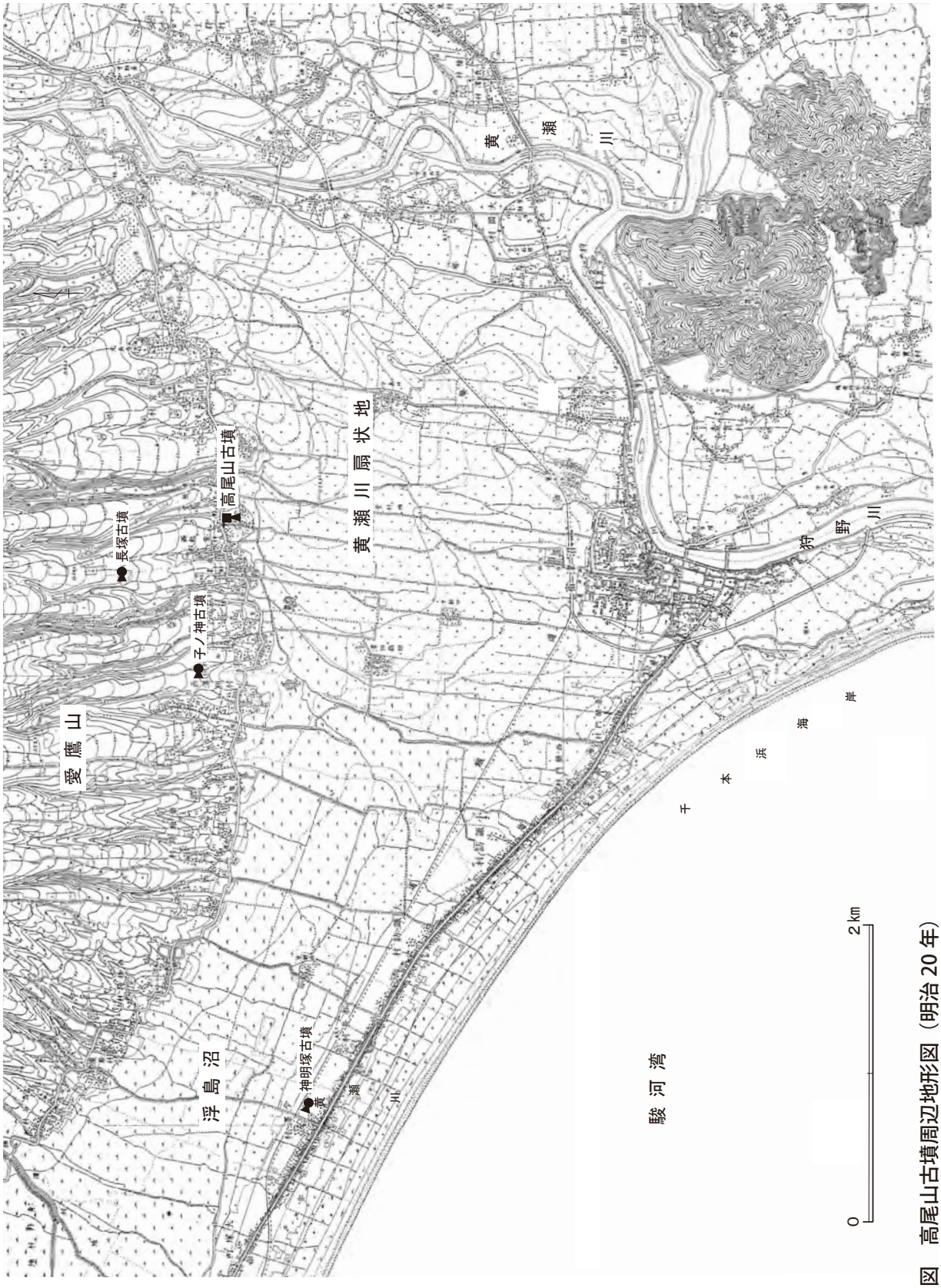
沼津水野藩の居城となった沼津城は、狩野川に接するように築城されている。河口近くにあるため湿地を利用したように思われることもあるが、第２図に示した明治 20 年測量の地形図をよく見ると、黄瀬川を中心として広がる扇状地（黄瀬川扇状地）の末端に立地しているのがわかる。この扇状地は縄文時代晩期ごろに、富士山東側斜面の崩壊に始まる大規模で短時間の土石流によって形成されており、その火山性の堆積物は「黄瀬川扇状層」と通称されている。黄瀬川扇状層の分布範囲は、愛鷹山山裾では西沢田付近､海岸部では東間門をつなぐラインまで及んでおり､弥生時代にはこれより東側は陸地となっていたものと考えられる。第４図に示した弥生時代の遺跡分布でも、愛鷹山山裾と海浜砂丘を除く平地において、弥生時代遺跡の西限は沢田遺跡（第４図№ 11）となっている。

黄瀬川扇状地の西側には、かつて浮島沼となっていた低湿地が広がっているが、この一帯は縄文海進時には、駿河湾から連続する海域となっており、愛鷹山の山裾にその海岸線が形成されていた。しかし富士川河口から供給された砂礫の堆積と海退により、狩野川河口方向に向かう東西の砂礫州が出現し、湾奥に汽水域が形成されることになった。これが浮島沼の前身であり、沖積作用と縄文時代後期以降に本格化する海退によって、汽水域から沼沢地へさらに湿地へと変化していった。その主要な開口部は現在の田子の浦あたりであったと考えられるが、弥生時代においても完全には陸化せず、高尾山古墳のそう遠くない場所まで､舟での進入が可能であったと考えられる。旧浮島沼の中央を東西に流れる沼川は、水域の後退過程を推定する有力な手がかりの一つであるが、その上流側は、黄瀬川扇状地と愛鷹山の間を抜け、沢田～熊堂付近でいくつかの支流に分岐して愛鷹山を遡っている。高尾山古墳はそうした沼川支流が開析する愛鷹山の尾根の末端部に築造されている。

2．堆積環境

本古墳の立地する愛鷹火山（愛鷹山）は約 40 万年前に小御岳（古富士に先行する火山）・箱根火山などと前後して活動を開始したといわれている。古期から中期にかけては、北側で開いた火口から玄武岩質の溶岩を流出させ、大量の玄武岩質の凝灰角礫岩を生成している。中期の終わりごろ（17 万年前）

第１図　高尾山古墳位置図



第２図　高尾山古墳周辺地形図（明治 20 年）

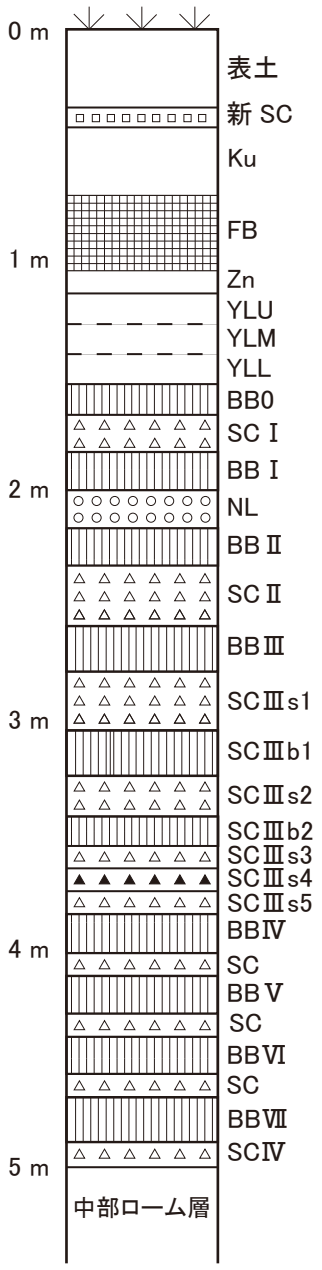
には成層火山の骨格ができあがった。新期になると、活動の中心は北西側から南東方向へ移動し、供給されるマグマも安山岩質～デイサイト質に変化している。新期の活動では山体の南東方向へ（現在の沼津市東側から長泉町にかけて）溶岩を流出させており、この活動によって愛鷹山南東側の山麓に広がるなだらかな丘陵地（足高尾上丘陵）が形成された。本古墳もこの丘陵地の末端に造営されている。

約 10 万年前に愛鷹山の火山活動が終息すると、その後は北北西側に位置する富士火山（正確にはその前身である古富士火山）の火山灰を堆積させるようになる。愛鷹山麓のローム層は３期に大別され、下位から堆積順に下部ローム層・中部ローム層・上部ローム層の順に命名されている（愛鷹ローム団研グループ 1969）。

中部ローム層と下部ローム層の境界には、SC Ⅳ層と命名されている薄く散漫な垂直分布を示す層準があり、市内井出丸山遺跡では、その上位の黒色帯である BB Ⅶ層にかけて、愛鷹山最古の石器群を検出している。BB Ⅶ層～ BB Ⅵ層については、37,500 年～ 36,000 年前という較正年代値が提示されている（三好 2011）。ここから上位では、赤褐色のスコリア帯と黒褐色の黒色帯が交互に堆積しており、４枚のスコリア帯と 10 枚の黒色帯が数えられている。上部ローム層の最上層には休場層（YL）と命名されている黄褐色のローム層があり、その中位（YLM）からは最終段階のナイフ形石器が、上位（YLU）からは細石器が出土する。

完新世の「新期富士火山」の活動は、三島溶岩や芝川溶岩に示されるように、活発な溶岩流の流出が特徴であるが、愛鷹山が楯となったために本古墳の周辺には及んでいない。休場ローム層の上位にある富士黒土層（FB）は、これらの溶岩流を流下させた活動とほぼ平行して形成されており、年代的には縄文時代草創期～早期に相当する。栗色土層（Ku）は休場ローム層よりもややくすんだ色調で、栗の果肉にやや似ることから命名されている。縄文時代前期～後期に対比される。

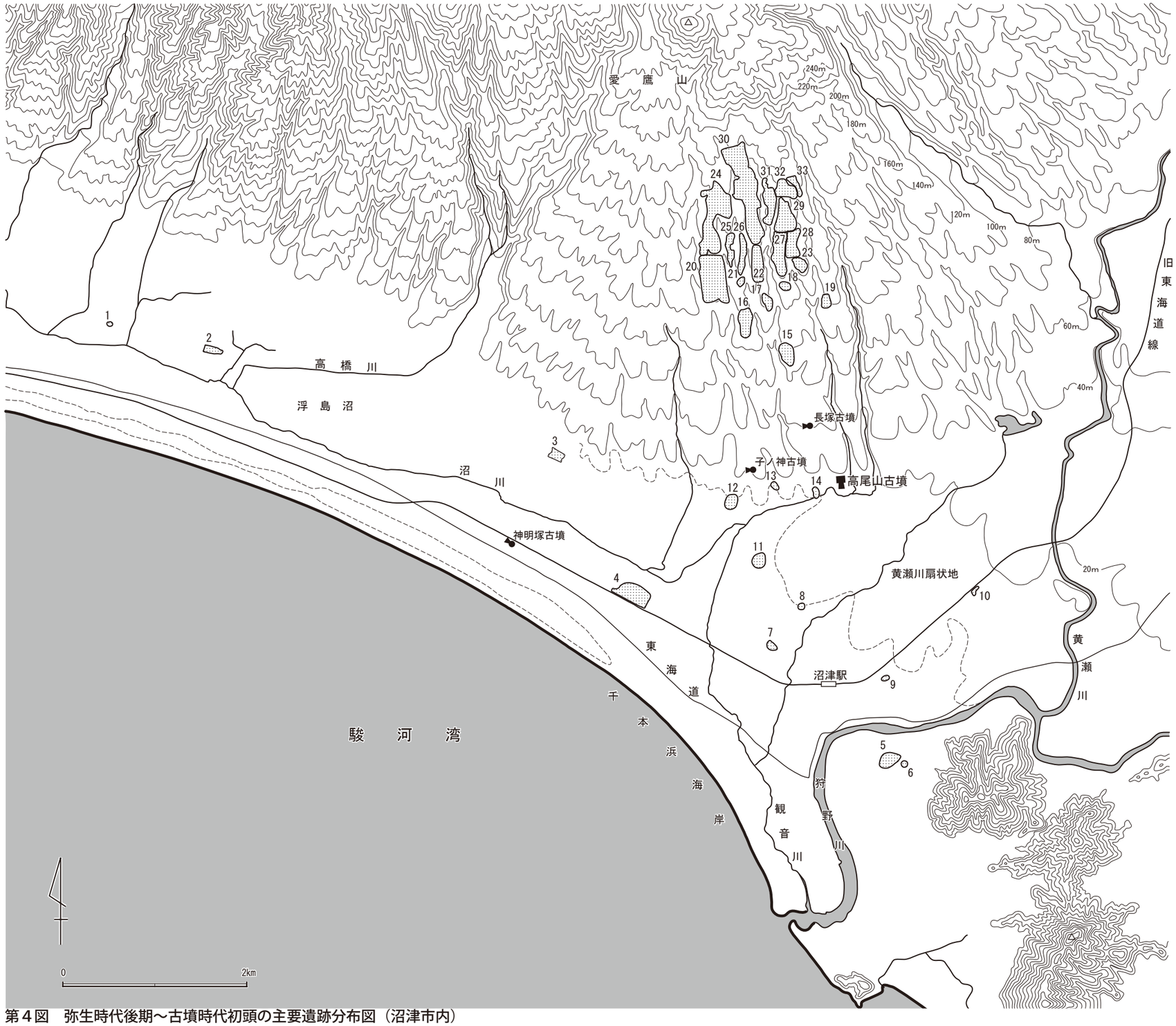
縄文時代晩期には天城山皮子平噴火口を供給源とするカワゴ平軽石（KgP）が降下しているが、愛鷹山麓では埋没谷などの特殊な条件下以外では、栗色土層上部から新期スコリアにかけて径１㎜～２㎜程度の白色の軽石が散在する程度である。栗色土層を覆う比較的風化の進んでいないスコリア層を「新期スコリア層」と通称している。「第二東海自動車道」の建設に伴って調査が行われた中見代第Ⅰ遺跡では、大廓式後半段階の住居址はこの新期スコリア層上面が確認面となっていたが、弥生時代後期後葉の住居址は栗色土層上面（新期スコリア層下面）が確認面であった。



第３図　愛鷹山麓の標準的土層

３．歴史的環境と周辺遺跡

地形の概略　立地環境の節で述べたように、狩野川河口以北の沼津市北部における地勢は、A．北側の愛鷹山とその山麓、B．東部に広がる黄瀬川扇状地、C．富士川起源の砂礫によって形成された海浜砂礫州、D．これらに北側・南側・東側を囲まれた旧浮島沼に区分される。



1　雄鹿塚遺跡
2　雌鹿塚遺跡
3　目黒身遺跡
4　西通北遺跡
5　御幸町遺跡
6　住吉遺跡
7　双葉町遺跡
8　本田町遺跡
9　三芳町遺跡
10　豆生田遺跡
11　沢田遺跡
12　尾崎遺跡
13　西ノ久保遺跡
14　入方遺跡
15　東大平遺跡
16　築地鼻遺跡
17　桜公園遺跡
18　神馬土手遺跡
19　枡土手遺跡
20　八兵衛屋敷遺跡
21　大曲遺跡
22　尾上Ⅱ橋遺跡
23　二本松遺跡
24　八兵衛洞遺跡
25　尾上Ⅲ橋西遺跡
26　尾上Ⅲ橋遺跡
27　北神馬土手遺跡
28　植出遺跡
29　植出北遺跡
30　西洞遺跡
31　中見代第Ⅰ遺跡
32　植出北Ⅱ遺跡
33　ニッ洞遺跡

第４図　弥生時代後期～古墳時代初頭の主要遺跡分布図（沼津市内）

旧石器時代～弥生時代　旧石器時代～縄文時代の遺跡のほとんどは愛鷹山に立地する。比較的最近まで沼地としての姿をとどめていた旧浮島沼と、縄文晩期以降に形成された黄瀬川扇状地には、当然のことではあるが、旧石器時代・縄文時代の遺跡は存在しない。しかし、最も北側に形成され現在はほとんど埋没してしまった砂礫州上に立地する雌鹿塚遺跡（第４図№２）からは縄文時代中期後半土器が、現在の砂礫州に接してその内側に形成された砂礫州上の鳥沢遺跡では、縄文時代後期前葉土器が出土しており、その本格的な離水の時期を知るてがかりとなっている。

弥生時代　この地域では縄文時代晩期終末から弥生時代にかけて連続して営まれる遺跡は少なく、沼津市北部では葱川遺跡くらいである。弥生時代中期前葉～中葉にかけての遺跡も、葱川遺跡以外には、二ッ洞遺跡（第４図№33）や雄鹿塚遺跡（第４図№１）で断片的な資料が知られる程度であるが、中期後葉段階では雄鹿塚遺跡がなお継続し、愛鷹山麓の古城遺跡、大岡の高田第六天遺跡など遺跡数の増加が認められる。また現在発掘調査が進められている西通遺跡では、弥生時代中期後葉の集落が確認され、その北側の限界を画する溝も発見されている。

弥生時代後期になると、愛鷹山麓のおよそ 150 m以下の丘陵地に複数の集落が密集して営まれるようになる。またこれらの集落の北端を画するように深さ２m前後の溝が複数の尾根を貫いていることが明らかになっており、尾根単位で現在認定されている集落は、それをさらに東西に結びつけて一つの集落として解釈する必要が生じている。これらの集落のうち、植出北遺跡（第４図№29）からはガラス勾玉と 32 個のガラス小玉が出土しており、その北側の植出北Ⅱ遺跡（第４図№32）からは５個体分のガラス勾玉の鋳型が出土している。

またこれらの集落、特に方形周溝墓や先述した大形の溝からは、高尾山古墳の造営された古墳時代初頭にまで下ると考えられる土器が含まれている。一例を挙げれば、八兵衛洞遺跡（第２次）（第４図№24）第２号方形周溝墓（芦澤・高尾 2004）、八兵衛洞遺跡（第３次）第３号溝状遺構出土土器（池谷・北 2010）であり、丘陵上の集落は一部にせよ、高尾山古墳の造営時まで存続していたものと考えられる。

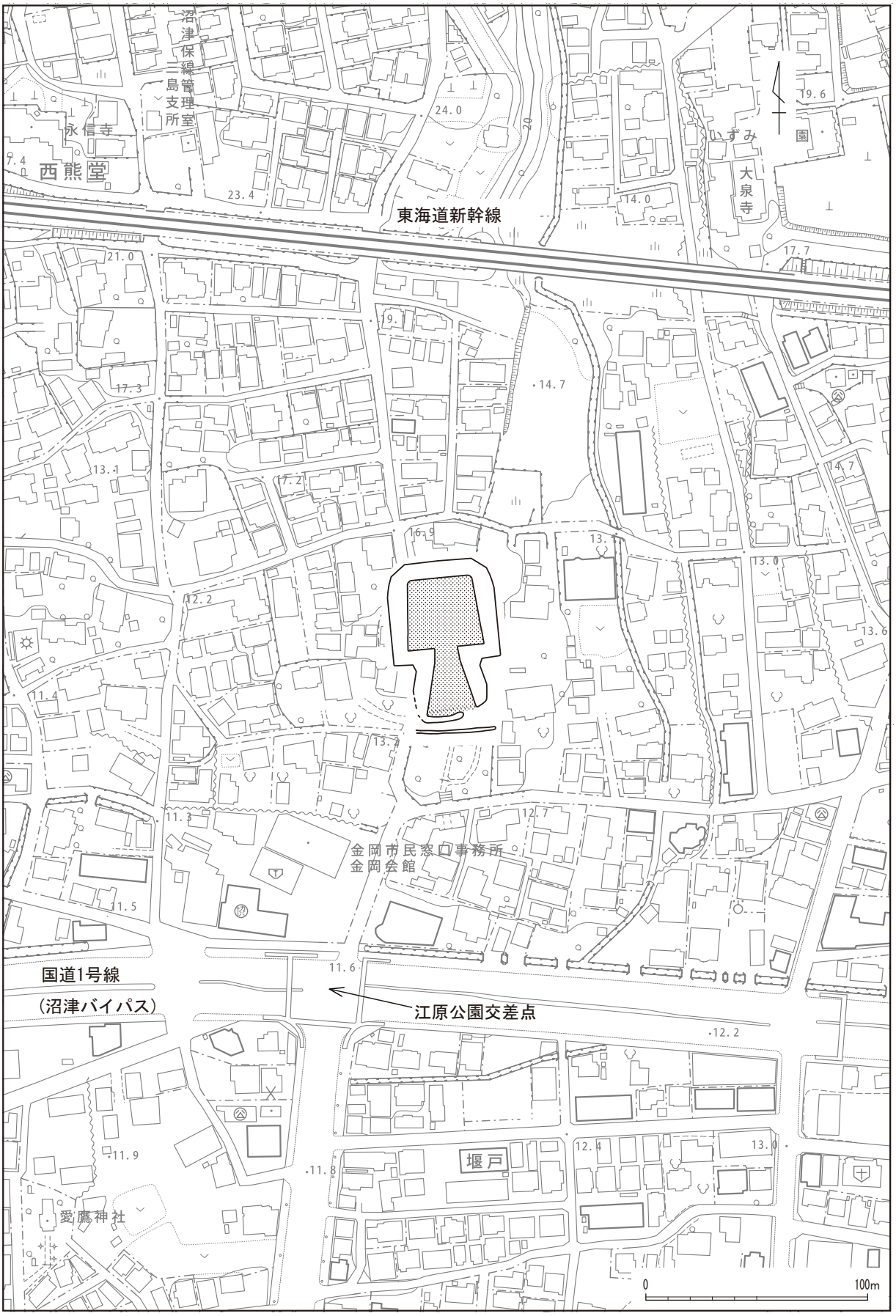
すでに述べたように黄瀬川扇状地の形成は縄文晩期以降であり、この扇状地上にも豆生田遺跡（第４図№10）や三芳町遺跡（第４図№９）、さらに狩野川を南に越えた御幸町遺跡（第４図№５）など、比較的規模も大きく、遺物も豊富な弥生時代後期の遺跡が点在している。また海浜砂礫州上にも、雌鹿塚遺跡・雄鹿塚遺跡のように比較的長期間、あるいは断続的に営まれた弥生時代後期の遺跡が存在する。

愛鷹山麓の遺跡群を一体の集落と捉えると、同時期に数百もの住居が併存したものと考えられる。山麓の一部では畠状の遺構も検出されているが、こうした集落の間隙に営まれた畠地だけではとうていその人口を維持できたとは考えられず、黄瀬川扇状地の集落、あるいは海浜砂礫州上の集落との関係が問題となっている。

古墳時代　愛鷹山麓ではその最初頭を除くと、大規模な集落はほとんど姿を消してしまう。わずかに中見代第Ⅰ遺跡（第４図№31）において確認された大廓Ⅳ式段階～中見代Ⅰ式段階の 22 軒の住居址（池谷・矢田 2009）を挙げうるのみであり、それ以外は二ッ洞遺跡第２号住居址（池谷・山本 1991）にみられるような、尾根を浸食した浅い埋没谷に１～３軒程度の住居址を設ける例が目にとまる程度となる。

沼津市内では古墳時代の主要な集落は、豆生田遺跡や御幸町遺跡など黄瀬川扇状地上に営まれ、弥生時代後期から継続する例が多い。また狩野川を南に越えた香貫地区になるが、藤井原遺跡では古墳時代前期に属する 82 軒の住居址が検出されている。しかし、かつて５世紀代と考えられていた神明塚古墳は、沼津市史編さん事業に伴う調査によって（滝沢・篠原 2005）、前期古墳であることが判明した。また三島市においては向山古墳群の中に竪穴式石室をもつ前期古墳（向山 16 号墳）が発見されている。

沼津市内には神明塚古墳を含めて３基の前方後円墳が存在する。長塚古墳は 1956 年に明治大学によって初めて調査が行われ（後藤 1957）、６世紀前葉に位置づけられている。子ノ神古墳はこれまで


東海道新幹線
国道1号線
（沼津バイパス）
江原公園交差点
金岡市民窓口事務所
金岡会館
堰戸
愛鷹神社
永信寺
西熊堂
大泉寺
0
100m

第５図　古墳周辺地形図

本格的な発掘調査が行われたことはなく、墳丘もかなり崩れているため、正確な時期ははっきりしない。また市内中沢田には大正期の県道建設に伴い破壊された道尾塚といわれる古墳があったとされ、近くの大中寺にはそこから出土したと伝えられる三角縁三神二獣鏡が保管されている。

古墳時代後期には愛鷹山麓を中心に石川古墳群や井出古墳群・東原古墳群などの群集墳が形成される。しかし、香貫山の周辺にも本郷町古墳群・天神洞古墳群があり、海浜砂礫州上にも中期～後期の古墳が点在している。また市内南部の海岸沿いにも江ノ浦古墳群や平沢古墳群・井田松江古墳群などが群在するほか、安山岩や凝灰岩の山体を利用して江ノ浦横穴群などの横穴群が造られている。

古墳時代後期の集落は、下道遺跡・中原遺跡や鳥沢遺跡などのように、海浜砂礫州上に集中している。しかしこの地域では群集墳の造営はあまり盛んではなく、その墳墓の位置が不明である。いっぽう群集墳の集中する愛鷹山麓には、それに見合うだけの集落が認められない。

引用参考文献

後藤守一 1957『沼津長塚古墳』沼津市教育委員会

池谷信之・山本惠一 1991『広合遺跡（e 区）・二ツ洞遺跡（a 区）発掘調査報告書』沼津市文化財調査報告書 52

芦澤玲子・高尾好之 2004『八兵衛洞遺跡発掘調査報告書』沼津市文化財調査報告書 84

滝沢　誠・篠原和大 2005『神明塚古墳（第２次）発掘調査報告書』沼津市史編さん調査報告書 15

池谷信之・矢田晃代 2009『中見代第Ⅰ遺跡発掘調査報告書（２）第二東名№6 地点』沼津市文化財調査報告書 97

池谷信之・北佳奈子 2010『八兵衛洞遺跡（第３次）第二東名№9・10・11・12 地点』沼津市文化財調査報告書 99

第Ⅱ章　調査経過

1．調査に至る経緯

a．試掘調査に至る経緯

平成 17 年６月、当時の建設部街路課（現在：道路建設課）から教育委員会文化振興課に、都市計画道路沼津南一色線道路改良工事用地内に所在するとされる高尾山古墳（辻畑古墳）の取り扱いについて照会があった。この道路計画の目的は、通称「沼津インター線」の岡宮付近から東熊堂の江原公園交差点までを高規格道路で結び、国道１号線交差点付近の渋滞解消と、付近住民の生活道路の確保を目的とするものであった。道路建設は道路用地を確保するための区画整理を先行させながら進められたが、東熊堂付近には道路予定地上に高尾山穂見神社と熊野神社があり、まず神社を道路予定地の東側に移転させる必要があった。

沼津市東熊堂字北方に位置する高尾山穂見神社は、明治 22 年の建立になる社殿部分が擁壁に囲まれ、周囲の地形からは不自然な方形の高台の上にあったため、いつの頃からか社殿の下に方墳があるのではないかと考えられていたようである。昭和 54 年に沼津市教育委員会が発行した遺跡分布地図には、「辻畑古墳」（遺跡 No.276）として登録されたが、過去の調査はもちろん採取された遺物もなく、古墳とした経緯や根拠は必ずしも明確ではなかった。

沼津南一色線は、昭和36年に都市計画決定され、その後に建設された東海道新幹線は道路を跨ぐため、交差部分の橋脚の位置と幅が調整されている。しかし、実際の道路建設は平成に入ってから本格的に履行され、本古墳周辺では平成 17 年度にかけて用地取得が進行した。

しかし、高尾山古墳については詳細な情報がないうえに、高尾山穂見神社・熊野神社の移転先である隣接地に、未発見の埋蔵文化財が存在する可能性も否定できなかった。両課で協議の結果、当該地の試掘調査を実施し、その結果をもとに事業計画を再検討することになった。取扱協議後、試掘調査実施の手続きとして、平成 17 年６月付けの事務連絡で、沼津市建設部街路課長から教育委員会文化振興課に埋蔵文化財試掘調査指導依頼書が提出された。

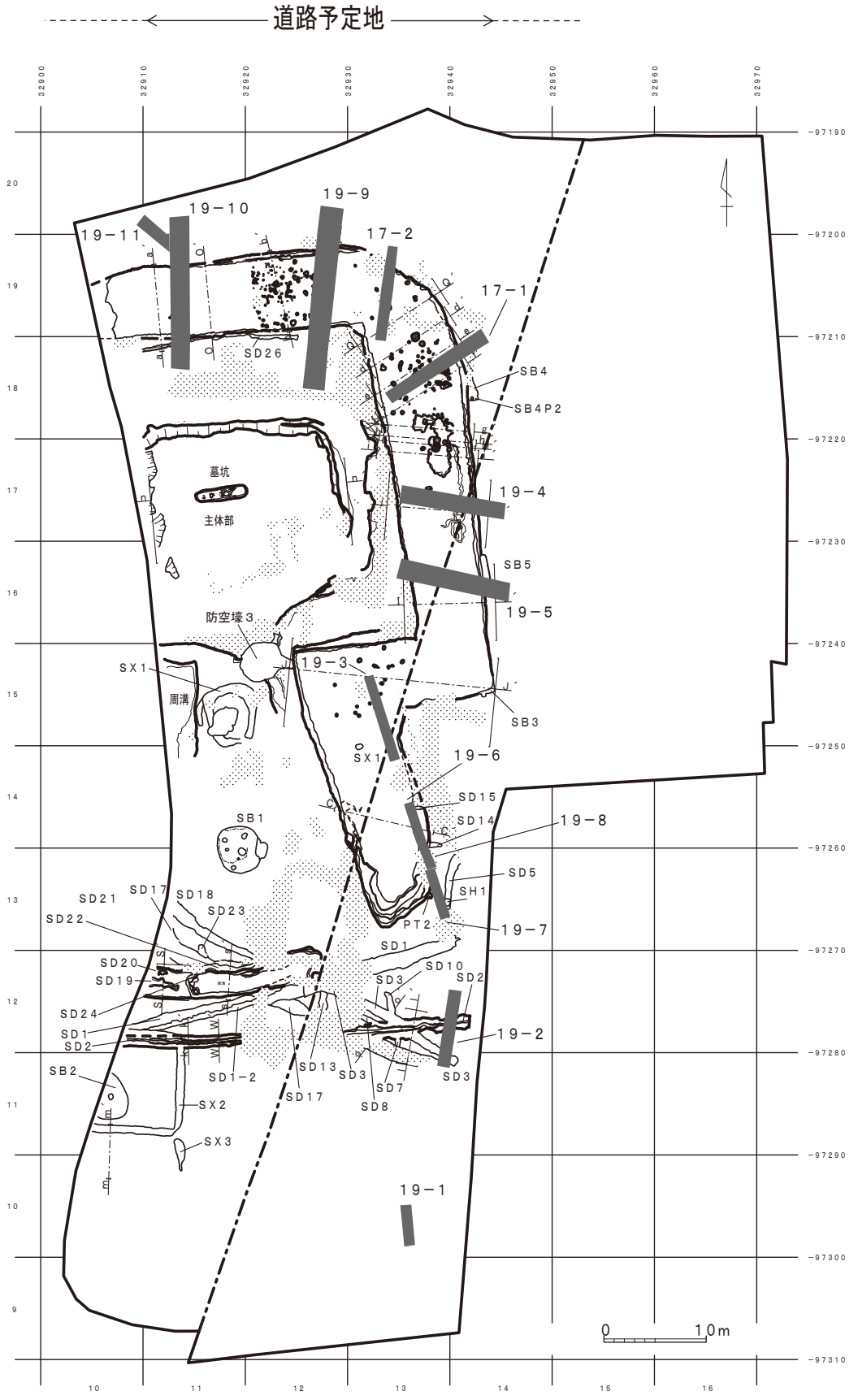
平成 17 年度に高尾山穂見神社の東側に隣接する神社の移転用地と、神社北東側の道路用地を対象として第１次の試掘調査を行い、平成 19 年度は神社移転後、古墳の存在が想定されていた高台を対象に第２次の試掘調査を実施することになった（第６図）。

b．第１次試掘調査（平成 17 年度）

平成 17 年度の試掘調査は７月 12 日・13 日に実施された。北東側の道路用地は、社宅等の建物が既に撤去されていたため、試掘のための 17-1 トレンチ（幅 1.4 ｍ×長さ 10.8 ｍ）と 17-2 トレンチ（幅１ｍ×長さ９ｍ）を２本設定した。神社の移転先は、住宅や倉庫・植栽の隙間に２ｍ×２ｍのグリッドを２か所設定して試掘調査を行った。

この結果、両方のトレンチで幅８ｍ程の溝状遺構が黒褐色の覆土を伴って確認され、その溝状の遺構は、社殿高台の周囲を巡るものと考えられた。また神社移転用地に設定したテストピットでは、地表面から１ｍ程掘り下げたレベルで、３世紀～４世紀の土師器の大きな破片がまとまって出土した。テストピットの位置は、17-1 と 17-2 トレンチで検出した溝の延長方向に相当することから、溝状遺構が２か所のグリッドの地点まで延びている可能性が考えられた。

この溝状の遺構は幅が広く、神社のあった方形の高台を囲むように巡ることから、この時点では方墳の周溝であると推定された。８月 17 日付けの庁内事務連絡文書で、周溝や土師器の出土から、検出された遺構・遺物は遺跡として登録されていた古墳に伴なう可能性が高いこと、また道路事業の実施には



第６図　試掘トレンチ設定状況

埋蔵文化財の発掘調査が必要となるので、その時期と方法について事前に教育委員会（文化振興課）と協議するよう道路建設課宛に通知した。

ｃ．第２次試掘調査（平成 19 年度）

この調査では、神社の南側に隣接して建設される東熊堂自治会館の建設予定地も調査対象に加え、境内にトレンチを設定して、高尾山古墳の墳丘形状の特定に努めた。高尾山穂見神社高台の東側と南側・北側に合わせて 11 本のトレンチを設定し（第６図 19-1 ～ 19-11）、平成 19 年７月６日から 13 日まで試掘調査を実施した。

神社高台北側の道路用地は、調査前に住宅が撤去されていたため、19-9 トレンチ（幅 1.8 ｍ×長さ 17.5 ｍ）と 19-10 トレンチ（幅 1.8 ｍ×長さ 14.5 ｍ）の２本を南北方向に設定し、19-11 トレンチ（幅 1.2 ｍ×長さ 3.5 ｍ）を地山確認のために設定した。平成 17 年度の試掘結果から方墳を想定して、予測される周溝に対して直交するように設定した。この結果、予測どおり第１次調査で検出した幅８ｍの溝から西に続くほぼ同じ幅の溝を検出した。

第１次調査で構造物や樹木植栽等によりグリッド調査に限定された範囲についても、高台の東側に 19-4 トレンチ（幅 1.8 ｍ×長さ 10 ｍ）と 19-5 トレンチ（幅 1.8 ｍ×長さ 11 ｍ）を設定して試掘調査を行った。このトレンチでも南北に伸びる直線的な周溝を検出した。

この時点では方墳を想定していたので、墳丘の南側を巡る溝を確認する目的でトレンチ 19-3 を設定した。このトレンチは参道や社殿に昇る階段、立木などを避けたため、南－北ではなく、北北西－南南東方向となった。このトレンチではなぜか周溝覆土となる暗褐色土と地山（YL）の境が確認できなかった。そのため立木を挟んでさらに南に 19-6 トレンチ・19-7 トレンチを設定して立ち上がりの検出を試みたところ、19-7 トレンチ南側でようやく溝の壁面を検出することができた。19-6 と 19-7 トレンチの間に 19-8 トレンチを設定して再度確認したが、YL 層を検出できなかったことから、周溝は方形の高台の南側で屈曲し、南方向に伸びていると考えられた。

この試掘の結果、古墳は高尾山穂見神社の高台を後方部とする前方後方墳である可能性が高まった。また試掘時に出土した土器から、その年代は３世紀にまで遡るものと考えられた。境内の南に設定した 19-2 トレンチでは、溝状の遺構が２本、YL 層の上面で検出された。19-1 トレンチでは、熊野神社建替時に出た廃材が埋められた撹乱が確認された。

この試掘結果は、平成 19 年９月に事務連絡文書で道路建設課長宛に通知された。内容は高尾山古墳（辻畑古墳）は前方後方墳で、長塚古墳や神明塚古墳などより古い県内最古級の重要な古墳であるとして、その取り扱いについては事前に教育委員会（文化振興課）と協議するよう求めるものであった。

ｄ．本調査に至る経緯

試掘調査の結果を受けて、道路計画の変更による現状保存の余地について道路建設課と教育委員会の間で検討が行われた。都市計画道路沼津南一色線は、通称沼津インター線と国道１号線沼津バイパスを結び、市街地周辺の慢性的な渋滞を解消する幹線道路として、昭和 36 年に都市計画決定されている。古墳北側で南一色線と交差する東海道新幹線は、道路部分であらかじめ通常の橋脚幅を広げ、その位置を調整して建設された。したがって新たに建設される道路は、この場所を通って南進せざるを得ない。

しかし新幹線との交差部分から古墳まではわずかに 180 ｍしかなく、古墳を避けて南側の江原公園交差点に接続すると、高規格道路としての条件を満たす道路構造令に反する急カーブとならざるを得ないことが判明した。また墳丘部分をオーバーパスやアンダーパス（トンネル）とした場合にも、断面線形が道路構造令の規定値内に収まらないことから、技術的には墳丘の掘削を避ける方法はないと判断された。また都市計画決定から今日までに至る経緯や、用地取得や住宅移転の進捗状況からも、現状保存は困難と判断し、記録保存を前提とした発掘の実施が決定された。

調査例が極めて少ない貴重な前方後方墳であることを考慮して、発掘調査に支障が生じない体制と予算が確保されるべく、平成 20 年度の本調査に向けた準備が進められた。関係各課との協議の結果、調査経費は道路建設課が平成 20 年度予算に約 4 千万円を計上し、発掘調査は教育委員会文化振興課が担当し、約 1 年間の調査期間が充てられることになった。

調査の実施にあたっては、事前に地下レーダー探査を実施し、主体部のおよその位置の把握を試みた。また調査中には外部の専門家の個別の指導を受けて、遺構や遺物の適切な取り扱いが行われるよう配慮した。発掘調査の成果は、現地見学会等を開催して市民等に公開するなど、積極的な情報公開を行うこととした。

平成 20 年 4 月 17 日付けで斎藤衛沼津市長（道路建設課）から文化財保護法第 94 条の発掘通知が提出され、市教育委員会によって平成 20 年 4 月 21 日付け沼教文第 47 号で、静岡県教育委員会に進達された。これを受けて平成 20 年 5 月 15 日付け教文第 346 号で、県教育委員会から土木工事のための発掘に係わる指示書が出された。

2．調査の経過

a．平成 20 年度調査の経緯

本調査は、平成 20 年度と 21 年度の 2 か年にわたって実施された。20 年度は高尾山穂見神社と熊野神社の移転用地を確保するため、その用地と東熊堂自治会館建設予定地の調査から着手し、2 次に分けて行った。第 1 次の調査は 5 月 18 日から重機による表土除去作業に着手し、5 月 28 日から作業員を動員した人力による掘り下げを開始した。調査は鋤簾がけで周溝を検出することから始めた。最初に墳丘くびれ部を検出し、引き続き調査区南側において溝状遺構を確認した。覆土を手掘りで掘削すると、周溝の南端は当初予測した位置よりさらに南に延びることが判明し、この時点で 50m 以上の墳丘をもつことが判明した。

墳丘東側の周溝に設置した土層観察用の土層帯（ベルト）h 付近で土器の集中を確認した。その中に廻間Ⅱ式とされる高坏が含まれていた。廻間Ⅱ式は 3 世紀前半段階に比定する見解もあることから、本古墳は 3 世紀代の造成である可能性が高まった。東側の周溝覆土上部では、平安時代の住居址 3 軒も検出された。高尾山穂見神社･熊野神社移転先の本調査（第 1 次調査）は、6 月 19 日の実測作業完了をもって終了した。主体部の地下レーダー探査は、第 2 次調査を開始する前の 8 月 21 日に実施した。

第 2 次調査は道路建設予定地を対象とし、9 月 3 日に着手した。重機により後方部の墳丘を覆う客土の掘削と前方部表土の除去から着手した。前方部の南側で溝状遺構を 9 本検出した後、墳丘の西側と東側、南側の順で調査区を拡張した。後方部には移転前の穂見神社の擁壁が残っていたので、それを撤去した後に、後方部の調査に着手して客土の除去を行った。後方部の調査と並行して周溝覆土の掘り下げに着手し、平成 21 年 1 月 19 日に周溝のセクションベルトを残して掘り下げを終了した。2 月 17 日からはこれらの作業と並行して墳頂部の精査にとりかかった。レーダー探査の結果をもとにあらかじめ主体部の位置を予測していたが、神社の基礎・砕石を取り除くと、周溝覆土と類似する黒褐色土が埋没する範囲が確認できた。また主体部の上部では、二重口縁の土器と大廓式土器が出土した。

教育委員会は、東熊堂・西熊堂の近隣住民を対象として 3 月 20 日に第 1 回現地説明会を実施し、3 月 30 日に平成 20 年度の調査を終了した。また調査例の極めて少ない古墳の調査であるため、この時期の古墳調査に実績のある研究者の指導を仰ぐ必要があり、平成 20 年 12 月と平成 21 年 7 月に計 4 名の指導を受けた。

b．平成 21 年度調査の経緯

平成 21 年度は、4 月 6 日から調査に着手した。20 年度調査の周溝内に残された土層観察用のセクショ

ンベルトを除去することから始め、続いて墳丘前方部と弥生時代後期の遺構、さらに後方部の墳頂および主体部の調査へと移行していった。

前方部の調査は４月 10 日から開始し、前方部およびその周辺において、弥生時代後期の住居址２軒のほか、太平洋戦争中の防空壕２基も検出した。

墳頂部の調査は４月 17 日から開始した。墳丘の主軸と直交する線で便宜的に４分割した墳頂部を対角に順次掘り下げた。一回の掘削は、おおむね５㎝～ 10㎝として、そのつど鋤簾がけを行って、遺構の確認を行い、トータルステーションで盛土の堆積状況の変化を記録した。

７月 14 日からは主体部覆土の掘り下げに着手し、７月 15 日に朱と青銅器破片を検出した。こうした状況から棺底が近いと判断し、周囲の調査が進むまで検出地点の掘り下げを一時中断した。７月 17 日には漆塗膜・銅鏡・木片・槍を検出し、７月 23 日には勾玉が出土した。８月３日には銅鏡の破片の下から木棺の破片と思われる木質とその痕跡を確認した。

金属器や木棺破片は変質を防ぐため、測量作業と保存処理を並行して実施し、財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所に委託して樹脂等で補強しながら、保存処理の専門職員が慎重に取り上げを行った。取り上げた主体部の遺物は、ただちに調査研究所に持ち込み、本格的な保存処理の実施に必要な契約等の事務手続きを経て、保存処理に取りかかった。

主体部副葬品の取り上げが終了した段階で、市民に向けた現地説明会を開くことになり、平成 21 年９月 13 日の午前と午後の２回に分けて 1000 人以上を集めて行われた。またこの前後に全国紙・地方紙に幾度となく、古墳の調査状況や保存問題を含めた今後の見通しについての記事が掲載された。

９月下旬になって学術的評価が定まるまでの間は、現状で保存するという沼津市としての方針が示されたため、墳丘部の掘り下げを中断した。この決定を受けて、調査中断の間、遺構を現状保存するための養生作業を行った。一部の遺構については川砂などを用いて埋め戻し、墳丘にはフィールドプレスを散布して補強し、さらに墳丘全体にシートをかけて現地から撤収した。

また主体部については、埋め戻し前に墓坑の型取りを財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所に委託して 11 月 20 日から 11 月 26 日まで実施した。

調査中の遺構・遺物の分布や土層断面などの実測作業は、沼津市が保有するトータルステーションを使用して随時行った。取得したデータは、株式会社シン技術コンサル製の遺跡管理システムで編集と図化作業を行った。墳丘全体と遺跡の遺構の状態は、主体部の副葬品を取り上げた後に、三次元レーザー計測をウエマツコンサルティングに委託して実施した。土層の注記は、第一合成株式会社製の土色計 (SCR-1) で色調を計測し、詳細は新版標準土色帖に基づいて記載した。記録写真の撮影は随時行い、遺跡全景や広範囲の遺構の検出状況は、株式会社フジヤマに委託して、RC ヘリコプターによる空中写真撮影を実施した。

第Ⅲ章　遺構

1．墳丘と周溝

a．墳丘と周溝の層位的所見

調査経過においてすでに述べたように、高尾山古墳は後に建造された神社によって、大きく墳丘の形状が改変されている。境内造成による前方部の掘削は地山（YL 層以下）まで到達し、後方部墳丘は周囲に擁壁を築いたために一回り小さくなり、頂部も数十㎝程度削られたと思われる。また調査は主体部の遺物取り上げと実測終了の時点で中断しているため、盛土の工程についての情報は得られていない。

後方部墳丘の周囲を削って標準土層の残存状況を確認したところ、弥生時代最終末～古墳時代初頭にかけて降下した新期スコリア層（新 SC）がほとんどの場所で残されていた。したがって少なくとも後方部の築造にあたっては、旧地形にほとんど手をつけずに、盛土が行われたものと考えられる（第７図）。またこの地山と盛り土の境界線は、第９図の断面図にも示した。

既述のとおり、前方部については神社造成による掘削が YL 層まで到達しているため、削平－盛土の関係は不明である。

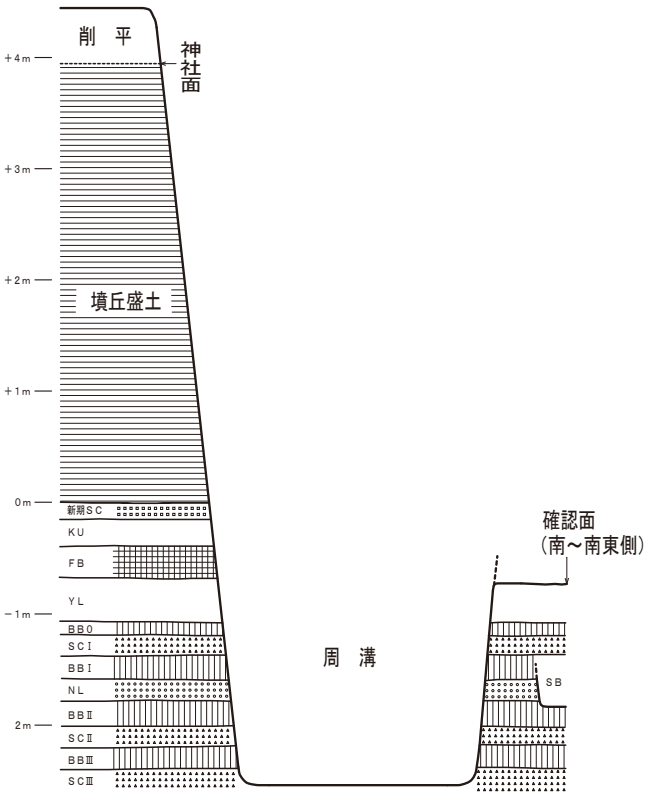
いっぽう、周溝の北側～東側～南側にかけて、後世によると思われるものも含めて削土が行われていた。結果的に周溝の確認面は、墳丘北側ではニセローム層（NL）、南側では休場層（YL）となった。この削土の時期は必ずしも明らかではないが、周溝東側で確認された律令時代の住居址（SB5）は、NL 層を掘り抜き、床面が BB Ⅰ層付近まで到達していた。これまでの愛鷹山麓における古墳時代～律令時代の住居址の調査では、新期 SC 層上面で確認が行われ、床面は YL 層中に設けられているものが多かった。仮に SB5 が新期 SC 層上面から掘り込まれているとすれば、床面までの深さが３m近くになってしまう。つまり律令期以前に周囲で大規模な削土が行われていると考えざるをえないのである。

この削土が古墳築造に伴うものと仮定すると、古墳北側では YL 層あるいはそれ以下まで、南側では YL 層上面付近まで削土して、自然堆積層（新期 SC ～ FB までの標準堆積層）で墳丘の形状をまず表出したことになろう。

b．墳丘の形状

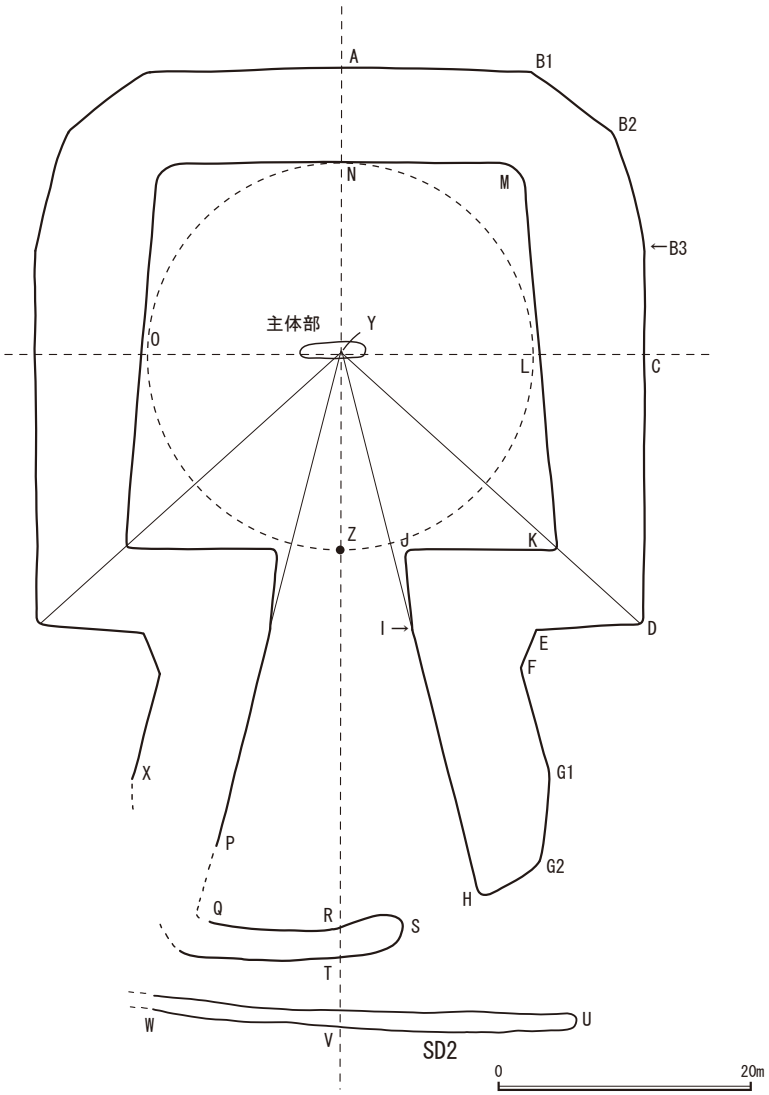
平面観と削土　墳丘の大部分が改変を受けているため、正確な計測値は、平面形状にかかわるものに限定される。平面形状についても、西側を中心に市道や神社高台の擁壁、防空壕などによって破壊されており、想定に頼らざるを得ない部分も多い。

古墳の南側に東西に弧状に走る溝があり、出土土器や弥生時代の溝との切り合い関係から、古墳南側の周溝と判断した。この溝の東側末端と東側周溝の間（第８図 H-S）には 6.4 mが土橋として残されている。



第７図　墳丘と周溝の層位的関係

またさらにその南側に東西の溝（SD2）が



第８図　墳丘想定図

ある。幅１m前後と古墳の周溝としては細いが、古墳の南北軸に直交し、出土土器も弥生時代終末～古墳時代にかかわるものであること（付図５）、その東端の位置（第８図）と古墳南東側の土橋との関係にも矛盾がないことから、古墳に付属する施設として捉えた。

第８図は全体の形状を考えるために、南北主軸線に対する左右対称を基本として作成した平面形の想定図である。この図の作成の手順は以下のとおりである。なお南北主軸線は５°20′38″西に偏している。

①最も信頼できる頸部の幅の中点（第８図Ｚ）をとり、そこから後方部周溝の東西ラインに向けて垂線を引く。さらにこのラインを前方部側に延長して中軸線を設定する（第８図Ａ - Ｎ - Ｚ - Ｒ - Ｔ）。

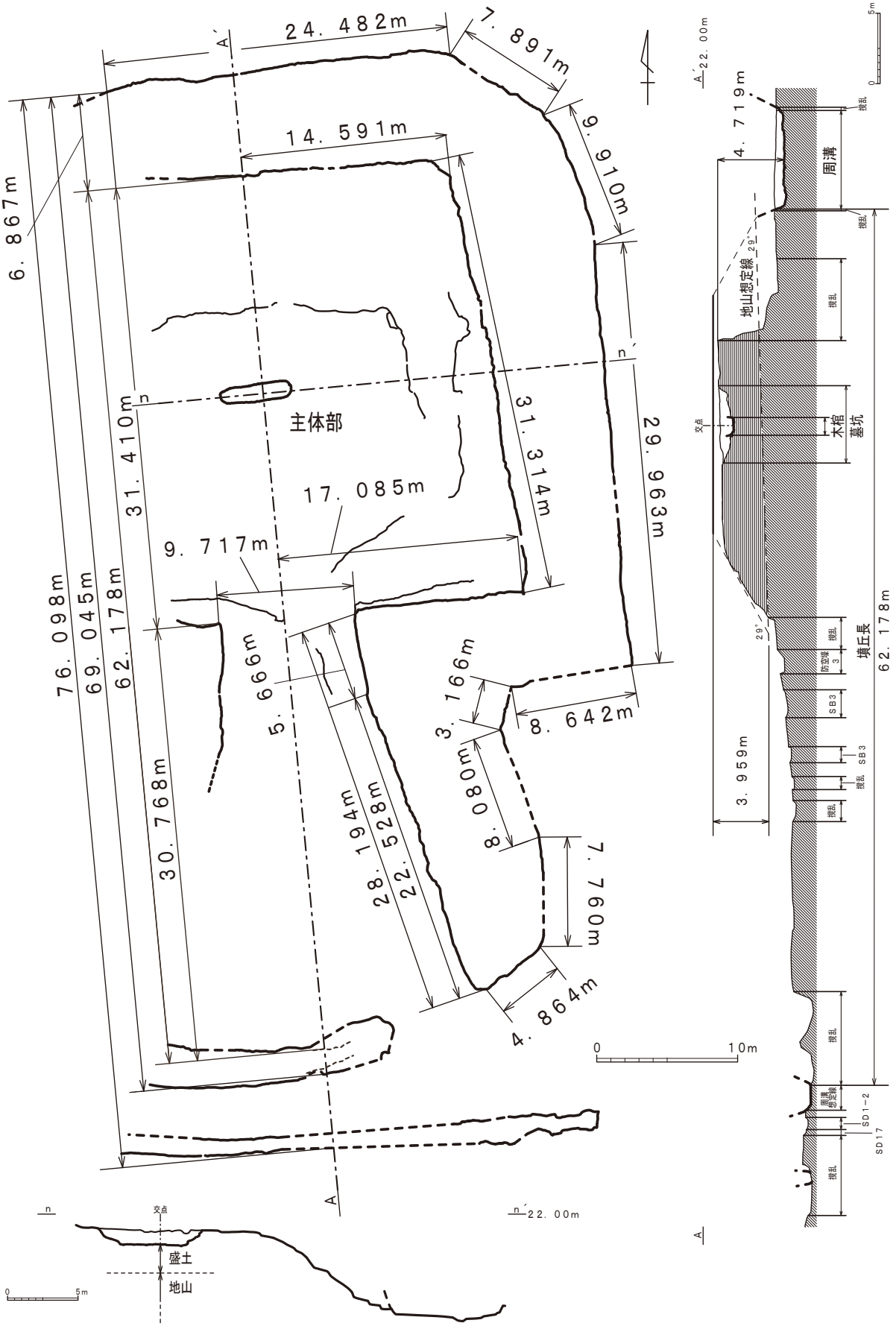
②この南北線を基準として東側の墳丘と周溝ラインと線対称になる図形を西側に描く。ただし南側周溝の調査限界（第８図Ｑ）と、前方部西側に想定した周溝の間は想定が難しいことから、屈折部（第８図Ｐ - Ｑ）との間は点線で結んだ。

③同様に SD ２の調査限界より西側のプランも不明なため、点線とした。

南側周溝の内側立ち上がり（第８図Ｒ）を墳丘の終端とすると、墳丘長（第８図Ｒ - Ｎ）は 62.178 mとなる。

北側の後方部との接続部分には屈曲点（第８図Ｉ）が認められるが、この点と後方部東西周溝の外側のライン（第８図Ｅ - Ｄ）は、ほぼ一直線上に並ぶ。また前方部周溝の直線部分（第８図Ｈ - Ｉ）の延長線と、墳丘の南北軸（第８図Ｎ - Ｒ）、墳丘を南北に二分した東西軸（第８図Ｌ - Ｏ）は、ほぼ同じ場所（第８図Ｙ）で交差する。またこの点Ｙから前方部墳丘南東角（第８図Ｋ）の延長線上に周溝の南東角（第８図Ｄ）が設けられている。主体部もこの交点Ｙを中心に構築されており、高尾山古墳の設計の基点もここにあったものと推定される。

古墳の主要な測定値は第９図に示した。すでに述べたように、墳丘長は、62.178 m、前方部長は、30.768 m、後方部長は 31.410 mであり、約 80㎝後方部長が長く造られている。後方部は北辺が南辺よりやや短くなっており、主軸線からの長さは北辺が 14.591 m、南辺が 17.85 mとなっている。南辺の長さを２倍すると 34.17 mになり、長さよりもやや幅のある後方部となっている。そのため後方部墳丘は南に開く形になっているが（第８図Ｍ - Ｌ - Ｋ）、このラインと古墳の頂点から墳丘のくびれを結


24.482m
7.891m
14.591m
9.910m
6.867m
31.410m
29.963m
31.314m
17.085m
9.717m
76.098m
69.045m
62.178m
5.666m
3.166m
8.642m
8.080m
30.768m
28.194m
22.528m
7.760m
4.864m
主体部
A
A′
n
n′
0
10m
22.00m
交点
盛土
地山
5m
4.719m
周溝
地山想定線
木棺
墓坑
墳丘長
62.178m
3.959m
SB3
SD1-2
SD17
撹乱
交点

第９図　墳丘・周溝計測図

ぶ線（第８図 A-J-I）はほぼ平行している。ただしＹ点を中心にした正円が示すように、中心部付近の東西の径と前方部の長さ（南北径）はほとんど差がない。

立体観と盛土　いっぽう墳丘の立体観については、特に前方部を中心に破壊が進んでいることに加え、主体部剥ぎ取りの段階で調査が中断し、墳丘じたいの調査が行われていないため、ここで提示できる情報はあまり多くない。その中で後方部南側斜面は、長く高尾山社殿への階段の下になっていたためか、攪乱も少なく、築造時に比較的近い斜面が残されているものと考られる。その仰角は約 29°であった。またこの斜面は、前方部に向かって地山（新期 SC 層）との境界付近まで連続していたことから、前方部にはほとんど盛土されず、周囲を削り出しただけで墳丘としていた可能性が高い。前方部付近の周溝の覆土は後方部とは異なり、盛土に由来する堆積物が認められなかったこともこの想定と整合する。

北側周溝底面と、残存している墳丘の頂部の比高は 4.719 ｍである。神社建築時に行われたであろう削平を仮に 50㎝とすると、溝底面からの比高は 4.679 ｍということになる（第９図断面図）。

なお墳丘の遺物出土状況は主体部の項で取り扱う。

ｃ．周溝

形態　すでに述べたように、本古墳の築造にあたってはあらかじめ周囲を削平し、墳丘の形状を表出させている。したがって周溝内側の掘削は、すでに現れていた墳丘のシルエットに沿って行われたと考えられる。

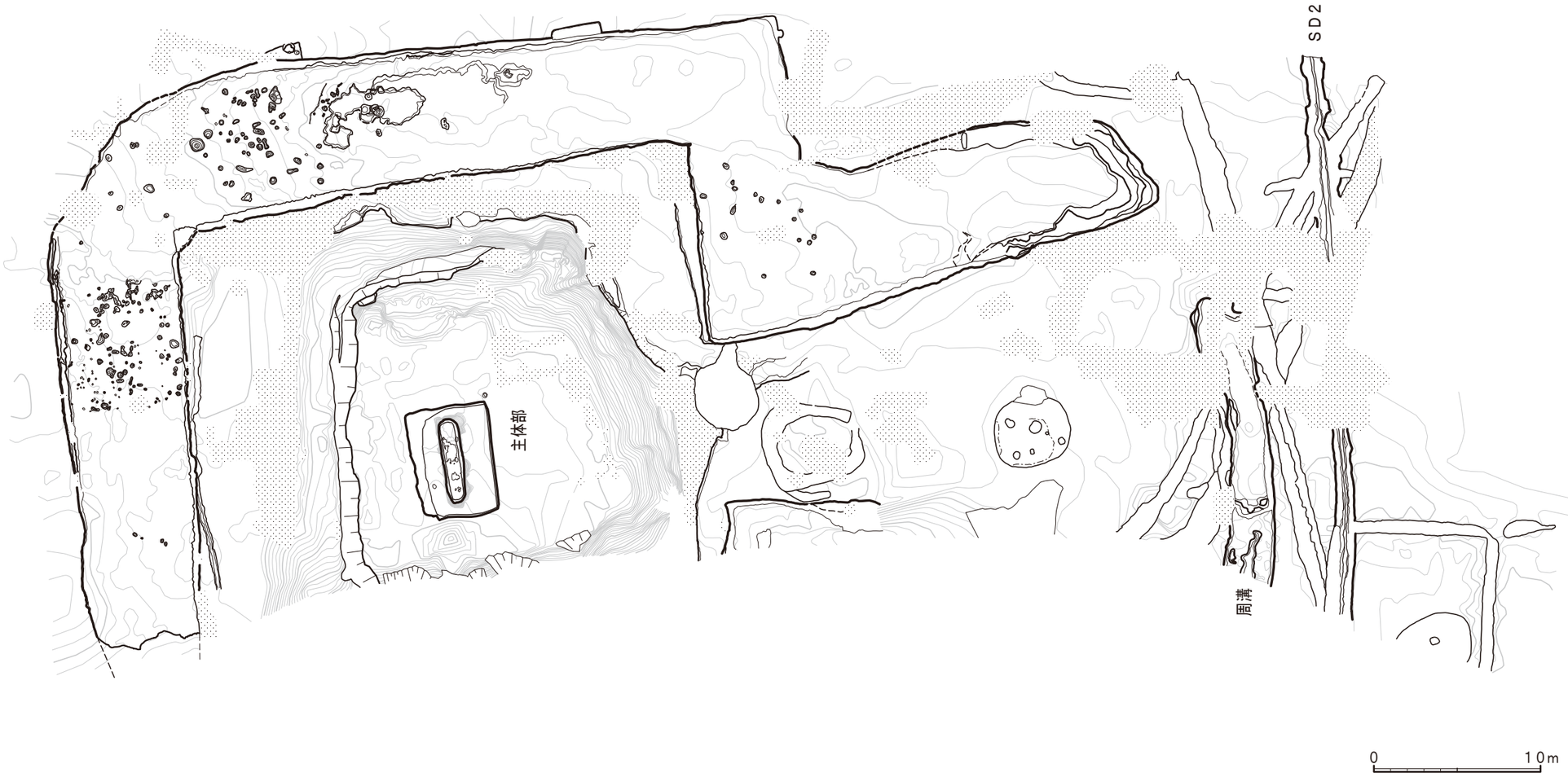
後方部周溝の外側のラインは、おおむね墳丘に沿ったものになっているが、北東側コーナーでは多角形に屈曲している（第８図 B1-B2-B3）。そのため墳丘北側（第８図 A-N）で周溝の幅が約 8.0 ｍであったものが、9.1 ｍ（第８図 B3 から西）まで開いている。第８図 B3 からＤまでは、墳丘主軸にほぼ平行しているが､後方部墳丘が南に向かって開いているため､結果的に南東角付近で最も周溝幅が狭くなっている。

前方部周溝の南東角（第８図Ｄ）は約 95°であり、やや南に開いている。また前方部とのくびれ部分では、２度にわたって屈曲して（第８図Ｅ・F）、前方部の周溝へ続いている。前方部の周溝も屈曲があり（第８図 G1）、やや幅を狭くしながら収束している。

前方部南側の周溝は、幅 2.5 ｍ～ 3.2 ｍ、深さ 0.5 ｍ～ 0.8 ｍの規模であり、西に向かって広がっているようにも見える。しかし弥生時代の溝との切り合いや後世の攪乱の影響があり、そのラインには必ずしも明瞭ではない部分が含まれている。また、この溝の西端は調査区外であり、前方部墳丘の西側部分はくびれ部分を残してほとんど破壊されているため、区域外となった周溝の形状については推定に頼らざるを得ない。第８図ではこの部分を破線で示さざるを得なかったが、予測される西側前方部のラインからすれば、南側周溝は調査区境界の直近で北に向けて屈曲するものと想定される。

また南側のさらに南にもう１本の溝が検出されている（SD2）。調査時には古墳とは関わりのない溝という認識であったが、弥生時代終末～古墳時代に比定可能な土器が出土しており、（付図５）、南側周溝とほぼ等しい間隔を保ちながら弧状のプランとなること、同じく墳丘の南西側に終端があり「土橋」の機能を補完する可能性があることから、古墳の付属的な遺構として認識した。この SD2 についても西側は調査区域外となっており、その行方を想定する材料はない。ここではその延長上に居館址の有力候補地とされる入方遺跡があることを特記するにとどめておく。

なお墳丘の西側の一部と周溝は、西側の市道によって破壊されているが、一部周溝の下半部については市道の路盤の下に残されているものと思われる。



第 10 図　墳丘全体図

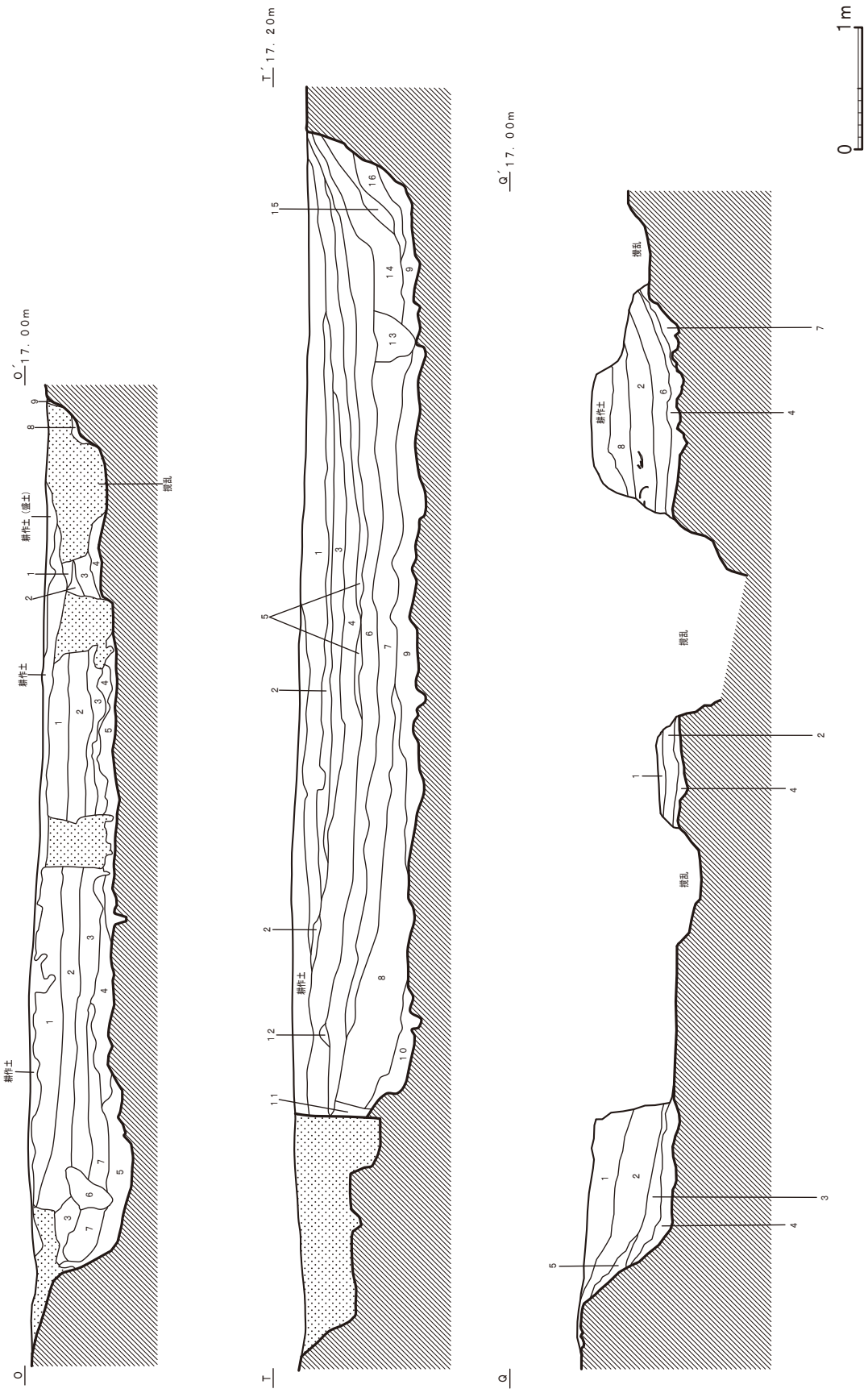
土層堆積　本古墳では墳丘構築以前にあらかじめ周囲を削平していた。その深度は周溝北側ではNL層、周溝南側ではYL層まで到達していた。周溝の掘削はこのレベルから行われ、北側周溝ではSC層の上部、北側周溝角から東側周溝（第８図Ｂ２～Ｇ２）ではSCⅢ層下部のｓ３～ｓ５と呼ばれている溶結した非常に固い部分にまで到達していた（第７図）。また周溝の掘削によって生じた土の一部は、墳丘の盛り土に用いられたと考えられる。ただし愛鷹上部ローム層を構成するスコリア層は、ほとんど粘性がなく、露頭においても崩落しやすいため、黒色土や粘性のある土と混和された後に用いられたと考えられる。また墳丘の周囲には神社の関連施設や民家があったため､その攪乱が至るところで認められた。設定したセクションベルトの中には攪乱が多く土層観察が十分に行えないものもあった。ここでは比較的堆積状況のよかったものを古墳周溝から10か所、南側のSD２から２か所抽出して断面図を提示した。なお土層の属性については、第１表から第３表に示した。

第11図　セクションベルト設定図

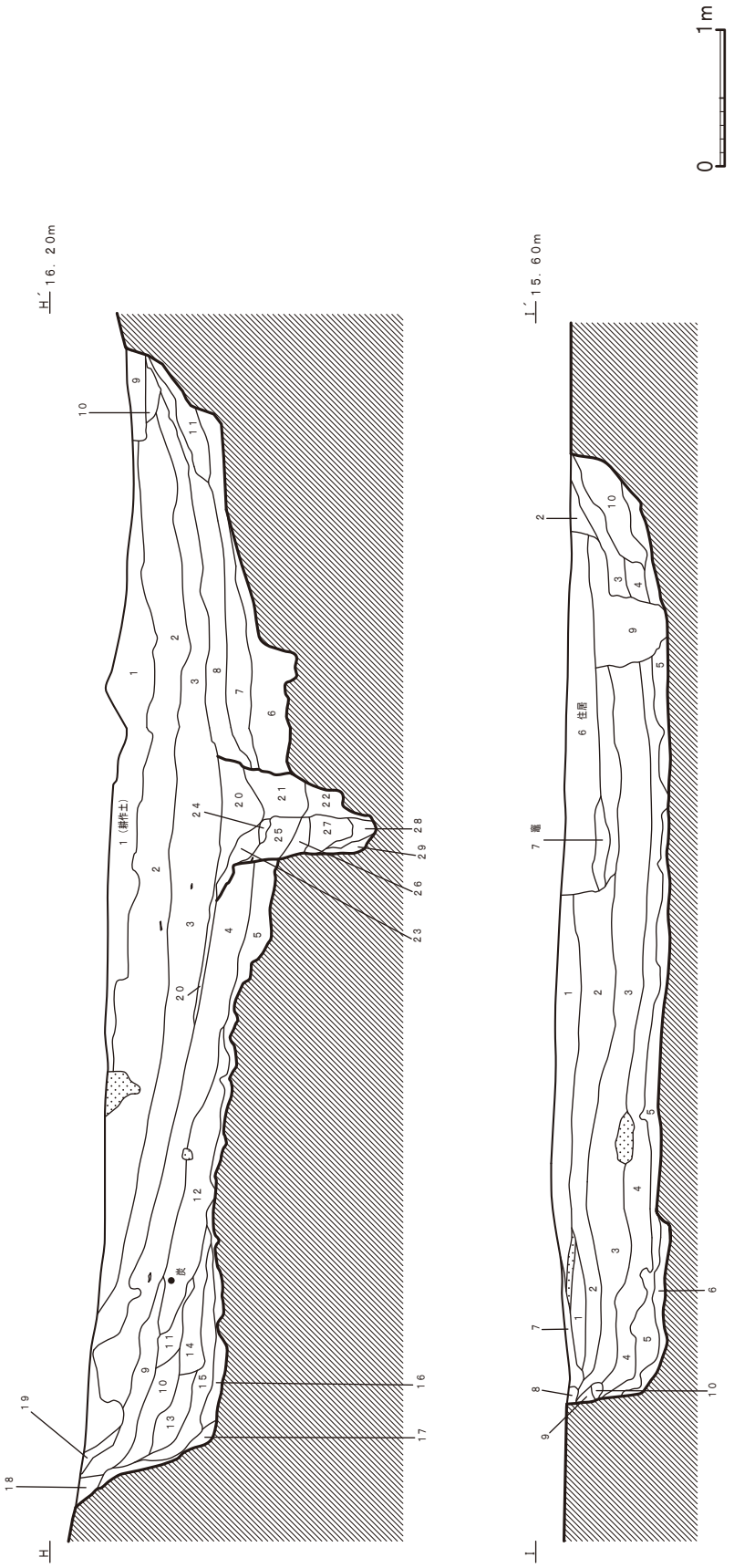
Ｏ－Ｏ′セクション（第12図）　古墳北側周溝に直交するように南北に設定した。南側の壁面付近や中央部分に攪乱が認められるが、それ以外ではほぼ水平に近い堆積が認められた。１～４層に認められるスコリア層は比較的径が大きいことから、SC Ⅰ～SCⅢ層のいずれかを構成していたものと考えられる。４・５層に認められるNL層のブロックは、周溝の切り込み面付近の土層に由来するものと思われる。また最下層にあたる９層はSCⅢ層起源のスコリアのブロックを50％程度含んでいた。

Ｔ－Ｔ′セクション（第12図）　ここでも北側にはかなり広い範囲に及ぶ攪乱があり、墳丘側の堆積状況は不明である。外側（Ｔ′）にはいわゆる三角堆積土があり（15・16層）、その壁面の自然堆積層に由来するスコリアを多く含んでいる。中央にはレンズ状の堆積土も認められるため（２・３・４層）、多くが自然堆積によって形成されているものと考えられる。

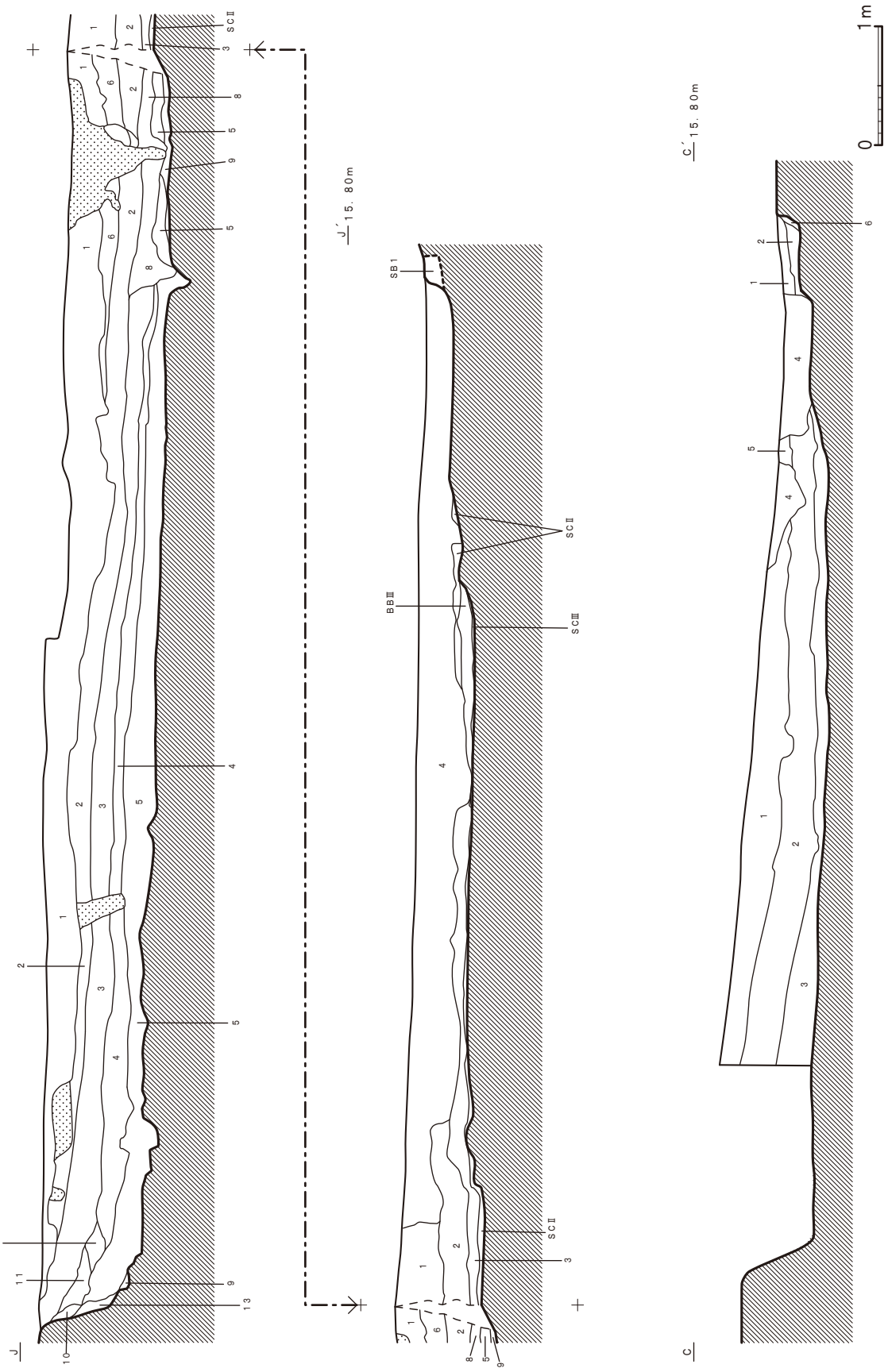
なお実測図ではＯ－Ｏ′セクションとＴ－Ｔ′セクションの間に細かいピット状の表現がなされているが、底面の細かいアンジュレーションを丹念に拾って図化したものであり、また覆土途中から掘られ



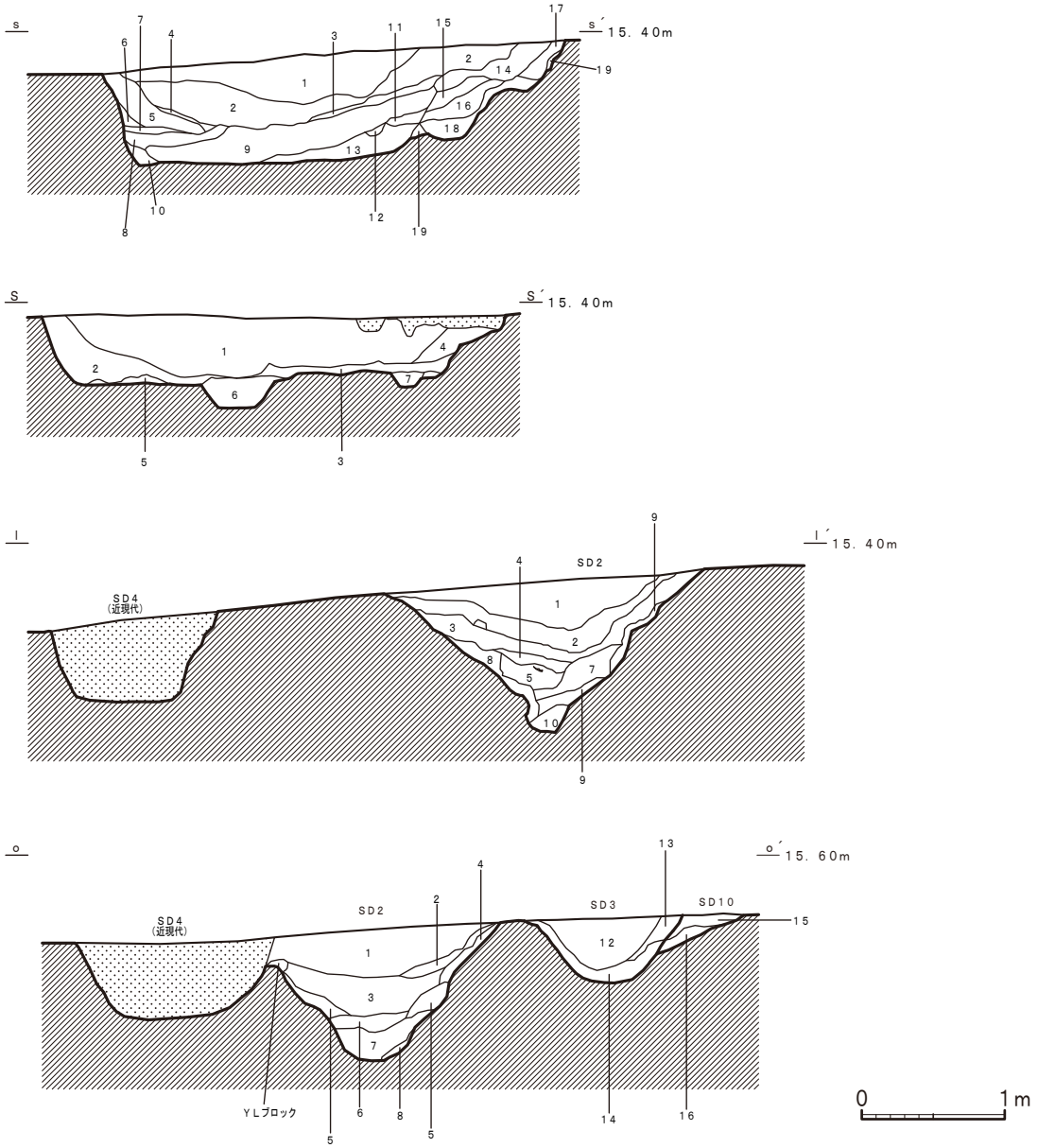
第12図　周溝土層断面図（1）



第13図　周溝土層断面図（2）



第14図　周溝土層断面図（3）



第 15 図　周溝土層断面図（4）

た痕跡は認められなかった。

Q－Q′セクション（第 12 図）　後方部北東角に設定したセクションである。この付近では攪乱が広範囲に及んでおり、一部は周溝底面を突き抜けていた。しかし墳丘側からの堆積が残されており、SC Ⅲ層中に由来すると考えられるスコリアが含まれていた。

H－H′セクション（第 13 図）　後方部の東側に東西に設定した。この付近が周溝中では最も出土土器が多い。またこのセクションの直下となる底面に溝状の落ち込みがあるが、これは 8 層上面から掘り込まれていた。後述するがこの落ち込み中にも土器が遺棄されている。

Ⅰ－Ⅰ′セクション（第 13 図）　後方部西側やや南に東西に設定されたセクションである。掘り下げている過程では気がつかなかったが、断面では律令時代の住居址の断面が確認できた。またこの付近では攪乱も比較的少なかったため、周溝本来の堆積状況が確認でき、東西の壁も垂直に近く立ち上がっていた。周溝中央部はほぼ水平な堆積が認められ、主体となる 1 ～ 4 層は黒色土であった。この地域の自然堆積層では、FB 層と黒ボク土層はともに 5 YR1.7/1 付近の色調を示すが、 1 ～ 4 層は 10YR2/1 前後

第１表　周溝内土層断面註記一覧（１）

O-O' セクション

	土　色　計	パミス	スコリア１	スコリア２	ブロック・粒	粘性	備　　考
1	5YR1.7/1	3%	1 ～ 4mm φ　褐色　2%				ザラザラとした土層（締まり有り）
2	5YR1.7/1	1%	1 ～ 6mm φ　褐色　3%	黒色無発泡褐色　2%			削り面がややアバタ状になる土層（土器片を多く含む）
3	5YR1.7/1	1%	3 ～ 6mm φ　赤褐色　1%	3 ～ 7mm φ　黒色無発泡褐色　7%	YL 粒　5%		削り面がアバタ状になる土層
4	7.5YR1.7/1	1% 未満	2 ～ 4mm φ　赤褐色　1%		2 ～ 6mm φ　NL ブロック 1%	やや有り	
5	7.5YR1.7/1				20 ～ 50mm φ　NL ブロック 2%		
6	5YR1.7/1						3・7 層を基本とするが、根により撹乱・混合が行われている
7	5YR1.7/1	1%	2 ～ 5mm φ　褐色　1%	2 ～ 5mm φ　黒色無発泡褐色　3%			ザラザラしているが 3 層のようにアバタ状にはならない
8	7.5YR1.7/1	1%	1 ～ 2mm φ　褐色　1% 未満			やや有り	BB Ⅲを多く含む
9	7.5YR2/2	1%			SC Ⅱブロック 50%		

T-T' セクション

	土　色　計	パミス	スコリア１	スコリア２	ブロック・粒	粘性	備　　考
1	7.5YR2/1	5%	1 ～ 4mm φ　褐色　1%				ザラザラとした土層
2	10YR2/1	5%	1 ～ 3mm φ　褐色　1%				ザラザラとした締まった土層
3	10YR1.7/1	3%	1 ～ 4mm φ　褐色　2%				ややザラザラとした土層
4	10YR1.7/1	2%	1 ～ 3mm φ　褐色　1%				ややザラザラとした土層（土器片を多く含む）
5	N1.5/0	2%	1 ～ 3mm φ　赤褐色　1%	1 ～ 4mm φ　褐色　5%			ザラザラとした締まった土層
6	N2/0	1%	1 ～ 2mm φ　赤褐色　1% 未満	1 ～ 5mm φ　褐色　7%			ザラザラとした土層
7	10YR1.7/1	1%	1 ～ 7mm φ　黒色無発泡褐色　10%				削るとアバタ状になるザラザラゴロゴロした土層
8	7.5YR1.7/1					やや有り	7 層を基本とするが、赤褐色のサビ状の物が広がる土層
9	7.5YR2/1		1 ～ 4mm φ　赤褐色　3%		25mm φ　SC Ⅲブロック 1%		
10	7.5YR2/1						8 層によく似るが黄白色の粘土質土を 7% 含む
11	10YR2/1						8 層に類似するが、やや暗い
12	N2/0						6 層よりやや暗い
13	N1.5/0	1%	2 ～ 4mm φ　赤褐色　1%	3 ～ 7mm φ　黒色無発泡褐色　10%	10 ～ 20mm φ　SC Ⅲ s ブロック 1%		不均質な土層
14	5YR1.7/1	1%	3 ～ 7mm φ　黒色無発泡褐色　15%		10 ～ 40mm φ　YL ブロック 10%		削ると表面がアバタ状になる締まりの無い土層
15	10YR1.7/1	1%			10 ～ 60mm φ　SC Ⅲ s1 ～ s3 ブロック 10%		
16	N1.5/0		3 ～ 7mm φ　黒色無発泡褐色　25%		10 ～ 20mm φ　SC Ⅲ s1 ～ s3 ブロック　3%		削り面がひどいアバタ状になるシャリシャリした土層

Q-Q' セクション

	土　色　計	パミス	スコリア１	スコリア２	ブロック・粒	粘性	備　　考
1	5YR1.7/1		1 ～ 4mm φ　黒色無発泡褐色　10%				きめが粗い　ザラザラした土層
2	7.5YR1.7/1	1%	1 ～ 6mm φ　黒色無発泡褐色　15%				きめが粗い　ザラザラした　削り面がややアバタ状になる土層
3	7.5YR1.7/1		1 ～ 6mm φ　黒色無発泡褐色　20%				ややシャリシャリした土層
4	7.5YR2/2	1%	1 ～ 3 mm φ　褐色　2%				
5	7.5YR1.7/1	1%	1 ～ 6mm φ　黒色無発泡褐色　5%				ザラザラした土層
6	10YR1.7/1		1 ～ 6mm φ　黒色無発泡褐色　5%	1 ～ 6mm φ　褐色　3%			ザラザラした土層
7	7.5YR1.7/1	1%			SC Ⅲ s2 ブロック　10%	有り	
8	10YR1.7/1	1%	1 ～ 3mm φ　褐色　2%				ザラザラした土層

H-H' セクション

	土　色　計	パミス	スコリア１	スコリア２	ブロック・粒	粘性	備　　考
1	10YR1.7/1	1% 未満	1 ～ 2mm φ　赤褐色　1%				耕作土
2	10YR1.7/1	1%	1 ～ 4mm φ　赤褐色　3%				ザラザラとした土層
3	N2.0/0	2%	1 ～ 4mm φ　赤褐色　3%	2 ～ 5mm φ　黒色無発泡褐色　5%			ザラザラとした土層
4	2.5Y2/1	1%	1 ～ 4mm φ　赤褐色　5%	2 ～ 6mm φ　黒色無発泡褐色　20%			表面がアバタ状になり、土器片を多く含む土層
5	10YR2/1	1%	1 ～ 4mm φ　赤褐色　3%	2 ～ 6mm φ　黒色無発泡褐色　3%			
6	7.5YR2/1				50 ～ 70mm φ　SC Ⅲ s3 ブロック　10%		よく締まった土層
7	10YR1.7/1	1%	1 ～ 3mm φ　赤褐色　1%				ザラザラとした土層
8	N1.5/0	1% 未満	1 ～ 5mm φ　褐色　2%	1 ～ 5mm φ　黒色無発泡褐色　1%			ザラザラとした締まった土層
9	2.5Y2/1	1%	1 ～ 3mm φ　赤褐色　1%		YL ローム粒　5%		よく締まった土層
10	2.5Y2/1	1%	1 ～ 4mm φ　赤褐色　1%				よく締まった土層　　9 よりわずかに暗い色調
11	2.5Y2/1				20 ～ 30mm φ　SC Ⅲ s1 5%		
12	2.5Y2/1	1%	1 ～ 4mm φ　褐色　3%				1 ～ 10mm　炭化材　1% 未満
13	2.5Y2/1	2%	1 ～ 4mm φ　褐色　1%		10mm φ　SC Ⅲ b ブロック　2%		
14	2.5Y2/1				10 ～ 70mm φ　SC Ⅲ s3 ブロック　15%		
15	2.5Y2/1	1%			30 ～ 40mm φ　SC Ⅲ s3 ブロック　7%		
16	10YR2/1	1%			30mm φ　SC Ⅲ s3 ブロック　15%		
17	N1.5/0	1%	1 ～ 8mm φ　褐色　1% 未満			やや有り	
18	10YR1.7/1	1% 未満	2 ～ 7mm φ　褐色　1%				ザラザラとした土層
19	2.5YR2/1	1%	1 ～ 4mm φ　赤褐色　1%				
20	N2/0	3%	1 ～ 4mm φ　赤褐色　7%				ザラザラとした土層
21	10YR2/1	1%	1 ～ 4mm φ　赤褐色　1%	2 ～ 6mm φ　黒色無発泡褐色　5%			削り面がアバタ状に凹む土層
22	2.5Y2/1				40 ～ 60mm φ　SC Ⅲ s3 ブロック　20%		締りの無い土層
23	N2/0	1%	2 ～ 4mm φ　赤褐色　1%	2 ～ 4mm φ　黒色無発泡褐色　1%			ザラザラした土層
24	N2/0				20 ～ 25mm φ　SC Ⅲ s1 ブロック　5%		10 ～ 15mm φ　炭化材
25	10YR2/1	1%	2 ～ 7mm φ　褐色　1%	2 ～ 7mm φ　黒色無発泡褐色　3%	50mm φ　SC Ⅲ s1 ブロック　3%		きめの粗い土層
26	2.5Y2/1	2%	2 ～ 7mm φ　褐色　1%	2 ～ 7mm φ　黒色無発泡褐色　2%	7.5 ～ 20mm φ　NL ブロック 5%		締りの無い土層
27	2.5Y2/1	1%	2 ～ 7mm φ　褐色　1%		20mm φ　SC Ⅲ s1 ブロック　1%		
28	10YR2/1		2 ～ 7mm φ　褐色　5%				
29	2.5Y2/1						

第２表　周溝内土層断面註記一覧（２）

I-I' セクション

	土　色　計	パミス	スコリア１	スコリア２	ブロック・粒	粘性	備　　考
1	5YR1.7/1						耕作土
2	5YR1.7/1	1%未満	1～3mmφ　褐色　3%	1～4mmφ　黒色無発泡褐色　7%			
3	5YR1.7/1	1%未満	1～4mmφ　褐色　3%	1～6mmφ　黒色無発泡褐色　15%			アバタ状になる土層
4	5YR1.7/1	1%未満	1～9mmφ　褐色　7%	3～7mmφ　黒色無発泡褐色　7%			ザラザラした土層
5	7.5YR1.7/1	1%未満	1～4mmφ　褐色　3%	1～3mmφ　赤褐色　1%	30mmφ　SC Ⅲ s3 ブロック　1%		ザラザラした土層
6	7.5YR2/1				SC Ⅲ s3 ブロック　20%		ブロックと細粒を含むよく締まった土層
7	7.5YR1.7/1						耕作土（8と同一層）
8	7.5YR1.7/1						耕作土（7と同一層）
9	5YR1.7/1	1%未満	1～9mmφ　褐色　7%	3～7mmφ　黒色無発泡褐色　7%			ザラザラした土層
10	7.5YR1.7/1				SC Ⅱブロック		

J-J' セクション

	土　色　計	パミス	スコリア１	スコリア２	ブロック・粒	粘性	備　　考
1	7.5YR1.7/1	1%	1～3mmφ　褐色　2%				サラサラした土層
2	10YR1.7/1	1%未満	1～6mmφ　褐色　3%				サラサラした土層　肉眼では１層より黒味が強い　土器片を少し多く含む
3	10YR1.7/1	1%	1～6mmφ　赤褐色　2%	1～5mmφ　黒色無発泡褐色　3%	10～25mmφ　NL ブロック　1%		削り面がややアバタ状になる土層
4	10YR1.7/1	1%	1～7mmφ　褐色　1% 1～5mmφ　黒色無発泡褐色　1%	1～3mmφ　赤褐色　1%			
5	7.5YR2/2	1%			5～50mmφ　SC Ⅲ s1～s3 ブロック　30%		乾燥するとボロボロと崩れる土層（墳丘盛土の崩落土？）
6	10YR1.7/1	1%	1～3mmφ　赤褐色　2%	1～2mmφ　黒色無発泡褐色　3%			ややザラザラした土層
8	7.5YR1.7/1	1%未満	1～3mmφ　赤褐色　1%	1～3mmφ　黒色無発泡褐色　1%			
9	7.5YR2/2				SC Ⅲ s3 粒　20%		やや土壌化した土層
10	10YR1.7/1		3～4mmφ　褐色　1%未満		5mmφ　NL ブロック　1%未満		やや締りの無い土層
11	10YR1.7/1	5%	1～2mmφ　赤褐色　2%	1～7mmφ　黒色無発泡褐色　1%			
12	10YR1.7/1	1%	1～2mmφ　赤褐色　1%	1～4mmφ　黒色無発泡褐色　5%			
13	10YR1.7/1	1%未満	1～4mmφ　黒色無発泡褐色　1%未満				

C-C' セクション

	土　色　計	パミス	スコリア１	スコリア２	ブロック・粒	粘性	備　　考
1	7.5YR2/2	1%	2mmφ　黄褐色　5%				黒褐色でサラサラした土層
2	7.5YR2/1	1%	2mmφ　赤褐色　5%				黒褐色でサラサラした硬い土層
3	7.5YR3/2		2mmφ　赤褐色　1%			やや有り	黄褐色よりの黒褐色
4	7.5YR4/4		4mmφ　赤褐色　1%		YL ローム	有り	黄褐色　YL ローム含む
5	7.5YR2/2	1%	4mmφ　赤褐色　1%		YL ローム		黒褐色　YL ローム含む　サラサラしたやわらかい土層
6	7.5YR2/2		5～6mmφ　赤褐色　7%			有り	黒褐色でやや硬い土層

s-s'（東壁）セクション

	土　色　計	パミス	スコリア１	スコリア２	ブロック・粒	粘性	備　　考
1	5YR2/1	1%	1mmφ　赤褐色　1%未満		10～100mmφ　YL ブロック　10%		
2	10YR2/1	2%	1～3mmφ　赤褐色　1%		5～40mmφ　YL ブロック　1%		ザラザラした土層
3	N2/0	1%未満	1～2mmφ　赤褐色　1%未満				
4	10YR2/1	1%未満	1～3mmφ　赤褐色　1%				
5	7.5YR2/1	2%	1～3mmφ　赤褐色　1%		YL 粒　5%	やや有り	
6	7.5YR2/1	1%			YL 粒　10%	有り	
7	10YR2/1	1%	1～2mmφ　赤褐色　1%未満		YL 粒　5%		
8	10YR2/1	3%	1～3mmφ　赤褐色　1%	1～4mmφ　黄色無発泡褐色			
9	10YR2/1	1%未満			10～70mmφ　BB Ⅱブロック　7%　YL 粒　5%		締まりの弱い土層
10	7.5YR2/1	1%未満			5～10mmφ　NL ブロック　5%		
11	N2/0	1%未満	1～2mmφ　赤褐色　1%		YL 粒　2%		
12	10YR2/1	1%未満	1～2mmφ　褐色　1%未満		YL 粒　2%		
13	10YR2/1	2%	2～6mmφ　褐色　1%		YL 粒　10% 5～10mmφ　NL ブロック　1%		
14	N1.5/0	1%	1～9mmφ　褐色　1%		YL 粒　7%		
15	5YR2/1	1%未満	1～2mmφ　赤褐色　1%				
16	10YR2/1	1%未満	1～2mmφ　赤褐色　1%		5～10mmφ　YL ブロック　1%未満		
17	N2/0	1%	2～4mmφ　赤褐色　1%		YL 粒　3%		
18	10YR2/1	1%未満			10～60mmφ　NL ブロック　5%		
19	7.5YR2/1				YL ロームブロック		

S-S'（西壁）セクション

	土　色　計	パミス	スコリア１	スコリア２	ブロック・粒	粘性	備　　考
1	5PB3/1	3%	1～3mmφ　褐色　3%	3mmφ　赤褐色　1%			ザラザラとした土層
2	2.5YR2/1	3%	1～2mmφ　赤褐色　1%				ザラザラとした土層
3	5YR2/1	1%	1～3mmφ　赤褐色　1%			やや有り	
4	5YR2/1	1%未満	1～3mmφ　褐色　1%未満			やや有り	
5	5YR2/1				NL ブロック　80%		
6	5YR2/1				70mmφ　NL ブロック		
7	5YR2/1				NL ブロック　70%		

第３表　周溝内土層断面註記一覧（３）

I–I′ セクション

	土　色　計	パミス	スコリア１	スコリア２	ブロック・粒	粘性	備　　考
1	10YR1.7/1	2%	3mm φ　褐色　3%				ザラザラとした土層
2	10YR2/1		3mm φ　褐色　5%				
3	10YR2/1		3mm φ　褐色　2%				
4	10YR2/1		3mm φ　褐色　1%				
5	10YR2/1		3mm φ　褐色　1%		YL 粒　5%		
7	10YR3/1				YL 粒　20%		
8	10YR3/1		3mm φ　褐色　3%		YL 粒　5%		
9	10YR4/1				YL ブロック　5%		
10	10YR4/1				YL ブロック　15%	有り	

o–o′ セクション

	土　色　計	パミス	スコリア１	スコリア２	ブロック	粘性	備　　考
1	10YR1.7/1	1%	3mm φ　褐色　1%				ザラザラとした土層
2	10YR2/1	1%	3mm φ　褐色　1%		YL 粒　5%		
3	10YR2/1		3mm φ　褐色　2%		YL ブロック 1%		
4	10YR2/1	1%	3mm φ　褐色　1%		YL 粒　4%		
5	10YR3/1				YL 粒　3%		
6	10YR3/1				YL ブロック　1%		
7	10YR3/2				YL ブロック　1% YL 粒　10%		
8	10YR3/1				YL 粒　10%		
12	10YR2/1	1% 未満	3mm φ　褐色　1%				ザラザラとした土層
13	10YR3/1	1% 未満	3mm φ　褐色　1%		YL 粒　1%		
14	10YR2/1	1% 未満	3mm φ　褐色　1%		YL ブロック　1% YL 粒　10%		
15	10YR3/1	1% 未満	3mm φ　褐色　1%		YL 粒　3%		
16	10YR3/1				YL ブロック　7%		

を示していた。また２～４層のスコリアはSCⅢ層に含まれている黒色無発泡のものであった。西寄りの最下層（６層）にはSCⅢs3の硬質なブロックが含まれていた。

Ｊ－Ｊ′セクション（第14図）　後方部南東角から墳丘のくびれ部に向けて設定されたセクションである。このセクションは東側の平成20年度調査範囲と、西側の平成21年度調査範囲にまたがって設定されており、２つの図面を合成して表示している。また東側壁では律令時代の住居址（SB3）との切り合いがあり、また墳丘のくびれ付近では律令時代の土師器が多量に出土したことから、この覆土中にも住居址が存在していた可能性がある。

このセクションでは１・２層に「サラサラ」した黒色土が確認されている。含まれるスコリアも発泡が十分でない褐色のもので、しばしばこの地方の古墳時代前期以降の住居址の覆土となる土と類似する。また５層はSCⅢs1～s3のブロックを30％程含み、墳丘の崩落土と考えられる。

Ｃ－Ｃ′セクション（第14図）　前方部東側の周溝にやや斜めに設定されたセクションである。この付近の周溝は北側に比べて立ち上がりがやや浅くなっている。上層となる１・２層は褐色や赤褐色のスコリアを含む「ザラザラ」とした土層で、古墳時代前期以降に形成された黒ボク土を起源とすると考えられる。下層となる３層は周溝壁面となるYLローム層と黒褐色土が混在したものと考えられる。いずれにせよ、このセクションでは、後方部墳丘盛土を構成していたと考えられるNL層以下の黒色土やスコリア層の崩落土がほとんど認められない。こうした状況から類推すると、前方部の墳丘はYL層付近まで削平したまま盛土をほとんど行わず、周溝の掘削によってその形状を現出させたものと考えられる。

ｓ－ｓ′セクション（第15図）　南側周溝のほぼ中央部に南北に設定されたセクションで、特に下層では北側（右側）から多くの土砂が流入している。かなり細かい分層が可能であったが、主体となるのはYL層を起源とする堆積土である。

Ｓ－Ｓ′セクション（第15図）　南側周溝の西端に、南北に設定されたセクションである。下底面にさらに細い溝状の遺構が認められた。その上層に堆積している１層は暗青灰色の色調を示しており、周辺の標準的土層には認められない堆積である。２層は古墳時代前期以降に堆積した黒ボク土を主体としているものと思われる。

１－１′セクション（第15図）　SD2を古墳の付属施設と考えたため、周溝の土層堆積の項で取り扱うことにした。本セクションはSD2の東端近くに設定されている。またSD4は調査当初、古墳時代～律

令時代の遺構と考えられていたが、後に出土遺物等から近現代のものと判断された。覆土は 10 層に分層され、下方に向かうにつれて黒色土～黒褐色土～灰褐色土へと変化する。5 層以下では YL 層のブロックないし粒土をある程度含んでいる。

o － o′セクション（第 15 図）　隣接する SD3・SD10 とともに示した。l － l′セクションと同様に、YL 層のブロックないし粒土をある程度含む。

遺物出土状況　本古墳の周溝からは非常に多くの土器が出土しているが、その分布には明瞭な粗密があり、祭祀時における選択的・集中的な遺棄が行われた可能性が高い。ここでは周溝を便宜的に①区～⑤区に分割して（第 16 図）土器の出土状況を概観する。なお土器の出土位置は、個体を構成する破片が多数の場合、その主要な分布範囲を示すことにした。分布が複数箇所に渡る場合でも、点と点を繋ぎながらできるかぎりその範囲を忠実に示したが、③区のように多くの土器が出土し、分布が錯そうする場合には、一部を省略したものもある。

①区（第 17 図・第 18 図）　後方部北側にあたる①区の西端は、古墳の西側を通る市道敷設の影響のためか、周溝の壁高がしだいに低くなっている。またこの西端部分では、北西コーナーに向けたわずかなカーブを認めることができる。主軸線よりやや東となる本区の東側部分の底面には、大小の小穴が穿たれていた。

本区では土器の集中的な出土は認められなかった。強いて指摘するならば、壺 H に分類された北陸系の土器（第 17 図 1 ・ 4）、あるいは甕 J（第 17 図 3）といった異系統の土器が目立っている。

②区（付図 1 ・第 18 図・付図 6 ・付図 7）　本区の南側から③区にかけて最も多くの土器が出土している。特にここでは、小形の壺である壺 J（付図 1 - 5・11・16・22 など）や小型壺（付図 1 - 3・6・18・20・28・40 など）・小型鉢（付図 1 - 1 ・ 2 ・ 4 ・24 など）が多く認められる。小型壺と小型鉢には摩滅がほとんど認められないことから、この古墳での祭祀を目的として製作されたものと考えられる。またこれら土器の集中域の底面には小穴が認められ、その中あるいはその周辺で特に多くの土器が出土している。

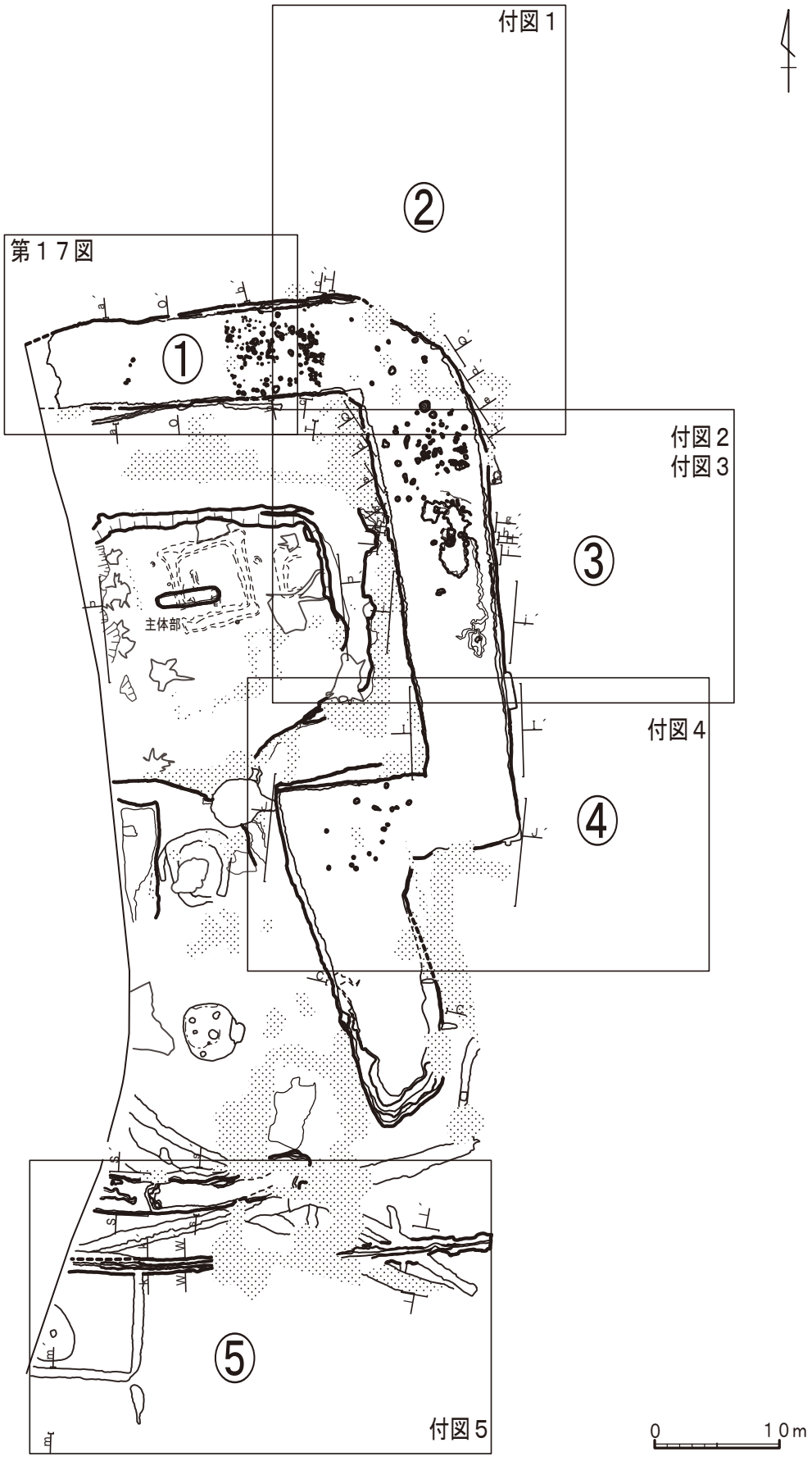
土器の層位的分布は紙面のスペースの関係から、第 18 図・付図 6 ・付図 7 に分けて示した。特に土器が集中したセクションQ－Q′（付図 6）とセクションｅ－ｅ′（付図 7）に示されたように、その垂直分布の中心は、周溝底面より10㎝～ 20㎝浮いた位置にあり、周溝がある程度埋没した後に祭祀行為に伴う土器の遺棄が行われているものと考えられる。

③区（付図 2 ・付図 3 ・第 18 図・付図 6 ・付図 7 ・付図 9）　②区からこの③区の北側にかけてが、周溝内で最も多くの土器が出土した場所である。特に図のほぼ中央部分には、南北 6 mほどの不定形の浅い土坑が掘られており、さらにピット状の堀り込みが重複している（付図 1 ・付図 2）。この部分に特に土器の出土が多く、副葬行為と関連する遺構である可能性が高い。

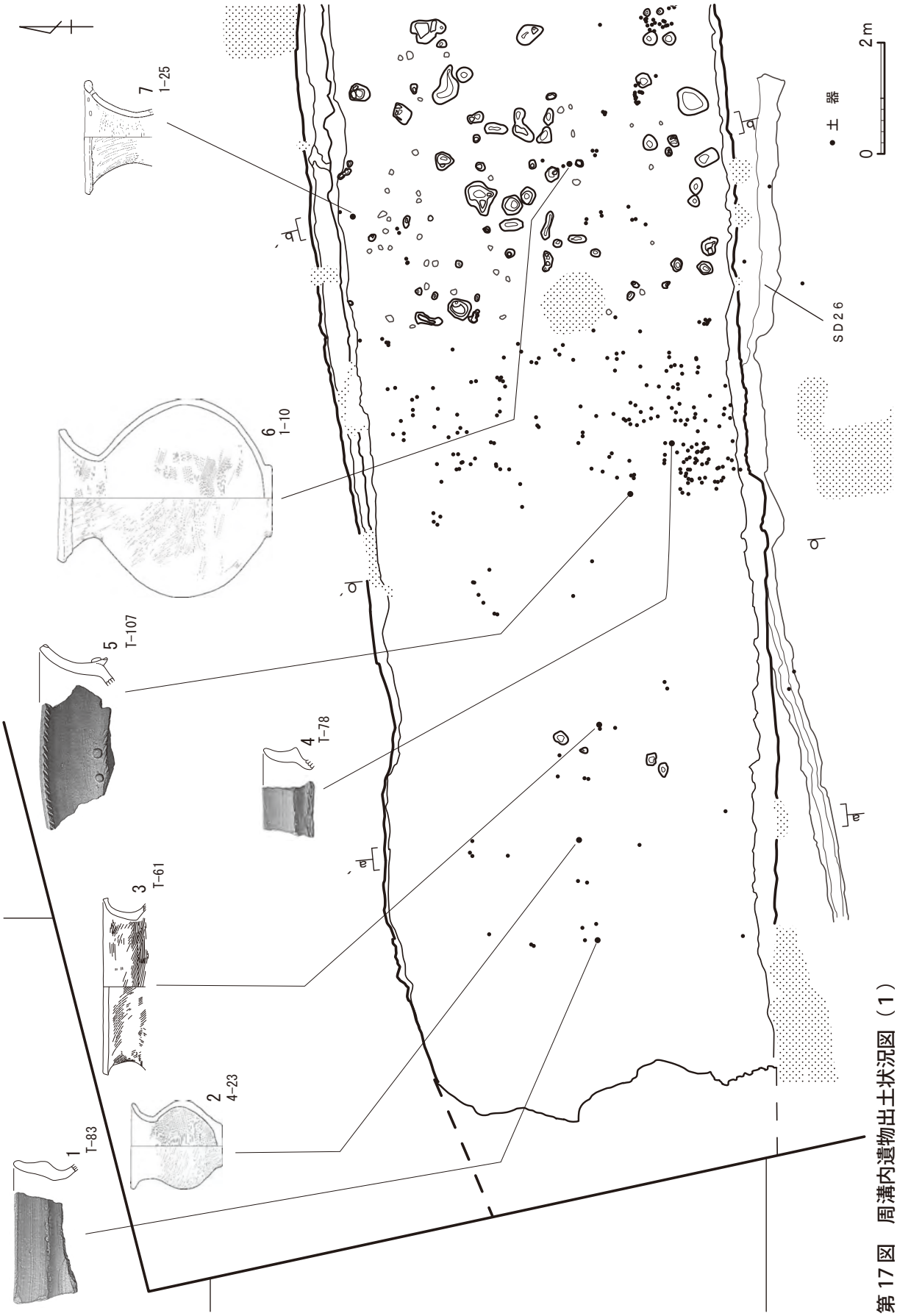
ここに設定されたセクション図（第 13 図H－H′セクション）をみると、浅く広い土坑の覆土が、溝の他の部分の最下層と共通しているのに対して、ピット状のものは、かなり堆積が進んだ後に掘り込まれている。付図 3 では 10・12・14・15 がこのピット状の堀り込みからの出土と判断される。この 4 点以外にも③区からは多量の小型壺や小型鉢が出土しており、これらは本書第Ⅵ章 2 で示された「渡井編年」では段階 3 に位置づけられている。

小型壺や小型鉢の多さに対して、縦位のていねいなミガキが加えられる小形で丸底の壺（壺 J 類）はほとんど出土していない。これらが多く出土した②区とは対照的な器種の構成となっており、周溝内の「場」による祭祀の性格の違いも検討課題となろう。

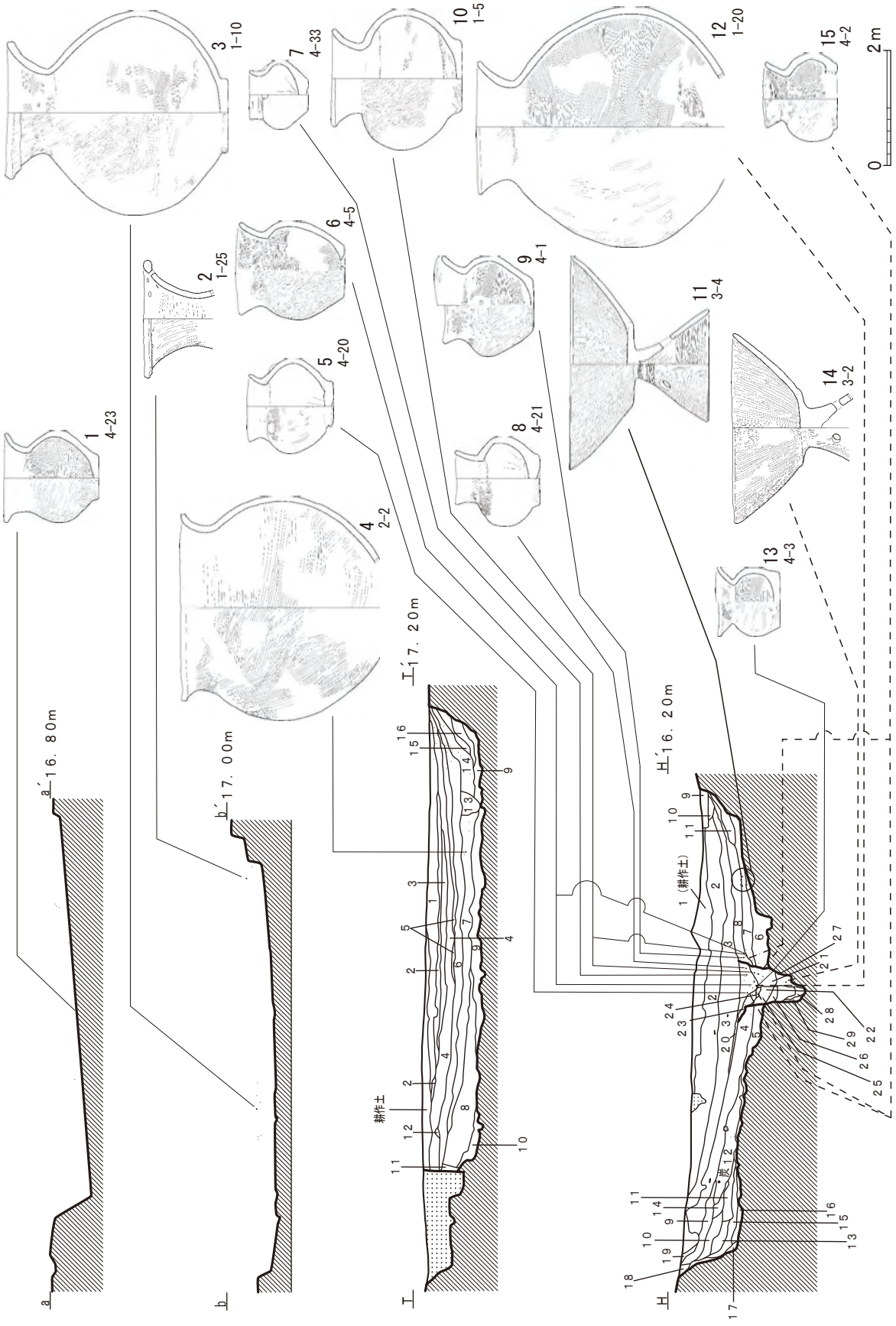
またこの③区からは廻間Ⅱ式（「渡井編年」段階 1 ）に比定されるほぼ完形の高坏（第 18 図 11・付図 3 -26・付図 9 -11・19）が出土している。分布は広く浅い土坑の外側の底面近くと、ピット状の堀



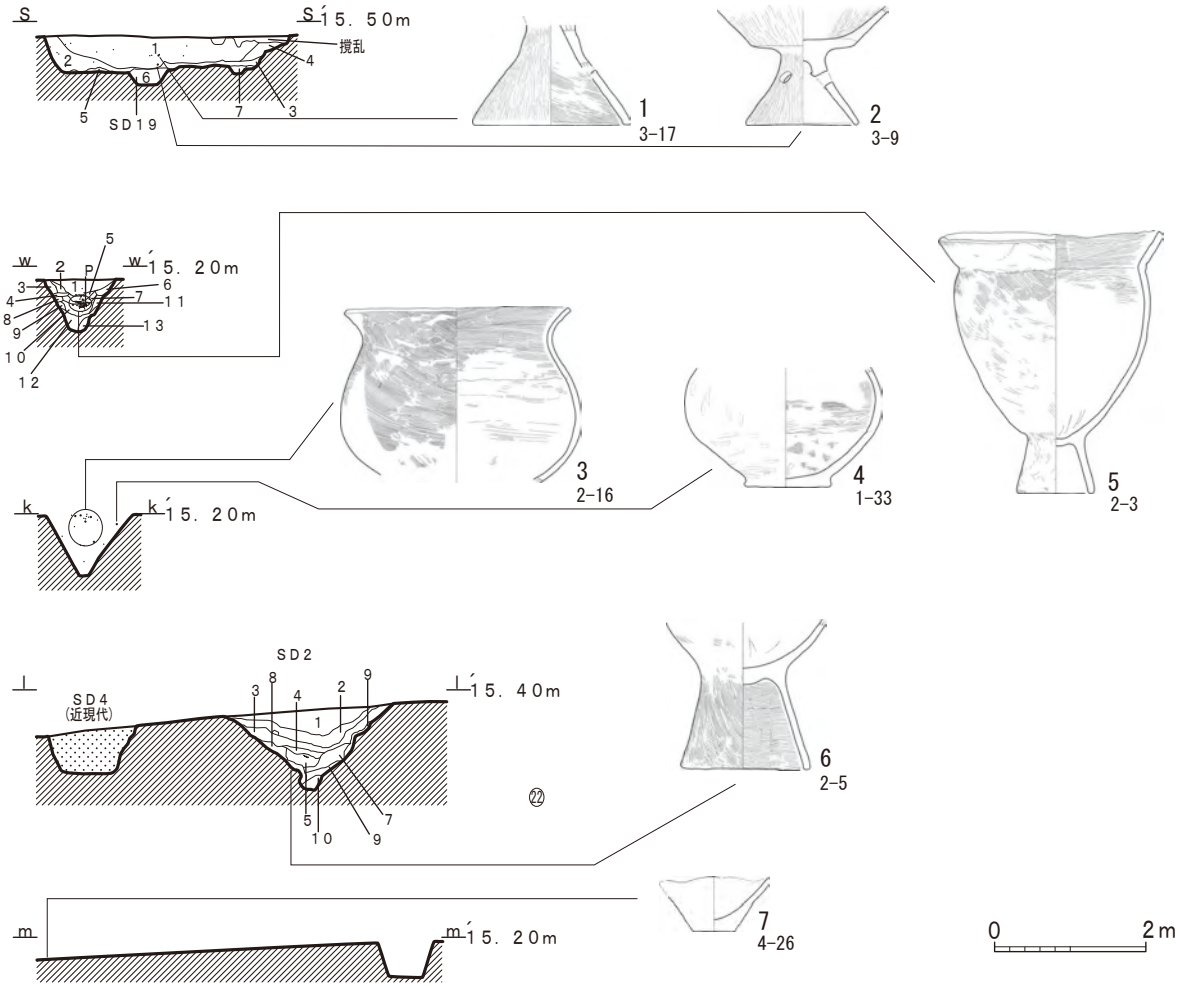
第 16 図　周溝内遺物出土状況分割図



第17図　周溝内遺物出土状況図（1）



第18図　周溝内遺物出土層位状況図（1）



第 19 図　周溝内遺物出土層位状況図（6）

り込みの近くに分かれるが、主要な破片は前者の位置から出土している。またこれらの破片は断口が非常にシャープであり、廃棄・破損から埋没までの時間が比較的短かったことが考えられる。他にも「渡井編年」の段階 1 とされている高坏（付図 3-16・17）が出土している。

④区（付図 4・付図 8）　③区とは対照的にこの範囲の遺物分布は散漫で、完形に復元される土器はない。しかし前方部と後方部の屈曲部分で局所的な集中が 2 ヶ所存在する（付図 4）。西側の前方部壁沿いの集中部分からは小型壺（付図 4- 1 ・ 2）、甕（3 ・ 18）、高坏（19）などが出土している。

その東側にやや東西に長く広がる集中域からは、平安時代の坏・甕などが出土している。垂直分布も一定しており、住居址が存在した可能性もある。

④区の南側からはほとんど土器が出土しなかったため、出土状況図は作成しなかった。

⑤区（付図 5 ・第 19 図）　ここでは前方部南側の周溝とその南に平行して延びる SD2 を合わせて取り扱う。南側の周溝の幅はやや狭いが、底部は前方部や後方部のそれと同じように、ほぼ平坦である（第 19 図 S － S′セクション）。ここでは比較的底面に近いレベルから本書第Ⅵ章 2「渡井編年」の段階 2 の高坏が出土している。

土器の分布は南側の周溝よりも SD2 の方がむしろ多い。この溝は周溝とは異なり「V」字状を呈している。ここでは系統を異にする甕（付図 5- 4 ・ 5 ・ 8）と壺の胴部（同図 6）が出土している。

２．埋葬施設

ａ．埋葬施設の検出状況

墓坑確認　第Ⅱ章の調査経過において述べたように、神社の基礎まわりの撹乱土と境内の整地に用いられた砕石等を取り除くと、地表下 10㎝未満で周溝覆土のような黒褐色土が確認された。黒褐色土の周囲は、ニセローム層やスコリア層の塊を含む盛土であったため、墓坑の形状は比較的明瞭に捉えられた。黒褐色土の平面形状は長軸 3.408 ｍ×短軸 1.237 ｍの長楕円形で、覆土中に埋没した状態で西側に二重口縁の土器と東側に大廓式土器が出土した（第 23 図・第 24 図）。覆土が周溝の堆積土に類似する細粒の土であることから、主体部の陥没部に堆積した埋土と考えられる。二重口縁の土器と大廓式土器は、覆土上位にあることから , 上部に供献された遺物が埋没したものと推測される。特に大形の大廓式土器は、頸部から上を欠損しているものの、胴部は折り重なるように集積していたことから、当時の置かれた状態から今日まで大きく移動していないことが推察できた。

埋葬施設は、確認調査等で得られた土器の型式から竪穴式が予測されたため、事前に地下レーダー探査を実施して位置や深さ等の推定を試みたが､明確な反応を捉えることはできなかった。このことから、石室等の構造物ではないと判断し、木棺直葬や木廓を想定して調査にあたることとした。

主体部上部落込の埋土と思われた長楕円形プランの主軸は、墳丘の主軸（南北方向）と直交することがわかったため、主体部の主軸線と古墳主軸線で墳頂部を４分割して調査区を設定し、北東方向の調査区を１区として時計回りに４区まで便宜的に設定した。掘り下げ作業は、断面観察のために対角に位置する２区と４区を面的に掘り下げていった。一回の掘削は、５㎝～ 10㎝として、掘り下げごとに盛土の平面と断面の観察を行った。検出面で確認した黒褐色の覆土は、第１回の掘削でほぼ消滅する程の薄い層厚であった。

その直下には、検出段階では周囲に広がっていたニセローム層やスコリア層の塊を含む盛土があり、陥没前には周囲と同じ高さに版築された同一の盛土であったと思われる。掘削面ごとの墓坑の平面形状は､２区と４区でやや変形が大きく１区と３区では比較的変化が少なかった。墓坑周囲の盛土の断面は、墳丘の外側から墓坑の中心に向かって墓坑を包むように層状を成していた。層状の盛土は、３区で顕著に見られ、２区では土質の異なる盛土が面的にモザイク状に広がる状況が観察できた。

主体部確認　主体部上部の落ち込みと供献土器検出面から 60㎝程掘り下げた段階で、腐植に伴う木棺上部の崩落跡と思われる盛土の落ち込みが平面的に確認できた。覆土の掘り下げに着手して、20㎝程掘削を進めた段階で朱と青銅器破片を検出したため、棺底に近いと判断して、２区の掘り下げを一時中断した。２区の遺物検出面に合わせて４区の掘り下げを行い、棺底に近いレベルで漆塗膜・槍・鉄鏃を検出した。３区では、大量の朱と朱の上面で１点の勾玉を検出した。１区では、銅鏡の破片とその下から棺材の一部と思われる木片を確認した。これらの副葬品の検出レベルは、長軸では東に向かってわずかに下る傾斜を示している。木棺内に崩落した土は、愛鷹ローム層中の第Ⅲスコリア帯最下層のスコリアが塊状になって混入するもので、その分布範囲から墓坑内に木棺を埋葬する際に棺上に被せられた土と考えられる。主体部の縦横の土層断面でもこのスコリア塊を混入する状況が観察できた。特に３区と４区では木棺の外側埋土に愛鷹ローム層の暗色帯を主体とする埋土が覆っていたため、その輪郭が明瞭に捉えられた。１区と２区側では輪郭が周囲の埋土と近似していたため、３区ほどには明瞭に捉えられなかった。この土の輪郭が明瞭に見える面は、崩落する前の木棺の平面形状をおおむね示すと推察された。崩落土の平面形は、供献土器の検出面で確認された長楕円形の落ち込みの直下に位置し、規模はそれより大きく、長さ 5.053 ｍ×最大幅 1.252 ｍを測った。幅は相対的に東側が広く西側に向かってやや減じていることが現地でも捉えられた。

埋葬施設内の埋土（第 22 図）　木棺を覆う墓坑内の土に特徴的に含まれるスコリア塊は、この古墳の

周溝の底に現れているSCⅢs3～s5層のスコリアで、愛鷹ローム層中では最も硬い層として知られている。SCⅢs3～s5層は、降灰時に高温であったため堆積後の溶結が認められ、硬い層準を形成している。このためか、本古墳の周溝はこの層準の上部で掘削を止めているが、主体部の真東の周溝底部にこの層準を掘り込んだ痕跡がある。木棺を覆うスコリア塊はその際に採取したSCⅢs3～s5層が混入している可能性がある。この掘削部では、開口部で径60.8㎝×深さ69.8㎝のピットと廻間Ⅱ式の高坏が検出されている（付図3-26）。木棺上の埋土は、愛鷹ローム層中の黒色土やスコリアの混合比率が異なる様々な土質のものが墓坑の周囲から埋め込まれていた。墓坑埋土の縦横断面は、こうした埋土が層状を成していた。この層状の埋土は、木棺の中央に向かって傾斜しているため、木棺が崩落した際に沈み込んで傾斜したものと思われる。木棺の平面形状を確認した面の埋土は、棺上の埋土の傾斜より緩やかであることから、据えた木棺の側壁の埋土と思われる。

墓坑の構造（第22図）　墓坑周囲の盛土版築は、墳丘と主体部の主軸ラインに設定したトレンチの断面で観察した限りでは、墓坑の中央に向かって土塁状に盛っている状況が観察できた。棺床に近い部分は、壁面の一部に整形のためと思われる部分的な掘削が断面に認められるが、構築墓坑と思われる。検出面で平面形状はおおむね長方形を呈し、規模は、一辺の長さが東辺で4.955 m、南辺で6.135 m、西辺で4.431 m、北辺で5.923 mを測る。墓坑の壁は相対的になだらかに棺床に向かうが、特に北辺は緩やかに傾斜していた。棺床の土には、粘性の強い休場ローム層(YL)を多く含む土が使用されていた。土手状に築かれた墓坑周囲の盛土にもYL層が純層に近い状態で黒色土を挟んで版築されていた。この版築の状況が墓坑中央に向かって弧状に盛られていることから、構築墓坑と推察された。

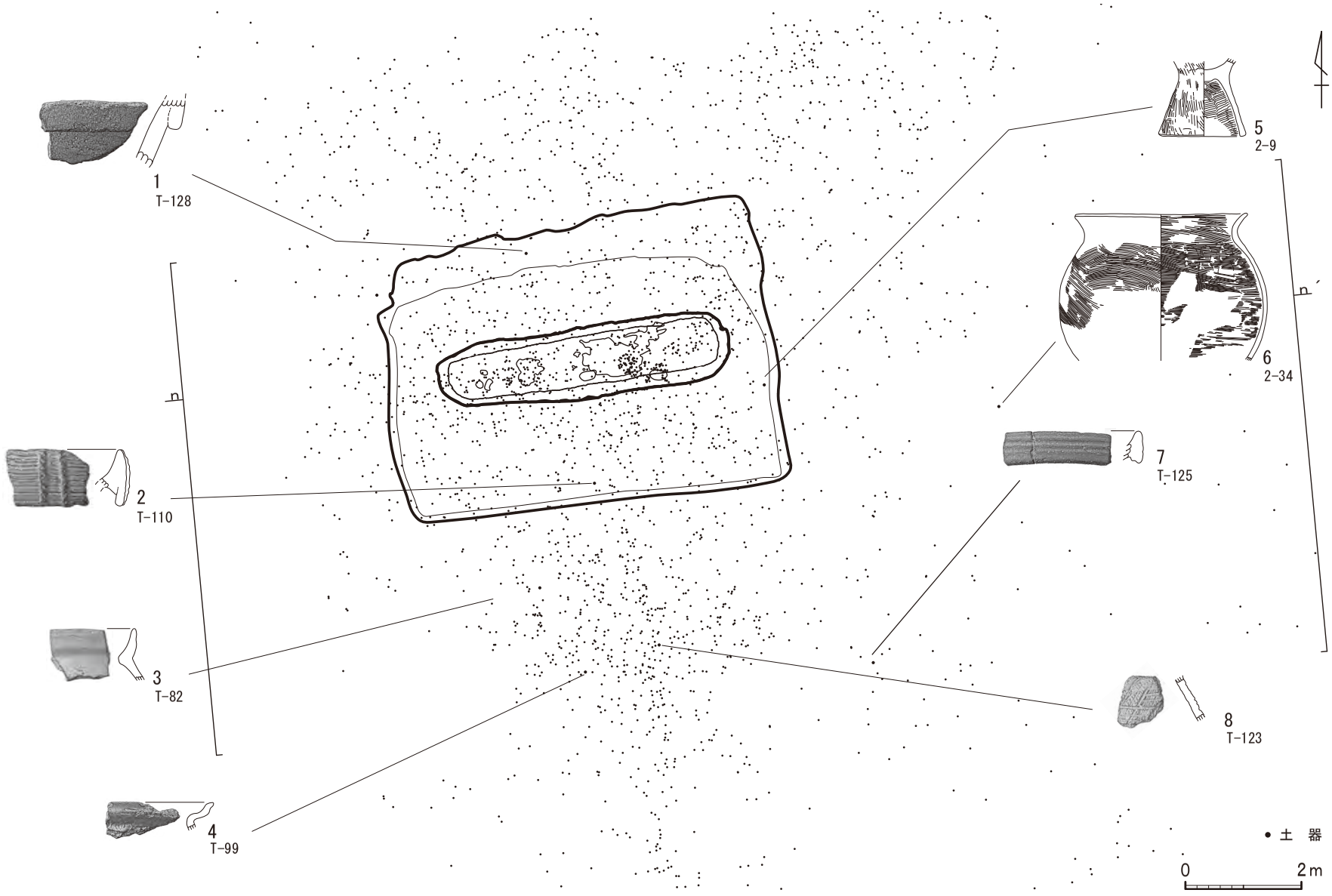
木棺（第23図）　副葬品の銅鏡の下から板状の木片が検出され、調査時には棺床にも縦方向の木目状の痕跡が散見されたことから、被葬者は木棺に収められていたと考えられる。棺床の形状は、棺床に残された痕跡や副葬品の出土状況から、棺底の横断ラインが中央で最も深く両端でやや浅くなる緩やかな弧状を呈していたことが推察される。この所見は、副葬品の検出レベルでも中央の鉄槍が最も低く、被葬者の向かって左側に置かれた銅鏡や鉄鏃は、中央に向けわずかに傾斜した状況で検出されていることとも整合する。縦断の形状は、棺床に両端の痕跡が残されていなかったため、明瞭には捉えられなかったが、棺内に崩落した土との間に腐植土が確認され、その縦断の形状は弧状に反り上がるものであった。この腐植土層が木棺の腐植によるものであれば、その両端は先端付近で反り上がっていたと推察される。これらの状況を総合すると、刳り抜き式の舟形木棺が想定される。木棺の規模は、完掘した埋土の形状から、長さ5.053 m×最大幅1.252 mを測り、最大幅の位置は中央より東に0.154 m～0.564 mの位置にある。木棺跡の主軸は東－西から北に8°50′13秒振れている。

棺床面は、東に向かってわずかに下る傾斜となっている。棺床の断ち割りでは、すでに述べたとおり、棺床の土には粘性の強いYL層と黒色土を混ぜた、突き固めに適した粒子の細かい土が使用されていることが確認された。

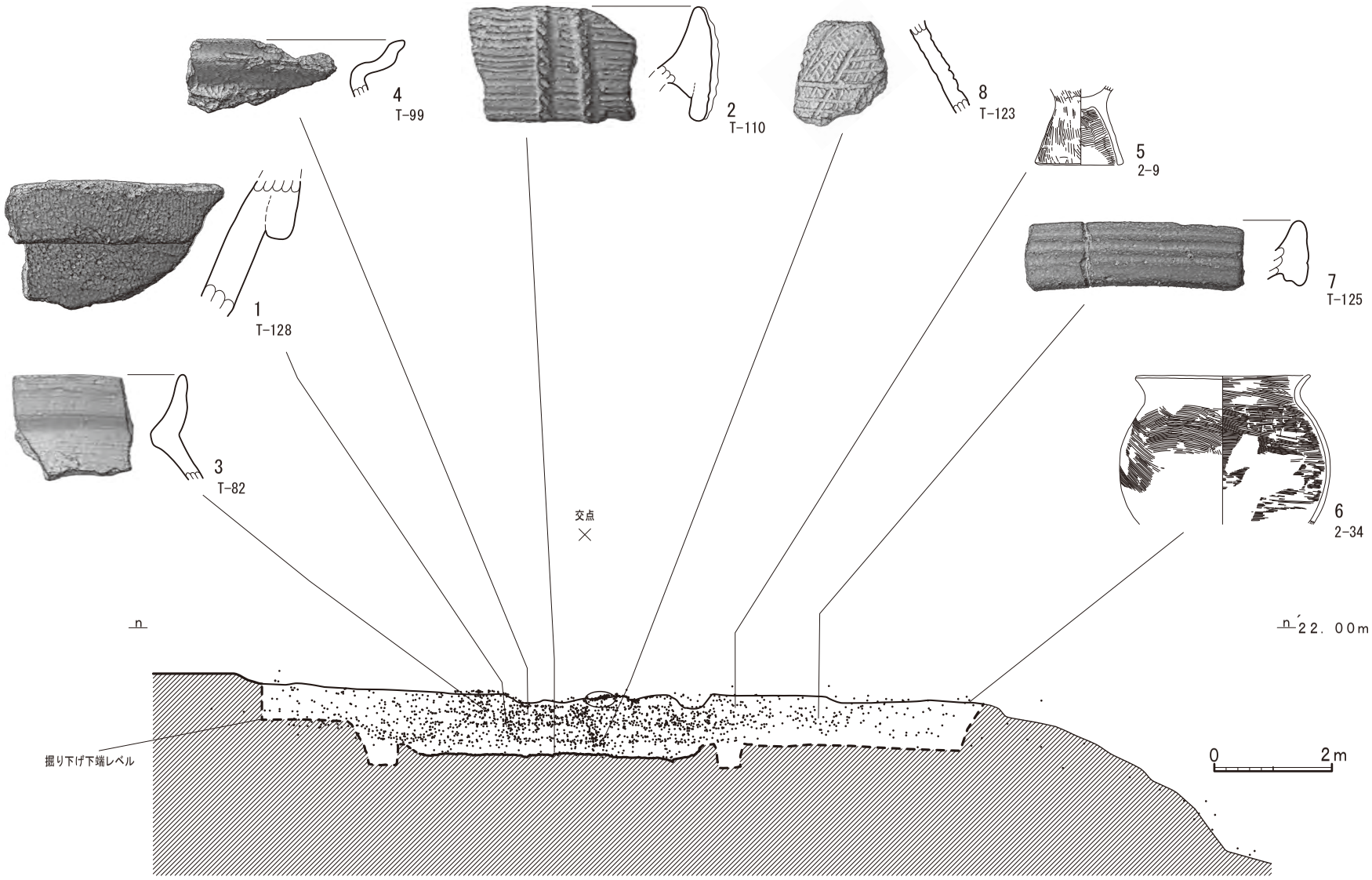
b．副葬品の出土状況

棺内（第23図）　副葬品は、棺底付近と考えられる東西2面の朱の広がりと同レベルで検出されたものを、棺内のものと捉えた。棺蓋の上に乗っていた可能性があるのは、若干レベル的に高かった銅鏡の鏡縁部である。少し離れた位置で検出された鏡面部の大形破片の下には、木棺の木片と思われる板状のものが残されていた。この木片は、棺床に貼り付いていたことから、棺底の木片の可能性が考えられる。棺内の副葬品と考えられるものは、銅鏡1面（破砕鏡）・鉄槍2点・鉄鏃32点・鉇1点・勾玉1点のほか、槍の柄に塗られたと思われる漆塗膜である。

勾玉は木棺のほぼ中央の朱の上面で発見されている。ここは多量の朱が面的に広がる範囲の中央やや西側にあたる。勾玉が被葬者の胸部を示すと仮定すると、東側の朱の広がりは被葬者の頭部から胸部の

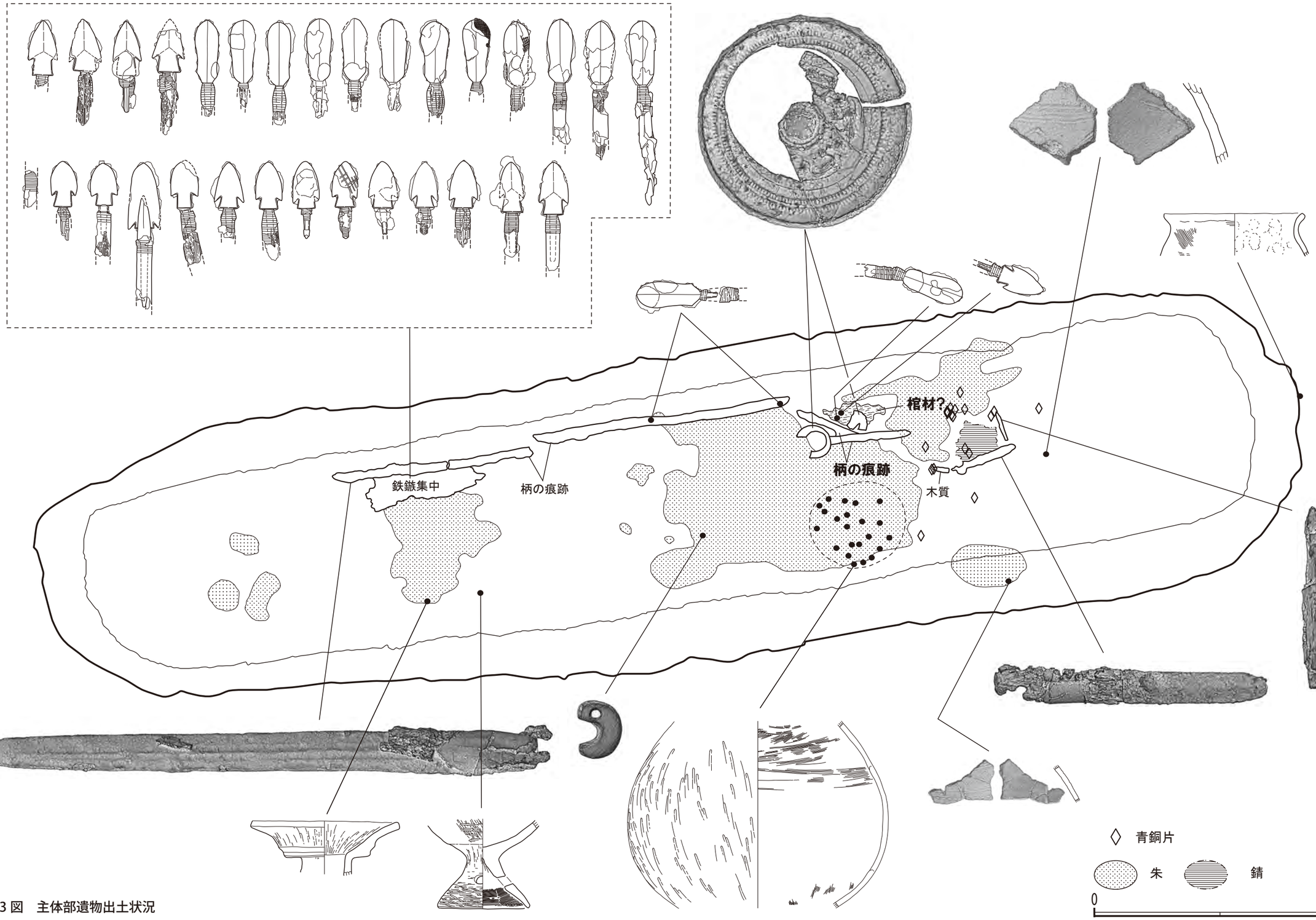


第 20 図　主体部周辺遺物分布状況

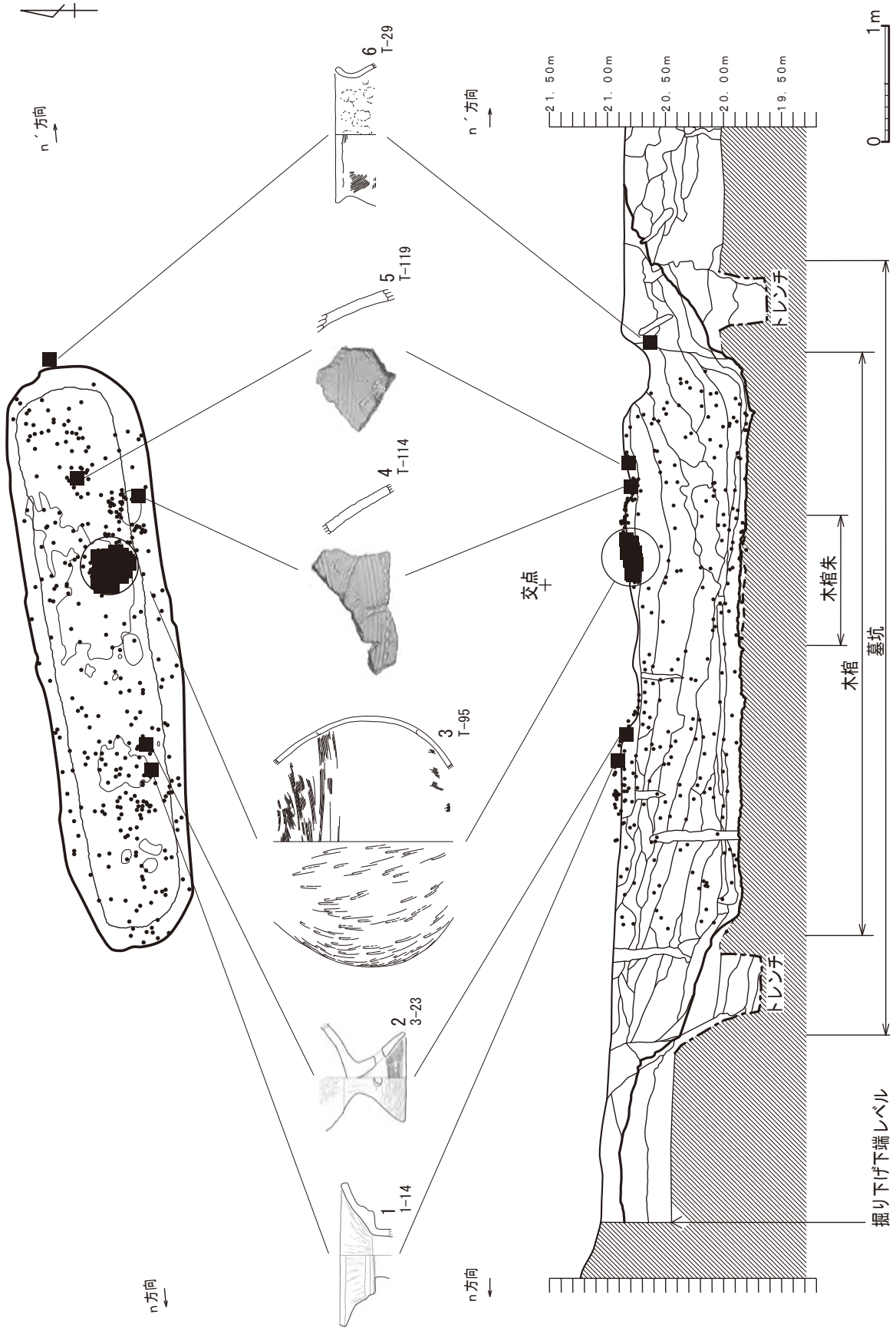


第 21 図　主体部周辺遺物垂直分布

第 22 図　主体部および構築墓坑実測図



第 23 図　主体部遺物出土状況



第 24 図　主体部土器出土状況

位置にあり、西側の朱の広がりは足下の位置になると推測される。被葬者の位置をこのように推定すると、副葬品は被葬者の頭部上方と頭部右横、足下右横に集中し、左側からは全く検出されていない。

頭部側の頭頂部付近で出土した遺物は、小形の鉄槍１点（第 30 図）と鉇１点（第 35 図）、銅鏡（第 26 図）の砕片３点である。槍は尖端部を上（東向き）に向け、鉇は槍と直交するように刃部を木棺側壁側に向けて出土し、鉤形に並ぶ槍と鉇に挟まれた部分には薄く鉄錆が広がっていた。槍身の着柄部には、明瞭な糸巻き痕が確認できた。頭部右側では、銅鏡１面・鉄鏃２点・槍の柄に塗ったと思われる管状の漆の塗膜（第 23 図では「柄の痕跡」として示した）が検出された。朱漆の塗膜の内側には、柄に巻いたと思われる布の織り目の痕跡が明瞭に残されていた。朱漆の塗膜は、被葬者の肩付近から木棺中央の頭上に置かれた槍身に向かうように斜めに遺存していた。２点の鉄鏃は鏡面部の破片に先端を向けるように重なって出土したが、表面に見えていた鉄鏃が柳葉式（第 33 図５）で下に隠れていた鉄鏃が腸抉三角式（第 34 図 28）であった。

銅鏡は、破砕されて鏡縁部と鏡面が８㎝離れて出土した。出土した時点では、腐蝕が進み鏡面と捉えられなかったため、紐を欠損した破片として鏡縁と径が合わないことから２面と考えていた。鏡面は、棺材と思われる板状の木片の上で検出された。これに対して、鏡縁部は棺底より高い位置にあり、槍柄の漆塗膜の上でやや側壁側に傾斜して検出された。鏡縁部は３つに割れていたものの、環状を呈したまま検出されたことから、副葬された時から大きく動いてはいないと思われる。ただし、銅鏡の砕片は、槍の木質部付近と鉇の刃部付近を中心に頭上部に点在していた。

古墳の主軸線と木棺の主軸線との位置関係では、被葬者の首から胸部付近を墳丘の主軸線が通るように見える。副葬品の鏡縁部は、古墳の主軸線に極めて近い位置に遺されていた。頭上部に置かれた小形の槍身は、木棺の主軸線上に位置し、先端はほぼ東を指していた。

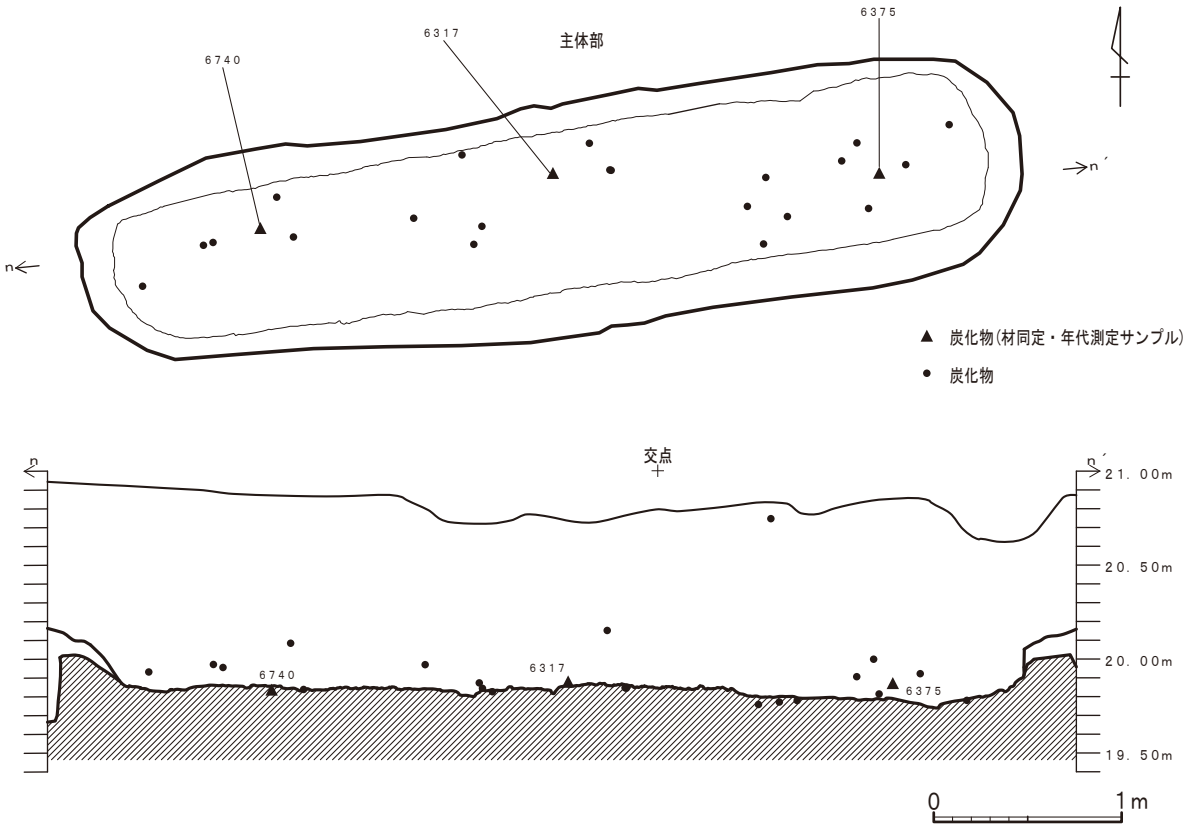
胴部の右側（北側）には、被葬者に沿うように棺の側壁との間に朱漆の塗膜（第 23 図では「柄の痕跡」として示した）が残されていた。塗膜には布の織り目の痕跡が残されており、管状のものが潰れた状況を示していた。棒状のものに布が巻かれ、その上からさらに塗られた漆の痕跡とすれば、ここに槍の柄があったことを示していよう。この潰れた管状の漆塗膜の下から、先端を西に向けた鉄鏃が１点（第 33 図 14）出土している。鉄鏃は漆塗膜の保存処理の段階で発見されたものである。記録写真の解析から、被葬者の右肩付近に鏃身と柄が分離した状態におかれていたものと思われる。

脚部側の副葬品は大形の槍１点と鉄鏃 29 点で、勾玉との位置関係から被葬者の脚部付近と推測される場所で、面的な朱の広がりと木棺側壁の隙間で集中して出土した。槍身は先端を下向き（西向き）にして置かれていた。鉄鏃はこれと逆（東向き）に、鏃身の先端を向けてまとめて置かれていた。鉄鏃の先端の向きは全て東向きに置かれているが、その位置は揃っていない。脚部側の副葬品は、槍と鉄鏃の向きに規則性があり、まとまりのある出土状況を示し、埋土崩落前の状況に近い位置にあると思われる。

副葬品は、木棺上の埋土の崩落にもかかわらず、比較的に整然と出土している感があるが、銅鏡だけは砕片の分布が広く、飛散したような印象の分布を示す。木棺内の埋土は全て篩にかけ、出土位置を記録できなかった砕片もていねいに採取して接合作業を行ったが、調査した範囲内では、欠損部分は検出できなかった。

朱の分布は、被葬者胸頭部と脚部に面的な広がりが認められたほか、点状の分布まで含めれば木棺のほぼ全域で確認できた。そのほとんどが棺底で検出されたが、被葬者の左側の朱の広がりは木棺側壁にあった。

棺上（第 24 図）　二重口縁の壺・高坏・大廓式土器（大形壺）・パレススタイル壺が棺上の埋土の崩落でできたと考えられる皿上の落ち込みの中で検出された。これらの土器は、木棺を埋葬した直上にあり、棺床より約 105㎝の高さに遺されていた。第 24 図には、これらの土器の出土地点とともに土層断面上



第 25 図　主体部内炭化物出土状況

に投影した位置を示した。大廓式土器は、被葬者の頭部と推定される部分の直上に位置し、二重口縁の壺と高坏は脚部のあたりに施された朱の直上に位置している。大廓式土器は、墳丘の主軸と木棺の主軸の交点付近に位置している。

大廓式の壺は、大形の破片が折り重なるように潰れた状態で検出され、二重口縁の壺は、頸部より上のみを遺すもので、その形状のまま伏せた状態で検出された。この２点の土器は、高尾山穂見神社建設の際の造成で失われた部位もあると思われるが、ひび割れながらも良く形を残すことから、供献された場所をほぼ保っていたと思われる。これに対して、パレススタイル壺は、ほとんど破片の状態で検出され、分布も墓坑内外や墳丘に広がって出土した（第 20 図）。

墓坑埋土中（第 20 図・第 21 図）　墓坑埋土中では、パレススタイル壺のほかに台付甕が検出されている。パレススタイル壺は、ほとんどが破片の状態で検出されている。破片は、口縁部と胴部が確認できている。台付甕は、口縁部を含む大形の破片である。

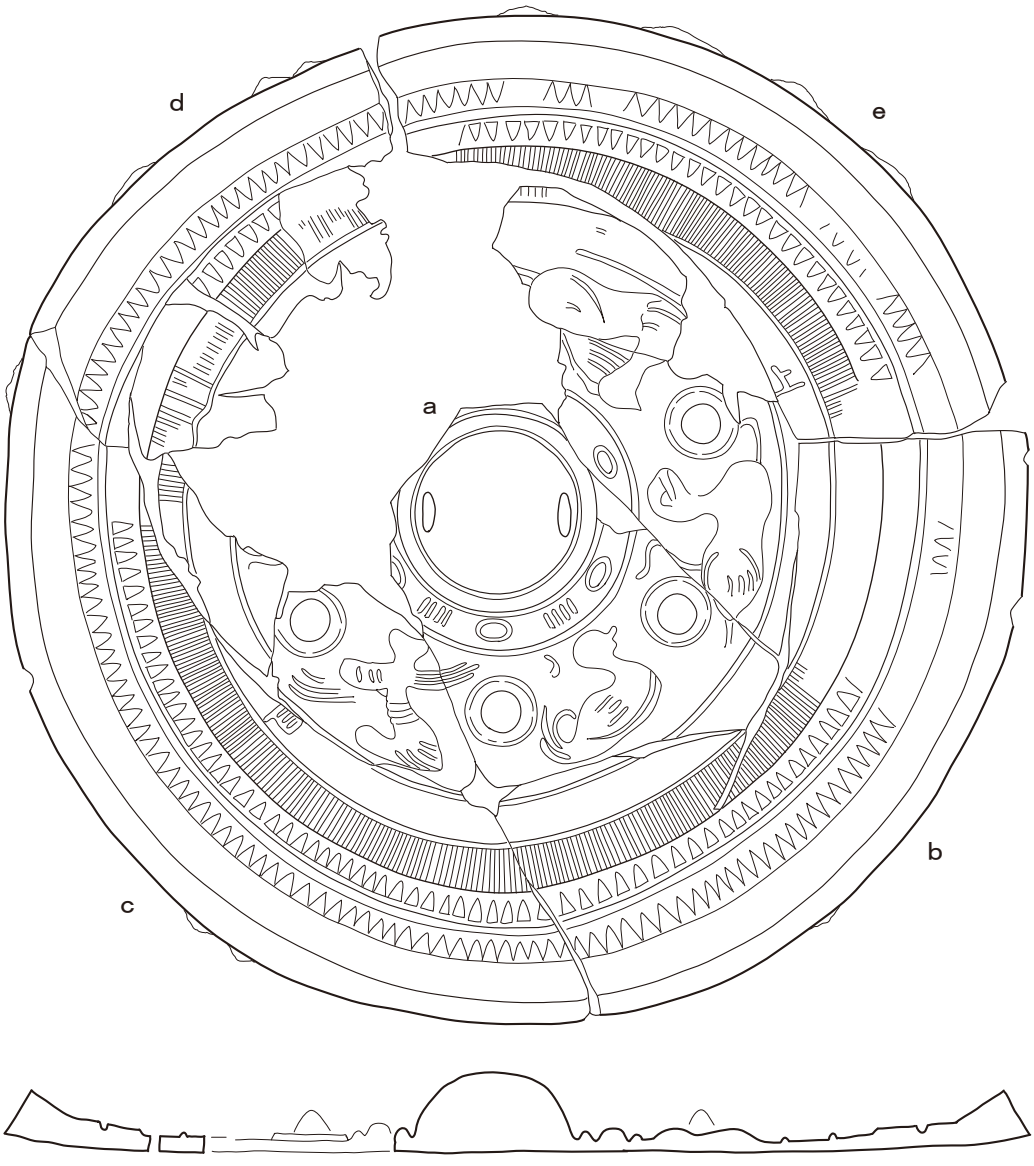
第Ⅳ章　遺物

1．棺内の遺物

a．鏡

被葬者の頭部右脇付近を中心に破片の状態で出土した上方作系浮彫式獣帯鏡である（第 26 図～第 28 図、巻頭図版３）。面径は 13.5㎝で、厚さは内区が 1.2㎜程、外区が 2.5㎜程である。遺存状態は悪く、全体に錆や錆膨れが著しい。また、大きな破片には破損にともなう歪みが生じている。ただし、所々に鮮明な文様をとどめた白銅色の部分が認められ、本来は鋳上がりの良い青銅鏡であったとみられる。

出土した時点で、外区は４つの破片に割れ、内区は鈕を含む破片のほか６つの小破片とさらなる細片に分かれていた。そのうち、外区の３片（破片ｃ～ｅ）は鏡背面を上に向けて一連の状態で出土し、そこからやや離れた位置で外区の残り１片（破片ｂ）とそれに接合する鈕の破片（破片ａ）が鏡面を上に向けた状態で出土した。これら５片以外の破片は被葬者の頭部上方に散在していたこと、また、



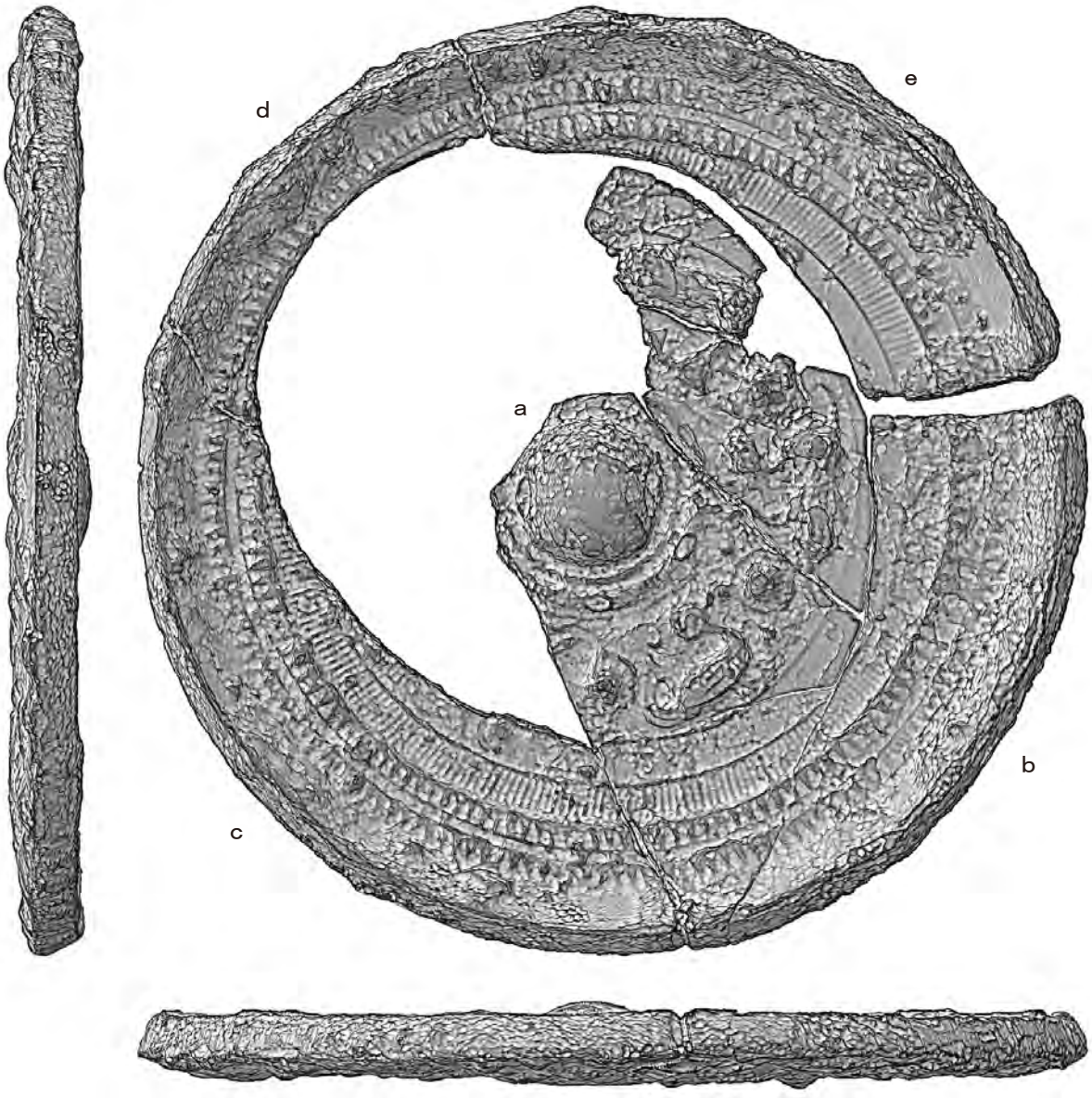
第 26 図　銅鏡実測図（1/1）

未盗掘であるにもかかわらず内区に欠損部分が存在することから、本鏡は副葬に際して意図的に破砕された「破砕鏡」であると考えられる。なお、内区の欠損部分は、墓坑内はもとより今回の調査範囲からは一切出土していない。

文様構成を内側からみていくと、鏡背中央に位置する半球形の鈕は、有節重弧文圏の鈕座をともなっている。その外側に位置する内区は６つの乳によって区画され、それぞれの区画内に六像を配したものと復元できる。さらにその外側には銘帯と櫛歯文帯、外区には二重の鋸歯文帯がめぐり、斜縁をなす鏡縁へと至っている。以下、各部位の特徴を詳述する。

鈕は半球形の円鈕で、径 21㎜、鏡背面からの高さ 9㎜である。鈕孔は、横 6㎜、縦 3㎜の長円形で、その下縁は鈕の基底部にほぼ接している。鈕座の外帯には、内外に圏線をともなう有節重弧文圏が認められる。有節重弧文圏は、断面カマボコ形の凸線上に楕円形文と４本１単位の縦線を、間隔をおいて交互に配したものである。残存部分をみると、楕円形文と内区の乳が対応する位置にあることから、文様は６単位の構成と考えられる。

内区に配された円錐形の乳は、接合した破片の中に４か所、細片に１か所の計５か所が確認できる。



第 27 図　銅鏡の３次元レーザースキャナーによる画像（１）（ＰＥＡＫＩＴ／１/ １）

第 28 図　銅鏡の３次元レーザースキャナーによる画像（２）（ＰＥＡＫＩＴ／4/ 5）

遺存状態の良好な部分で計測すると、底径は 5㎜、高さは 3㎜である。乳にともなう素文の円座は径 9㎜で、その断面は台形状をなしている。

内区はこれらの乳によって区画されているが、欠損部分があるため、主文として確認できるのは四像のみである。時計回りに、①左向きの獣像、②右向きの獣像、③右向きの獣像、④左向きの羽人が認められ、①と②は乳を挟んで向きあっている。いずれも浮彫と細線によって図像を表現しているが、劣化や欠損により全形を把握できるものはない。Ｘ線写真を併用した観察によれば、①と②は前躯と後躯からなる胴長の獣像であり、後躯の表現も類似している。ただし、①は口先が鋭角に尖り、頭部後方に角状表現をともなうのに対し、②ではそのいずれもが判然としない。これらのことから、①は鹿、②は虎である可能性が考えられる。③は、①・②とは異なる瓜実形の胴体を細線で囲み、その内部に横線を配した獣像である。首は短く、前後に伸びる明確な四肢も認められないことから、鳥である可能性が考えられる。④の羽人は、前方に両手を差し出して跪いた姿勢である。

幅 6㎜の銘帯は、錆膨れと欠損により、ほとんどの文字が判読不能である。肉眼による観察では、破片ｅに「上」の文字、破片ｃに「宜」とみられる文字の一部が確認できるのみである。また、Ｘ線写真をみると、破片ｂに「竟」とみられる部分がかすかに観察できるほか、数か所に文字ともみられる部分が認められる。銘文のパターンに照らせば、「上方作竟」と「長宜子孫」の字句（またはその省略）を含む銘文が想定される。

銘帯につづく櫛歯文帯は幅 6㎜で、9 本／㎝の密度で櫛歯文が充填されている。外区の内側には、外縁に圏線をともなう幅 4㎜の外向鋸歯文帯がめぐり、幅 1.5㎜の無文帯を挟んだ外区の外側には、同じく幅 4㎜の外向鋸歯文帯が巡っている。縁は斜縁であり、鏡面からの高さは 7㎜である。

ｂ．槍

槍 1（第 29 図・第 36 図 1）　棺内西側の北辺部で鋒を西に向けて出土した長身の鉄槍である。柄の端部が良好に遺存し、棺内ではそれに続く柄の痕跡も確認されている。

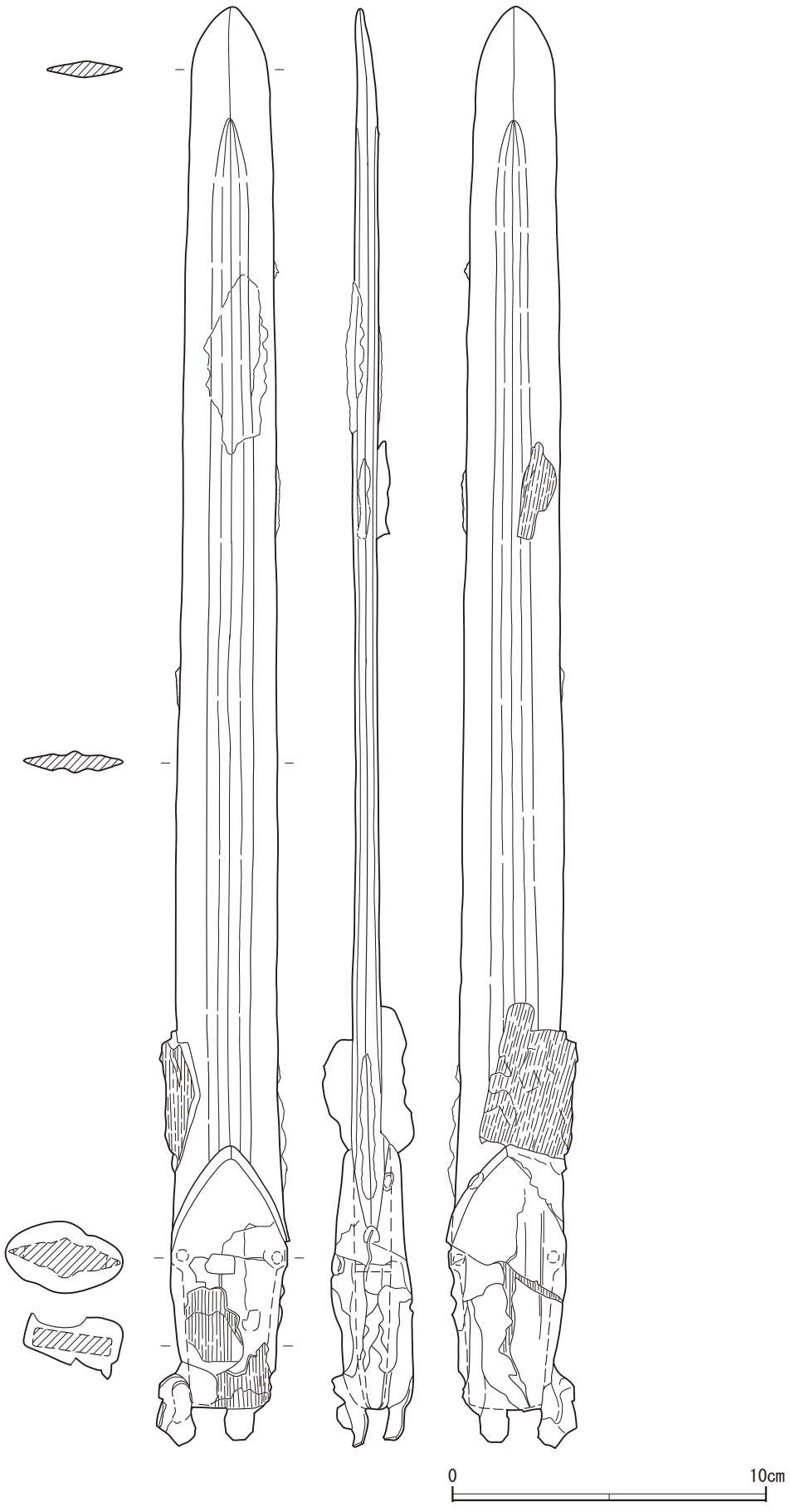
槍身は全長 45.5㎝で、長い身部に短い茎部をともなう。各部の計測値は、身部長 41.1㎝、同幅 2.4㎝～ 3.4㎝（鋒付近～関付近）、同厚 0.7㎝、茎部長 4.4㎝、同幅 2.3㎝～ 3.0㎝（茎尻～関部）である。

最大の特徴は身部のつくりに認められ、両面ともに鎬の両側に幅 6㎜～ 7㎜の樋が存在する。樋は関部付近から始まっているとみられ、その終端は判然としないものの、鋒から 3.5㎝前後の位置で収束しているようである。断面形を観察すると、その凹みは浅い弧状をなしていてシャープさは認められない。また、側面からのＸ線写真には、鍛造品特有の層状構造が明瞭に認められる。これらの点から、本品は鍛造品とみるのが妥当であり、独特の樋は鍛造工程の中でつくり出されたものと考えられる。なお、槍身の片面（棺底側）には一部に木質の付着が認められるが、いずれも棺材の一部とみられるものである。ほかに木質の付着は認められず、副葬の時点で鞘は存在しなかったものと考えられる。

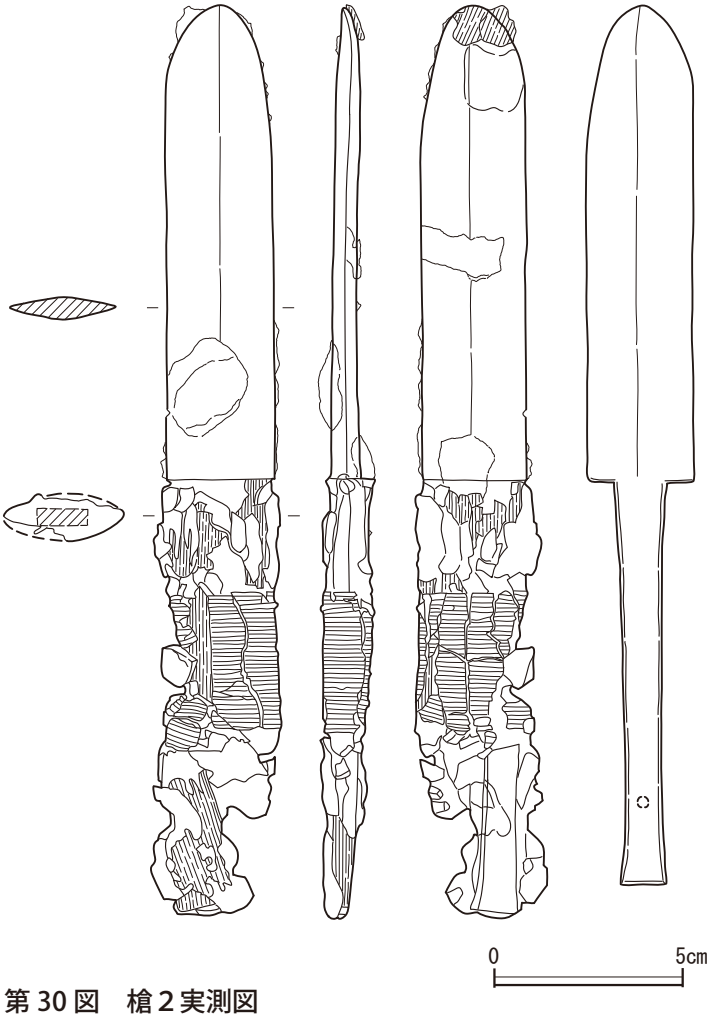
関部の形状は、柄木に覆われているため肉眼では観察できない。Ｘ線写真をみると、3㎜～ 4㎜程度の段差をともなう斜関で、関部の両側には径 3.5㎜の小孔が確認できる。いわゆる刃関双孔であり、刃部の側縁にかなり近い位置に設けられている。

茎部は短く、茎尻に向かって幅を狭めている。この茎部には、断面杏仁形を呈する柄の端部が良好に遺存している。柄の端部は山形をなして身部側に 3.5㎝ほど突出し、頂部は鋭角をなしている。いわゆる呑口式の構造で、山形突出の斜辺は丁寧に面取りされ、全体として緩やかな弧状をなしている。表面には全体に黒漆を施しているが、糸巻きは確認することができない。側面の遺存状態が悪く、柄端部の部材構造については明確な判断材料が得られない。

棺内ではこの槍身にともなう柄の痕跡が確認されている。柄の痕跡は、棒状部分の腐朽にともなって管状に潰れた漆の塗膜で、所々に赤色部分が認められることから、赤漆塗の柄であったと考えられる。



第 29 図　槍 1 実測図



第 30 図　槍２実測図

この痕跡は棺の北辺に沿って検出され、槍身の鋒から東に約 66㎝の地点まで延びたのち、やや途切れてさらに約 86㎝の長さで続いていた。その先には、槍２の柄とみられる痕跡が方向を異にして検出されたが、両者をその特徴によって区別することは困難である。棺北辺に沿って直線的に検出された痕跡を槍１の柄とみなすならば、槍としての全長は約 1.4 mとなる。

以上のように、本品は極めて特異な有樋槍身であるが、柄端部に覆われた刃関双孔が何ら機能を果たしていない点から判断すると、本来は剣身であったものを後に転用したものである可能性が考えられる。茎部に目釘孔が見当たらないのは、元々の茎部を切断・再加工した結果とも受けとれよう。

槍２（第 30 図・第 36 図２）　棺内東側の中央部で鋒を東に向けて出土した鉄槍である。出土地点は被葬者の頭部上方にあたるが、後述する柄の出土状況から判断して、原位置を移動している可能性がある。

槍身は全長 23.2㎝で、短い身部に細長い茎部をともなう。各部の計測値は、身部長 12.6㎝、同幅 2.8㎝、同厚 0.6㎝、茎部長 10.6㎝、同幅 1.2㎝～ 1.4㎝（茎尻～関部）である。

両側に鎬をともなう身部は、ほとんど欠損部分がなく、所々に錆膨れが認められる以外は良好な遺存状態である。鋒の片面にはわずかに木質が付着しているが、鞘木とは認めがたい。柄木が良好に遺存している状況と比較すれば、鞘木の不在は明らかである。

関部は角関で、7㎜の段差をもって茎部へと続いている。柄木に覆われた茎部は２か所で破断し、茎尻を含む破片は本体と遊離した状態で柄木と錆着している。その形状は、茎尻に向かって徐々に幅を狭めていくものの、茎尻でごくわずかに幅広となっている。Ｘ線写真をみると、目釘孔は茎尻寄りに１か所存在するようであるが、それ以外は判然としない。

茎部には柄の端部が遺存している。柄の端部は関部で直線的に終わっており、呑口式とはならない。柄木は木目に沿って細かく割れており、部材の合わせ目を確認することはできないが、表面には黒漆塗が認められる。この柄木の上には、上端より 3㎝の位置から幅 3.7㎝にわたって糸巻きが良好に遺存している。糸巻きは、幅 1㎜程度の紐を密に巻き付けたもので、表面の漆塗は認められない。

この槍身にともなう柄の痕跡は、槍身からやや離れた棺北辺寄りで確認されている。槍１と同様に、柄の痕跡は管状に潰れた漆の塗膜で、全体に赤漆が認められる。柄の痕跡は、斜めに交差するような状態で２方向に検出されたが、東側の長さは槍身との空白部分の長さに近いことから、それらの痕跡を槍２の柄と判断した。本来は被葬者の頭部右側（北側）に副葬されていたものが、棺の腐朽等の影響で破

断したものであろう。ただし、痕跡全体の長さは約 40㎝と短く、槍 1 の柄と判断したものの一部が槍２の柄となる可能性も否定できない。

ｃ．鉄鏃

総数は 32 点を数える。そのうち 29 点は主体部の北西側より先端を西に向け、ほぼそろった状態で出土し、残る 3 点（第 33 図 6・14・第 34 図 25）は主体部中央の浮彫式獣帯鏡の付近より、先端がそれぞれ南東と西に向いた状態で出土した。鏃身外形および矢柄との接続方法の差異から、柳葉式、腸抉三角式、長三角式の 3 型式に大別できる。

柳葉式（第 33 図 1 ～ 14・第 37 図 1 ～ 13）　合計 14 点を数える。鏃身長 4.0㎝～ 4.3㎝、鏃身幅 1.5㎝～ 1.9㎝を測る。全体として規格性が高い一群である。

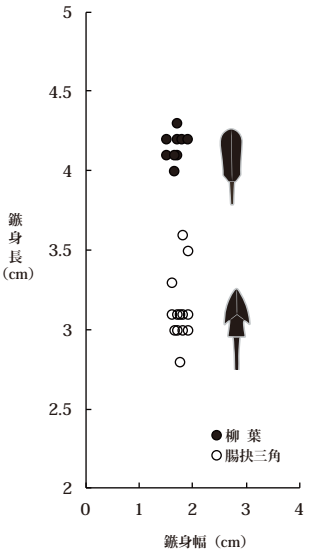
刃部は柳葉式の特徴である S 字カーブを描くが、8 や 10 では屈曲が判然としない。鏃身下半は刃部との境界付近でわずかに屈曲したのち、弱く外湾し、関部に至るものが大半を占めるが、1 や 13 のように内湾する個体もある。全ての個体で、茎部との境に明瞭な段を持つ。これら鏃身外形における細部形状の違いについては、鍛造時に生じた個体差として理解すべきであろう。

鏃身断面形は菱形を呈し、両面に鎬をもつ。表面の剥離や銹膨れによって判然としない個体も存在するが、3・8・11 では研磨によって造り出されたと推測される明瞭な鎬が確認できる。なお、4・9 ではやや目の粗い繊維が刃部側面に、6 では目の細かい繊維が刃部先端からフクラにかけて付着している。

茎部は、6・12 を除き端部まで完存している。断面形状はいずれも円形を呈し、茎部が矢柄から露出している個体（2・9・12）を観察する限り、面取りによる仕上げは確認できない。

矢柄は直径 1㎝前後を測り、矢柄の先端部が細くなる「楕円筒形」（川畑 2010）を呈する。口巻長は末端部分まで残存している 1・3・5・11 では 1.8㎝前後を測り、完存していない他の個体も同様の長さであったと推測される。

口巻は幅 2㎜程の帯状の樹皮を用い、関部より反時計回りに 1㎜ほど重複させながら矢柄に巻きつけたのち、末端部を 1 巻き分ほど内側に折り込んで処理している（ＰＬ .16 ～ 18）。その上から矢柄全体に漆を塗布し、口巻と矢柄とを固着させている。

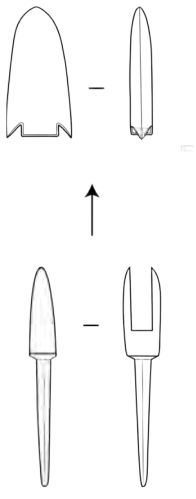


第 31 図　鉄鏃法量の分布

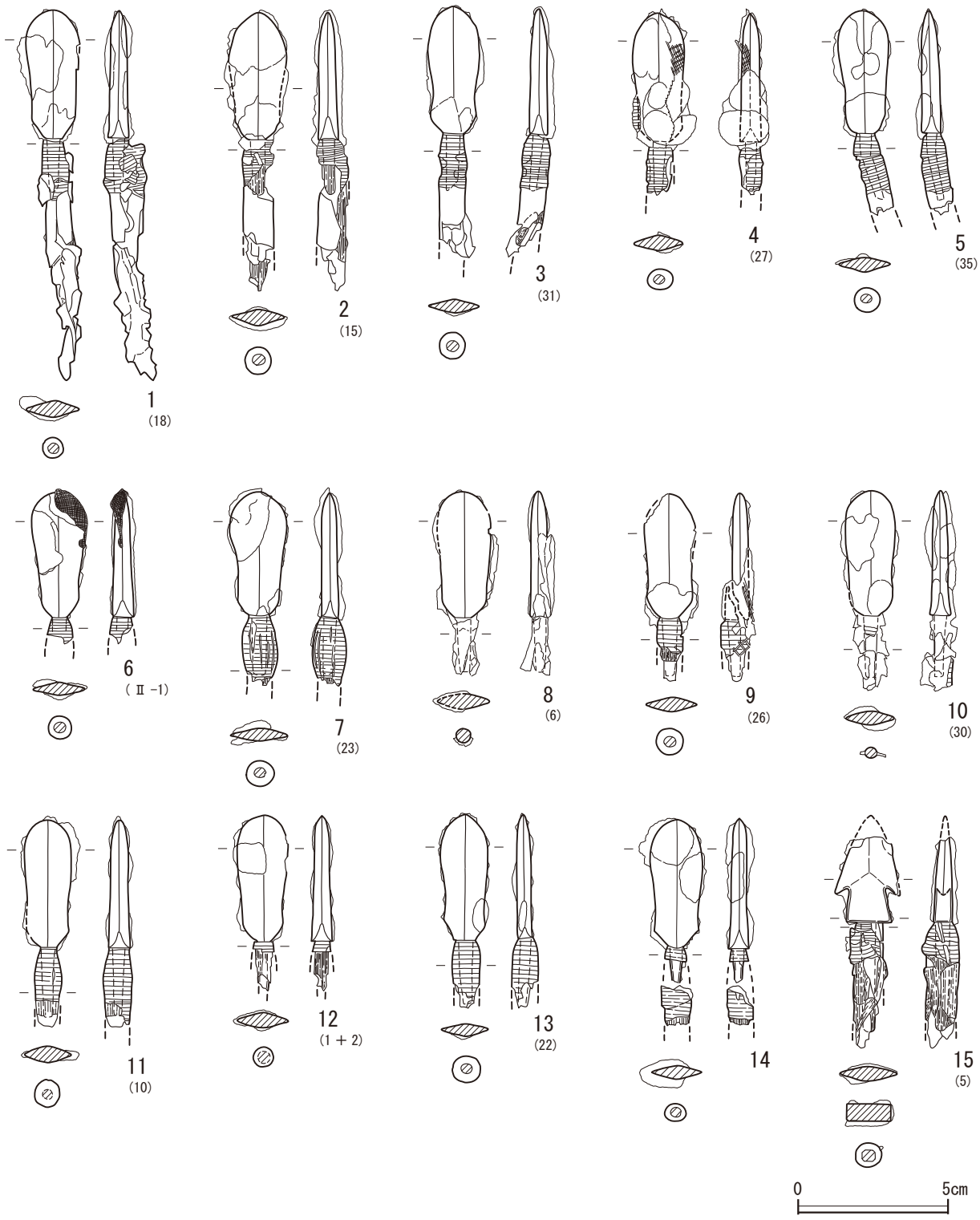
腸抉三角式（第 33 図 15・第 34 図 16 ～ 31・第 37 図 15・第 38 図 16 ～ 31）　合計 17 点を数える。鏃身長 3.0㎝～ 3.6㎝、刃部幅 1.6㎝～（2.1）㎝を測り、柳葉式と比べて寸法にややばらつきがある（第 31 図）。鏃身長、鏃身下半長、茎部長の差異から 3 型式に細別できる。

腸抉三角式Ａ類（15 ～ 20）は、鏃身長 3.5㎝前後を測る。腸抉三角式の中ではやや大きな一群である。腸抉三角式Ａ類として一括しているが、茎部長の長短でさらなる細分も可能である。鏃身部は刃部に弱いフクラをもち、刃部長は 2.4㎝～ 2.7㎝を測る。鏃身下半は断面形状が長方形を呈し、わずかに外反しながら関部に至る。

鏃身断面形は菱形を呈する。鎬は両面に存在し、左右の腸抉から伸びる鎬と刃部先端から伸びる鎬とが鏃身下半との境界付近で交わる。定角式と共通する形状であり、15・16 では特に明瞭な鎬が確認できる。



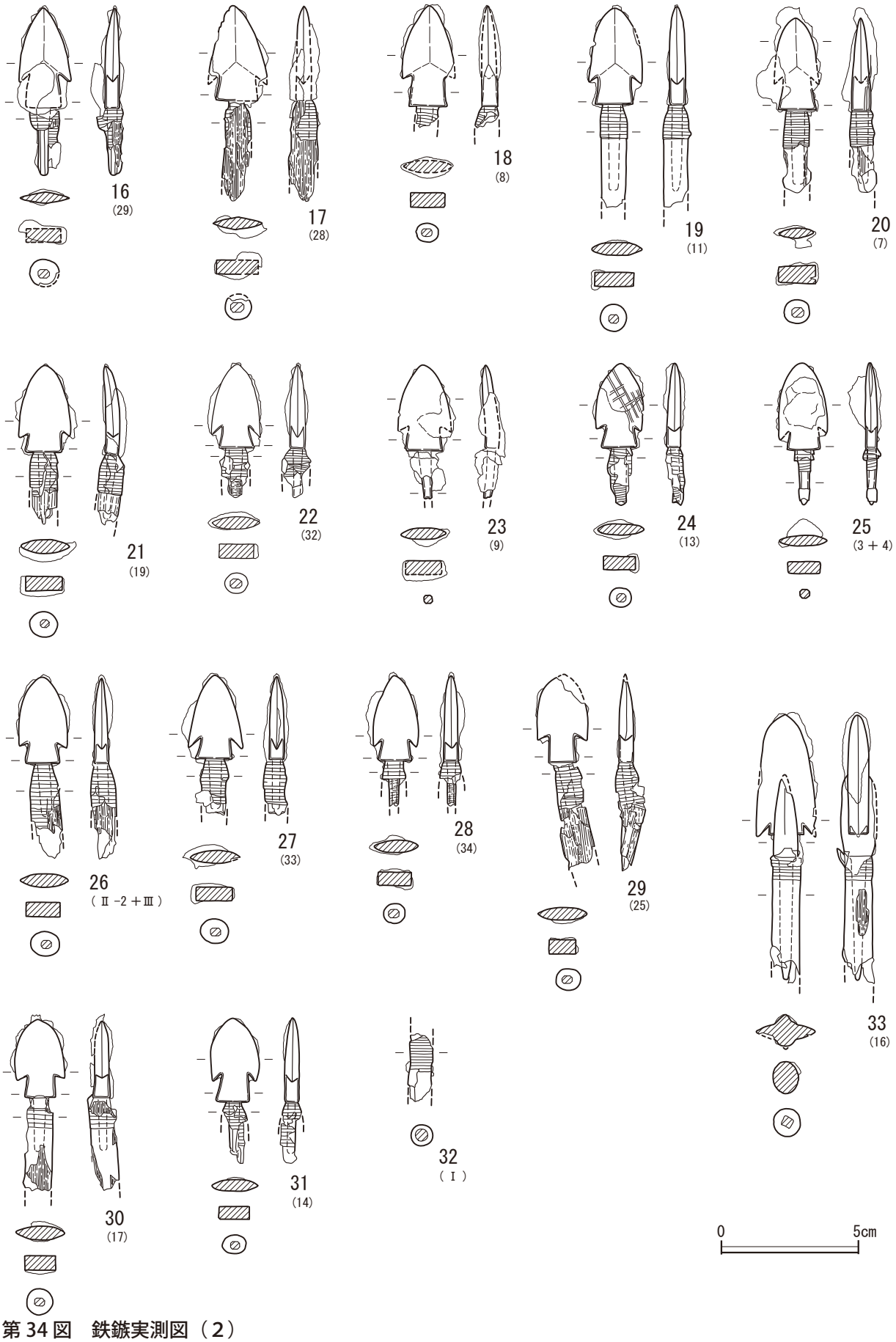
第 32 図　長三角式の構造



第 33 図　鉄鏃実測図（1）

茎部は 18 を除いて完存しており、茎長が 3.5㎝以上の個体（15・17）と 3.1㎝以下の個体（16・19・20）とがある。断面形状は、茎部が露出している個体（15・16）でみると、四隅に研磨による面取りが施されており、不定八角形を呈する。直接形状が確認できない個体についても同形状であるものと推定し、実測図では不定八角形に表現している。以下に述べる B1・B2 類についても同様の方針で図化をおこなっている。

腸抉三角式 B1 類（21 ～ 28）は、鏃身長 3㎝程を測り、A 類よりもやや小さな一群である。腸抉三


16
(29)
17
(28)
18
(8)
19
(11)
20
(7)
21
(19)
22
(32)
23
(9)
24
(13)
25
(3 + 4)
26
(Ⅱ-2＋Ⅲ)
27
(33)
28
(34)
29
(25)
30
(17)
31
(14)
32
(Ⅰ)
33
(16)
0
5cm

第 34 図　鉄鏃実測図（2）

角式の主体をなす。フクラの強弱、腸抉の深浅など、細部の個体差はA類よりも大きい。

鏃身断面形はレンズ状を呈する。鏑の存在を認めることができる個体はあるものの、銹化により判然としないことから実測図には表現していない。

茎部は、23・28を除いて完存しており、茎部長は2㎝前後を測る。茎部が露出している個体（22～25・28）では、断面形状は不定八角形を呈している。

なお、24では4・9と同じような目の粗い繊維の付着が認められ、22についても同種の繊維が鏃身を覆うように付着していた。後者については取り上げ後に切り離して繊維分析を実施しており、「大麻である可能性が高い」との所見を得ている（第Ⅶ章2参照）。

腸抉三角式B2類（29～31）は、鏃身長3㎝前後を測る。A類よりもやや小さな一群のうち、B1類よりもフクラが強く、刃部に対する鏃身下半の長さが相対的に長い一群を腸抉三角式B2類とした。刃部長は2.3㎝前後を測る。フクラは強く、腸抉先端に向かって内湾する形状をとる。鏃身下半は長さ0.75㎝～1.0㎝を測り、ほとんど外反しない。鏃身断面形はレンズ状を呈し、鏑は認められない。

茎部はすべての個体で完存しており、茎部長は1.8㎝～2.2㎝を測る。茎部が露出している個体（31）では、断面形状は不定八角形を呈している。

腸抉三角式の矢柄はいずれも直径1㎝前後の「楕円筒形」である。柳葉式に比べて遺存状況は良好ではなく、口巻末端部分まで残存している個体は少ない。口巻長は腸抉三角式A類で1.2㎝程、B1類とB2類では1.6㎝程を測る。いずれも柳葉式より短く、細別型式によって長さに違いがみられる。口巻の巻き方、末端処理の方法は柳葉式と同様であり、末端部の折り込み痕は、19・20・26で確認できる。

32は矢柄片である。口巻が付着しており、6ないし28と同一個体とみられる。

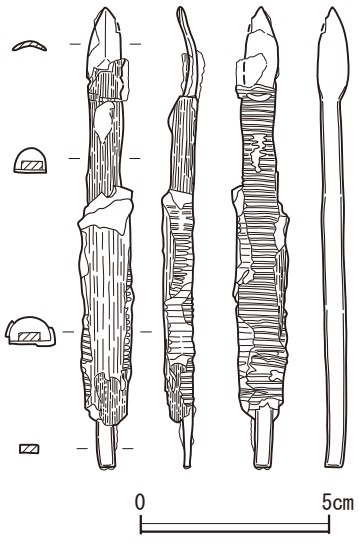
長三角式（第34図33・第38図33）　1点のみ出土しており、短茎鏃を挟み込んだ別造りの根挟みを矢柄に装着するという構造をとる。

この根挟みについて、当初は有機質の素材である可能性も想定したが、X線写真の観察結果から、最終的に鉄製であると判断した。さらに、糸巻等による固定の痕跡も一切確認できないことから、鏃身に鉄製の根挟みを鍛接した特殊な構造をもつ鉄鏃と認定するにいたった（第32図）。

鏃身は、刃部長4.4㎝、同残存幅2.1㎝を測る。長三角形を呈し、フクラは弱い。断面形状はレンズ状を呈し、鏑の有無は判然としない。茎部は茎部長0.3㎝、同幅1.2㎝と長さに対して幅が広く、茎部厚も0.7㎝と厚手である。茎部としては特異な形状といえよう。根挟みは全長7.4㎝を測る。根挟み部は長さ3.1㎝、最大幅0.85㎝を測り、わずかにフクラをもった尖頭形をなす。片面は先端部が欠損しているほか、表面には数か所の剥離が認められる。断面形状は楕円形を呈する。

根挟み茎部は完存しており、茎部長は4.3㎝と長い。矢柄よりわずかに露出した端部から、断面は菱形を呈することが確認できる。

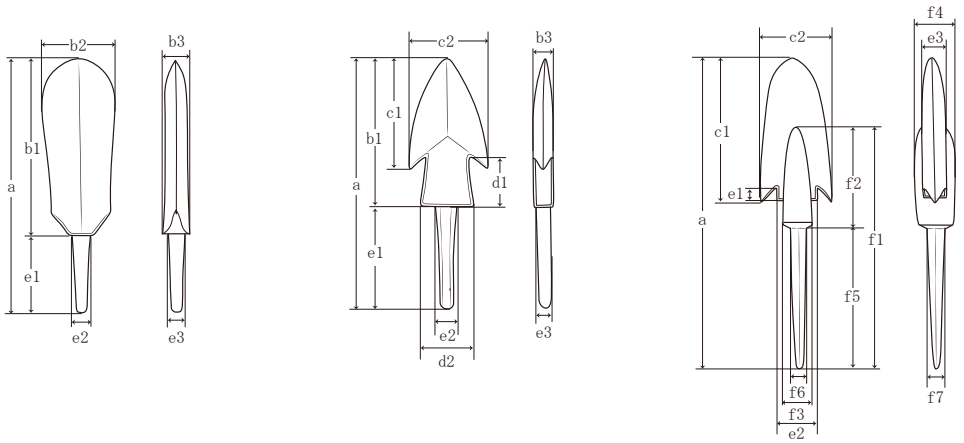
矢柄は直径1㎝程を測る。「円筒形」（川畑2010）を呈し、先端部の削り込みはみられない。口巻は末端部分まで良好に残存しており、口巻長は0.8㎝程と短い。口巻の巻き方、末端処理の方法は他の個体と同様であり、口巻の上から漆が全面に塗布されている。



第35図　鉇実測図

d．鉇

被葬者の頭部上方で刃部を北側に向けて出土した鉄鉇である（第35図・第36図3）。全長12.0㎝の本体はほぼ全形をとどめており、軸部には木柄が良好に遺存している。本体の各部計測値は、刃部長2.5㎝、同幅0.9㎝、同厚0.15㎝、軸部長9.5㎝、同幅0.6㎝、同厚0.25



a　：全　長　　c１：刃部長　　e１：茎部長　　f２：根挟み長　　f６：根挟み茎部幅
b１：鏃身長　　c２：刃部幅　　e２：茎部幅　　f３：根挟み幅　　f７：根挟み茎部厚
b２：鏃身幅　　d１：鏃身下半長　　e３：茎部厚　　f４：根挟み厚
b３：鏃身厚　　d２：鏃身下半幅　　f１：根挟み全長　　f５：根挟み茎部長

第４表　鉄鏃属性観察表（１）

	型　式	全　長	鏃身部			茎　部			備　考
			鏃身長	鏃身幅	鏃身厚	茎部長	茎部幅	茎部厚	
1	柳葉式	6.0	4.2	1.7	0.7	1.8	0.45	0.4	
2	柳葉式	6.0	4.2	1.9	0.65	1.8	0.5	0.4	
3	柳葉式	6.1	4.2	1.7	0.6	1.9	0.45	0.35	
4	柳葉式	6.0	4.2	1.7	0.7	1.8	0.4	0.35	鏃身に粗い繊維と別の鏃の口巻が布着
5	柳葉式	[6.2]	4.0	1.65	0.6	[2.2]	0.4	0.3	全長は直線に復元した値
6	柳葉式	[4.6]	4.2	1.8	0.7	[0.4]	0.45	0.35	鏡に近接して出土／鏃身に細かい繊維が付着
7	柳葉式	6.1	4.1	1.65	0.6	2.0	0.5	0.4	
8	柳葉式	6.0	4.2	1.7	―	1.8	0.4	0.4	鏃身に縦方向の亀裂
9	柳葉式	6.0	4.1	1.7	―	1.9	0.5	―	鏃身と口巻に粗い繊維が付着／鏃身に亀裂、ズレ
10	柳葉式	6.1	4.1	1.65	0.6	2.0	0.45	0.4	
11	柳葉式	6.5	4.2	1.5	0.7	2.3	0.4	0.4	
12	柳葉式	[5.8]	4.2	1.7	0.7	[1.6]	0.4	0.4	
13	柳葉式	6.3	4.1	1.5	0.5	2.2	0.5	0.35	
14	柳葉式	[5.4]	4.3	1.7	0.5	[1.1]	0.4	0.4	槍の柄に接した位置より出土

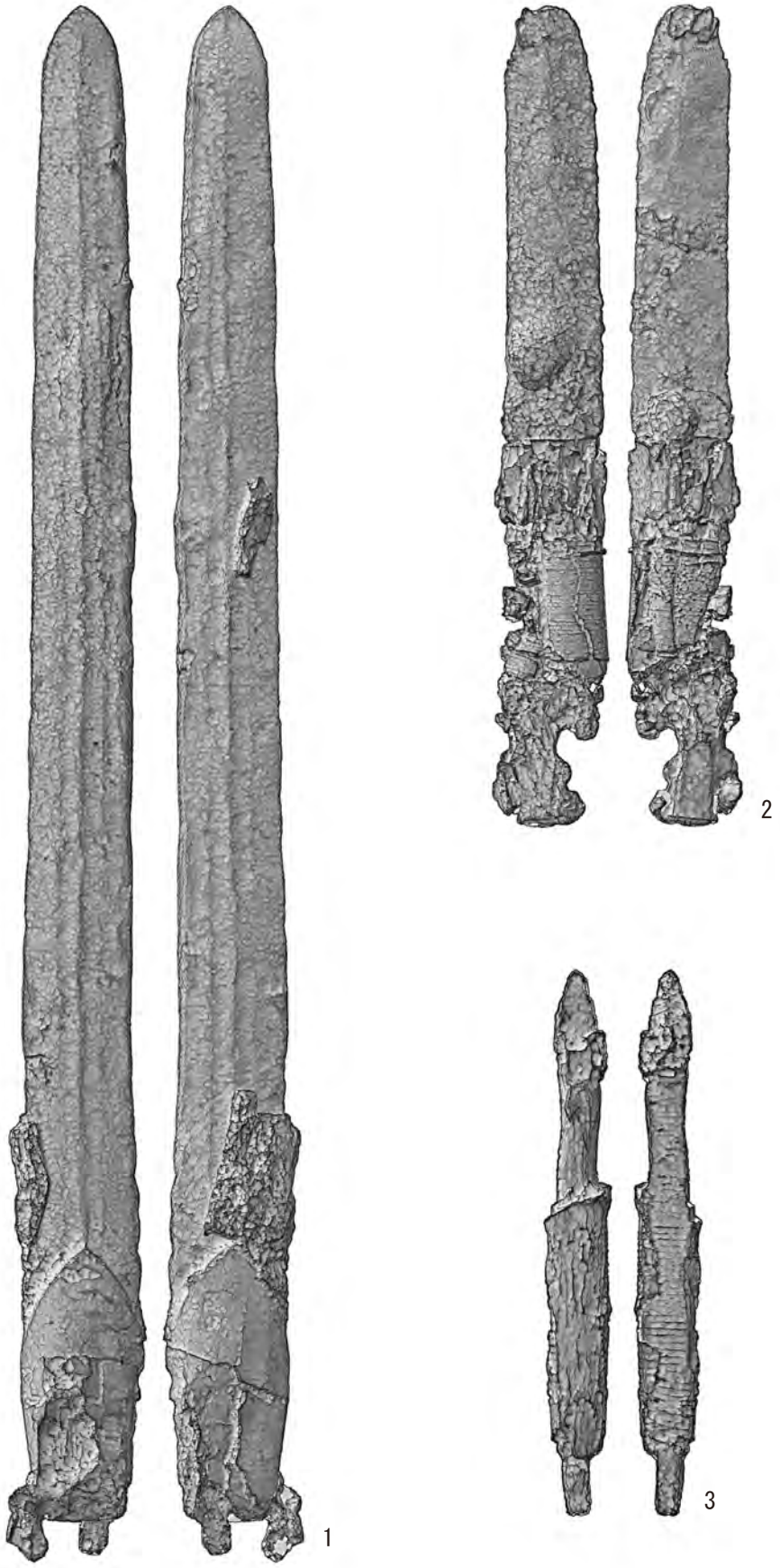
第５表　鉄鏃属性観察表（２）

	型　式	全　長	鏃身部						茎　部			備　考
			鏃身長	刃部長	刃部幅	鏃　身 下半長	鏃　身 下半幅	鏃身厚	茎部長	茎部幅	茎部厚	
15	腸抉三角式 A 類	[6.4]	[2.8]	[1.9]	[2]	1.1	1.5	0.6	3.6	0.5	0.5	
16	腸抉三角式 A 類	6.0	3.6	2.7	1.8	1.2	1.2	0.5	2.4	0.4	0.35	
17	腸抉三角式 A 類	6.9	3.4	[2.6]	[2.1]	0.9	1.5	0.5	3.5	0.5	0.4	
18	腸抉三角式 A 類	[4.1]	3.6	2.6	[1.8]	1.1	1.3	0.6	[0.5]	0.45	0.4	
19	腸抉三角式 A 類	6.6	3.5	2.7	1.9	1.0	1.35	0.55	3.1	0.4	0.35	
20	腸抉三角式 A 類	6.0	3.3	2.4	1.6	1.2	1.3	0.7	2.7	0.5	0.45	
21	腸抉三角式 B1 類	5.2	3.1	2.6	1.8	0.7	1.3	0.45	2.1	0.45	0.35	鏃身が反る
22	腸抉三角式 B1 類	4.8	3.0	2.6	1.8	0.7	1.3	0.5	1.8	0.5	0.35	
23	腸抉三角式 B1 類	[4.8]	3.1	2.4	1.9	0.9	1.3	0.5	[1.7]	0.45	0.3	鏃身が反る
24	腸抉三角式 B1 類	5.1	3.0	2.4	1.65	0.8	1.25	0.5	2.1	0.45	0.3	鏃身に粗い繊維が布着
25	腸抉三角式 B1 類	5.1	3.1	2.8	1.75	0.8	1.2	0.4	2.0	0.5	0.3	
26	腸抉三角式 B1 類	5.0	3.1	2.5	1.7	0.7	1.2	0.5	1.9	0.45	0.35	鏡片の上部より出土
27	腸抉三角式 B1 類	4.8	3.0	2.6	1.9	0.7	1.3	0.5	1.8	0.5	0.3	
28	腸抉三角式 B1 類	[4.7]	3.1	2.6	1.6	0.7	1.2	0.5	[1.6]	0.5	0.3	
29	腸抉三角式 B2 類	[5.3]	[3.1]	[2.4]	1.8	1.0	0.95	0.5	2.2	0.4	0.3	茎部が屈曲
30	腸抉三角式 B2 類	4.7	2.8	2.2	1.75	0.75	1.1	0.5	1.9	0.4	0.3	
31	腸抉三角式 B2 類	4.8	3.0	2.3	1.7	1.0	1.2	0.5	1.8	0.4	0.25	

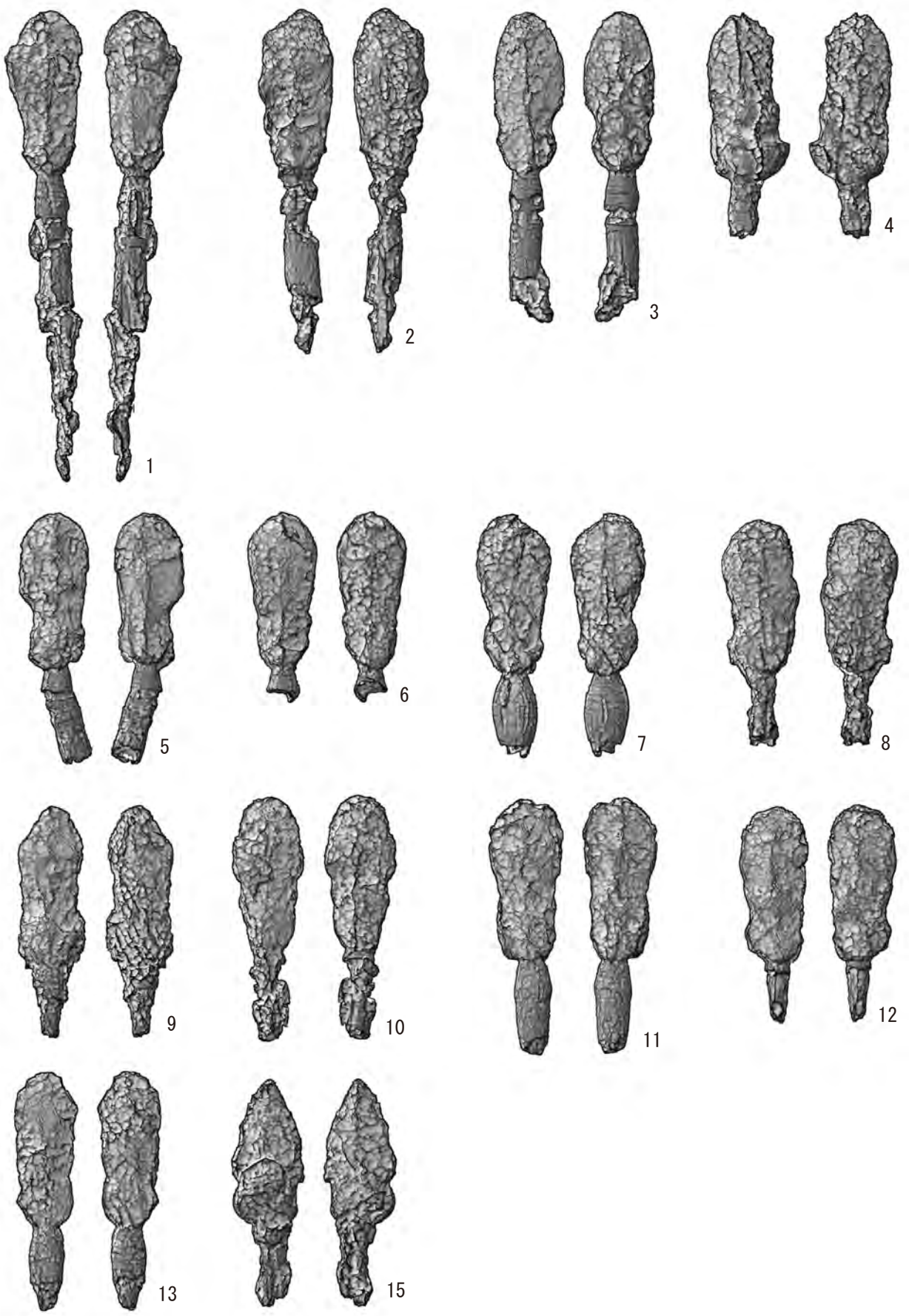
第６表　鉄鏃属性観察表（３）

	型　式	全　長	鏃身部					根挟み							備　考
			刃部長	刃部幅	茎部長	茎部幅	茎部厚	根挟み 全長	根挟み 長	根挟み 幅	根挟み 厚	茎部長	茎部幅	茎部厚	
33	長三角式	9.5	4.4	[2.1]	0.3	1.2	0.7	7.4	3.1	0.85	[1.2]	4.3	0.5	0.55	鏃身に鉄製の根挟みを鍛接

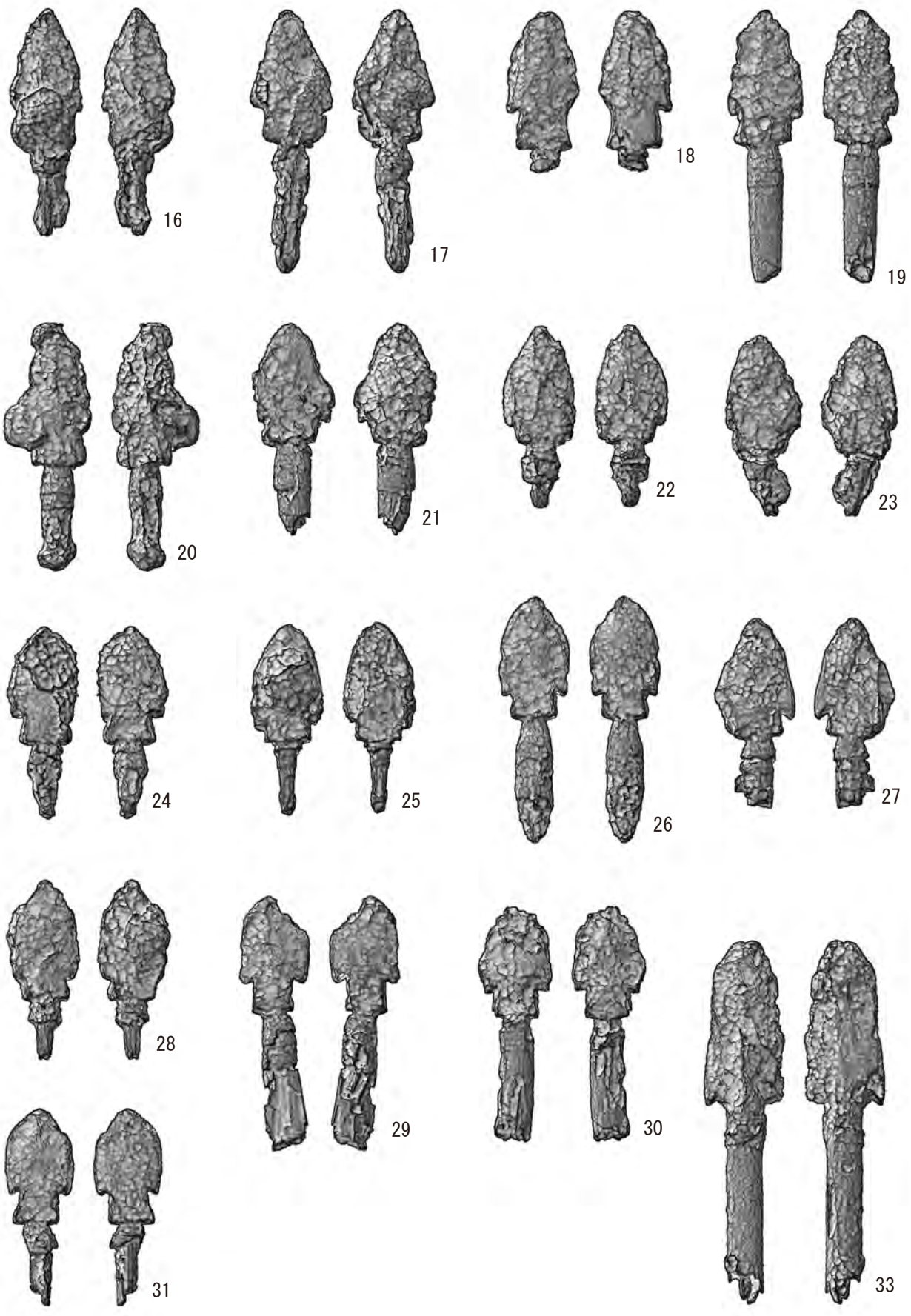
＊単位はcm　　＊カッコは残存値



第 36 図　槍・鉾の３次元レーザースキャナーによる画像（ＰＥＡＫＩＴ／１・２＝1/２　３＝2/３）



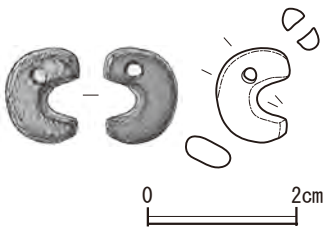
第 37 図　鉄鏃の３次元レーザースキャナーによる画像（１）（ＰＥＡＫＩＴ／2/３）



第 38 図　鉄鏃の３次元レーザースキャナーによる画像（２）（ＰＥＡＫＩＴ／2/ 3）

㎝である。

鉄製の本体は、木葉形の刃部と直線的な軸部からなる。刃部はスプーン状に湾曲し、その横断面形は三日月形を呈する。軸部はほぼ一定の幅であるが、基部付近でごくわずかに湾曲している。



第 39 図　勾玉実測図

軸部に遺存する木柄は、長さ 9.4㎝、幅 1.3㎝、厚さ 0.8㎝を測る。刃部側の表面を半分近く失っているが、それ以外の部分では木柄の構造を明瞭に観察することができる。そのつくりを詳しくみると、断面カマボコ形の木柄は、平坦面側に断面凹字形の溝を設けている。その溝に本体の軸部を納めたのち、幅 0.5㎜程の細糸を 1㎜～ 2㎜の間隔で丁寧に巻き付け、最後に漆塗を施して全体を仕上げている。

e．勾玉

棺内ほぼ中央付近の底面近くから勾玉が 1 点出土している。材質は不明であるが、緑黄色がかった風化層が薄く形成されており、ホルンフェルスや珪質頁岩などの堆積岩である可能性が高い。長径 1.25㎝、短径 0.95㎝とごく小形の勾玉で、屈曲部付近の厚さは 3 ㎜となっている。腹と穿孔部に朱と思われる赤色顔料が認められる。表裏の主面に顔料は残されていないが、本来は全体に塗布されていたものが風化等によって失われたものと考えられる。

f．朱

棺内の 2 か所に朱と思われる赤色顔料の面的な広がりが認められた。東側では鏡や槍、西側では鉄鏃よりも下位にあり、墓坑底面に密着するように出土したことから、棺底に塗布ないし散布されたものと考えられる。この顔料の成分の概略については、他の赤色顔料とともに分析し、その結果を本書第Ⅶ章 4 に掲載した。

2．棺外の遺物

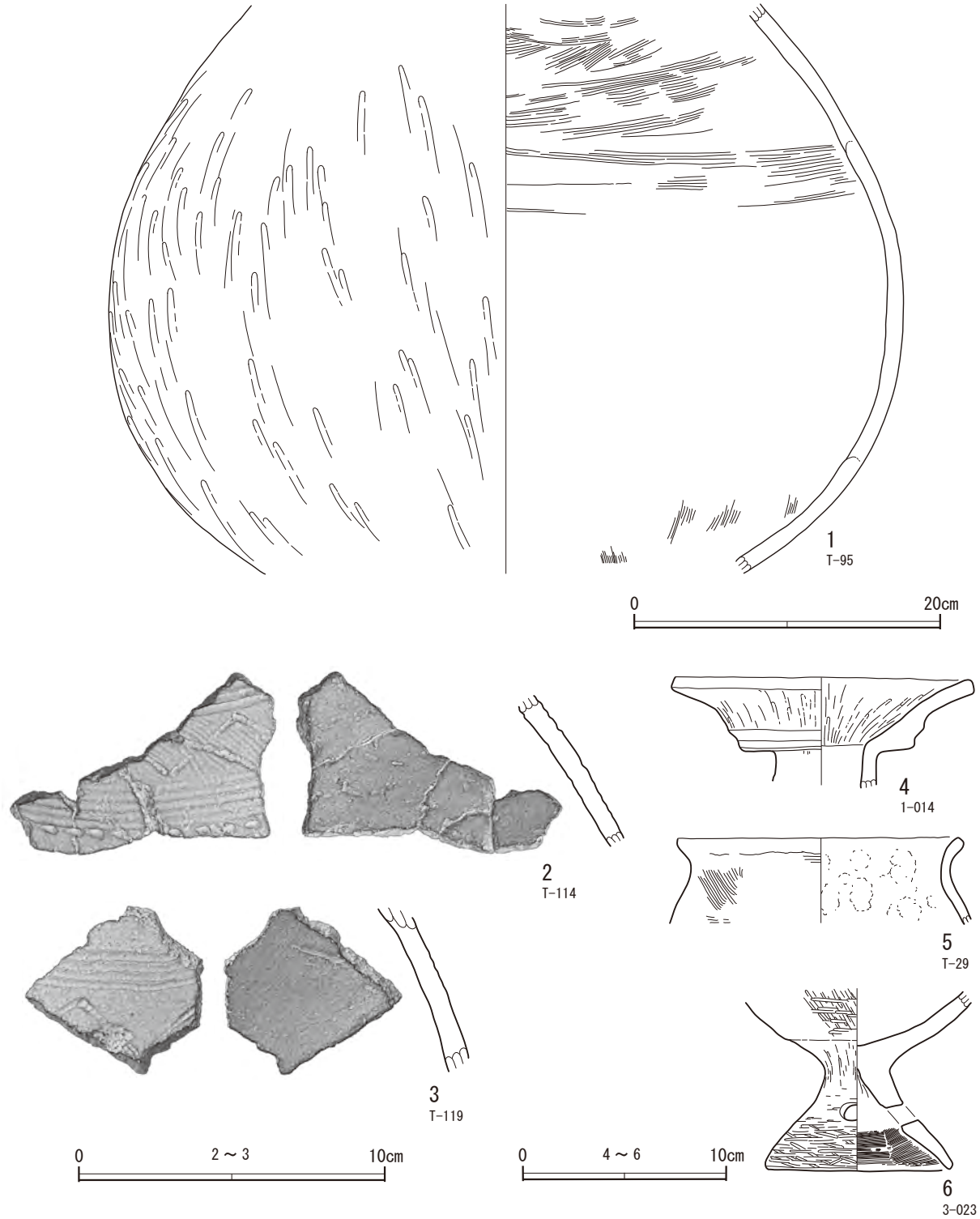
a．棺上出土土器（第 40 図）

第 24 図の垂直分布状況に示したように、完形土器および大形破片は墓坑の確認面付近に集中しており、その一部は埋葬後に棺上に供献されたと考えられる。

第 40 図 1 は当地方に主体的に分布する大廓式壺の胴部である。胴部の 2/5 程度が残存するが、大部分は 1 か所に集中して分布し、破片相互の位置関係も保たれていた（ＰＬ .40）。その他の部分はおそらく高尾山神社建設時の削土によって失われたものと思われる。墳丘から大廓式の口縁部破片 1 点（第

第 7 表　棺上出土土器観察表

図版№	実測番号	器種	遺物№	口径 器高 底径	色調	残存部位	形　態　の　特　徴	技　法　の　特　徴	X 座標 Y 座標 Z 座標
第 40 図 1	T95	壺	2769・2779 2780・2781 2785 ～ 2787	― ― ―	7.5YR5/4 にぶい褐色	胴部	大廓式の壺。胴部最大径は中央やや下。	内面上位にハケメ、輪積痕、外面縦ヘラミガキ、摩耗。不透明白色の石片を多量に含み、粗い胎土。	-97225.403 32918.455 20.753
第 40 図 2	T114	壺	2830	― ― ―	7.5YR5/4 にぶい褐色	胴部	いわゆる「パレススタイル壺」	５本の横位の沈線で赤彩波状文を挟む。沈線上部には刺突文、その上位の無文部には赤彩。半透明白色～不透明白色の砂粒を含む。やや硬質。	-97225.664 32919.052 20.784
第 40 図 3	T119	壺	4460	― ― ―	7.5YR5/4 にぶい褐色	胴部	いわゆる「パレススタイル壺」	５本の横位の沈線の下に赤彩波状文を配す。半透明白色～不透明白色の砂粒を含む。やや硬質。	-97225.259 32916.458 20.108
第 40 図 4	T104	壺	862	(14.8) ― ―	7.5YR6/4 にぶい橙	口縁部	二重口縁を有し、外傾して立ち上がる。下部が肥厚し、その部分の外面に断面三角形の隆帯を 2 本貼り付けている。	内面タテミガキ、外面タテミガキ後ヨコナデ、口縁端部ヨコナデ。半透明～透明の白色砂粒を多く含む。器面やや摩耗。	-97211.152 32938.052 15.628
第 40 図 5	T29	甕	4393	(13.8) (4.1) ―	7.5YR5/4 にぶい褐色	口縁部～頸部	口縁部は外反して立ち上がり、口縁端部がやや肥厚する。頸部内面にかすかな稜が認められる。	内外面ハケメ後ヨコナデ、内面指頭圧痕、外面やや磨滅。甕としては砂粒少ない。	-97225.931 32918.400 20.406
第 40 図 6	3-23	高坏	2881	― (9.0) (8.8)	7.5YR5/4 にぶい褐色	坏部～脚部	坏部は外傾して開いた後、非常に弱い稜を持って内湾する。脚部は外傾して開いた後、わずかに内湾する。	坏部内面ヨコナデ、脚部内面ヨコハケ、脚部横ヘラミガキ。外面に赤色塗彩（ベンガラ？）。黒色の角のある砂粒やや多い。	-97225.733 32916.909 20.825



第 40 図　棺上出土土器実測図

41 図 1 ）が出土しているが、第 40 図 1 との関係は不明である。胎土じたいが多孔質で、含まれる砂粒・石片が大きいうえに、器面の摩耗も進み、表面に残存するミガキは散漫なものとなっている。内面上部には横位のハケメが認められるが、より下半の無文部分との境界付近に、接合痕とそれに伴う明瞭な膨らみが認められる。接合痕は胴部下半にもあり、そこから底部にかけては縦位のハケメが施されている。

周溝出土内の一部の供献専用土器とは異なり、ある程度使用されたものが墓坑の覆土上面に献じられたものとみられる。

第 40 図２・３はいわゆる「パレススタイル壺」（本書では「壺Ｈ類」）である。この壺の破片は神社解体後の墳丘頂部に、比較的細かい破片となって散在していた。第 40 図２の割れ口にパンチ痕らしき窪みが認められることから、意図的に破砕されたものと考えられる。これら２点は胎土や施文の特徴から別個体と考えられ、墳丘や周溝から出土したものも含めると、数個体のパレススタイルの壺が存在するものと思われる。

第 40 図２・３ともに押し引きぎみの波状沈線文が横位に展開し、赤色の塗彩が加えられている。第 40 図２は横位の沈線文の下に列点文が加わり、その下部は濃く赤色塗彩されている。径３㎜程度の半透明～不透明白色の砂粒が含まれるが、その量は比較的少ない。

第 40 図４は極端に頸部が細長くなる壺形土器である。この土器は第 40 図１と向き合うようにして墓坑の覆土上部から出土した（ＰＬ .40）。口縁部が下を向いていたが、周辺の出土土器の中にこの個体の胴部と考えられる破片は認められない。内外面に縦位のミガキが認められるが、器面の摩滅がやや進んでいるため、その痕跡は明瞭でない。

第 40 図５は台付甕の口縁部であるが、残存しているのは全周の 1/4 に満たない。この地方の弥生時代末に一般的な甕に比べ、やや砂粒が少なく、器厚が薄い。

第 40 図６は第 40 図４に隣接して出土しているが、破片が離れて分布していたため、調査時には器種までを認識することができなかった。脚部内面のハケは非常に細かく、外面のミガキも細かく緻密に行われている。外面全体に赤彩が施されている。

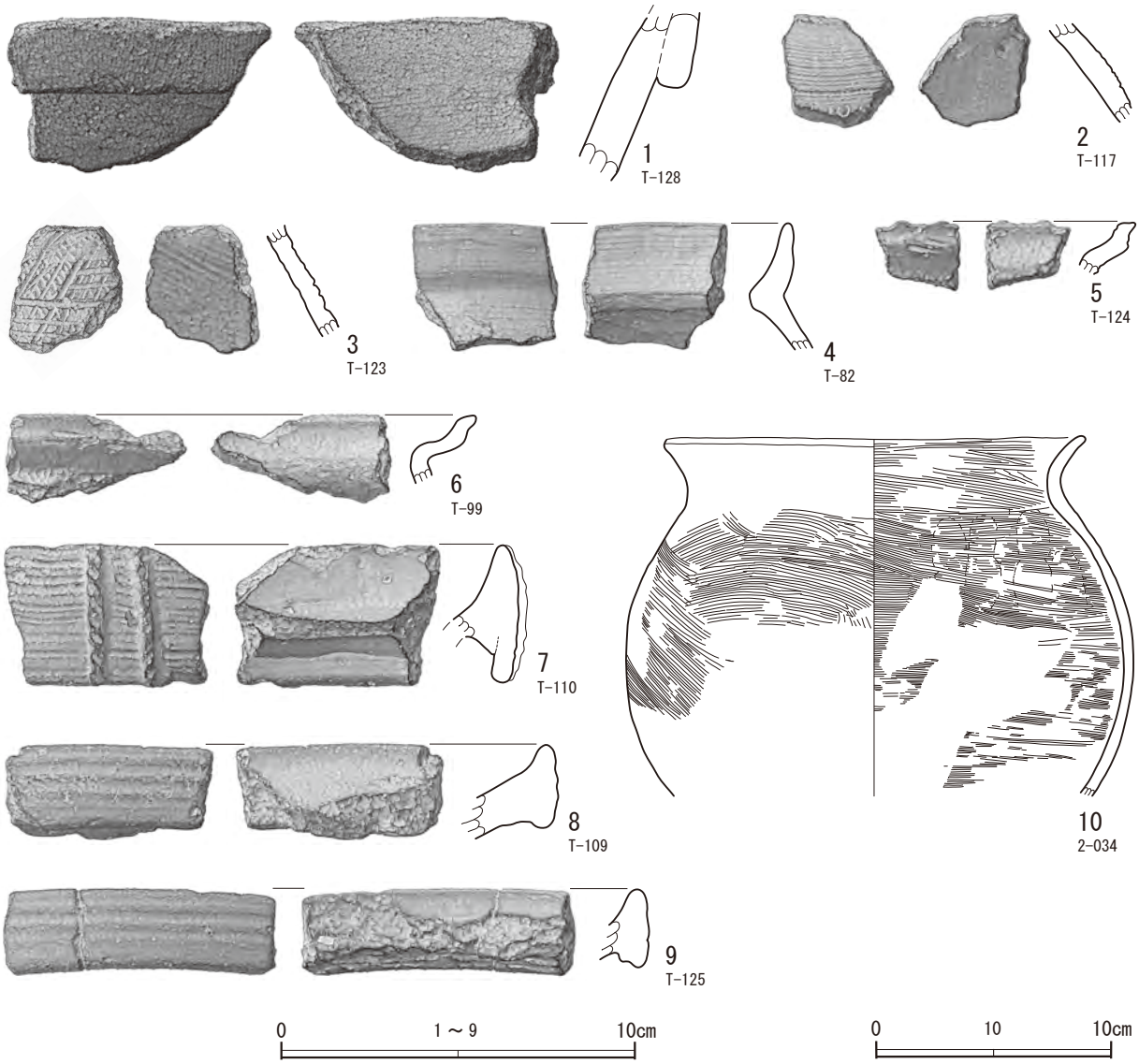
ｂ．棺外および墳丘出土遺物

玉類（第 42 図１）　主体部の南東側から土製の管玉１点が出土している。長径 4.3㎝、短径 1.9㎝で、中央部分で膨大する。両端は平坦かつ平滑に調整されている。

土器（第 41 図）　構築墓坑およびその周辺の墳丘からは土器片が多く出土している（第 20 図・第 21 図）。

第８表　棺外および墳丘出土土器観察表

図版No.	実測番号	器種	遺物No.	口径 器高 底径	色調	残存部位	形態の特徴	技法の特徴	X 座標 Y 座標 Z 座標
第 41 図 1	T128	壺	6617	― ― ―	5YR5/6 明赤褐色	口縁部直下	二重口縁だが、下端部の張り出しはあまり強くない。	内外面ハケメ。不透明白色の石片を多く含む。	-97225.014 32918.781 19.828
第 41 図 2	T117	壺	―	― ― ―	7.5YR5/4 にぶい褐色	胴部	「パレススタイル壺」の胴部上半。	頸部に平行する細線施文後に円形刺突。透明～不透明白色の砂粒を含み、裏面は平滑に調整。	― ― ―
第 41 図 3	T123	甕	5157	― ― ―	10YR6/2 灰黄褐色	胴部	「S 字甕」の胴部上半。	縦位→斜位→横位の細線。器表は灰黄褐色だが、内部は黒褐色のサンドイッチ状の構造。透明～半透明の砂粒、黒雲母。	-97230.259 32918.963 20.082
第 41 図 4	T82	甕	4696	― ― ―	7.5YR4/2 灰褐色	口縁部	受け口状の口縁部。頸部で強く屈曲、頸部内側の稜線は２本。	内外面ヨコナデ 外面煤付着	-97229.274 32916.906 20.574
第 41 図 5	T124	甕	―	― ― ―	7.5YR5/2 灰褐色	口縁部	「S 字甕」の口縁部。	隆線上に楔形の刺突。透明～透明の白色砂粒と黒雲母を含む。41-3 と同様のサンドイッチ状構造。	― ― ―
第 41 図 6	T99	甕	5170	― ― ―	10YR5/2 灰黄褐色	口縁部	「S 字甕」の口縁部。41-5 と同一個体か？	隆線上に楔形の刺突。透明～半透明の白色砂粒と黒雲母を含む。41-3 と同様のサンドイッチ状構造。	-97230.726 32917.692 20.489
第 41 図 7	T110	壺	6612	― ― ―	5YR5/4 にぶい赤褐色	口縁部	有段口縁を有し、やや内湾して立ち上がる。外面に横位平行細沈線あり。沈線の上に刺突文を施した隆帯を２本貼り付ける。	横位細線後に縦位隆帯の貼り付け。さらに刻み。裏面は横位のヘラミガキで調整。透明～不透明の白色砂粒。	-97227.47 32917.848 19.845
第 41 図 8	T109	壺	―	― ― ―	7.5YR5/4 にぶい褐色	口縁部	「パレススタイル壺」の口縁部。大きなオーバーハング。	横位細線後に縦位隆帯の貼り付け。さらに刻み。裏面はヘラミガキで透明～不透明の白色砂粒。	-97230.564 32922.654 20.422
第 41 図 9	T125	壺	2715	― ― ―	7.5YR5/4 にぶい褐色	口縁部	「パレススタイル壺」の口縁部。	外面沈線内塗彩。内面は横位のナデで調整。	-97230.564 32922.654 20.422
第 41 図 10	2-34	台付甕	3376・3379 3384・3387 3850	17.7 (14.9) ―	7.5YR6/4 にぶい橙色	口縁部～胴部下半	ほぼ球形の胴部。頸部でやや厚くつくられる。	口縁部外面ヨコナデ。胴部外面と内面ハケメ。	-97247.784 32927.944 14.753



第 41 図　棺外および墳丘出土土器実測図

墓坑の範囲外から出土した土器は、主体部を探索するために墳丘を削平する作業中に出土したものである。したがって、墳丘における土器の垂直分布の下限を把握できたわけではない。この範囲では異系統の土器が比較的多いことが注目される。

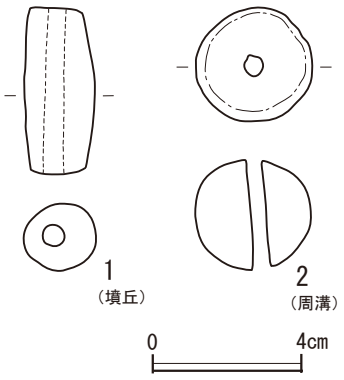
第 41 図 1 は大廓式土器の口縁部である。外面に縦位、内面に横位の浅いハケメが認められる。口縁部下端の複合部分の外へ向けた張り出しは比較的少なく、端部は丸みを帯びている。

第 41 図 2、第 41 図 7 ～ 9 はいわゆる「パレススタイル壺」である。第 41 図 8 と 9 は施文の特徴と胎土が近似しており、同一個体の可能性が高いが、他はそれぞれ別個体と考えられ、この範囲では合計 3 個体のパレススタイル壺が存在したことになる。第 41 図 2 は頸部に平行して細かく鋭い沈線が同心円状に刻まれている。胎土もきめが細かく裏面の調整も平滑である。第 41 図 7 は二重口縁下端のオーバーハングが非常に大きく、口縁部と頸部の接合部分には下方から粘土が補われ、さらにナデによる調整が行われている。横位の細線はやや蛇行するが、施文の順序は細線→隆帯→隆帯上の刻みである。裏面の上半はヘラミガキが緻密になされ、滑沢を帯びている。第 41 図 8 ・ 9 の口縁下端の屈曲は比較的弱く、そのまま頸部へと移行する。沈線内に赤彩が加えられている。

第 41 図 5 ・ 6 は S 字甕の口縁部、第 41 図 3 は S 字甕の胴部上半である。 5 と 6 は口縁直下に加え

られた刺突がよく類似しており、さらに３を加えた３点は、ともに器面が灰褐色～灰黄褐色で内側が黒褐色となり、含まれる砂粒も良く似ていることから同一個体と考えられる。

第 41 図４は受け口状の口縁を特徴とする甕ないし鉢である。口縁部内外面に強いヨコナデが加えられ、胴部内面は横位のケズリが加えられている。第 41 図 10 は胴部がほぼ球形となる台付甕である。静岡東部の弥生時代後期末に一般的な甕よりも薄く、胴部での厚さは４㎜となっている。口端に向けてやや薄くつくられ、口縁部外面はヨコナデで調整されている。



第 42 図　玉類実測図

３．周溝および周辺出土の遺物

ａ．玉類（第 42 図 2）

後方部東側の周溝覆土より出土し、底面から 30㎝ほど浮いた位置にあった。土製の丸玉であるが、穿孔方向に 2.9㎝を測り、径は 3.0㎝とわずかに偏平な形状となる。器面は比較的平滑であり、肉眼では砂粒はほとんど観察できない。

ｂ．土器（第 43 図～第 60 図５）

周溝およびその周辺から、この時期の古墳としては大量の土器が出土している。土器の年代は、大廓式の編年観に従えばⅠ式からⅣ式にわたり、さらに東海（西部）系・山陰系などの搬入的土器群が含まれている。また小型の壺や小型鉢が大量に出土していることも特徴の一つで、これらはこの古墳祭祀に際して作られた専用の器種と考えられる。

またこれらの土器群の観察・分類には渡井英誉氏の全面的な協力とご教授があった。ここでは第Ⅵ章２節に示された渡井編年に準じて土器の分類と観察を行う。

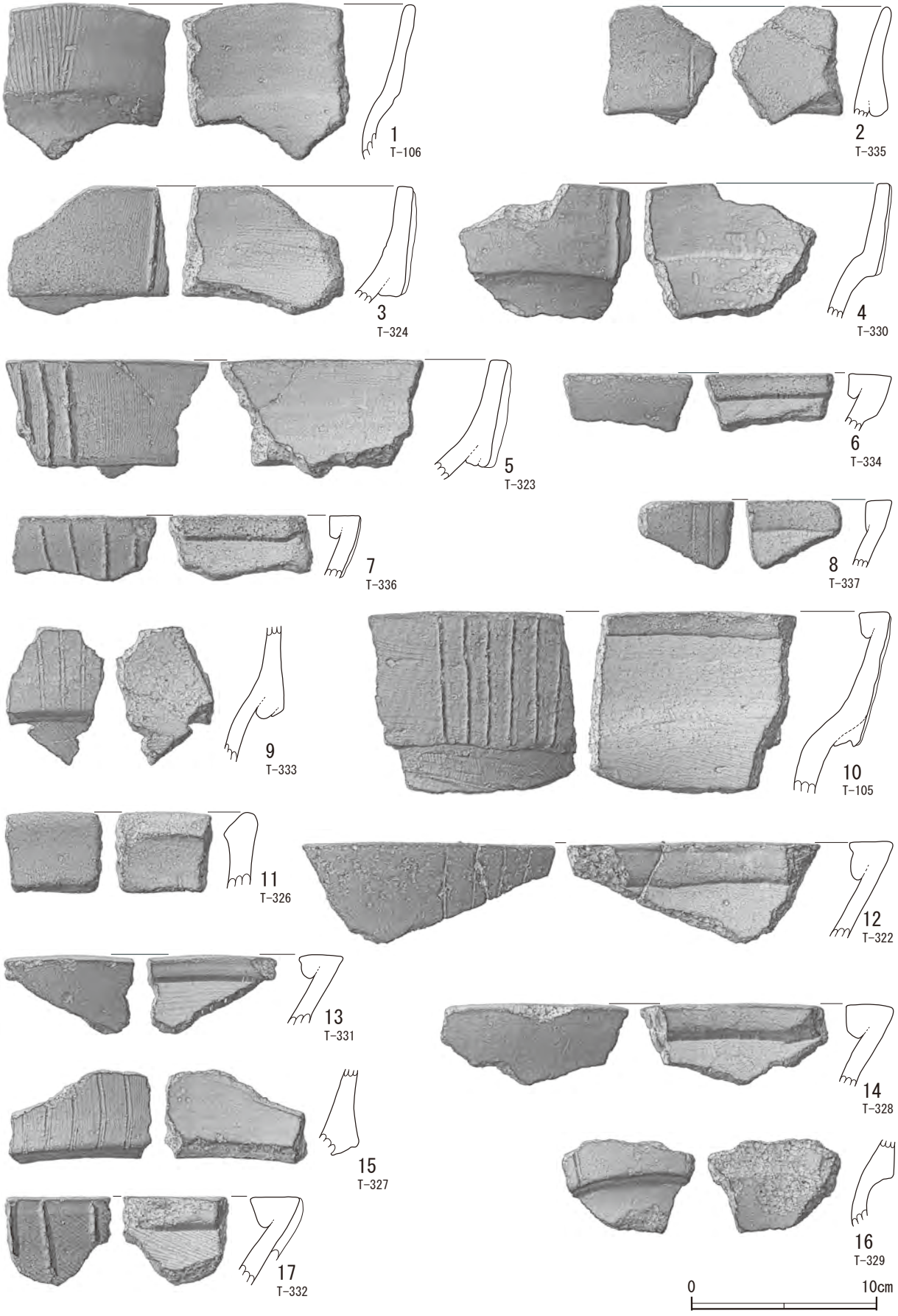
壺Ａ類　（第 43 図１～第 43 図５）　複合口縁壺のうち、口端部内側に鉤状の肥厚帯を形成しないもの。静岡東部周辺において弥生時代後期に出現する複合口縁壺の系譜上にあり、一部（１・２）はその胎土も近似している。第 43 図１・２は口縁部下端に稜線を形成したのちに湾曲しながら曲線的に頸部へ移行する。これに対して第43図３～５は口縁部下端の粘土の重複が大きく、ステップ状に成形されている。

第 43 図１は口縁部直下の屈曲が弱く、稜線の形成もやや曖昧となっている。口縁部は縦位のヘラミガキ、頸部には横位の弱いナデが加えられている。第 43 図２は口縁部下端の稜線がやや強く表現されている。口縁部直下には強い横位のナデが認められる。

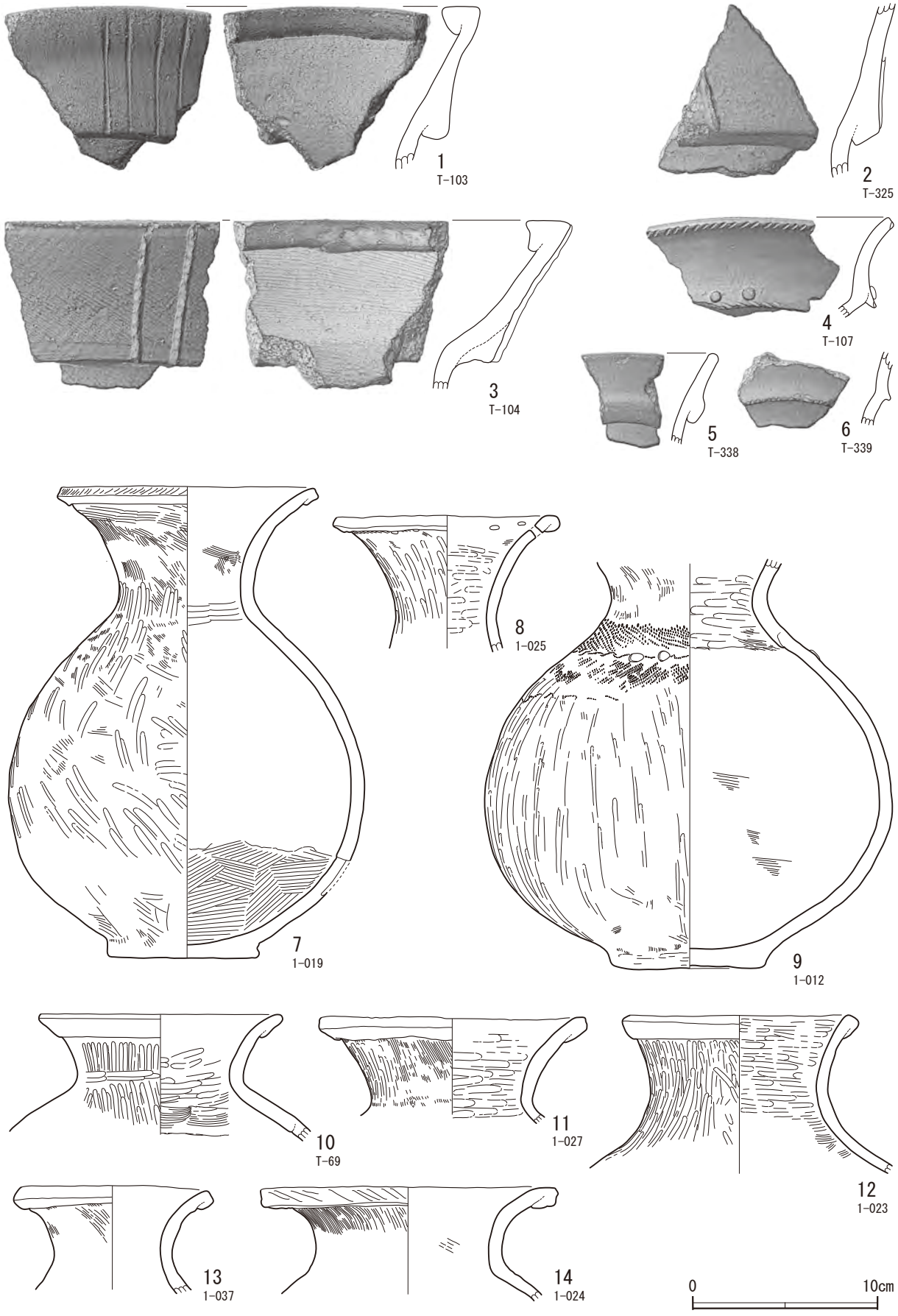
第 43 図３～５は１・２とは異なり、口縁部外面を整った縦位のハケで調整している。また口縁部下端の粘土帯の重複部分には横位のナデが加えられるものの、接合の痕跡は残されたままとなっている。口径も１・２よりも大きく、壺Ｂに近い大形の壺である。

壺Ｂ類（第 43 図６～第 44 図３）　複合口縁壺のうち、口端部内側に鉤状の肥厚帯を形成するもので、大廓式の典型的な壺である。口端部が失われているものでも、この形態となる可能性が高いものは、ここで取り扱った。壺Ａの第 43 図３～５よりもさらに口縁部の二重部分が長く、土器じたいも大形になる傾向が認められる。

口縁部の複合部分の成形と調整には、多少の手法の違いが認められる。壺Ａの第 43 図２は下端部分をハケメないしナデで調整しているが、第 43 図 10・第 44 図３は垂下した下端がそのまま残されている。これに対して第 43 図３は、この口縁部外面の垂下した部分が横ナデによって調整されている。第 44 図１・２では口縁部下端が整然と面取りされて横ナデが加えられ、明瞭な稜線が形成されている。第 43 図９は口縁部下端に下方から粘土帯を付加し、その下端をナデによって丸く調整した後に、さら



第 43 図　周溝および周辺出土土器（1）



第 44 図　周溝および周辺出土土器（2）

に口縁部外面となる粘土帯を付加している。

頸部にもハケメが加えられるものが多いが、確認できるものすべてが複合部の下位に入り込んでおり、頸部器表の調整後に口縁の複合部が付加されたものと考えられる。

壺Ａ類の第 43 図３～５では、口縁部外面の調整は細かく整った縦位のハケメであったが、本類で見られる調整は、斜位のものも多く（第 43 図 13・16・17・第 44 図３）、横位のものもある（第 43 図 10）。なお第 43 図６・８・11・15、第 44 図１は縦位のハケメが加えられているが、その他の調整については摩耗が進みよく観察できない。

本書の「渡井編年」では、二重口縁部の外反と複合部下端の厚さが編年の重要な基準となっている。ここでもそうした視点で図版を配列しているが、スペースの関係上、多少前後した順序になっている部分がある。

壺Ｃ類（第 44 図４～第 44 図６）　複合口縁壺の中で「二重口縁壺」とされているものを本類とする。頸部が直立して立ち上がり、口縁部が強く外反しながら広がるもの。壺Ａ類・壺Ｂ類に比べて小形であり、器厚もかなり薄い。

第 44 図４は口縁部下端に粘土帯が追加され、先端はかなり細くつくられている。硬質な焼成で、色調・胎土とも在地の弥生時代後期末には類例がなく、搬入された可能性が高い。内面の一部には横位のヘラミガキが加えられている。第 44 図６は内外面にていねいな縦位のヘラミガキが加えられている。口縁部下端には細かい刻みが認められる。

壺Ｄ類（第 40 図４）　二重口縁壺の中で直立する頸部に大きく外反する口縁部が付されるもの。棺上出土の１点のみが本類に該当する。

壺Ｅ類（第 44 図７～第 44 図 13・第 45 図１）　口縁端部を折り返す「折り返し口縁壺」の中で、折り返し部の断面があまり肥厚せず長方形になるもの。本書「渡井編年」では、長頸から短頸へ、長胴から球胴へという変化が指摘されており、最終段階となる段階３では、胴部と頸部の接合部分に緩やかながら稜が形成されるという。ここでもそうした視点に基づいて図版を配列した。

本類では折り返し口縁と頸部の隙間にはハケメが残されていることが多い（第 44 図８など）。また第 44 図７は胴部下半と胴部上半が接合され、上半側から引き延ばされた薄い粘土が剥落しているのが認められる。剥落した部分には明瞭なハケメが加えられており、本類はハケメによる調整の後にミガキによって器面が整えられたと考えられる。

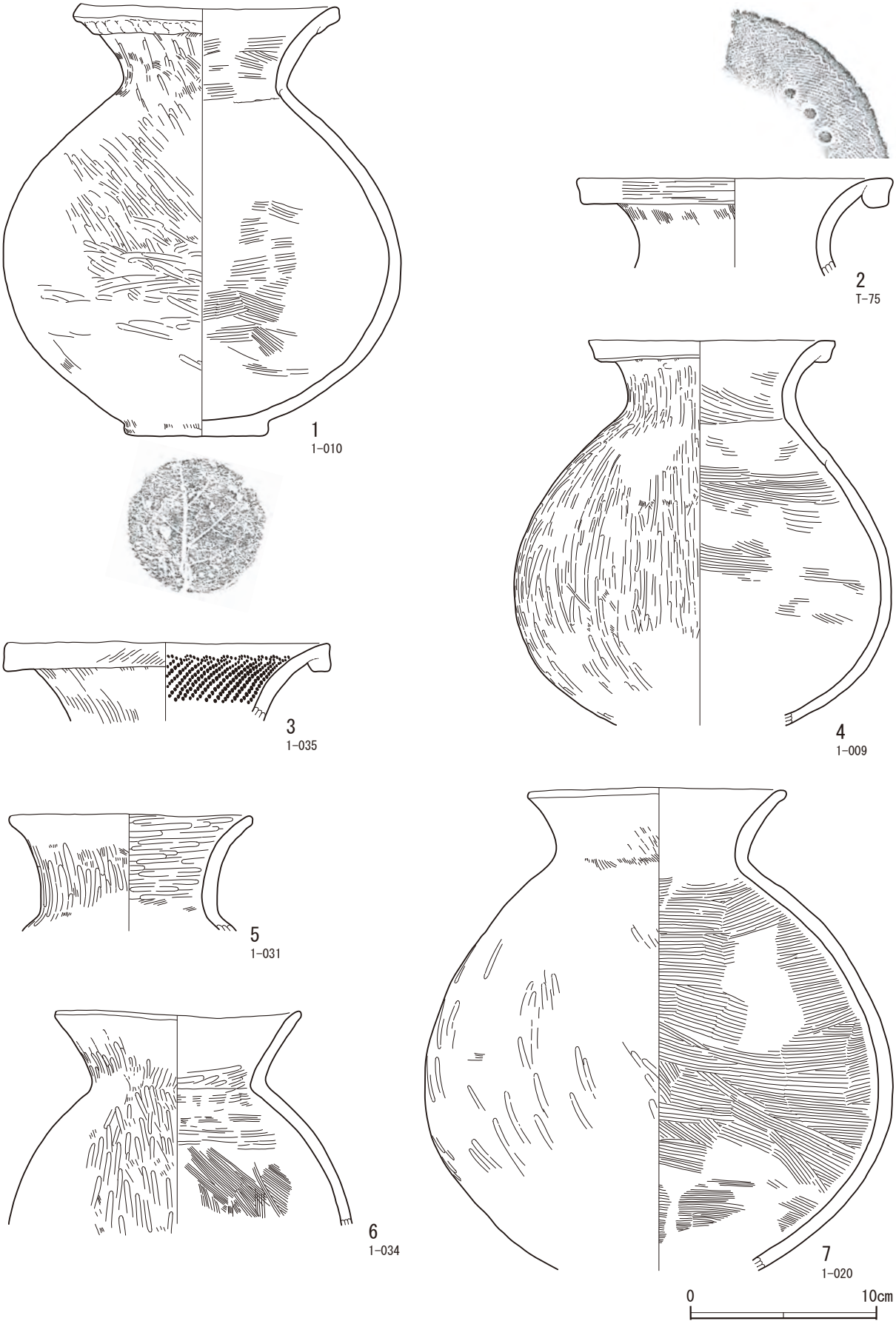
第 44 図８は本類の中で最も頸部が細くなり口縁部に向かって急激に広がっており、弥生土器との区別が難しい例である。折り返し口縁直下に焼成前の穿孔が加えられている。第 44 図７のミガキはやや粗く、口縁部上半を中心として、先行する工程のハケメが残されている。第 44 図９は RL と LR の縄が結束され、頸部に羽状縄文が施文されている。さらにその上から円形の浮文が加えられている。

第 44 図 10･11、第 45 図１では頸部が短くつくられ、胴部と頸部の境界に緩い稜が形成されている。この稜を挟んで胴部内面ではハケメによる調整が行われ、あるいはそれがナデによって消されているが、頸部内面には横位のミガキが最終的に加えられている。

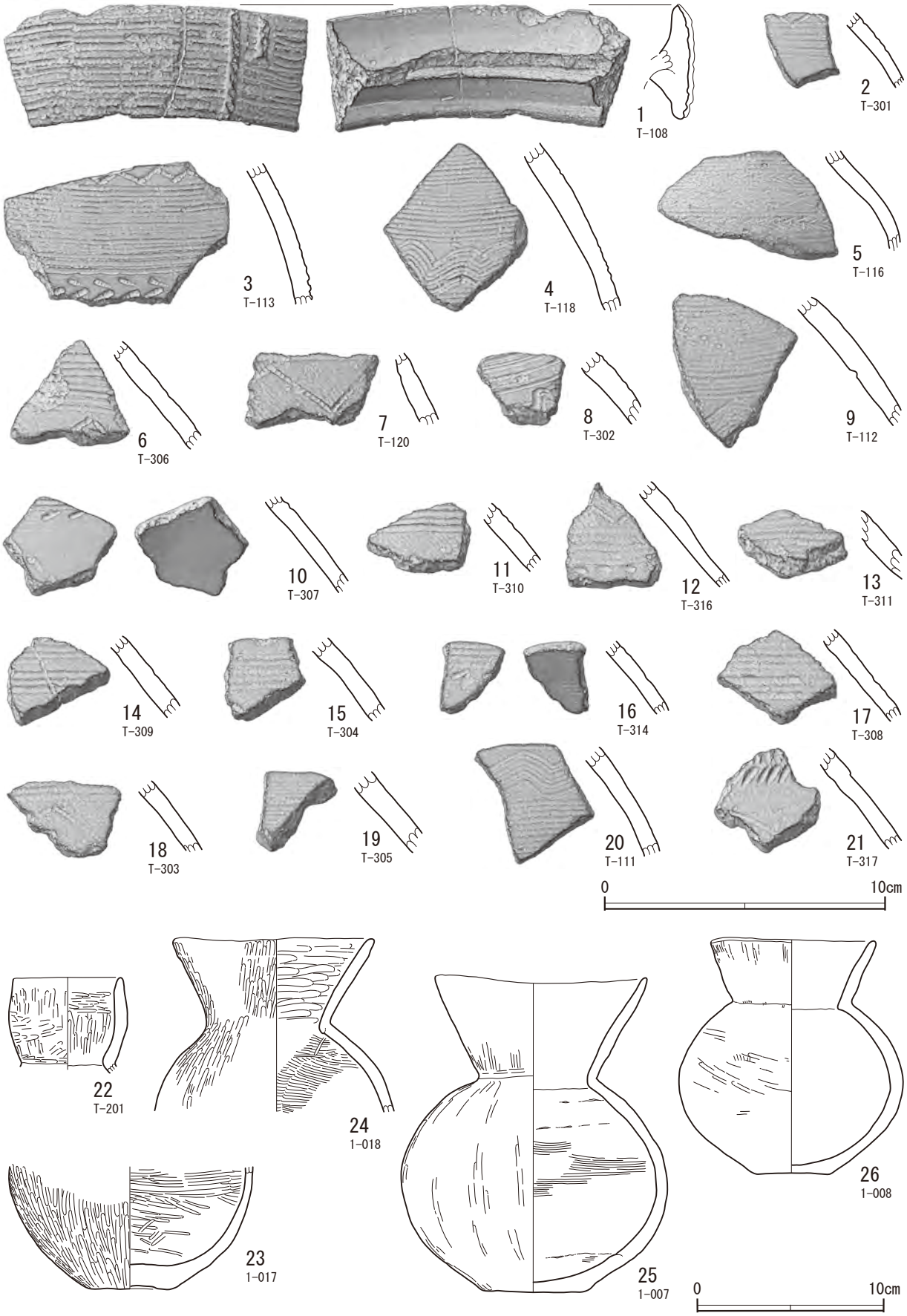
壺Ｆ類（第 44 図 14・第 45 図２～第 45 図４）　壺Ｅ類と同様に折り返し口縁を形成するが、断面四角形の厚みのある折り返し部が付けられ、明瞭な面取りがなされるもの。面取り部分は指頭やヘラによる調整が加わり、わずかに窪むものが多い。

本書「渡井編年」では段階３に登場し、段階４まで継続するが、壺Ｅ類で認められた球胴化、あるいは短頸化、胴部と頸部の境界における明瞭な屈曲部の出現など、壺Ｅ類と変化の方向性を共有すると考えられている。

いっぽう第 44 図 14、第 45 図２・３は厚手のつくりであり、胎土に多量の不透明白色の砂粒あるい



第 45 図　周溝および周辺出土土器（3）



第 46 図　周溝および周辺出土土器（4）

は石片を含むなど、壺Ｂ類（大廓式）に共通する部分も認められる。また壺Ｅ類の外面はハケメの後にヘラミガキが加えられているものが多かったが、本類で壺Ｂ類（大廓式）に共通する胎土をもつもの（第44図14・第45図２・３）は、ハケメのみでヘラミガキが加えられていない。

壺Ｇ類（第45図５～７）　小形のものを除いた一般的な単純口縁の壺を本類とする。弥生時代後期の単純口縁壺の系譜を受け継ぐものと思われるが、「渡井編年」では段階２から登場し、出土量もあまり多くない。口縁部は大きく外反するもの（第45図５）から、直線的に開くもの（第45図６）まで変化が大きい。

壺Ｈ類（第46図１～21）　いわゆる「パレススタイル壺」を本類とする。口端に対してＴ字状に粘土を付加し、張り出した幅広の口縁部を形成する。口縁部には幅２㎜程度の細線を平行に引き、この上から紐状の貼り付けが加えられるものがある。古墳の周溝周辺で図示できた口縁部は１点にとどまるが、墳丘から出土した土器の中に本類が３点含まれている（第41図７～９）。特に第41図７は第46図１と同一個体である可能性が高い。

胴部肩付近には頸部に対して同心円状に細線を引くものが多いが、平行する波状文（第46図４・９・20）や「ハ」の字状の刺突文（第46図３）、山形状の刺突文（第46図３・５・６・７・12・18）などが施されている。山形状の刺突文のうち第46図６・７・18の沈線内には、赤彩が加えられている。なお赤彩は第40図２・３、第41図８・９の沈線内にも認められる。また第40図２と第46図６・８は、文様・胎土がよく類似していることから、同一個体である可能性が高い。

これらの土器の胎土は緻密で、径２㎜程度までの比較的細かい透明～半透明の砂粒が含まれている。当地域の弥生時代後期後葉には類例を認めることができず、すべてが搬入品である可能性が高い。

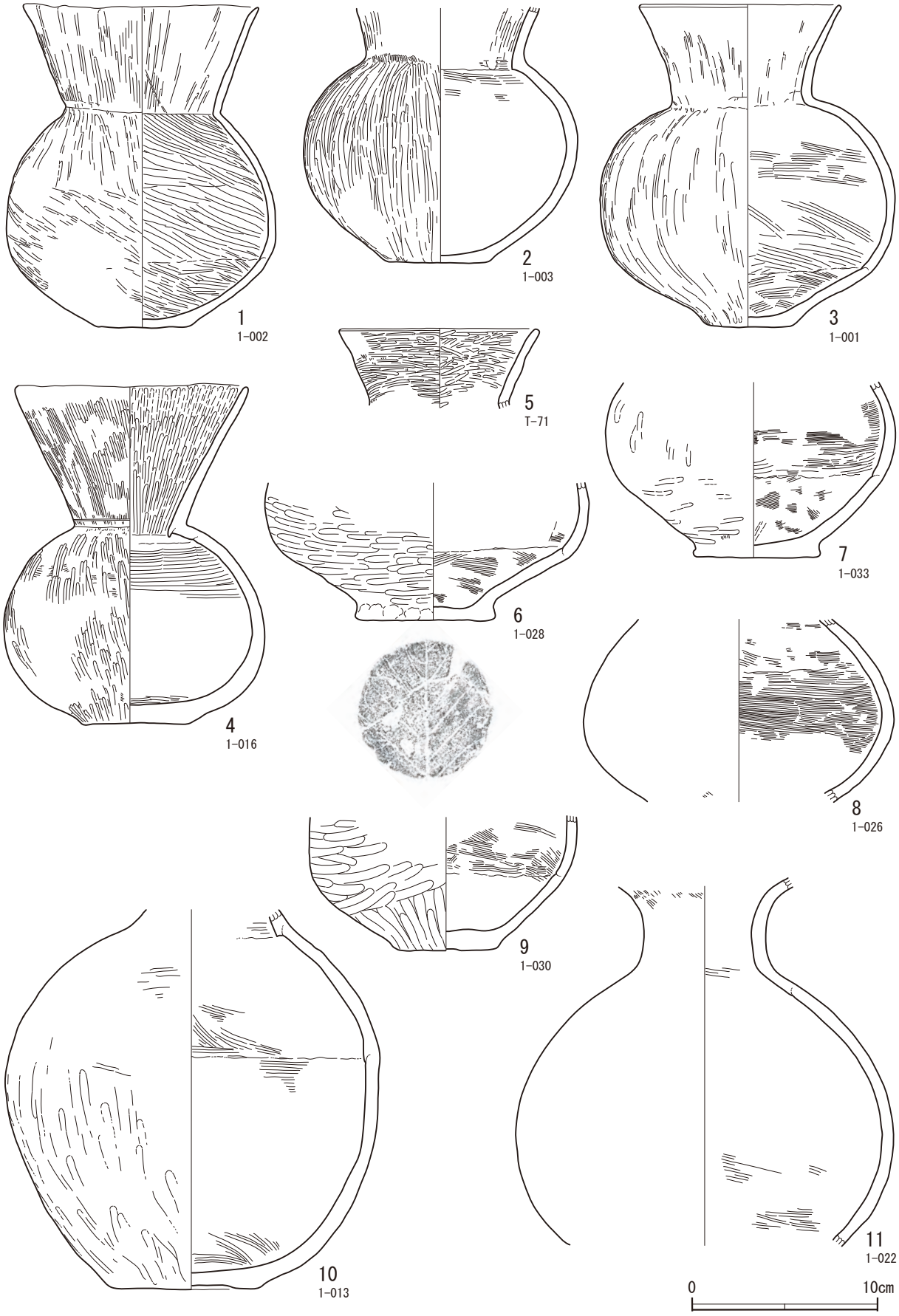
壺Ｉ類（第46図22）　いわゆる「ヒサゴ壺」とされているものを本類とする。単純口縁の壺で、口縁部が内湾して立ち上がり、口縁部端の内面に面取りが認められる。

図示できたのは第46図22の１点のみである。口縁部の一部が残存する。口縁部外面の上方と下方は縦位にヘラミガキ、中位は横位のヘラミガキが加えられている。内面は全体に縦位のヘラミガキを加えた後、口端近くは横位のヘラミガキ、さらに口端は強いナデで調整している。

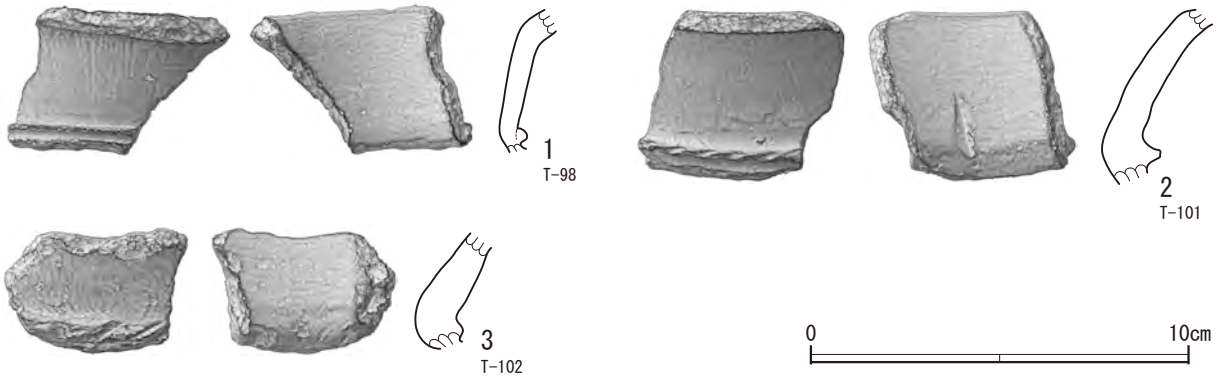
壺Ｊ類（第46図23～第47図５）　比較的小形の単純口縁の壺で、胴部に対して口縁部を相対的に大きくつくることによって、この部分を強調するものを本類とした。本書「渡井編年」ではすべて段階４に位置づけられている。ここに提示したのは９点であるが、図示できなかった多くの破片が存在する。頸部から口縁部にかけての形状に微妙な特徴があり、「渡井編年」ではＪ類を５つに区分し、その一部に時間差が存在する可能性を指摘している。

第46図23の底部には環状にわずかな粘土が追加されて高台風になっている。他のＪ類に比べて底部付近の器壁が厚い。第46図24の口縁端部はヘラミガキの前段階に強く横ナデされていると思われ、弱い「Ｓ字」状の口縁となっている。比較的緻密な胎土に入念なヘラミガキが行われているため、器面は滑沢を帯びている。第46図25の胎土は愛鷹山麓における弥生時代後期後葉土器と近似し、外面の摩耗が激しい。内面には輪積み痕が数段にわたって残されている。第46図26は胴部の高さに対して口縁部が低いため、頸部のくびれが弱い印象を与えている。

第47図１は平均的な器厚が３㎜で非常に薄くつくられている。底部下半に弱い屈曲があり最大径もこの付近となる。胴部径に対して頸部はあまりくびれない。第47図２の外面は非常に入念でしかも整った縦位のミガキが加えられ、器面は滑沢を帯びている。第47図３は胴部に大きな黒斑が形成され、焼成時の器面の剥落も認められる。底部径が小さくいったん外反しながら胴部へ移行する。胴部下半と胴肩部の２か所で屈曲している。口縁部も外反しながら立ち上がっている。第47図４は頸部のくびれが強く、内面側に胴部と頸部の接合痕を強く残している。胴部に対して口縁部が高く、頸部のくびれが強



第 47 図　周溝および周辺出土土器（5）



第 48 図　周溝および周辺出土土器（6）

い印象を与えている。口縁部には縦位のヘラミガキが加わるが、前工程のハケメが深いため、部分的にハケメが残されている。頸部に 1 本の細い沈線が巡る。

第 47 図 5 はこの地域としては希な横位のヘラミガキで調整されている。その方向はやや不揃いであり、表裏とも部分的に前工程のハケメが残されている。

壺 K 類（第 47 図 6 ～第 48 図 3） 口縁部を欠く、あるいは破片が小さいため上記の壺 A 類～壺 J 類の分類を適用できないものを一括する。本書「渡井編年」には設定されていない分類であるが、便宜的に本類を設けた。

第 46 図 6 は胴部下半で屈曲し、この部分に接合痕が認められるもので、当地域における弥生時代後期から継続する器形である。しかし胎土は緻密かつ硬質な焼成であり、底部の周囲に指頭による調整痕が認められ、下端が外に向かって張り出すなど、それらとは異なる特徴も認められる。第 47 図 9 も胴部下半に屈曲のある壺である。平均的な器厚は約 4 ㎜とかなり薄くつくられている。

第 47 図 8 は壺 J 類の胴部と形状が類似するが、摩耗が激しいため、それらに特徴的な外面のヘラミガキが認められない。第 47 図 10 は口縁部が失われているが、当地方の弥生時代後期～古墳時代前期の土器群に類例を求めることができない資料である。胴部はやや長く最大径は胴部上半にある。またこの部分の内面に接合痕が残されている。

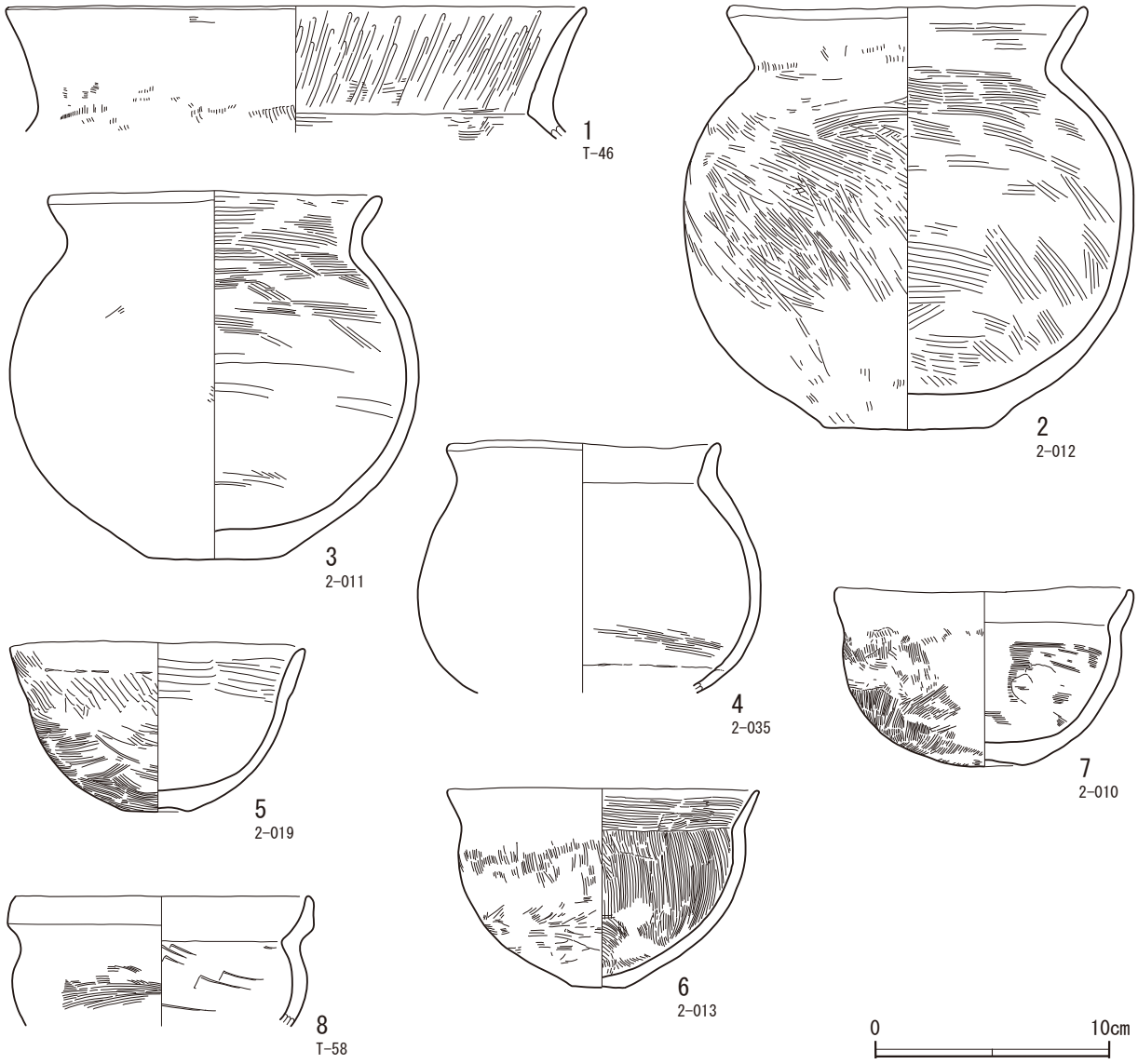
第 47 図 11 はほぼ球形の胴部で、頸部は直線的に成形され、胴部との境界と口縁部との境界で強く屈曲する。こうした器形は壺 B 類（大廓式）あるいは壺 F 類にみられる特徴であるが、胴部最大径は 20.5㎝前後と比較的小形であり、壺 F 類である可能性が高い。胎土には不透明白色の砂粒が多く含まれ、この点でも壺 B 類・壺 F 類に類似する。

第 48 図 1 ～ 3 は頸部に隆帯を巡らせ、強く外反する口縁部をもつという共通する特徴がある。頸部の直径は 4 ㎝～ 8 ㎝程度と推定される比較的小形の壺である。

鉢 A 類（第 49 図 1 ～ 4） 口縁部が短く開き、器高に対して口径が相対的に大きいものを、壺や平底甕から分離して「鉢」として扱う。その中で、ほぼ球形の胴部をもち、口縁部が短く外反ぎみに開くものを A 類とした。

第 49 図 1 はこの形式としては大形のもので、頸部までの一部が残存している。頸部内面の稜が明瞭に認められる。外面にはハケメの後に縦位のヘラミガキが加わっていると思われるが、摩耗が激しく明瞭ではない。

第 49 図 2 は第 49 図 3 ・ 4 に比べると胴部肩の湾曲が強く、それだけ頸部の屈曲が強くなっている。本書「渡井編年」ではこの変化を壺類の頸部の変形に同調させて、段階 3 から段階 4 への移行の指標として理解している。また第 49 図 2 は表裏にハケメが加えられているが、第 49 図 3 ・ 4 は外面の摩耗が激しく調整技法は不明である。



第 49 図　周溝および周辺出土土器（7）

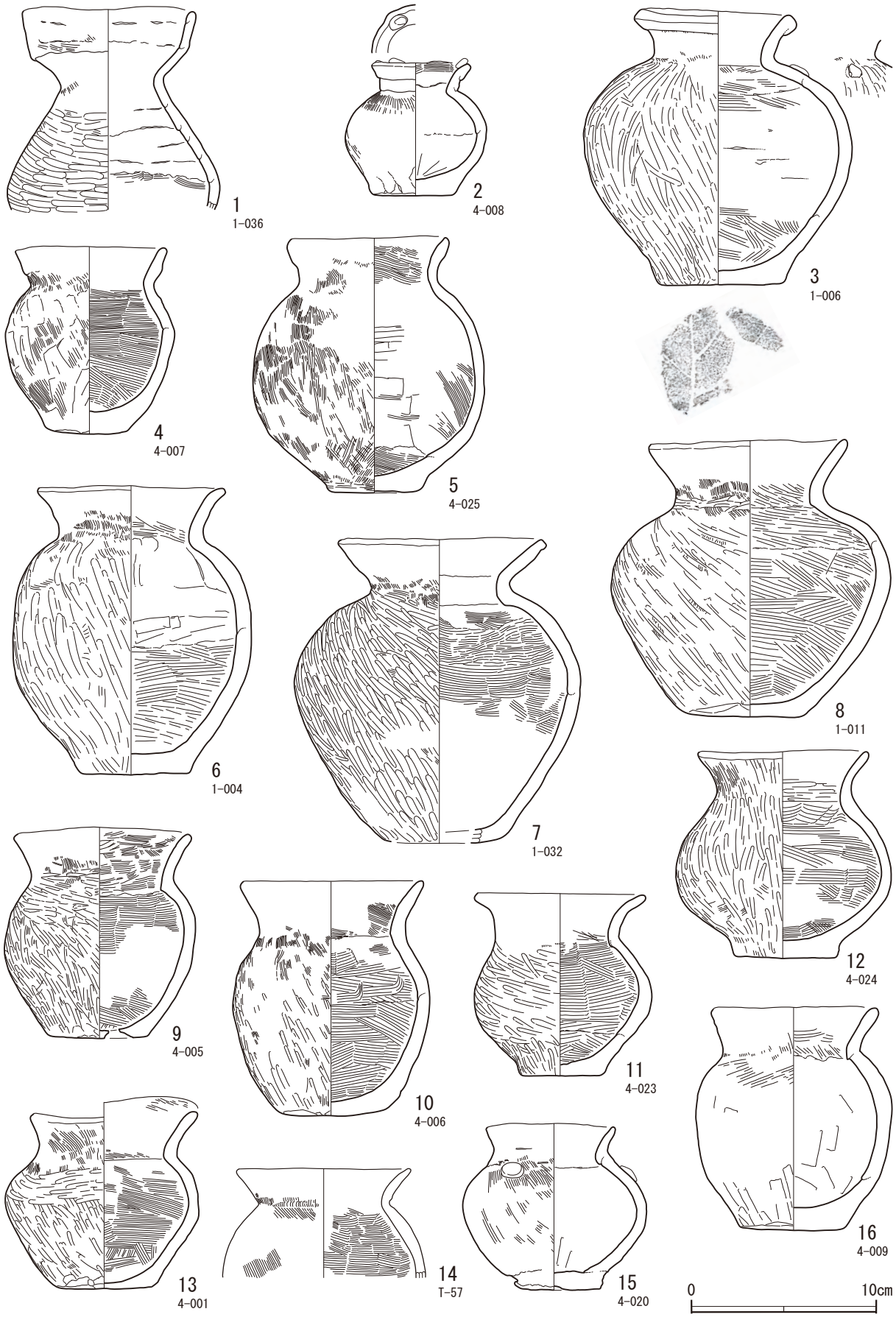
鉢 B 類（第 49 図 5 ～ 7）　径の小さい底部から立ち上がり、内湾しながら径の大きな頸部に至り、外傾する狭い口縁部に移行するもの。底部は上げ底風に整形されている。

第 49 図 5 は頸部のくびれが弱く、口縁部と胴部の境界が不明瞭である。底部にもいったんハケメが及ぶが、ナデによって消されている。第 49 図 6 の口縁部外面は強い横ナデによる筋状の軌跡が認められる。底部周辺はヘラケズリされ、底面はさらにヘラミガキが加わる。第 49 図 7 の底部もやや窪むが、底面にはハケメがそのまま残されている。頸部は内側の屈曲が明瞭で稜線を形成するが、外面はやや曖昧となっている。

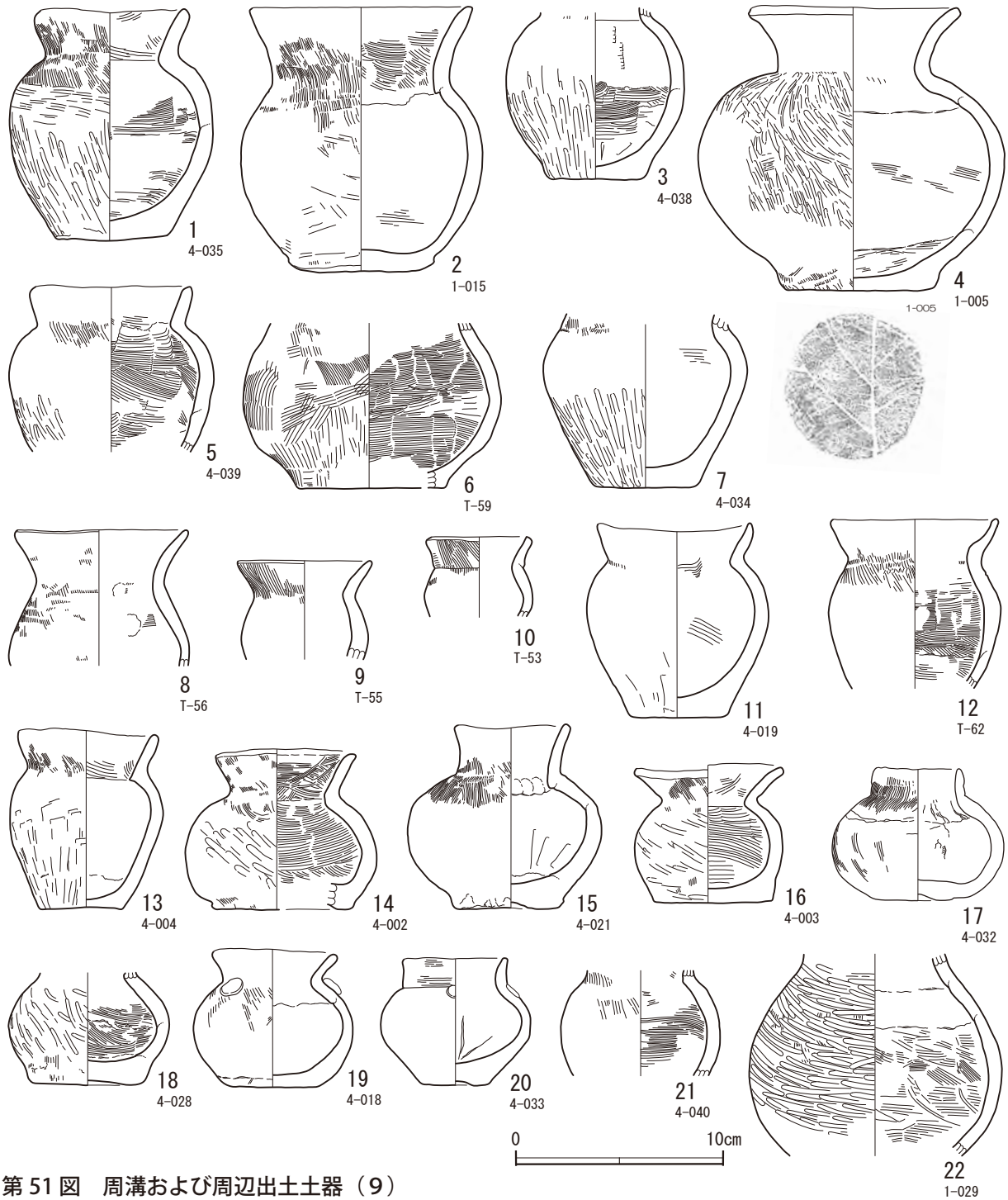
鉢 C 類（第 49 図 8）　頸部の屈曲が比較的強く、有段の口縁が付けられるもの。図示できたものは 1 点である。口縁部に強い横ナデが加えられており、同様な特徴を持つ甕Ｈ類との区分が難しい破片がある。

第 49 図 8 の外面はいったん口縁部までハケメで調整が行われ、その後に頸部から口縁部にかけて強いナデが加わったものと考えられる。胴部内面は大きく砂粒が移動しており、ケズリとして表現した。

小型壺 A 類（第 50 図 1）　小型壺の中で複合部が付けられるものを本類とする。図示した 1 点のみの出土である。



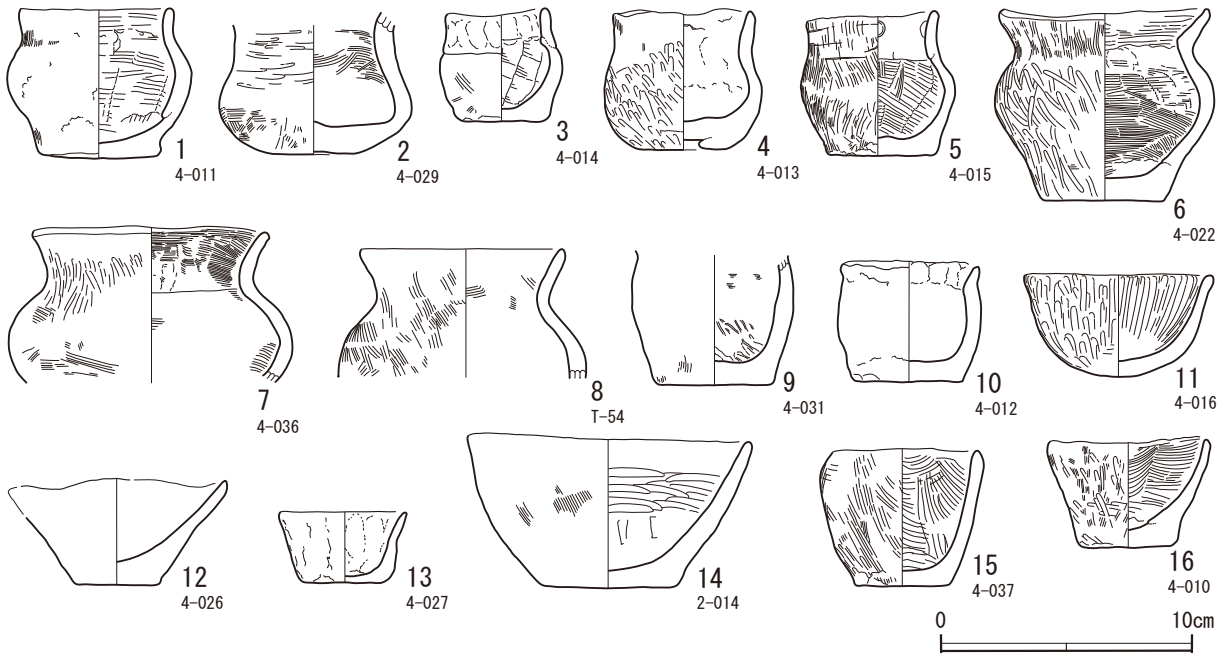
第 50 図　周溝および周辺出土土器（8）



第 51 図　周溝および周辺出土土器（9）

第 50 図 1 は徳利形の器形となるが、下半に稜をもつ無花果形の胴部、垂直に立ち上がる二重口縁という個別の要素は、当地方の弥生時代後期から継続するものである。内面には輪積み痕が明瞭に残されているが、ハケメは上段側から重複する粘土の下に潜っている。粘土を積む工程ごとにハケメが加えられていたものと考えられる。

小型壺Ｂ類（第 50 図２・３） 屈折する頸部から外反しながら広がる短い口縁部へ続き、口端に折り返し部が付されるものを本類とした。続く壺Ｄ類の一部（第 50 図７・８）と口縁部以下の形態は類似する。また本類は胴部最大径付近、あるいはそのやや上に輪積み痕を残すが、第 50 図７・８も同様な重複が認められる。



第 52 図　周溝および周辺出土土器（10）

また第 50 図２のハケメは胴部上半と口縁部内面に限定され、頸部の接合痕はそのまま残されている。第 50 図３は強いヘラミガキが加えられ、器面は滑沢を帯びている。肩部にはヘラミガキ後に円形の浮文が添付され、さらに浮文上にもミガキが加えられている。

小型壺Ｃ類（第 50 図４・５）　短く外反する口縁部の外面中位から上を外反させ、複合部の意匠を示したもの。図示できたのは２点にとどまる。

ともに頸部付近まではハケメが及び、そこから上の複合部には強い横ナデが加わる。第 50 図４の底部はヘラケズリされているために、切り子的な形状となり、器体は正立しない。第 50 図５の底部は輪台状となっている。

小型壺Ｄ類（第 50 図６～第 51 図 22）　口縁が単純口縁の壺を本類とする。この中には口縁部が頸部から外反しながら開くもの（第 50 図６～ 10）と、屈曲する頸部からわずかに内湾しながら口端に至るもの（第 51 図 11 ～ 13）、口縁部がほぼ直立ないしわずかに内傾するもの（第 51 図 17・20 など）が含まれている。また底部をヘラミガキで調整したり、ヘラケズリによって切り子状に成形するものが含まれるのも本類の特徴である。

「小型」と一括されるものの、器高は約 16㎝に達するものから、６㎝程度のものまで存在する。比較的大きいものは斜め方向のヘラミガキが認められる（第 50 図６～ 13）のに対して、小形のものはハケメ（第 51 図５・12・17・19 など）やヘラケズリ（第 51 図 13）が加えられるもの、また胴部には調整痕がほとんど認められないもの（第 51 図 11・12・20）が多い。ヘラミガキが加わるものも、第 50 図６のように、外面はいったんハケメが加えられた後、口縁部上位はナデ、胴部にはヘラミガキが施されている。また頸部の一部にはハケメが残される例も多い。

第 50 図６は胴部ほぼ中央部に接合痕が認められ、内面側のここより下位ではハケメ、上位ではヘラ状工具によると思われるナデ調整が加わる。底部はフラットで底面には複数の籾痕が認められる。第 50 図７の口唇部外面のナデは強く斜めに行われたため、口縁中央部がやや膨大し、その形状が小型壺Ｃ類に類似している。胴部は緻密な斜位のヘラミガキが加えられるが、底部にもヘラミガキが及んでいる。第 50 図８のヘラミガキは第 50 図７よりもやや粗いが、ほぼ同様の密度のヘラミガキが底部にも認められる。第 50 図９も底面にはヘラミガキが認められる。また焼成後に外面側から穿孔が行われて

いる。これに対して第 50 図 13 の底面はヘラケズリされて一部で切り子状となり、正立しない。

第 50 図 15 は底部と頸部付近に輪積み痕が認められるが、内外面とも調整が粗いため、その痕跡が明瞭に観察できる。この土器には径 6 ㎜を上限とする不透明白色の石片が含まれている。第 50 図 16 の頸部にも輪積み痕が残されているが、やはり口縁部側からの調整が粗いため、胴部側に粘土のはみ出しが残されている。

第 51 図 11 ～ 13 は、ともに口縁部が外傾しながらわずかに内湾する。口唇部は横ナデされ薄くつくられる。第 51 図 15・17・20 は細い頸部にほぼ直立した口縁部が付くものである。第 51 図 21 の口縁部も直立する可能性がある。15・17 は細くなった頸部に口縁部を接合するために行われた、指頭による調整が残されている。またこれらはナデ調整によって胴部を中心として加えられたであろうハケメがほとんど残されていない点も共通している。

第 51 図 22 の外面は緻密なヘラミガキが行われ、滑沢を生じている。内面に赤彩が行われているが、外面には及んでいないため、赤色顔料の容器として用いられた可能性が高い。

小型鉢Ａ類１（第 52 図１～５） 口縁部が形成される鉢のうち、ほぼ直立する口縁をもつものを小型鉢Ａ類１とした。

第 52 図１は胴下部と頸部下に輪積み痕とみられる粘土の重複が残されている。胴下半内面側のハケメが胴上部の粘土の下に潜り込んでいることから、成形が一次的に停止するタイミングがあり、その時点でハケメが加えられていると考えられる。第 52 図２には接合の痕跡は認められない。第 52 図３は頸部で接合が行われているが、底部下半でも輪積み痕らしきものが認められる。第 52 図５は頸部に輪積み痕が認められる。このように小型鉢Ａ類１は「小型」ではあるものの、輪積み（接合）やハケメによる調整など、一般的な鉢形土器と共通する手法で製作されている。これに対して第 52 図２と４には輪積み痕が認められない。特に４は器面の凹凸が目立ち、頸部付近の内面には指頭圧痕が残されている。この２点は「手捏ね」によって成形されている可能性が高い。

小型鉢Ａ類２（第 52 図６～８） 口縁部が形成される鉢のうち、口縁部が外傾するものを小型鉢Ａ類２とした。頸部の屈曲が比較的強い第 52 図７は小型壺との区分が難しい。

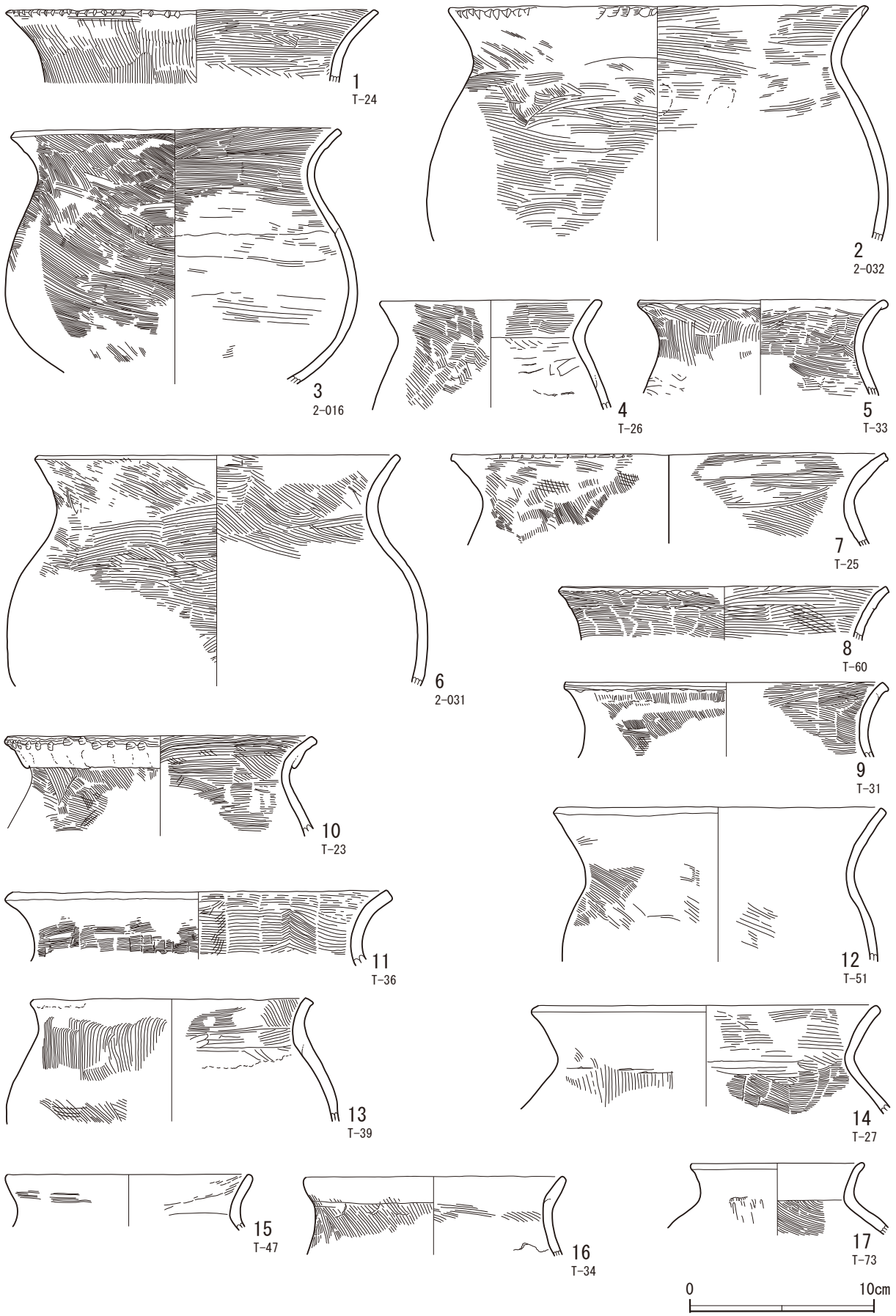
第 52 図６は底部やや上に輪積み痕が認められる。第 52 図７は明瞭でなかったため表示しなかったが、頸部下と屈曲部で接合されていると思われる。したがって本類も、一般の鉢形土器と共通する技法で製作されていると考えられる。

小型鉢Ｂ類（第 52 図 10） 極めて短い口縁部が付くもので、口縁部の内面を面取りする内斜口縁のもの。図示できたのは第 52 図 10 のみであるが、第 52 図９もその可能性がある。第 52 図 10 の口縁内面は指頭によって面取りされ、その圧痕が残されている。胴部内面にも指頭圧痕があり、輪積み痕が認められないことから、手捏ね成形されたと考えられる。

小型鉢Ｃ類（第 52 図 11） 埦状の小型鉢を本類とした。図示できたのは第 52 図 11 のみである。内外面とも縦位のヘラミガキが放射状に加えられているが、摩耗が進んでいるためか、器表は荒れている。わずかに玉縁状の口縁部となる。

小型鉢Ｄ類（第 52 図 12 ～ 14） 皿状～小鉢状の小型鉢を本類とする。平底の底部に直線的な外傾する体部が付く。３点を図示した。

第 52 図 12 は底部内面にフラットな部分をほとんど残さず、そのまま外傾する体部に移行している。ハケメ・ケズリ・ミガキ等の調整は認められず、指頭によると思われる微妙な凹凸のみが残されている。第 52 図 13 も表裏に指頭による調整が明瞭に認められる。第 52 図 14 は体部外面にわずかにハケメを残すが、大部分は磨滅のために観察ができない。内面上半は横位にヘラミガキがされ、口唇付近はさらにナデが加わる。



第 53 図　周溝および周辺出土土器（11）

小型鉢Ｅ類（第 52 図 15・16）　コップ形の小型鉢を本類とする。図示できた資料は２点にとどまる。ともに内外面にハケメが施されるが、第 52 図 16 はさらにその上からヘラミガキが加えられている。また２点とも底面中央部がわずかに窪んでいる。第 52 図 15 は口縁下１㎝程の部分に輪積み痕が残され、第 52 図 16 は底部やや上と口縁下 1.5㎝程下の部分に輪積み痕が残されている。

甕Ａ類（第 53 図１～９）　当地方における弥生時代後期の台付甕の系譜上にある一群を甕Ａ類とする。頸部の屈曲は比較的緩やかで、わずかに外反しながら口唇部に至る。

完形土器が得られていないため、推定に頼る部分も含まれるが、在地の弥生時代後期後葉の台付甕と比べると、胴部はより球形あるいは偏平になる傾向があり（第 53 図３・６など）、わずかながら器厚が薄い印象がある。また口縁部外側に加えられる刻みも細く、あるいは浅いものになっている（第 53 図１・２・７）。

ハケメによる調整で器面のほとんどが覆われており、その方向は胴部外面では横あるいは斜め、口縁部では縦あるいは斜めとなるものが多い。

甕Ｂ類（第 53 図 10）　口縁部外面が折り返し口縁となり、口縁端部に刻みが加えられるもの。第 53 図 10 の１点が唯一図示できた資料である。

第 53 図 10 の折り返しは薄く、その外面側からの指頭による押圧で器体と密着されている。指頭の痕跡が内面側で観察できないことから、内面側のハケメは口縁成形後に改めて行われた可能性が高い。頸部以下のハケメは折り返し部の下位に潜り込んでいる。

甕Ｃ類（第 53 図 11 ～第 54 図３）　台付甕としてのくの字甕で、頸部の屈曲が比較的明瞭なものを本類とした。ハケメによる調整が器体のほぼ全域に及び、その後に頸部から口縁部の外面にかけて、あるいは口縁部内外面に比較的強い横ナデを加えることを特徴とする。

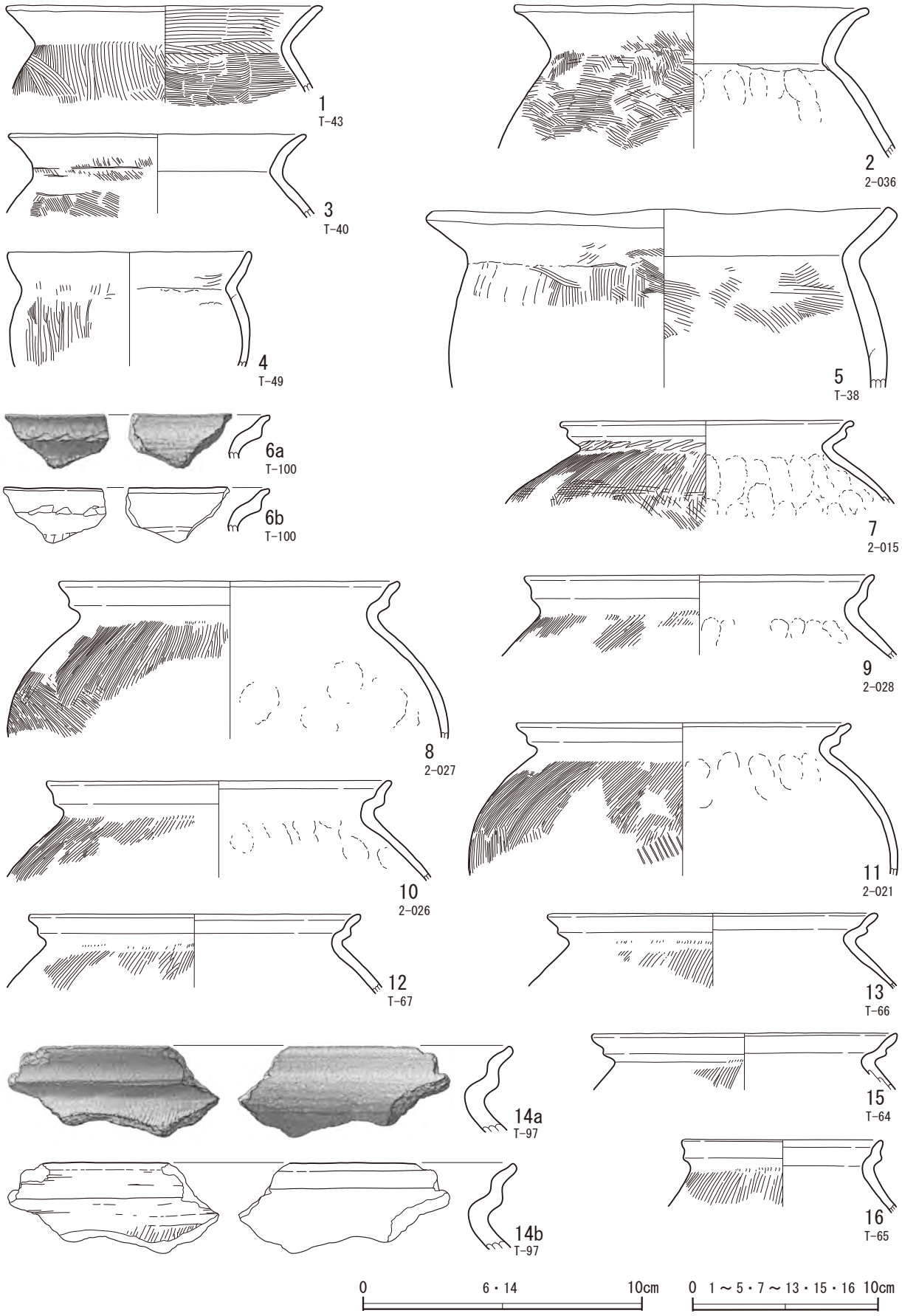
口端を角張らせて端部に面を持つ甕Ｃ１類と、口端を丸くするか、やや尖らせる甕Ｃ２類が存在する。第 53 図 12 は裏面全体が入念に横ナデされ、平滑に調整されている。第 53 図 13 は外面口唇部まではハケメが及ばず、施文の端部が残されている。この個体に限っては横ナデの後にハケメが加えられている。第 53 図 15 は本類としては口縁部がやや短い。外面に強い横ナデが加えられ、沈線状の痕跡が残されている。第 53 図 16 も比較的口縁部が短く、口唇に強いナデが加えられている。

第 54 図１の口縁部内面と胴部外面のハケメは、胴部内面のものよりかなり太い工具が用いられている。第 54 図２は頸部で接合されているが、口縁部側からの粘土が胴部側に重なっている。内面は入念なナデにより平滑に調整されている。第 54 図３はハケメの後、口縁部の内外面に強い横ナデが加えられ、一部は細い沈線状の痕跡となっている。

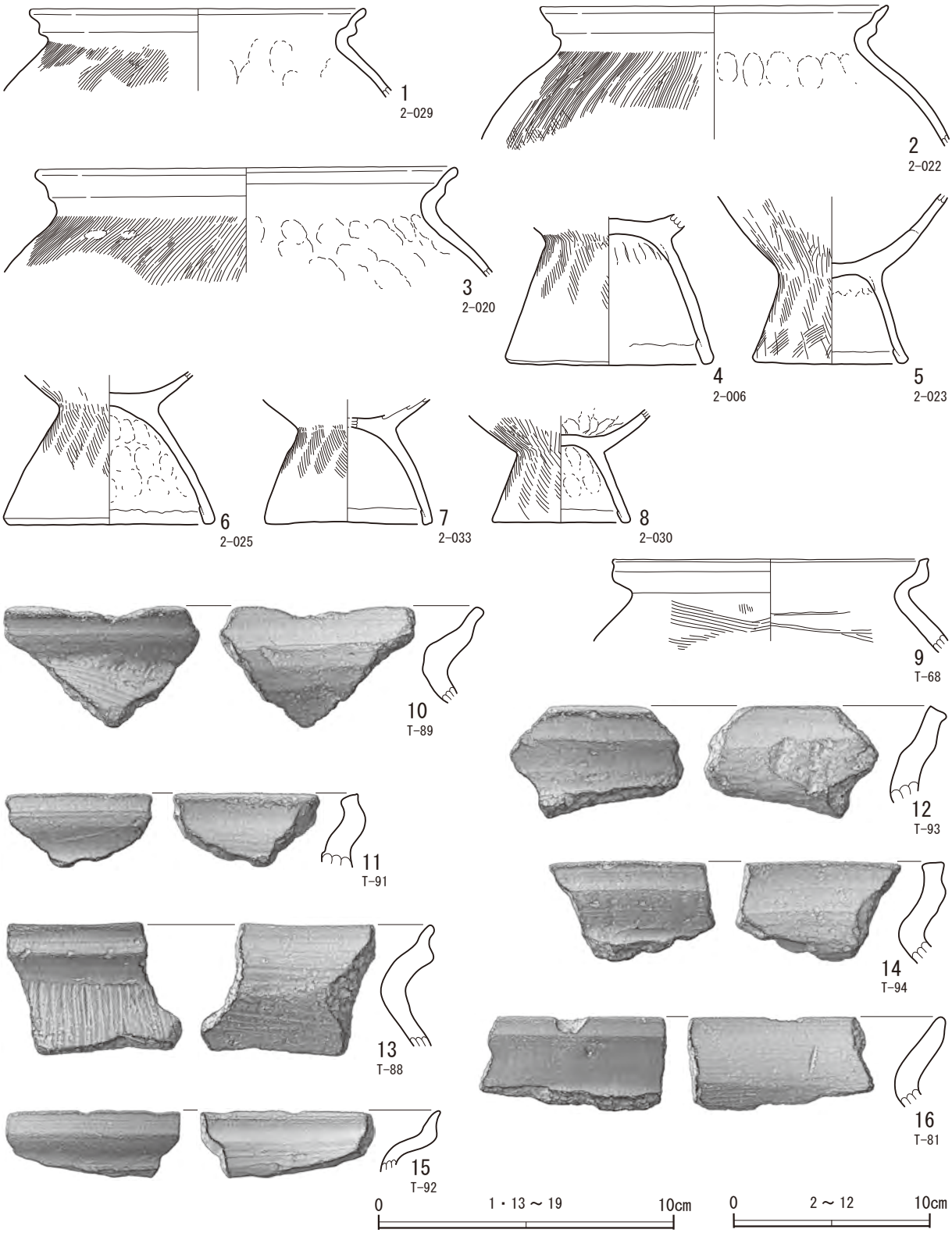
甕Ｄ類（第 54 図４・５）　台付甕のうち、屈曲する頸部から口縁が内湾ぎみに開くもの。口縁部は内外面とも横ナデで調整されている。第 54 図５は口径がかなり大きく、「台」が付くかどうか疑問な点もある。内外面にいったんハケメを加えた後、胴部外面では部分的に、口縁部内外面ではかなり入念に横ナデが加えられている。

甕Ｅ類（第 54 図６～第 55 図８）　口縁部が「Ｓ」字の形状を示すいわゆるＳ字甕を本類とした。肩部外面は左下がりのハケメ、胴部中央以下は右下がりのハケメが加えられる。これらのＳ字甕は器厚が２㎜前後と極めて薄くつくられている。その中でもさらに薄い器体で乳白色～灰褐色の色調を示すものをＥ類１（第 54 図６・７）、赤褐色で胎土に金色の雲母が多量に含まれているものをＥ類２（第 54 図８～第 55 図８）とする。Ｅ類１はその胎土の特徴から東海西部方面からの搬入品と考えられる。また本古墳の墳丘から２点の出土例がある（第 41 図５・６）。

甕Ｅ類１（第 54 図６・７）　第 54 図６は横ナデによって表出されたシャープな隆線の上に、斜めの刻みが加えられている。硬質な焼成で半透明白色の砂粒や白雲母を含む。第 54 図７は６に比べ口唇下の



第 54 図　周溝および周辺出土土器（12）



第 55 図　周溝および周辺出土土器（13）

隆帯が丸みを帯びている。頸部には刺突ぎみの単沈線が引かれている。内面は指頭による調整痕が目立つ。胎土には金色の雲母（黒雲母）と白雲母の両方が含まれているように見える。

甕Ｅ類２（第 54 図８～第 55 図８）　Ｅ類２の中にも多少の形態的あるいは技法的な変化を指摘することができる。

第 54 図８～ 15 は胴部の肩が張り器形が「無花果形」に似る。これに対して第 54 図 16 ～第 55 図３はややなで肩となり、胴部全体ではより球胴に近づいている。後者の口唇は前者に比して縦方向に伸びて偏平化する傾向が認められ、口縁部全体の「彫り」が浅くなった印象を与えている。

第 54 図８はＥ類２の中では最も口縁部の横ナデが入念に行われ、シャープな稜線が形成されている。口唇背面には浅く沈線が入る。肩部の左下がりのハケメに交差するように胴部には右下がりのハケメが加えられる。第 54 図 11 の胴部のハケメは肩部に対してやや太い工具が用いられている。

第 55 図２は本類の他の土器と比べるとより硬質であり、半透明白色の砂粒、金色の雲母が含まれている。また頸部の内外面に強いナデが加えられ、沈線状の痕跡を残している。

第 55 図４～第 55 図８には甕Ｅ類の底部付近の資料を集めた。このうち第 55 図８の内面は他のＥ類に比べ白色度が強く、白雲母こそ含まれていないが、半透明白色の砂粒が目立ち、東海西部方面からの搬入品である可能性が高い。

甕Ｆ類（第 55 図９～ 16）　頸部が屈折して広がり、受け口状の口縁部を形づくるものを本類とする。「渡井編年」では、このＦ類を口縁部の形状によってさらに４つに区分している。口縁部が垂直に近く立ち上がり、口端にヘラケズリが加えられて明瞭な面取りがなされるもの（Ｆ類１：９～ 13）、口縁部外面を窪ませて口端を丸く尖らせるもの（Ｆ類２：14）、Ｆ類１と同様に口縁部が立ち上がるが、口端が丸くつくられるもの（Ｆ類３：15）、口端部外面を傾斜させて面取りし、その上端部を丸くつくるもの（Ｆ類４：16）に分けることができる。

本類の口縁部内外面には強い横ナデが加えられ、多くのものは頸部まで達している。しかしＦ類３（第 55 図 15）は口縁部稜線以下に斜位のハケメが加えられている。また第 55 図９・11 には比較的多くの金色の雲母（黒雲母）が含まれ、在地の弥生土器とは異なる特徴が認められる。また外面に明瞭な煤の付着が認められるものが含まれており、一定期間使用されたものが、周溝内に持ち込まれていることになる。

また第 55 図 14 の稜線上には、やや間隔をおいた浅い刻みが施されているようにも見えるが、破片が小さく器面がやや摩耗しているため、判然としない。

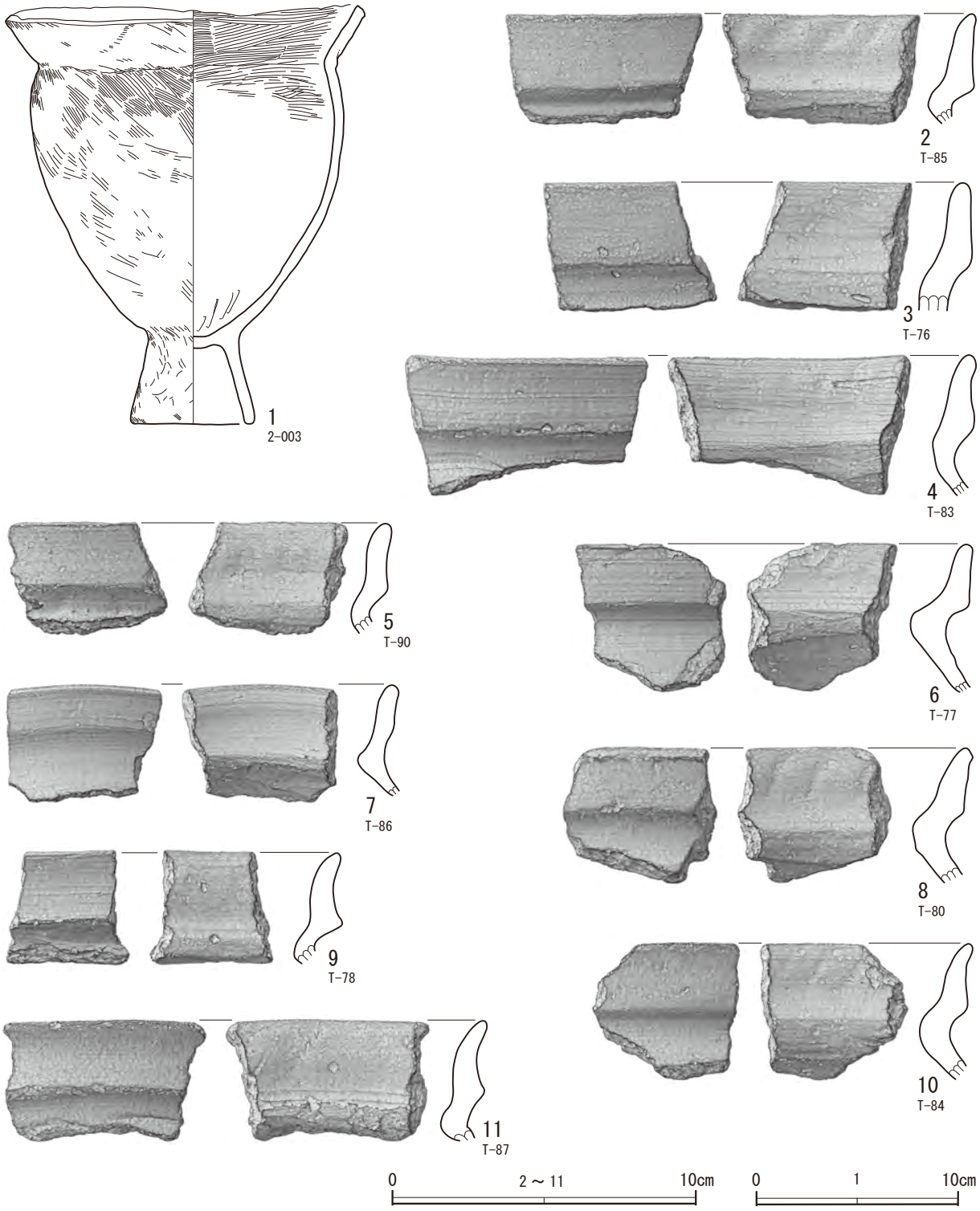
甕Ｇ類（第 56 図１）　屈曲が明瞭な頸部に、直線的で幅広の口縁部が付けられるものを本類とする。図示できた資料は第 56 図１のみである。器表の色調は「にぶい褐色（7.5YR5/4）」で、在地の弥生時代後期土器に比べると明るく、砂粒があまり含まれない。外面全体にハケメ調整が行われるが、口縁部を中心にやや不規則なナデが加わる。

甕Ｈ類（第 56 図２～ 11）　頸部が明瞭に屈曲し、ほぼ直立する直線的な口縁部が付けられるものを本類とした。いわいる「５」の字状口縁の甕である。

本類には口縁部から頸部にかけて強く整った横位のナデが加えられる。しかしその前段階に行われたと思われる指頭による調整痕が認められるものがある（第 56 図２・５・８・10 など）。胴部まで続く資料が少ないが、その内面にはヘラケズリによる調整が認められる（第 56 図４・７・10 など）。また第 56 図６の頸部には横位のハケメが残されており、第 56 図３内面の調整はヘラケズリである。

口縁部の形状をより細かく見ると、断面形がほぼ平坦となるもの（第 56 図２・３・５～８）と外反するもの（第 56 図４・９・10・11）があり、後者は口端がより尖る傾向がある。また第 56 図５・８・10・11 の外面には煤の付着が明瞭に認められ、一定期間の使用後に周溝内に持ち込まれたことになる。

甕Ｉ類（第 57 図１・２）　屈曲する口縁部から比較的短くかつ大きく外反する口縁部が付けられるものを本類とした。図示できた２点は頸部の断面形状がやや異なるが、口端における明瞭な面取り、頸部外面の横位のナデ、胴部内面のヘラケズリなど共通する要素を認めることができる。また２点とも頸部のハケメが深く加えられており、器面に切り子状の起伏を生じている。



第 56 図　周溝および周辺出土土器（14）

甕 J 類（第 57 図３～６）　大きく外反する口縁部の器厚が口端近くでいったん薄くなり、口端は面取りされて再び肥厚する。さらに口縁部内外面に横ナデを加える。こうした特徴をもつ甕を本類とした。胴部の内外面は比較的密接したハケメが加えられるようである。頸部の屈曲は強いが、第 57 図４では内面に明確な稜線が残されず、胴部はほぼ球形となる。これに対して第 57 図３・５・６は頸部内面に明瞭な稜線が形成され、胴部はやや肩が張る器形となるものと思われる。

第 57 図４の横ナデは、口縁部直下に限定されている。外面のほぼ全体に煤が付着している。第 57

図５の横ナデは表裏とも口縁部の全面に及んでいる。胴部下半に明瞭な輪積み痕があり、ここで上半と接合されていると思われる。

甕Ｋ類（第 57 図７～９）　口縁部に輪積みの痕跡をほとんどそのまま残し、文様的要素としたもの。特徴的な成形がなされるため、口縁部が失われても本類を認識することができるが、出土点数は極めて少ない。いずれも口端部が面取りされ、第 57 図８には刻みが加えられる。

第 57 図７の胴部から脚部には、弥生時代後期後葉のものに比べて細かく浅いハケメが加えられている。頸部から口縁部にかけて２段分の粘土帯がそのまま残されているが、胴部のハケメが頸部の粘土帯の下に潜り込んでいる。ハケメによる調整の後に頸部の粘土帯が積まれたと考えられる。

甕Ｌ類（第 57 図 10）　脚部が広く開いて内湾し相対的に低い底部をもつものを本類とした。後に脚部を一括して扱うが、それらと比べて極めて特異な器形を示すことから、あえて別に分類した。脚部下端の表裏にはハケメの後、１㎝程の幅で横位のナデが加えられている。

甕Ｍ類（第 58 図１～８）　以上のＡ～Ｌの分類に当てはまらない甕を一括して本類とした。

第 58 図１の口縁部表裏には強い横ナデが加えられている。この点で壺Ｊ類と類似するが、口端が丸くなる点が異なる。磨滅が進んではいるが胴部には明瞭なハケメが認められない。第 58 図２も口縁部の表裏に強い横ナデが加えられている。口縁端部には凹線が施されている。第 58 図３は壺Ｊ類と同様に強く屈曲する口縁部と面取りされる口端部をもつが、横ナデではなくごく細かいハケメが加えられている。第 58 図４の頸部は強く屈曲し、口縁部は端部に向かって膨大する。口端は明瞭な面取りではなく、やや丸くつくられている。

第 58 図５～８は甕の肩部に斜格子状の沈線が施される。第 58 図５～７はハケメの後に沈線が加わるが、第 58 図８はハケメではなくナデの後に沈線が引かれている。

甕Ｎ類（第 58 図９～ 29）　甕の一般的な脚部を一括し、便宜的に本類とした。

高坏Ａ類（第 59 図１～ 13）　坏部下位に稜を有する高坏の中で、稜径が口径の半分以下になるものを本類とする。坏部の底面にあたる部分はいったん水平に近く横に伸び、そこに坏の器体を接合している。第 59 図では観察できたものについて、すべてこの接合痕を表現した。器体の立ち上がりはわずかに内湾し口端部がやや尖る（第 59 図１・12）か、丸くつくられる（第 59 図４・６）。坏部の内外面は縦位の細かいミガキが入念に加えられている。

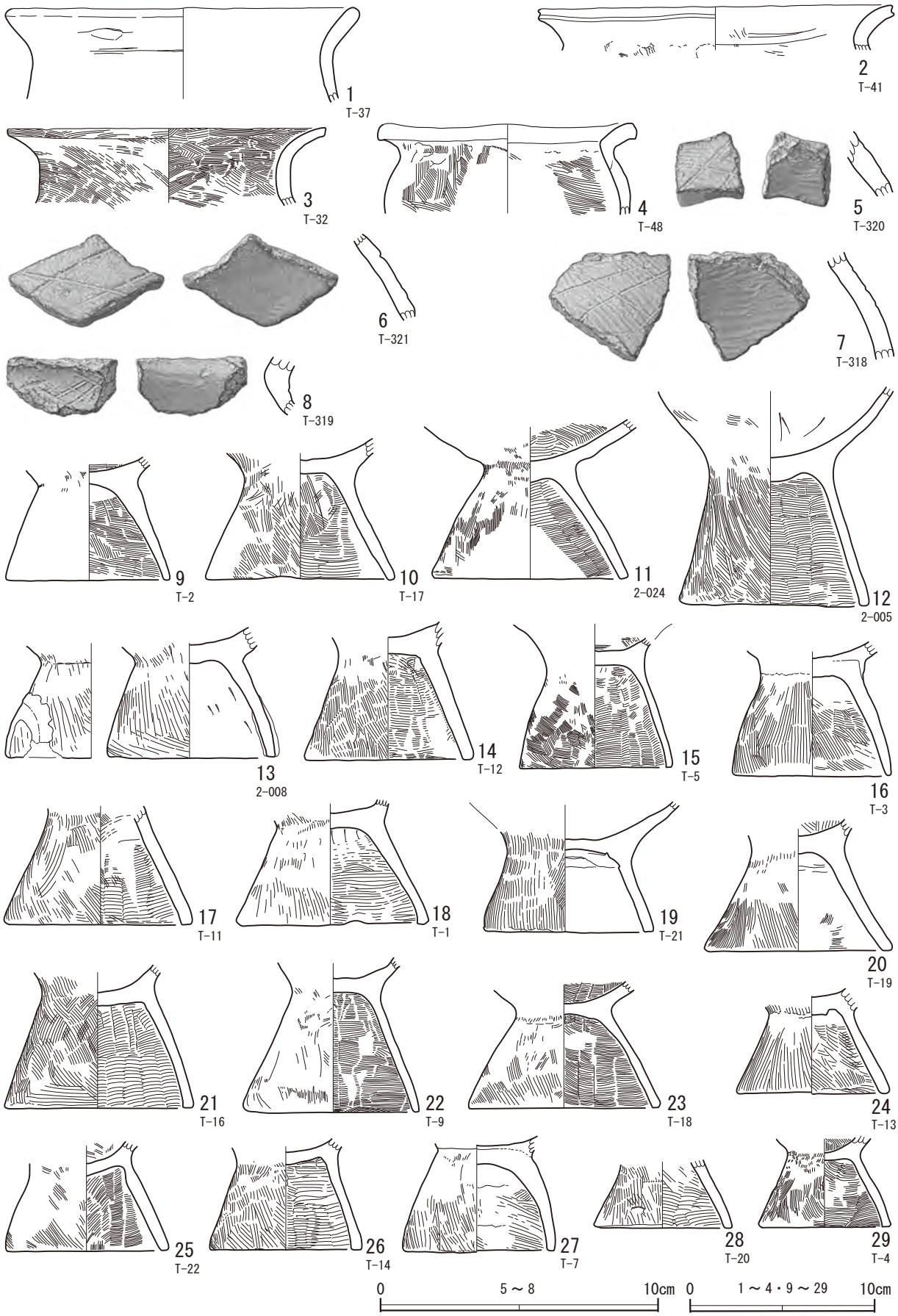
脚部は接合部付近でわずかに外反し、中位から下端にかけてわずかに内湾するものが多い（第 59 図１・６・９・11）。しかしほとんど直線的になるもの（第 59 図８・12）や、脚部で外反するもの（第 59 図 10・13）も含まれている。脚部の外面にも縦位のミガキが加えられるが、内面はハケメによる調整がいくつかの資料で認められる（第 59 図１・６～ 10・13）。脚部の接合部付近には平行する細線が施されるものが含まれる（第 59 図１～３・５）

第 59 図１～ 11 は脚部底面が広く、外面に明瞭な稜線が形成されるものである。「渡井編年」ではこれらを段階１として捉えている。第 59 図 12・13 は底面が狭く外面の稜線がやや甘くなるものである。「渡井編年」では段階２とされ、より後出の段階が与えられている。

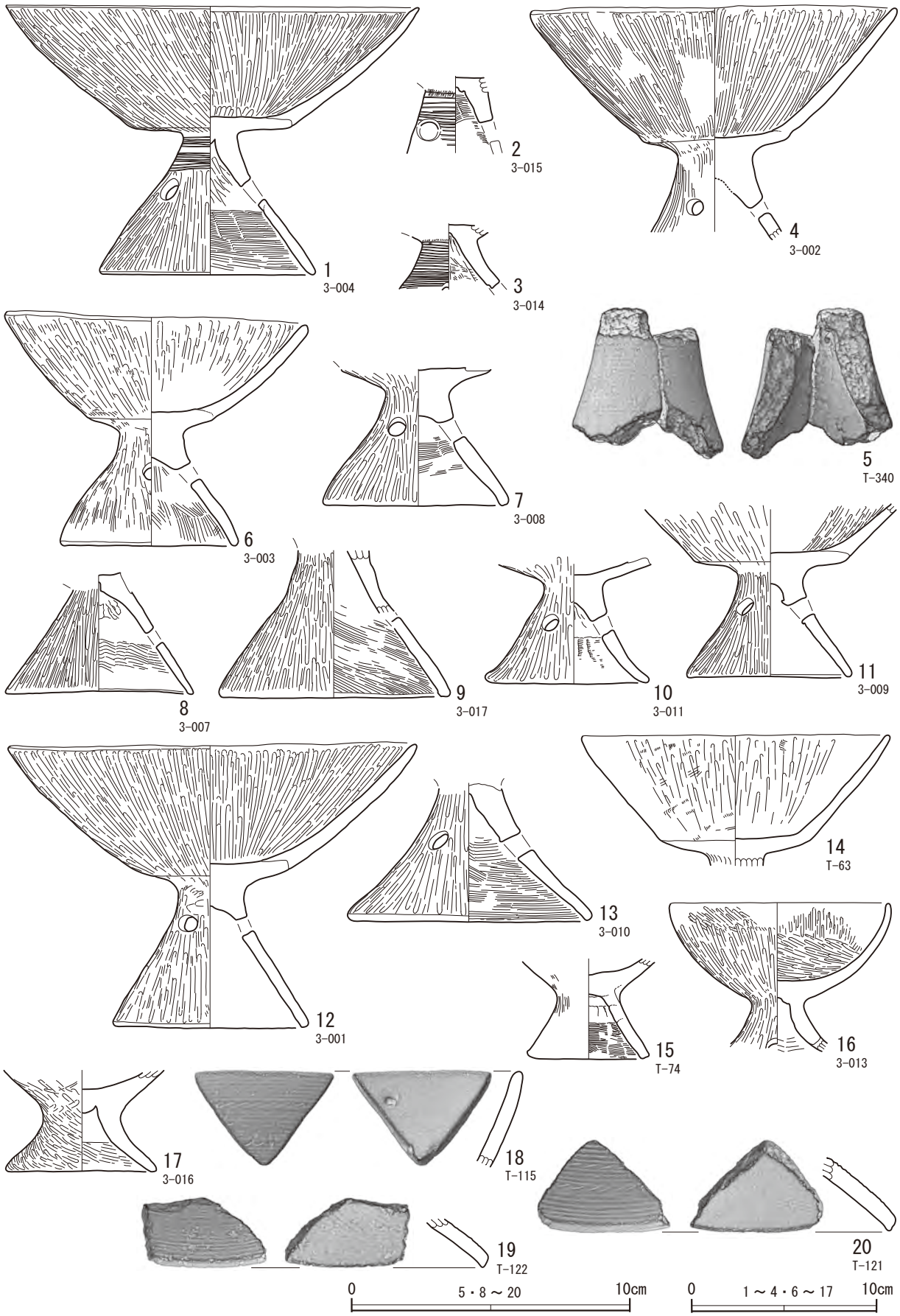
第 59 図１はほとんど完形に近い土器で、割れ口も非常にシャープである。精選された粘土が用いられたらしく、径１㎜に達する砂粒はほとんど含まれていない。数倍程度のルーペで観察すると、半透明白色の砂粒や角閃石らしき砂粒、黒雲母が認められる。緻密な胎土に入念なヘラミガキが行われたことによって器面には滑沢が生じている。また口唇部内面は横ナデによって面取りされている。

第 59 図６は坏部の開きが比較的少なく、ミガキも比較的粗いため、前工程のハケメが部分的に残されている。表裏とも磨滅が進み坏底部には剥落が生じていることから、一定期間の使用の後に周溝内に持ち込まれたものと考えられる。

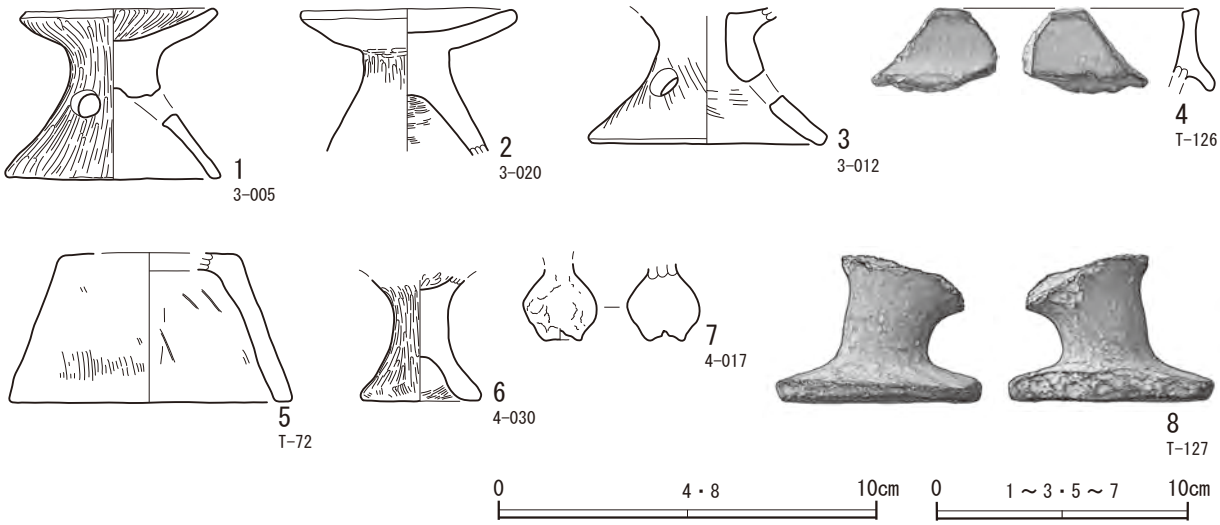
第 57 図　周溝および周辺出土土器（15）



第 58 図　周溝および周辺出土土器（16）



第 59 図　周溝および周辺出土土器（17）



第 60 図　周溝および周辺出土土器（18）

高坏Ｂ類（第 59 図 14）　坏部下位に形成される稜線の径が、口径の半分以上になるものを高坏Ｂとする。高坏Ａ類に比べ体部の立ち上がりがより直角に近くなる。図示できた資料は 1 点のみである。

高坏Ｃ類（第 59 図 15・16）　高坏の坏部が埦形を示し稜線を持たないものを本類とする。第 59 図 16 は外面と脚部外面にヘラミガキを加え、器面の一部には滑沢が生じている。外面は縦位のヘラミガキを主とするが、口縁部付近で斜位に切り替わっている。内面は底面では横位であるが、口縁部に向けて斜位～縦位へと変化する。

高坏Ｄ類（第 40 図６）　坏体部下位に緩い稜線を形成し、底部はわずかに内湾するもの。外面に横位のミガキが加えられる。第 40 図６に示した棺上出土のものが唯一の 1 点で、周溝周辺からは出土していない。

高坏Ｅ類（第 59 図 17）　坏体部が完全な状態で出土していないため、類推に頼る部分もあるが、埦形か鉢形の坏体部が載り、低く小ぶりな脚部で透かし孔が設けられないものを本類とした。

高坏Ｆ類（第 59 図 18 ～ 20）　廻間Ⅰ式～Ⅱ式において「有稜低脚高坏」とされているものの中で、坏体部・脚部外面に平行する細線が密接して施されるものを本類とした。胎土や色調、文様などから東海西部からの搬入品の可能性が高い。

第 59 図 18 の内外面はかなり磨滅が進んでいる。雲母類は確認できない。第 59 図 19・20 の内面にはハケメが加えられている。ともに雲母類（黒雲母・白雲母？）をやや多く含み硬質な焼成である。

器台Ａ類（第 60 図１・２）　受け部がやや内湾して小皿状を示すもので、受け部と脚底の径がほとんど変わらないものを本類とした。脚部は接合部付近で外反したのち脚底付近でわずかに内湾する。

第 60 図 1 は受け部内面に放射状、受け部外面～脚部に縦位のヘラミガキが入念に加えられ、滑沢を生じている。胎土に雲母類（黒雲母・白雲母？）と半透明白色の砂粒を含む。第 60 図２は磨滅が進み器面の調整痕を観察することができない。頸部には接合時に行われたヘラによる調整が残されている。胎土は第 60 図 1 よりも粗く、雲母類は認められない。

器台Ｂ類（第 60 図３）　脚底の径に対してあまり高さがない器台を本類とする。脚底付近でわずかに内湾するＡ類とは異なり、外反したまま脚底に至る。第 60 図３の脚部には透かし孔が３か所に穿たれ、受け部底部と脚部を貫通する孔も穿たれている。

手焙型土器（第 60 図４）　白色がかった色調を示し、薄手硬質な胎土であることから、東海西部方面からの搬入品であると考えられる。口縁部下に下向きの突起が付けられる。

台？（第 60 図５）　上端の外面が平滑に調整されており、内面側はヘラ調整がそのまま残されている

ことから、台ではないかと考えた。脚底付近の外面にハケメが残り、脚底の内外面に横位のナデが認められる。

ｃ．土製模造品（第 60 図６～８）

３点の土製模造品が出土しているが、完形のものはなく、その性格は明らかではない。第 60 図６は上部が失われているが、高坏を細くしたかのような形状を示す。頸部付近から脚部にかけて縦位のヘラミガキ、脚部内面がハケメとなっている点も高坏に類似する。第 60 図７は壺の外形に類似するが、「中空」ではなく、しかも外面は指頭圧痕による調整である。底部は上げ底となっている。

第 60 図８は土器あるいは土製品の脚部と考えられるが、全貌が不明なためここで取り扱った。やや磨滅が進んでいるが、外面は横位のヘラミガキが加えられている。底面は平坦に成形され、一部にハケメが加えられている。

第９表　周溝内および周辺の土器観察表（１）

図版No.	実測番号	器種	出土地点	遺物No.	口径 器高 底径	色調	残存部位	形態の特徴	技法の特徴	X座標 Y座標 Z座標
第43図１	T106	壺	耕作土	—	— — —	5YR5/4 にぶい赤褐色	口縁部～頸部	複合口縁。外反する頸部から口縁部はやや外傾して立ち上がる。口縁部外面に９本の沈線を有する。	口縁部外面縦ヘラミガキ。頸部外面横ナデ。	— — —
第43図２	T335	壺	SM-SYU 東７	—	— — —	7.5YR6/4 にぶい橙色	口縁部	複合口縁。口縁外面は外反する。口縁下部がやや肥厚する。	内外面ナデ調整。	— — —
第43図３	T324	壺	SYU 覆土	—	— — —	7.5YR5/4 にぶい褐色	口縁部～頸部	複合口縁。口縁外面はほぼ直立する。口縁端部を面取りしており、下部が肥厚する。口縁部外面に棒状浮文を１本有する。	外面ハケメ→横ナデ、内面ハケメ→ヘラミガキ。	— — —
第43図４	T330	壺	SM-SYU	657	— — —	7.5YR5/4 にぶい褐色	口縁部～頸部	複合口縁。頸部は外反し口縁部はやや外傾して立ち上がる。やや受け口状になる。口縁端部は面取りし、外面に棒状浮文を１本有する。	頸部外面縦ヘラミガキ。内面ハケメ→横ヘラミガキ。複合部下端粘土付加部分横ナデ。内外面とも朱が塗彩されている。	-97222.948 32938.802 14.926
第43図５	T323	壺	SYU 覆土	—	— — —	10YR5/3 にぶい黄褐色	口縁部～頸部	複合口縁。口縁外面は外傾し、口縁端部を面取りしている。口縁下端は粘土紐を継ぎ足し、段状に肥厚する。口縁外面に棒状浮文を３本有する。	内外面ハケメ→横ナデ。頸部上端に穿孔あり。	— — —
第43図６	T334	壺	耕作土	—	— — —	5YR5/6 明赤褐色	口縁上部	複合口縁。口縁部は内湾する。口縁上端に内面突帯を貼り付ける。	外面縦位ハケメ、後ナデ調整？内面ナデ調整。	— — —
第43図７	T336	壺	SM-SYU 覆土	—	— — —	5YR5/6 明赤褐色	口縁上部	複合口縁。口縁部は内湾する。口縁上端に内面突帯を貼り付け、外面に棒状浮文を４本有する。	外面縦位ハケメ？後ナデ調整。内面ナデ調整。	— — —
第43図８	T337	壺	SM-SYU 北３	—	— — —	7.5YR6/4 にぶい橙色	口縁上部	複合口縁。口縁部は外傾する。口縁上端に内面突帯を貼り付けるが上端の幅があまり強調されない。口縁部外面に２本の沈線を有する。	外面縦位ハケメ、内面ナデ。	— — —
第43図９	T333	壺	SM-SYU 西	—	— — —	10YR5/3 にぶい黄褐色	口縁部～頸部	複合口縁。頸部はやや外反し口縁部は直立する。口縁下端は粘土紐を継ぎ足し、段状に肥厚する。口縁外面に３本の沈線を有する。	口縁部外面摩耗。頸部内外面ハケメ。	— — —
第43図10	T105	壺	SM-SYU	1960	— — —	7.5YR5/4 にぶい褐色	口縁部～頸部	複合口縁。外傾して立ち上がる。口縁下端が肥厚し、口縁上端に内面突帯を貼り付ける。口縁部外面に棒状浮文を６本有する。	口縁部外面横位ハケメ、口縁部内面・複合部下端粘土付加部分横ナデ。頸部内外面・口縁上端ハケメ。	-97215.706 32939.690 15.179
第43図11	T326	壺	SM-SYU 覆土	—	— — —	7.5YR5/3 にぶい褐色	口縁上部	口縁部は直立する。口縁上端の内面を面取りしている。	外面縦位ハケメ、口唇部のみ横ナデ。内面横ナデ。	— — —
第43図12	T322	壺	前方部堀 SYU 覆土	—	— — —	5YR5/4 にぶい赤褐色	口縁上部	複合口縁。外傾して立ち上がる。口縁上端に断面が三角形状の突帯を貼り付けており、上端の幅が強調される。外面に沈線を４本有する。	内外面ハケメ→横ナデ？口縁上端横ナデ？	— — —
第43図13	T331	壺	SYU 覆土	—	— — —	7.5YR6/4 にぶい橙色	口縁上部	複合口縁。外傾して立ち上がる。口縁上端に断面が三角形状の突帯を貼り付けており、上端の幅がやや強調される。	外面斜位ハケメ。口縁外面上端ハケメ→横ナデ？内面横ナデ。	— — —
第43図14	T328	壺	SM-SYU 北１覆土	—	— — —	7.5YR6/4 にぶい橙色	口縁上部	複合口縁。外反した後やや内湾する。口縁上端に断面がやや三角形状の突帯を貼り付けており、上端の幅がやや強調される。	内外面横ナデ？	— — —
第43図15	T327	壺	SD17	4062	— — —	7.5YR5/3 にぶい褐色	口縁下部	複合口縁。やや外反して立ち上がる。口縁下端が肥厚する。外面に沈線を５本有する。	外面縦位ハケメ、内面ヘラミガキ？複合部下端粘土付加部分横ナデ。	-97270.127 32926.183 15.346
第43図16	T329	壺	SM-SYU	4802	— — —	10YR5/3 にぶい黄褐色	口縁下半～頸部	複合口縁。頸部から口縁は外反して立ち上がる。	口縁外面斜位ハケメ、口縁下端部～頸部横ナデ。内面ハケメ。	-97202.692 32920.389 16.848
第43図17	T332	壺	SM-SYU	1244	— — —	10YR5/3 にぶい黄褐色	口縁上部	複合口縁。外傾して立ち上がり、口縁上端に断面が三角形状の突帯を貼り付ける。外面に棒状浮文を３本有する。	外面斜位に強いハケメ、口端はナデ。内面ハケメ。	-97211.049 32937.802 15.761
第44図１	T103	壺	SM-SYU	1289	— — —	10YR6/4 にぶい黄橙色	口縁部	複合口縁。口縁外面は外反して立ち上がった後内湾する。複合部下端が肥厚する。口縁上端に断面が三角形状の内面突帯、外面に４本の沈線を有する。	外面縦位ハケメ。口端～内面ナデ。二重口縁複合部横ナデ。胎土に白色砂粒を多く含む。	-97209.769 32937.849 15.717
第44図２	T325	壺	SM-SYU 北２覆土	—	— — —	7.5YR5/4 にぶい褐色	口縁上半～頸部	複合口縁。頸部、口縁外面がやや外反して立ち上がる。口縁外面に棒状浮文を１本有する。複合部下端が肥厚する。	内外面ハケメ→ナデ？複合部下端粘土付加部分横ナデ。	— — —
第44図３	T104	壺	SM-SYU	862	— — —	7.5YR6/4 にぶい橙色	口縁部～頸部	複合口縁。口縁外面は外傾して立ち上がり、複合部下端が肥厚する。口縁上端に断面がやや三角形状の内面突帯、外面に棒状浮文を２本有する。	外面ハケメ→横ナデ、内面ハケメ。口縁上端・複合部下端粘土付加部分横ナデ。胎土に白色砂粒を多く含む。	-97211.152 32938.052 15.628
第44図４	T107	壺	SM-SYU	818	— — —	5YR5/4 にぶい赤褐色	口縁部	二重口縁。口縁部は外反して立ち上がる。口縁上下端部に刺突文あり。外面に円形浮文を２点有する。複合部下端外面に断面が三角形状の突帯あり。	外面横ナデ、内面ヘラミガキ→横ナデ。	-97207.555 32917.629 16.469
第44図５	T338	壺	SM-SYU 東覆土	—	— — —	5YR5/4 にぶい赤褐色	口縁部～頸部	二重口縁。頸部から口縁部はやや直立して立ち上がる。複合部下端が肥厚する。	口縁部内外面ナデ調整。頸部外面ハケメ。	— — —
第44図６	T339	壺	SM-SYU-M 覆土	—	— — —	10YR5/3 にぶい黄褐色	口縁下半～頸部	二重口縁。頸部はやや外傾して立ち上がった後、口縁部は外反する。複合部下端外面に三角形状の突帯あり。突帯上に刺突文が施される。	内外面縦ヘラミガキ。複合部下端粘土付加部分横ナデ。金色の雲母を含む。	— — —
第44図７	1-19	壺	SM-SYU	2446・2451 2455・2457 2540・2577	(13.3) 25.5 6.9	7.5YR5/4 にぶい褐色	口縁部～底部	やや凹みのある底部から内湾して立ち上がる。頸部～口縁部は外反して立ち上がり、折り返し口縁を有する。	口縁～頸部外面ハケメ→ヘラミガキ。口縁部内面横ナデ。口縁端部ヘラ先による調整。胴下部内面ハケメ。	-97208.040 32926.879 16.413
第44図８	1-25	壺	SM-SYU	2398	11.5 (7.2) —	7.5YR5/4 にぶい褐色	口縁部～頸部	頸部から口縁部は外反して立ち上がり、折り返し口縁を有する。	外面ハケメ→縦ヘラミガキ、内面横ヘラミガキ。口縁部に穿孔が２か所にあり。	-97202.564 32922.618 16.658

第 10 表　周溝内および周辺の土器観察表（2）

図版No.	実測番号	器種	出土地点	遺物No.	口径 器高 底径	色調	残存部位	形態の特徴	技法の特徴	X 座標 Y 座標 Z 座標
第44図９	1-12	壺	北 1	1735 2348	— (22.0) 8.2	7.5YR5/4 にぶい褐色	頸部～底部	胴部は下位に非常に弱い稜を持って内湾し、頸部は外反して立ち上がる。	胴部外面ヘラミガキ、胴部内面ハケメ。頸部内面ヘラミガキ。底部木葉痕。縄文･S 字状結節文･円形浮文。	-97212.877 32937.786 15.390
第44図10	T69	壺	T	—	(12.7) (6.3) —	7.5YR5/4 にぶい褐色	口縁部～胴部上半	折り返し口縁で、口縁部は外反して立ち上がる。胴部は内湾する。	外面上位より縦→横→縦ヘラミガキ。頸部内面横ヘラミガキ。胴部内面ハケメ、輪積み痕。	— — —
第44図11	1-27	壺	SM-SYU	115	— — —	7.5YR5/4 にぶい褐色	口縁部～頸部	折り返し口縁で、口縁部はやや外反して立ち上がる。	口唇部内外面横ナデ。頸部外面ハケメ→縦ヘラミガキ、頸部内面横ヘラミガキ。	-97219.841 32940.090 15.137
第44図12	1-23	壺	SM-SYU	860	— — —	7.5YR5/4 にぶい褐色	口縁部～胴部上半	折り返し口縁で、口縁部は外反して立ち上がり、胴部は外傾して開く。	口縁折り返し部は横ナデ。頸部外面縦ヘラミガキ。口縁部内面、頸部内面横ヘラミガキ。胴部内面ハケメ。	-97241.545 32929.444 14.944
第44図13	1-37	壺	SYU 覆土	—	(10.0) (5.6) —	5YR5/3 にぶい赤褐色	口縁部～頸部	折り返し口縁で、口縁部は外反する。	外面ハケメ→横ナデ、内面横ナデ。	— — —
第44図14	1-24	壺	SM-SYU	1240	15.7 (5.8) —	7.5YR5/4 にぶい褐色	口縁部～胴部上半	折り返し口縁で、口縁部は外反して立ち上がり、胴部は内湾して開く。	口縁折り返し部ヘラ先による調整。頸部外面ハケメ。胎土は白色砂粒・石片を多く含む。	-97210.191 32937.384 15.652
第45図１	1-10	壺	北 3	1401・2414 2982・2989 3137・3140	13.6 23.0 7.5	5YR5/4 にぶい赤褐色	口縁部～底部	平底の底部から胴部は球胴を呈する。折り返し口縁で、口縁部は外反して開く。	口縁折り返し部外面指頭圧痕、口縁部内面ハケメ→横ナデ。頸部外面ハケメ。胴部外面ヘラミガキ、胴部内面ハケメ。底部木葉痕。	-97206.195 32936.593 15.852
第45図２	T75	壺	SM-SYU	3126	(10.9) (4.8) —	10YR5/3 にぶい黄褐色	口縁部～頸部	折り返し口縁で、口縁部は外反して立ち上がる。	外面ハケメ。口縁部内面縄文・S 字状結節文・円形浮文。口縁折り返し部外面ヘラ先による調整。胎土は白色砂粒・石片を多く含む。	-97207.796 32937.535 15.633
第45図３	1-35	壺	SD3 覆土	275	(17.2) (4.1) —	7.5YR6/3 にぶい褐色	口縁部	折り返し口縁で、口縁部は外反して立ち上がる。	外面ハケメ。内面横ナデ･S 字状結節文･LR 縄文。胎土は白色砂粒・石片を多く含む。	-97227.429 32939.204 14.894
第45図４	1-9	壺	SM-SYU	26・27 59～63 704・756	12.8 (20.6) —	5YR4/4 にぶい赤褐色	口縁部～胴部下半	折り返し口縁で、口縁部は外反して立ち上がる。胴部は内湾して開く。	外面縦ヘラミガキ。口縁折り返し部外面横ナデ。内面ハケメ。	-97230.313 32940.948 14.927
第45図５	1-31	壺	SM-SYU 東 7	1666 2330 2331	(12.8) (6.3) —	7.5YR4/3 褐色	口縁部～頸部	口縁部はやや外反して立ち上がり、口縁端部でさらに外反して開く。	外面縦ヘラミガキ→横ナデ、内面横ヘラミガキ、ハケメ。	-97219.500 32938.307 15.048
第45図６	1-34	壺	SM-SYU	1608	(13.0) (12.0) —	10YR5/3 にぶい黄褐色	口縁部～胴部上半	口縁部は外傾して立ち上がる。胴部は内湾して開く。	外面ハケメ→縦ヘラミガキ。口縁部内面ハケメ→横ヘラミガキ、口縁端部横ナデ。胴部内面ハケメ	-97218.129 32936.412 15.101
第45図７	1-20	壺	SM-SYU SK1	127・136 2298・2333 3177・5454	13.8 (26.0) —	7.5YR5/4 にぶい褐色	口縁部～胴部下半	口縁部は外傾して立ち上がる。胴部は内湾して開き、下半に弱い稜を持つ。	口縁部外面ハケメ→横ナデ、口縁部内面横ナデ。胴部外面縦ヘラミガキ、胴部内面ハケメ。	-97218.697 32939.738 14.988
第46図１	T108	壺	SM-SYU 東 6 覆土	—	— — —	7.5YR4/3 褐色	口縁部	パレススタイル壺。有段口縁を有する。外面に擬凹線文を施す。さらにその上に刺突文を施した棒状浮文が 2 本認められる。	外面横ヘラミガキ、内面上位横ヘラミガキ→下位横ナデ。	— — —
第46図２	T301	壺	SYU1 覆土	—	— — —	7.5YR5/4 にぶい褐色	肩部	パレススタイル壺の胴部肩破片。	外面横線文、外面上位山形状の刺突文。内面ナデ調整。	— — —
第46図３	T113	壺	SM-SYU 覆土	—	— — —	7.5YR5/3 にぶい褐色	肩部	パレススタイル壺の胴部肩破片。	外面ヘラミガキの後、上位より山形状の刺突文・横線文・ハの字状の刺突文を施す。内面横ナデ。	— — —
第46図４	T118	壺	SM-SYU	2083	— — —	7.5YR5/4 にぶい褐色	肩部	パレススタイル壺の胴部肩破片。	外面横線文、下位波状文。内面ハケメ→横ナデ。	-97210.230 32937.246 15.584
第46図５	T116	壺	SM-SYU 東 7 覆土	—	— — —	7.5YR5/4 にぶい褐色	頸部～胴部	パレススタイル壺の胴部肩破片。	外面横線文。横線文で区切られた範囲内にハの字状の刺突文を施す。金色の雲母を含む。	— — —
第46図６	T306	壺	SM 墳丘	—	— — —	7.5YR5/4 にぶい褐色	肩部	パレススタイル壺の胴部肩破片。	外面横線文、下位山形状の刺突文。山形文に赤彩される。内面ナデ調整。	— — —
第46図７	T120	壺	表採	—	— — —	7.5YR5/4 にぶい褐色	肩部	パレススタイル壺の胴部肩破片。	外面上位横線文、下位山形状の刺突文。刺突文に赤彩される。内面ナデ調整。	— — —
第46図８	T302	壺	SYU 覆土	—	— — —	7.5YR5/4 にぶい褐色	肩部	パレススタイル壺の胴部肩破片。	外面横線文、波状文。内面ナデ調整。	— — —
第46図９	T112	壺	SM-SYU	1033	— — —	7.5YR5/3 にぶい褐色	肩部	パレススタイル壺の胴部肩破片。	外面横線文、波状文。内面ナデ調整。	-97212.250 32936.301 15.495
第46図10	T307	壺	SM-SYU 北 3 覆土	—	— — —	5YR6/6 橙色	肩部	パレススタイル壺の胴部肩破片。	外面ナデ調整、横線文、刺突文。内面ハケメ。	— — —
第46図11	T310	壺	SM 墳丘	—	— — —	7.5YR6/4 にぶい橙色	肩部	パレススタイル壺の胴部肩破片。	外面横線文、下位の一部に赤彩あり。内面ナデ調整。	— — —
第46図12	T316	壺	SM 墳丘 主体部	3770	— — —	2.5YR5/6 明赤褐色	肩部	パレススタイル壺の胴部肩破片。	外面ハケメ→ナデ調整。上位山形状の刺突文、中位横線文、下位刺突文。内面ナデ調整。	-97225.425 32918.991 20.700

第 11 表　周溝内および周辺の土器観察表（3）

図版No.	実測番号	器種	出土地点	遺物No.	口径 器高 底径	色調	残存部位	形態の特徴	技法の特徴	X座標 Y座標 Z座標
第46図13	T311	壺	表採	—	— — —	7.5YR6/4 にぶい橙色	肩部	パレススタイル壺の胴部肩破片。	外面横線文。内面ナデ調整。	— — —
第46図14	T309	壺	墳丘表採	—	— — —	5YR6/6 橙色	肩部	パレススタイル壺の胴部肩破片。	外面横線文、下位ハケメ。内面ナデ調整。	— — —
第46図15	T304	壺	墳丘表採	—	— — —	5YR6/6 橙色	肩部	パレススタイル壺の胴部肩破片。	外面横線文、山形状刺突文。内面ナデ調整。	— — —
第46図16	T314	壺	SM-SYU 北３覆土	—	— — —	7.5YR6/4 にぶい橙色	肩部	パレススタイル壺の胴部肩破片。	外面横線文、刺突文。内面ハケメ。	— — —
第46図17	T308	壺	S-T-B 覆土	—	— — —	5YR6/6 橙色	肩部	パレススタイル壺の胴部肩破片。	内外面ナデ調整。外面横線文。	— — —
第46図18	T303	壺	墳丘表採	—	— — —	2.5YR5/6 明赤褐色	肩部	パレススタイル壺の胴部肩破片。	外面横線文、下位山形状の刺突文。刺突文に朱を塗彩する。内面ナデ調整。	— — —
第46図19	T305	壺	ベルト G 覆土	—	— — —	7.5YR6/4 にぶい橙色	肩部	パレススタイル壺の胴部肩破片。	外面横線文。線内に赤彩？内面ナデ調整。	— — —
第46図20	T111	壺	SM-SYU 東７覆土	—	— — —	7.5YR5/4 にぶい褐色	肩部	パレススタイル壺の胴部肩破片。	外面上位波状文、下位横線文。内面ナデ調整。	— — —
第46図21	T317	壺	SM-SYU 覆土	—	— — —	7.5YR5/4 にぶい褐色	肩部	パレススタイル壺の胴部肩破片。	外面ハケメ→横ナデ、2 段の連続刺突文。内面ナデ調整。	— — —
第46図22	T201	壺	SM-SYU ベルト J 覆土	—	— — —	2.5YR5/6 明赤褐色	口縁部～頸部	いわゆる「ヒサゴ壺」。口縁部が内湾ぎみに直立する。口縁上端内面に面取りが見られる。	口縁部外面上位縦→中位横→下位縦ヘラミガキ。頸部外面横ヘラミガキ。内面上位横ハケメ、下位縦ヘラミガキ。	— — —
第46図23	1-17	壺	SM-SYU	1226～1228 1903	— (6.7) 4.2	2.5YR5/6 明赤褐色	胴部中位～底部	高台風の底部、胴部はほぼ球胴となる。	胴部外面縦ヘラミガキ、胴部内面ハケメ。内面下位横ナデ。	-97210.914 32937.896 15.614
第46図24	1-18	壺	SM-SYU	1453・1470 1471・1483 2085	10.4 (9.4) —	2.5YR5/6 明赤褐色	口縁部～胴部上半	口縁部は外傾した後、口縁上位に弱い稜を持って直線状に立ち上がる。胴部は内湾して開く。	外面縦ヘラミガキ。口縁部内面横ヘラミガキ。胴部内面ハケメ。	-97209.551 32936.755 15.631
第46図25	1-7	壺	SM-SYU 北１	1176・1245 1312・1335 1785・2085	(11.0) 16.6 5.4	7.5YR5/4 にぶい褐色	口縁部～底部	平底の底部からほぼ球形の胴部へ移行する。頸部に明瞭な屈曲を持って口縁部はわずかに内湾する。	外面縦ヘラミガキ、ほぼ磨滅。胴部内面ハケメ・輪積み痕。内外面籾殻痕。	-97211.799 32937.043 15.555
第46図26	1-8	壺	SM-SYU	866	8.5 12.5 3.9	7.5YR4/3 褐色	完形	平底の底部から外傾して開いた後、内湾する。頸部に明瞭な屈曲を持ち、口縁部は外傾して立ち上がる。	口縁部外面縦ヘラミガキ→横ナデ、口縁部内面横ナデ。胴部外面一部横ヘラミガキ、胴部内面ハケメ。黒斑。	-97213.642 32938.897 15.460
第47図１	1-2	壺	SM-SYU	941 944 950	12.4 17.3 4.9	7.5YR5/4 にぶい褐色	口縁部～底部	平底の底部。胴部下半がわずかに張り出し緩い稜線を形成。頸部はやや太く、口縁部はわずかに外反する。	外面・口縁部内面縦ヘラミガキ。胴部外面ハケメ→ヘラミガキ、胴部内面ハケメ。	-97208.156 32937.561 15.849
第47図２	1-3	壺	SYU 覆土	1694 3087 3092	— (13.7) 5.4	7.5YR5/4 にぶい褐色	口縁部～底部	平底の底部からやや外傾して立ち上がった後、内湾する。口縁部は外傾して立ち上がる。	外面・口縁部内面縦ヘラミガキ。頸部外面ハケメ→縦ヘラミガキ。胴部内面上部ハケメ。	-97219.323 32938.401 15.139
第47図３	1-1	壺	SM-SYU	863	(10.6) 17.4 4.6	5YR5/4 にぶい赤褐色	口縁部～底部	底部は反り気味に立ち上がり、胴部上半は弱い稜を持って内湾する。頸部は明瞭な屈曲を持ち、口縁部は外反して開く。	外面・口縁部内面ヘラミガキ。胴部内面ハケメ。輪積み痕。煤付着。	-97208.028 32937.645 15.811
第47図４	1-16	壺	SM-SYU	1285・1286 1294～1296 1899・1911	12.1 18.1 5.6	5YR5/6 明赤褐色	口縁部～底部	やや凹んだ底部。胴部下半の器壁は厚い。頸部の径は小さく、強く屈曲する。頸部に１本の沈線を有する。	外面ハケメ→縦ヘラミガキ。口縁端部外面横ナデ。口縁部内面縦ヘラミガキ→横ナデ。胴部内面ハケメ、輪積み痕。	-97210.149 32937.883 15.724
第47図５	T71	壺	SM-SYU 東７覆土	—	(10.4) (4.1) —	10YR4/2 灰黄褐色	口縁部	口縁部は外反する。口縁端部はナデ。	外面ハケ→横ヘラミガキ。内面横ヘラミガキ。	— — —
第47図６	1-28	壺	SD2・SD3 覆土	—	— (7.5) 7.2	7.5YR6/4 にぶい橙色	胴部下半～底部	平底の底部から直線的に立ち上がった後、屈曲して内湾する。	外面横ヘラミガキ、外面下位指頭圧痕、内面ハケメ→ナデ調整。屈曲部に輪積み痕。底部木葉痕。	-97237.890 32942.697 14.908
第47図７	1-33	壺	表採	3862	— (8.8) 6.4	7.5YR5/4 にぶい褐色	胴部中位～底部	底部やや下半でわずかに屈曲する。	外面稜上位縦ヘラミガキ、稜下位横ヘラミガキ。内面ハケメ。輪積み痕。	-97278.570 32914.262 15.063
第47図８	1-26	壺	SM-SYU	867	— (9.8) —	7.5YR5/4 にぶい褐色	胴部	球形に近い胴部だが、下位に弱い稜を持つ。	外面磨滅、縦位のヘラミガキ？内面ハケメ・輪積み痕。不透明白色の砂粒多い。	-97211.037 32936.334 15.590
第47図９	1-30	壺	SM-SYU	1185 1213	— (7.0) 5.3	5YR5/4 にぶい赤褐色	胴部下半～底部	底部中央がわずかに窪み、厚くつくられる。胴部は稜を持って内湾する。	外面上位横ヘラミガキ、下位縦ヘラミガキ。内面ハケメ・輪積み痕。	-97212.339 32937.241 15.454
第47図10	1-13	壺	SM-SYU	17～21 38・51 54～58	— (20.6) 7.6	7.5YR5/4 にぶい褐色	頸部～底部	輪台状の底部、胴部はやや長く、中央より上位に最大径を有する。	外面縦ヘラミガキ、やや磨滅。内面ハケメ・胴部上位に接合痕。	-97225.983 32938.899 14.887
第47図11	1-22	壺	SM-SYU	1181・2960 2993・3029 3030・3142	— (19.3) —	10YR5/3 にぶい黄褐色	頸部～胴部下半	頸部は直線状に立ち上がった後、外反する。胴部は内湾する。	磨滅激しい。胴部内面ハケメ・輪積み痕。不透明白色の砂粒を多く含む。	-97212.271 32937.040 15.488

第 12 表　周溝内および周辺の土器観察表（4）

図版No.	実測番号	器種	出土地点	遺物No.	口径 器高 底径	色調	残存部位	形態の特徴	技法の特徴	X 座標 Y 座標 Z 座標
第48図１	T98	壺	SM-SYU 北１覆土	—	— — —	7.5YR5/4 にぶい褐色	口縁部	直線的に開いた後、屈曲を持ってさらに開く。外面下位に２本の隆帯を貼り付ける。	外面ハケメ→横ナデ。内面やや磨滅。	— — —
第48図２	T101	壺	SM-SYU 東７覆土	—	— — —	5YR5/6 明赤褐色	口縁部	口縁部は外反して立ち上がる。頸部に隆帯を貼り付け、さらに刺突文を加える。	内外面ハケメ→頸部付近外面横ナデ。	— — —
第48図３	T102	壺	SM-SYU 北２覆土	—	— — —	5YR5/4 にぶい赤褐色	口縁部	口縁部は直線的に開く。頸部に隆帯を貼り付け、斜めに刺突文を加える。	外面ハケメ→縦ヘラミガキ。内面横ナデ。	— — —
第49図１	T46	鉢	SM-SYU	1373	(23.8) (5.4) —	7.5YR5/4 にぶい褐色	口縁部～頸部	口縁部はやや外反し、口唇は丸くつくられる。	外面ハケメ→ヘラミガキ？→ナデ調整。外面は磨滅進む。内面ハケメ→縦ヘラミガキ。	-97209.755 32936.879 15.691
第49図２	2-12	鉢	SYU 覆土	1900	(15.6) 18.0 6.9	5YR4/3 にぶい赤褐色	口縁部～底部	わずかに輪台状の底部。胴部はほぼ球胴だが上半と下半で緩く屈曲する。	内外面ハケメ。	-97209.999 32938.017 15.634
第49図３	2-11	鉢	SM-SYU	1387～1389 2036・2278 2339・2349	(14.0) 17.2 5.7	7.5YR4/3 褐色	口縁部～底部	平底の底部は厚くつくられ、胴部はほぼ球形、口縁部は短くわずかに外反する。	外面磨滅。内面ハケメ。	-97209.637 32936.503 15.628
第49図４	2-35	鉢	SM-SYU 表採	1216・1230 1232・1234 1468	11.3 (10.7) —	5YR5/4 にぶい赤褐色	口縁部～胴部下半	頸部で厚くなり、口縁部はわずかに外反する。	口縁部内外面横ナデ。胴部外面磨滅、胴部内面ハケメ、胴部下半に輪積み痕。	-97211.552 32937.964 15.518
第49図５	2-19	鉢	SM-SYU	1403	(12.2) 7.3 2.9	7.5YR5/4 にぶい褐色	口縁部～底部	窪んだ底部から内湾して立ち上がり、口縁部はやや外傾する。	口縁部外面ハケメ→横ナデ。胴部外面・内面ハケメ。底部ハケメ→ナデ。	-97206.655 32936.666 15.899
第49図６	2-13	鉢	SYU 覆土	—	(13.1) 8.5 1.3	5YR4/4 にぶい赤褐色	口縁部～底部	窪んだ底部からやや内湾して立ち上がる。口縁部と胴部の境界が不明瞭となっている。	口縁部外面ハケメ→横ナデ。胴部外面・内面ハケメ。底部ハケメ→ヘラミガキ。	— — —
第49図７	2-10	鉢	SM-SYU	—	12.3 7.4 2.5	5YR4/4 にぶい赤褐色	口縁部～底部	やや窪んだ底部からやや内湾して立ち上がる。口縁部も内湾して開く。	口縁部内外面横ナデ。胴部内外面ハケメ。	— — —
第49図８	T58	鉢	SM-SYU 北３	—	(12.3) (5.4) —	5YR4/4 にぶい赤褐色	口縁部～胴部上半	口縁部外面は外傾した後、稜を持って直立する。口縁部内面・胴部は内湾して立ち上がる。	口縁部外面および頸部強い横ナデ。頸部内面横ナデ。胴部内面ケズリ。	— — —
第50図１	1-36	小形壺	SM-SYU	1257 1260	9.0 (10.9) —	5YR5/6 明赤褐色	口縁部～胴部下半	口縁部は複合口縁であり、頸部との境界に輪積み痕が認められる。胴部下位に弱い稜がある。	口縁部外面横ナデ、口縁部内面ハケメ、口唇近く横ナデ。胴部外面ハケメ→ヘラミガキ、胴部内面ハケメ。内面輪積み痕。	-97210.428 32939.073 15.607
第50図２	4-8	小形壺	SM-SYU	864	5.1 7.1 4.3	7.5YR5/3 にぶい褐色	完形	平底の底部から外反しながら立ち上り、やや偏平な胴部を形成する。頸部にも接合痕を残し、口縁部は折り返されて外傾する。	口縁部内面ハケメ、円形浮文１点。胴部外面ハケメ・粘土浮文１点貼り付けあり、胴部内面輪積み痕。	-97210.168 32938.162 15.715
第50図３	1-6	小形壺	SM-SYU SK1	79・84・90 92・93 695	8.1 14.8 6.7	7.5YR4/3 褐色	口縁部～底部	平底の底部から外傾して立ち上がった後、内湾する。やや肩部が張る。折り返し口縁を有し、外反する。	口縁部内外面横ナデ。胴部外面縦ヘラミガキ、胴部内面ハケメ・輪積み痕。胴部上半円形浮文１点。底部木葉痕。	-97221.429 32939.213 14.747
第50図４	4-7	小形壺	SM-SYU	889	8.0 9.0 4.5	7.5YR4/3 褐色	完形	「切り子」状の底部は厚く、胴部最大径付近の内外面に接合痕が認められる。口縁上半部にやや膨大した部分があり、複合口縁状となる。	口縁部外面ハケメ→横ナデ、口縁部内面横ナデ。胴部外面縦ヘラケズリ・ハケメ、胴部内面ハケメ。	-97206.007 32935.799 15.864
第50図５	4-25	小形壺	SM-SYU	360	(8.5) 13.6 4.8	7.5YR5/4 にぶい褐色	口縁部～底部	輪台状の底部。胴部は外反して立ち上がり、下半に弱い稜をつくる。口縁部は上半は膨大して複合口縁状となる。	口縁部外面ハケメ→横ナデ、口縁部内面上部横ナデ。以下底部までハケメないしヘラケズリ。頸部～胴部外面ハケメ。	-97242.821 32926.259 14.892
第50図６	1-4	小形壺	SM-SYU	1151・1152 1165・1166 1897・1952	(9.8) 15.6 5.7	7.5YR5/3 にぶい褐色	口縁部～底部	平底の底部から胴部は外傾して立ち上った後内湾し、やや長胴を呈する。口縁部は外反して立ち上がる。	口縁部内外面ハケメ→横ナデ。胴部外面縦ヘラミガキ、胴部内面下半横ハケメ、内面上半ヘラケズリ。輪積み痕。底面籾痕。	-97211.818 32936.679 15.585
第50図７	1-32	小形壺	SM-SYU 北	869 1361 1458	10.4 (16.5) (6.5)	2.5YR5/6 明赤褐色	口縁部～底部	平底の底部からわずかに外反して立ち上がり、胴部上半で強く内湾、ここに輪積み痕を残す。頸部は強く屈曲する。口端一部面取。	口縁部内外面ハケメ→横ナデ。胴部外面ハケメ→斜め→縦ヘラミガキ、胴部内面ハケメ。底面ヘラミガキ。輪積み痕。	-97209.539 32935.812 15.626
第50図８	1-11	小形壺	SM-SYU	729	(10.4) 14.9 5.8	5YR4/4 にぶい赤褐色	口縁部～底部	平底の底部から直線的に立ち上がった後、胴部上半で内湾する。肩部が張り、頸部内面に稜が形成される。	口縁部内外面ハケメ→横ナデ。頸部外面横ヘラミガキ。胴部外面ヘラミガキ、胴部内面ハケメ。底面ヘラミガキ。輪積み痕。	-97220.998 32938.346 14.752
第50図９	4-5	小形壺	SK1 東７・ベルトH SM-SYU	3060 3077 3103	(9.2) 11.4 5.1	5YR4/4 にぶい赤褐色	口縁部～底部	胴部の内湾はやや緩いが頸部は鋭く外反し、稜線を形成する。口縁部はやや外反する。底部に穿孔あり。	口縁部外面ハケメ→横ナデ。胴部外面上位横ヘラミガキ、下位縦ヘラミガキ。内面ハケメ。底面にヘラミガキ。	-97220.181 32939.058 14.911
第50図10	4-6	小形壺	北覆土 東覆土	—	(9.6) 12.6 5.7	5YR5/4 にぶい赤褐色	口縁部～底部	やや膨らみのある底部から、胴部は内湾して立ち上がる。口縁部は直線状に立ち上がった後やや内湾する。	口縁部内外面ハケメ→横ナデ。胴部外面縦ヘラミガキ、胴部内面ハケメ。底部ヘラケズリ。輪積み痕。底面ヘラミガキ。	— — —
第50図11	4-23	小形壺	SM-SYU	310	(8.9) 9.9 4.2	7.5YR5/4 にぶい褐色	口縁部～底部	平底の底部から胴部は外反して立ち上がった後、内湾する。頸部のくびれは弱いが稜を形成する。口縁部はやや外反する。	口縁部内外面横ナデ。胴部外面上半横ヘラミガキ（やや磨滅）、下半縦ヘラミガキ、胴部内面ハケメ。	-97206.633 32911.406 16.327
第50図12	4-24	小形壺	SM-SYU	235・249 253・254 288・450 279～283	(9.0) 11.1 5.5	7.5YR5/4 にぶい褐色	口縁部～底部	やや凹みのある底部から胴部は外反して立ち上がった後、強く内湾する。口縁部はやや外反して立ち上がる。	口縁部外面ハケメ、口縁部内面上位横ナデ・下位横ヘラミガキ。胴部内面ハケメ、胴部外面ハケメ→縦ヘラミガキ。	-97227.102 32939.154 14.969
第50図13	4-1	小形壺	SM-SYU 東７	72・698 719・799 1670・3071	(8.7) 10.3 (4.9)	5YR4/4 にぶい赤褐色	口縁部～底部	底部はヘラケズリのため切り子状となる。肩部で強く外反する。口縁部は外傾し、端部は弱く面取りしている。口縁部は歪み波状となる。	口縁部内外面ハケメ。胴部外面ヘラミガキ（下位→上位）。胴部内面ハケメ。底面ヘラケズリ。	-97220.938 32939.831 15.005
第50図14	T57	小形壺	SM-SYU	1498 1504	(9.1) (5.8) —	7.5YR5/4 にぶい褐色	口縁部～胴部上半	口縁部はやや外反して立ち上がり、頸部に明瞭な屈曲を持つ。	口縁部内外面横ナデ。胴部外面ハケメ→ナデ？胴部内面～頸部ハケメ。	-97216.570 32938.158 15.294

第 13 表　周溝内および周辺の土器観察表（5）

図版No.	実測番号	器種	出土地点	遺物No.	口径 器高 底径	色調	残存部位	形態の特徴	技法の特徴	X 座標 Y 座標 Z 座標
第50図15	4-20	小形壺	SM-SYU	672 3075	6.7 9.0 4.5	7.5YR5/4 にぶい褐色	口縁部～底部	底部はやや窪み、高台状底部となる。口縁部は短く外傾して立ち上がる。底部上と頸部下に輪積み痕を明瞭に残す。	口縁部内外面横ナデ。胴部外面ハケメ。ハケメ後、円形浮文 2 点を付ける。	-97221.117 32938.148 14.886
第50図16	4-9	小形壺	SM-SYU	1179	8.8 11.9 (5.6)	5YR5/4 にぶい赤褐色	口縁部～底部	平底の底部から胴部はやや外反して立ち上がった後、内湾する。口縁部は外傾する。	口縁部内外面ハケメ→一部ナデ調整。胴部外面上位ハケメ、中～下位ヘラケズリ、胴部内面輪積み痕。	-97212.028 32936.833 15.467
第51図１	4-35	小形壺	SM-SYU	1010	(6.9) 11.3 5.2	7.5YR5/4 にぶい褐色	口縁部～底部	やや膨らんだ底部。底部と頸部が厚くつくられる。口縁外側が強くナデられ、丸みを帯びている。	口縁部内外面ハケメ→横ナデ。肩部横位ヘラケズリ。胴部外面上位ハケメ、胴部下位ヘラケズリ、胴部内面ハケメ。輪積み痕。	-97214.704 32937.321 15.410
第51図２	1-15	小形壺	SB24 床	865	(10.2) 12.7 6.8	7.5YR5/4 にぶい褐色	口縁部～底部	やや凹んだ底部。頸部のくびれは弱く、緩やかに口縁部に続く。頸部の接合痕が階段状に残る。	口縁部内外面ハケメ→横ナデ。頸部内面輪積み痕。胴部外面ほぼ磨滅。	-97215.349 32938.948 15.208
第51図３	4-38	小形壺	SM-SYU	—	— (8.0) 4.5	5YR5/4 にぶい赤褐色	頸部～底部	やや細長い胴部。頸部に緩い稜線。	外面縦ヘラミガキ。内面ハケメ、輪積み痕。	— — —
第51図４	1-5	小形壺	SM-SYU SK1	709・1672 3043・3074 3097・3102	9.5 13.7 7.1	7.5YR4/3 褐色	口縁部～底部	やや扁平な胴部。頸部に強い屈曲。口縁部は外反して立ち上がる。端部は面取りしている。	口縁部内外面横ナデ。胴部外面縦ヘラミガキ、胴部内面ハケメ。輪積み痕・底部深い木葉痕。	-97221.024 32939.110 14.878
第51図５	4-39	小形壺	SM-SYU	—	(7.5) (8.0) —	7.5YR5/4 にぶい褐色	口縁部～胴部下半	底部と頸部が厚くつくられる。腰高な胴部。短い口縁部。	口縁部外面ハケメ→横ナデ、口縁部内面横ナデ。胴部外面縦ヘラミガキ、胴部内面ハケメ。	— — —
第51図６	T59	小形壺	SM-SYU 東７・北１ ベルト H	1068	— (8.0) (7.0)	5YR5/4 にぶい赤褐色	胴部～底部	やや偏平な胴部。	内外面ハケメ。内面輪積み痕。	-97212.841 32937.629 15.523
第51図７	4-34	小形壺	SM-SYU	1005	— (8.4) 4.6	5YR5/4 にぶい赤褐色	胴部～底部	微妙に凹んだ底部。やや腰高な胴部。	口縁部内外面ハケメ→ナデ。胴部外面縦ヘラミガキ。	-97215.105 32937.683 15.392
第51図８	T56	小形壺	SM-SYU 東７・北１	—	(8.0) (6.5) —	5YR5/6 明赤褐色	口縁部～胴部上半	頸部の屈曲弱く、なだらかに口縁部に移行する。	外面ハケメ→横ナデ。内面指頭圧痕。内外面やや磨滅。	— — —
第51図９	T55	小形壺	SM-SYU	1641	(6.1) (4.7) —	7.5YR5/4 にぶい褐色	口縁部～胴部上半	やや強く外反する口縁部。頸部のくびれは弱い。	口縁部内外面ハケメ。内外面やや磨滅。	-97219.519 32938.180 15.217
第51図10	T53	小形壺	SM-SYU 覆土	—	(4.6) (3.8) —	7.5YR4/2 灰褐色	口縁部～胴部	頸部に直線状に輪積み痕を残す。	口縁部外面ハケメ。胴部外面ハケメ→ナデ？	— — —
第51図11	4-19	小形壺	SM-SYU	854	(7.3) 9.4 4.5	5YR5/6 明赤褐色	口縁部～底部	中央部がわずかに窪む底部。底部は厚くつくられる。頸部のくびれは弱く、口縁部はわずかに内湾する。	口縁部外面横ナデ。頸部外面ハケメ。胴部外面下位ヘラケズリ、胴部内面ハケメ。	-97211.331 32940.212 16.048
第51図12	T62	小形壺	SM-SYU	879	(7.9) (8.0) —	7.5YR5/4 にぶい褐色	口縁部～胴部下半	口縁部はやや内湾して立ち上がり、口唇部に向けて薄くなる。	口縁部内外面横ナデ。胴部外面ハケメ、胴部外面下半強いナデ、胴部内面ハケメ。輪積み痕。	-97211.394 32937.501 15.638
第51図13	4-4	小形壺	SM-SYU	1031・1048 1751・1753 1755・1884	(6.6) 8.5 3.9	7.5YR5/4 にぶい褐色	口縁部～胴部	中央部がわずかに窪む底部。底部は薄くつくられる。頸部内面は鋭く屈曲し、稜線を形成する。	口縁部外面横ナデ→ハケメ、口縁部内面ハケメ→横ナデ。胴部外面ヘラケズリ、胴部内面横ナデ。ほぼ磨滅。	-97212.431 32936.464 15.454
第51図14	4-2	小形壺	SK1 SM-SYU	1685・3086 3091・3098 3176・3182	6.6 7.7 6.7	5YR4/4 にぶい赤褐色	口縁部～底部	かなり窪んだ高台風の底部。扁平な胴部。口縁端部は明瞭に面取りしている。	口縁部外面ハケメ→ナデ、口縁部内面横ナデ。胴部外面斜めヘラミガキ、胴部内面ハケメ。	-97218.999 32938.882 15.060
第51図15	4-21	小形壺	SM-SYU 東３・東７	859 3066	(5.2) 8.6 5.1	7.5YR4/3 褐色	ほぼ完形	粘土を環状に貼り付けて高台風の底部とする。胴部上半に緩い稜を持つ。口縁部はほぼ直立する。	口縁部内外面横ナデ。頸部～肩部外面ハケメ。胴部内面ヘラ調整。輪積み痕。	-97220.861 32939.104 14.762
第51図16	4-3	小形壺	SK1	3095・3179	(7.1) 6.5 5.7	2.5YR4/4 にぶい赤褐色	口縁部～底部	平坦な底部からあまり膨大せず胴部に至る。頸部は強く屈曲し、口縁端部は面取りしている。	口縁部内外面ハケメ→ナデ。胴部外面横ヘラミガキ、胴部内面ハケメ。底面ヘラミガキ。	-97220.227 32938.674 14.805
第51図17	4-32	小形壺	SM-SYU	1595	(4.0) 6.4 3.6	10YR4/2 灰黄褐色	口縁部～底部	中央部がかなり窪んだ高台風の底部。扁平な胴部。口縁部はわずかに内傾する。	口縁部内面・外面上部にナデ。頸部と胴部上半部に輪積み痕。胴部外面ハケメ。	-97218.463 32937.158 14.986
第51図18	4-28	小形壺	SM-SYU	193	— (5.2) 5.2	5YR5/4 にぶい赤褐色	胴部～底部	やや窪んだ高台風の底部。最大径は胴部下半。	外面ハケメ→ナデ？内面ハケメ。輪積み痕。	-97212.743 32937.913 15.530
第51図19	4-18	小形壺	SYU 覆土	69・70・78	5.7 6.7 4.2	7.5YR5/3 にぶい褐色	口縁部～底部	平底の底部から胴部は内湾して立ち上がる。頸部は明瞭な屈曲を持ち、口縁部は外傾して立ち上がる。	口縁部外面ハケメ→横ナデ、口縁部内面横ナデ。胴部外面ハケメ、胴部内面輪積み痕。	-97221.128 32940.035 15.010
第51図20	4-33	小形壺	SM-SYU	3068 3168	(5.0) 6.0 3.2	7.5YR5/3 にぶい褐色	口縁部～底部	やや窪んだ高台風の底部。口縁部は直立する。	口縁部内外面ナデ。胴部外面ナデ。胴部内面ヘラ調整。外面円形浮文 1 点。	-97220.325 32939.119 14.911
第51図21	4-40	小形壺	SM-SYU	—	— (5.0) —	7.5YR5/4 にぶい褐色	頸部～胴部下半		胴部外面ハケメ→横ナデ。胴部内面横ナデ。	— — —
第51図22	1-29	小形壺	表採・覆土	—	— (9.7) —	2.5YR5/6 明赤褐色	胴部		外面ハケメ→ヘラミガキ。内面ハケメ→横ナデ。輪積み痕。内面に広く赤彩。	— — —
第52図１	4-11	小形鉢	SM-SYU	935	5.9 5.9 4.8	5YR6/6 橙色	完形	口縁部は直立する。	口縁部内外面ハケメ→ナデ。胴部外面ほぼ磨滅、胴部内面ハケメ。輪積み痕。	-97211.398 32937.575 15.532

第 14 表　周溝内および周辺の土器観察表（6）

図版No.	実測番号	器種	出土地点	遺物No.	口径 器高 底径	色調	残存部位	形態の特徴	技法の特徴	X 座標 Y 座標 Z 座標
第52図２	4-29	小形鉢	SM-SYU	1225	— (5.1) 3.5	7.5YR4/3 橙色	頸部～底部	やや凹んだ厚い底部。最大径は底部直上にある。	胴部外面稜上位ヘラミガキ、稜下位ハケメ。内面ハケメ→横ナデ。	-97211.259 32938.056 15.670
第52図３	4-14	小形鉢	SYU 覆土	—	(3.8) 4.5 3.3	7.5YR5/4 にぶい褐色	口縁部～底部	胴部最大径は頸部直下。わずかに内傾する口縁部。	口縁部内外面指頭圧痕。胴部外面ハケメ、胴部内面ヘラ調整。	— — —
第52図４	4-13	小形鉢	SM-SYU	660	5.4 5.5 3.5	5YR4/6 赤褐色	完形	輪台状の厚い底部。口縁部は波状となる。	口縁部外面ハケメ→横ナデ、口縁部内面横ナデ。胴部外面ヘラケズリ→ヘラミガキ。	-97222.332 32938.920 14.869
第52図５	4-15	小形鉢	SM-SYU	861	(5.0) 5.5 4.3	7.5YR5/4 にぶい褐色	ほぼ完形	わずかに窪んだ底部。口縁部はわずかに外傾反する。	口縁部外面ハケメ→横ナデ、口縁部内面横ナデ。口縁部内面円形浮文１点。胴部内外面ハケメ。	-97206.629 32936.652 15.934
第52図６	4-22	小形鉢	SM-SYU	169	(8.1) 7.6 4.8	5YR4/6 赤褐色	口縁部～底部	底部は厚くつくられ、外反しながら立ち上がる。頸部は強く屈曲し、稜線を形成する。口端は面取りされる。	口縁部外面ハケメ→ナデ。内面全体横ナデ。胴部外面ハケメ？→粗いヘラケズリ。	-97221.228 32939.545 14.754
第52図７	4-36	小形鉢	SM-SYU	727 1651	(9.2) (6.3) —	5YR4/4 にぶい赤褐色	口縁部～胴部中位	偏平な胴部。頸部でやや強く外反して口縁部に続き、内面に稜線を形成する。口端は面取りされる。	外面全体に縦位のハケメ→口唇部付近に横ナデ。内面全体にハケメ。	-97221.065 32938.522 14.724
第52図８	T54	小形鉢	SM-SYU 東７覆土	—	(7.8) (5.0) —	7.5YR5/4 にぶい褐色	口縁部～胴部上半	口縁部わずかに内湾する。	口縁部内外面横ナデ。頸部～胴部外面ハケメ。内面頸部付近ハケメと指頭圧痕。	— — —
第52図９	T54	小形鉢	SM-SYU 東７覆土	—	(7.8) (5.0) —	7.5YR5/4 にぶい褐色	口縁部～胴部上半	口縁部わずかに内湾する。	口縁部内外面横ナデ。頸部～胴部外面ハケメ。内面頸部付近ハケメと指頭圧痕。	-97210.497 32937.327 15.694
第52図10	4-12	小形鉢	SM-SYU	1678?	5.4 4.8 4.3	5YR4/4 にぶい赤褐色	完形	わずかに窪んだ底部から直立気味に立ち上がる。口縁は短く外傾する。口縁内面は指頭圧痕により面取りされる。	内外面ナデ。内面指頭圧痕。器面の凹凸が激しい。	-97219.216 32938.654 14.953
第52図11	4-16	小形鉢	SM-SYU	2368?	7.4 4.0 1.4	7.5YR4/4 褐色	完形	底部から口縁に向けてしだいに薄くつくられていく。	内外面縦ヘラミガキ。磨滅。	-97202.235 32928.427 16.575
第52図12	4-26	小形鉢	SM-SYU	6247	(5.0) 2.8 3.2	7.5YR5/4 にぶい褐色	口縁部～底部	内面の断面形は、底部中央からそまま体部に移行する。波状口縁？	表裏とも指頭による調整。	-97292.203 32906.653 14.913
第52図13	4-27	小形鉢	SYU 覆土	—	— (4.2) 3.3	7.5YR4/2 灰褐色	胴部～底部	口径と底径の差がほとんどない箱形を呈する。	内外面ナデおよび指頭圧痕。	— — —
第52図14	2-14	小形鉢	SM-SYU	708 714	(10.9) 5.9 5.4	7.5YR5/3 にぶい褐色	口縁部～底部	平坦な底部からわずかに内湾して体部に至る。	口縁部外面ハケメ→横ナデ？内面上部ヘラミガキ→口縁付近横ナデ。	-97221.073 32939.020 14.910
第52図15	4-37	小形鉢	SM-SYU	893 894	— (5.5) 3.7	7.5YR5/4 にぶい褐色	口縁部～底部	平底の底部から直立気味に外傾して立ち上がり、胴部上位でわずかに内湾する。	内外面ハケメ。外面口縁付近横ナデ。輪積み痕。	-97206.383 32936.267 15.970
第52図16	4-10	小形鉢	耕作土？	—	6.1 4.1 3.8	5YR4/4 にぶい赤褐色	完形	平底の底部からわずかに内湾しながら口縁部に至る。	外面ハケメ→ヘラミガキ。内面ハケメ。	— — —
第53図１	T24	台付甕	SM-SYU	3433	(19.7) (3.9) —	7.5YR4/3 褐色	口縁部	口縁部は外反して立ち上がり、口縁端部でわずかに内湾する。口縁端部に細かい刻み目を有する。	内外面ハケメ、外面煤付着。	-97242.223 32928.460 15.066
第53図２	2-32	台付甕	SD2・SD3	—	(22.7) (12.7) —	10YR3/2 黒褐色	口縁部～胴部下半	胴部は球形。口縁部はゆるやかに外反して立ち上がる。	口縁部外面ハケメ→横ナデ、口縁部内面ハケメ。胴部外面ハケメ、胴部内面ハケメ→横ナデ。口縁端部に刻み目を有する。外面煤付着。	— — —
第53図３	2-16	台付甕	SD3 覆土	3705・3725 3726・3728 3730	(17.5) (13.7) —	2.5YR5/6 明赤褐色	口縁部～胴部下半	やや偏平な胴部。口縁部は緩やかに外反して立ち上がる。口縁部は面取りしている。	外面・口縁部内面ハケメ。胴部内面ハケメ→横ナデ、口縁部外面・胴部内面輪積み痕。煤付着。	-97278.906 32914.721 15.157
第53図４	T26	台付甕	SM-SYU 東７覆土	—	(11.6) (5.8) —	7.5YR5/3 にぶい褐色	口縁部～胴部上位	頸部の内湾がやや強く、稜線を形成する。	口縁部内外面ハケメ。胴部内面ヘラケズリ。輪積み痕。	— — —
第53図５	T33	台付甕	SM-SYU	1137	(13.4) (5.0) —	5YR4/3 にぶい赤褐色	口縁部～頸部	頸部は緩やかに屈曲する。口縁端部が外側に膨らむ。	外面・胴部内面ハケメ。口縁端部内面ハケメ→横ナデ。	-97210.989 32939.920 15.714
第53図６	2-31	台付甕	SM-SYU	3487	(19.4) (12.4) —	7.5YR5/4 にぶい褐色	口縁部～胴部上半	やや偏平な胴部。頸部は緩やかに屈曲する。口縁端部は面取りしている。	内外面ハケメ。	-97242.126 32928.849 14.972
第53図７	T25	台付甕	SM-SYU 東３覆土	—	(23.4) (5.0) —	7.5YR5/4 にぶい褐色	口縁部～頸部	口縁部はやや強く外反して立ち上がり、口縁端部に細かい刻み目を有する。	内外面ハケメ。胴部内面輪積み痕。	— — —
第53図８	T60	台付甕	SD2・SD3 覆土	—	(17.5) (2.8) —	7.5YR5/4 にぶい褐色	口縁部	口縁部は外反し、口縁端部に刻み目を有する。	内外面ハケメ。口縁部外面輪積み痕。	— — —
第53図９	T31	台付甕	SM-SYU ベルトR	—	(17.2) (3.1) —	5YR4/2 灰褐色	口縁部～頸部	口縁部はやや強く外反する。口縁端部を面取りしている。	内外面ハケメ。外面煤付着。	— — —
第53図10	T23	台付甕	SM-SYU 東３覆土	—	(16.3) (5.1) —	7.5YR4/2 灰褐色	口縁部～胴部上位	折り返し口縁で、口縁部はやや強く外反する。口縁端部に刻み目を有する。	口縁部外面指頭圧痕。胴部内外面ハケメ。外面煤付着。	— — —

第 15 表　周溝内および周辺の土器観察表（7）

図版No.	実測番号	器種	出土地点	遺物No.	口径 器高 底径	色調	残存部位	形態の特徴	技法の特徴	X 座標 Y 座標 Z 座標
第53図11	T36	台付甕	SM-SYU 覆土	—	(20.2) (3.7) —	7.5YR4/3 褐色	口縁部	口縁部は外反して立ち上がり、口縁端部を面取りしている。	外面ハケメ→横ナデ、内面口唇部付近横ナデ。	— — —
第53図12	T51	台付甕	SD2･SD3 覆土	—	(17.5) (8.3) —	10YR4/2 灰黄褐色	口縁部～胴部上半	口縁部は外傾して立ち上がる。胴部の張りは少ない。口縁端部を面取りしている。	外面ハケメ、煤付着。内面横ナデされ平滑。	— — —
第53図13	T39	台付甕	SM-SYU 東 7 覆土	—	(14.4) (6.7) —	10YR4/2 灰黄褐色	口縁部～胴部上半	口縁部は外傾して立ち上がり、口縁端部を一部外側に折り返す。	口縁部外面横ナデ→ハケメ。胴部外面ハケメ→一部ナデ調整。内面ハケメ。輪積み痕。	— — —
第53図14	T27	台付甕	SM-SYU	353	(18.3) (5.5) —	5YR4/2 灰褐色	口縁部～頸部	口縁部は外傾して立ち上がった後、端部付近でやや外反する。頸部に明瞭な屈曲を持つ。	口縁部内外面ハケメ→横ナデ。胴部内外面ハケメ。外面煤付着。	-97244.714 32927.451 14.924
第53図15	T47	台付甕	SM-SYU 南東	—	(12.9) (2.8) —	5Y3/2 オリーブ黒色	口縁部～頸部	口縁部はわずかに内湾して立ち上がる。	内外面強い横ナデ。煤付着。	— — —
第53図16	T34	台付甕	SM-SYU ベルト J	—	(13.8) (4.3) —	5YR5/4 にぶい赤褐色	口縁部～頸部	口縁部はわずかに内湾して立ち上がる。胴部はあまり張らない。	内外面ハケメ→強い横ナデ。内面輪積み痕。	— — —
第53図17	T73	台付甕	SM-SYU 覆土	—	(9.2) (3.5) —	7.5YR5/3 にぶい褐色	口縁部～頸部	口縁部は外反する。口縁端部を外側にやや折り返す。胴部は内湾して開く。	口縁部外面横ナデ。内面ハケメ。	— — —
第54図１	T43	台付甕	SM-SYU 東 3	—	(16.8) (5.3) —	5YR5/6 明赤褐色	口縁部～頸部	口縁部は外傾して立ち上がり、頸部に明瞭な屈曲を持つ。	口縁部外面ハケメ→横ナデ。胴部内外面ハケメ。内外面やや磨滅。	— — —
第54図２	2-36	台付甕	SM-SYU 覆土	—	(18.8) (8.0) —	5YR4/3 にぶい赤褐色	口縁部～胴部上半	口縁部は強く外反し、頸部に明瞭な屈曲を持つ。	口縁部外面ハケメ→横ナデ、口縁部内面横ナデ。胴部外面ハケメ、胴部内面指頭圧痕。	— — —
第54図３	T40	台付甕	SM-SYU 覆土	—	(15.6) (4.5) —	7.5YR4/3 褐色	口縁部～頸部	口縁部は外反して立ち上がり、頸部に明瞭な屈曲を持つ。	内外面ハケメ→口縁内外面強い横ナデ。	— — —
第54図４	T49	台付甕	SM-SYU	556	(13.0) (6.0) —	7.5YR4/2 灰褐色	口縁部～胴部上半	口縁部は内湾して立ち上がり、胴部は内湾する。胴部はあまり張らない。	口縁部外面ハケメ→横ナデ、口縁部内面横ナデ、胴部外面ハケメ・煤付着。頸部内面輪積み痕。	-97243.701 32925.424 15.019
第54図５	T38	台付甕	表採	—	(24.5) (9.6) —	7.5YR4/3 褐色	口縁部～胴部上半	口縁部はやや内湾して立ち上がり、頸部に明瞭な屈曲を持って胴部は内湾して開く。胴部はあまり張らない。口縁端部を面取りしている。	内外面ハケメ→横ナデ、煤付着。内面輪積み痕。	— — —
第54図６	T100	台付甕	SM-SYU 覆土	—	— — —	7.5YR4/2 灰褐色	口縁部	S 字甕の口縁。シャープな口縁部下隆線。		— — —
第54図７	2-15	台付甕	SM-SYU	925・1408 1418・1421 1423・1936	15.5 (5.9) —	10YR5/3 にぶい黄褐色	口縁部～胴部上半	S 字甕。	口縁部外面横ナデ、内面弱く面取り。頸部刺突文。胴部外面ハケメ､胴部内面横ナデ･指頭圧痕。	-97206.675 32937.285 15.935
第54図８	2-27	台付甕	SM-SYU 東 7	—	(18.1) (8.4) —	7.5YR4/2 灰褐色	口縁部～胴部上半	S 字甕。	口縁部内外面横ナデ。頸部外面ハケメ→横ナデ。胴部外面ハケメ。胴部内面輪積み痕、指頭圧痕。金色の雲母を含む。外面煤付着。	— — —
第54図９	2-28	台付甕	SYU 覆土	—	(18.8) (4.3) —	2.5YR5/3 にぶい赤褐色	口縁部～底部	S 字甕。	口縁部内外面横ナデ。頸部外面ハケメ→横ナデ。胴部外面ハケメ、内面指頭圧痕。金色の雲母を含む。	— — —
第54図10	2-26	台付甕	SYU 覆土	—	(18.3) (5.4) —	5YR5/4 にぶい赤褐色	口縁部～胴部上半	S 字甕。	口縁部内外面横ナデ。頸部外面ハケメ→横ナデ。胴部外面ハケメ。内面指頭圧痕。金色の雲母を含む。	— — —
第54図11	2-21	台付甕	SM-SYU	—	(17.8) (8.1) —	7.5YR4/2 灰褐色	口縁部～胴部上半	S 字甕。	口縁部内外面横ナデ。頸部外面ハケメ→横ナデ。胴部外面ハケメ。内面指頭痕。金色の雲母を含む。	— — —
第54図12	T67	台付甕	SM-SYU 覆土	—	(17.7) (3.9) —	7.5YR4/3 褐色	口縁部～頸部	S 字甕。	口縁部内外面横ナデ。頸部外面ハケメ→横ナデ。胴部外面ハケメ。金色の雲母を含む。	-97244.714 32927.451 14.924
第54図13	T66	台付甕	SM-SYU	594	(17.6) (3.9) —	7.5YR5/3 にぶい褐色	口縁部～頸部	S 字甕。	口縁部内外面横ナデ。頸部外面ハケメ→横ナデ。胴部外面ハケメ。金色の雲母を含む。	-97231.130 32938.198 14.828
第54図14	T97	台付甕	SM-SYU 北 1 覆土	—	— — —	10YR3/2 黒褐色	口縁部～頸部	S 字甕。	口縁部内外面横ナデ。頸部外面ハケメ→横ナデ。胴部外面ハケメ。金色の雲母を含む。外面煤付着。	— — —
第54図15	T64	台付甕	SM-SYU 覆土	271	(16.2) (3.1) —	5YR4/2 灰褐色	口縁部	S 字甕。	口縁部内外面横ナデ。頸部外面ハケメ→横ナデ。胴部外面ハケメ。金色の雲母を含む。外面煤付着。	-97227.627 32938.799 14.878
第54図16	T65	台付甕	SM-SYU 東 1 覆土	—	(10.6) (3.9) —	5YR5/4 にぶい赤褐色	口縁部～頸部	S 字甕。	口縁部内外面横ナデ。頸部外面ハケメ→横ナデ。胴部外面ハケメ。金色の雲母は目立たない。	— — —
第55図１	2-29	台付甕	SYU 覆土	—	(16.8) (4.2) —	7.5YR4/3 褐色	口縁部～胴部上半	S 字甕。	口縁部内外面横ナデ、頸部外面横ナデ→ハケメ。胴部外面ハケメ。内面指頭圧痕。金色の雲母を含む。	— — —
第55図２	2-22	台付甕	SM-SYU 北 1・北 2	—	(17.6) (7.2) —	5YR5/4 にぶい赤褐色	口縁部～胴部上半	S 字甕。	口縁部内外面横ナデ、頸部外面横ナデ→ハケメ。胴部外面縦→斜めハケメ。内面指頭圧痕。金色の雲母を含む。	— — —

第 16 表　周溝内および周辺の土器観察表（8）

図版No.	実測番号	器種	出土地点	遺物No.	口径 器高 底径	色調	残存部位	形　態　の　特　徴	技　法　の　特　徴	X 座標 Y 座標 Z 座標
第55図３	2-20	台付甕	SM-SYU	—	(21.2) (6.0) —	7.5YR4/2 灰褐色	口縁部～胴部上半	S 字甕。	口縁部内外面横ナデ、頸部内外面ハケメ→強い横ナデ。胴部外面ハケメ。胴部内面指頭圧痕。白雲母？と金色の雲母を含む。	— — —
第55図４	2-6	台付甕	SM-SYU SD2	111	— (7.4) 10.2	7.5YR4/4 褐色	脚部	S 字甕の脚部。端部を折り返す。	脚部外面ハケメ。	-97239.708 32941.561 14.774
第55図５	2-23	台付甕	SM-SYU	150	— (8.6) 7.4	5YR4/3 にぶい赤褐色	胴部下半～脚部	S 字甕の脚部。端部を折り返す。	脚部外面ハケメ。	-97223.918 32940.411 15.005
第55図６	2-25	台付甕	SYU 覆土	—	— (7.6) (10.2)	7.5YR5/4 にぶい褐色	胴部下半～脚部	S 字甕の脚部。端部を折り返す。	脚部外面ハケメ。	— — —
第55図７	2-33	台付甕	SM-SYU 北 1 覆土	—	— (6.2) (8.2)	5YR5/4 にぶい赤褐色	胴部下半～脚部	S 字甕の脚部。端部を折り返す。	脚部外面ハケメ。	— — —
第55図８	2-30	台付甕	SM-SYU 東 4	—	— (5.5) (6.9)	7.5YR5/4 にぶい褐色	胴部下半～脚部	S 字甕の脚部。端部を折り返す。	脚部外面ハケメ。脚部上端と胴部下面にヘラ状工具による調整痕。	— — —
第55図９	T68	台付甕	SM-SYU	—	(19.0) (4.9) —	5YR4/3 にぶい赤褐色	口縁部～頸部	受口状の口縁。口縁端部を面取り。	口縁部内外面横ナデ。胴部外面ハケメ、胴部内面ヘラケズリ。金色の雲母を含む。外面煤付着。	— — —
第55図10	T89	台付甕	SM-SYU 北 1 覆土	—	— — —	7.5YR5/4 にぶい褐色	口縁部	受口状の口縁。口縁端部を面取り。	口縁部内外面横ナデ。胴部外面ハケメ。	— — —
第55図11	T91	台付甕	SM-SYU 東覆土	—	— — —	7.5YR4/2 灰褐色	口縁部	受口状の口縁。口縁端部を面取り。	内外面横ナデ。金色の雲母を含む。	— — —
第55図12	T93	台付甕	SM-SYU	1833	— — —	7.5YR4/3 にぶい赤褐色	口縁部	受口状の口縁。口縁端部を面取り。	内外面横ナデ。外面煤付着。	-97217.879 32938.575 14.966
第55図13	T94	台付甕	SM-SYU 覆土	—	— — —	5YR5/4 にぶい赤褐色	口縁部	受け口状の口縁。口縁端部を面取り。	外面稜線上位・内面横ナデ。外面稜線下位一部ハケメ。	— — —
第55図14	T88	台付甕	SM-SYU ベルト J 覆土	—	— — —	7.5YR4/3 褐色	口縁部～頸部	受口状の口縁。	口縁部内面横ナデ。外面横ナデ→ハケメ。胴部内面ハケメ。稜線上に刻み？	— — —
第55図15	T92	台付甕	SM-SYU 東 4 覆土	—	— — —	5YR4/3 にぶい赤褐色	口縁部	受け口状の口縁。	口縁部外面稜線上位横ナデ、下位ハケメ。外面煤付着。内面横ナデ。	— — —
第55図16	T81	台付甕	耕作土	—	— — —	5YR5/4 にぶい赤褐色	口縁部	受け口状の口縁。	内外面横ナデ。	— — —
第56図１	2-3	台付甕	SD2	3816・3820 4510～4514 4524～4529	17.1 20.5 6.0	7.5YR5/4 にぶい褐色	ほぼ完形	器体に対して小さな脚部。頸部に明瞭な屈曲をもち、口縁部は直線的に立ち上がる。端部は面取りしている。	口縁部外面ハケメ→ナデ。口縁部内面・胴部外面・胴部内面上位ハケメ。脚部内面横ナデ。	-97278.837 32916.995 14.783
第56図２	T85	台付甕	耕作土	—	— — —	5YR4/4 にぶい赤褐色	口縁部	口縁部は複合口縁が付され、直立する。	内外面横ナデ。口縁部内面指頭圧痕。	— — —
第56図３	T76	台付甕	SD16-2 覆土 ベルト東側	—	— — —	5YR5/4 にぶい赤褐色	口縁部	口縁部は複合口縁が付され、直立する。	外面横ナデ。内面横ヘラミガキ。	— — —
第56図４	T83	台付甕	SM-SYU KABU	314	— — —	5YR4/4 にぶい赤褐色	口縁部	口縁部は複合口縁が付され、口縁端部がやや外反する。	内外面横ナデ。胴部内面ヘラケズリ。	-97206.967 32909.604 16.492
第56図５	T90	台付甕	SM-SYU 北 1 覆土	—	— — —	5YR4/4 にぶい赤褐色	口縁部	口縁部は複合口縁が付され、直立する。	内外面横ナデ。煤付着。	— — —
第56図６	T77	台付甕	SM-SYU 東覆土	—	— — —	7.5YR5/3 にぶい褐色	口縁部～頸部	口縁部は複合口縁が付され、直立する。頸部に明瞭な屈曲を持つ。	内外面横ナデ。頸部横位ハケメ。	— — —
第56図７	T86	台付甕	SM-SYU 東 4 覆土	—	— — —	5YR5/4 にぶい赤褐色	口縁部～頸部	口縁部は複合口縁が付され、直立する。	内外面横ナデ。胴部内面ヘラケズリ。	— — —
第56図８	T80	台付甕	SM-SYU 覆土	—	— — —	5YR4/3 にぶい赤褐色	口縁部	口縁部は複合口縁が付される。口縁外面端部を面取りしている。口縁わずかに外反。	内外面横ナデ。口縁部内面指頭圧痕。煤付着。	— — —
第56図９	T78	台付甕	SM-SYU	4851	— — —	2.5YR4/4 にぶい赤褐色	口縁部	口縁部は複合口縁が付され、直立する。口縁わずかに外反。	内外面横ナデ。	-97208.302 32918.541 16.445
第56図10	T84	台付甕	SM-SYU 東 3 覆土	—	— — —	7.5YR3/1 黒褐色	口縁部	口縁部は複合口縁が付され、直立する。口縁わずかに外反。頸部に明瞭な屈曲を持つ。	内外面横ナデ。口縁部内面指頭圧痕。胴部内面ヘラケズリ。外面煤付着。	— — —
第56図11	T87	台付甕	耕作土	—	— — —	10YR3/1 黒褐色	口縁部	口縁部は複合口縁が付され、直立する。口縁外反。	内外面横ナデ。外面煤付着。金色の雲母を含む。	— — —

第 17 表　周溝内および周辺の土器観察表（9）

図版No.	実測番号	器種	出土地点	遺物No.	口径 器高 底径	色調	残存部位	形態の特徴	技法の特徴	X座標 Y座標 Z座標
第57図1	T28	台付甕	SM-SYU 東7覆土	—	(19.0) (4.9) —	7.5YR4/3 褐色	口縁部～頸部	口縁部は短く外反する。口縁端部外面を面取り。	外面横ナデ。口縁部内面ハケメ→横ナデ。胴部内面ヘラケズリ。	— — —
第57図2	T35	台付甕	SM-SYU （攪乱）	351	(15.3) (4.8) —	7.5YR5/4 にぶい褐色	口縁部～頸部	口縁部は外反して立ち上がる。口端の一部に沈線。	外面ハケメ→横ナデ。口縁部外面指頭圧痕、口縁部内面ハケメ。頸部内面輪積み痕。胴部内面ヘラケズリ。	-97242.941 32920.927 15.221
第57図3	T61	台付甕	SM-SYU 表採	805	(18.7) (4.5) —	5YR5/4 にぶい赤褐色	口縁部	口縁部は強く外反する。口縁端部を上下に拡張させ、面取りしている。	内外面ハケメ→横ナデ。	-97206.995 32913.479 16.360
第57図4	2-2	台付甕	北1覆土 北3覆土	2385・2395 2396・2553 2554・3560	19.2 (20.8) —	7.5YR4/3 褐色	口縁部～胴部上半	胴部は内湾して開く。口縁部は強く外反し、口縁端部は上下に拡張させ、面取りしている。	口縁部外面ハケメ→横ナデ、口縁部内面横ナデ、口縁端部横ナデ。胴部内外面ハケメ。煤付着。	-97201.644 32928.418 16.833
第57図5	2-4	台付甕	SK1・SK2	1714・2345 2356・3040 3050・3164	21.1 28.7 9.8	10YR5/4 にぶい黄褐色	ほぼ完形	脚部の接合部は細く、脚じたいも小さい。口縁部は強く外反する。口端部は上下に拡張し、面取りしている。	口縁部内外面・口端部横ナデ。胴部・脚部内外面ハケメ。胴部内面輪積み痕。	-97219.260 32939.465 14.890
第57図6	T42	台付甕	SM-SYU	1487	(19.5) (6.2) —	5YR4/4 にぶい赤褐色	口縁部～頸部	頸部は明瞭に屈曲し、内面に稜を形成する。口縁端部を面取りしている。	内外面ハケメ→横ナデ。やや磨滅。口縁部外面刷毛痕？	-97214.475 32938.870 15.334
第57図7	2-1	台付甕	SD2・SD3	—	22.4 (26.6) —	7.5YR4/3 褐色	口縁部～脚部上半	脚部はやや内湾する。口縁部は外反し、端部は面取りしている。	口縁部内面・胴部外面ハケメ。口縁部外面輪積み痕。煤付着。	— — —
第57図8	T45	台付甕	SD2・SD3 覆土	3744	(13.7) (5.8) —	5YR4/2 灰褐色	口縁部～胴部上半	頸部が強く屈曲する。口縁端部に刻み目を有する。	口縁部内面ハケメ→横ナデ。胴部内外面ハケメ。口縁部外面・胴部内面輪積み痕。外面煤付着。	-97278.738 32912.398 15.136
第57図9	T44	台付甕	SM-SYU 東7覆土	—	(16.4) (3.0) —	5YR5/4 にぶい赤褐色	口縁部	頸部の屈曲はやや弱い。	外面横ナデ。内面ハケメ→横ナデ。輪積み痕。	— — —
第57図10	2-7	台付甕	SM-SYU	3567	— (7.5) 10.4	10YR4/4 褐色	胴部下半～脚部	脚部は内湾して開く。	外面ハケメ。脚裾部下端内外面横ナデ。脚部内面ヘラ状工具の調整。	-97240.062 32930.257 15.490
第58図1	T37	台付甕	耕作土	—	(18.4) (4.8) —	5YR5/3 にぶい赤褐色	口縁部～頸部	口縁部は外傾して立ち上がり、口端部は丸くつくられる。	口縁部外面横ナデ。内外面磨滅。	— — —
第58図2	T41	台付甕	耕作土	—	(19.0) (2.5) —	5YR4/4 にぶい赤褐色	口縁部～頸部	口縁部は強く外反する。口縁端部に凹線。	内外面横ナデ。口縁外面下半に指頭圧痕。	— — —
第58図3	T32	台付甕	主体部	6209	(17.0) (4.1) —	5YR5/4 にぶい赤褐色	口縁部～頸部	口縁部は強く外反する。口縁端部を面取りしている。	内外面ハケメ。	-97224.903 32920.226 20.621
第58図4	T48	台付甕	SM-SYU 覆土	—	(13.2) (4.8) —	5YR5/4 にぶい赤褐色	口縁部～胴部上半	頸部に明瞭な屈曲。口縁部は端部に向けて膨大。口端を面取りしている。	口縁部内面横ナデ。外面・胴部内面ハケメ。胴部内面輪積み痕。	— — —
第58図5	T320	台付甕	SM-SYU 北3覆土	—	— — —	7.5YR5/3 にぶい褐色	胴部	甕の肩部。	内外面ハケメ。外面格子状沈線。	— — —
第58図6	T321	台付甕	SM-SYU 東7覆土	—	— — —	5YR6/6 橙色	胴部	甕の肩部。	内外面ハケメ。外面格子状沈線。	— — —
第58図7	T318	台付甕	SM-SYU 東7覆土	—	— — —	7.5YR4/2 灰褐色	胴部	甕の肩部。	内外面ハケメ。外面格子状沈線。	— — —
第58図8	T319	台付甕	SM-SYU 東1覆土	—	— — —	5YR4/4 にぶい赤褐色	頸部	甕の肩部。	外面格子状沈線。	— — —
第58図9	T2	台付甕	SM-SYU	831	— (6.6) 8.7	5YR5/4 にぶい赤褐色	脚部	脚部はハの字状に開き、脚裾部がやや内湾する。	外面やや磨滅、内面ハケメ。	-97208.492 32917.652 16.481
第58図10	T17	台付甕	SM-SYU	959 1331 1955	— (7.5) (10.0)	5YR5/4 にぶい赤褐色	脚部	脚部はハの字状に開く。	内外面ハケメ。内面脚裾部ハケメ→横ナデ。	-97210.667 32936.810 15.579
第58図11	2-24	台付甕	SM-SYU	1095	— (8.4) (10.0)	7.5YR5/4 にぶい褐色	胴部下半～脚部	脚部は中位がやや膨らむ。胴部は底部から非常に弱い稜を持って外傾して立ち上がる。	内外面ハケメ。	-97213.798 32938.825 15.267
第58図12	2-5	台付甕	HD2	1	— (11.5) 10.1	7.5YR5/4 にぶい褐色	胴部下半～脚部	脚部はハの字状に開き、胴部は内湾して立ち上がる。	脚部内外面ハケメ、内面煤付着。	-97277.676 32935.376 14.359
第58図13	2-8	台付甕	SM-SYU	—	— (7.0) 9.0	7.5YR5/4 にぶい褐色	脚部	脚部はやや内湾して開く。ハケメ後、脚部内外の一部に粘土の貼り付けあり。	外面ハケメ。外面上位のみハケメ→横ナデ。内面横ナデ。	— — —
第58図14	T12	台付甕	SM-SYU	—	— (7.3) (8.9)	7.5YR5/4 にぶい褐色	脚部	脚部はハの字状に開く。	内外面ハケメ、やや磨滅。	— — —
第58図15	T5	台付甕	SD2	3805	— (7.7) 8.0	5YR4/3 にぶい赤褐色	胴部下位～脚部	脚部は内湾して開き、脚裾部が内側に入り込む。胴部は内湾して立ち上がる。	内外面ハケメ。	-97279.125 32913.684 14.835

第 18 表　周溝内および周辺の土器観察表（10）

図版No.	実測番号	器種	出土地点	遺物No.	口径 器高 底径	色調	残存部位	形態の特徴	技法の特徴	X 座標 Y 座標 Z 座標
第58図16	T3	台付甕	SM-SYU 覆土	101	— (7.0) 8.4	7.5YR5/4 にぶい褐色	脚部	脚部は内湾して開く。胴部と脚部の接合痕が明瞭に残る。	内外面ハケメ、脚裾部内外面ハケメ→横ナデ。	-97232.745 32940.782 14.815
第58図17	T11	台付甕	SM-SYU	3564	— (6.3) 9.7	7.5YR5/4 にぶい褐色	脚部	脚部はハの字状に開く。	内外面ハケメ、脚裾部内外面ハケメ→横ナデ。	-97206.281 32912.929 16.393
第58図18	T1	台付甕	SM-SYU 覆土	102	— (6.6) 10.0	7.5YR5/4 にぶい褐色	脚部	脚部はやや内湾して開く。	内外面ハケメ、外面やや磨滅。	-97230.517 32939.263 14.862
第58図19	T21	台付甕	SM-SYU	802	— (7.3) (9.0)	7.5YR5/4 にぶい褐色	胴部下位～脚部	脚部はやや内湾して開き、脚裾部の一部が外側へ折り返す。胴部は外反して立ち上がる。	外面ハケメ、やや磨滅。内面横ナデ。	-97208.171 32914.248 16.463
第58図20	T19	台付甕	SM-SYU	2343	— (7.0) (10.0)	7.5YR4/3 褐色	脚部	脚部は微妙に外反して開く。	内外面ハケメ、やや磨滅。胎土に石片が混じる。	-97209.949 32936.870 15.536
第58図21	T16	台付甕	SM-SYU 東 3 覆土	—	— (7.4) (10.1)	5YR5/4 にぶい赤褐色	脚部	脚部はやや内湾して開く。	内外面ハケメ。	— — —
第58図22	T9	台付甕	ＨＤ１	4472 4481	— (8.2) (9.2)	7.5YR5/4 にぶい褐色	胴部下位～脚部	脚部はハの字状に開き、胴部は外傾して立ち上がる。	外面ハケメ→ナデ調整、内面ハケメ。	-97278.033 32909.746 14.573
第58図23	T18	台付甕	耕作土	—	— (6.7) (10.2)	7.5YR5/4 にぶい褐色	胴部下位～脚部	脚部はやや内湾して開き、胴部は内湾して立ち上がる。	内外面ハケメ、やや磨滅。	— — —
第58図24	T13	台付甕	SM-SYU 北 3	830	— (5.7) (8.1)	5YR5/4 にぶい赤褐色	脚部	脚部はハの字状に開く。	内外面ハケメ。	-97204.019 32917.130 16.567
第58図25	T22	台付甕	SD2･SD3 覆土	—	— (5.8) (8.6)	7.5YR5/4 にぶい褐色	脚部	脚部はやや内湾して開く。	内外面ハケメ、外面やや磨滅。	— — —
第58図26	T14	台付甕	耕作土	—	— (6.0) (8.1)	7.5YR5/4 にぶい褐色	脚部	ハの字状に開き、脚裾部で内湾する。	内外面ハケメ、外面煤付着。	— — —
第58図27	T7	台付甕	SM-SYU 覆土	7	— (6.0) 8.1	5YR4/3 にぶい赤褐色	脚部	脚部はやや内湾して開く。	内外面ハケメ、やや磨滅、内面接合痕。	-97228.301 32941.385 15.041
第58図28	T20	台付甕	SM-SYU	798 1976 2024	— (3.4) (7.0)	7.5YR5/4 にぶい褐色	胴部下位～脚部	脚部はハの字状に開く。	内外面ハケメ。	-97221.275 32938.786 14.557
第58図29	T4	台付甕	SM-SYU	900	— (4.8) 6.8	7.5YR5/4 にぶい褐色	脚部	脚部はやや内湾して開き、脚裾部が内側に入り込む。	内外面ハケメ、脚裾部外面ハケメ→横ナデ。	-97206.690 32936.300 15.895
第59図１	3-4	高坏	SYU 覆土 墳丘覆土	152～159 161・163 678・5455	22.1 14.4 11.3	7.5YR5/4 にぶい褐色	口縁部～脚部	脚部は下位で内湾して開く。坏底部に稜を持って、坏部はやや内湾して立ち上がる。口縁内面端部を面取りしている。	外面・坏部内面縦ヘラミガキ。脚部内面ハケメ。脚部外面上位横線文。脚部に円窓を 3 か所有する。	-97220.899 32940.613 14.905
第59図２	3-15	高坏	SYU 覆土	—	— (3.0) —	2.5YR4/4 にぶい赤褐色	脚部		外面縦ヘラミガキ。内面ハケメ。脚部外面上位横線文。坏底部ヘラミガキ。	— — —
第59図３	3-14	高坏	SM-SYU	—	— (3.0) —	7.5YR4/3 褐色	脚部		外面縦ヘラミガキ。内面ハケメ。脚部外面上位横線文。坏底部ヘラミガキ。	— — —
第59図４	3-2	高坏	SYU 覆土 東 3・東 7 SK1	686・780 850～852 888・5451	19.6 (12.2) —	7.5YR5/4 にぶい褐色	口縁部～脚部	脚部は外反して開く。坏底部に稜を持って、坏部はやや内湾して立ち上がる。	坏部内外面縦ヘラミガキ。脚部外面縦ヘラミガキ。	-97221.689 32939.115 14.711
第59図５	T340	高坏	SM-SYU 北 1・北 2	—	— — —	5YR5/4 にぶい赤褐色	脚部		外面ヘラミガキ、横線文。内面ナデ調整。	— — —
第59図６	3-3	高坏	SM 主 1	701 760	16.1 12.4 9.3	7.5YR5/4 にぶい褐色	ほぼ完形	脚部は下位で内湾して開く。坏底部に稜を持って、坏部はやや内湾して立ち上がる。	外面・坏部内面縦ヘラミガキ。坏部内面ほぼ磨滅。脚部外面ハケメ→ヘラミガキ、脚部内面ハケメ、脚部に円窓を 3 か所有する。	-97221.015 32939.298 14.767
第59図７	3-8	高坏	SM-SYU	781	— (7.7) 9.6	7.5YR5/4 にぶい褐色	坏底部～脚部	脚部は下位で内湾して開く。坏底部内面はほぼ水平に広がる。	外面縦ヘラミガキ。脚裾部外面横ナデ、脚部内面ハケメ→横ナデ。円窓を 3 か所有する。	-97221.731 32939.008 14.519
第59図８	3-7	高坏	SM-SYU	103	— (6.6) 11.1	5YR5/4 にぶい赤褐色	脚部	ほぼ直線上に脚部が開く。	外面縦ヘラミガキ。内面ハケ様の調整がらせん状に巡る。円窓を 3 か所有する。	-97238.142 32939.381 14.750
第59図９	3-17	高坏	SM-SYU	3774	— (7.9) (12.0)	7.5YR6/4 にぶい橙色	脚部	やや外反して開いた後、わずかに内湾する。 脚裾部は微妙に内側に入り込む。	外面縦ヘラミガキ、脚裾部横ナデ、内面ハケメ。	-97273.305 32914.488 15.049
第59図10	3-11	高坏	SM-SYU	—	— (6.4) 8.7	2.5YR5/6 明赤褐色	坏底部～脚部	坏部は外傾して開く。脚部はやや直線状に伸びた後、外反する。中位にわずかな膨らみが見られる。	脚部外面縦ヘラミガキ、脚部内面ハケメ→横ナデ。円窓を 3 か所有する。	— — —
第59図11	3-9	高坏	SM-SYU	4419	— (6.5) 10.0	7.5YR5/4 にぶい褐色	坏部～脚部	坏部に明瞭な稜をもつ。脚部はやや外反して開いた後、わずかに内湾する。	外面縦ヘラミガキ。坏部内面放射状ヘラミガキ。脚部内面裾部横ナデ。円窓を 3 か所有する。	-97273.177 32911.789 14.929

第 19 表　周溝内および周辺の土器観察表（11）

図版No.	実測番号	器種	出土地点	遺物No.	口径 器高 底径	色調	残存部位	形態の特徴	技法の特徴	X 座標 Y 座標 Z 座標
第59図12	3-1	高坏	SM-SYU	46	(21.9) 15.2 10.4	5YR5/6 明赤褐色	口縁部～脚部	脚部は直線的に開く。坏底部に緩い稜を持ち、内湾して立ち上がる。	坏部内外面縦ヘラミガキ、脚部外面ハケメ→ヘラミガキ。脚部内面横ナデ。脚部に円窓を３か所有する。	-97223.710 32939.453 14.956
第59図13	3-10	高坏	SM-SYU	625 630	— (7.4) (12.5)	5YR5/4 にぶい赤褐色	脚部	やや外反して開く。	外面縦ヘラミガキ、内面ハケメ→横ナデ	-97224.019 32937.988 14.993
第59図14	T63	高坏	SM-SYU	729 1301	(16.6) (7.0) —	5YR4/3 にぶい赤褐色	口縁部～坏底部	坏部は直線的に立ち上がる。	内外面縦ヘラミガキ、一部にハケメを残す。やや磨滅。	-97209.972 32938.588 15.570
第59図15	T74	高坏	SM-SYU	659	— (5.2) (6.4)	7.5YR4/4 褐色	坏部～脚部	坏部は内湾して立ち上がり、脚部はハの字状に開く。	脚部内外面ハケメ、脚上部内面に輪積み痕。	-97222.375 32938.883 14.912
第59図16	3-13	高坏	SM-SYU	338	(11.7) (8.1) —	2.5YR5/6 明赤褐色	坏底部～脚部	坏部は内湾して立ち上がり、脚部は外反して開く。	口唇部外面横ナデ。坏部外面上位・坏部内面下位斜めヘラミガキ。坏部外面下位・脚部縦ヘラミガキ、内面ハケメ。	-97244.660 32926.567 15.290
第59図17	3-16	高坏	表採	—	— (4.9) 7.7	7.5YR5/4 にぶい褐色	坏部～底部	鉢形ないし椀形の坏体部。低小な脚部で透かし孔はない。	外面斜めヘラミガキ→横ヘラミガキ。坏部内面縦ヘラミガキ。脚部内面ハケメ→横ナデ。	— — —
第59図18	T115	高坏	前方部堀	—	— — —	7.5YR6/6 橙色	坏部	やや内湾する。端部丸くつくられる。	内外面やや磨滅。外面横線文、横線文の間に斜状・緩い山形・弧状の刺突文を施す。	— — —
第59図19	T122	高坏	SM-SYU 覆土	—	— — —	2.5YR5/6 明赤褐色	脚部	やや内湾する。脚裾部を面取りしている。	外面横ヘラミガキ・横線文・刺突文、内面ハケメ→横ナデ。	— — —
第59図20	T121	高坏	耕作土	—	— — —	7.5YR5/4 にぶい褐色	脚部	やや内湾する。脚裾部を面取りしている。	外面やや磨滅、横線文・刺突文、内面ハケメ→横ナデ。	— — —
第60図１	3-5	器台	SM-SYU	47 85 675	7.4 6.8 8.4	7.5YR5/4 にぶい褐色	口縁部～脚部	受け部はやや内湾して立ち上がる。脚部は外反して開き、脚裾部でやや内湾する。	受け部内面放射状、受け部外面・脚部外面縦ヘラミガキ。脚部内面横ナデ。	-97224.129 32939.488 14.831
第60図２	3-20	器台	SYU 覆土	—	8.5 (5.6) —	5YR5/6 明赤褐色	口縁部～脚部	受け部はやや内湾して立ち上がる。脚部は直線状に伸びた後、ハの字状に開く。	外面磨滅、一部縦ヘラミガキが見られる？脚部内面ハケメ。	— — —
第60図３	3-12	器台	SM-SYU SK1・ベルト H	3100	— (5.0) (9.1)	5YR6/6 橙色	口縁部～頸部	脚部は外反して開く。透かし孔３か所、受け部にも１か所。	脚部外面ハケ様の調整→横ナデ、内面ハケメ→横ナデ。受け部ハケ様の調整。	-97220.165 32938.879 14.876
第60図４	T126	手焙型土器？	耕作土	—	— — —	10YR5/3 にぶい黄褐色	（口縁部）	口縁部は内湾して立ち上がり、端部をやや内側に折り返す。外面に突起あり。	内外面横ナデ。	— — —
第60図５	T72	台？	SM-SYU 東覆土	—	(6.9) (6.0) (11.0)	5YR5/6 明赤褐色	器受部～脚部		外面ハケメ、脚底部内外面横ナデ。	— — —
第60図６	4-30	土製模造品	前方部・掘	—	— (4.6) 4.7	10YR4/3 にぶい黄褐色			外面縦ヘラミガキ。内面ハケメ。	— — —
第60図７	4-17	土製模造品	SM-SYU	3382	— (3.0) 1.5	7.5YR5/4 にぶい褐色			外面指頭圧痕、横ナデ。	-97247.759 32927.628 14.888
第60図８	T127	土製模造品	SM-SYU 覆土	—	— — —	5YR4/3 にぶい赤褐色			脚部外面横ヘラミガキ。底部外面ハケメ→ナデ調整。	— — —

第Ⅴ章　その他の遺構と遺物

1．弥生時代～古墳時代

a．遺構と遺物の分布状況（第 61 図）

弥生時代に属する遺構としては、古墳前方部から南側の周溝付近にかけて、住居址２基（SB1・SB2）、溝状遺構（SD）、性格不明な不明遺構３基（SX1 ～ SX3）が検出された。この時期の遺構は新期スコリア層（第７図）上面が遺構確認面となるのが普通だが、古墳の前方部がちょうど熊野神社やその参道となってしまった関係で、休場層付近まで削土が行われているうえに、神社地であったことに由来すると思われる攪乱も激しかった。したがって特に住居址については、本来よりも壁の立ち上がりが低く、形状を捉えることも困難であった。またこれらの遺構からは図示できる遺物は出土していない。

b．住居址

第１号住居址（第 62 図）　平成 21 年度に弥生時代の遺構調査を進めていたところ、古墳前方部のやや南寄りで検出された。

【形状】平面形は隅丸方形を呈し、長軸 4.6m を測る。

【床・壁】明瞭な床面はほとんど残されておらず、ほぼ掘り方のみの検出となったが、中央～北西寄りで床の硬化した範囲が認められた。残存する壁高は、堀り方底面からでも 20㎝にも満たない。

【柱穴】４基が検出された。住居址の各隅に配置された３基は長径 42㎝～ 47㎝程度で、深さは 40㎝前後である。中央付近の P4 は長径 77㎝と３基より大きく、その位置からも炉址であった可能性が高いが、覆土上部が失われており、明確な焼土は確認できなかった。

【炉】P4 の位置に炉が設けられていたと考えられ、さらに西壁の近くと、P3 と P5 の間で焼土の分布が認められた。

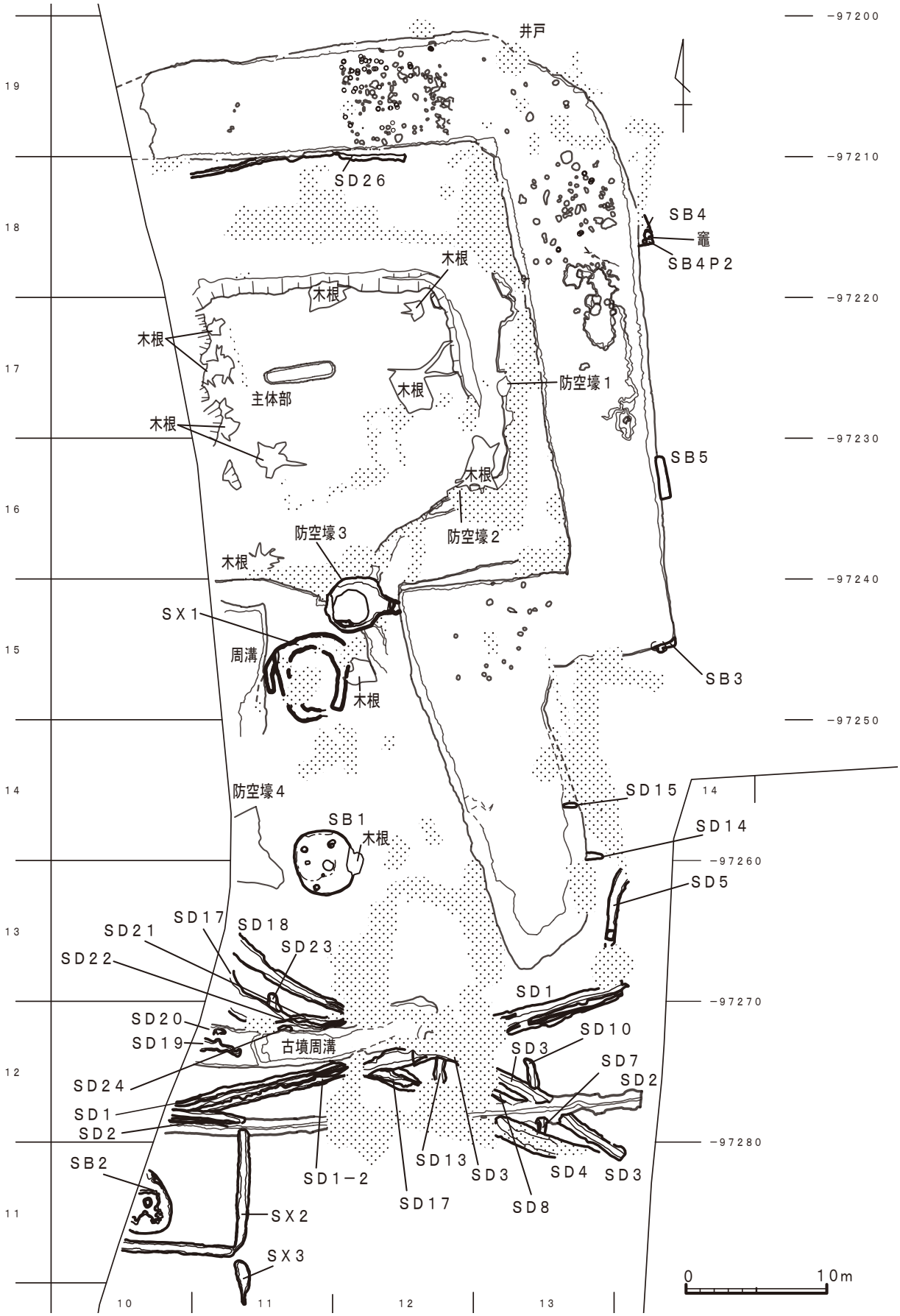
第２号住居址（第 62 図）　SX2 で区画された方形の内部で検出された。住居址西側は西側市道によって破壊されているため、全体の形状は不明であるが、SB1 と同様に略小判形を呈するものと思われる。表土直下から検出されたため、攪乱が激しく、炉址の周辺にわずかに床面が残されていた。壁の立ち上がりは堀り方のラインで確認した。中央付近に焼土の分布が認められたため、この範囲を炉址としたが、下部に堀り込みは確認できなかった。

c．溝状遺構（第 63 図・第 64 図）

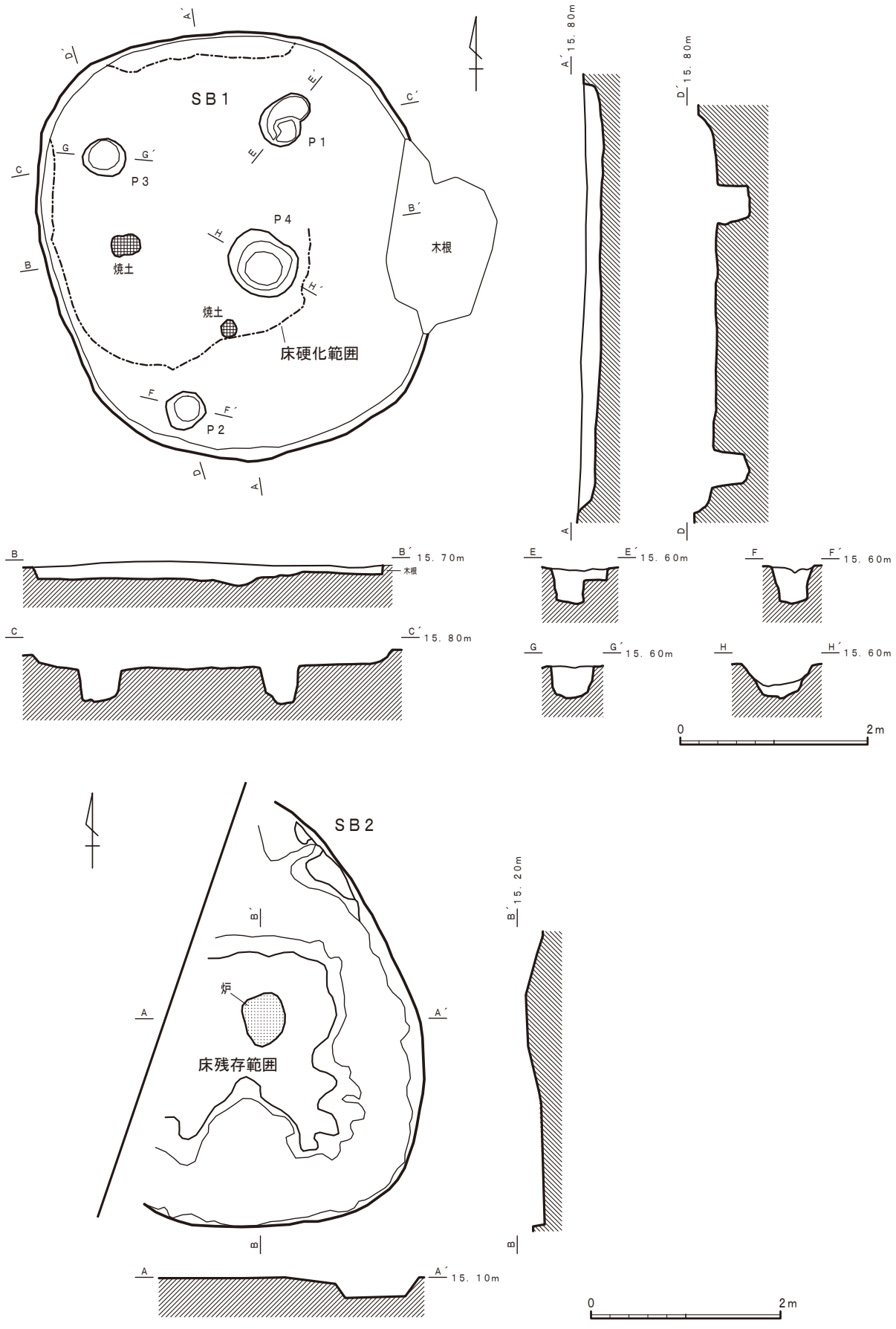
合計で 16 本が検出された。古墳前方部南側の周溝付近に集中している。この範囲内の溝は東西方向にやや方向を変えながら走るものが多く、複雑に切り合っている。攪乱も激しく個々の溝の全体像を把握するのが困難になっている。

また第２号溝状遺構（SD2）は前章まで古墳時代の遺構として取り扱ってきたが、古墳時代と考えられる出土土器のレベルがやや高く（第 19 図）、溝の東側で「弥生土器が出土した」という調査担当者の所見もあることから、構築された年代は弥生時代にまで遡る可能性が残されており、第Ⅴ章でも取り扱うこととした。この第２号溝状遺構と他の遺構との切り合い関係は、SD2 → SX2 → SD1 の順となっている。第２号不明遺構（SX2）や第１号溝状遺構（SD1）の切り込みは確認面上面から行われており、古墳時代の土器を包含する層位よりも上位となっている。したがってここで確認された溝の多くは古墳時代以降に属する可能性が高い。

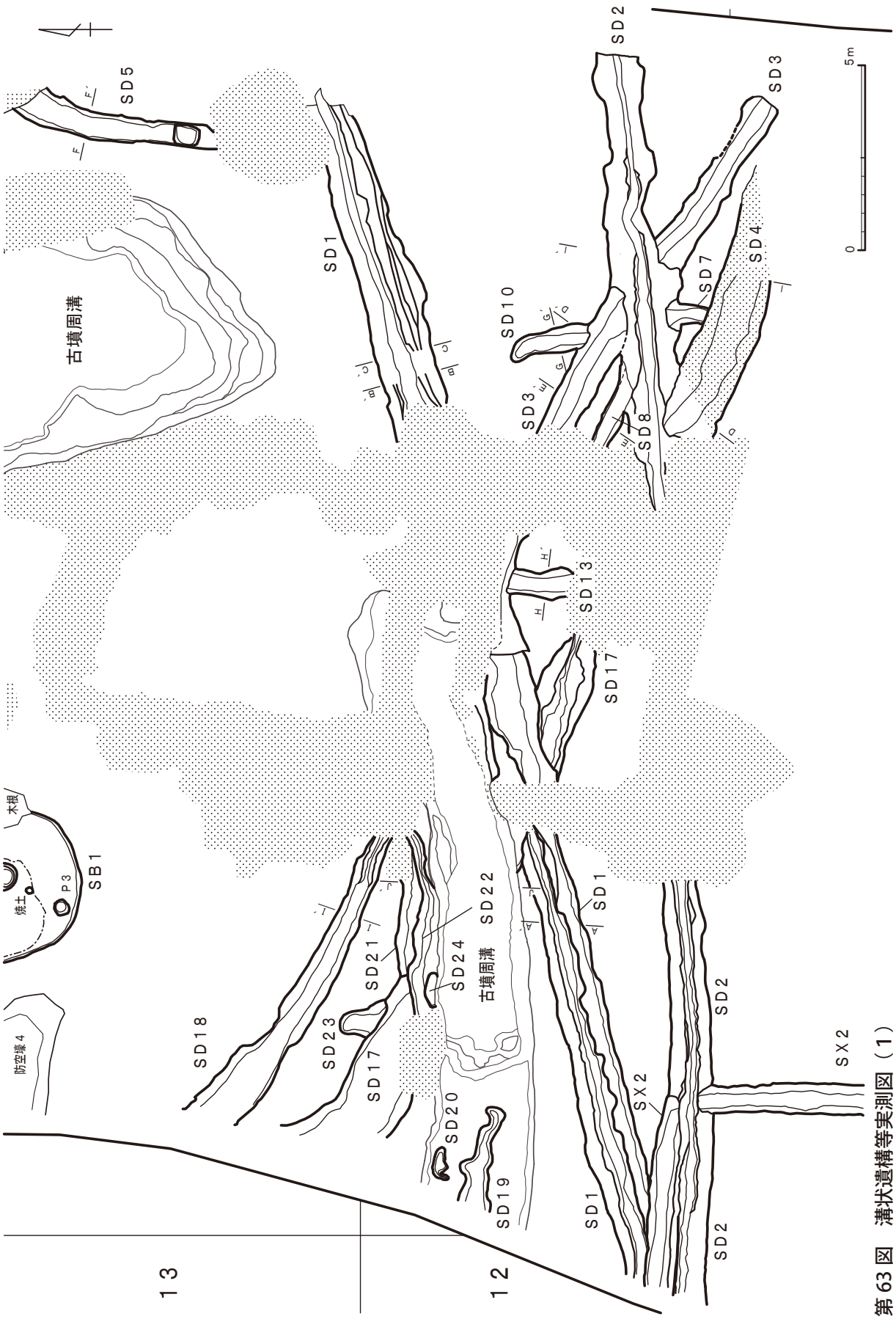
16 本の溝状遺構のうち、第１号・第３号・第 17 号溝状遺構などは幅 100㎝～ 200㎝と太く、深さは最大で 67㎝程度に達する。第１号溝状遺構は北東－南西方向へ、第３号・第 17 号溝状遺構はそれと交差するように、北西－南東方向へ走る。その他の細い溝は、幅 50㎝～ 90㎝、深さ 20㎝前後で、



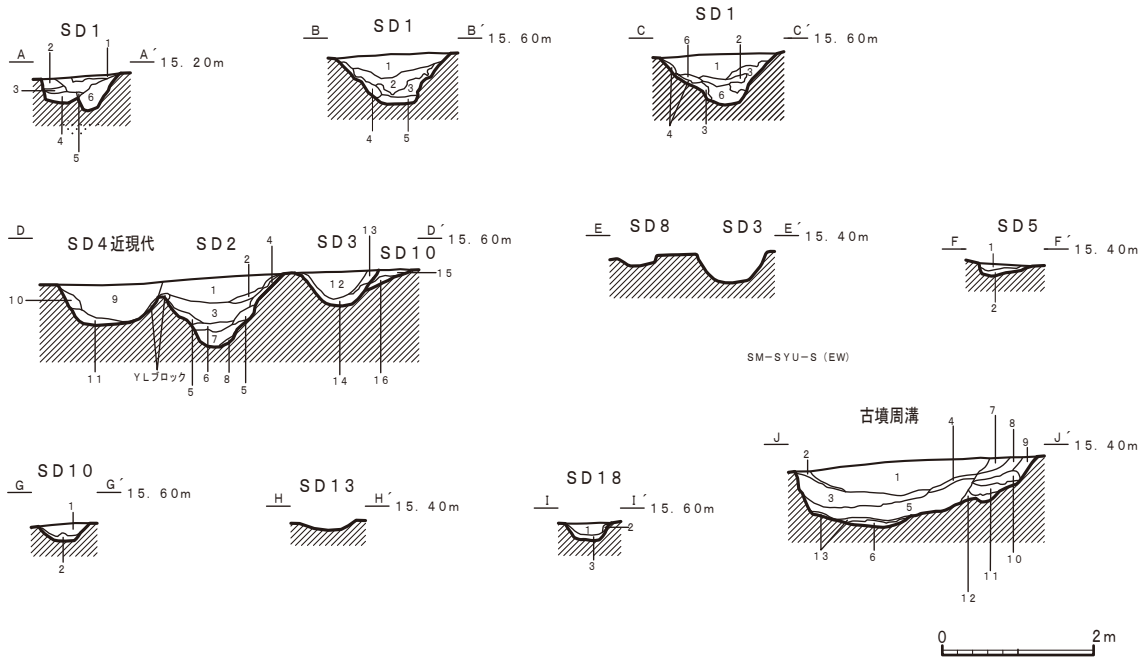
第 61 図　弥生時代～近世以降遺構分布状況



第 62 図　第１号・第２号住居址実測図



第63図　溝状遺構等実測図（1）



第 64 図　溝状遺構等実測図（２）

太い溝から枝分かれするように延びている。断面はＵ字型および舟底形を呈し、休場層やニセローム層、第Ⅱ黒色帯のブロックを含む褐色土が堆積していた。

なお第４号溝状遺構と第 26 号溝状遺構の２本については、出土遺物などから近現代の溝と判断した。

ｄ．不明遺構（第 65 図・第 66 図）

前方部およびその周辺から性格不明な土坑が３基確認されている。明確な出土遺物もないため、ここでは「SX」を付けたうえで一括して記述する。

SX1 は方形部のくびれ付近から検出されている。周溝が馬蹄形に廻るが、本来は全周したものであろう。規模と形状は弥生時代後期の住居址の堀り方にも類似するが、柱穴が確認できないため、「不明遺構」として取り扱った。

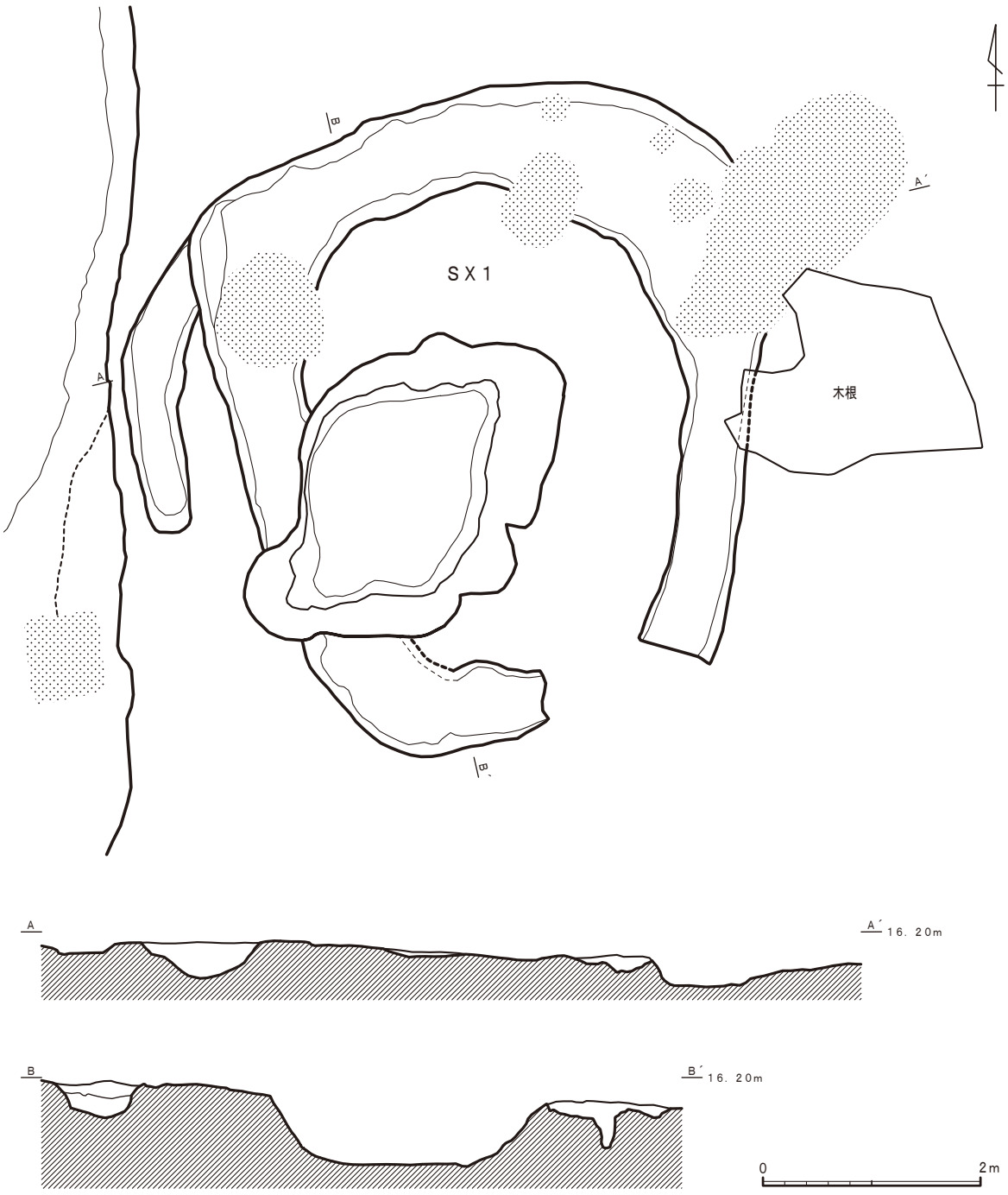
SX2 は古墳南側で第１号溝状遺構と北側を接して検出された。西側を市道によって破壊されているが、その形状から方形周溝墓であった可能性もある。しかし切り合い関係は古墳時代初頭の遺物を出土した第１号溝状遺構（SD1）に後出している。また一辺に対する溝の幅がやや狭く、主体部も検出できなかったため、ここでは不明遺構として取り扱った。

２．律令時代

ａ．遺構と遺物の分布状況（第 61 図）

律令時代に属する遺構として、住居址３基が検出された。古墳周溝部の北側～東側では築造にあたってニセローム層付近まで削土が行われたため、これらの住居址の確認面もニセローム層上面となった（第７図）。また床面は深いところでは第Ⅱ黒色帯付近まで達していた。これら３基の住居址はいずれも周溝の外側の境界付近に構築されていたが、周溝側の黒色土中ではそのプランを確認することができなかったため、周溝外側のプランのみが調査記録として残された。

また古墳前方部と後方部の境界となるくびれ付近では、周溝内から律令時代に属すると考えられる土器がまとまって出土している。出土状況からその範囲に住居址が存在した可能性が考えられるが、壁や床を認識することはできなかった。さらに古墳周溝のセクションⅠ－Ⅰ′においても、住居址と考えられる落ち込みを確認したが（付図８）、平面プランを捉えることはできなかった。



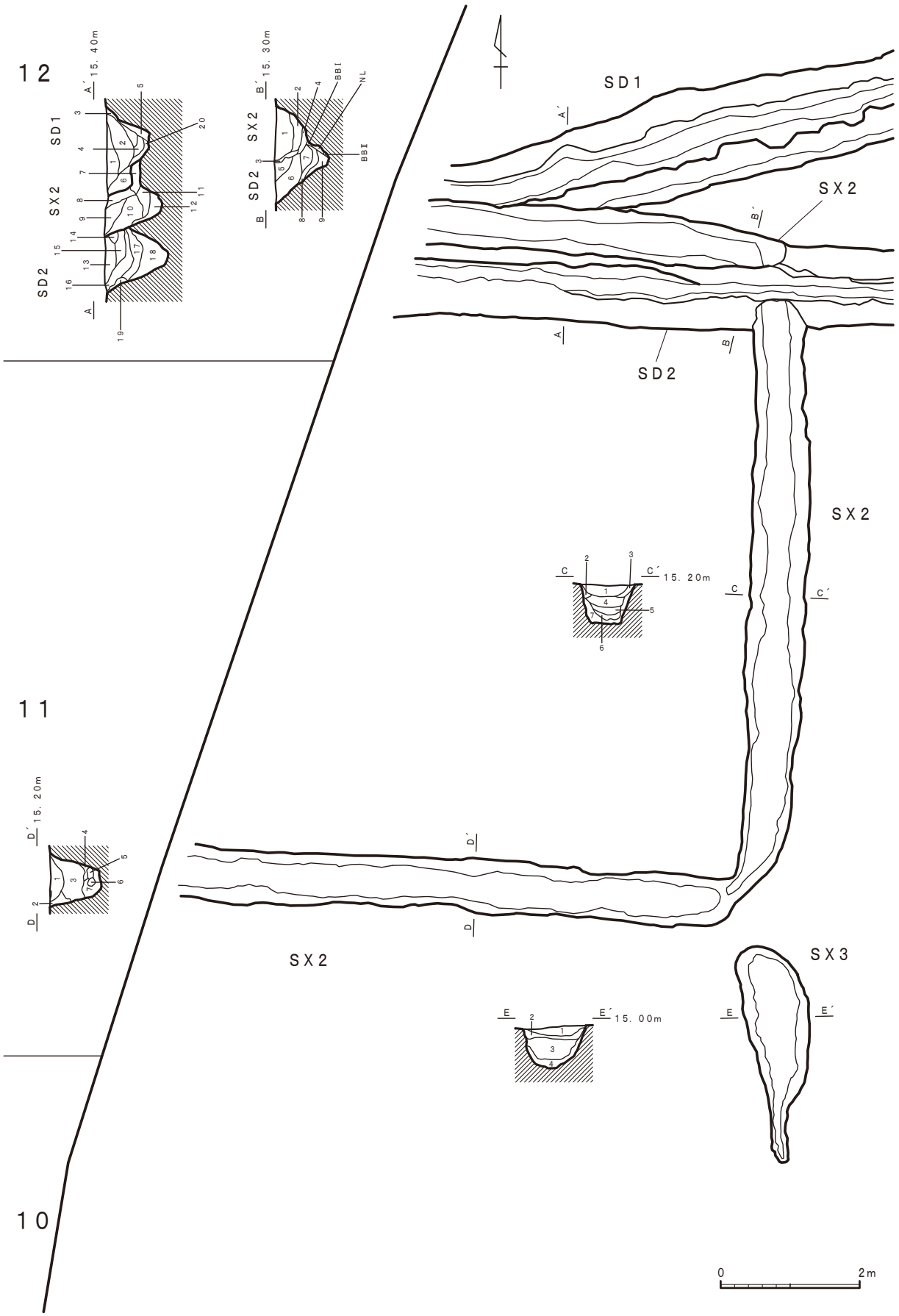
第 65 図　第 1 号不明遺構実測図

したがって調査範囲内には少なくとも 5 軒の住居址が存在したことになり、かつて古墳の北側を通っていた旧根方街道に面する律令期の集落が存在したと考えられる。

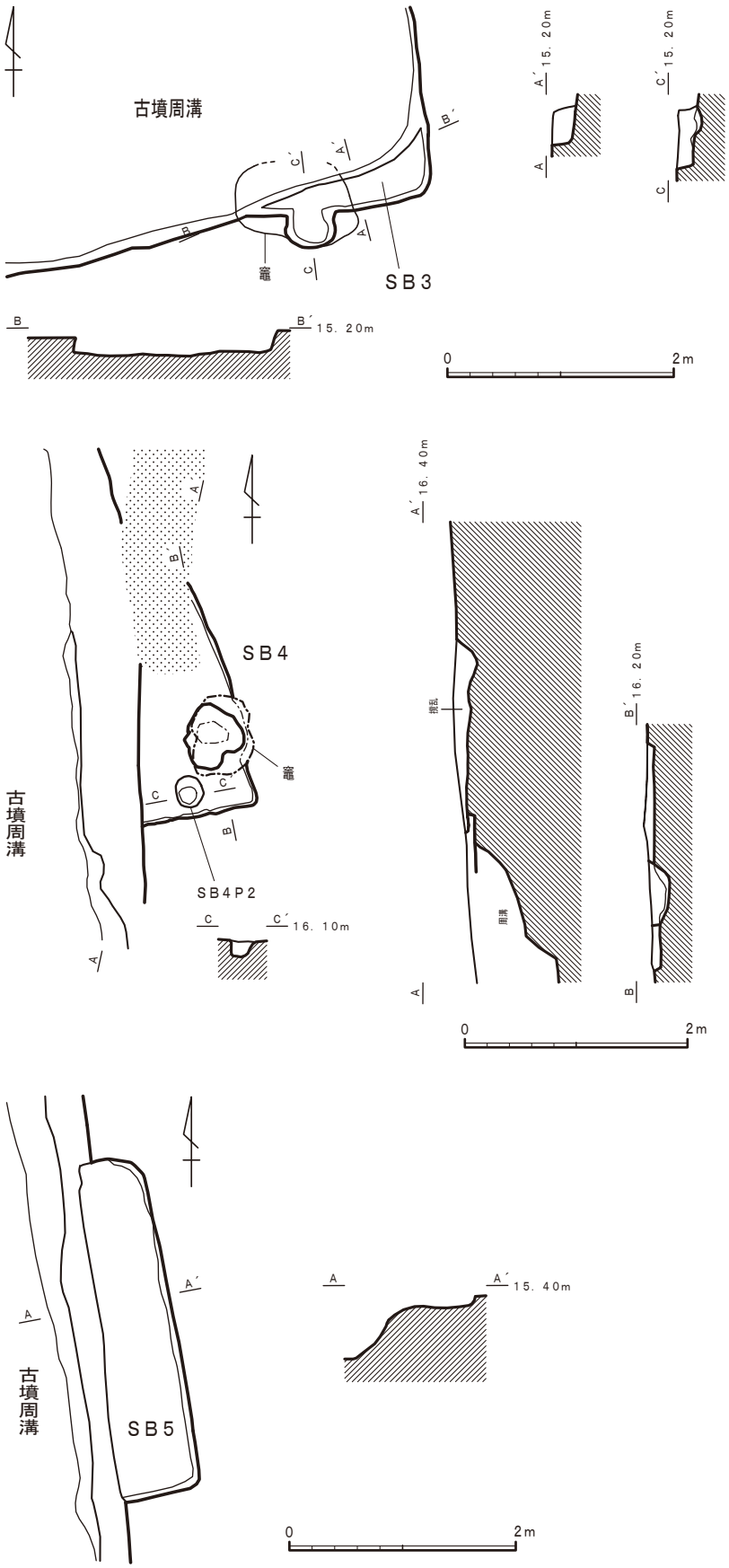
b．住居址

平成 20 年度の調査において、古墳後方部東側の周溝部分で検出された。周溝の南～南東側は律令期以前に休場層上面付近まで削土が行われていることから、住居址の確認面は休場層以下となり、床面は深いところで第Ⅱ黒色帯付近にまで達した。3 基ともに周溝の掘り下げ段階では認識できなかったため、一部のプランのみが検出されており、本来の規模や構造は不明である。

第 3 号住居址（第 67 図）　古墳後方部周溝の南東角に位置する。住居址南東側のプランの一部と、竈址と考えられる部分を検出した。竈は住居址の壁を切り込んで 30㎝ほど張り出しているが、構築材は



第 66 図　第２号・第３号不明遺構実測図



第 67 図　第 3 号～第 5 号住居址実測図

残されておらず、セクションの観察において焼土なども確認されなかったことから、構造は不明である。

第 4 号住居址（第 67 図）　古墳後方部東側周溝のやや北寄りに位置する。住居址南東隅のプランを一部検出し、径 28㎝、深さ 14㎝のピット 1 基と竈址が検出された。竈はわずかに壁を切り込む程度で明瞭な張り出し部はなく、構築材は検出されていない。セクションの観察においても焼土が検出されておらず、ピットとの距離も近すぎるため、竈として機能していたかどうか疑問が残る。

第 5 号住居址（第 67 図）　古墳後方部東側周溝のやや南寄りに位置し、住居址東側のプランを一部検出した。

c．遺構外出土遺物（第 68 図・第 69 図）　古墳前方部と後方部の境界にあたる周溝くびれ部分を中心に、律令時代末期に属すると考えられる土器が集中して出土した。器種は高台付坏・坏・小皿・鉢・甕・甑？で、特に高台付坏は沼津市周辺での発見例が少なく、本遺跡以外では長井崎遺跡で出土が認められるのみである。これら土器の器種構成を見ると、灰釉陶器が出土しておらず小皿が出現していることから、長井崎遺跡に続く、11 世紀後半に属するものと考えられる。また、このくびれ付近では古墳時代に属する土器も出土しているが、それらに比べるとやや覆土の上位から出土している。なお出土状況については、古墳時代の土器とともに、第Ⅳ章の周溝内遺物出土状況図（付図 4）に示し

ている。

第 68 図 1 ～ 3 は高台付坏である。ロクロ目が明瞭に残っており、他の器種に比べると丁寧に仕上げられている。3 点とも高台部を欠損しているが、ハの字状に開くものと考えられる。胴部は直線的に立ち上がり、外反して開くものと、やや内湾するものがある。

第 68 図 4 ～ 10 は坏である。ロクロ目が明瞭に残る点は高台付坏と同様だが、ゆがみの著しいものや、胎土に大粒の砂粒が混入しているものが認められ、全体に雑な仕上がりとなっている。胴部は直線的なものと緩やかに内湾して立ち上がるものがあり、ともに口縁端部をわずかに外反させる。また、4 ～ 7 の底部が外側にやや張り出すことによって高台風の外観を表現している。ほとんどの坏には回転糸切り痕が残されているが、7 の底面は摩滅が激しく観察できない。10 の底面にも回転糸切り痕が認められるが、一部はヘラケズリされている。

第 68 図 11 ～ 15 は小皿である。坏と同様に仕上がりは雑で、口径に対し底径が大きめである。胴部は内湾して口唇部が上に向かって尖り、突出した底部には回転糸切り痕が認められる。

第 68 図 16 は鉢で、平底の底部からやや直立気味に立ち上がる。外面は幅の狭いケズリが縦位に密接して加えられている。

第 68 図 17 および第 69 図 1 ～ 4 は甕と分類したが、特に第 68 図 17 の外面にはススが厚く付着しており甑の可能性もある。

第 69 図 1 ・ 2 は胴部が直立気味に立ち上がり、肩部を中心とした内外面に指頭圧痕が認められる。口縁部～肩部にかけての形状や調整の特徴から、坏類よりもやや時期が遡る可能性もある。

第 69 図 5 は土馬である。土器と同様に周溝のくびれ部分で出土したが、上記の土器に伴うものであるか多少の疑問は残る。両前脚を付け根付近から欠損し、両後脚と頭部および尾部も欠損している。また胴部中央には、ほとんど剥落しているものの、鞍が表現されている。

3．近世以降

a．遺構

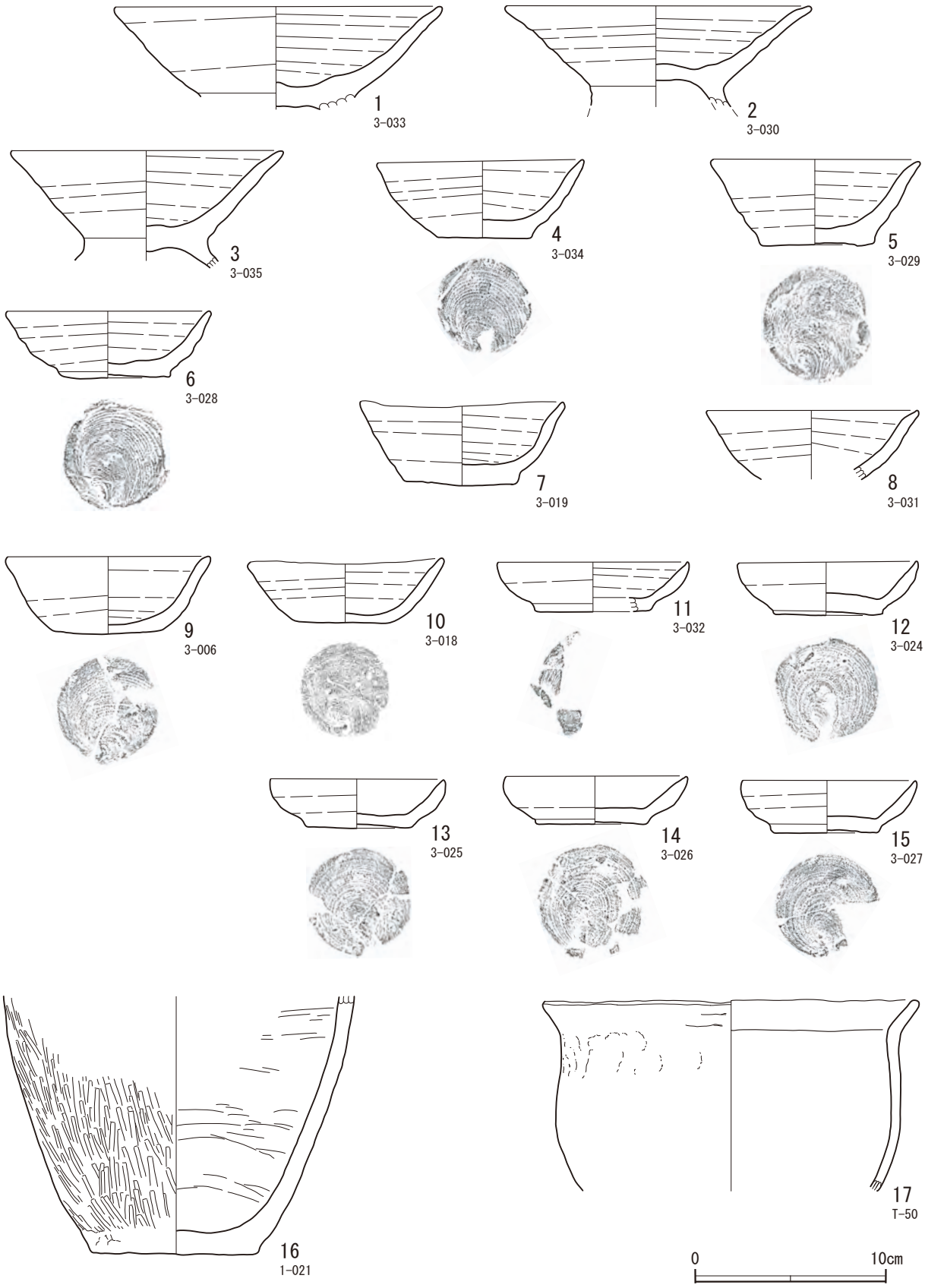
防空壕（第 70 図）　古墳の墳丘に向けて 4 つの比較的小形の防空壕が掘られている。防空壕 3 は入り口から奥行きまでが 5.2 mほどで、ほぼ円形をしている。周溝のくびれ部分に狭い入り口を設け、3 段程度の階段で内部に通じている。天井部分が落盤したため調査することができた。他の 3 つの防空壕については、墳丘を破壊することになるため調査は行わなかった。

b．出土遺物（第 71 図・第 72 図）

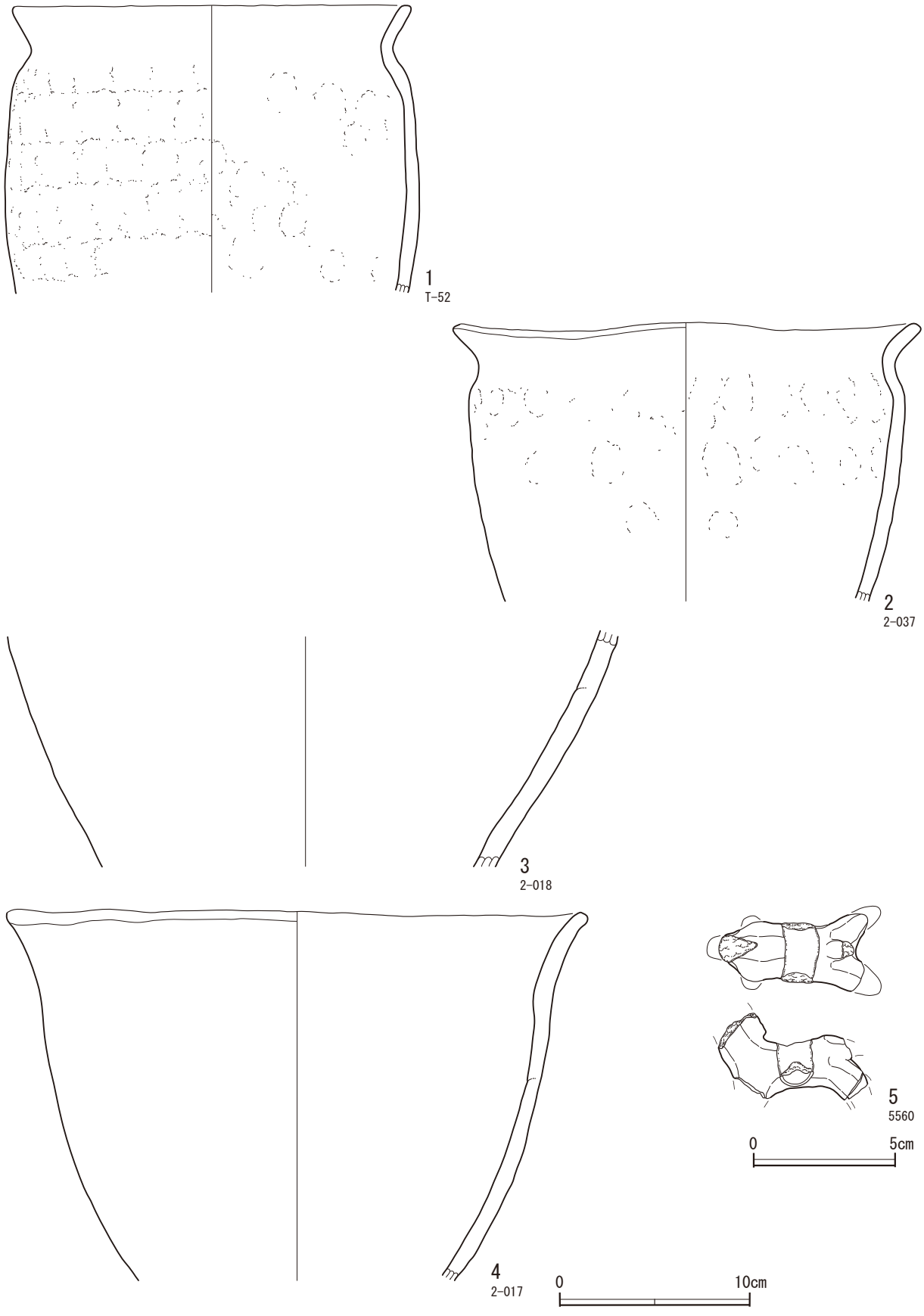
古墳周溝および周囲の耕作土内から、江戸時代後半～大正時代以降にわたる遺物が出土している。ただし、陶磁器以外は、時期を特定することが困難であった。

第 71 図 1 ・ 2 は陶器、3 ～ 6 は磁器である。1 は江戸時代後半に属する小皿である。口縁部外面付近に稜を形成し、稜以下は削りによって整えられている。内面と外面の稜より上位部分には灰釉が掛けられ、底部は碁笥底となっている。2 は幕末～明治時代に属する杯である。口縁部はやや外反し、底部に向かって釉が流れた結果、口縁部が褐色、胴部が青灰色を呈している。

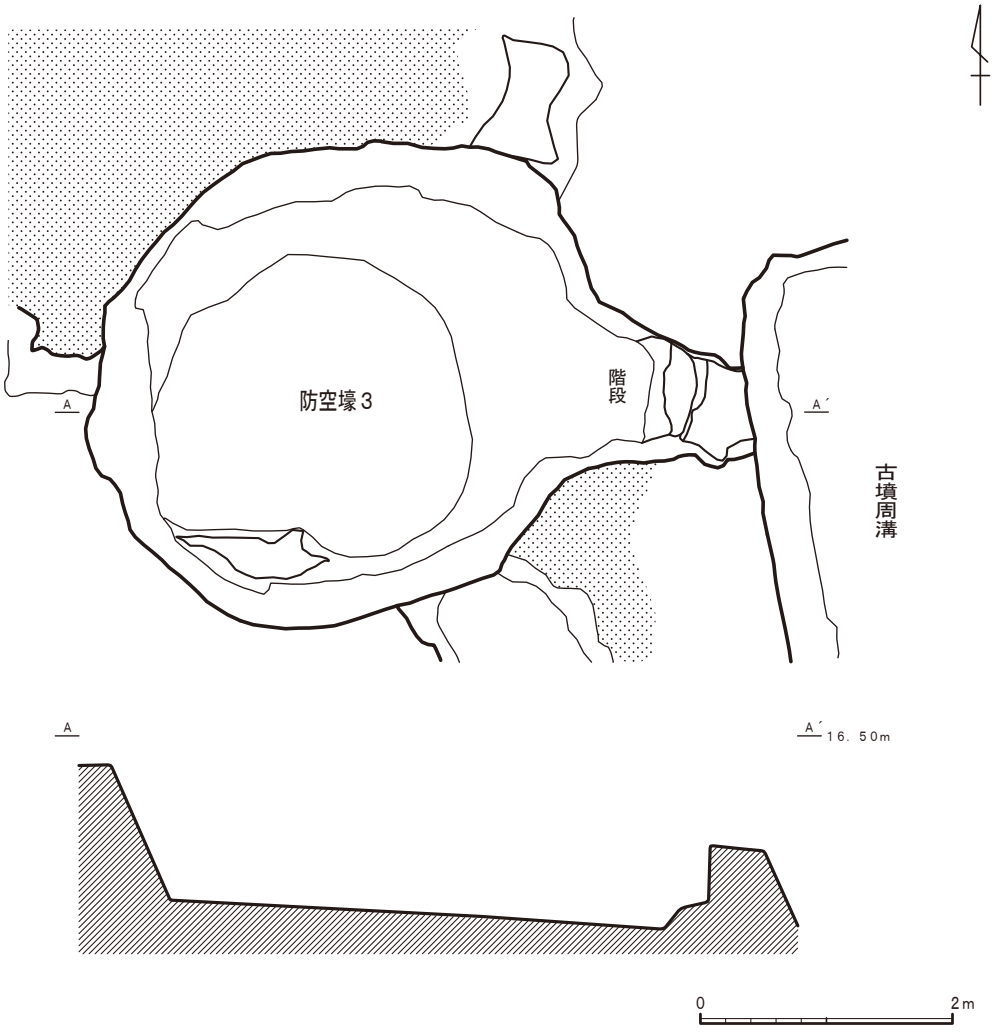
3 は 18 世紀代に属する肥前系の碗である。呉須による染付で、梅樹文が描かれているが発色が悪い。高台内には銘が書かれているが、記号化しており、辛うじて「大明年製」と読み取ることができる。また、高台部には砂目が観察される。4 は 19 世紀代～明治時代に属する有脚受け付き灯明具で、底面を除いた全面に灰色の釉が掛けられている。受け部分には外側から内側に向かって切り込みが開けられており、重ね焼き痕も観察される。5 は明治 10 年～ 20 年代に属する瀬戸・美濃系の碗で、コバルト釉による型紙染付で文様が描かれている。外面は地文を青海波で埋め、白抜きの窓内に松の木と釣り人、その横



第 68 図　遺構外出土遺物実測図（1）



第 69 図　遺構外出土遺物実測図（2）



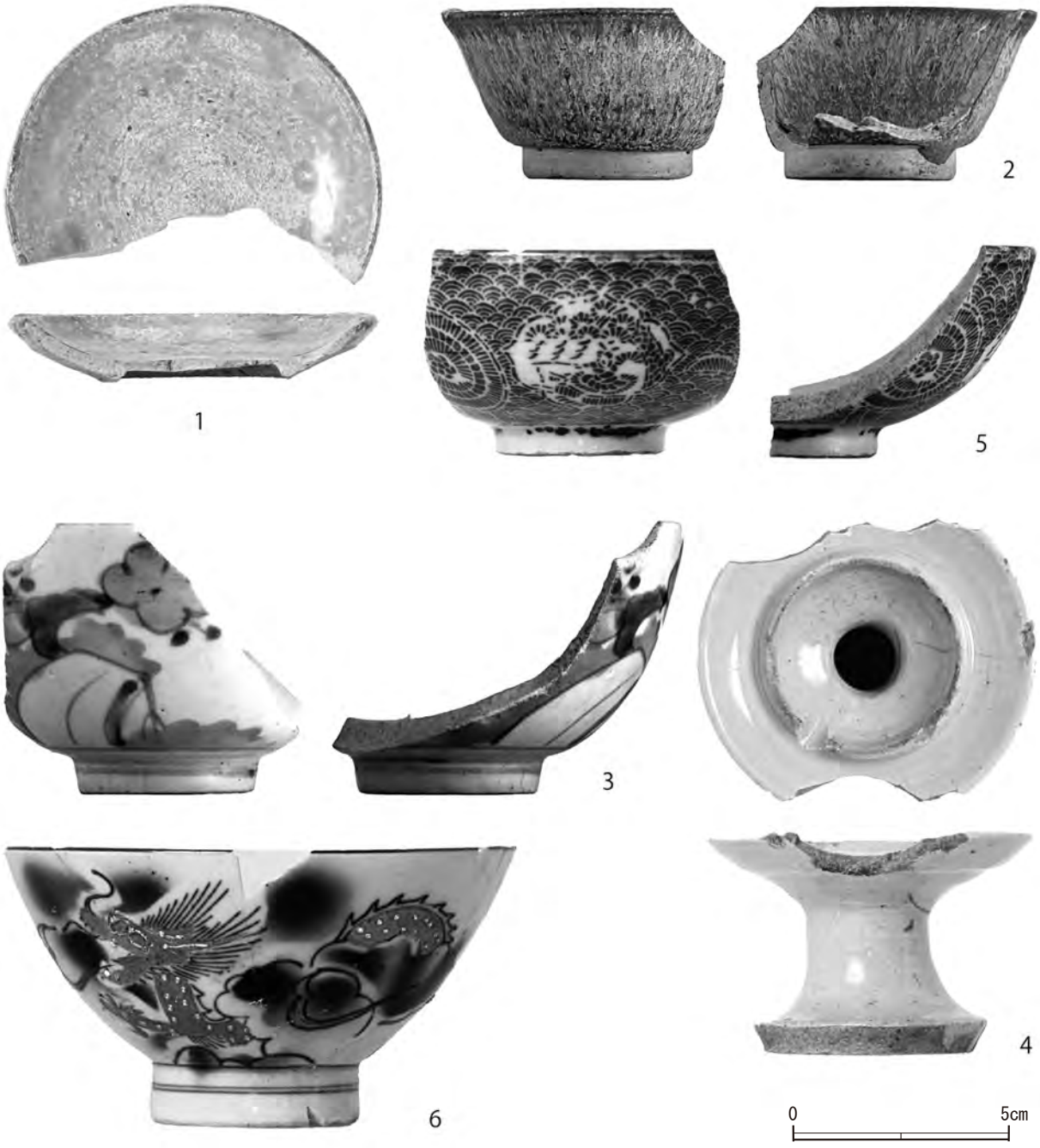
第 70 図　防空壕３実測図

には花と思われる文様を配し、見込みには松竹梅が描かれる。６は大正時代末以降に属する瀬戸・美濃系の碗である。吹絵とゴム版絵付けにより龍や雲を描き、さらに金・赤・緑の釉で上絵付けを行っている。また、龍の鱗・目・牙などはイッチンにより立体的に表現される。

第 72 図１～４は陶器の人形、５は徳利である。１～３は大黒天をかたどった人形で、３体とも烏帽子を被って狩衣をまとい、右手に小槌、左手に袋を持ち、米俵の上に立つという共通した像容を示している。１は赤・黒・黄などの彩色が施されており、顔は大黒天の名の通り黒く塗られている。４は鯛と思われる魚が表されることから、恵比寿神と考えられる。恵比寿神は烏帽子を被り、狩衣をまとって、右手に釣竿、左手脇に鯛を抱える姿が一般的であるが、この像には釣竿が見当たらない。接合部で割れており、前面だけが残存する。

５は徳利で、全面に釉が掛けられている。胴部前面に設けられた空間には恵比寿神が配されており、その縁の部分に梅の枝が透かし彫りされている。梅の木の「ウロ」から現れた恵比寿神を表しているものと思われる。反対側には「伊勢」という文字とともに参道風景が表される。

６・７は古墳周溝の覆土から出土した砂岩製の砥石である。



第 71 図　遺構外出土遺物実測図（3）

第 72 図　遺構外出土遺物実測図（4）

第 20 表　弥生時代溝状遺構土層一覧表（1）

図版 No.	溝 No.	層位	層　名	色　調	土　層　の　特　徴
第 64 図	ＳＤ１ (A-A')	1	黒褐色土	5YR2/1	径１～２㎜の褐色スコリア、パミスを微量に含む。
		2	黒褐色土	7.5YR3/2	径１～３㎜の褐色スコリア、パミスを微量に含む。
		3	黒色土	7.5YR2/1	径２～３㎜の褐色スコリア、パミスを微量に含む。
		4	黒褐色土	5YR3/1	ＢＢⅡブロックをわずかに含む。
		5	黒褐色土	5YR2/1	パミスを微量に含む。
		6	黒褐色土	5YR2/1	径１～３㎜の褐色スコリア、径５㎜のＮＬブロック、パミスを微量に含む。
第 64 図	ＳＤ１ (B-B') (C-C')	1	黒色土	10YR2/1	径５㎜以下の褐色スコリア、径 10 ㎜以下のＹＬブロック、パミスを微量に含む。
		2	黒色土	10YR2/1	ＹＬの粒子を微量に含む。
		3	黒褐色土	10YR3/2	ＹＬの粒子を少量含む。
		4	黒色土	10YR2/1	
		5	黒色土	10YR2/1	径３㎜以下の褐色スコリアを微量に含む。
		6	黒色土	10YR2/1	ＹＬの粒子を微量に含む。
第 64 図	ＳＤ ２・３ (D-D')	1	黒色土	10YR1.7/1	径３㎜の褐色スコリア、パミスを微量に含む。
		2	黒色土	10YR2/1	径３㎜の褐色スコリア、ＹＬの粒子、パミスを微量に含む。
		3	黒色土	10YR2/1	径３㎜の褐色スコリア、ＹＬブロックを微量に含む。
		4	黒色土	10YR2/1	径３㎜の褐色スコリア、ＹＬの粒子、パミスを微量に含む。
		5	黒褐色土	10YR3/1	ＹＬの粒子を微量に含む。
		6	黒褐色土	10YR3/1	ＹＬブロックを微量に含む。
		7	黒褐色土	10YR3/2	ＹＬの粒子を少量、ＹＬブロックを微量に含む。
		8	黒褐色土	10YR3/1	ＹＬの粒子を少量含む。
		9	黒褐色土	10YR3/2	
		１０	灰黄褐色土	10YR4/2	
		１１	褐色土	10YR4/1	
		１２	黒色土	10YR2/1	径３㎜の褐色スコリア、パミスを微量に含む。
		１３	黒褐色土	10YR3/1	径３㎜の褐色スコリア、ＹＬの粒子、パミスを微量に含む。
		１４	黒色土	10YR2/1	径３㎜の褐色スコリア、ＹＬブロック、パミスを微量に含み、ＹＬの粒子を少量含む。
		１５	黒褐色土	10YR3/1	径３㎜の褐色スコリア、ＹＬの粒子、パミスを微量に含む。
		１６	黒褐色土	10YR3/1	ＹＬブロックをわずかに含む。
第 64 図	ＳＤ５ (F-F')	1	黒色土	10YR2/1	径３㎜以下の褐色スコリア、パミスを微量に含む。
		2	黒色土	10YR2/1	径３㎜以下の褐色スコリアを少量含む。粘性が強い。
第 64 図	ＳＤ 10 (G-G')	1	黒色土	10YR2/1	径３㎜の褐色スコリア、パミスを微量に含む。
		2	黒褐色土	10YR3/1	ＹＬブロック、パミスを微量に含む。
第 64 図	ＳＤ 18 (I-I')	1	黒褐色土	7.5YR2/2	径２～６㎜の褐色スコリア、パミスを微量に含む。
		2	黒褐色土	5YR3/1	ＹＬの粒子、パミスを微量に含む。
		3	黒褐色土	5YR2/2	径２～８㎜の褐色スコリア、径 10 ～ 20 ㎜のＢＢＩブロック、パミスを微量に含む。
第 64 図	ＳＤ 21・22 (J-J')	1	黒色土	N2/0	径１～３㎜の褐色スコリア、パミス、径 30 ～ 50 ㎜のＹＬブロックを微量に含む。
		2	赤黒色土	2.5YR2/1	径１～２㎜の褐色スコリア、パミスを微量に含む。
		3	黒色土	10YR2/1	径１～３㎜の赤褐色スコリア、径１～５㎜の褐色スコリア、パミスを微量に含む。
		4	黒色土	N2/0	径１～３㎜の褐色スコリアを微量に含む。
		5	黒色土	7.5YR2/1	径１～５㎜の褐色スコリア、径５～ 40 ㎜のＹＬ・ＮＬ・ＢＢⅡブロック、パミスを微量に含む。
		6	黒色土	N2/0	
		7	黒色土	N2/0	径１～２㎜の褐色スコリア、パミスを微量に含む。
		8	黒色土	N2/0	径１～３㎜の褐色スコリア、パミスを微量に含む。
		9	黒色土	7.5YR2/1	ＹＬの粒子、パミスを微量に含む。
		１０	黒色土	10YR2/1	径２～６㎜の褐色スコリア、パミスを微量に含む。
		１１	黒色土	7.5YR2/1	径５～ 10 ㎜のＮＬブロックをわずかに含み、パミスを微量に含む。
		１２	黒褐色土	5YR2/1	ＮＬとＢＢⅡの粒子、パミスを微量に含む。
		１３	黒色土	7.5YR2/1	ＳＣⅡに相当する。

第 21 表　弥生時代溝状遺構土層一覧表（2）

図版 No.	溝 No.	層位	層　名	色　調	土　層　の　特　徴
第 66 図	ＳＤ１・２ＳＸ２(A-A')	１	黒色土	N2/0	径１～３㎜の赤褐色スコリア、径１～２㎜のパミスを微量に含む。
		２	黒色土	N2/0	径１～４㎜の褐色スコリア、パミスを微量に含む。ザラザラとした印象。
		３	黒褐色土	5YR2/1	径１㎜の赤褐色スコリアを微量に含み、径１～３㎜のＹＬの粒子を少量含む。
		４	赤黒色土	2.5YR2/1	径１～５㎜のＹＬの粒子、パミスを微量に含む。締まりがある。
		５	黒褐色土	5YR2/1	径 10 ～ 20 ㎜のＹＬブロック、径 80 ㎜のＮＬブロックを微量に含む。
		６	黒色土	N2/0	径１～４㎜の褐色スコリア、パミスを微量に含む。２層より黒味が強い。
		７	赤黒色土	2.5YR2/1	径 20 ～ 40 ㎜のＮＬブロックを多量に含み、パミスを微量に含む。
		８	黒色土	N2/0	径１～２㎜の褐色スコリア、パミスを微量に含む。ザラザラとした印象。
		９	黒色土	N2/0	径２～３㎜の褐色スコリア、パミスを微量に含む。８層より黒味が強い。
		１０	黒色土	N2/0	径１～６㎜の褐色スコリア、パミスを微量に含む。９層より黒味が強い。
		１１	赤黒色土	2.5YR2/1	径１～４㎜の褐色スコリアとパミスを微量に含み、径１～３㎜のＹＬの粒子を少量含む。
		１２	黒褐色土	5YR2/1	径５～ 20 ㎜のＮＬブロックとＢＢⅡブロックを多量に含む。
		１３	黒色土	N2/0	径１～３㎜の褐色スコリア、パミスを微量に含む。ザラザラとした印象。
		１４	黒褐色土	5YR2/1	径１㎜の褐色スコリア、径 18 ㎜のＮＬブロック、パミスを微量に含む。
		１５	黒色土	N2/0	径１～４㎜の褐色スコリア、パミスを微量に含む。ザラザラとした印象。
		１６	黒色土	N2/0	径１～２㎜の赤褐色スコリア、径１～６㎜のＹＬの粒子、パミスを微量に含む。
		１７	黒色土	N2/0	径１～５㎜のＹＬブロック、パミスを微量に含む。
		１８	赤黒色土	2.5YR2/1	径３～６㎜の褐色スコリア、径５～ 20 ㎜のＮＬの粒子、パミスを微量に含む。
		１９	黒色土	7.5YR2/1	径 120 ㎜のＹＬブロックを含む。
		２０	黒褐色土	5YR2/1	径１㎜の赤褐色スコリアを微量に含み、径１～５㎜のＹＬブロックをわずかに含む。
第 66 図	ＳＤ２ＳＸ２(B-B')	１	黒褐色土	5YR2/1	径１～３㎜の褐色スコリアを微量に含み、パミスをわずかに含む。ザラザラとした印象。
		２	黒色土	7.5YR2/1	径１～４㎜の褐色スコリア、径３～ 20 ㎜のＹＬブロック、パミスを微量に含み、ＹＬの粒子を少量含む。
		３	黒褐色土	5YR2/1	径２～３㎜の褐色スコリア、パミスを微量に含む。
		４	黒褐色土	5YR2/1	径１～ 10 ㎜の褐色スコリア、パミスを微量に含む。
		５	黒褐色土	5YR2/1	径１～５㎜の褐色スコリア、パミスをわずかに含む。ザラザラとした印象。
		６	赤黒色土	2.5YR2/1	径１～８㎜の褐色スコリア、ＹＬの粒子、パミスを微量に含む。
		７	黒褐色土	5YR2/1	径１～５㎜の褐色スコリア、径１～３㎜のＹＬの粒子、パミスを微量に含む。
		８	黒色土	7.5YR2/1	径１～２㎜の赤褐色スコリア、ＹＬの粒子、パミスを微量に含む。締まりがある。
		９	黒色土	7.5YR2/1	径１㎜の赤褐色スコリア、ＹＬの粒子、パミスを微量に含む。締まりがある。
第 66 図	ＳＸ２(C-C')	１	赤黒色土	2.5YR2/1	径１～２㎜の褐色スコリア、径１～８㎜のＹＬの粒子、パミスを微量に含む。締まりがある。
		２	黒色土	7.5YR2/1	径１～３㎜の赤褐色スコリア、パミスを微量に含み、ＹＬの粒子を少量含む。粘性がある。
		３	黒色土	5YR1.7/1	径１㎜の赤褐色スコリア、パミスを微量に含む。
		４	黒褐色土	5YR2/1	径１～４㎜の褐色スコリア、パミスを微量に含む。ザラザラとした印象。
		５	黒褐色土	5YR2/1	径１～４㎜の褐色スコリア、パミスを微量に含む。
		６	黒褐色土	5YR2/1	径１～３㎜の赤褐色スコリア、パミスを微量に含む。
		７	黒色土	7.5YR2/1	径１～６㎜の褐色スコリア、径５～ 20 ㎜のＹＬブロック、パミスを微量に含み、ＹＬの粒子を少量含む。やや締まりがない。
第 66 図	ＳＸ２(D-D')	１	暗灰色土	N3/0	
		２	暗灰色土	N3/0	径１～３㎜の赤褐色スコリア、パミスを微量に含み、径 30 ～ 80 ㎜のＹＬブロックをやや多く含む。
		３	暗灰色土	N3/0	径１～３㎜の赤褐色スコリア、ＹＬの粒子、径 10 ～ 20 ㎜のＹＬブロック、パミスを微量に含む。
		４	赤黒色土	2.5YR2/1	径１～３㎜の褐色スコリア、パミスを微量に含に、ＹＬブロックをやや多く含む。
		５	黒色土	N2/0	径１～４㎜の褐色スコリア、パミスを微量に含み、ＹＬブロックを少量含む。
		６	黒色土	N2/0	径１～３㎜の赤褐色スコリア、パミスを微量に含み、ＹＬの粒子を少量含む。
		７	黒色土	N2/0	径１～３㎜の赤褐色スコリア、ＹＬの粒子、パミスを微量に含む。ザラザラとした印象。
第 66 図	ＳＸ３(E-E')	１	暗紫灰色土	5RP3/1	径１～３㎜の褐色スコリア、径８～ 40 ㎜のＹＬブロック、パミスを微量に含む。
		２	黒色土	N2/0	径２～８㎜の褐色スコリア、パミスを微量に含む。
		３	黒色土	N2/0	径１～４㎜の褐色スコリア、パミスを微量に含む。ザラザラとした印象。
		４	暗赤灰色土	5R3/1	径２～６㎜の褐色スコリア、パミスを微量に含み、径１～ 40 ㎜のＹＬブロックを少量含む。やや粘性がある。

第 22 表　律令時代土器観察表

図版 No.	器種	出土地点	遺物 No.	口径 器高 底径	色調・残存部位	形　態　の　特　徴	技　法　の　特　徴	X 座標 Y 座標 Z 座標
第 68 図 1	高台付坏	SM-SYU	3500	16.8 (5.7) —	7.5YR4/3 褐色 坏部	坏部はやや内湾して立ち上がり、口縁端部がわずかに外反する。	Ｒロクロ成形 内外面ナデ	-97242.287 32929.010 15.238
第 68 図 2	高台付坏	SM-SYU	3230 3236	(15.7) (5.3) —	5YR5/4 にぶい赤褐色 坏部～脚部	坏部は直線的に立ち上がり、口縁端部が外反する。	Ｒロクロ成形 内外面ナデ	-97242.422 32929.057 15.263
第 68 図 3	高台付坏	ベルト J	3410	14.0 (5.7) —	5YR5/4 にぶい赤褐色 坏部～脚部	坏部は直線的に立ち上がり、口縁端部が外反する。	Ｒロクロ成形 内外面ナデ	-97242.339 32928.935 15.246
第 68 図 4	坏	SM-SYU	3411	10.6 4.2 4.9	5YR5/4 にぶい赤褐色 ほぼ完形	胴部は内湾して立ち上がり、口縁端部がわずかに外反する。底部を突出させる。	Ｒロクロ成形 内外面ナデ、底部回転糸切り痕	-97242.205 32929.092 15.262
第 68 図 5	坏	耕作土 表採	—	(10.9) 5.0 5.9	5YR5/4 にぶい赤褐色 口縁部～底部	胴部は直線的に立ち上がり、口縁端部がわずかに外反する。底部を突出させる。	Ｒロクロ成形 内外面ナデ、底部回転糸切り痕	— — —
第 68 図 6	坏	SM-SYU	3232 3233 3235	(10.4) 3.5 5.6	7.5YR5/4 にぶい褐色 口縁部～底部	胴部は内湾して立ち上がり、口縁端部がわずかに外反する。底部を突出させる。	Ｒロクロ成形 内外面ナデ、底部回転糸切り痕	— — —
第 68 図 7	坏	SM-SYU	3355	10.5 4.2 5.9	7.5YR4/3 褐色 完形	胴部は緩やかに内湾して立ち上がり、口縁端部がわずかに外反する。底部を突出させる。	Ｒロクロ成形 外面ナデ	-97242.598 32929.381 15.265
第 68 図 8	坏	SM-SYU	3223 3224	— (5.1) (9.1)	5YR5/4 にぶい赤褐色 口縁部～胴部下半	胴部は内湾して立ち上がり、口縁端部がわずかに外反する。	Ｒロクロ成形 外面ナデ	-97242.298 32929.437 15.279
第 68 図 9	坏	表採	—	(10.5) 4.0 5.7	5YR4/2 灰褐色 口縁部～底部	胴部は内湾して立ち上がり、口縁端部がわずかに外反する。	Ｒロクロ成形 内外面ナデ、底部回転糸切り痕	— — —
第 68 図 10	坏	SM-SYU	3356	10.0 3.1 5.0	7.5YR5/4 にぶい褐色 完形	胴部は緩やかに内湾して立ち上がる。	Ｒロクロ成形 内外面ナデ、底部ヘラケズリ	-97242.311 32928.493 15.273
第 68 図 11	小皿	SYU 前方 05U	—	(10.9) (3.5) —	5YR5/4 にぶい赤褐色 口縁部～体部下半	底部から内湾して立ち上がり、口縁端部が尖る。底部を突出させる。	Ｒロクロ成形 内外面ナデ、底部回転糸切り痕	— — —
第 68 図 12	小皿	SYU 前方 05U	—	9.2 1.8 5.6	7.5YR4/3 褐色 口縁部～底部	底部から内湾して立ち上がり、口縁端部が尖る。底部を突出させる。	Ｒロクロ成形 内外面ナデ、底部回転糸切り痕	— — —
第 68 図 13	小皿	SYU 前方 05U	—	9.0 2.5 5.4	5YR5/4 にぶい赤褐色 口縁部～底部	底部から内湾して立ち上がり、口縁端部が尖る。底部を突出させる。	Ｒロクロ成形 内外面ナデ、底部回転糸切り痕	— — —
第 68 図 14	小皿	SYU 前方 05U	—	(9.4) 2.5 5.7	5YR5/4 にぶい赤褐色 口縁部～底部	底部から内湾して立ち上がり、口縁端部が尖る。底部を突出させる。	Ｒロクロ成形 内外面ナデ、底部回転糸切り痕	— — —
第 68 図 15	小皿	SYU 前方 05U	—	8.9 2.7 5.4	7.5YR4/3 褐色 口縁部～底部	底部から内湾して立ち上がり、口縁端部が尖る。底部を突出させる。	Ｒロクロ成形 内外面ナデ、底部回転糸切り痕	— — —
第 68 図 16	鉢	表採	—	— (13.4) 8.7	10YR4/2 灰黄褐色 胴部下半～底部	平底の底部から直線状にやや内湾して立ち上がる。	胴部内面ナデ 胴部外面ヘラミガキ	— — —
第 68 図 17	甕	表採	—	(19.3) (9.8) —	7.5YR4/1 褐灰色 口縁部～胴部上半	胴部は内湾して立ち上がり、口縁部は外反して開く。	口縁部内外面ヨコナデ 胴部内面ナデ、頸部外面指頭圧痕 口縁部接合痕、外面煤付着	— — —
第 69 図 1	甕	表採	—	(20.3) (14.9) —	7.5YR4/2 灰褐色 口縁部～胴部上半	胴部は直立気味に立ち上がって、肩部で屈曲し、口縁部は強く外反する。	内外面ナデ、指頭圧痕	— — —
第 69 図 2	甕	表採	—	(23.8) (14.6) —	7.5YR4/2 灰褐色 口縁部～胴部上半	胴部はやや内湾して立ち上がり、肩部で屈曲した後、口縁部が強く外反する。	口縁部内外面ヨコナデ 胴部内外面指頭圧痕	— — —
第 69 図 3	甕	SM-SYU	696 3222	— (17.4) —	7.5YR3/1 黒褐色 胴部	胴部は外傾して立ち上がる。	内面磨滅	-97229.061 32935.379 15.513
第 69 図 4	甕	SM-SYU	3220 3222	(29.5) (19.2) —	7.5YR4/2 灰褐色 口縁部～胴部	胴部は内湾して立ち上がり、口縁部がわずかに外反して開く。口縁端部を面取りする。半透明白色砂粒をやや多く含む。	口縁部内面ヨコナデ、外面ナデ 接合痕	-97242.823 32929.459 15.412

第 23 表　律令時代土製品観察表

図版 No.	種別	出土地点	遺物 No.	計測値（cm）	備考
第 69 図 5	土馬	SM-SYU	5560	（長さ）5.2 （幅）2.7 ともに残存値	頭部・尾部および前後脚を欠損

第 24 表　近世以降陶磁器観察表

図版 No.	種別	器種	出土地点	口径 器高 底径	産地	年代	形態・技法の特徴
第 71 図 1	陶器	小皿	SM-SYU	8.8 1.6 4.6		江戸時代後半	灰釉、碁笥底
第 71 図 2	陶器	杯	耕作土	(7.7) 4.2 4.0		幕末～明治時代	口縁部褐色、胴部青灰色の釉
第 71 図 3	磁器	碗	—	— 6.3 4.1	肥前系	18 世紀代（1700 年初頭～ 1770 年）	呉須による染付、「大明年製」の銘
第 71 図 4	磁器	有脚灯明具	耕作土	7.8 5.3 5.0		19 世紀代～明治時代	灰色の釉、受け部分に切り込み
第 71 図 5	磁器	碗	—	— 4.9 4.0	瀬戸・美濃系	明治 10 ～ 20 年代	コバルトによる型紙染付
第 71 図 6	磁器	碗	耕作土	12.7 6.7 5.0	瀬戸・美濃系	大正時代末以降	吹絵・ゴム版絵付の後、金・赤・緑による上絵付、イッチン

第 25 表　近世以降その他の遺物観察表

図版 No.	種別	製品名	出土地点	計測値（cm・g）	備考
第 72 図 1	陶器	人形	耕作土	（像高）5.3	大黒天、彩色あり
第 72 図 2	陶器	人形	—	（像高）7.0	大黒天
第 72 図 3	陶器	人形	—	（像高）8.3	大黒天
第 72 図 4	陶器	人形	—	（像高）5,2	恵比寿神
第 72 図 5	陶器	徳利	表採	（口径）3.2 （器高）14.7 （底径）4.5	釉が掛かる、胴部に恵比寿神
第 72 図 6	石製品	砥石	SM-SYU	（長さ）11.7 （幅）3.4 （厚さ）2,0 （重さ）95.0	砂岩製
第 72 図 7	石製品	砥石	SM-SYU	（長さ）9.4 （幅）4.4 （厚さ）2.5 （重さ）161.5	砂岩製

第Ⅵ章　発掘調査の成果と課題

1．高尾山古墳の墳丘と周溝について

山本惠一

a．はじめに

高尾山古墳が発見されるまでは、東駿河における大型古墳は、前方後方墳の浅間古墳（富士市）を除き前方後円墳で占められていた。しかも前方後円墳の出現以前に前方後方墳が成立することは、誰しも予想さえしていなかったのが正直なところではないだろうか。また、前方後方墳の分布は、東海西部の濃尾平野とは異なり、東駿河だけではなく西駿河や遠江を含めても、希薄であるといえる。したがって、東海西部に分布の中心がある前方後方墳の初期古墳が、東駿河のような分布の希薄な土地に造営されたことになる。

さて、高尾山古墳がどのような背景を基に出現したのかは、簡単に説明できることではないし、今後引き続き論議の対象となっていくと思うが、本稿では初期古墳としての墳丘とその立地について考えてみることにしたい。

前方後方墳の祖形は、すでに弥生時代中期に濃尾平野において認めることができるようであり、東駿河でも弥生時代終末期と推定される丸ヶ谷戸周溝墓（富士宮市）は、前方後方形を呈している。この前方後方形は、濃尾平野において受け入れられ、少なくとも西上免古墳（愛知県一宮市）の頃には、前方後方墳として確立したものと理解されている。以後、大型の前方後方墳が造営されるようになる。ところが、同じ東海というエリアでありながらも、遠江・西駿河・東駿河では、必ずしも同様な流れとはなっていないようであり、むしろ大型古墳の大半は、前方後円墳が占めている。

b．墳丘

高尾山古墳の墳丘西側の大半は調査区外となっているが、残念ながら西側の市道によりすでに破壊されている。遺存する墳丘と調査区外となる暗渠の境には、擁壁が設けられており、墳丘の西側は削られている。おそらく西側周溝は、かつての市道の工事により相当の影響を受けていることが予想されるが、東側周溝を検出した感触から、西側周溝の下半は確認できるのではないかと想定している。残る墳丘については、後方部には高尾山穂見神社が、前方部には熊野神社が建立されていることもあり、ある程度良好な遺存状態が期待されていた。しかし、実際には後方部周囲には擁壁が設けられ、その影響で墳丘は大幅に削られていた。特に北側周溝までの範囲が著しく、これにより墳丘の約 1/3 を失っている。さらに墳丘の東側も想定していたよりも削られていた。

発掘調査を中断しており墳丘を断ち割っていないが、確認できた後方部の土層には、弥生時代最終末～古墳時代初頭に降下した新期スコリア層が大半のところに残っており、盛土は当時の生活面から４ｍ程積み上げられている。後方部周辺では、周溝を確認できた地山が北側ではニセローム層、南側では休場層であり、このことは、この一帯が愛鷹山の丘陵であったことを示している。興味深いのは、周溝東側で律令期の住居址が検出されたことである。この住居址は、ニセローム層を掘り抜いて床面は第Ⅰ黒色帯まで達していた。これまで、愛鷹山南麓において当該期の住居址を多数検出し調査しているが、せいぜい休場層中までの掘り込みであり、さらに下位の層位まで達するような事例はない。しかも新期スコリア層からニセローム層までの層厚は３ｍ程あり、これらのことを考えると検出した律令期の住居構築時には、この一帯は削土されていたものと考えるのが自然であろう。本古墳の造営時に削土、削平が行われていたものと理解したい。

本古墳墳丘の平面プランは、検出した周溝内縁を基に復元すると、後方部の形状は、北辺に対して南

辺が少し長い。そのためか東辺は、やや外開している。また北辺と東辺との角は、丸みをもつ。西辺については、未調査ながらその形状は東辺が反転するものと理解している。したがって、後方部墳丘下部の形状は隅丸等脚台形状となる。墳丘上部は、掘削の影響が大きく現状から平面プランを復元するのは難しいが、後方部墳丘下部の形状と相似形となろう。

前方部墳丘は、神社造成による影響もあるが、造成土の直下が地山（休場層）となっていることから、墳丘高は思ったよりも低かったのだろうと予想される。

前方部は、主軸ラインで約 30.5 mの長さをもつ。後方部との接続部分の幅は狭く、10 mに満たない。また、前方部と後方部との境になる斜面は、地山の新期スコリア層との境界付近まで連続しており、前方部にはほとんど盛土されず、周囲を削り出して墳丘とした可能性が高い。前方部の東辺は、南側へ直線的に６m弱延び、さらに大きく外に開きながら延びている。しかし、西辺は外開する手前までは確認しているが、それより先は調査区外のため未調査である。このため前方部の平面プランも東辺を反転して考えると、ほぼ撥形状を呈するものと考えられる。

なお前方部から後方部上部への仰角は、現在の安定勾配３割（ぶ）に匹敵するものであり、安全性が考慮されている。

ｃ．周溝

周溝の西側部分は、調査区外の市道の路盤下となっている。墳丘の形状は南北軸に対して対称的に企画・築造されており、西側周溝も東側のそれとシンメトリーな形状となることが予想される。しかし前方部東南側には地山を削り残した土橋が確認され、本古墳の周溝は全周しないことが明らかとなった。

周溝は、墳丘に平行しながら沿うものであるが、その幅はコーナー等の変換点による差が生じているため部位によって８m～９mとなるなどしている。発掘調査によって検出された周溝は、後方部北側～東側～南側（くびれ部）～前方部東側・南側・西側北の一部である。周溝の内辺は墳丘に沿うため同一形状であるが、本古墳の外辺は内辺と一体とはなっていない。後方部の北側周溝外辺は、墳丘主軸に直交する東西軸（後方部を南北に二分割）にほぼ平行するように沿うが、その北東角ではあたかもカーブを意識するように多角形に屈曲しながら東側周溝に移行している。東側周溝外縁も墳丘主軸にほぼ平行するが、後方部が南に向かって外開しているため南東角付近の周溝幅は狭くなっている。

次に周溝外縁はくびれ部から前方部にかけて内傾するように屈曲し、前方部の形状に平行するものの孤状線を描くようなラインとなって収束する。前方部南側の周溝は、土橋と推定される削り残したスペースを挟んで始まるが、内外辺とも弧状となる。しかもその幅は 2.5 m～ 3.2 mにすぎず、他の周溝とは比較にならないほど狭い。この周溝はさらに調査区外に延びていることから、調査範囲の直近で北側に屈曲して西側周溝に移行するものと理解している。

なお、南側周溝の南方に等間隔を保ちながら平行する溝が検出されている。この溝から遺物として、弥生時代～古墳時代の土器が出土していることから、本古墳と関連性が高い遺構として考えている。確証はないが、見た目にもこの溝は、前方部を遮断するように映ることから、本古墳とのエリア境を示しているのかもしれない。

ｄ．まとめ

高尾山古墳の墳丘全長は約 62 mで、前方部と後方部の長さにさほど差はなく、前方部が約 0.8 m短い。このことは、本古墳の前方部がよく発達していることを示している。

さて、東駿河の丸ヶ谷戸の前方後方形墳丘墓以外では、本古墳に先行する同型墓は西駿河・遠江でも認められていないが、東海西部の濃尾平野では前方後方形墳丘墓が定型化しており、その前方

部が発達することにより、前方後方墳として確立するものと理解されている。前方後方形墳丘墓は、B0 → B1 → B2 と移行するが、最終段階となる B3 型においても、前方部が後方部の 1/2 以上にはなお発達していない段階であり、周溝は前方後方形に取り囲むものである。この B3 とする一群から、前方部の発達したものを C 型とし、前方後方墳の初段階としている。

高尾山古墳は前方部がよく発達しており、B3 型ではなく C 型として捉えることに異論はあるまい。また周溝は前方部東南に土橋を有するため、B2 段階の形態を示しているが、初期的な前方後方墳として考えると、必ずしも定型化しているとは限らず、古い要素を有しているのであろう。

次に高尾山古墳の立地選定について触れると、本古墳を含む周囲は古墳造営時に愛鷹山の丘陵を削平している。当初は後世の掘削とも思えたが、周溝を検出したニセローム層において律令期の住居址を検出し、本古墳の周囲を含む範囲のカットが行われているのが判明した。おそらく墳丘に必要な大量土の確保と、墳丘を独立した山や丘、島状に見せることで、古墳の眺望と存在を示す効果を目的にしたものだろう。しかし本古墳の北西～北～北東方向は、他の丘陵等により死角となるおそれが高いものと考えられ、これらを除いた範囲からの眺望を想定しているものと理解される。そして、この眺望を意識した範囲に高尾山古墳に関連する集落址が点在するものと思っている。あえて集落址が点在するとしたのは、本古墳の被葬者は、広域な範囲を掌握していたものと私考しているからである。本古墳の南方に広がる沖積平野には、本古墳と同時期の集落の存在が多数見込まれているが、ほとんどが未調査であり詳細は不明である。本古墳の西方に同時期と推定される入方遺跡が知られているが、部分的な調査に留まっており、明確な実態がつかめておらず不明な点が多い。

高尾山古墳が築造された浮島沼と黄瀬川にはさまれた地域は、その後、長く駿河の中心となっていく。以後、律令期には駿河郡衙との関連が推定される上ノ段遺跡、日吉廃寺跡等の重要遺跡が知られ、駿河国と伊豆国分離までの間、駿河の政治的・経済的な中心地として機能していたといってよい。

これまで、遠江・西駿河・東駿河における定型化した大型首長墓は、遠江が松林山古墳、西駿河は柚木山神古墳、東駿河では浅間古墳と考えられてきた。しかし、これらに先行する高尾山古墳の出現によって、畿内とほぼ同時期に定型化した首長墓が出現し、その成立が大幅に遡ることが示された。さらに高尾山古墳の出現は、弥生時代と古墳時代の画期を考える上で、大きな示唆を与えた事例といえる。

引用参考文献

赤塚次郎 1990『廻間遺跡』(財) 愛知県埋蔵文化財センター

赤塚次郎 1990『西上免遺跡』(財) 愛知県埋蔵文化財センター

赤塚次郎 2010「三世紀東海の初期古墳」『邪馬台国時代の東海と近畿』（ふたかみ邪馬台国シンポジウム 10）資料集

鈴木敏則 2011「静岡県における古墳時代の画期」帝京大学山梨文化財研究所報第 51 号

高尾好之・山本惠一・渡井英誉 2010「静岡県沼津市発見の辻畑古墳」『邪馬台国時代の東海と近畿』（ふたかみ邪馬台国シンポジウム 10）資料集

寺澤　薫 2010「纒向型前方後円墳の成立と前方後方墳」『邪馬台国時代の東海と近畿』（ふたかみ邪馬台国シンポジウム 10）資料集

松本市教育委員会 1978『弘法山古墳』

2．高尾山古墳の出土土器について

渡井英誉

a．はじめに

高尾山古墳は、前項で詳細な検討がされているように、駿河湾沿岸地域において大型の前方後方墳として捉えられる墳墓である。高尾山古墳では、主体部を中心に数々の出土品が確認されているが、古墳を特徴付けるものとして、周溝内を中心として供献された多量の土器の出土が挙げられる。

土器の出土は、古墳の時代性やその変遷を考える上で多くの情報を提供しているが、高尾山古墳の事例は、それを的確に示していると考えられる。それは、古墳の築造年代と古墳に直接関わった首長霊に対する祭祀の年代を反映していよう。

ここでは、出土土器の時代的な変遷と多系統にわたる系譜の違いを検討することで、高尾山古墳出土土器の特性から分かる古墳の特徴の一端を表してみる。

古墳に直接関わる土器群は、大廓式土器の段階に相当しており、段階的な土器組成の違いを示すことで、古墳時代前期の中での変化として捉えられる。ここで確認しなければならないことは、古墳に関連する土器群が、大廓式土器の型式内で理解されることと、それが次段階まで継続しない点である。これまでの集落や墳墓出土の土器とを照合したうえで、高尾山古墳が古墳時代前期の墳墓であることを、再度確認しておく必要がある。

b．出土土器の特徴

高尾山古墳出土土器は、弥生時代後期前半段階、古墳時代前期、古墳時代後期、律令時代のそれぞれが発見されている。その中で、質、量ともに多彩なのは、古墳時代前期の土器群である。ここでは、古墳時代前期の土器を対象とし、あわせて古墳の築造年代と土器祭祀についても検討する。

高尾山古墳出土土器の大きな特徴として、大廓Ⅰ式～Ⅳ式という比較的長い時間幅をもつ土器群が大量に周溝内から出土している点が挙げられる。周辺地域の弥生時代終末～古墳時代前期の墳墓ないし古墳では、このような状況は認められない。

富士宮市の丸ヶ谷戸遺跡には、墳丘長 26.2m を測る大廓Ⅰ式期の前方後方形周溝墓が造られ、その前方部と同じ長さを測る方形の竪穴住居が隣接して築かれている。双方から大廓Ⅰ式に属する多量の土器が出土し、２つの遺構の間には接合関係が認められる。つまり隣りあう墳墓と住居は、祭祀儀礼を共有する関係にあると考えられるが、その土器群の年代は、築造年代である大廓Ⅰ式期の中にほぼ収まっている。

沼津市の神明塚古墳は、大廓Ⅲ式期に築造された墳丘長 54m を測る前方後円墳であることが近年判明している（沼津市教育委員会 2005）。この古墳の特徴のひとつとしては、トレンチ調査ながら、多くの土器が満遍なく出土している点が挙げられる。高尾山古墳に継続する古墳として注目されるが、土器群の年代は大廓Ⅲ式期を主体として、一部大廓Ⅳ式期までの年代幅があり、一定期間の土器祭祀の執行が窺われるものとなっている。

この神明塚古墳と対照的に、墳丘長 55m 前後と思われ、神明塚古墳と同等の規模を有する子ノ神古墳では、土器の出土がほとんど認められていない。子ノ神古墳は、数少ない土器の出土から大廓Ⅳ式期段階が古墳の築造年代として考えられる。古墳としては、神明塚古墳から子ノ神古墳へと時間的に継続するものの、土器の出土状況は大きく異なることになる。ここに大廓Ⅲ式期段階の画期が想定されるのである。その前は、高尾山古墳、丸ヶ谷戸遺跡の前方後方形周溝墓、神明塚古墳などに認められる多彩

な土器による土器祭祀、その後は、子ノ神古墳をはじめとしたその祭祀形態の変化以後の土器類の出土であるといえる。前者は弥生時代以来の祭祀形態を残すものと捉えられ、後者は埴輪祭祀の開始に関連するものと捉えられる。土器祭祀の終焉は、同時に埴輪祭祀の登場に関連するのである。

高尾山古墳に関連した土器祭祀は、大廓Ⅰ式期から大廓Ⅳ式期まで継続性が認められる点が大きな特徴として挙げられる。具体的な土器の型式変化については後述するが、古墳の周溝より出土している多量の土器は、別項で指摘しているように、一定のまとまりを持ちながら、継続する祭祀の跡を今によく伝えるものとなっている。

高尾山古墳出土土器群のもうひとつの特徴として、その時代幅とともに特異な土器型式が確認されている点が挙げられる。通常の型式的な変化にのらない小型の直口壺を主体とする一群の出土は、古墳に関わる葬送儀礼あるいは首長層祭祀に属する専用の形式（型式）として捉えられる。これらの小型壺は後方部の北東～東側で大量かつ集中的に出土しており、古墳を特徴づける要素の一つとなっている。

c．型式分類

前項で指摘したとおり、土器群の内容を具体化することで、古墳に関わる祭祀行為とその年代に対する見通しを立てることができる。ここでは、出土土器の具体的な様相について、器種分類図（1）（2）に基づきながら考えてみる。出土土器は、その組成を明らかにするために、確認される型式について、その分類を検討していく。出土している形式は、壺、甕、高坏、器台、鉢類に分けられ、形式としては単純な構成を示しているといえる。それを、そのまま型式として分けた場合は、どうであろう。系統の違いが著しく、用途と器種の関わりを明快に表すものとはならない。特に、外来系の甕が、直接煮沸の道具として使用されたのか、また、壺が貯蔵用具としての機能を越え、儀器として使用されたのかを考えると、その境界はさらに不明瞭なものとなる。形式と用途の相関性は、元来、分離できない関係であり、高尾山古墳から出土した土器も大きく偏る出土を示すものではない。

⑴ 壺

壺類としては、複合口縁壺、折り返し口縁壺、単純口縁壺が認められ、弥生時代後期以来の構成を示すものである。前の２者については、その属性の認識が明瞭な点で、分類に適合しやすいが、単純口縁壺については、直口壺や粗製の小型壺も含まれ、それが対象となる範囲は広い。その上、口縁部における型式的な属性では、鉢形土器との形式差が不明瞭であり、厳密に区分することは難しい。

壺A　複合口縁壺を壺Ａとする。弥生時代後期から継続する型式である。複合部の形態で細分される。複合部下端を垂下させて幅広の口縁部が幾分強調されるものと、垂下しないものとに分けられる。複合部を造作するための成形方法に由来する型式的な特徴である。

壺B　複合口縁壺の中で口唇部内面を肥厚させ、鍵状の複合部を形成するもので、大半が大型品で占められる点を特徴とする。壺Ａ同様に複合部下端を垂下するものと、ほとんど突出させないものが認められる。複合部は、壺Ｅを意識した口縁端部に幅広の複合部を乗せるものと、壺Ａのように幅広の面を意識して屈折させた口縁部に粘土帯を貼付させることにより厚みを持たせた複合部を作るものが見られるが、複合部下端の形状とは相関していない。

壺C　複合口縁壺の中で、いわゆる「二重口縁壺」を壺Ｃとする。大きく外反する頸部に緩やかに外反する口縁部が付される。

壺D　二重口縁壺の中で、頸部が直立して立ち上がり、口縁部が大きく外反して広がるもの。

壺E　折り返し口縁壺の中で、折り返し部の断面が長方形であまり肥厚しないもの。弥生時代以来の伝統型式といえる。

壺F　折り返し口縁壺の中で、断面が四角形の幅広の折り返し部を形成して、明瞭な面取りが認められ

るもの。面取り部分は、ヨコナデで仕上げられており、わずかに窪むものが多い。

壺Ｇ　単純口縁壺の中で、頸部から口唇部に至る口縁の途中で緩やかな屈曲が認められ、口縁部上半を大きく外反させるものを壺Ｇ１とする。口唇部は丸く仕上げている。

同じ単純口縁壺の中で、口縁部を頸部から直線的に外傾させているものを壺Ｇ２とする。口唇部を丸くし、明瞭な面取りを施さない。

壺Ｈ　全体の形態の分かるものはないが、口縁部を上下に拡張させて、幅広の面を形成するもので、擬凹線文および棒状の貼付文を施す、いわゆる「パレススタイル壺」を壺Ｈとする。胴部破片の出土も確認されており、横線文や刺突の波状文、列点文などで構成される文様に赤色塗彩の見られるパレス文様が施される。

壺Ｉ　単純口縁壺の中で、口縁部が内湾して立ち上がり、口縁端部内面に面取りが見られる、いわゆる「ヒサゴ壺」と呼ばれるものを壺Ｉとする。

壺Ｊ　単純口縁壺の中で、口縁部が強調される直口壺を総称する。

⑵ 鉢

壺や平底甕との区分が難しいが、口縁部が短く開き、器高に対して相対的に口径の広いものを鉢とする。

鉢Ａ　球形の胴部から、短く口縁部が外反して開くもの。口縁端部は丸く仕上げられる。

鉢Ｂ　幅の狭い底部から胴部が内湾しながら広がり、頸部に移行する。口縁部は、頸部から短く外傾させて開く。口径は胴径を凌駕する。

鉢Ｃ　口縁部が有段で、屈折して開く頸部に複合部を形成する口縁部が付されるもの。

⑶ 小型壺

小型壺は、前述のようにやや大振りの中型品も含めて、この古墳において特徴的な出土を示す特有の器種として捉えられる。ただし、通有の壺との分類の基準は同一であり、壺との違いが不明瞭でもある。そのため、一般的な壺の型式も含まれるものであり、型式分類を基準化できない部分がある。しかし、この古墳における出土数の多さや粗製品が目立つ点などから、土器組成を特徴づける形式として器種の設定を行っている。

小型壺Ａ　複合口縁壺を小型壺Ａとする。屈折して外傾する頸部に、直立気味に開く複合部が付される。

小型壺Ｂ　屈折する頸部から外反しながら広がる短い口縁部に、折り返し部が付されるもの。折り返し部の形状で細分することができそうであるが、類型化できるほどの出土数を示していない。

小型壺Ｃ　短く外反する口縁部の外面中位を肥厚させ、やや幅広の面を形成することにより複合部の意匠を示すもの。面取り部分はヨコナデにより調整されている。

小型壺Ｄ　単純口縁の壺を小型壺Ｄとする。その中で、口縁部が頸部から外反しながら開くものを小型壺Ｄ１とし、屈折する頸部から内湾しながら外傾する口縁部が付されるものを小型壺Ｄ２とする。さらに、球体あるいは扁平な胴部に短く直立か外傾する口縁部が付されるものを小型壺Ｄ３とする。

⑷ 小型鉢

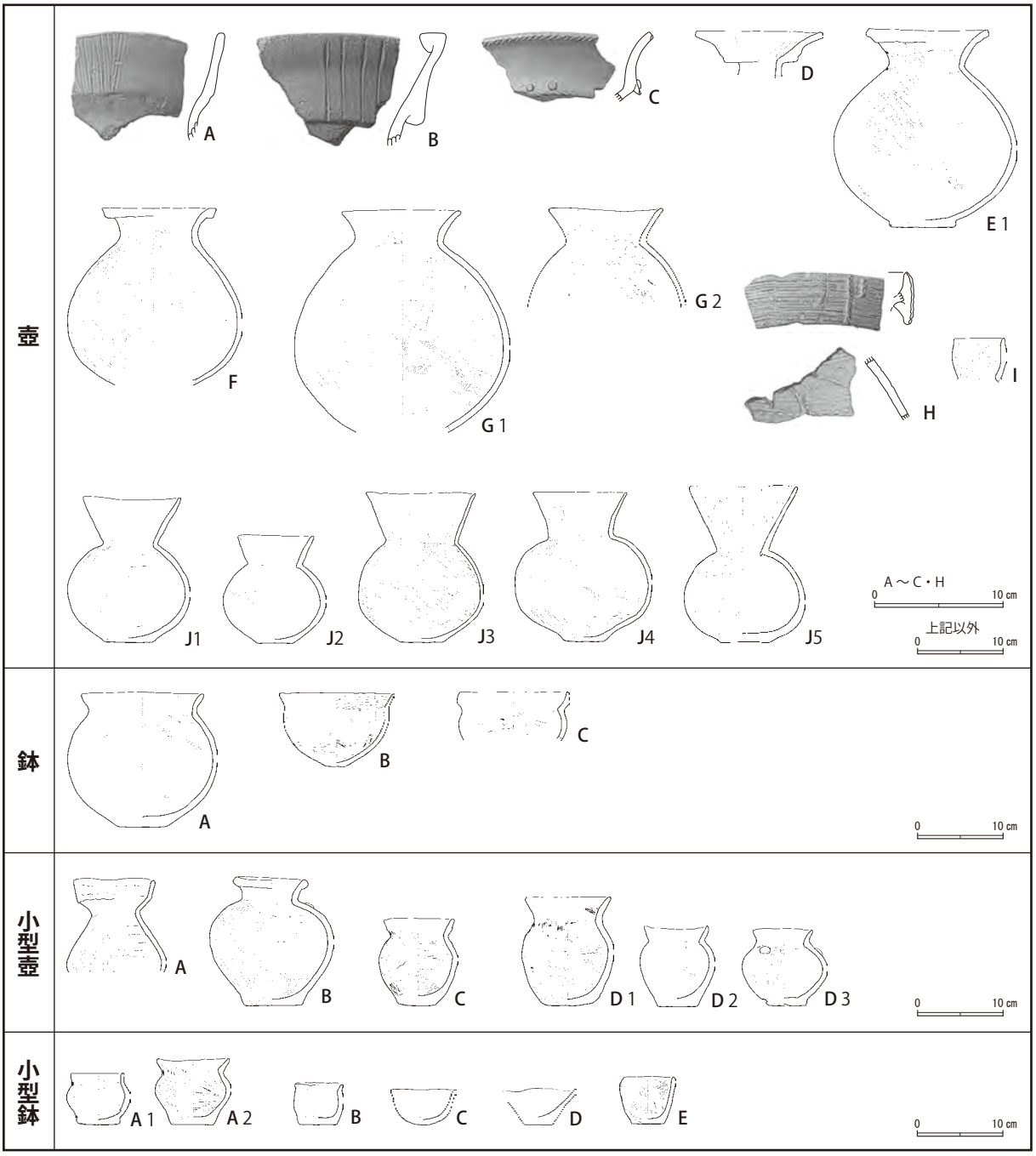
小型鉢は口縁部が明らかに形成されるものと埦状、皿状あるいはコップ状に底部から直接口唇部へと広がるものとに大別される。

小型鉢Ａ　口縁部が形成されるものを小型鉢Ａとする。頸部が形成され、直立気味にわずかに外傾する口縁部が付されるものを小型鉢Ａ１とし、頸部から大きく外反するものを小型鉢Ａ２とする。

小型鉢Ｂ　短く外傾する口縁部を付し、内面を平坦に面取りする内斜口縁のもの。

小型鉢Ｃ　埦状の小型鉢を小型鉢Ｃとする。丸底気味の底部から内湾して体部が広がる。

小型鉢Ｄ　皿状の小型鉢を小型鉢Ｄとする。平底の底部に外傾する体部が付く。



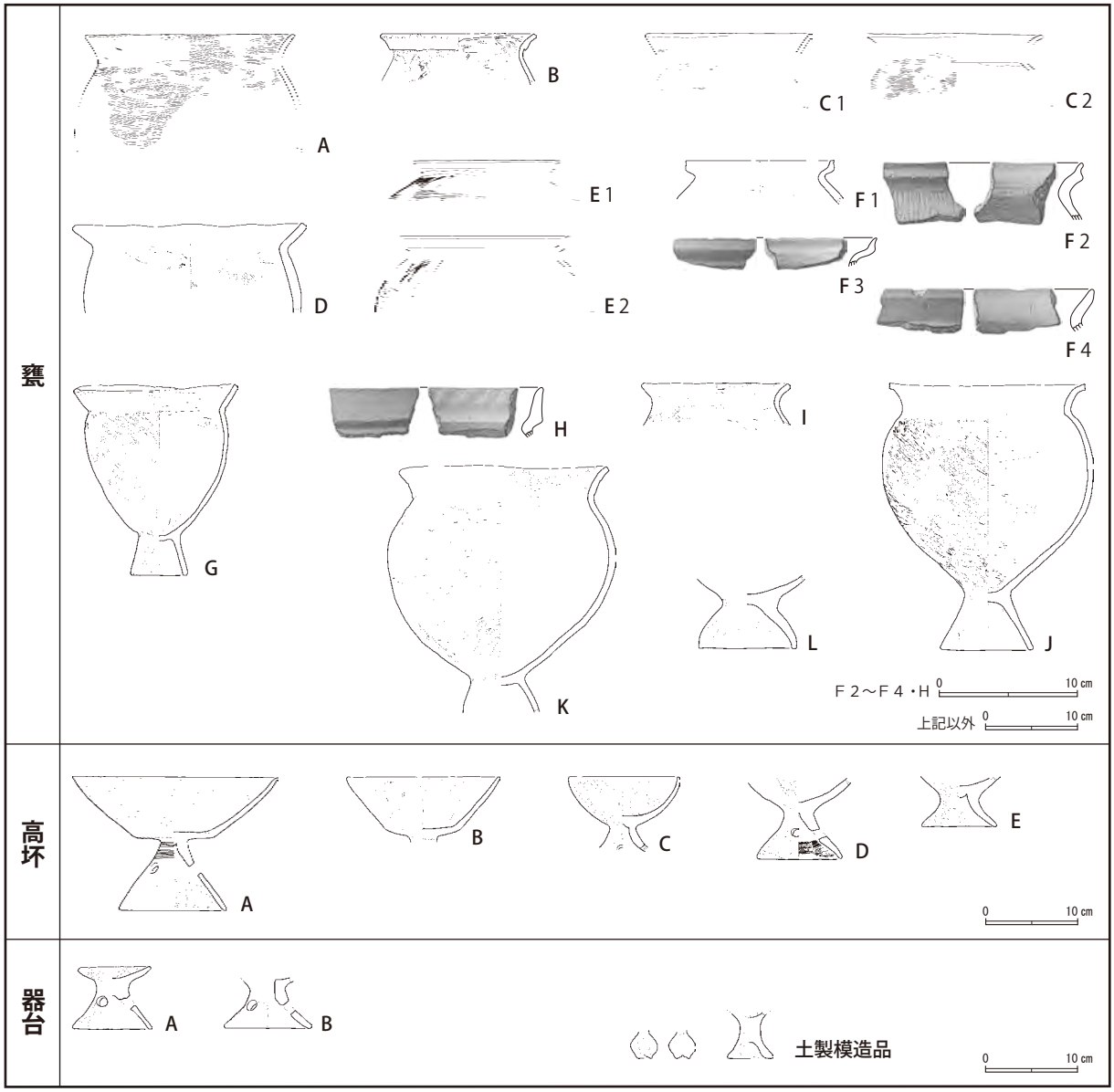
器種分類図（1）

小型鉢E　コップ状の小型鉢を小型鉢Eとする。平底の底部から内湾しながら直立気味に広がる体部が付される。内外面にハケメ整形が残る。

⑸ 甕

古墳という墳墓ながら、煮沸を主な機能とする甕類の出土が一定量認められる点が、高尾山古墳の出土土器の特徴である。そして、その種類も多系統にわたり、多種多様な様相を示している。

出土品として確認されるものとしては、台付甕を原則としている。平底甕の分布する地域からの影響が窺われる型式の出土も確認されているが、全体の分かるものはない。台付甕については、明らかな分類の俎上に載せることが可能であるが、平底甕については、想定される型式である点を踏まえての分類を考えなければならない。



器種分類図（2）

甕は、型式的な特徴が不明瞭な在来系の「く」の字甕からＳ字甕や受口甕、５字甕等、多型式にわたる分類が考えられる。

甕Ａ　弥生時代以来の伝統的な台付甕の一群を甕Ａとする。口縁部は、頸部が胴部から緩やかに外反しながら開く。口縁部外面にタテあるいはナナメ方向のハケメを施してから胴部のヨコハケメを施すものを原則とする。また、口縁部内面にはヨコ方向のハケメが施されている。器形は、胴径が口径より大きくなり、胴部の球形化が認められる。

甕Ｂ　口縁部外面に折り返しの見られるもの。折り返しは幅広で薄く、その側面を指頭で押さえて整形する。折り返し部の端部に刺突の列点文を施す。口縁部上端面にヨコハケメが見られるほか、折り返し部以外は甕Ａのハケメ整形と共通して、口縁部から頸部にかけての外面は、タテとヨコ方向のハケメ、内面はヨコ方向のハケメが施される。

甕Ｃ　台付甕としての「く」の字甕の中で、頸部の屈折がはっきりしているもの。最終の調整として口縁部におけるヨコナデを特徴としており、ハケメをナデ消している。口唇部を角張らせて端部に面を持つ甕Ｃ１と、丸く整形するか尖らせている甕Ｃ２が見られる。

甕Ｄ　屈折する頸部から口縁部が内湾気味に開くもの。口縁部は内外面ともヨコナデで仕上げられる。
甕Ｅ　口縁部を２回以上屈折させ、緩やかなＳ字状を示すＳ字甕を甕Ｅとする。肩部外面において左下がりのナナメハケメと胴部において右下がりのナナメハケメが施される。搬入品としてのＳ字甕を甕Ｅ１、在来のＳ字甕を甕Ｅ２として分けることができる。
甕Ｆ　頸部が屈折して広がり、口縁部が受口状を示すものを甕Ｆとする。甕Ｆは口縁部の形状により、４つに分けられる。口縁部が立ち上がり、その上端面に明瞭な面取りが認められ、胴部内面をヘラケズリで整形する甕Ｆ１、口縁部外面を窪ませ、その端部を丸く尖らせている甕Ｆ２、甕Ｆ１と同様に口縁部が立ち上がるものの端部を尖らせる甕Ｆ３、口縁端部外面を傾斜させて面取りし、その上端部を丸く仕上げる甕Ｆ４などが認められる。この中で、その型式的な特徴から甕Ｆ１は、平底甕となるものと思われる。
甕Ｇ　屈折が明瞭な頸部に、直線的で幅広の口縁部が付されるもの。口縁端部は面取りされる。脚台部は口径に比べると比較的低脚である点を特徴とする。
甕Ｈ　明瞭に屈曲して開く頸部に、幅広の面が形成される複合口縁が付されるもの。いわゆる「５」の字状口縁の甕を指す。
甕Ｉ　口縁部が緩やかに屈曲する頸部から短く外反し、その端部を丸くするもの。胴部内面はヘラケズリで器面を整形し、口縁部外面は主にヨコナデで仕上げられている。
甕Ｊ　屈曲する頸部から大きく外反する口縁部が付されるもの。口唇部を上下に拡張させ、明瞭な面取りが認められる。調整としては、口縁部内外面のヨコナデと胴部内外面のハケメが特徴的である。
甕Ｋ　口縁部に文様的な要素を加味した輪積みの痕を残すもの。口縁端部における刺突文の有無によって型式細分されるものと思われるが、その出土数じたいが多くない。
甕Ｌ　脚台部のみの出土で全体はよく分からない。大きく内湾しながら開く、低脚の脚台部を付すものを甕Ｌとする。

⑹ 高坏

一般集落と比べて、高坏の出土数が多い点が、この古墳出土土器群における特徴のひとつとして取り上げられる。坏部に稜をもつ有稜高坏の出土がその大半を占めるようであるが、それとは系譜の異なるものが少量含まれる。
高坏Ａ　坏部下位に稜を有する高坏の中で、稜径が口径の半分以下になるものを高坏Ａとする。坏部の底部から屈折部をもって大きく開く体部は、内湾か直線的となる。脚部上半には、円形の透かし孔が施される。
高坏Ｂ　坏部下位に稜を有する高坏の中で､稜径が口径の半分以上になるものを高坏Ｂとする。坏部は、底部が幅広のため、箱型に近い形状を示すものとなる。
高坏Ｃ　高坏の坏部が埦形を示し、途中に稜を持たないものを高坏Ｃとする。いわゆる小型高坏として分類されるものを指す。
高坏Ｄ　低脚高坏の一群として捉えられるもので、脚部下位が内湾気味に広がる。脚部中位に円形の透かし孔が認められ、外面にヨコミガキが施される。
高坏Ｅ　高坏Ｅとしたものは、坏部が確認されていないため、高坏Ａと高坏Ｂあるいは高坏Ｃとの分類に齟齬が生じるものであることを踏まえながらも、１型式として分けておく。

脚部は高さに比べて、脚部径が大きく、いわゆる低脚の脚部とされるものである。坏部は、残存部の状況から埦形か口縁部の形成される鉢状のものとなると考えられる。また、脚部の透かし孔が施されていない点を大きな特徴とする。

⑺ 器台

器台は、一定の数量の出土が大きな特徴として指摘できる。確認されている事例は、小型器台に限られる。

器台Ａ　受け部がやや内湾して開く小皿状を呈するもの。受け部の径と脚部の径が大きく変わらない。脚部はわずかであるが内湾しながら広がる。

器台Ｂ　脚部の高さが底径に比べてあまり大きくならない器台を器台Ｂとする。脚部の高さが相対的に低くなるため、底部と同様に接合部の径の脚部に対する比率が一般的な器台に比べると大きくなる。

ｄ．技法的特性

多量の土器類の出土が認められる高尾山古墳における土器の型式分類の中で、それを特徴付ける文様を含めた調整等の技法についてまとめることにより、その特性について考えてみようと思う。弥生時代にその系譜をたどることができない調整技法の抽出は、土器の型式変化を考える上で、極めて有効であるものと思われる。

⑴ ナデ

弥生時代以来の調整技法である。指のナデ付け、指の移動の痕跡が残るものがある。指ナデと呼ぶべきものであろう。また、土器の体部内面に板状工具によるナデ跡が確認される場合がある。それは、壺、甕を問わず、多形式にわたるものとして認識される。板ナデと呼ぶ。

ここに挙げたナデ整形以外に、布あるいは皮革と指との作用で施すナデ整形が認められる。多くは、土器製作時の回転利用によると思われるヨコナデが主体となる。その中で、型式分類における甕類の甕Ｃ～甕Ｆ、甕Ｈ、甕Ｊは、その口縁部をヨコナデで調整して仕上げる点を大きな型式的な特徴としている。甕の口縁部におけるヨコナデの採用は、その機能性を重視したと思われる新出の調整技法であり、これらと刺突文を口唇部に施した弥生時代からの系譜を引く甕Ａとは判然とした型式上の差異がある。

⑵ ケズリ

土器の器面を整える点では、ナデ整形と同様の整形技法であるといえる。器面を削ぎ取る技法として、器壁に調整工具の痕と砂粒の移動が確認されるものである。甕類を中心に胴部内面の調整技法として用いられる。

甕Ｆ、甕Ｈ、甕Ｉにおいては胴部内面の調整技法とする点がその特徴として取り上げられる。これは、弥生時代以来の在来の技法では認められないものである。

さらに、このケズリ技法で注意したいのは、甕ＥとしたＳ字甕において、在地型が成立する過程でハケメが施される前に１次的な外面調整として採用される点であり、在地型のＳ字甕の登場には、ケズリを器面の調整として採用する点を大きな特徴としている。甕Ｅ２については、甕Ｅ１をオリジナルとして登場するものであるが、オリジナルにはないケズリの技法を採用している。

⑶ ミガキ

壺や鉢においては、普遍的に認められる調整技法である。ミガキの幅により調整工具の違いが指摘されるものであるが、具体的な調整工具の検討はない。高坏に対しては細かいミガキ、壺に対しては粗いミガキとなる傾向が指摘される。調整の痕跡として高坏の器面はていねいに平滑化されるのに対して、壺の場合、凹凸を残す粗いミガキを施すものが相対的に多い。ミガキ調整の方法は、このように調整工具に関わるその痕跡とともに、調整じたいの方向に対して型式差が表れる。壺類においては、外面と口縁部内面に施されるが、口縁部内面や胴部下半および肩部などにおいてはヨコ方向に施され、胴部を主体としてタテ方向に施される。壺類の場合はその方向が直接的に型式差を表すものとは思えない。

高坏においては、器面を調整するミガキが坏部内外面、脚部外面に施される場合が多い。そして、そ

の方向はタテ方向に限定され、一定の規則性をもつものである。ただし、高坏Dと高坏Eについては、脚部外面に施されたヨコ方向のミガキを特徴とする。

⑷ 軸芯痕

高坏の脚部上面の中央に残る細い穴の痕跡で、脚部成形時に関わるものとして捉えられる（次山1993）。高坏における脚部成形に関わるものか、脚部と坏部の接合に関わるものと考えられるが、実態はよく分かっていない。成形の技法に関わるものであり、それが確認される年代も限定される（渡井1998）。

高尾山古墳出土の土器群におけるその特性、あるいは型式的な属性を反映している調整の方法を取り上げてみた。その大半は、在来の技法ではなく新出の外来系の技法であり、外来系土器の型式的な特性を表すものとなっている。

⑸ 文様

弥生時代後期以来、加飾性が相対的に弱まる傾向にあり、特定の形式以外、文様はその簡略化が進行する。今回確認されている文様は、縄文、線描文、刺突文、貼付文、擬凹線文の各系統に大別される。

縄文は、折り返し口縁壺である壺Fの文様として採用される。端末結節文と縄文の組み合わせを原則とする。

線描文は、箆描文と櫛描文とに二分され、横線文、波状文、格子文などが見られる。

刺突文は、鋸歯文、押引文などを取り上げることができる。

貼付文は、円形の貼付文と棒状の貼付文が認められる。

古墳時代前期において文様は、加飾性を強める型式での採用と弥生時代以来継続する形式での採用が主な型式的要素となる。壺Fのほかに、櫛描文と刺突文を組み合わせる「パレス文様」を施す壺Hなどが加飾性を強めるものとして取り上げられる。押引文については、甕EとしたS字甕の中で、その古相を示すA類（赤塚1990）の口縁部に施される限定された型式と段階に関わる文様である。

文様は、縄文を施すものと線描文や刺突文を施すものとに大きく分けられるが、後者が外来系としての要素を強調している場合が多くなる。

貼付文は、縄文の施される文様帯の中に円形のものが組み合わされる場合と、複合口縁壺の複合部に棒状のものが付される場合が通常の施文方法と言える。ただし、型式的な特性を表すものとして、小型壺と分類した一群において肩部外面や、口縁部内面に1個だけ円形の貼付文が施されるものがある。この古墳のみで見られる特有の施文法である。

e．型式変化

高尾山古墳出土の土器群は、古墳出土の土器としてはその数量の多さとともに多系統に属するものが発見されているが、それらは、古墳の造営期間を反映した型式変化を示し、一定の時間幅を持つことが指摘される。しかし、型式の組列を段階的に構成するものではなく、偏った型式に限定されるものである。それが、古墳における土器祭祀に関連するのであれば、段階毎の型式組成は普遍化された型式変化では追えないものとなる。ここでは、主要な器種に関連して、型式変化のたどれるものについてその変遷を考えてみることにする。便宜的に形式相互の変化をまとめるため、段階1～段階4までの段階を設定する。古墳出土土器の中で型式変化が確認されない形式（型式）については、段階の設定の中で取り扱っていない（編年図（1）（2）（3））。

⑴ 壺

壺B　複合口縁壺としては、壺Aと壺Bを取り上げてみたが、壺Aの出土例は意外と少なく、型式変化を追うことができるほどの数は出土していない。

壺Ｂは、大型の複合口縁壺として捉えられるもので、複合部の下端に粘土帯を付加することで複合部の面と厚さの成形がなされる。胴部の球胴化と、頸部の屈曲に型式変化を追うことができ、段階３以降には胴部から明確に屈折して頸部の形成されるものが登場する。

口縁部のみの出土に限られることから、口縁部における型式変化を中心に段階の設定を検討してみることにする。

複合口縁壺（壺Ａ）は、弥生時代後期の土器様式を構成する器種の中で普遍化した加飾性の強い型式のひとつであったといえるものである。すでに弥生時代末から複合口縁壺の中で、壺Ｂの出土が普遍化する。壺Ｂの登場に呼応するかのように壺Ａの出土数が減り、その加飾性が弱まる。

〈**段階１**〉　複合部の成形に関わる型式区分によるため、条件の良い破片資料でないと判断できない部分があるものの、この段階の壺Ｂは、複合部下端に付加する粘土はまだ多くない。複合部において器壁の厚さが目立つ部分がその下端部に限られ、壺Ｅにおける折り返し部分ほどの粘土帯が付加されている。その複合部は、やや内湾するか付加部分以外を直線的に開くものとなり、口縁端部内面には、断面四角形に近く、その上端面の幅がまだ強調されていない突帯が付される。

壺Ｂの複合部は、弥生時代後期までその系譜をたどることができるが、この段階ではなお未発達で、複合部下端を最大とした器壁の厚さが目立つものがある。そのためこの段階に、複合部の幅を広くして、器壁を厚くする初源的な壺Ｂの登場が想定される。

全体の形態は、球胴の胴部から緩やかに屈曲する頸部に至り、幅広の特徴的な口縁部が付されるものとなる。

〈**段階２**〉　段階１に比べて口縁部が外傾するようになり、複合部の下端に付加される粘土帯の幅が、複合部の成形を意識して大きくなる。付加される粘土帯は複合部外面で確認され、粘土帯による外面の弱い屈曲が複合部中位以下で認められるようになる。口縁端部内面の突帯は、上面の広さが強調されるようになり、断面三角形に近い形状となる。

胴部の形態は球胴を示し、その最大径を胴部中位にもつ。頸部は、段階１に比べて屈曲が強くなるか、胴部との接合部分が認識できる弱い屈折が認められるものが登場する。

〈**段階３**〉　複合部における粘土帯の付加が顕著で、複合部中位以上まで及ぶようになる。同時に、複合部下端の器厚が強調され、複合部外面上部が外反するようになる。複合部の上端部だけは外反させないで、やや内湾気味となり、その外面を弱く面取りし、器面を整えている。

口縁部内面の突帯は、その上面に形成される平坦な面が段階２より強調されるようになり、突帯が明瞭な断面三角形を示すか、上面が広く明瞭な断面四角形を呈するようになる。

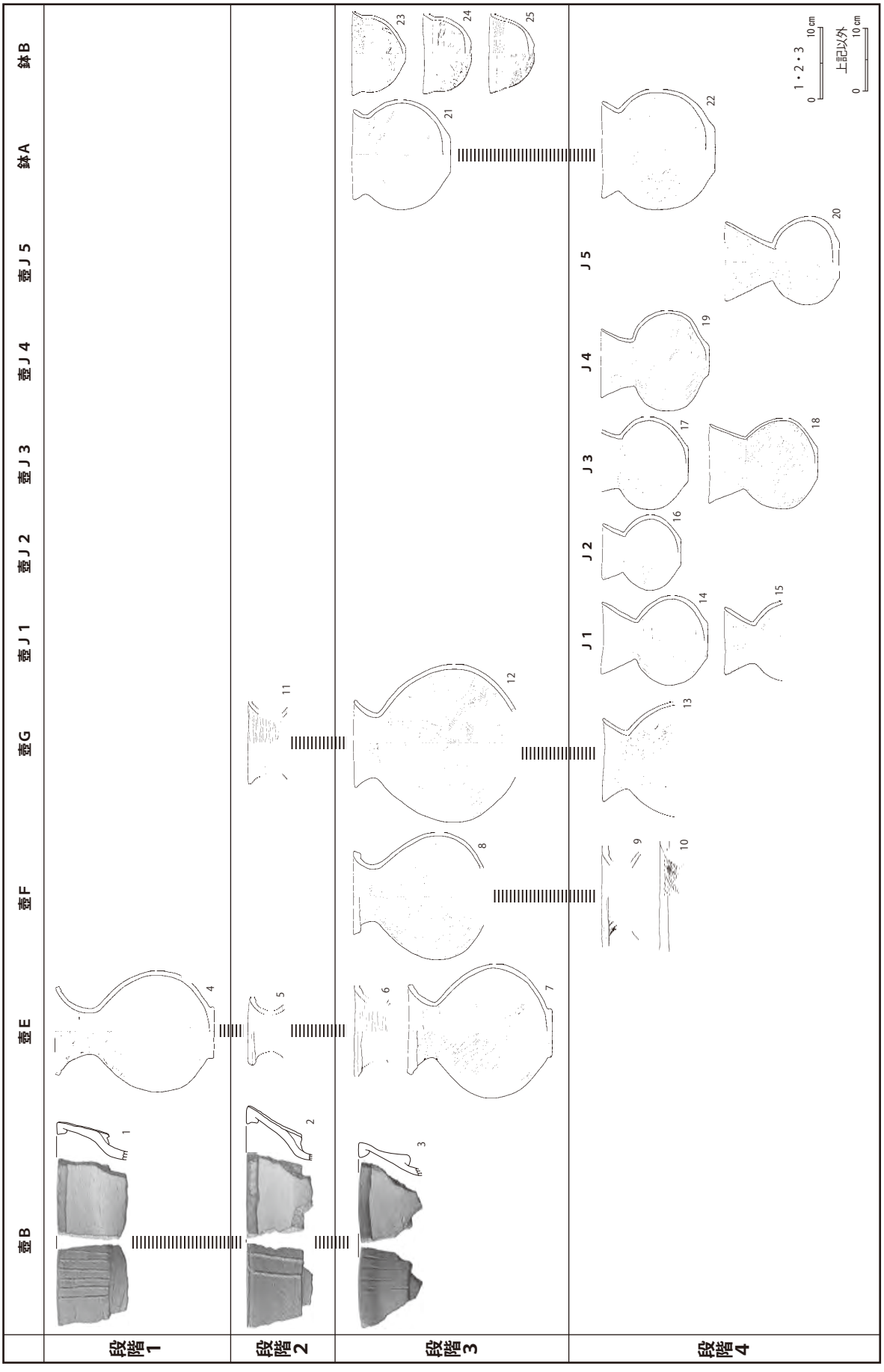
胴部は、肩部の張りが強調された球胴となり、胴部から屈折して口縁部へ移行する頸部が付される、二重口縁壺の頸部の型式が取り入れられたものが登場する。

壺Ｅと壺Ｆ　折り返し口縁壺である壺Ｅと壺Ｆについては、弥生時代からの伝統の中で型式変化を示す壺Ｅと新出の壺Ｆが相互に関連して、段階的な変遷を追うことができる。

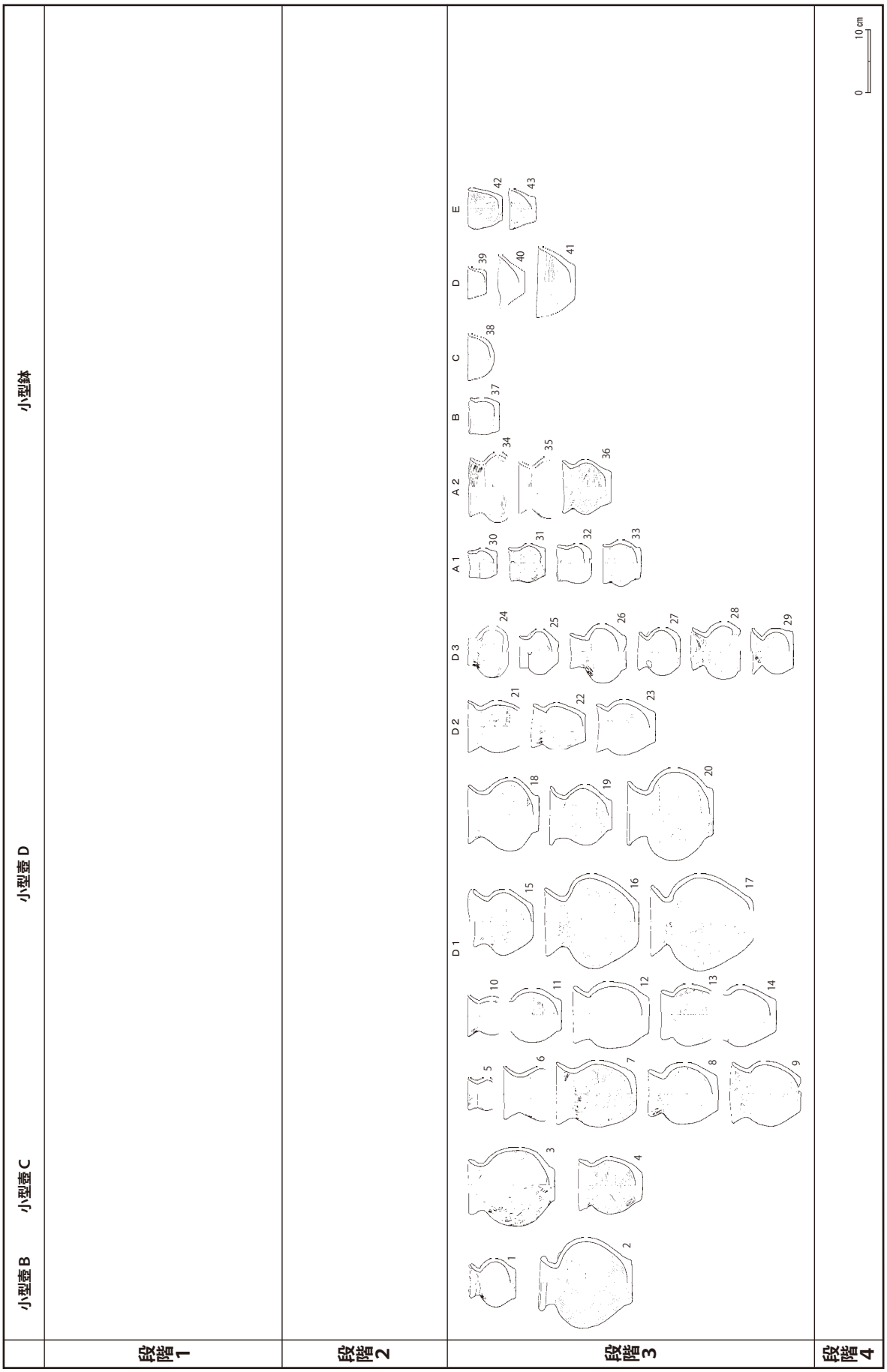
〈**段階１**〉　高尾山古墳に関わる壺Ｅは、幅広の底部に長胴気味の胴部が付され、頸部に肩部から移行するわずかな屈曲が表れるもので、広口の口縁は、口径の半分ほどの口縁部の高さを示し、弥生時代後期の長頸壺の名残を残す。口縁端部の折り返しは、形骸化された幅の狭いものとなる。

〈**段階２**〉　口縁部が緩やかに外反して外方へ大きく広がるものから、口縁部を緩やかに屈曲させるものへと変化することによる短頸化が進行する。

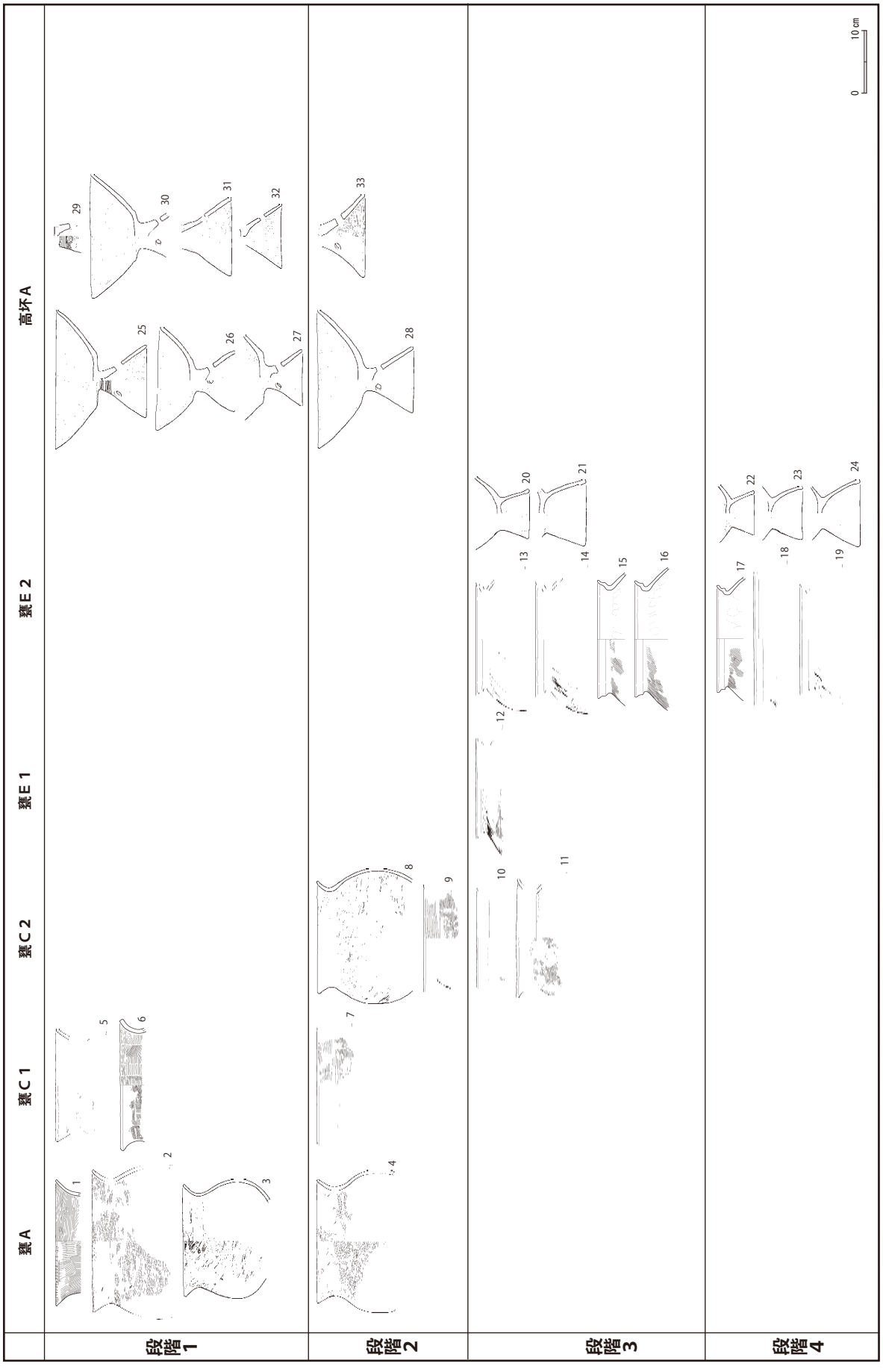
〈**段階３**〉　弥生時代以来の伝統型式である壺Ｅの消失段階である。球形の胴部から頸部を屈折させて広く広がる口縁部が付される。胴部の球胴化に伴い、短頸化が進行し、頸部の屈折が明らかになる段階である。折り返し部の形骸化も進み、それじたいの厚みが目立たなくなる。


壺B
壺E
壺F
壺G
壺J1
壺J2
壺J3
壺J4
壺J5
鉢A
鉢B
段階1
段階2
段階3
段階4
J1
J2
J3
J4
J5
1・2・3
上記以外
10 cm
0

編年図（1）



編年図（2）



編年図（3）

この壺Ｅの消長に対応するかのように、壺Ｆが登場する。胴部が球形化を示すことによる頸部の屈折度の強まりが型式変化のひとつとして取り上げられる。段階３における胴部は、その最大径が下位部分にあり、肩部の張りがやや弱い。頸部の屈折は、やや明確さに欠ける。口縁部の短頸化の進行はほぼ終わり、広口壺の一型式として完成する。

〈**段階４**〉 折り返し口縁壺は、壺Ｆだけになる。頸部の屈折、口縁部の広がりなども明瞭なものとなる。無文のものも認められるが、口縁部内面、肩部外面などに縄文等が施文され、加飾性の強い折り返し口縁壺として捉えられるものが多い。

壺Ｇ　単純口縁壺である壺Ｇについては、単純な器形であることから数量的に多いかと思われるが、全体の分かる事例は少ない。折り返し部を除く口縁部の型式変化は壺Ｅに準ずるものであり、口縁部の高さに比べて口径を広くする短頸化を指向する。弥生時代から古墳時代まで継続する型式変化をたどるものである。

〈**段階１**〉 この段階のものとなる明らかな事例は図化されていないが、弥生時代後期以来の伝統的な型式として捉えられる。胴部から口縁部にかけての型式は壺Ｅに準じており、長頸気味の広口壺となるものの存在が想定される。

〈**段階２**〉 広口壺であるものの、短頸化が進行する壺Ｇ１の出土が認められる。

〈**段階３**〉 頸部の屈折が明瞭な壺Ｇ１で、その胴部が球胴となる。口縁部は胴部の高さに比べて短くなる短頸化が進行する。口縁端部がわずかに外反するもので、同じ段階のものとして後述する鉢Ａ２の口縁部形態に類似する。

〈**段階４**〉 この段階になると、口縁部における頸部の屈折や直線的に開く口縁部など下記の壺Ｊとの相関性が指摘される壺Ｇ２の登場が明らかになる。壺Ｇの相対的な出土数を考慮しなければならないが、この段階で壺Ｇ１から壺Ｇ２への変換が図られるものと思われる。

壺Ｊ　古墳時代前期に登場する新出の形式であるが、型式的な大きな変化を示さない。この古墳から出土している事例は、型式細分が可能で、多彩な形式が認められる。

段階１～段階３については、他の形式との組列から見て、壺Ｊがこれらの段階に登場しているかよく分かっていない。

〈**段階４**〉 壺Ｊが普遍化し、その出土が認められるのはこの段階からで、型式組成の中で一定量を示すようになる。その登場は当初から多彩で、多型式にわたることが確認される。型式的に細分されるもので、多系統にわたる可能性もあるが、数量的には、多いとは言えない。直口壺の口縁部が直線的に開き、口径の半分ほどの長さを口縁部の高さが示すもの（壺Ｊ１）。壺Ｊ１と底部、胴部、頸部が類似し、口縁部の開きもよく似た形状を示すものの、口縁部高が比較的低いもの（壺Ｊ２）。口縁部の開き方が弱く、頸部の比較的広いもので、口縁部の高さがあまり強調されないもの（壺Ｊ３）。口縁部がその途中で弱い屈曲をもち、外方に広がるもの（壺Ｊ４）などに分けることができる。胴部は、前二者が球胴を指向するもので、最大径を胴部中位～上位にもつ。壺Ｊ４の事例については、胴部における上下に分割した成形が明らかで、胴部下半が突出する底部から外反しながら立ち上がり、中位以上が球胴を示している。

壺Ｊ１と壺Ｊ３については、型式差が確認され、時間的に幅を持つ可能性がある。両者とも胴部は球胴を指向するものの、その最大径を胴部の下位に持つものが新相を示すものと思われる。この胴部の型式的な類似性を評価すると、口縁部が大きく広がり、口径の半分の値を口縁部の高さが凌駕する壺Ｊ５の登場もこの段階に関連するものと考えられる。

⑵ 鉢

鉢類は、大きく２つの型式に分けて捉えられる。鉢じたいの出土数が少なく、その実態はよく分からない。

鉢Ａ　鉢Ａは弥生時代以来の型式で、在来系土器の一種であるといえる。今回の出土事例は少なく継続的な段階設定はできないが、本来全段階にわたって存在するものと思われる。
〈**段階３**〉　鉢Ａの中で古相を示すものは、この段階のものと思われる。球形の胴部に緩やかに屈曲する短い口縁部が付くもので、その端部を丸く仕上げているものが認められる。胴径が口径を大きく凌駕する点を特徴とする。
〈**段階４**〉　球形の胴部に、頸部の明瞭な屈折を伴う口縁部が付されるものをこの段階とする。

⑶ 小型壺

小型壺Ａ～小型壺Ｄ　小型壺は大きく４つに分類されるが、それぞれ段階設定ができる型式差を表すものではない。それらは、型式的な特徴が明瞭ではないため、逆に多彩な分類が可能となっている。たとえば、胴部の形態に着目すると、長胴と球胴の違いや底部が突出するかどうかなどが挙げられる。そして、これらの要素を分類の基軸とすると、数的な違いとしての具体性は弱く、客観的な型式分類に馴染まないものとなる。ここでは、型式的特性を最もよく表している口縁部の形態を主眼とした型式分類による段階の設定を行なう。

この粗製の小型壺は、いくつかの型式的な分類が考えられるが、大半はひとつの段階の中での型式差に収まるものと思われる。口縁部形態はいくつかに型式分類されるのに比べて、胴部の形態にはそれほど差が認められないのである。

小型壺の登場は、段階３になってからであると考えている。
〈**段階３**〉　小型壺の中では、小型壺Ｄ１が主体を占めるが、この段階に小型壺Ｄ２、小型壺Ｄ３の登場も明らかになる。小型壺Ｄ１、小型壺Ｄ２、小型壺Ｄ３については、緩やかに外反するものと明瞭に外折するものがあり、頸部の屈折の状況によって型式差が認められる。他の型式に同調させれば、前者から後者への時間差となる。ただし、他の小型壺の共伴例を見ると、それほど大きな時期差が認め難く、大半はこの段階のものであると考えている。

⑷ 小型鉢

鉢の中で小型鉢として分類したものは、５つに型式分類している。古墳時代前期の主要な形式組成の中で、小型丸底壺や屈曲口縁鉢などの小型精製土器群が一定の構成比を示すものと思われるが、高尾山古墳出土土器の中にそれらは、確認されていない。

小型鉢Ａ　小型鉢Ａは、口縁部の形態により小振りの小型鉢Ａ１と、それよりやや大きく鉢Ａとの関連が窺える小型鉢Ａ２の２つに細分される。すべて段階３のものと思われる。
〈**段階３**〉　前段階のものはなく、すべてこの段階のものと思われる。小型鉢Ａ１は、直立気味に立ち上がる口縁部と、胴部上半に最大径をもつ胴部からなるものが見られる。小型鉢Ａ２は、頸部の屈曲に若干の違いが認められるが、この型式差は段階３の中の変化であると思われる。また、この型式的な変化は、小型壺Ｄの変化に同調したものである。

小型鉢Ｂ～小型鉢Ｅ　小型の鉢類が一定の比率で形式組成を示すものであるが、相対的な数は少ない。そのため、段階的な型式変化を追えるものではない。小型鉢Ｂ以下を一括して、その消長をたどってみることにする。丸底の小型鉢Ｃ以外の粗製の小型鉢は、それほど大きな時期差がないものと思われる。現状では、小型壺や小型鉢Ａと同様に段階３のもので占められているものと思われる。
〈**段階３**〉　内斜口縁の小型鉢Ｂの登場が明らかとなる。それ以外は、前段階から継続する型式変化の中で追うことができる。底部の幅が広く、胴部の径が大きくならないコップ型の胴部は、小型鉢Ｂ以外に小型壺Ｄ３、小型鉢Ａ１などと共通しており、その関連性が窺われる。また、小型鉢Ｄと小型鉢Ｅは、整形に違いがあるものの器形的に類似している。いずれも器種をこえた型式的な共通性が認められるのである。

⑸ 甕

甕Ａ　明らかに弥生時代以来の伝統を引く甕Ａの確認例は少ない。古墳という墓の機能を反映して、一般生活に直接関連する煮沸道具である在来系の甕の出土数は、それほど多くない。

〈**段階１**〉　口唇部外面に刺突文が施される甕で、頸部が緩やかな曲線を描き、胴径が口径を大きく凌駕する。ハケメは口縁部がナナメ、胴部がヨコ、口縁部内面がヨコ方向に施される。

〈**段階２**〉　口唇部の刺突文は消失している。口縁部の屈曲が強まり、胴部の張りが目立つようになる。器面外面のハケメは、口縁部がタテかナナメ、胴部をヨコとする原理が崩れるものが登場し、ハケメによる部位の境界がはっきりしなくなる。口縁部内面はヨコおよびナナメ方向を原則とする。

甕Ａは、この段階２をもって主要な器種ではなくなり、弥生時代からの伝統性は、この段階に大きな転換期を迎える。代わって、甕の主体を占めるようになるのは甕Ｃであり、甕Ｅである。

甕Ｃ　「く」の字甕ではあるものの口縁部をヨコナデで仕上げる台付甕である甕Ｃは、古墳時代前期に登場する新出の型式であり、東海西部を淵源地とする外来系土器の型式的な属性を持つものとして捉えられる（渡井 2002）。

〈**段階１**〉　口縁部が緩やかに外反するもので、口縁端部を面取りする甕Ｃ１が認められる。口縁部のヨコナデは、口縁部外面に対して施されるものが多い。在地系の土器型式に口縁部整形が取り込まれたようなものが多く、屈曲の弱い口縁部が主体を示すなど口縁部における整形以外は、伝統的な台付甕の型式に準拠するもので占められる。

〈**段階２**〉　口縁部の外反の度合いが強まり、胴部の球胴化が進行する。器面の整形は、口縁部外面をヨコナデで仕上げ、胴部外面をヨコからナナメハケメで整形するものとタテハケメのあるものなどが見られる。口縁部の内面は、ヨコハケメを原則としている。この段階に、口縁部に屈曲と呼べるまでの頸部の外反が認められるようになり、口縁端部の面取りが消える甕Ｃ２が登場する。

〈**段階３**〉　甕Ｃは甕Ｃ２だけになる。この段階より、口縁部内外面のヨコナデが普遍化する。頸部より屈折して立ち上がる口縁部は、途中に弱い屈曲が見られ、口唇部が大きく開くようになる。

〈**段階４**〉　頸部の屈折が明瞭で、球胴化がさらに進む。前段階に見られた口縁部の途中で認められる弱い屈曲は、やや強調されるようになる。そのため、口縁部の広がりが前段階より目立つようになる。

甕Ｅ　甕ＥとしたＳ字甕については、伊勢湾沿岸地域から搬入されたオリジナルの型式と、在地で作成されたものとに分けて捉えることができる。前者を甕Ｅ１、後者を甕Ｅ２とする。

〈**段階１**〉　甕Ｅ１とした外来系のＳ字甕の中でＡ類（赤塚 1990）とされるものが見られる段階を当てる。口縁外面屈折部における押引き文、頸部内面のヨコハケメ、口唇部内面の面取りなどが型式的な特徴として取り上げられる。口縁部のみが残存する小破片ではあるが、複数の出土が確認されている。

〈**段階２**〉　段階１に引き続き外来系のＳ字甕の出土が見られる段階である。Ｓ字甕Ｂ類古段階～中段階（赤塚 1990）の型式に対応するもので、甕の口唇部内面の面取りと頸部内面のヨコハケメを特徴とする。

〈**段階３**〉　甕Ｅ１としたＳ字甕の中で、Ｂ類の新段階（赤塚 1990）が出土している。口縁部が外に開き、その口唇部内面に弱い面取りが見られるものである。この段階になると、Ｓ字甕Ｂ類をモチーフにした地域型のＳ字甕である甕Ｅ２が登場する。甕Ｅ２は、口唇部内面に弱い沈線を巡らせるものと、口縁端部の形状に合わせて丸く仕上げるものと２つの口唇部の形状に分けられる。口頸部外面は、ヨコナデするものが主体を占め、沈線を巡らせるものはない。肩部に施されるヨコハケメは、オリジナルのＳ字甕より先行してこの段階で消失するものが表れるため、ヨコハケメのあるものとないものが共伴する。胴部は、最大径を上位にもつ典型的な「無花果型」を示し、口縁部の口径が強調されるものとなる。

〈**段階４**〉　甕Ｅ１の明らかな出土は見られず高尾山古墳出土の甕Ｅは、甕Ｅ２のみとなる。段階３から

の型式変化としては、まず口縁端部を外方へ引き伸ばすようになることが挙げられる。肩部のヨコハケメは、ほとんど見ることができなくなる。また、最終の調整であるナナメハケメも形骸化され、胴部の一次的調整として器面を薄くするために施されたヘラケズリが、ハケメの条線間に明瞭に見られるものまで登場する。胴部の形態は、その最大径が徐々に下位に移行するようで、球胴化を指向するものとなり、胴部の大きさ、胴径に対する口縁部の開き、口径の比率も小さくなる。

⑹ 高坏

高坏Ａ　坏部に稜をもつ高坏に対しては、東日本の太平洋沿岸地域で同調した型式変化を示すものであり、東駿河特有の在地化した型式が、古墳時代前期後半の大廓Ⅳ式期段階に成立する。高尾山古墳出土の中では、在地化した型式を取り上げることはできない。高尾山古墳の最古段階に関連づけられる土器群に高坏が含まれる点は、古墳に伴う土器組成から年代観を考える点で、ひとつの大きな視点となる。

〈段階１〉　高坏Ａは、この段階のものとなる事例の出土数が多い。これは、この古墳における出土土器の特徴のひとつを表している。

段階１の高坏は、坏部の稜が明瞭で、口径に比べて坏部の深さの比が大きく、坏部が深いものを原則とする。脚部は、坏部底部と脚部上面を接合させることにより、接合部を厚く中実にさせているものと、脚部に坏底部中央に作る凸部を嵌め込むものなどが見られる。脚部下位は、緩やかに内湾させており、古い高坏Ａの型式的な要素である、いわゆる「内湾志向」（赤塚 1990）が残る。この段階の高坏には、脚部上位に横線文の施されるものや、脚部内面に「軸芯痕」（次山 1993）の残るものが認められる。

〈段階２〉　坏部における稜線が不明瞭となり、坏部の深さも徐々に浅くなる。脚部の接合法は、前段階同様、多彩な状況を示すようで、段階毎の特性は見出せない。脚台部下位の内湾志向が認められなくなる点が、前段階との大きな型式的な違いとなる。脚部の横線文は採用されなくなり、軸芯痕も認められなくなる。

⑺ 器台

高尾山古墳出土の土器群は、古墳時代前期の中で一定の時間幅があり、出土総数も多い。この中で、器台については、特徴的な２つの型式が確認されている。

器台における段階的な型式変化は、その相対的な出土数の増加が古墳時代前期後半からであり、前半では、その出土事例じたいが少ないことから、よく分からない部分が多い。この２つの型式については、これまで東駿河において明確な出土事例がなかった。

〈段階１〉　小型器台の登場時期に関わる型式のみの出土で、脚部の径が大きく、受け部の径を上回らないもので占められるようである。駿河において、現状でこの段階に比定される出土事例は極めて少ないものと思われる。脚部のみの形態から、やや内湾気味に開く器台Ａと、低脚で裾部を外反させて開く器台Ｂの出土が確認され、東駿河における器台出現期の様相を表しているものとして重要である。

以上が高尾山古墳出土の土器の型式的な変遷から想定される段階の設定である。各段階は、周辺の集落遺跡出土土器群における形式（型式）組成から検討したもので、古墳における土器群の出土状況を厳密に反映させてはいない。古墳という性格上、段階的な型式組列の抽出は難しい。今後、集落遺跡などの一括資料が充実してくれば、その内容もさらに具体化されるものである。

ｆ．段階の様相

高尾山古墳出土の土器群を４つの段階に分けて検討してみた。段階設定から指摘される特性を考えてみると、いくつかの注目すべき点が浮かび上がってくる。

まず、一つめの大きな着目点としては、古墳の築造時期に関わる段階１の捉え方であろう。段階１に相当する形式組成は非常に特異で、在来系の壺（壺Ａ、壺Ｂ、壺Ｅ）や甕（甕Ａ）類とともに、甕Ｃや

甕Ｅ（Ｓ字甕のＡ類）、高坏Ａ、器台Ａ、器台Ｂなど古墳時代前期に新たに登場し、以後在地の型式に組み込まれるもので構成される。これらの器種組成には、後述するように墳丘内出土のパレススタイル壺や、北陸系の甕や鉢などの外来系土器がその組成に加わる。

高尾山古墳においてこの段階を特徴付けるものの一つとしては、ほぼ完形品として出土している器台Ａ、器台Ｂの組み合わせが見られる。高尾山古墳では、出現期の器台の出土が確実に認められるのである。器台は、段階１、段階２における東駿河での出土事例が極めて少ない。普遍化したものではなく、高尾山古墳での出土が非常に特異であるといえる。

段階１は、多彩な外来系土器群の登場とともに、高坏などが新たな構成を示す。この段階は、高坏Ａ、器台Ａ、器台Ｂ、壺Ｈ（パレススタイル壺）、甕Ｅ（Ａ類）とともに、在来系の壺Ｅ、甕Ａが加わる。これらの型式組成と型式的な特徴などから、段階１は大廓Ⅰ式期に相当するものと考えられる。廻間編年では、廻間Ⅰ式期末から廻間Ⅱ式期初頭に対応するものとなる（赤塚 1990）。

２つめに段階３についてである。この古墳の出土土器群を特徴づける小型壺と小型鉢の大半は、この段階のものである。それらは、小型壺、小型鉢の型式分類からも分かるように、多彩な型式で構成されている。ここに、この古墳特有の土器祭祀の存在が浮かび上がるのである。周辺地域における小型土器の出土例とその共伴状況を参照すると、この小型壺と小型鉢の大半は大廓Ⅲ式期に比定されよう。さらに、古墳の墳頂部出土の壺Ｄがこの段階のものと考えられる。主体部上の墳頂部に配置された土器群は、段階３のものとなり、周構内の土器群の一部がこの段階に廃棄されたものとなる。

さらに、３つめとして、古墳出土土器の最終段階となる段階４についても特徴的な器種組成が挙げられる。そのひとつとして、壺Ｊとした直口壺が主体を占め、出土数を増やす点が挙げられる。壺Ｊの登場が明らかになるのはこの段階からであり、高尾山古墳では、その多彩な組み合わせが明らかになっている。段階４は、大廓Ⅳ式期がその大半を占めるものと考えられるが、出土土器群からは、大廓式土器を特徴づける加飾性の強い壺Ｆと、在地化した甕Ｅの新相型式との共伴が窺われるものとなる。

段階３および段階４においては、本来、畿内の影響が考えられる小型丸底壺、口縁屈曲鉢や小型器台などが出土するべき段階であるが、その出土は認められない。段階毎に非常に限られた器種の構成を示すもので、古墳時代前期後半の普遍的な形式組成は示していない。そのため、脚部が柱状脚になると思われる高坏Ｂの段階的な位置づけがはっきりしない。その型式的な捉え方によっては、段階４が中見代式期まで時間幅をもつ可能性がある。ただし、その段階における土器群は、数量がそれほど多くないことから、古墳に対する関わりが薄れてくるようである。

高尾山古墳出土の多量な土器群は、大廓Ⅰ式期～大廓Ⅳ式期のものがその大半を占めることが指摘される。その中で、全体的に万遍なく出土事例が認められるものではないようで、集落遺跡のような出土土器の継続性は薄い。特に、段階２の実態が不明瞭で、対応する土器類の数が少ない。したがって、埋葬者に対する土器を使用した儀礼行為が積極的に実施されなかった段階が想定されることになる。段階２は大廓Ⅱ式期に相当するものと考えている。

ｇ．外来系土器

高尾山古墳出土土器の中には、外来的な要素をもつ土器が一定量含まれている。それらは、それぞれ多地域にわたる系譜と特徴的な型式変化を示している。ここでは、外来系土器がどのような変遷をたどるのか、少し検討してみることにしたい。外来系土器として認識されているのは、北陸系、近江系、東海西部系、関東系などである。ただし相互に数量の差があり、全ての外来系の型式に均質な影響があったことを前提にこれらの土器を取り扱うことはできない。また、突出した出土数を示す型式があるわけでもなく、系譜毎の明確な違いが指摘されるものでもない。

外来系土器は、その型式変化をたどると２つの変遷を示す。ひとつは、外来系土器を受容した後、それが形式組成に組み込まれ、在来系の土器として変容するタイプである。東海西部に系譜を持つ、甕Ｃ、甕Ｅ、高坏Ａ、器台などがそれに相当する。

もうひとつは、搬入された段階と在地での変容段階が認められるものの、在地の土器様式を構成する形式組成に組み込まれるまでに至らないタイプである。短期間の受容と変容が窺われる外来系土器を指す。北陸系の千種甕、有段口縁甕、近江系の受口口縁甕などがこれに相当する。

前者についてはすでに、型式変化を記載した前節の中で在来化する型式として取り扱い、段階の設定を行なっている。それは、段階３における甕Ｅ１から甕Ｅ２への型式的な交替、段階１からの登場が窺われる甕Ｃの型式変化などの事例として明らかである。高尾山古墳の場合、甕Ｅ２が一定量認められているが、駿河湾沿岸地域における富士山西南麓を除くエリアでは、甕Ｅ２は本来客体的な出土を示すものであると思われる。高尾山古墳出土の甕Ｅは、それが主体的に分布する甲斐あるいは富士山西南麓からの影響が窺えるものとなっており、その出土は特徴的である。

後者のタイプについては、北陸系と近江系としたものにその特性がよく表れている。器種は、大半が甕であるが、少量の鉢の出土が確認されている。甕は北陸系の有段口縁甕、「く」の字口縁甕、近江系の受口口縁甕、くの字口縁甕などで、近江系のくの字口縁甕以外は複数個体の出土を示す。

次に、出土した外来系土器の中で、それぞれの型式を口縁部の形状を主眼として分類し、型式の多様性と時間幅について概観してみることにする。

⑴ 北陸系

北陸系とした有段口縁甕（甕Ｈ）は、特徴的な幅広の口縁部が付されるもので、口縁端部を丸くする甕Ｈ１と尖がらせる甕Ｈ２に分けて捉えることができる。甕Ｈ２については、口縁部が直立気味に立ち上がるものと外反するものが認められる。それは型式変化の方向性を表し、前者から後者への変遷をたどる（赤澤 1994）。また、甕Ｈは、口縁部外面に擬凹線文を付すものと無文のものが認められ、後者は「宝達甕」（川村 1993）と呼ばれるものに相当する。このように、甕Ｈについては、さらに細分されるが、口縁部の外傾の大きさや文様の有無などにより、北陸南西部の土器編年に対応させると月影式土器における漆・５群土器に相当するものと思われる（田嶋 1986）。出土数は少ないが、同様に有段口縁を示す鉢Ｃも、この段階のものとして捉えられる。

なお、有段口縁を示す甕Ｈは、その口縁部に型式的な特徴を残しており、粗製の小型壺Ｂとして在地化した型式を登場させている。

口縁端部を上下からヨコナデすることで、そこにやや幅広の面が形成される甕Ｊは、本来、平底甕となる北陸の土器型式であり、「千種甕」（川村 1993）と呼ばれるものに相当する。高尾山古墳出土の甕Ｊは、口縁部の内面をヨコナデした後に口縁端部に対して二次的にヨコナデを施し、ヨコナデ部分が幾分窪むことにより端部の面取りを強調させるものと、口縁部全体をヨコナデして、端部の面取りを造作するものとが認められる。高尾山古墳における脚台の付される事例は、後者の口縁部に対する調整方法として認められる。北陸の型式（平底甕）に脚台部を付す融合型式として、その口縁端部の調整が相関しているとなると、前者は本来の平底甕となる可能性が考えられる。

千種甕に関わる甕Ｊとした型式は、千種甕の型式変化に準拠するものと思われる。面取りする口縁端部の状況や外傾する頸部の形状などから、北陸東北部におけるⅡ－１期のものと考えられる（川村 1993）。ただし、台付甕に採用されるまでの時間や地域的なずれをどの程度認めるかによって、やや新しくなる段階のものを含む可能性は考えておかなければならない。

⑵ 近江系

近江系としては甕Ｆである受口状口縁の口縁部破片の出土が認められる。型式差のある口縁部破片資

料が確認されていることから、４型式以上に分類されるものである。この甕Ｆは、駿河における出土事例がほとんど確認されていない型式である。

高尾山古墳における甕Ｆは、口縁部のみの発見で、全体像が掴めるものはほとんどなく、口縁部における型式的な特徴から細分される。次に挙げる２つの型式が、その代表となるものと思われる。ひとつは、受口状の口縁端部に対して明瞭な面取りを行うもので、面取りする端部の外側を強くヨコナデすることにより面取りがより強調される（甕Ｆ１）。もうひとつは、口縁端部を上方に短く引き上げることにより、受口状の口縁が形成されるものである（甕Ｆ２）。

甕Ｆ１については、面取りした口縁端部が内傾するもの、平坦になるもの、外傾するものなど多彩で、さらに型式細分されるものと思われる。近江における土器編年では、湖東地域の近江古墳２様式＝斗西３期（植田 1994）、北近江の顔戸Ｇ－１（宮崎 1994）の段階に相当するものである。近江系の中には、この段階の型式的な特徴の一端をよく表している、ヘラミガキによる斜格子文の施された甕の破片資料が数点確認されている。

甕Ｆ２については、口縁部の形状だけでは判断されないが、近江系の受口状口縁甕か尾張型の有段口縁台付甕（赤塚 1992）になるものである。本来、両者は、平底か台付きかという大きな型式的な違いを示し、その系譜の差が明瞭に反映されるものである。

近江系に関連して、検討の対象となる型式として甕Ｇが取り上げられる。甕Ｇは、幅広の口縁部が明瞭に屈折する点を大きな特徴とする。また、口径に比べて脚部が小さな低脚である点も特徴といえる。このような型式の具体的な系譜はよく分からないが、北近江に分布する「く」の字状口縁台付甕（以下くの字甕）と口縁部や脚台部の形態がよく似ている（古川 1991）。ただし、北近江のくの字甕については、東海西部との関連の中で登場したものであるとする見解（古川 1995）がある。

尾張における廻間式土器の中には、廻間型甕と称されるくの字甕が一定量含まれ、その主体は廻間Ⅰ式期に求められるとされる（赤塚 1992）。つまり、当地の弥生時代後期の土器型式である雌鹿塚式土器段階のものとなる。廻間型甕は、頸部の屈折や口縁部の幅が広く、口縁部を強調する点や脚台部が低脚である点など、甕Ｃと同様に甕Ｇとの親縁性が指摘される。甕Ｇについては、ほとんど張りのない肩部や胴径を大きく取らない点など、在地化の進行した姿として考えなくてはならない。甕Ｇは、高尾山古墳の出土土器の中で１例だけ確認されている。これは、土器の外面が赤彩されて、煮沸の機能性を失っている極めて特異な事例である。

くの字甕としての甕Ｇについては、東海西部から近江との関連が窺われるものとなる。口縁部の調整が粗い点は、北近江のものに近いが、口縁部の形状などは、尾張と近江の両者で普遍化しているものである。尾張においてくの字甕が主体となる時期は、尾張での廻間Ⅰ式期以前であり、北近江での顔戸Ｇ－１に関連する時期のものとなる。両者の関連が指摘されるとすると、非常に限られた段階のものとなる。その時期設定を踏まえると、この甕Ｇは、段階１とする出土土器の中で最も古い段階の型式となり、限定的な出土を示すものとなっている。

⑶ 東海西部系

伊勢、尾張、三河など広範囲の地域が対象になるものと思われるが、具体的に規定されないので、東海西部として扱う。東海西部系の場合、Ｓ字甕などが甕Ｅ２として在地化しているように、古墳時代前期に甕、高坏、器台などが土器様式の一端を構成するものとなる。ここでは、在地化が進行する前の型式が対象となる。

東海西部系とする形式としては、Ｓ字甕、くの字甕、パレススタイル壺、ヒサゴ壺、高坏、小型高坏、器台など多彩な器種の構成が認められる。

Ｓ字甕は、淵源地における型式分類が整理され（赤塚 1991）、その型式変化が比較的明瞭となってい

ることから、各地における土器の型式組列の基準となっている場合が多い。この東駿河でもＳ字甕Ａ類からＳ字甕Ｂ類に至る型式的な変遷は、段階設定のひとつの根拠となる。

高尾山古墳では、搬入品であるＳ字甕Ａ類とＢ類が出土しており、搬入品のＳ字甕を総称して甕Ｅ１として分類している。甕Ｅ１の中でＳ字甕Ａ類に相当するものは、口縁端部内面の面取り、頸部内面のヨコハケメ、口縁部外面の押引刺突文などＳ字甕Ａ類の新段階の様相を示す破片資料が出土している。また、Ｓ字甕Ｂ類では、口縁端部の面取りは残るものの、頸部内面のヨコハケメが消失するＢ類の新段階に相当するものが確認されている。尾張の土器編年（赤塚 1991）に合わせれば、前者が廻間Ⅰ式期の終わりから廻間Ⅱ式期の始め、後者が廻間Ⅱ式期の終わりから廻間Ⅲ式期の始めに関連するものとなる。これは、それぞれ大廓Ⅰ式期と大廓Ⅲ式期の段階に相当する。

高尾山古墳における甕Ｅ１の特徴のひとつとしては、甕Ｅ１の中のＳ字甕Ｂ類に関わる古段階～中段階の型式が逸脱することが挙げられる。東駿河において、類例の多いこの段階のＳ字甕Ｂ類の出土が高尾山古墳で確認されない点は、搬入品が継続的に古墳に関わっていなかったことを表すものなのであろう。

東駿河で出土が確認されているＳ字甕Ａ類やＳ字甕Ｂ類については、田方における拠点的な集落遺跡である山木遺跡で複数の出土が知られるものの、その他の集落遺跡においては、単品での出土が多い。高尾山古墳においてＳ字甕Ａ類が複数出土し、単体ではあるもののＳ字甕Ｂ類が出土している点は、拠点的な集落遺跡における出土傾向に類似しているといえる。

Ｓ字甕Ｂ類の新段階に関連する大廓Ⅲ式期では、地域型のＳ字甕である甕Ｅ２が完成し、以降、在地の台付甕として土器型式の中で一定の構成比を示すようになる。

口縁部のヨコナデが特徴的な「く」の字甕である甕Ｃは、口縁端部に明らかな面取りの見られる甕Ｃ１と口縁端部を丸くするか尖らせる甕Ｃ２に分けられる。この甕Ｃについては、東駿河でも高尾山古墳のある海岸部から伊豆にかけての範囲において主体的な分布を示し、在地化を進行させる（渡井 2002）。高尾山古墳での出土例は、その実態を反映している。甕Ｃの型式的な変化は、前節で記述したとおりであり、甕Ｃ１が先行し、段階１～段階３に関わるものであることが確認できる。この段階１～段階３は大廓Ⅰ式期～大廓Ⅲ式期に相当する。

甕Ｃについては、同じ伊勢湾沿岸地域を淵源地とする甕Ｅ（Ｓ字甕）とその様相を大きく違える。それは、甕Ｅが甕Ｅ１から甕Ｅ２へ変換することからも分かるように、搬入から在地化の過程を追うことができる型式変化を示すのに対して、甕Ｃは、当初から在地化が進行して独自の変化を示す。特に脚台部が低脚となる形態を早い段階から採用しない点は、その実態をよく表しているものといえる。ただし、甕Ｃ１が甕Ｃ２より先行する伊勢湾沿岸地域での型式変化（赤塚 1990）と同調している点は、段階１における甕Ｃ１の登場と段階２における甕Ｃ２の登場がそれぞれ継続的に外来の影響を受けていた様子を表すものとして捉えられるのである。

高尾山古墳の場合、甕Ｃは、甕Ｃ２として段階３までで消失するが、富士山西南麓を除く東駿河においては、大廓Ⅳ式期の段階（段階４の大半）で甕の主要な型式となる。

パレススタイル壺である壺Ｈは、破片化した土器片の状態で墳丘上や墳丘内から出土しており、２つ以上の個体数が確認される。数としては、決して多くはないように見受けられるが、現状における周辺の遺跡での壺Ｈの確認例は、弥生時代後期のものとして沼津市御幸町遺跡 260 号住居址から１点、古墳時代のものとして三島市鶴喰前田遺跡と清水町矢崎遺跡からそれぞれ１点が出土したのみである。東海西部系の土器組成の中では比較的目立つ器種ではあるものの、その出土例は少ない。高尾山古墳における出土事例は、複数の個体が出土しているということだけを取り上げてもその特異性が際立つものとなっている。

この壺Ｈは、口縁部の拡張がまだ明瞭で、その外面に擬凹線文および棒状貼付文が施されている。胴部破片に見られる文様は、横線文と波状文、列点文の組み合わせと横線文と波状文、羽状文の組み合わせが認められる。この古墳における壺Ｈは、すべて段階１のものであり、尾張における廻間Ⅰ式期の終わり～廻間Ⅱ式期の始めの段階のものとして捉えることができるものである。壺Ｈは、東駿河において、加飾壺として継続的な搬入を示すものではなく、在地化して新たな型式を生み出すものでもない。

高尾山古墳では、壺Ｈを特徴づける横線文や波状文などで構成されるパレス文様が、小型高坏やヒサゴ壺（壺Ⅰ）などにも認められるが、すべて段階１の事例であると思われる。これは、大廓Ⅰ式期の基準資料としている丸ヶ谷戸遺跡における出土事例などからも指摘されることであり、この段階における特徴とすることができる。段階２以降、つまり大廓Ⅱ式期以降、パレス文様に関わるものはほとんど見ることができなくなる。

高坏は、段階１に波及する器種で、外来系土器として捉えられる。東駿河においては、弥生時代後期、高坏が主要な器種組成に含まれない。弥生時代後期から古墳時代に移行する段階に登場する器種であり、伊勢湾沿岸地域の影響を受けて成立する高坏Ａが型式的な主流となる。高尾山古墳では、組成の変化を明らかにする高坏Ａが出土している。

段階１に比定される高坏Ａは、搬入品と在地産のものが見られる。この段階における在地のものは、坏部が深く、坏部下位の稜が明瞭である点や脚部が内湾気味に広がる点などがオリジナルの型式（赤塚 1990）を踏襲している。ただし、口縁端部の面取りや脚部上位の横線文などを採用しないものが大半を占めているように、高坏Ａはその登場とともにいち早く在地化を進行させている。段階２になると、地域型としての高坏が登場している（渡井 2008）。口縁端部を面取りするものは、その数を減らし、端部を丸くするようになる。脚部は、内湾化が弱まり、伊勢湾沿岸地域の変化とは異なる独自の変化を指向するようになる。段階１における搬入品の高坏をモチーフとして、高坏の在地化は比較的早く進む様子がわかる。そのため、この段階１以外では、搬入品がほとんど認められなくなるのである。

前節で述べたように、高尾山古墳の場合、段階１のものと思われる高坏が、その大半を占めている。高坏は古墳時代になって、一形式として型式変化し主要な器種となるが、高尾山古墳では時代的に非常に偏った出土を示している。そしてその時代は、段階１、つまり大廓Ⅰ式期の年代となるのである。

器台は小型器台の出土が認められる。器台の出土は、古墳時代前期中葉の大廓Ⅲ式期以降に普遍化するもので、段階１や段階２に相当するものの出土は、非常に限定的である。大廓Ⅲ式期以降では、稜をもって口縁部が外反する受け部と、広く外反する脚部の見られる型式がその主体を占めるようで、一定の出土数が認められ、大廓Ⅳ式期にかけて型式変化の過程をたどるものである。

高尾山古墳における小型器台は、その出土数は少ないが、２つに型式分類することができ、当初から多彩な様相を示している。器台じたいは、弥生時代にその系譜をたどることができる形式ではなく、古墳時代前期以降、外来系の土器として登場するものである。具体的な系譜についての判断は難しいが、両者とも東海系器台の範疇で捉えられるもののようである（赤塚 1993）。

受け部と脚部の分かる器台Ａは、口径と底径がほぼ同一の値を示し、脚台端部の外反がまだ認められない段階のものである。また、器台Ｂは、脚部の低い特異な形態を示し、東海西部における弥生時代後期からの型式変化の中で成立したものとして捉えられる。これら２型式については、型式的な差が確実に認められるが、時間的に大きな違いはないものと考えられる。両型式とも、その数量は少ないものの、次段階まで在地化した型式が認められるようであるが、同一の型式の事例はほとんどない。高尾山古墳出土の器台は、型式的な特徴からすべて段階１のものとして捉えている。東駿河における古墳時代前期の土器の型式的な変遷をたどると、高尾山古墳においては、古墳築造当初に、成立時の小型器台を逸早く取り込んでいる様子が窺われる。

⑷ 関東系

関東地方は、その地理的な環境などが作用して数多くの特徴的な土器様式圏が設定されている。その状況は、東駿河を含めた東海東部地方と大きく異なる。東駿河との関連を想定した場合、関東地方として一括すると、どの地域の何を見ればよいのか分かり難い部分があり、型式変化の主な対象となる主要器種さえ的確に指摘できないのが現状となっている。そのため、これまで関東地方との地域間交流を検討する研究は、極めて低調であった。高尾山古墳における東方からの影響は、特徴的な型式に偏っているものと思われるが 、甕Ｋがそれに関わるものとして取り上げられる。

口縁部に輪積み痕を残す甕は、東京湾沿岸地域で弥生時代中期に登場し、弥生時代後期前半に盛行するものである。その型式変化としては、胴部の球胴化とともに、輪積み痕の数の減少が指摘される。高尾山古墳における甕Ｋは、輪積みの範囲が頸部以上の口縁部に限られ、その痕跡を２段に留めている。つまり、頸部の屈曲に合わせた輪積み痕と口縁端部との間に認められる１段の輪積み痕に、文様の意匠を持たせるものとなっている。口縁端部における刺突文の有無は、胴部における肩部の張りと相関するようで、刺突文のないものの方が胴部の球胴化を示す傾向にあり、型式的に古相を示しているものといえる。ただし、輪積みの段やその部位については、大きな違いが認められない。輪積み痕の残る甕は上総の草刈Ⅱ期（加藤 2001）や、東京湾を挟んで対岸の武蔵において五領式段階（大村・菊池 1984）まで確認されており、おおむね段階３までは残存する型式である。対象とした東京湾沿岸地域の事例で台付となるのは東京湾西岸域であり、高尾山古墳における甕Ｋが台付甕であることは、この地域との関連が想定される（大村・菊池 1984）。甕Ｋにおける口縁部形態を検討すると、粘土紐の輪積みの痕が頸部以上に限定され､その数も２段と少なくなる。頸部が明らかに屈折するものではない点を考慮すると、その口縁部形態から上総の草刈Ｉ式期あるいは武蔵における鴨居上ノ台式段階のものに類似している。

高尾山古墳出土の甕Ｋの場合は、出土する段階が時期的に単発で、継続性をもつものではなく、すべて段階１～段階２に関わる型式であるといえる。

⑸ 外来系土器の特性

外来系土器については、その系譜の分かるものについて検討してみたが、その搬入の仕方は同一ではなく、型式毎に違いがあり、甕Ｊのようにオリジナルにない脚台が付されるなど他の地域の要素と融合するものなどがある。これらの外来系土器の中には本来の地域ではなく、二次的な地域を介在して高尾山古墳へ搬入されたと思われるものがある。集落遺跡出土の外来系土器は、直接的な搬入品から一部の整形（成形）技法の借用まで様々な影響が窺えるものがある。外来系土器と在来系土器の境界は、その影響の度合いによるものとすると、客観性をもって二分することは難しい。型式的な土器分類を行う際に外来系の関わる部分の認識は、場面ごとで大きな違いを示すこととなる。

外来系土器の認識について、高尾山古墳では、弥生時代に遡ることのない現状で確認できる要素を前節で取り上げてみた。

外来系土器としてその系譜がたどれるものは、北陸東北部、北陸南西部、近江、伊勢湾沿岸地域と東京湾沿岸地域がその候補となる。ここでは、明らかに畿内系と捉えられるものがない点がひとつの大きな特徴として挙げられる。段階１～段階２では､畿内Ⅴ様式系の甕や庄内甕などの出土が想定されるが、出土事例は確認されていない。別項で検討されているように、狩野川流域において、同時期の畿内系の搬入は、外来系土器の出土が多い清水町恵ヶ後遺跡や伊豆の国市山木遺跡などで確認されている。これらの外来系土器の出土傾向を踏まえると、外来系土器から指摘される被葬者とこれらの集落とが単純に関連付けられるものではないことが分かる。

また、外来系として取り上げた各型式は、その大半が高尾山古墳出土土器型式で設定した段階の段階１に集中している。これは、これまでの各地の土器編年の深化とそれを総合的に扱う一連の土器の編年

網の整備によって明らかにされる（庄内式土器研究 1998）。それは、高尾山古墳出土の外来系土器が、相互の併行関係を再度確認するものとなったともいえる。この段階１に相当するのは、北陸南西部の漆・５群土器（田島 1986）、北陸北東部Ⅱ－１期（川村 1993）、近江湖東地域の近江古墳２様式＝斗西３期（植田 1994）、北近江の顔戸Ｇ－１（宮崎 1994）、尾張における廻間Ⅰ式期の終わり～廻間Ⅱ式期の始めの段階に関わる土器型式である。さらには、東日本の武蔵における鴨居上ノ台式段階に相当するものも含まれている。最も遠方としては、２種の北陸系の甕の形式によく表れている越前や能登がその地域となり、その交流のルートとして近江や伊勢、尾張、三河などの東海西部地域が取り上げられる。しかしその中でも、伊勢湾沿岸地域からの直接的で濃密な交流が指摘されるのであり、東海西部系土器の出土量の多さもそれを反映している。ただし、東日本との関連も明らかとなっており、単純な単一のルート論では説明できない部分も多い。狩野川流域から愛鷹山山麓に展開する弥生時代後期集落を基盤として登場した首長層の能動的な政治力が作用して、各地との交流を可能としていたのである（註１）。

高尾山古墳における墳丘構造に関わる問題は、別項で触れられている通りで、前方後方系の墳形ではあるものの、細かい点を検討すると、非常に特徴的な形を示していることが分かる。駿河においては弥生時代後期にその系譜をたどることができない墓制であり、在地の墓制の中からの発展的な変化の中で登場した墓でない点は明らかである。高尾山古墳の登場はその意味で突発的なものであった。高尾山古墳で出土している外来系土器の系譜やその地理的な条件からは、北陸のある地域の墓制であるとすれば最も合理的な解釈が成り立つが、その墳形や主体部形態、副葬品など直接関連するものは、はっきりしない（考古学フォーラム 1995）。また、外来系土器を波及させる仕組みの中で、中継地点、あるいは集積地などが土器とともに墓制にも関与したとなれば、そこでの墓制が影響を与えることもあろう。どこのどのような集団によってこの墓制が成立したのか。出現期の古墳を考える上で、根本的な検討課題のひとつとなる。

ｈ．まとめ

高尾山古墳出土の土器群について、その型式的な組成と段階的な変化の方向を検討してみた。古墳出土の土器類であるため、古墳時代前期における一般集落などで出土する主要な器種が揃うものではなく、反対に、この古墳特有の型式の出土が確認された。

出土土器を４つの段階に分けた場合、古墳築造期に当たる段階１は、弥生時代以来の伝統型式と外来系土器の型式が共存する段階として捉えられる。外来系土器における関連地域は、北陸、近江、東海西部、関東を取り上げたが、相互にそれぞれが時間的な併行関係にある土器型式であることが指摘されるものとなった（庄内式土器研究会 1998）。段階１は、大廓Ⅰ式期（渡井 1998）に相当し、東海西部尾張の廻間Ⅰ式期４～Ⅱ式期１（赤塚 1990）に併行するものと考えている。

出現期の古墳としては、畿内の土器型式や古墳との時間的な関係が注目されるが、高尾山古墳出土の土器群に畿内系の色合いを認めることはほとんどできない。そのため、直接的な併行関係を設定することは難しい。ただし、壺Ｂの出土が知られる纒向遺跡辻土坑４下層（石野・関川 1976）における壺Ｂの型式が段階３に相当するものである点を重視すると、纒向遺跡辻土坑４下層の土器群が布留０式期の基準資料（寺澤 1986）なっていることから、段階１、段階２が布留０式に先行するものとなり、段階１が庄内２式期（寺澤 1986）に併行することが想定されるのである。尾張との関係においても、纒向遺跡辻土坑４下層出土のＳ字甕がＳ字甕Ｂ類の新段階のもので占められ、廻間Ⅲ式期に併行関係を持つものとなっている（赤塚 2000）。布留０式期における年代幅については、新古相に細分されて、まだ検討の余地はあるようだが、定型化した大型前方後円墳である箸墓古墳の築造年代が関連するだけに、その設定は、重要な意味を持つ（寺澤 2002）。

駿河における布留０式期段階の古墳としては、静岡の神明山古墳、沼津の神明塚古墳が取り上げられる。神明塚古墳については、高尾山古墳と同じ沼津市域にあり、段階３の古墳ではないかと考えている。

段階３の時期には、高尾山古墳において特有な古墳祭祀が執行されたようである。古墳周溝内で発見された多量の小型壺、小型鉢類は、その祭祀行為（儀礼）に伴う道具の一部であるといえる。具体的な土器祭祀を含む古墳の葬送儀礼、あるいは墓前祭祀の内容についてはよく分からないが、出土土器が特有な型式で占められている点は、充分評価しなければならない。

段階１とした外来系土器主体の段階と段階３とは、その土器組成に大きな違いが見られる。それぞれの段階で古墳に関連した土器祭祀が執り行われていたと思われるが、段階３における専用器種の登場は、前段階とは異なったまったく別の祭祀の登場として考えるべきであり、首長霊に対する関わりに変化が生じたものといえる。古墳の造営期間における祭祀形態の変化は、それを執行した首長側の変化を反映しているのかもしれない。いずれにしても、段階３の前後で高尾山古墳に関わる墳墓造営に大きな画期が想定されるのである。

当地域における壺Ｊの登場が、この段階を迎えないとはっきりしない点を前提として、段階４における土器組成は、主に多彩な壺Ｊにより構成されていると考えている。壺類を中心とした土器祭祀としての共通性を評価すると段階４の組成は、段階３における様相を踏襲しているともいえる。段階３以降は継続的信仰儀礼が実施されていたのではないだろうか。段階３における小型壺および小型鉢による構成では、その中での時間的な型式差は、専用器種であることなどからなかなか指摘し難い。しかし段階４における壺Ｊは、通常の器種組成に含まれ、型式的な特徴が明らかであることから、型式変化を追うことができる。段階４における壺Ｊの採用は、一般的な器種を改めて取り入れているわけであり、段階４の中における時間的な型式差も指摘できるのである。この段階４では、一定の時間幅の中で継続された祭祀が想定されるのである。

ｉ．おわりに

高尾山古墳において出土した多量の土器について、その型式分類と系譜について検討してみた。古墳からの出土としては、土器の数の多さもひとつの大きな特徴であるが、それらの土器群の古さは、さらに大きな検討課題となる。結論としては、前述のように庄内Ⅱ式期段階の年代を提示している。おのずと高尾山古墳は、東日本における最古段階の古墳として捉えられることになる。つまり、庄内Ⅱ式期の段階において、駿河湾の東岸域では、墳丘長 60m を測る大型古墳が登場していたのである。

註

１．岩本氏の考察で具体的な検討がなされているように、この地域の弥生時代後期から古墳時代前期の集落遺跡は、畿内以西の影響が認められる恵ヶ後遺跡、庄内甕の出土が知られる山木遺跡などの狩野川流域における外来系土器の出土が顕著な遺跡と愛鷹山麓の在地色の強い遺跡群が、故意に地域を分けるかのように分布している。前者の狩野川流域の遺跡における外来系土器は、高尾山古墳における外来系とは系譜を違えており、地域間の複雑な交流の様子を表わすものとなっている。また、後者においては、狩野川流域とは様相を大きく違えて、外来系土器の出土は限られるものの、弥生時代後期からの継続性が強く、大きな集落経営が実施されていた地域として評価されている。この場合、前者と後者の集落遺跡の違いがその土器組成から社会的な優劣を表すもののように捉えがちではあるが、後者の愛鷹山麓の集落域ではガラス製勾玉の鋳型が発見されており、首長層に関わる装身具の生産に関わる特別な地域であることも判明している。

高尾山古墳の被葬者の場合は、このような、狩野川を媒介にした流域の遺跡と高尾山古墳の後方部側に展望される愛鷹山の山間に展開する遺跡などから成立する地域的な特性を基盤として、地域支配を執行した首長であったといえるのである。

引用参考文献

赤澤徳明 1994「越前における近江系土器について」『庄内式土器研究』Ⅷ 庄内式土器研究会
赤塚次郎 1990『廻間遺跡』愛知県埋蔵文化財センター
赤塚次郎 1992「Ｓ字甕とカメ」『庄内式土器研究』Ⅱ 庄内式土器研究会
赤塚次郎 1993「東海系器台覚書」『庄内式土器研究』Ⅳ 庄内式土器研究会
赤塚次郎 2000「雲出型甕の提唱と伊勢湾の台付甕」『第７回東海考古学フォーラム三重大会 Ｓ字甕を考える』考古学フォーラム
石野博信、関川尚功 1976『纒向』桜井市教育委員会
植田文雄 1994「近江湖東地域の庄内～布留式併行期土器編年」『庄内式土器研究』Ⅷ 庄内式土器研究会
大村直・菊池健一 1984「久ヶ原式と弥生町式－南関東地方における弥生時代後期の諸様相（予察）－」『史館』第 16 号 史館同人会
加藤修司 2001「土器編年案」『千葉県文化財センター　研究紀要　』21 (財) 千葉県文化財センター
川村浩司 1993「北陸北東部における古墳出現前後の土器組成」『環日本海地域比較史研究』第２号 新潟大学環日本海地域比較史研究会
考古学フォーラム 1995『第３回東海考古学フォーラム 前方後方墳を考える』
庄内式土器研究会 1998『庄内式土器研究』ⅩⅧ
鈴木敏則 2004「北陸系土器について」『大蒲村東Ⅰ・Ⅱ遺跡』(財) 浜松市文化協会
田島明人 1986「漆町遺跡出土土器の編年的考察」『漆町遺跡』Ⅰ 石川県埋蔵文化財センター
次山　淳 1993「布留式土器における精製器種の製作技術」『考古学研究』第 39 巻第４号 考古学研究会
沼津市教育市史編さん委員会 2005『神明塚古墳（第２次）発掘調査報告書』
古川　登 1991「北部近江における「く」の字状口縁台付甕について－研究の提言－」『考古学フォーラム』２ 考古学フォーラム
古川　登 1995「「く」の字状口縁台付甕再論」『庄内式土器研究』Ⅹ 庄内式土器研究会
寺澤　薫 1986「畿内古式土師器の編年と二、三の問題」『矢部遺跡』奈良県立橿原考古学研究所
寺澤　薫 2002「布留０式土器の新・古相と二、三の問題」『箸墓古墳周辺の調査』奈良県立橿原考古学研究所
宮崎幹也 1994「近江湖北地域における庄内式併行期の土器」『庄内式土器研究』Ⅷ 庄内式土器研究会
渡井英誉 1998「大廓式土器小考－大廓式土器の画期とその展開－」『庄内式土器研究』ⅩⅥ 庄内式土器研究会
渡井英誉 2002「大廓Ⅱ式期の具体相」『三島市埋蔵文化財発掘調査報告』Ⅶ 三島市教育委員会
渡井英誉 2008「潤井川流域における古墳時代前期の高坏－大廓式の高坏を考える－」『静岡県考古学研究』№40 静岡県考古学会
渡井英誉 2010「東駿河における布留式併行期の様相(補遺)－前期古墳の年代を再検討する－」『静岡県考古学研究』№41・42 静岡県考古学会

3．副葬品からみた高尾山古墳

滝沢　誠・平林大樹

a．はじめに

高尾山古墳の後方部頂で検出された埋葬施設からは、銅鏡１点、勾玉１点、鉄槍２点、鉄鏃 32 点、鉇１点が出土している。ここでは、銅鏡、鉄槍および鉄鏃の編年的位置を検討するとともに、その全体的な評価を通じて本古墳の年代を探ってみたい。なお、本稿は、「ｄ．鉄鏃について」を平林が担当し、それ以外の部分と全体の構成を滝沢が担当した。

b．浮彫式獣帯鏡について

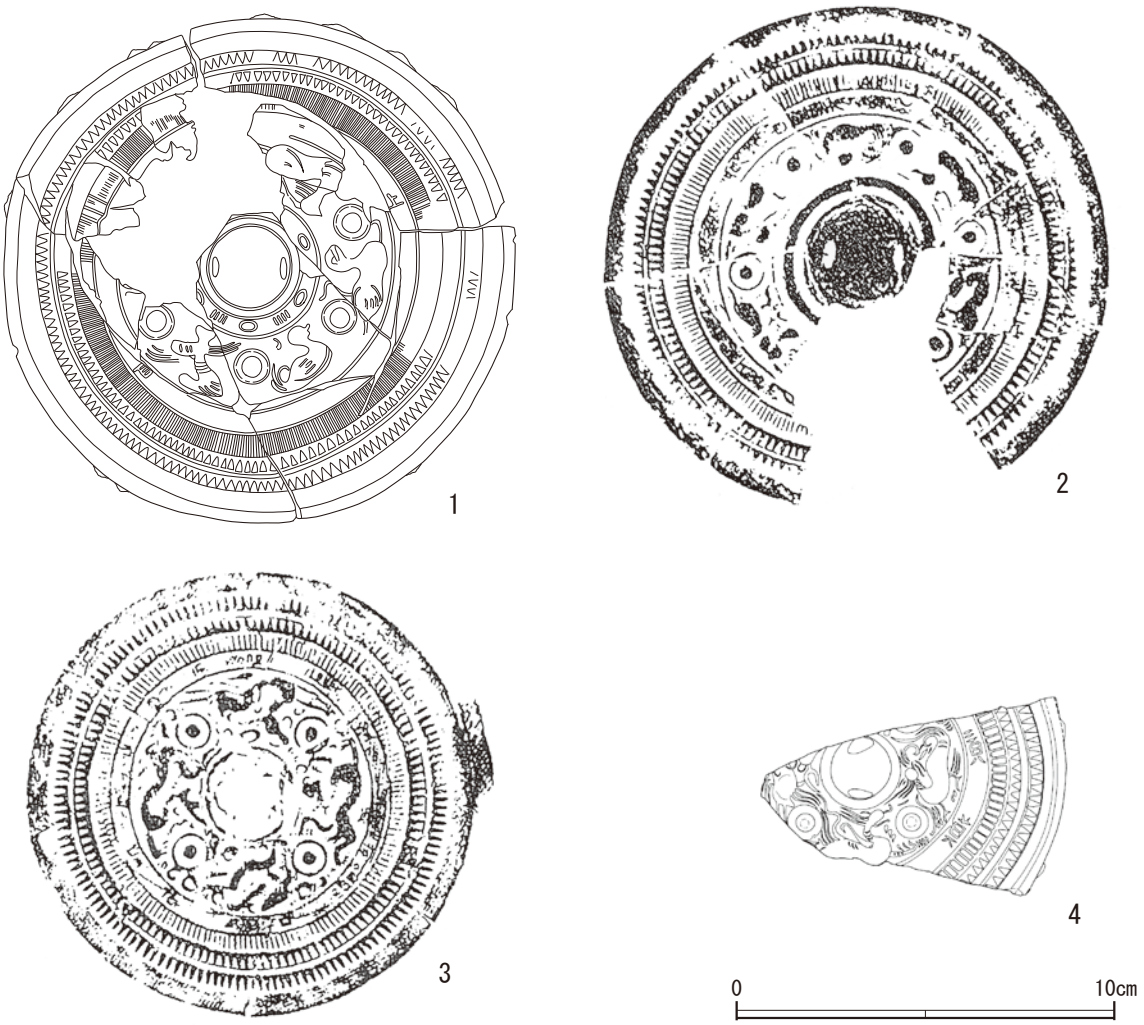
特　徴　本古墳から出土した銅鏡（第１図１）は、後漢鏡の一種として知られる上方作系浮彫式獣帯鏡（岡村 1992）である。その詳細は第Ⅳ章で述べたとおりであるが、あらためてその特徴を整理すると次のようになる。

①面径は 13.5㎝で、その出土状況や破片の残存状況から判断して、破砕鏡とみられる。
②鈕座には、有節重弧文圏をともなう。
③内区に六乳を配した六像式とみられる。
④内区の主文は四像が残存し、それぞれ、鹿、虎、鳥、羽人とみられる。
⑤銘帯には、「上」の文字と「竟」「宜」とみられる文字が存在することから、「上方作竟」と「長宜子孫」の字句を含む銘文が想定される。
⑥外区の文様は、鋸歯文＋無文＋鋸歯文である。
⑦縁は斜縁である。

型式変化　上方作系浮彫式獣帯鏡（第１図）の型式編年については、岡村秀典と山田俊輔が詳細な検討をおこなっている（岡村 1992、山田 2006）。本鏡の編年的位置を探るにあたり、まずは両者の基本的理解を確認しておきたい。

岡村は、鈕座、主文、外区文様に着目し、各単位文様の省略過程を想定したうえで、三者の相関関係にもとづいて型式設定をおこなっている。すなわち、鈕座については、有節重弧文圏をめぐらせた内側に芝草文と「宜子孫」の銘文を配したものや輻射文などの文様帯をもつもの（鈕座Ａ）、その文様帯がなく、有節重弧文圏のみのもの（鈕座Ｂ）、なにもないもの（鈕座Ｃ）に分類し、鈕座Ａ→鈕座Ｂ→鈕座Ｃの変化を想定している。また、外区文様については、鋸歯文＋複線波文＋鋸歯文となるもの（鋸Ａ）、鋸歯文＋無文＋鋸歯文となるもの（鋸Ｂ）、鋸歯文＋複線波文となるもの（鋸Ｃ）、鋸歯文と連続三葉文になるもの、素文のものに分類し、鋸Ａ→鋸Ｂの変化を想定している。主文については、浮彫式獣帯鏡の原型（七像）から次第に図像が減少していったとの認識を示したうえで、鈕座と外区文様との相関関係にもとづいて、鈕座Ａをもつ六像Ａ式、鈕座Ｂをもつ六像Ｂ式、四像式の三型式を設定している。

山田は、岡村が取り上げた鈕座と外区文様の変化を認めたうえで、あらたに主文の図像表現と乳座の形態に着目し、系統的な編年をおこなっている。すなわち、主文については、特徴的な龍の文様から三系統（Ａ・Ｂ・Ｃ系統）の存在を指摘し、それぞれに写実的な表現から硬化した表現に移行するとして、四段階（Ⅰ～Ⅳ段階）の変化を想定している。また、乳座については、断面形が台形状のもの（乳座Ａ）とＭ字形のもの（乳座Ｂ）に分類し、製作工程の省略という観点から、乳座Ａ→乳座Ｂの変化を想定している。そして、この主文による段階区分は、乳座の変化と岡村による鈕座および外区文様の変化に対応していることから、その有効性が確認できるとしている。さらに、この段階区分は、六像式から四像



1 静岡・高尾山古墳　2 長野・中山 36 号墳　3 長野・弘法山古墳　4 千葉・高部 32 号墳　（S =1/2）

第 1 図　上方作系浮彫式獣帯鏡

式へという変遷観と整合しないことから、六像式と四像式の併存を指摘している。

編年的位置　以上のように、上方作系浮彫式獣帯鏡の型式編年については、各単位文様の分析によって一定の方向性が示されている。また、単に六像式から四像式へという変化では捉えきれないことも指摘されている。これらの研究を踏まえたとき、本鏡の編年的位置はどのように理解することができるであろうか。

まず、鈕座については岡村分類の鈕座Ｂ、外区文様については岡村分類の鋸Ｂに該当することが明らかである。これらの要素からは、岡村による六像Ｂ式に位置づけることができる。また、乳座については山田分類の乳座Ａに該当するとみられ、これに鈕座と外区文様を加えた対応関係から、山田によるⅡ段階またはⅢ段階に位置づけることができる。そこで問題となるのは、主文の図像表現である。

上述のように、本鏡の主文については四像のみが残存し、その中に龍とみられる獣像は存在しない。したがって、山田が示した系統との対比は必ずしも明らかではないが、虎や鹿とみられる獣像の表現については、類例との比較がある程度可能である。両像の細部表現は、劣化のため全体を把握することはできないが、いずれも臀部の輪郭とその内部の弧線が明瞭に認められる。また、いずれの獣像も胴部の浮彫表現にはボリューム感がある。これらの特徴は、写実的な表現をとるⅠ・Ⅱ段階の類例に近く、鹿

については、山田が例示した鳥取県桂見２号墳例（六像式Ⅰ段階）と広島県蔵王原出土例（四像式Ⅱ段階）との中間的な様相を示すものと考えられる。このように主文の図像表現を把握すると、本鏡は山田による六像式Ⅱ段階の上方作系浮彫式獣帯鏡と位置づけることが可能である。

日本列島出土の上方作系浮彫式獣帯鏡は、現在 50 例近くが知られている。その多くは、岡村による六像Ｂ式または四像式、山田によるⅡ段階以降の資料である。以上の型式学的理解にしたがえば、本古墳出土の上方作系浮彫式獣帯鏡は、列島で数多く出土する一群の中では比較的古い製作年代が与えられる資料であるといえよう。その実年代については、上方作系浮彫式獣帯鏡の製作年代を２世紀後半に求める岡村の見解、また、中国山東省張庄 M1 号墓出土のⅡ段階鏡に共伴した遺物と同省の梁山「永康元年」紀年墓出土遺物との類似から、Ⅱ段階鏡の製作開始時期の下限を２世紀半ば頃に求める山田の見解がある。ともに、その製作年代と列島への流入年代に時間差を見積もらない点では一致しており、このことは本古墳の年代的上限にかかわる認識として重要であろう。一方で、本鏡が布留０式期にほぼ終焉を迎える破砕鏡であるとみられる点は、その年代的傾向を示す事実として留意しておく必要がある。

ｃ．鉄槍について

特　徴　本古墳から出土した２点の鉄槍のうちの１点（槍１）は、これまでほとんど例がない有樋の鉄槍である。この槍身は、全長 45.5㎝を測り、鎬を挟んだ両側に幅６㎜～７㎜の樋が認められる。樋は、関部付近から始まり鋒近くにまで達しており、その断面形は浅い弧状をなしている。

このような槍身（剣身）の類例としては、福岡県沖ノ島 17 号遺跡からの出土品が挙げられる（第２図）。同例は長さ７㎝の破片で、身幅 3.2㎝、同厚 0.5㎝を測り、鎬の両側に幅７㎜、深さ１㎜の浅い弧状をなす樋が認められる（原田 1961）。部分的な比較にはなるが、そのつくりや大きさからみて、同例は本古墳出土品と同様の製品である可能性が高い。

樋をともなう鉄製武器は、弥生時代から古墳時代を通じて極めて稀少な存在である。よく知られたものとしては、九州で出土している弥生時代中期後半～後期初頭の有樋鉄戈がある。その製作技術をめぐっては、鋳造説（潮見 1982）、熱間鍛造説（鈴木・松林 1994）などがあり、必ずしも十分な結論は得られていない。本古墳出土品については、組織検査等の科学的な調査を行っていないが、極めて浅い樋であること、また、側面のＸ線写真に認められる層状の構造から判断して、鍛造品とみるのが妥当であろう。

ところで、槍１にはいわゆる刃関双孔が認められる。この刃関双孔は、山形に突出した柄端部に完全に覆われていて、目釘孔としての機能を果たしていない。こうした刃関双孔をともなう古墳時代前期の鉄槍は、鉄剣を転用したものであり、その中には弥生時代以来の伝世品が含まれている可能性が指摘されている（豊島 2008）。槍１については、茎部に目釘孔が見当たらず、茎部が切断・再加工された可能性も考えられることから、本来は有樋鉄剣であったことが十分に想定される。

第２図　沖ノ島 17 号遺跡出土の有樋鉄剣

編年的位置　２点の鉄槍はいずれも柄端部が良好に遺存しており、とくに槍１については、槍身本体と柄端部の構造から、その編年的位置づけを探ることが可能である。

上述のように、槍１は極めて類例の乏しい有樋の槍身（剣身）である。その直接的な系譜は現時点では不明であるが、樋をともなう武器類は、弥生時代の青銅製武器類や鉄戈、磨製石剣などに認められ、古墳時代には基本的に認めることができない。また、槍１にともなう刃関双孔も弥生時代中期を初現とし、そのほとんどが弥生時代後期の鉄剣に認められる。刃関双孔鉄剣の一部には、古墳時代前期および中期にまで下る

事例が知られているが、それらは槍に転用されるなどした弥生時代以来の伝世品と解釈されている（豊島 2008、大谷 2010）。こうした身のつくりから判断する限り、槍 1 は弥生時代的な特徴が濃厚であり、弥生時代以来の伝世品である可能性も視野に入れておく必要がある。

一方、槍 1 に遺存する柄端部は山形に突出し、その斜辺は面取りされて緩やかな弧状をなしている。また、遺存する柄端部に明確な糸巻きは認められず、糸巻きが山形突出の頂部に及んでいないことは明らかである。糸巻きの範囲は判然としないものの、こうした柄端部のつくりは、豊島直博が糸巻き底辺型としたものに該当しよう（豊島 2008）。

豊島が指摘するように、糸巻き底辺型は弥生時代後期終末頃の墳墓から多く出土しており、東日本では、古墳出現期の墳墓とみられる千葉県神門 4 号墳（田中 1977）や同高部 32 号墳（西原 2002）からの出土例がある。この糸巻き底辺型については、福島県会津大塚山古墳例（伊東・伊藤 1964）のように古墳時代前期後半に下る事例も知られていることから、特定の時期に限定されない可能性がある。しかし、弥生時代後期終末から古墳時代前期初頭の時期に位置づけられる墳墓からの出土例が多数を占めていることも事実である。その点を重視するならば、本品が槍としての拵えを与えられた時期も、それと同様の時期である可能性が高いといえよう。

以上のように、槍 1 は、身のつくりと柄のつくりの両面において、弥生時代とのつながりをうかがわせるきわめて古い特徴をもった資料である。他方、短身の槍 2 に認められる柄端部は、豊島の分類による直線型 B 類である（豊島 2008）。その編年的理解によれば、古墳時代前期の鉄槍の中ではもっとも後出的なつくりである。しかし、糸巻き底辺型に後出事例が存在するのと同様に、直線型にもより古く遡る初現的な事例が存在する可能性はあろう。その点を課題として認識しつつ、今は槍 1 の特徴に認められる先行性を確認しておくことにしたい。　（滝沢　誠）

d．鉄鏃について

高尾山古墳の主体部からは総数 32 点の鉄鏃が出土した。その内訳を今一度整理すると以下のとおりとなる。

①柳葉式		14 点
②腸抉三角式	A 類	6 点
	B 類	8 点
	C 類	3 点
③長三角式		1 点

詳細は第Ⅳ章で説明したとおりであり、大別 3 型式、細別 5 型式に分類される。ここでは副葬状況について若干の整理を試みた後、編年的位置づけを検討したい。

副葬状況と収納容器　鉄鏃は主体部の北西側と主体部中央付近の 2 か所より出土しており、ここでは前者を便宜的に Ⅰ 群、後者を Ⅱ 群と呼んで区別する。

Ⅰ 群は柳葉式 12 点、腸抉三角式 16 点、長三角式 1 点、計 29 点から構成される鏃束である。鋒は同一の方向（西向き）に向いてはいるものの、先端は完全にそろっているわけではない。3 型式が混在した状態で束にまとめられており、鏃束内での配置にも特に規則性は見出せない。

また、木質や獣毛などは確認できなかった。束になって出土していることから、何らかの容器に入れられて副葬されていた可能性は否定できないものの、現状では盛矢具の存在を示す痕跡を認めることは難しい。ただし、いくつかの鏃身に麻布と推定される繊維の付着が認められた点は注意される [(1)]。鏃群の出土位置が棺端である点を考慮するならば、この付着繊維が被葬者の衣服片である公算は低く、鏃束が麻布で包装されていた可能性が想起されよう。

Ⅱ群は柳葉式２点、腸抉三角式Ｂ類１点から構成される。そのうち、柳葉式１点（第 33 図 6）と腸抉三角式Ｂ類１点（第 34 図 26）はいずれも東向きで浮彫式獣帯鏡片の上部から出土している。一方、もう１点の柳葉式（第 33 図 14）は、浮彫式獣帯鏡片から約 13㎝の位置より南西向きに槍の柄に接した状態で出土している。これらは、木棺が腐朽する過程において、土圧によって原位置より移動している可能性が高く、とくに 14 については、本来は東を向いていたと想定される。

また、Ⅰ群とは外形や口巻の構造に違いが認められない。このことからⅡ群とした鉄鏃３点は、Ⅰ群として区分した「鏃束」の中から抜粋され、被葬者の頭部～胸部付近に副葬されたものと考えられる。

編年的位置　前期古墳出土の鉄鏃は、近年、水野敏典や川畑純の研究によって年代的な整理が進展しつつある（水野 2008・川畑 2009）。ここでは両論文を参照しつつ、編年的位置づけを考えてみる。なお、長三角式については管見の限り、類例を知り得ないため、柳葉式と腸抉三角式を検討の対象とする。

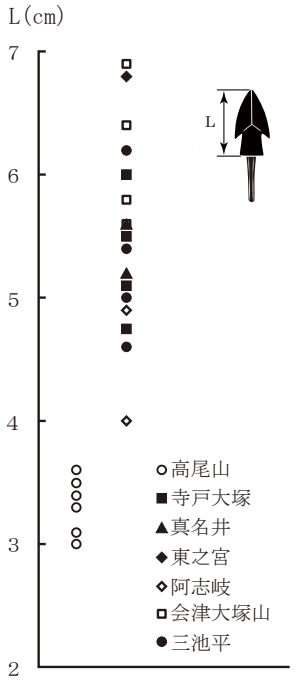
まず、柳葉式についてみていく。水野敏典は前期古墳の鉄鏃について製作技法の観点から、あらたに側面形を分類の視点に導入した。そして、側面形と外形の組み合わせに基づき、Ａ～Ｄの４つの型式を設定した。水野の変遷観は、側面形は鏃身部と茎部との間に段差を持ち、面を持つものから、段差をもたず扁平なものに、外形は丸い鏃身尻から屈曲する鏃身尻の段階を経て屈曲部が山形関化するものに変化を遂げると約言できる。そこで本例をみてみると、①鏃身部と鏃身尻に鍛造面をもつ、②鏃身部と茎部の境に段差をもち、鏃鍛造面をもつ（側面分類ii類）という２点より柳葉式Ｂ類に該当する。さらに４㎝前後であることから、小型柳葉式のＢ１類に位置づけられる。

水野は鏃身尻が丸いＡ類を古相として、Ａ類のみで構成されるホケノ山古墳、Ａ類とＢ１ｂ類とが共伴する浦間茶臼山古墳の段階、Ａ類が組成に含まれない黒塚古墳、桜井茶臼山古墳、椿井大塚山古墳の段階の順で変遷を整理している。鉄鏃組成から判断すると、本例はＡ類は一切含まないことからホケノ山古墳、浦間茶臼山古墳より新相であるといえる。

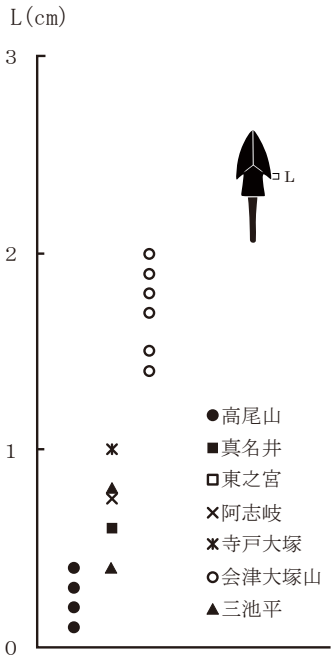
以上より、前期前半段階の所産と評価できるが、Ａ類が組成に含まれない段階における時間幅の中で、本古墳例をどの段階に位置づけるかが、今後の課題といえる。

また、川畑純の編年を参照すると、本例は「柳葉Ｅ式」に該当する（川畑 2009）[(2)]。川畑はその存続期間をⅠ期からⅡ期前半としている。Ⅰ期段階（庄内式併行期～前期前半）における共伴遺物は舶載段階の三角縁神獣鏡や古相の石製腕飾類であり、三角縁神獣鏡の副葬以前の段階も含まれるようである。川畑編年は上述の水野の年代観よりも幅があることから、ここでは、両編年の間に矛盾が生じていないことを確認しておく。

つぎに腸抉三角式についてみていく。川畑純は「腸抉を持つ鏃身部と鏃身下半をもち茎関が角関」である個体を「腸抉柳葉Ｃ式」と呼称し、鏃身部長と腸抉の切り込みの強さ、鏃身下半の形態から１～４式に細分した。そのうえで、鏃身下半が末広がりで腸抉の切り込みが弱



第３図　鏃身長の分布



第４図　腸抉長の分布

第１表　腸抉三角式の諸属性

古墳名	所在地	腸抉三角式総数	鏃身部長			腸抉長			刃部断面形		鏃身下半形	
			～４cm	４～5.5cm	5.5cm～	～0.5cm	0.5～1cm	1cm～	菱形	レンズ	末広	直線
高尾山	**静岡県沼津市**	**17**	●			●			●	●	●	●
真名井	大阪府富田林市	2	●	●	●		●			●	●	
東之宮	愛知県犬山市	2			●			●		●	●	●
寺戸大塚前方部	京都府向日市	4		●				●		●		●
阿志岐B26号	福岡県筑紫野市	2		●			●			●		●
三池平	静岡県静岡市	12		●	●		●		●	●	●	●
会津大塚山	福島県会津若松市	9			●			●		●		●

い１式を最古相として２式→３式→４式の変遷を想定した[(3)]。本例もその特徴から「腸抉柳葉Ｃ式」に分類されるものであり[(4)]、ここでは川畑編年に準拠する形で年代的な位置づけを確認してみたい。そこで、川畑が「腸抉柳葉Ｃ式」と分類したもののうち、三角縁神獣鏡との共伴から前期古墳出土のものとして認められる１・２式についてその属性を整理してみる。

第３図と第４図に鏃身長値と腸抉長値を示す[(5)]。川畑が指摘するとおり、腸抉の深化を鉄器加工技術の進歩の結果とみてよければ､浅→深という変化の方向を想定しうる。本古墳例は個体差があるものの、最大でも 0.4㎝程と最も浅いことから、古相に位置づけられる。

鏃身長は、他の古墳例ではほとんどの個体が 4.5㎝以上を測るのに対し、本古墳例は最大でも 3.6㎝と１㎝程小さい｡川畑は１式と２式の前後関係を検討するにあたり鏃身長の変化を指標に用いていない。たしかに、１式と分類した個体の中にはⅡ式よりも大きい個体があり、組列が成立し難いのは事実である。ここでは、１・２式→３式→４式と順次、鏃身の長身化が進行することを考慮し、最も小さな本古墳例については１式・２式の中で古相に措定しておく。

鏃身断面形は菱形のものとレンズ状のものとに分類できる。菱形の断面形に柳葉式や定角式などいわゆる「有稜系」鉄鏃の影響を認めるならば、前者が古相であると想定される。ただし、錆化のため判然としない個体も多いため、あくまでも副次的な要素として捉えるのが適切であろう。

鏃身下半については直線的なものと末広がりなものとに分類されるが、単独で変化の方向性を見定めることはできない。

以上の属性について組合せを示したのが第１表である。変化の方向性については今後、検討する余地があるものの[(6)]、少なくとも、各々の属性が古相を示す本古墳出土例については、腸抉三角式の最古段階と評価できる（第５図）[(7)]。

したがって、編年的位置づけについては、東之宮古墳例や真名井古墳例よりも古相ととらえることができ、前期前半段階に位置づけられる。

最後に口巻についても触れておきたい。川畑純はこれまでほとんど研究されることのなかった前期・中期古墳副葬鏃の矢柄との接続部分（口巻や根挟み）について詳細な分析を進めた。そのうち口巻の長さについては､「全体的な傾向として漸次的に口巻きを施す長さが長くなっている」と述べたうえで、雪野山古墳や紫金山古墳の事例を例外としながらも、Ⅰ期およびⅡ期の古段階では長さは２㎝未満に収まるとしている（川畑 2010)。

本例については､口巻長は柳葉式で約 1.8㎝､腸抉三角式Ａ類で１㎝程、Ｂ１類とＢ２類では 1.6㎝程、長三角式で 0.8㎝を測る。長さに幅はあるものの、いずれも２㎝に満たないことから、最も古い段階に位置づけることができる。これは、先に導きだされた鉄鏃そのものの年代観とも齟齬をきたさない。

弘法山古墳出土の銅鏃・鉄鏃　以上、柳葉式と腸抉三角式について水野編年、川畑編年に準拠しながら検討を進めた。その結果、個々の位置づけについては、上限の把握に課題を残すものの、古墳時代前期

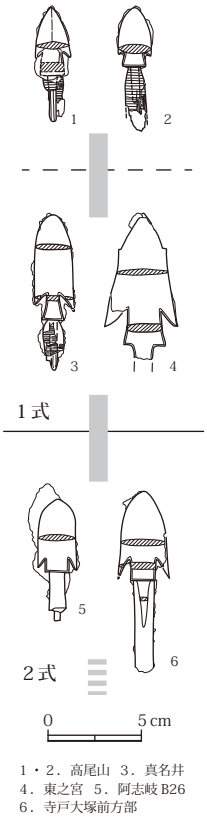
前半に比定されるとともに、腸抉三角式については同型式の中で最古相に位置づけられることが明らかになった。

しかしながら、柳葉式の年代を検討するにあたって参照した水野編年は、畿内地域の資料を中心に検討されたものである。東日本において同様の位置づけが妥当であるかを確認するためには、東日本における出現期古墳との比較が重要となる。そこで、東日本の出現期古墳のうち、他の副葬品組成においても共通点が多い弘法山古墳の鉄鏃、銅鏃について型式と組成の両面からその先後関係を検討してみたい。

報告書では銅鏃1点、鉄鏃20点が図化されている（斎藤編 1978）。そのうち残存状況が良好なものを中心に12点についてあらためて作成した実測図を第6図に示す[8]。

1は柳葉式の銅鏃である。報告書の第23図1に該当する。鏃身長3.4㎝と小ぶりなつくりで、鏃身下半には屈曲が認められる[9]。

2～7は柳葉式の鉄鏃である。第23図2～6・10に該当する。2・3は篦被をもつ。厚手のつくりで、鏃身中央部に鎬が確認できる。報告書所載の実測図では篦被が円形に表現されているが、観察の結果、隅丸方形であることが判明した。4は鏃身長2.5㎝を測る非常に小さな個体である。鏃身尻は弧を描き、不明瞭ながら茎部との間に段差をもつ。5・6は柳葉式と認定したが､錆化のため判然としない。6については定角式である可能性もある。7は扁平な柳葉式である。鏃身下半は強く屈曲せず、錆化のため明確ではないが、茎部との間には段差をもたないようである。



1・2．高尾山　3．真名井
4．東之宮　5．阿志岐B26
6．寺戸大塚前方部

第5図　腸抉三角式の変遷（S=1/4）

8～11は定角式の鉄鏃である。第23図7・8・12・13に該当する。8・9は刃部にフクラをもつ。10については報告書では柳葉式として図化されているが、鏃身部の断面形状が長方形を呈することから定角式と判断した。11は他の個体より矩形で、観察の結果、刃部に裏すきをもつことが判明した。

12はいわゆる椿葉式の鉄鏃である。第23図17に該当する。残存長5.8㎝を測る大型品で、茎部との間に段差をもたない。同形態のものが他に7点あり、うち3点は2個体が錆着していた。

上述の観察結果を踏まえ、高尾山古墳例との相違点のうち、編年的位置づけの手がかりとして重要なものを示すと次のとおり列挙される。

①弘法山古墳出土例は柳葉式に篦被をもつものが含まれる。

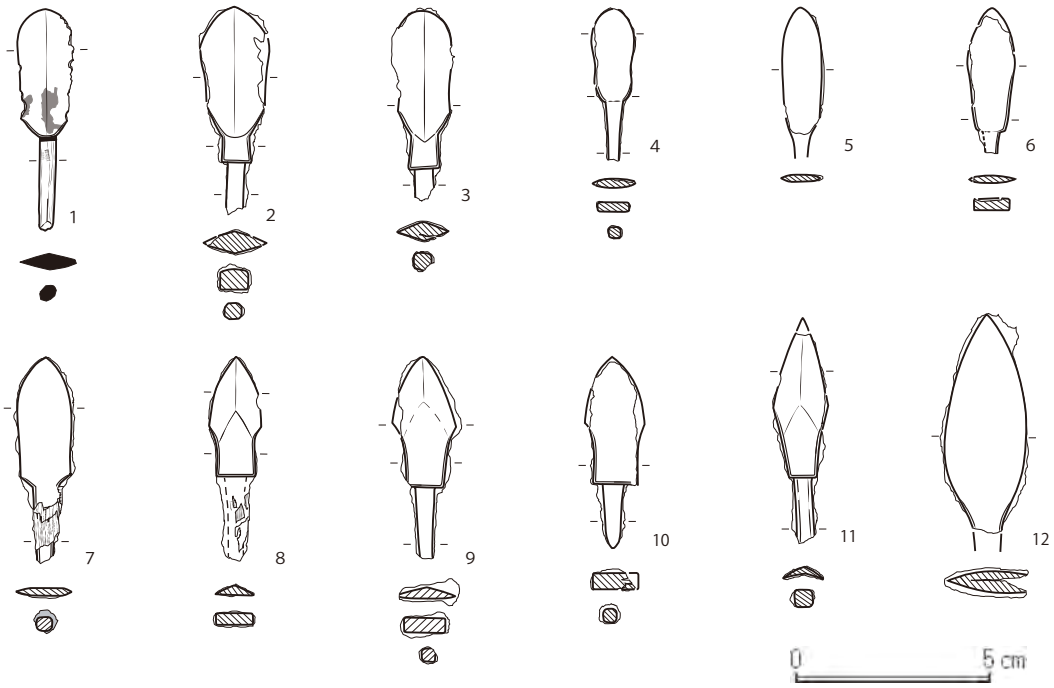
②定角式や椿葉式といった高尾山古墳にはない鉄鏃が確認できる。

③鏃の組成は細別分類で7型式を超え、高尾山古墳例よりもヴァリエーションが認められる。また法量の個体差も大きい。

①については、柳葉式は篦被をもつものが新相とみられてきた。しかしながら、亜種頸部（篦被）をもつものは時期に限定されないと水野は指摘している。加えて、ホケノ山古墳の腸抉柳葉式銅鏃にはすでに篦被をもつものが存在している。つまり、出現段階から両タイプが共存していると考えるのが妥当であり、篦被の存在をもって新相ととらえるのは慎重であるべきであると考える。

また、②のうち、椿葉式は板状で茎部に段を持たない。これは、松木武彦が指摘する「有稜系鉄鏃」出現以前の弥生時代的な要素を持つものであり、古相を示しているといえる。

③については､相対的に規格性が高い高尾山古墳例を新相と捉えることも可能である。しかしながら、これに関してはむしろ流通から副葬にいたる経路の違いを示している可能性が高い。すなわち、高尾山



第６図　弘法山古墳出土の銅鏃・鉄鏃

古墳例は特定の工房において製作した矢をそのまま一括で副葬したものと推定できるのに対し、弘法山古墳例は外形の類似する鏃を「寄せ集め」て副葬した可能性が高い。数本から数十本単位で鉄鏃とともに副葬されるのが通例の柳葉式銅鏃が１点しか存在しないという事実も上述の文脈の中で理解できる。

以上より、組成の上で一部、弥生時代的な鉄鏃を含む弘法山古墳例のほうが、若干先行するものと捉えられる。

小　結　以上、高尾山古墳出土の鉄鏃について検討をすすめてきた。その結果、柳葉式については上述の検討結果から古墳時代の前期前半段階に位置づけた。また、腸抉三角式についても同段階に位置づけたが、現状では本例が最古例であることから、その系譜的な理解が今後の課題となろう[(10)]。類例の増加を待って改めて検討する機会を持ちたい。

本文中でも指摘した通り、本古墳の鉄鏃は古墳時代前期前半の中で、その上限をどこまで遡及させることができるのかが、今後の課題として残された。これ以上の詳細な時期の追求は、他の副葬品の年代観との整合性をもって判断すべきと考える。ただ、少なくとも本古墳の鉄鏃は、かつて松木武彦が提唱した「有稜系」の鉄鏃（松木 1991・1996）に該当するものであり、古墳時代の技術系譜の範疇で捉えることが可能である。組成についても大量副葬とはいえないまでも、同型式を数十点単位で副葬するあり方は、弥生時代というよりはむしろ古墳時代に特徴的な様相である。したがって、古墳時代になって定型化する鉄鏃群の範疇で理解するのが妥当であろう。　（平林大樹）

ｅ．副葬品からみた高尾山古墳の年代

副葬品の年代　以上に検討してきた銅鏡、鉄槍および鉄鏃の編年的位置づけを踏まえ、それらが全体として示す年代を考えてみたい。まずは、各副葬品の編年的位置を改めて確認しておこう。

銅鏡は上方作系浮彫式獣帯鏡であり、岡村分類六像式Ｂ類、山田分類六像式Ⅱ段階に該当するものと考えられる。同種の鏡の製作年代は２世紀後半とみられており、日本列島への流入年代にさほどの時間差を見積もらないとするならば、本古墳に副葬された年代もそれと大きくかけ離れたものにはならない

であろう。また、本鏡は破砕鏡とみられるが、破砕鏡の副葬は布留０式期をもってほぼ終焉しており、この点は本鏡の副葬行為にかかわる年代的傾向を示す事実として重要であろう。

鉄槍のうちの１点は、極めて特異な有樋槍身で、刃関双孔をともなうことから本来は剣身であったと想定される。樋の直接的な系譜は明らかではないが、刃関双孔の存在もあわせてみると、弥生時代の鉄剣に通じる特徴をもつことは明らかである。また、良好に遺存する柄端部は、豊島分類による糸巻き底辺型とみられ、その盛行期は弥生時代後期終末から古墳時代前期初頭に求められる。もう１点の鉄槍は豊島分類による直線型Ｂ類に該当し、古墳時代前期後半に盛行する柄端部のつくりとなっているが、その初現的な事例となりうる可能性がある。

鉄鏃は、柳葉式、腸抉三角式、長三角式によって構成されている。そのうち、柳葉式は水野分類Ｂ１類に該当し、古墳時代前期前半段階に位置づけられる。腸抉三角式は川畑分類による「腸抉柳葉Ｃ式」にあたり、同種の鉄鏃の中ではもっとも腸抉が浅く、鏃身長も小さいことから、その最古段階に位置づけられる可能性が高い。また、いずれも口巻長が２㎝未満となっており、前期古墳副葬鏃との比較においては最も古い特徴を備えている。これらの鉄鏃を全体としてみると、奈良県ホケノ山古墳、長野県弘法山古墳の鏃群よりも後出的な組成を示しており、同種の鉄鏃をまとめて副葬するあり方には、古墳時代になって定型化する鉄鏃群の様相が窺える。

本古墳から出土した副葬品については、現時点において以上のような編年的理解が可能である。それらが全体として指し示す年代は､古墳時代前期前半の範囲にあるとみて差し支えないであろう。問題は、その範囲の中における年代的な位置であるが、上述のように鉄鏃の組成には最古相の一群と区別される様相が指摘できる。また、鉄槍の柄端部における直線型Ｂ類の存在を後出的な要素とみることも不可能ではない。しかしながら、これらの理解の基礎となる資料は限られており、その上限年代についてはさらなる資料の充実をまって再検討をおこなう余地がある。一方で、樋と刃関双孔をともなう特異な鉄槍は、弥生時代とのつながりを窺わせる極めて古い特徴を備えている。その製作年代が２世紀後半に求められる上方作系浮彫式獣帯鏡の存在もあわせて考えたとき、本古墳出土の副葬品群は、前期前半の中でもより古い段階に属する可能性が高いと考えられよう。

副葬品の組成　こうした理解は、副葬品組成の比較からも裏付けることができる。第２表は、古墳出現期の東日本における代表的な墳墓の副葬品をまとめたものである。また、比較の意味で高尾山古墳の副葬品についても表示している。

この表に明らかなように、前方後方形の墳丘形態をとる長野県弘法山古墳（斎藤編 1978）、千葉県高部 30 号墳・同 32 号墳（西原 2002）では銅鏡が出土しており、前方後円形の千葉県神門３・４・５号墳（田中 1977・1984）では銅鏡の出土が認められない。また前者のうち、弘法山古墳と高部 32 号墳の銅鏡は四像式の上方作系浮彫式獣帯鏡であり、高部 32 号墳のそれは破鏡として出土している。さらに鏡種（二神二獣鏡）は異なるものの、高部 30 号墳の銅鏡は破砕鏡である。

このように、東日本の古墳出現期に位置づけられる前方後方形の墳墓から出土した銅鏡は、その鏡種や取り扱いにおいて高尾山古墳との共通性が認められる。また、副葬品全体の組成としてみた場合、高尾山古墳と弘法山古墳は、銅鏡に加えて玉類、武器類（鉄槍、鉄鏃）、工具類によって構成されるという点で極めてよく似ている。この両古墳は、ともに墳丘長六十数ｍという点でも共通しており、墳丘長 30 ｍ台の高部 30・32 号墳において一部の副葬品目が欠落する状況は、出現期の前方後方墳における墳丘規模と副葬品組成の対応関係を予見させるものである。

以上にみた副葬品組成の類似は、高尾山古墳が弘法山古墳や高部 30・32 号墳と同様の年代的位置にあることを示すものであろう。

第２表　東日本における古墳出現期の副葬品

墳墓名	所在地	墳形	規模（m）	副葬品					
				鏡	玉	鉄剣	鉄槍	鏃	工具
高尾山	**静岡県**	■	**61.7**	**浮彫式獣帯鏡１（破砕鏡）**	**勾玉１**	**－**	**2**	**鉄鏃 32（柳葉、腸抉三角、長三角）**	**鉇１**
弘法山	長野県	■	63	浮彫式獣帯鏡１	管玉２ ガラス小玉 738	1	2	銅鏃１（柳葉） 鉄鏃 24（柳葉、定角）	鉄斧１ 鉇１
高部 32 号	千葉県	■	32	浮彫式獣帯鏡１（破鏡）	－	－	2	－	－
高部 30 号	千葉県	■	34	二神二獣鏡１（破砕鏡）	－	2	－	－	－
神門５号	千葉県	●	(42.5)	－	ガラス小玉６	1	－	鉄鏃２（多孔）	－
神門４号	千葉県	●	(49)	－	管玉 31 ガラス小玉 394	1	1	鉄鏃 41（定角）	－
神門３号	千葉県	●	(53.5)	－	管玉 10 ガラス小玉 103	1	1	鉄鏃２（柳葉）	鉇１

●：前方後円墳、■：前方後方墳／括弧内の数値は復元値。

古墳の年代　高尾山古墳の周溝内からは多量の土器が出土している。また、墳頂部からは埋葬施設上に据え置かれた状態で壺形土器などが出土している。別に詳しく論じられているように、それらの年代的な範囲は大廓Ⅰ式から同Ⅳ式に及んでいる。いま、そのすべてが本古墳の祭祀に使用されたものと理解したとき、ここで検討してきた副葬品の年代とはどのような関係になるのであろうか。

副葬品との関係で大きな問題となるのは、墳頂部出土の土器群である。その編年的位置は大廓Ⅲ式（段階３）の範疇であり、周溝内出土の特異な小型土器群も同時期に位置づけられるという。こうした理解は、おそらく布留０式期に接点をもつであろう副葬品群の年代との整合性が高い。一方で、それに先行する土器群との年代的な隔たりは、決して小さくはない。

本古墳での祭祀専用につくられたとみられる小型土器群は、本古墳における最も重要な祭祀にかかわっていた可能性が考えられる。その帰属年代と副葬品の年代に一致がみられるとすれば、それこそが本古墳における埋葬時点の年代を示しているように思える。そのように推定すると、それに先行する土器群については、墳墓の選地から造営にかかわる長期的な祭祀にかかわるものと想定せざるをえなくなる。そもそもどの時点をもって墳墓の年代ととらえるのか、年代幅をもつ土器を多量に出土する当該期の墳墓について、さらなる検証を重ねていく必要がある。副葬品の内容が明らかな高尾山古墳は、そうした年代決定上の方法論的課題にも重要な資料を提供するものである。

ｆ．おわりに

以上、編年的理解を中心に高尾山古墳の副葬品について検討してきた。個々の副葬品の位置づけには精粗があり、それによって想定される年代の幅も一様ではないが、全体としてみれば、本古墳の副葬品は古墳時代前期前半の中でも古い様相を示すものとみてよいだろう。

本古墳の副葬品には、弥生時代的な要素と古墳時代的な要素が混在しているように見受けられる。ここでは、それぞれの性格についてさらに踏み込んだ検討は果たせなかったが、今後の議論においては、副葬品組成と墳丘規模の両面において本古墳と長野県弘法山古墳が近似している点には重大な関心を払う必要があろう。新たに判明した本古墳の副葬品は、最古段階に位置づけられる前方後方墳の成立と展開に共通の史的背景が存在したことを十分に窺わせるものである。　　（滝沢　誠）

註

1．繊維の付着はⅠ群では 4・9・22・24 で、Ⅱ群では 6 で確認できる。

2．川畑は「鏃身部側縁と茎関が S 字カーブを描く一群のうち鏃身部上半で鏃身部幅が最大となるもの」をその基準としている。

3．また、南部裕樹は寺戸大塚古墳出土の鉄鏃を検討するなかで、「柳葉状の平面形に逆刺を有する型式」を「平根系腸抉柳葉式」と呼称し、類例を提示した。そして時期については、古墳時代前期後半以降に多くみられるとした。（南部 2001）。

4．川畑、南部両氏とも「腸抉柳葉式」と呼称しており、同一組列上に位置づけるのであれば、研究史の尊重という点からも「腸抉柳葉」とするのが望ましい。しかしながら、本例は S 字カーブを描かず、「柳葉」という言葉は鏃身の形状と乖離しているといわざるをえない。そこで、本例については「腸抉三角」という名称を用いている。

5．鏃身ないしは腸抉が完存している個体のみ計測の対象とした。したがって、散布図に示されたドット数はどの出土点数よりも少ない。ただ、欠損している個体についても、同型式における規格性の観点からみて、完存している個体よりも著しく長くなることは考えにくい。よって、分析結果に特に影響をあたえるものではないと考える。

6．三池平古墳例は一部に浅い腸抉、末広がりの鏃身下半部、稜を持つ個体がある。川畑の変遷観にしたがえば、末広がりの鏃身下半をもつことから腸抉柳葉Ｃ式の 1 式に該当し、古相を示す。一方で古墳の年代そのものは前期後半であり、腸抉柳葉Ｃ式の出土古墳の中では新しい段階に位置づけられる。このように齟齬が生じている事例もある。ともあれ、今回提示した事例の多くは実見を果たせていないため、ここでは詳細な検討を見送ることにしたい。

7．紙幅の関係で詳細な説明は省略するが、伴出遺物について触れておく。川畑は鏡を用いて型式組列の検証を試みている。それによると 1 式は舶載三角縁神獣鏡のⅤ段階（岸本 1995）と、2 式については仿製三角縁神獣鏡Ⅰ－Ｂ・Ⅰ－Ｃ類（福永 1994）と共伴するとしている。いわゆる「伝世」が認められる事例もあるため、入手から副葬までの時間差は当然考慮されなければならないが、伴出した上方作系浮彫式獣帯鏡 1 面を三角縁神獣鏡に先行するものと位置づけることができるのであれば、さしあたって鉄鏃の変遷観との整合性は確保できるといえる。また、阿志岐Ｂ 26 号墳については十字鏑をもつ鉄鏃が共伴していることから前期中葉以降に位置づけられる。

8．2010 年 9 月に松本市立考古博物館において資料調査を実施するとともに、再実測資料について報告書掲載の許可を得た。調査に際しては、草間厚伸氏に多大なご配慮を賜った。記して感謝の意を申し上げたい。

9．水野は弘法山古墳の銅鏃を権現山 51 号墳出土例とともに、丸尻をもつＡ 1 類に位置づけているが（水野 2008）、観察の結果、屈曲をもつ鏃身尻であることが判明した。

10．腸抉三角式の系譜については、あくまで推測の域を出ないものの、三方に伸びた鏑や断面長方形を呈する鏃身下半に、定角式との親縁性を認めてよいならば、本型式を定角式の派生形態として位置づけることができよう。また、型式学的なヒアタスが問題となるものの、末広がりとなる鏃身下半を篦被が変容した結果と解釈するならば、篦被をもつ腸抉柳葉式にその祖型をたどることも可能であろう。この想定が正しければ、広島県弘住 3 号墳出土例は本古墳例に先行する事例となる可能性がある。

引用参考文献

伊東信雄・伊藤玄三 1964『会津若松史別巻 1 会津大塚山古墳』会津若松市

大谷宏治 2010「間門松沢第 1 号墳出土の刃関双孔鉄剣について」『富士山・愛鷹山の古墳群』(財) 静岡県埋蔵文化財調査研究所

岡村秀典 1992「浮彫式獣帯鏡と古墳出現期の社会」『出雲における古墳の出現を探る－松本古墳群シンポジウムの記録－』出雲考古学研究会

川畑　純 2009「前・中期古墳副葬鏃の変遷とその意義」『史林』第 92 巻第 2 号

川畑　純 2010「古墳副葬矢鏃の生産・流通・保有・副葬」『古代学研究』第 185 号

岸本直文 1995「三角縁神獣鏡の編年と前期古墳の新古」『展望考古学』考古学研究会

斎藤　忠編 1978『弘法山古墳』松本市教育委員会

白石太一郎・森下章司・赤塚次郎 2005『史跡東之宮古墳調査報告書』犬山市教育委員会

鈴木　勉・松林正徳 1994「有樋鉄戈の樋加工技術について」『古文化探叢』第 33 集 九州古文化研究会

潮見　浩 1982『東アジアの初期鉄器文化』吉川弘文館

田中新史 1977「市原市神門 4 号墳の出現とその系譜」『古代』第 63 号 早稲田大学考古学会

田中新史 1984「出現期古墳の理解と展望－東国神門 5 号墳の調査と関連して－」『古代』第 77 号 早稲田大学考古学会

筑紫野市教育委員会 1985『阿志岐古墳群Ⅱ』

豊島直博 2008「古墳時代前期におけるヤリの編年と流通」『東国史論』第 22 号 群馬考古学研究会

内藤　晃・大塚初重編 1961『三池平古墳』庵原村教育委員会
南部裕樹 2001「6 銅鏃・鉄鏃」『寺戸大塚古墳の研究Ⅰ 前方部副葬品研究編』（財）向日市埋蔵文化財センター
西原崇弘 2002『高部古墳群Ⅰ－前期古墳の調査－』木更津市教育委員会
福永伸哉 1994「仿製三角縁神獣鏡の変遷と製作背景」『考古学研究』第 41 巻第 1 号
藤原妃敏・菊池芳朗編 1994『会津大塚山古墳の時代』福島県立博物館
松木武彦 1991「前期古墳副葬鏃の成立と展開」『考古学研究』第 37 巻第 4 号
松木武彦 1996「前期古墳副葬鏃の成立過程と構成－雪野山古墳出土鉄・銅鏃の検討によせて－」『雪野山古墳の研究 考察編』八日市市教育委員会
水野敏典 2008「古墳時代前期柳葉式鉄鏃の系譜」『橿原考古学研究所論集』15
山田俊輔 2006「上方作系浮彫式獣帯鏡の基礎的研究」『早稲田大学會津八一記念博物館研究紀要』第 7 号 早稲田大学會津八一博物館
原　嘉藤 1982「中山 36 号古墳」『長野県史 資料編 中信』長野県史刊行会
原田大六 1961「17 号遺跡の遺物」『続沖ノ島　宗像神社沖津宮祭祀遺跡』吉川弘文館

挿図出典

第 1 図：2・原 1982、3・斎藤編 1978、4・西原 2002 より。第 2 図：原田 1961 より。第 3・4 図：平林作成。第 5 図：3 については川畑 2009 第 11 図より、その他は各報告書より再トレース。第 6 図：滝沢・平林実測。平林トレース。

4．高尾山古墳周辺における集落の動態と古墳築造の背景

佐藤祐樹

a．はじめに

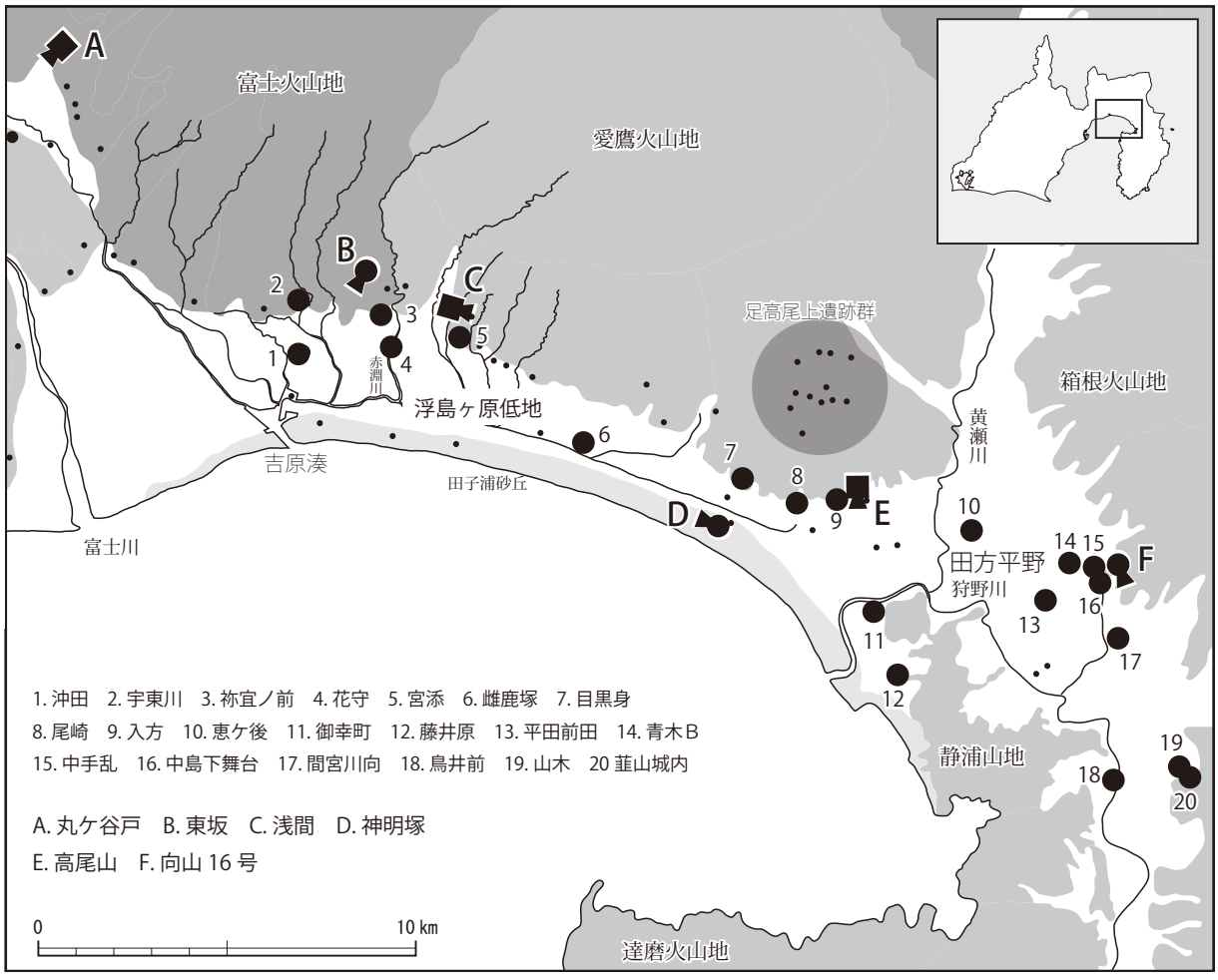
古墳時代とは、言い換えれば前方後円墳の時代であり、古墳の諸要素の詳細な分析がその被葬者を考える上で重要な視点であることは当然のことであるが、同時期の集落分析もまた、それと同じように重要なことであり、そこから導き出される成果を無視することはできない。

高尾山古墳の埋葬施設から斜縁浮彫式獣帯鏡や鉄鏃などの副葬品のほか、墳丘上（埋葬施設上面）や周溝から数多くの土器が出土している。出土土器は大廓Ⅱ式以降のものが多く、本稿では特に大廓式前半（渡井 1997・2002）における集落の動態から、高尾山古墳築造の背景に迫るものである。

b．地理的環境と周辺の遺跡

地理的環境については、報告書の冒頭でも述べられているため、詳細は譲ることにするが、本論では特に高尾山古墳の西側一帯にかつて存在したラグーン地帯「浮島ヶ原低地」に注目していくこととする。

浮島ヶ原低地は、愛鷹火山地の南側に位置し、南方には駿河湾、そして富士川河口から沼津市狩野川まで続く田子浦砂丘に取り囲まれ、その愛鷹火山地と田子浦砂丘に挟まれた低地部のことをいう。現在は水田地帯が広がっているものの、近世ではこの低地部に富士川や愛鷹山の河川が注ぎ込み、最終的に



第１図　高尾山古墳周辺における集落と古墳分布

沼川という河川のみによって駿河湾に水が排出されたため、大雨や高潮があると浮島ヶ原低地全域の20平方キロメートルが一大湖沼となる土地であったという。比較的安定的に耕作が行えるようになったのは昭和18年、沼の排水を目的として田子浦砂丘上に昭和放水路が、昭和28年から昭和41年にかけての田子浦港（旧吉原湊港）、昭和38年に第二放水路が造られたことによるところが大きい（富士市立博物館1984）。

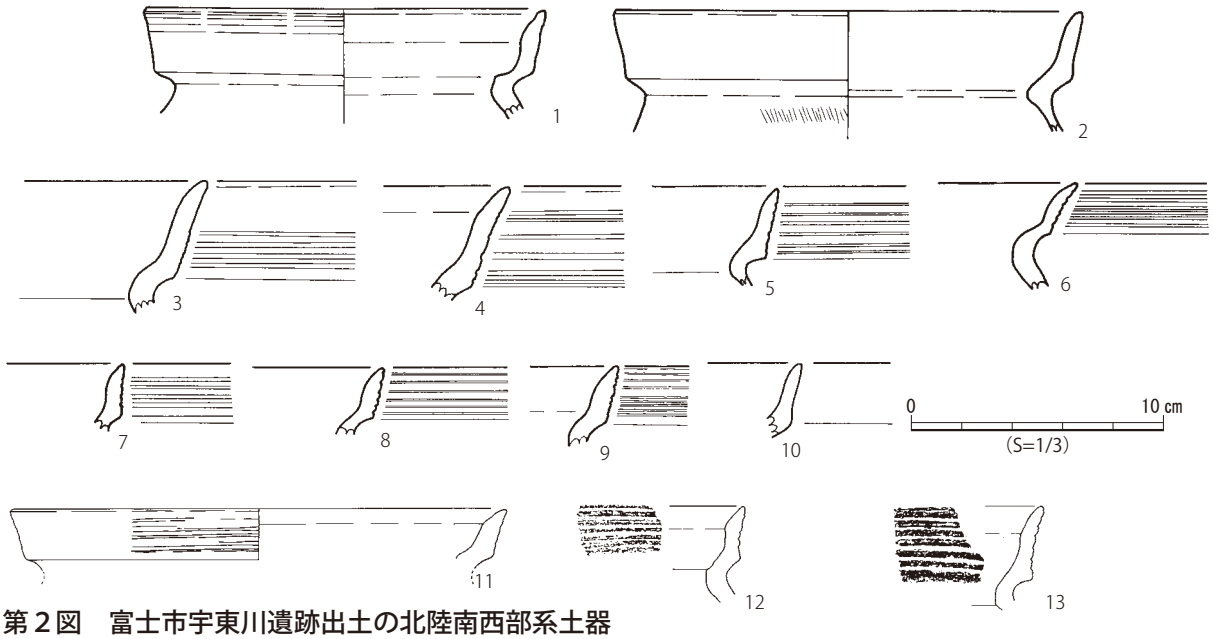
弥生時代後期から古墳時代前期にかけての集落は、この浮島ヶ原低地を取り囲むように存在し、密接な関係を持ちながら地域を形成していたものと考えられる（佐藤2009・2010）。それらの地域内ネットワークの存在に欠かせない主要な「路」と考えられるのが、浮島ヶ原低地と愛鷹火山地の境に存在し、現在、富士市から沼津市を経て三島市に至る「静岡県道22号三島富士線」（通称「根方街道」）であったと考えられる。また、後に述べるように浮島ヶ原低地における舟を使用した内湾交通も存在した可能性がある。前述の通り、本論では高尾山古墳築造の背景について、地域内における社会構造の成熟について評価していくため、以下では、大廓式前半における代表的な遺跡を紹介しておくこととする。

沖田遺跡　沖田遺跡は、かつての吉原湊の北側、浮島ヶ原低地の西端に位置する。平成8・10年に行われた調査では、奈良時代の条里水田の畦畔が検出され（富士市教委2000）、また、昭和38年には岳南排水路埋設工事に伴って、弥生時代中期に位置づけられる土器片が出土している（富士市教委1986）。遺跡の存在する土地の地盤が沈下しているため、弥生時代中期の土器が出土したのは地表下7.4mからであり、現在までのところ遺跡の詳細については明らかとなっていない部分もある。しかし、これまでに採集された遺物や試掘調査により出土した遺物量は多く、特に大廓式の遺物はまとまって出土している。大廓式前半段階における明確な外来系土器の出土はないものの、その立地から、「低地占地型集落」「交易拠点型集落」[註1]として位置づけられ、丘陵上における宇東川遺跡などと密接な関係であったことが窺える。

宇東川遺跡　宇東川遺跡は、沖田遺跡北側の丘陵先端部上に立地する。かつて行われたA地区第1・2次調査において、第67号住居址からは、S字甕とともに北陸地方南西部に出自を持つと考えられる有段口縁をもつ甕の破片が数点出土している（富士市教委1991）。静岡県内における北陸系土器については「在地でかなり変容した北陸系」が多い状況の中で、「北陸の月影系に最も近い」と評価されている土器である（赤澤2003）。

加えて、近年、隣接した箇所の発掘調査が実施され、10点の北陸南西部系土器の甕の口縁部が出土している（富士市教委2012）。いずれも大廓式前半に位置づけられ、これらのうち半数以上は、口縁部外面に明瞭な擬凹線が見られることから、これまで知られていた土器と同様、在地での変容があまりない資料として注目される。加えて、前述の沖田遺跡のすぐ北側に位置することから、海上交通を利用した他地域との交流の中で「臨海台地上占地型集落」としての役割をもつ重要な位置を占めていたものと考えられる。

祢宜ノ前遺跡　祢宜ノ前遺跡は浮島ヶ原低地を眼下に望み、沼津・三島方面に続く根方街道沿いの丘陵上に立地する。市立吉原商業高校（現、富士市立高等学校）の屋外運動場改築に伴い発掘調査が行われ（富士市教委2008a）、大廓Ⅱ式から中見代Ⅰ式までの竪穴建物15軒が調査されている。集落形成段階における第15・22・25号住居址などを見ると、在地の土器型式を基本としながら、東海西部系土器が比較的多く出土しており、他地域との密接な関係の下に集落が配置されたとも考えられる。また、遺跡は、丘陵上にとどまることなく、根方街道における緩斜面一帯に広がっていると考えられ、その南には、「須津川・赤淵川合流扇状地」が浮島ヶ原低地に飛び出すように存在する。その微高地上には沖田遺跡と同じような性格を有すると考えられる花守遺跡が立地しており、【宇東川遺跡－沖田遺跡】、【祢宜ノ前遺跡－花守遺跡】という【臨海台地上占地型集落－交易拠点・低地占地型集落】という有機的な



第２図　富士市宇東川遺跡出土の北陸南西部系土器

つながりが存在した可能性がある。

宮添遺跡　宮添遺跡は前述の祢宜ノ前遺跡の東方約２キロに位置し、同じく浮島ヶ原低地を眼下に望む丘陵上に立地し、これまでの農地改良などに伴い比較的広い面積が調査されている（富士市教委 2008b・2009・2010・2011）。宮添遺跡が形成され始めるのは雌鹿塚式後半で、その段階と推定される銅鏃や銅釧が出土することから、他地域との交易が想定される。中見代Ⅰ式まで継続する集落において、実は大廓式前半の遺構はあまり明確ではないが、これについては、丘陵奥の平椎遺跡において集落が再開することと関係しており（佐藤 2010）、何らかの外的要因から、弥生時代後期から継続する集落が、浮島ヶ原を見下ろす臨海台地上から丘陵奥の平椎遺跡に移動せざるをえなかったということは、前述の宇東川遺跡・祢宜ノ前遺跡などの集落形成期における外来的要因の関与と対照的である。

ほかにも、浮島ヶ原周辺には雌鹿塚遺跡（沼津市教委 1989・1990）、目黒身遺跡（沼津市教委 1970）、尾崎遺跡（沼津市教委 2000）などが臨海台地上占地型集落や交易拠点型集落として捉えられ、大廓式前半における外来系土器を出土する遺跡が多数存在する。以下、入方遺跡（沼津市教委 1999）に注目して浮島ヶ原低地周辺の集落の状況についてまとめていきたい。

c．入方遺跡と浮島ヶ原低地の遺跡

入方遺跡は高尾山古墳の西方約 200 mに位置し、昭和 58 年、沼津市立明治史料館建設に伴い約 160 ㎡が調査され、溝４条、池状施設１基、湧水遺構１基が検出・調査されている。ここで注目されるのは SD ２と SD ３の存在である。SD ２は東西方向に一直線に伸び、断面Ｕ字状を呈しており、雌鹿塚式から大廓式の土器が出土している。さらに、SD ２の南側には平面がＬ字に折れ曲がる SD ３が検出されており、この溝の底面付近からもおびただしい量の土器が出土している。SD ２と SD ３は湧水遺構と呼ばれる遺構でつながっている。

さて、近年、篠原和大氏により、静岡県内における大型建物、方形区画を有する遺跡に注意が払われるようになった（篠原 2007）。浜松市大平遺跡や静岡市汐入遺跡などの様相から周辺集落と階層的な構造をもつ「首長居館」の存在が推定されるようになり、古墳出現の背景に迫るものとして注目される。入方遺跡の溝がそれにあたるのか断言できないものの、高尾山古墳との関係を考える上で重要な遺構であると考えられる。

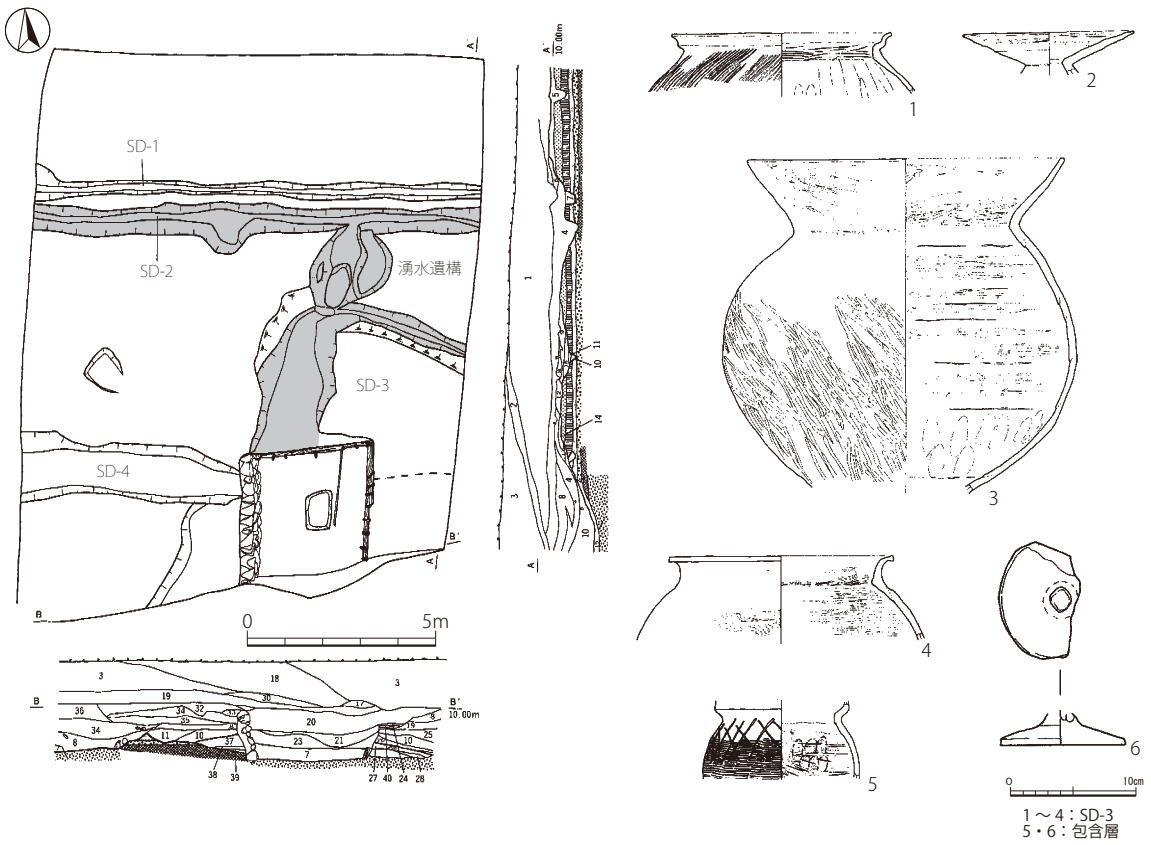
続いて、入方遺跡の溝から出土した土器について見ていくと、その組成が高尾山古墳と似ていることにも気付く。大廓式前半の在地の土器型式が主体的でありながら、東海地方西部、近江、北陸系の土器も一定量出土している。また、鏡を模倣したと考えられる土製品が出土していることも興味深い。

以上のように、高尾山古墳に隣接して存在する同時期の入方遺跡からは、「首長居館」の存在を推定させるような遺構が検出され、そこからは高尾山古墳同様、東海西部・近江・北陸系の土器が複数出土している。浮島ヶ原低地の縁辺では、大廓式前半（特に大廓Ⅱ式頃）、低地を望む台地上に集落が形成されている。それらの集落が入方遺跡と階層的に異なるものであったかは明らかではないが、小単位ごとに【臨海台地上占地型集落】（宇東川遺跡・祢宜ノ前遺跡・目黒身遺跡・尾崎遺跡など）－【交易拠点・低地占地型集落】（沖田遺跡・花守遺跡・雌鹿塚遺跡など）が有機的に結びつき、さらにそれぞれのまとまりが浮島ヶ原低地で【拠点型集落】（入方遺跡）を中心としたネットワークで構造的に結びつくことでひとつの社会を形成しているという構図を描くことができる。

では、高尾山古墳が立地する浮島ヶ原低地周辺の東方に存在する田方平野の状況はどうであったのか、外来系土器に注目して概観しておくこととする。

d．田方平野における集落構造

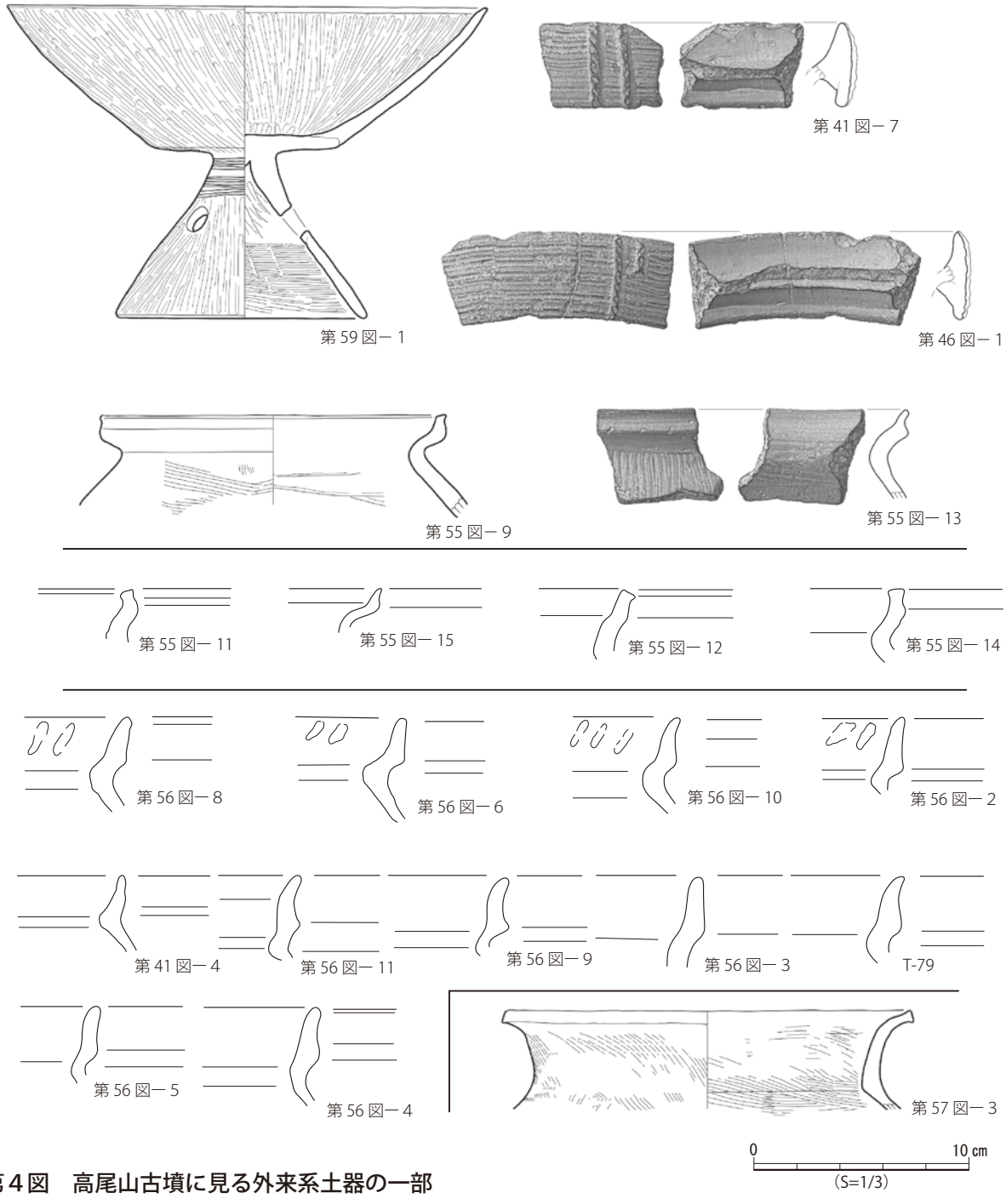
駿河における外来系土器の状況については既に岩本貴氏が集成を行っており、近畿地方や、北陸地方などの外来系土器が大廓式前半に多く出土することや、後半段階になると出土が減少することなどが明らかとなっている（岩本 2007）。また、本報告書中でもその出土遺跡について詳細に触れている。加えて、県内における北陸系土器を集成した松井一明氏（松井 1999）や鈴木敏則氏（鈴木 2004）により、田方平野においては北陸系土器に加え、タタキ甕や庄内甕など多くの畿内系土器が出土していることが明らかとなっている。



第３図　沼津市入方遺跡の溝状遺構と出土土器

その中で特に注目されるのは、駿東郡清水町の恵ヶ後遺跡の存在である。愛鷹山東麓と箱根山西麓の谷間を流れる黄瀬川と伊豆半島を北流する狩野川の合流付近の微高地上に立地する。近年、数次にわたる調査が行われているが（清水町教委 2010）、その中でも 2003 年度に行われた第 1 次調査の成果は、田方平野の状況を考える上で最重要成果である。未だ、正式な報告書の刊行がなく、成果の一端しか見えないが、S 字甕 A 類や畿内の庄内甕、V 様式系のタタキ甕が大量に出土している（渡井 2007・高尾・山本・渡井 2010・岩本論考参照）。この状況が田方平野における一般的な集落様相とは考えられないが、畿内周辺部、東海西部周辺部における土器がまとまって出土するという事実は、大廓式前半段階に、それらの地域との密接な交流が存在したことを示している。

また、田方平野では弥生時代の豊富な木製品が多量に出土したことで著名な伊豆の国市山木遺跡（韮



第４図　高尾山古墳に見る外来系土器の一部

山村 1962 ほか）や隣接する韮山城内遺跡（静岡県埋蔵文化財調査研究所 1997）からも恵ヶ後遺跡ほどの量ではないが、畿内系土器や東海西部系・北陸系土器が出土している。加えて、狩野川の河口から山木・韮山城内遺跡に至る流域では沼津市藤井原遺跡（沼津市教委 1997・2002）、沼津市御幸町遺跡（沼津市教委 1998）を皮切りに、三島市平田前田遺跡（静岡県埋蔵文化財調査研究所 1998a）、三島市青木Ｂ遺跡（三島市教委 2002）、三島市中手乱遺跡（静岡県埋蔵文化財調査研究所 1998b）、三島市中島舞台遺跡（三島市教委 1983）、田方郡函南町間宮川向遺跡（函南町教委 1988）、伊豆の国市鳥井前遺跡（伊豆長岡町教委 1981）などで大廓式前半段階と考えられる外来形土器が数点ながら出土していることは注目される。

現状では、前述のように東海西部系・北陸南西部系の土器を多く出土し、畿内的様相が直接見えない浮島ヶ原周辺とは異なる状況であることを確認しておく。

ｅ．東駿河における他地域との交流の二様相

さて、これまで見てきたように浮島ヶ原低地周辺と田方平野における外来系土器の影響について整理してみると次のように整理される。

浮島ヶ原低地周辺では、大廓式前半段階において東海西部系土器に加えて近江系・北陸南西部系土器が出土するものの、畿内系土器は出土しないことは重要である。一方、田方平野では、畿内系・東海西部系・北陸系が在地の土器型式に混在してくる状況が確認された。

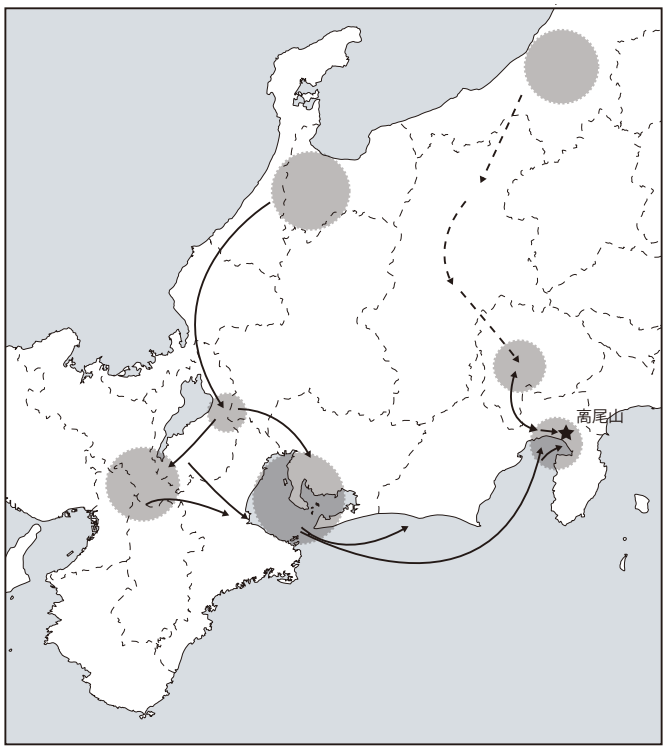
以上のような、浮島ヶ原低地周辺と田方平野における状況から、それぞれの地域がどのように交流し、影響を受けていたのか、集団の動きを推定し高尾山古墳築造の背景を考えていきたい。

まず、浮島ヶ原周辺への影響の方向は２つ考えられる。一つ目は太平洋ルートでかつての吉原湊から浮島ヶ原低地に入り、丘陵上の富士市宇東川遺跡や祢宜ノ前遺跡など周辺の集落と関係を持ちながら低地の最奥部に至り、入方遺跡に行き着くルートである。吉原湊の玄関口からは、大廓式後半に木棺に転用されたと考えられる準構造船が見つかっており（富士市教委 2008c）、その前段階では他地域からの外洋船が、前述のような舟に乗り換えて、浮島ヶ原低地周辺の遺跡における拠点的な集落の入方遺跡に向かうという姿も想像できる。

ただし、なぜ、わざわざ吉原湊から内湾である浮島ヶ原低地に入らなければならなかったのか、という疑問も生じるが、その理由として、吉原湊から潤井川などを経由して北に向かい、甲府盆地周辺との交流の中継地として一度、吉原湊に入る理由があり、北に向かうと甲府盆地、東に向かうと入方遺跡などを経由して田方平野に至るルートがあったのではないか。甲斐における東海西部の影響については、小林健二氏がこれまで、何度も指摘するように（小林 2006・2007 ほか）、のちの東山道ルートや富士川ルートの存在が指摘されており、後者であるとするならば、東海西部の人の動きが一度、吉原湊周辺を経由したとする考え方もできる。

また、浮島ヶ原低地への東海西部系の影響の流れのもうひとつのルートはやはり、太平洋ルートと考えられるが、吉原湊は経由せず、直接田方平野に入り、そこから第２次的・第３次的に拡散するかのように西方の浮島ヶ原低地へ広がる動きである。狩野川河口付近に立地する御幸町遺跡や藤井原遺跡における東海西部系土器の流入を見れば、当然、このような浮島ヶ原を飛び越す人の移動が考えられるし、その動きが主であった可能性も考えられる。しかし、甲斐へのルートを考えるならば、両者が並存して存在していたものと考えるのが妥当だろう。

さて、一方で畿内系土器が多く出土する田方平野の状況はどうであったのだろうか。当然のことながら、太平洋ルートでの移動が考えられるわけであるが、畿内系土器と東海西部系土器が混在する状況はどのように評価すればよいのだろうか。両者の動きの背景は一つであり、すべてが畿内から東方への影



第５図　東駿河への外来系土器流入経路模式図

響と捉え、東海西部の動きもその一端として、「畿内を中心とした海上陸上交通の整備」とする考え方もある（鈴木 2004）。しかし、以下では、別々の動きとして東駿河を捉え直してみたい。

ｆ．集落構造から見た高尾山古墳築造の背景

大廓式前半段階において、外来系土器が多く出土する入方遺跡や高尾山古墳における土器群が、基本的には在地の器種で構成されていることからも分かるように、一方的に畿内、もしくは東海西部が、一定の強制力を持った上でこの地域に入り込んできたのでないことは、明らかである。東駿河で、北陸地方、近畿地方、東海地方西部など多くの地域との交流を見ることができるということは（註2）、多くの地域が競い合うように、東駿河という土地を目指してくるかのように捉えることもできる。それだけ、ネットワークの交差点となっていたのである。

弥生時代後期以降、急激な成長を見せる入方遺跡や高尾山古墳を含む浮島ヶ原周辺においては、近畿地方の直接的な影響はみられない。飛躍して述べるならば、地域内の社会構造の成熟過程にある浮島ヶ原低地周辺は、それぞれが有機的・構造的に結びついて社会を構成し、そこに東海西部系を介した近江系・北陸南西部系という外的インパクトが加わった結果、高尾山古墳が築造されたと整理できる。

ｇ．おわりに

以上のように、東駿河を浮島ヶ原低地周辺と狩野川流域の田方平野周辺とに分け、前者の地域内ネットワークの結晶として高尾山古墳の築造があったと考えた。大廓式前半の出来事であろう。しかし、大廓式後半に入ると東駿河では、沼津市神明塚古墳（沼津市教委 2005）や三島市向山 16 号墳（三島市教委 2006）の築造をもって、いち早く畿内を中心とするネットワークに参画し、東海西部系の姿は徐々に見えなくなってくる。高尾山古墳の築造はその前夜における激動の時代の証でもある。

本稿は、筆者に与えられた「明治大学大久保忠和考古学振興基金奨励研究」（2011 ～ 2012 年度）『埋もれた考古遺物の資料化と集落景観の復原』の成果の一部である。

註

1．（石川 2002）より

「拠点型集落」…台地上に立地し、（弥生時代には－佐藤注－）環濠を持ちながら継続する集落

「臨海台地上占地型集落」…湾を望む台地の縁に立地し、物資の往来を監視するような性格を備えた集落

「交易拠点型集落」…遠隔地との物資の交換を司る港市的な性格の集落

「低地占地型集落」…低地部の耕地開発に中心的な役割を果たした集落

2．愛鷹尾上遺跡群における集落が、外来系土器を積極的に受容しないということは、そこに在地での選択性が働いた結果だと思われるが、それについての検討は今後の課題としたい。

引用参考文献

赤澤徳明 2003「越前南部から若狭湾沿岸の庄内式併行期の土器様相」庄内式土器研究ＸＸⅥ
石川日出志 2002「南関東の弥生後期集落」『弥生の「ムラ」から古墳の「クニ」へ』学生社
岩本　貴 2007「他様式の受容」『大廓様式の再検討』（静岡県考古学会プレシンポジウム資料）
小林健二 1999「山梨県出土の北陸系土器」『山梨考古学論集』Ⅳ
小林健二 2006「山梨県出土の畿内系叩き甕に関する覚書」研究紀要 22　山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター
小林健二 2007「大陸中央」考古学ジャーナル 554
佐藤祐樹 2009「古墳時代について」『祢宜ノ前遺跡』富士市教育委員会
佐藤祐樹 2010「集落の動態からみた古墳出現前夜の富士山南麓」静岡県考古学研究 41・42
篠原和大 2007「太平洋側（静岡県）」考古学ジャーナル 554
鈴木敏則 2004「北陸系土器について」『大蒲村東Ⅰ・Ⅱ遺跡』(財) 浜松市文化協会
高尾好之・山本恵一・渡井英誉 2010「静岡県沼津市発見の辻畑古墳」『邪馬台国時代の東海と近畿』（ふたかみ邪馬台国シンポジウム 10）資料集
原田　幹 1998「東海出土の北陸系土器」考古学フォーラム 10
比田井克仁 1987「南関東出土の北陸系土器について」古代第 83 号
松井一明 1999「静岡県における北陸系土器の伝播」静岡県考古学研究 31
渡井英誉 1997「土器編年」『滝戸遺跡』富士宮市教育委員会
渡井英誉 2002「大廓Ⅱ式期の具体相」『三島市埋蔵文化財発掘調査報告書』Ⅶ
渡井英誉 2007「大廓様式の再検討」『大廓様式の再検討』（静岡県考古学会プレシンポジウム資料）
伊豆長岡町教育委員会 1981『鳥井前遺跡』
函南町教育委員会 1988『間宮川向遺跡』
静岡県埋蔵文化財調査研究所 1997『韮山城跡・韮山城内遺跡』
静岡県埋蔵文化財調査研究所 1998a『平田前田遺跡』
静岡県埋蔵文化財調査研究所 1998b『御殿川流域遺跡群Ⅳ』
清水町教育委員会 2010『恵ヶ後遺跡』
沼津市教育委員会 1970『目黒身』
沼津市教育委員会 1977『藤井原遺跡第３次発掘調査概報』
沼津市教育委員会 1989『雌鹿塚遺跡発掘調査報告書』
沼津市教育委員会 1990『雌鹿塚遺跡発掘調査報告書Ⅰ（遺構編）Ⅱ（遺物編）』
沼津市教育委員会 1998『御幸町遺跡発掘調査報告書　遺物編（土器）』
沼津市教育委員会 1999『埋蔵文化財発掘調査報告書』
沼津市教育委員会 2000『尾崎遺跡発掘調査報告書』
沼津市教育委員会 2002『沼津市史　資料編　考古』
沼津市教育委員会 2005『神明塚古墳（第２次）発掘調査報告書』
富士市教育委員会 1986『富士市の埋蔵文化財（遺跡編）』
富士市教育委員会 1991『宇東川遺跡Ａ・Ｂ・Ｃ地区発掘調査概報』
富士市教育委員会 2000『沖田遺跡』
富士市教育委員会 2008a『祢宜ノ前遺跡』
富士市教育委員会 2008b『宮添遺跡Ⅰ』
富士市教育委員会 2008c『平成 17・18 年度　富士市内遺跡発掘調査報告書』
富士市教育委員会 2009『宮添遺跡Ⅱ』
富士市教育委員会 2010『宮添遺跡Ⅲ』
富士市教育委員会 2011『宮添遺跡Ⅳ』
富士市教育委員会 2012『宇東川遺跡Ａ地区』
富士市立博物館 1984『浮島沼と米づくり』
三島市教育委員会 1983『中島下舞台遺跡』
三島市教育委員会 2002『三島市埋蔵文化財調査報告Ⅶ』
三島市教育委員会 2006『静岡県三島市文化財年報』18
韮山村 1962『韮山村山木遺跡』

5．東駿河～伊豆北部の外来系土器について

岩本　貴

a．はじめに

本節では高尾山古墳を成立たらしめた当該地域の動向について、外来系土器を切り口として概観することとしたい。対象エリアは高尾山古墳と地形的に近接し、関連性が想定される富士川以東～田方平野（旧国制の駿河国の東部と伊豆国の北部）とし、現在の行政区分でいう富士宮市、富士市、沼津市、清水町、三島市、函南町、伊豆の国市の各遺跡出土資料を対象とする。

当地域で確認されている大廓Ⅰ～Ⅳ式期（渡井 1998）の外来系土器は、東海西部系、畿内系、北陸系、および近江系等であり、やや時期的に後発であるが山陰系の各系統も認められる。この他、関東系の存在が想定されるが、時期決定に不確定要素を含むことから、本稿では除外した。

本稿で外来系土器とした資料は、胎土分析を経て産地が同定された資料は少なく、現状では土器の特徴から各系統に振り分けているに過ぎない。特に東海西部系は、早い段階から変容、在来化が進んだと考えられるものがあり、別途整理が必要である。

一方、畿内系、北陸系、近江系および山陰系の各系統は、基本的に在地化する要素は少なく、搬入品であるか否かの議論は別とすれば比較的抽出が容易である。当該期の外来系土器の傾向として東海西部系が卓越することは衆目の一致していると判断されるため、畿内系、北陸系、近江系および山陰系を主体に外来系土器の波及について確認することとしたい。

なお、対象時期は大廓Ⅰ・Ⅱ式（渡井 1998）とし、大廓Ⅲ式以降は補足的に扱うこととする。大廓Ⅰ式は東海西部系土器の第 1 次拡散期（赤塚 1990）に相当するものと考えられる。

b．各系統の概観

⑴ 東海西部系

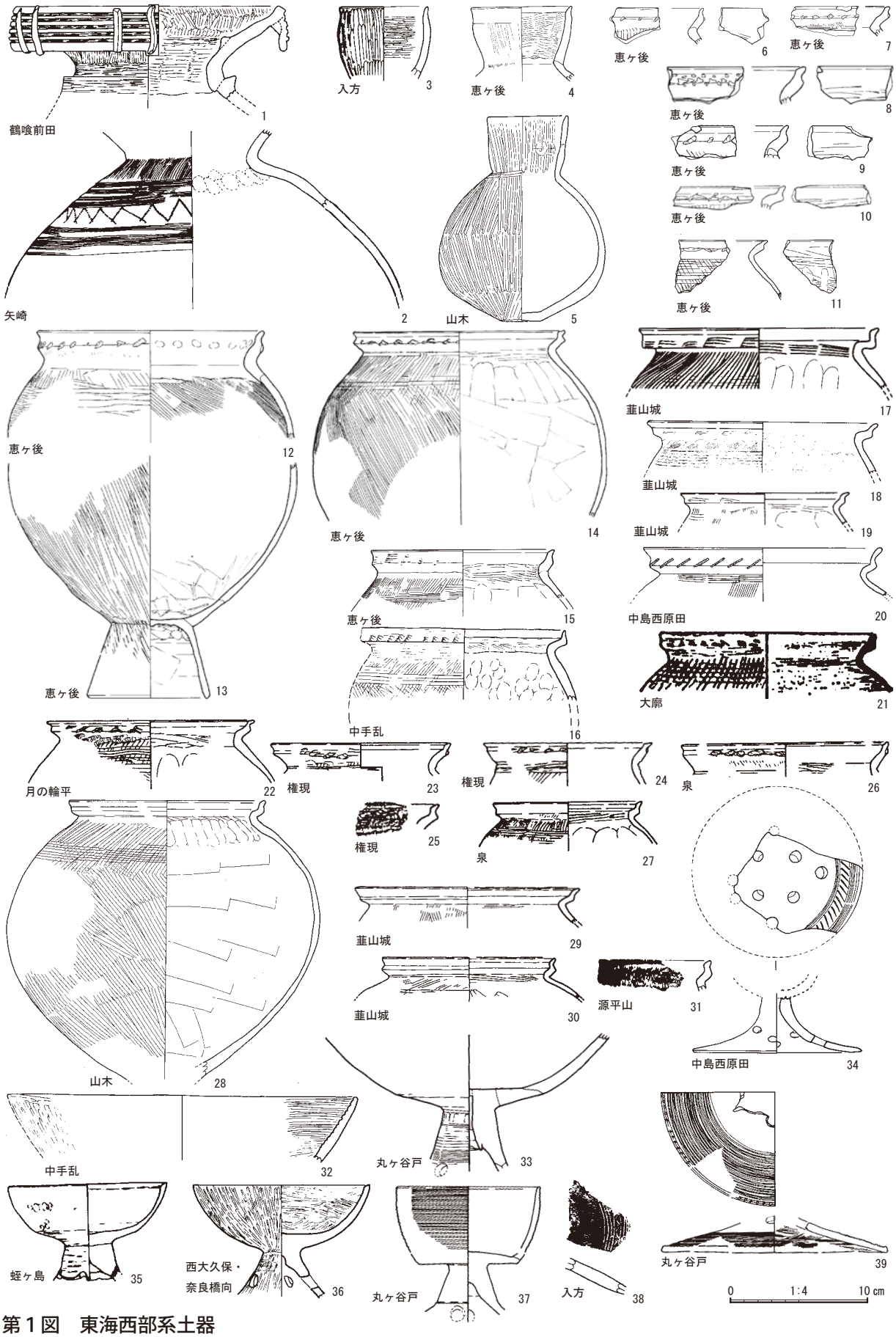
東海西部系は本稿で対象とする全遺跡で共伴している。また、前述のとおり、東海西部系は、当該期遺跡において一定量認められることは周知の現象であるため、ここでは、高尾山古墳で認められた器種および本稿関連遺跡を中心に概観することとしたい。おおむね大廓Ⅰ・Ⅱ式に並行するものと考えられる。

パレス壺は、垂下拡張口縁部に擬凹線を施し、胴部上半にパレス文様（赤塚 1990）を施すもので、赤彩品も認められる。これらの要素は基本的には在地様式に組み込まれることはないため、搬入品または外来系集団の関与が強い器種と判断される。鶴喰前田遺跡（1）、矢崎遺跡（2）で確認されている程度で、高尾山古墳のパレス壺は、一部が同一個体の可能性を含むものの、その出土量は、当地域において十分評価に値するものと判断される。また、それが墳墓から出土していることも注意が必要である。

ひさご壺は、高尾山古墳に隣接する入方遺跡（3）で出土しているほか、恵ヶ後遺跡（4）、山木遺跡（5）等で認められる。いずれも外面調整は縦ミガキを基調とし、口縁端部をわずかに屈曲させるものや口唇部に内傾面を持つものが認められ、短頸化が明瞭である。4 は口縁部内面をヨコハケ調整で終えており、調整方法において変容が進んだものと考えられる。

S 字甕は口縁部外面に押引文または刺突文を施すＡ類（赤塚 1986）およびこれに関連するものと、Ｂ類（赤塚 1986）の主として古相に相当すると考えられる口唇部に面を持つものを中心に図示した。

Ａ類は、高尾山古墳で口縁部破片が 4 点出土しているほか、中手乱遺跡（16）、韮山城内遺跡（17～ 19）、中島西原田遺跡（20）、恵ヶ後遺跡（6 ～ 15）、大廓遺跡（21）、月の輪平遺跡（22）、権現遺


鶴喰前田
1
入方
3
恵ヶ後
4
恵ヶ後
6
恵ヶ後
7
恵ヶ後
8
恵ヶ後
9
恵ヶ後
10
恵ヶ後
11
矢崎
2
山木
5
恵ヶ後
12
恵ヶ後
13
恵ヶ後
14
韮山城
17
韮山城
18
韮山城
19
恵ヶ後
15
中島西原田
20
大廓
21
中手乱
16
月の輪平
22
権現
23
権現
24
泉
26
権現
25
泉
27
韮山城
29
韮山城
30
源平山
31
中島西原田
34
山木
28
中手乱
32
丸ヶ谷戸
33
蛭ヶ島
35
西大久保・
奈良橋向
36
丸ヶ谷戸
37
入方
38
丸ヶ谷戸
39
0
1:4
10 cm

第１図　東海西部系土器

跡（23 ～ 25）、泉遺跡（26）等が確認されている中で、高尾山古墳、韮山城内遺跡、恵ヶ後遺跡、権現遺跡で複数個体が確認されている。特に恵ヶ後遺跡のあり方が突出している。これら遺跡は後述するように、外来系土器の波及を考える上で重要な遺跡を含んでいる。なお、当該資料の中には口縁部外面施文が押引きとならないもの（6・7・9・12・20）も認められ、変容が進んだものの可能性がある。

Ｂ類は、本稿対象遺跡の中で口縁部が直立気味で口唇部に面を持つ、古相と考えられるものを中心に図示した（27 ～ 31）。なお、30 は口縁部形態に古相をとどめていると判断されるが、頸部調整（赤塚 1990）が認められるため時期的に降る可能性がある。当地域では遅くともＢ類新段階には在地化したＳ字甕が登場していたと考えられているが（渡井論考参照）、現状では詳細は不明と言わざるを得ない。

高坏は、口唇部に細部湾曲調整（赤塚 1990）が形骸化した内傾面を持つもの（35 ～ 37）や口縁部内面（32）または外面（37）および、脚部外面に横線文、または横線文と波線文を交互施文するもの（33 ～ 39）を中心に図示したが、有段高坏は早くから模倣が始まったと考えられ、数多くの類例があると同時に、本来の形態から逸脱した諸種の形態が認められるため、Ｓ字甕と同様、その詳細は不明である。ここで図示した有文のものは搬入品ないし変容が進んでいない段階のものと考えられる。

⑵ 畿内系[註1]

庄内甕　「く」の字に屈曲した頸部から上外方に開く口縁部を有し、口唇部はわずかに上方につまみあげられ、倒卵形の胴部は外面に左上がりのやや細筋のタタキ、内面は頸部下位までケズリを施し器壁は薄く仕上げるものである。いずれも庄内大和型に分類されるものである。

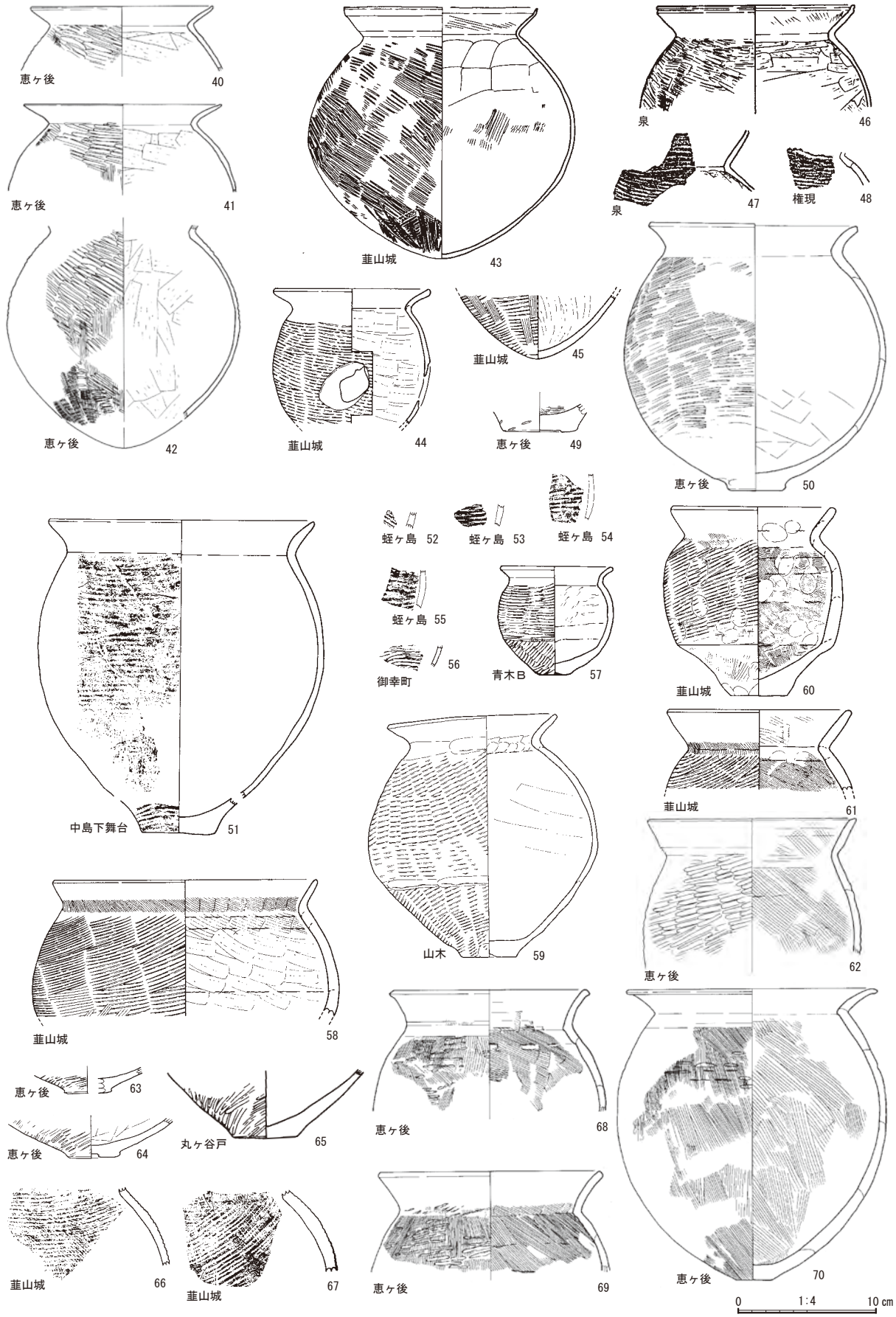
恵ヶ後遺跡で３点（40 ～ 42）、韮山城内遺跡で３点（43 ～ 45）、泉遺跡で２点（46・47）、権現遺跡で１点（48）確認されている。いずれも大廓Ⅰ式に並行するものと考えられる。韮山城内遺跡、恵ヶ後遺跡、泉遺跡で複数個体出土している点が注目される。

なお、46 は播磨平野、47 は奈良盆地東南部あるいは伊勢北部や矢作川流域の砂礫組成を示すことから、同地域からの搬入品の可能性が指摘されている（富士宮市 1993）。

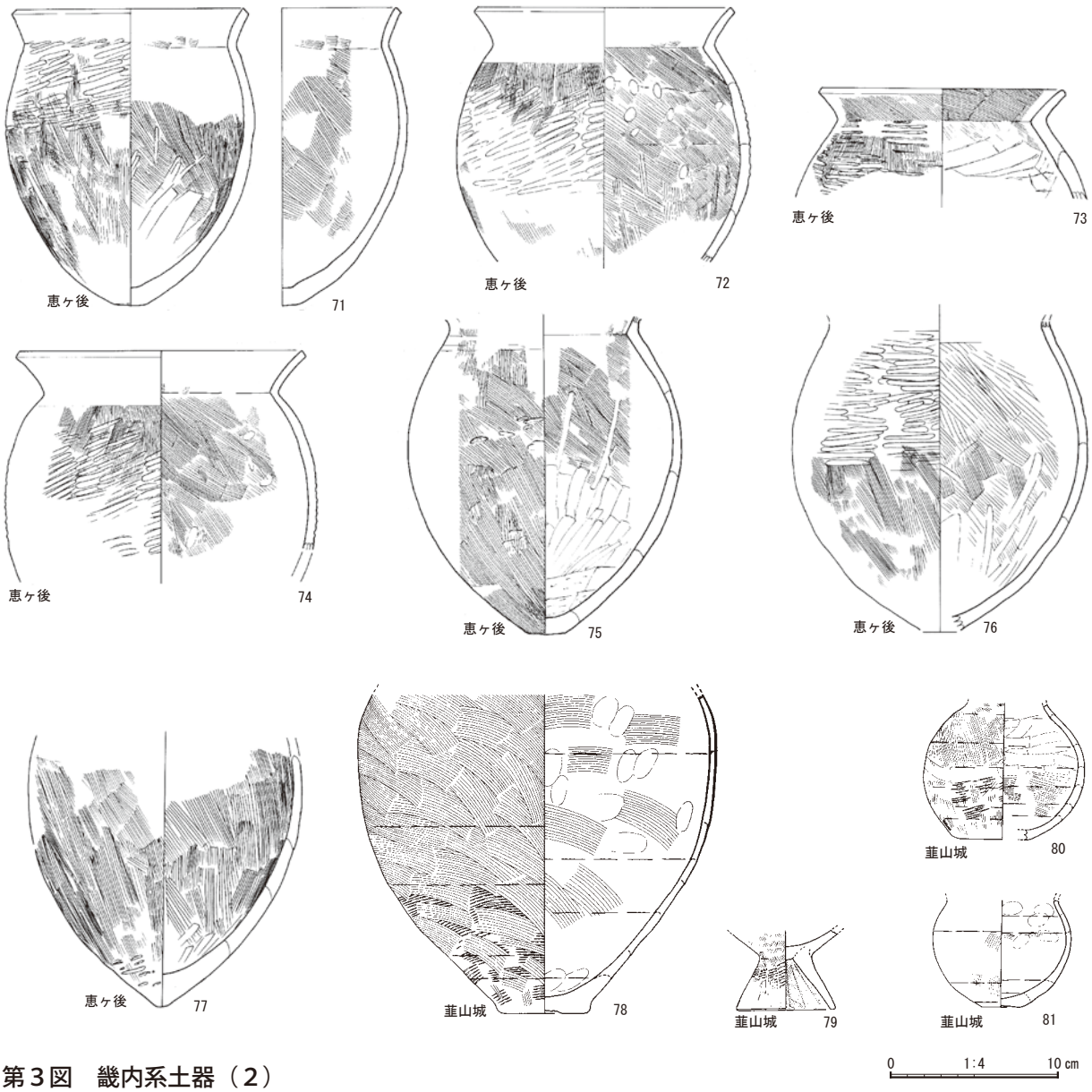
Ｖ様式系甕　くの字に屈曲した頸部から上外方に開く口縁部を有し、肩～中位に最大径を持つ胴部には外面に右上がりのタタキを施すものである。台付きは１点確認されているだけであり、当地域のものは平底のものが主体となる可能性が高い。庄内甕に比べ太めのタタキを用いるものが多い。また原則として内面にケズリを施さないため、器壁は相対的に厚めである。

底部が突出気味となるもの（49 ～ 51・59・60・63・64・78 など）と、突出せずやや小さめの底部となるもの（70・71・75・77）があり、前者は外面のほぼ全面にタタキを残し、後者はタタキ後、ハケ調整により部分的ないしほぼ全面のタタキが消されるものが多い傾向が認められる。韮山城内遺跡で８点、山木遺跡で１点、蛭ヶ島遺跡で４点[註2]、中島下舞台遺跡で１点、青木Ｂ遺跡で１点、恵ヶ後遺跡で 15 点、御幸町遺跡で１点、丸ヶ谷戸遺跡で４点（図示は１点）確認されている。なお、韮山城内遺跡では台付きのもの (79) が１点確認されるにとどまる。県内では西部の菊川市三沢西原遺跡（菊川町 1985）において台付きのタタキ甕が一定量確認されているが、当地域のタタキ甕とは系統を異にする可能性がある。いずれも大廓Ⅰ・Ⅱ式に並行するものと考えられる。韮山城内遺跡（および近接する蛭ヶ島遺跡）、恵ヶ後遺跡、丸ヶ谷戸遺跡で複数個体が出土しているほか、遺跡は複数に分かれるが、御殿川流域の遺跡（中島下舞台遺跡、青木Ｂ遺跡）でも全形を知りうる資料が出土しており、注目される。

庄内大和型甕とＶ様式系甕からは畿内とりわけ大和地域との関連を想起させるが、集成資料の中には、タタキ後ハケ調整を加えるものがあり、口縁部の外反が強いもの (70) や、逆に弱いもの (71) などバラエティがあり、突出が少ない小型の底部を持つという共通点がある。これらの特徴は畿内中心部のＶ様式系甕そのものという印象が弱く、畿内周辺地域の集団が関与していたか、当該地域への直接的な集団の移動ではなく、中継地（例えば東海西部地域）を経ることにより変容が進んだものである可能性が考


恵ヶ後 40
恵ヶ後 41
恵ヶ後 42
韮山城 43
韮山城 44
韮山城 45
泉 46
泉 47
権現 48
恵ヶ後 49
恵ヶ後 50
蛭ヶ島 52
蛭ヶ島 53
蛭ヶ島 54
蛭ヶ島 55
御幸町 56
青木B 57
韮山城 60
韮山城 61
中島下舞台 51
山木 59
韮山城 58
恵ヶ後 62
恵ヶ後 63
恵ヶ後 64
丸ヶ谷戸 65
恵ヶ後 68
韮山城 66
韮山城 67
恵ヶ後 69
恵ヶ後 70
0 1:4 10 cm

第２図　畿内系土器（１）



第３図　畿内系土器（２）

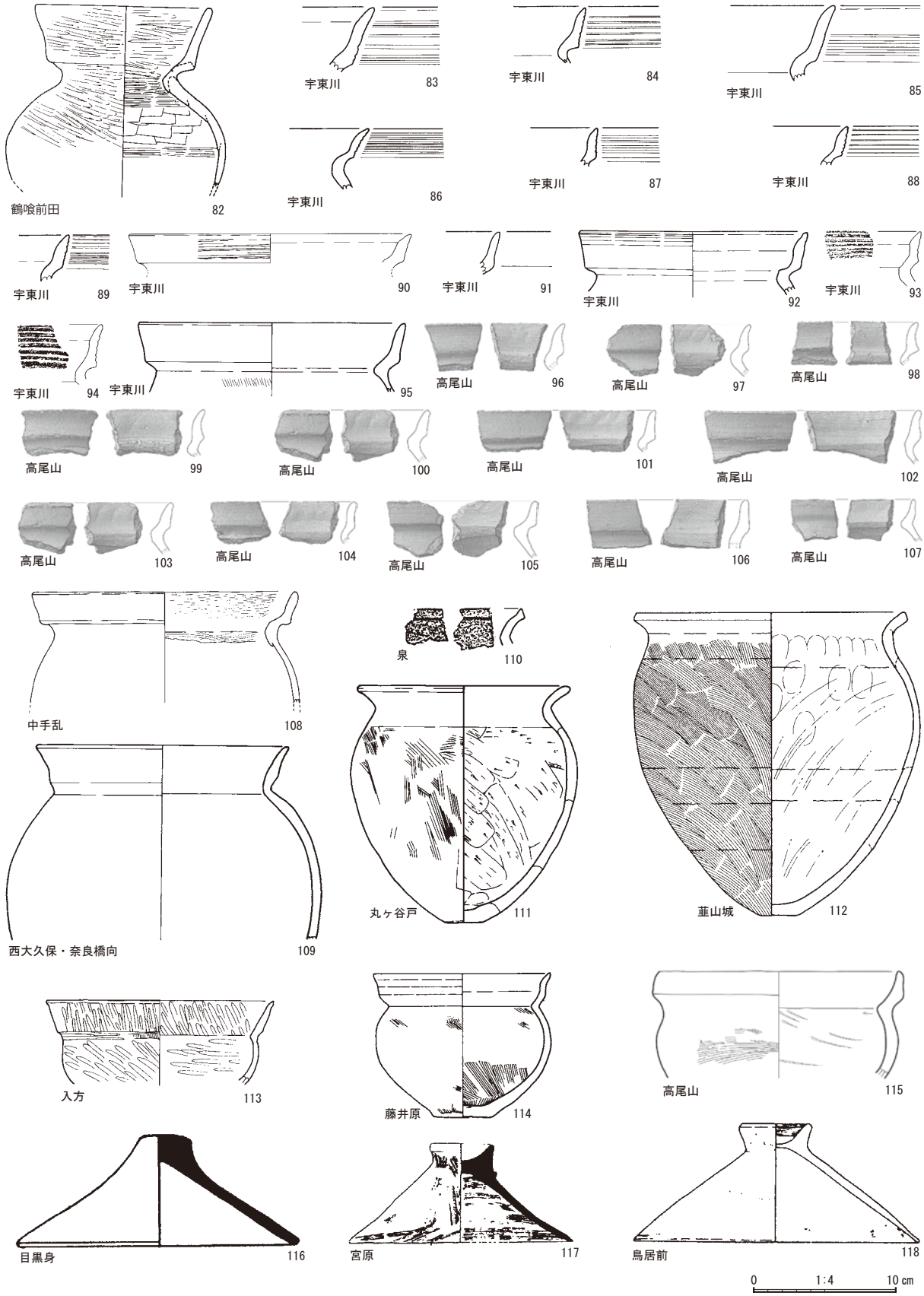
えられる。他方、台付きのタタキ甕は韮山城内遺跡で１点確認される程度であり、積極的に評価できる状況にないが､台付きのタタキ甕を比較的多く出土する地域とは系統を異にする可能性を指摘できる。

⑶ 北陸系

有段口縁壺　中手乱遺跡で１点（82）確認されている。口縁部外面の段は明瞭であるが、内面の段は痕跡的であること、口唇部が丸く収められていることなどの変容が認められるが、これが北陸内部での地域差が反映されたものか、波及過程において変容したものかは不明である。

有段口縁甕　宇東川遺跡で 13 点（83 ～ 95、佐藤論考参照）、高尾山古墳で 11 点（96 ～ 107）、中手乱遺跡で１点（108）、西大久保・奈良橋向遺跡で１点（109）が確認されており、同一個体を含む可能性があるとはいえ、高尾山古墳および宇東川遺跡のあり方が突出している。

当該地域において、口縁部外面に擬凹線を施すものは宇東川遺跡で確認されるだけであり、その他はすべて無文である。宇東川遺跡資料は、口縁部外面施文（83 ～ 90・92 ～ 94）と口唇部を尖り気味に収める点（83 ～ 95）において、北陸地域のものに近く、型式的にも差異が少ないのに対し、その他遺跡資料では、口縁端部でわずかに外反し、口唇部が尖り気味となるもの（96 ～ 99・101 など）と、口


鶴喰前田
82
宇東川
83
宇東川
84
宇東川
85
宇東川
86
宇東川
87
宇東川
88
宇東川
89
宇東川
90
宇東川
91
宇東川
92
宇東川
93
宇東川
94
宇東川
95
高尾山
96
高尾山
97
高尾山
98
高尾山
99
高尾山
100
高尾山
101
高尾山
102
高尾山
103
高尾山
104
高尾山
105
高尾山
106
高尾山
107
中手乱
108
泉
110
丸ヶ谷戸
111
韮山城
112
西大久保・奈良橋向
109
入方
113
藤井原
114
高尾山
115
目黒身
116
宮原
117
鳥居前
118
0
1:4
10 cm

第 4 図　北陸系土器

縁端部の外反が弱く、口唇部を丸く収めるもの（100・102 ～ 106・108）などバラエティが認められる。また、口縁部内面の段が弱いもの（109）は外見的な模倣に終わっており、変容が進んだものと判断される。

有段口縁鉢　入方遺跡（113）、藤井原遺跡（114）高尾山古墳（115）で確認されている。115 は口縁部が立ち上がり、口唇部を尖り気味に収めるものである。口縁部内面の段は痕跡的となっている。113 は、口唇部を尖り気味に収めていることから北陸系と判断した。内外面を丁寧にミガキ調整する。114 は口唇部を尖り気味に収めるもので胴部形態ともに北陸地域に類例を求めることができよう。

千種甕　泉遺跡（110）、丸ヶ谷戸遺跡（111）、韮山城内遺跡（112）で確認されている。111・112 は口唇部の面取りがやや形骸化しているものの、口縁部形態、胴部最大径を中位のやや上に持ち、胴部下半はあまり張らずに小さめの底部に至る形態、調整方法等、いずれも北陸北東部のいわゆる千種甕に比較的近いものと判断される。110 は口唇部に拡張気味の面をもつもので、同甕の口縁部と考えられる。なお、高尾山古墳出土の台付甕に千種甕の口縁部を借用したとみられるものが認められるが（渡井論考参照）、当該地域での明らかな変容形態と判断しここでは除外した。

蓋　目黒身遺跡（116）、宮原遺跡（117）、鳥居前遺跡（118）で確認されている。上端部が平坦となる 116 と窪む 117・118 が認められる。

以上の資料は、いずれも大廓Ⅰ・Ⅱ式の範疇に収まるものと判断される。現状では擬凹線を施すものは宇東川遺跡にのみ確認されており、口唇部形態は多少の差はあるものの全て尖り気味に収めるもので占められており、県内の北陸系土器の中では北陸地域のものに比較的近いとの評価がなされている（佐藤論考参照）。一方、宇東川遺跡を除く浮島ヶ原東半（沼津市域）～田方平野の遺跡では、有段口縁甕の口縁部外面に擬凹線を施すものは未確認である。これが北陸地域での地域差を示しているのか、当地域に至る過程で変容が進んだものか直ちに判断できないものの、千種甕のように北陸地域の地域性を示すものも確認されており、千種甕は現状では田方平野と富士山西麓で確認されている点に留意したい。

⑷ 近江系

口縁部が受口状に短く立ち上がる口縁部を有する甕を近江系と判断した。一部、他地域の受口口縁を誤認している可能性があることを付記しておく。高尾山古墳で 5 点（119 ～ 123）、入方遺跡（124）、源平山遺跡（125）で確認されている。明確に近江系と認識できるものは胴部に斜格子文を施す入方遺跡の 1 点（124）だけであり、入方遺跡の報文では近江北部型と南部型の折衷型と判断し、胎土も在地品とは明らかに異なることから搬入品と考えている（沼津市 1999 p.30）。高尾山古墳、源平山遺跡のものは無文の資料である。

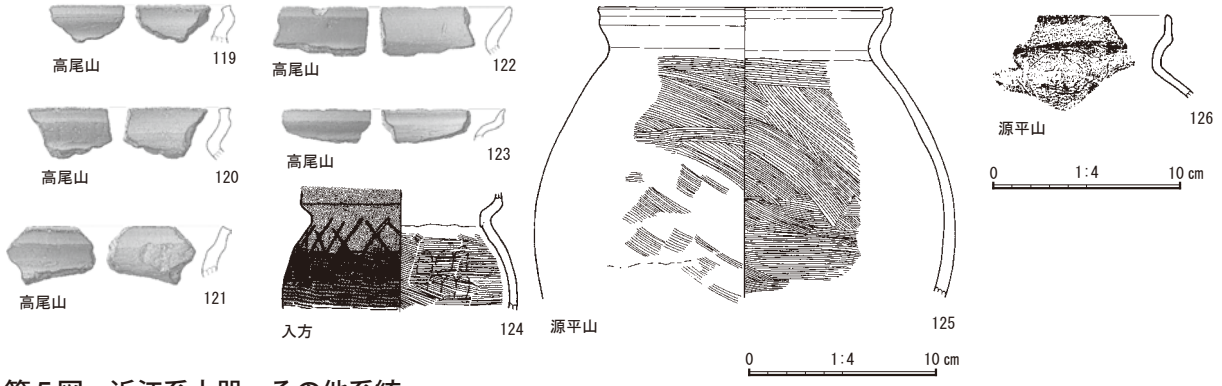
他系統に比べ出土点数は少ないが、高尾山古墳、入方遺跡という近接遺跡で当該地域出土例の大半を占めている点は注目される。いずれも大廓Ⅰ・Ⅱ式に並行するものと判断される。

⑸ その他

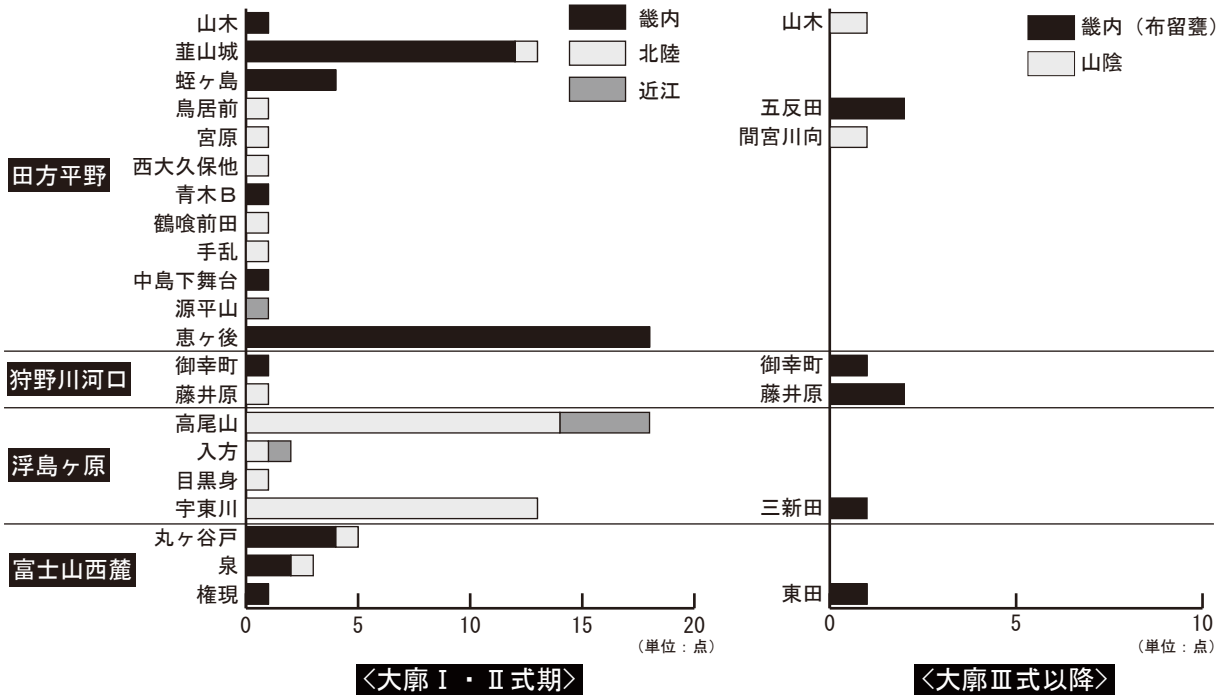
126 は源平山遺跡出土のもので、口縁部が受口状にやや短く直立して立ち上がる口縁部を有するもので、口縁部外面が無文であるが、吉備系の有段口縁に類似している。

c．外来系土器の受容

以上にみた外来系土器の出土傾向は、現段階の調査成果に基づくものであり、今後の調査により出土傾向に大幅な追加・修正の可能性があること（註3）、調査頻度も地域ごとの偏倚を顧慮する必要があろう。また、個別資料に拘泥することは全体像を見誤る危険性もある。ここでは雑駁ではあるが、外来系土器各系統の特徴、分布、組み合わせ状況等から県東部地域（富士川以東）における外来系土器波及ルートのモデルを提示してみたい。



第５図　近江系土器・その他系統



第６図　外来系土器集計（東海西部系除く）

第６図は、東海西部系を除く外来系土器の各系統の点数を示したものである。東海西部系は対象遺跡全てで出土しているため、東海西部系を基軸として、畿内系、北陸系、近江系が共伴するという状況が一般的と考えられる。よって、ここでは東海西部から太平洋ルートで駿河湾内に至るルートを前提に考えてみたい。なお、地域区分は便宜的に、富士山西麓（富士宮市域）、浮島ヶ原（西半部：富士市域、東半部：沼津市西部域）、狩野川河口（沼津市東部域）、田方平野（清水町、三島市、函南町、伊豆の国市域）により記述を進める。

畿内系は浮島ヶ原には希薄で狩野川河口域から田方平野に分布の中心があり、富士山西麓にも分布域が認められる。中でも田方平野の恵ヶ後遺跡、韮山城内遺跡・山木遺跡のあり方が特筆される。また、御殿川流域の遺跡群も調査が河川に沿って実施されていることもあるが、狩野川合流地点から御殿川を遡上しているかのごとく出土例があり、前述の遺跡に次ぐものとして評価できよう。狩野川河口域に立地する御幸町遺跡では１点の出土ながら、その立地から田方平野への波及ルートの入口部の遺跡として評価できよう。他方、富士山西麓でも一定量の出土が認められることは、後述するように、富士川を北

上し甲府盆地へ至るルートの経由地として評価できる可能性がある。

北陸系は浮島ヶ原～田方平野の各所で散見されるが、浮島ヶ原の遺跡、すなわち、宇東川遺跡、高尾山古墳、入方遺跡での集中したあり方が注目される。

近江系は浮島ヶ原東半の高尾山古墳と近接する入方遺跡で当地域資料の大半を占めており、総資料数が少ない中での密集度は注目すべきと考えられる。

以上のことから、現状では東海西部系を基軸として、畿内系が顕著な狩野川河口域～田方平野の遺跡群および富士山西麓の遺跡群と、北陸系が顕著な浮島ヶ原の遺跡群（宇東川遺跡および高尾山古墳・入方遺跡）、近江系が集中する浮島ヶ原東半の遺跡群（高尾山古墳・入方遺跡）という土器相の違いを指摘することが可能である。

県内の外来系土器の波及について検討した鈴木敏則氏は、「北陸系土器や山陰系・近江系土器の移動は、背後には畿内があり、畿内を中心とした海上・陸上交通網の整備、それを利用した物流ネットワーク、地方の支配機構の整備等に伴って広域な人や物の移動があってのこと」と考え、当該地域では狩野川河口域がその波及ルートとして想定されている（鈴木 2004）。

一方、佐藤論考では、狩野川河口域を介した外来系土器（集団）の波及ルートを認めつつ、浮島ヶ原に立地する集落が有機的なネットワークをもって存在していることを説明した上で、太平洋ルートから吉原湊を介した対外交流を想定している（佐藤論考参照）。すなわち、吉原湊が潤井川を遡上して富士川づたいに甲斐へ至るルート（以下、富士川ルートとする）と浮島ヶ原ラグーン地帯を東進するルート（以下、浮島ヶ原ルートとする）の２つのルートの玄関口となる可能性が考えられるためである。

浮島ヶ原西半部の集落では、富士山麓縁辺部の丘陵上に立地する宇東川遺跡において、口縁部外面に擬凹線を施す北陸系の有段口縁甕破片が 10 点以上出土しているが、前述のとおり、故地のものに比較的近いものと評価されている。加えて、畿内系の動向が不明瞭であることは浮島ヶ原ルートのあり方を考える上で示唆に富んでいる。

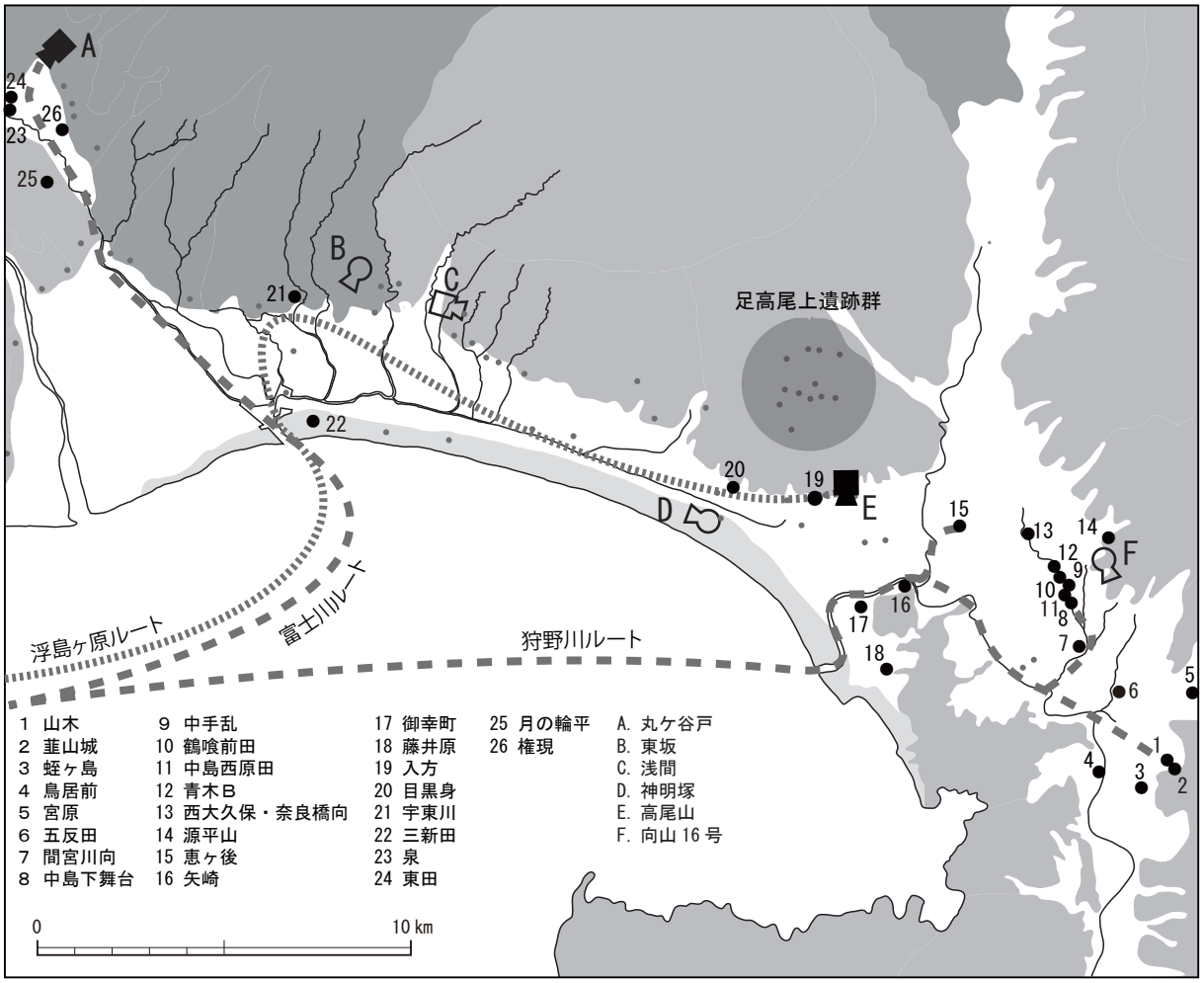
すなわち、前節までの検討のとおり、高尾山古墳を含めた浮島ヶ原の遺跡では畿内系が希薄であり、北陸系が顕著な点を考慮すると高尾山古墳および入方遺跡への外来系波及ルートは浮島ヶ原ルートを経由したものと考えるのが自然のように思える[註4]。そして、田方平野への外来系波及ルートは畿内系の分布状況から浮島ヶ原ルートを想定するよりはむしろ､狩野川河口を介し田方平野に至るルート（以下、狩野川ルートとする）を想定するのが妥当と判断される。

狩野川ルートは、河口部に畿内系、北陸系を出土する御幸町遺跡、藤井原遺跡が立地し、狩野川を遡上し、黄瀬川合流地点を北上すると恵ヶ後遺跡が立地している。当該地域における畿内系の出土点数が同遺跡で最も高率となることは、さらに狩野川上流に位置する御殿川流域の遺跡群や、韮山城・山木遺跡周辺の畿内系を考える上で興味深い立地を示している。

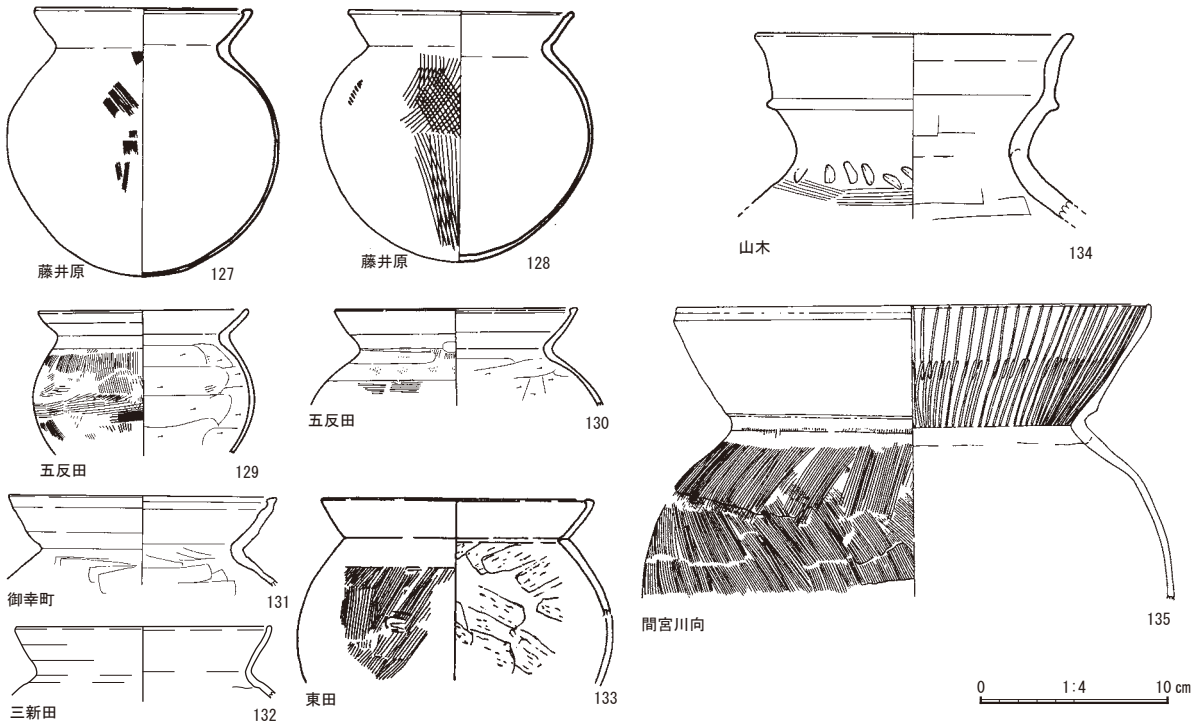
他方、富士川ルートの経由地である富士宮市域では、前方後方形周溝墓を検出した丸ヶ谷戸遺跡で東海西部系とともに畿内系（Ⅴ様式系甕）、北陸系（千種甕）が、泉遺跡、権現遺跡では畿内系（庄内大和型甕）、北陸系（千種甕は泉遺跡のみ）が確認されており、点数は少ないものの田方平野と類似した様相を示しているといえる。すなわち、吉原湊を結節点として分岐する富士川ルートと浮島ヶ原ルートでは外来系土器の波及理由または背景が異なる可能性が考えられるのである。

以上のことから、県東部（富士川以東）では、東海西部系を基軸として、畿内系、北陸系を伴う狩野川を介して田方平野へ至る狩野川ルートおよび、吉原湊を介して潤井川を北上しさらに北上すれば甲府盆地に至る富士川ルートと、畿内系が希薄で北陸系（および近江系）を伴う吉原湊を介して浮島ヶ原を東進する浮島ヶ原ルートに大別することが可能と考えられる。

以上は大廓Ⅰ～Ⅱ式期の動向であるが、最後に大廓Ⅲ式以降の動向について若干触れておきたい。前



第７図　外来系土器分布および波及経路想定図



第８図　畿内系土器（布留式系甕）と山陰系土器

述のとおり、大廓Ⅱ式以前は東海系、畿内系、北陸系、近江系の各系統が認められるが、大廓Ⅲ式以降（Ⅳ式か）は畿内系に加え山陰系が散見されるようになる。

畿内系は、布留式系の甕および二重口縁壺、直口壺、小型精製土器群等が該当するが、本稿では布留式系甕を中心に概観してみたい。布留式系甕以外の器種は在地化した変容型式が認められるのに対し、布留式系甕は、少なくとも当該期段階では在地化が基本的には認められないと判断したためである。

布留式系甕は、藤井原遺跡（127・128）、御幸町遺跡（131）、五反田遺跡（129・130）、三新田遺跡（132）、東田遺跡（133）で確認されている。狩野川河口部の遺跡およびその上流部である田方平野の遺跡で複数個体出土している点は注目して良いと思われる。三新田遺跡例（132）は1点だけの破片資料ではあるが、田子の浦砂丘上に立地する遺跡で、前述の吉原湊に近接する立地環境が注目される。また、東田遺跡は、吉原湊から潤井川を北上した富士山西麓に立地する。破片資料1点である。

一方、山陰系としたものは、発達した有段口縁を有するものである。134は壺、135は甕で前者は山木遺跡、後者は間宮川向遺跡の出土で数は少ないが、いずれも田方平野の遺跡出土である。135は東海西部のS字甕と山陰系の甕が融合したものである。

d．まとめにかえて

浮島ヶ原ルートの地域集団が高塚墳たる高尾山古墳を成立させたと仮定した場合、富士川ルートは丸ヶ谷戸周溝墓にとどまること、狩野川ルートの田方平野では当該期における隔絶した墳墓が未発見であり、大廓Ⅳ式以降と推定される三島市向山16号墳まで地域集団および首長層の成熟を待たねばならない現状は、以上にみた土器相と無関係ではないかも知れない。

大廓Ⅲ式以降になると、外来系土器の様相が大きく異なることが予想される、大廓Ⅰ・Ⅱ式で顕著だった東海西部系、北陸系、近江系は影をひそめ、大廓Ⅳ式では畿内系および山陰系が占めるようである。山陰系は数こそ少ないものの、畿内系と山陰系が伴う土器相は西日本で前方後円墳が成立する段階の様相と類似したあり方といえる。現状では大廓Ⅲ式以降の畿内系・山陰系が、狩野川河口域から田方平野の狩野川ルートの遺跡に顕著に見られることは示唆的である。大廓式前半段階の畿内系の波及ルートを踏襲しているようにもみえるからである。

当該期は狩野川ルートの田方平野で向山16号墳（大廓Ⅳ式以降）が前方後円墳として成立する。一方、浮島ヶ原ルートは、足高尾上遺跡群が急速に衰退し[(註5)]、高尾山古墳の次世代が被葬者と推測される神明塚古墳（本書「渡井編年」大廓Ⅲ式？）は前方後円墳を採用するようになる。高尾山古墳を頂点とした浮島ヶ原ルート上にある大規模集落の消長と前方後円墳の採用、田方平野での前方後円墳の成立は狩野川ルートを主として展開された地域集団再編の結果とみることはできないであろうか。この再編が、後の「スルガ・イズ」の成立につながるとすれば興味深い。

一方、大廓Ⅲ式以降の浮島ヶ原ルート西半部（富士市域）の外来系は積極的に評価できる状況になく、ラグーン西半部が目立った動きを見せるのは浅間古墳・東坂古墳の登場まで待たなければならない。

他方、富士川ルートの大廓Ⅲ～Ⅳ式には月の輪遺跡群の集落が挙げられる。在地系S字甕が煮沸具の主体を占めるという特徴があり（渡井 1994）、この状況は、富士川ルートにより結ばれる甲府盆地との関連で理解すべきものと考えられる。多少の変容は生じながらも弥生時代以来の台付甕を主体とする浮島ヶ原～田方平野の当該期土器様相とは異なることが指摘できる。布留式系甕が東田遺跡で1点出土している点は大廓Ⅱ式以前の狩野川ルートと類似したあり方ではあるが、隔絶した墳墓の存在は未確認であり、本ルートは甲府盆地との結節点であることは明らかであるものの、大廓Ⅰ式の丸ヶ谷戸前方後方周溝墓をピークとしてアクセスポイントとしての目立った動向は見い出しにくいのが現状である。

これら外来系土器を出土した遺跡（集落）は、大廓式以前から継続しているものと、大廓式以降に成

立したと考えられる新興集落の２つに大別できる。

前者として、入方遺跡、御幸町遺跡、韮山城・山木遺跡、御殿川流域遺跡群等が挙げられる。これら集落は弥生時代中期または後期前半から継続している遺跡であることが確認できる。これはとりも直さず在地系集団が外来系集団との接触を通じて成熟していったことを示していると考えられる。一方、後者として、恵ヶ後遺跡、藤井原遺跡、丸ヶ谷戸遺跡等が挙げられる。これらの遺跡は、弥生時代後期前半以前の状況が不明瞭で、大廓式段階以降に成立した新興集落である可能性が指摘できる。こちらの集落でも在来系土器の出土が一定量認められることから、排他的でない外来系集団の波及の重要遺跡として評価することができるのではなかろうか。

以上の検討は、現時点で確認できる外来系土器の系譜および地理的分布状況から想定しうるモデルを提示したに過ぎず、実際の外来系土器（集団）の波及形態は複雑多岐にわたっていたであろうことは想像に難くない(註6)。また、互いに排他的なルート設定を意図しているつもりも無いことは付記しておきたい。大廓Ⅱ式以前の各ルートには必ずといってよいほど東海西部系集団が関与しており(註７)、畿内系の有無と北陸系､近江系の多寡が地理的に区分されていることが主な根拠となっているに過ぎない。未発表資料の公開と胎土分析を含めた詳細な検討を経ることによって、より鮮明な高尾山古墳成立の背景および地域集団の成熟の姿が見えるものと了解している。

本稿を執筆するにあたり、次の関係機関、関係者の方に資料の提供および資料掲載の快諾、ご協力・ご教示をいただいた。記して感謝申し上げる。五十音順／敬称略　伊豆の国市教育委員会、清水町教育委員会、富士市教育委員会、池谷初恵、甲斐好美、佐藤祐樹、渡井英誉

註

１．畿内系には、二重口縁壺、小型精製土器等といった器種も一定量認められるが、変容が進み、在地化したものも混在しておりその分別が困難なものもある。一方、庄内甕、Ｖ様式系甕は他器種に比べ在地化する要素が少ないと判断される。同器種を俎上にすることで、同系統の波及に係る濃淡を明瞭にできると判断し、畿内系については、庄内甕、Ｖ様式系甕を主体に集成した。

２．報告書では条痕文土器とされているが、共伴資料の大半が古墳前期以降の土器で占められることからＶ様式系甕の胴部破片と判断した。

３．清水町恵ヶ後遺跡は、近年まで遺跡の内容は土地所有者が耕作の際に発見した土器片から垣間見る程度で、一般集落のひとつという評価に過ぎなかった（清水町 1998)。しかし、平成 15 年度の調査以降、外来系土器を多量に含み、大型掘立柱建物を持つ重要遺跡として従来の評価が一変していることを考えると、同様の遺跡が地域内に埋もれている可能性は否定できない。

４．畿内系、北陸系の両系統をもつ狩野川ルートを介して、浮島ヶ原周辺遺跡に北陸系だけが選択的に波及したと考えることも可能であるが、前述のとおり、浮島ヶ原西半に位置する富士市宇東川遺跡の北陸系がよりオリジナルに近いものと考えられることおよびその出土量を評価すれば、浮島ヶ原ルートを東進して北陸系が高尾山古墳周辺に到達したと理解する方が、擬凹線を消失した有段口縁甕で占められる高尾山古墳の様相を矛盾無く説明できると考えられる。

５．本稿では触れずじまいに終わってしまったが、渡井・佐藤論考で指摘のとおり、約 1㎞四方に及ぶ当該期の一大集落遺跡群である足高尾上遺跡群では外来系土器の出土がほとんど認められておらず、集落の開始時期は一部弥生後期前半に遡る可能性があるものを含むものの、主体は弥生後期後半以降であり、神明塚古墳成立段階には急速に衰退するという特徴を持つ。ただし、集落の北限に尾根を横断する直線的で大規模な溝が掘削され、集落内も直線的な溝や柵列で区画されるなど、集落の規模として低劣なものでなく、その計画性および土木力には、一定以上のリーダーシップ無しには成立しえないと推測されること、銅鏃やガラス勾玉の鋳型および製品といったいわば威信材に係る製品および技術を備えていることから、その立地環境を考え合わせれば高尾山古墳の被葬者につながる集団であった可能性は十分に考えられる。

６．松井一明氏は、駿河東部および伊豆の当該期北陸系土器の波及経路として長野県北部～山梨県を経由したルートを想定している（松井 1999)。本稿では北陸内部の地域性について十分に検討できなかったが、松井氏指摘のとおり、資料数は少ないが千種甕、蓋が県内では東部で主体に確認されている状況は､他の有段口縁壺･甕等とは波及ルートが異なる可能性を考えておく必要はあろう。なお、千種甕は富士川ルート、狩野川ルートで認められ、東海西部系、畿内系が主体となる地域に重なる点に留意しておきたい。

７．本稿ではその移動集団について具体的な検討ができなかったが、伊勢湾西岸部に位置する三重県津市雲出島貫遺跡およびその

周辺遺跡では畿内系、北陸系等とともに大廓式の壺・甕の複数出土が確認されている（川崎 2008）。東駿河～伊豆北部における外来系土器の経由地の候補として評価できる可能性がある。

引用参考文献

赤塚次郎 1986「Ｓ字甕覚書 '85」『年報　昭和 60 年度』(財) 愛知県埋蔵文化財センター
赤塚次郎 1990「Ⅴ　考察」『廻間遺跡』 (財) 愛知県埋蔵文化財センター
伊豆長岡町教育委員会 1981『鳥居前遺跡』
小野真一・笹津備洋 1969「沼津市大廓発見の住居址と土器」歴史科学 20
川崎志乃 2008「古墳時代初頭の雲出川下流域の遺跡群」『研究紀要 第 17-1 号』三重県埋蔵文化財センター
函南町教育委員会 1988『間宮川向遺跡』
菊川町教育委員会 1985『三沢西原遺跡』
静岡県教育委員会 1992『韮山城跡』
(財) 静岡県埋蔵文化財調査研究所 1994『御殿川流域遺跡群Ⅱ』
(財) 静岡県埋蔵文化財調査研究所 1995『御殿川流域遺跡群Ⅲ』
(財) 静岡県埋蔵文化財調査研究所 1997『韮山城跡・韮山城内遺跡』
(財) 静岡県埋蔵文化財調査研究所 1998『御殿川流域遺跡群Ⅳ』
(財) 静岡県埋蔵文化財調査研究所 2005『来光川遺跡群Ⅱ』
清水町 1998『清水町史 資料編Ⅱ（考古）』
鈴木敏則 2004「第 2 節　北陸系土器について」『大蒲村東Ⅰ・Ⅱ遺跡』 (財) 浜松市文化協会
韮山町教育委員会 1970『田方郡韮山町奈古谷遺跡緊急調査概報』
韮山町教育委員会 1979『蛭ヶ島遺跡調査報告書』
沼津市教育委員会 1978『藤井原遺跡発掘調査報告書Ⅰ　遺構編』
沼津市教育委員会 1970『目黒身』
沼津市教育委員会 1998『御幸町遺跡発掘調査報告書（遺物編）』
沼津市教育委員会 1999『埋蔵文化財発掘調査報告書』
富士市教育委員会 1991『宇東川遺跡Ａ・Ｂ・Ｃ地区発掘調査概報』
富士市教育委員会 2012『宇東川遺跡　Ａ地区』
富士宮市教育委員会 1991『丸ヶ谷戸遺跡』
富士宮市教育委員会 1993『富士宮市の遺跡』
富士宮市教育委員会 2009『東田遺跡』
松井一明 1999「静岡県における北陸系土器の伝播」静岡県考古学研究 31 静岡県考古学会
三島市教育委員会 1983『中島下舞台遺跡』
三島市教育委員会 1996『西大久保・奈良橋向遺跡』
三島市教育委員会 2000『夏梅木遺跡群』
三島市教育委員会 2002『三島市埋蔵文化財調査報告Ⅶ』
渡井英誉 1994「月の輪平遺跡第 1 号住居址出土のＳ字甕」庄内式土器研究Ⅴ 庄内式土器研究会
渡井英誉 1998「大廓式土器小考」庄内式土器研究ⅩⅥ 庄内式土器研究会

掲載資料一覧

1・82　三島市鶴喰前田遺跡（(財) 静岡県埋蔵文化財調査研究所 1995）
2　清水町矢崎遺跡（清水町 1998）
3・38・113・124　沼津市入方遺跡（沼津市教育委員会 1999）
4・6 ～ 15・40 ～ 42・49・50・62 ～ 64・68 ～ 77　清水町恵ヶ後遺跡（未発表資料／清水町教育委員会提供）
5・28・59・134　伊豆の国市山木遺跡（未発表資料／伊豆の国市教育委員会提供）
17 ～ 19・29・30・43 ～ 45・58・60・61・66・67・78 ～ 81・112　伊豆の国市韮山城内遺跡（静岡県教育委員会 1992、(財) 静岡県埋蔵文化財調査研究所 1997）

16・32・108　三島市中手乱遺跡（(財) 静岡県埋蔵文化財調査研究所 1998）
20・34　三島市中島西原田遺跡（(財) 静岡県埋蔵文化財調査研究所 1994）
21　沼津市大廓遺跡（小野真一・笹津備洋 1969）
22　富士宮市月の輪平遺跡（富士宮市教育委員会 1993）
23 ～ 25・48　富士宮市権現遺跡（富士宮市教育委員会 1993）
26・27・46・47・110　富士宮市泉遺跡（富士宮市教育委員会 1993）
31・125・126　三島市源平山遺跡（三島市教育委員会 2000）
33・37・39・65・111　富士宮市丸ヶ谷戸遺跡（富士宮市教育委員会 1991）
35・52 ～ 55　伊豆の国市蛭ヶ島遺跡（韮山町教育委員会 1979）
36・109　三島市西大久保・奈良橋向遺跡（三島市教育委員会 1996）
51　三島市中島下舞台遺跡（三島市教育委員会 1983）
56・131　沼津市御幸町遺跡（沼津市教育委員会 1999）
57　三島市中島 B 遺跡（三島市教育委員会 2002）
83 ～ 95　富士市宇東川遺跡（富士市教育委員会 1991・2012）
96 ～ 107・115・119 ～ 123　沼津市高尾山古墳（本報告）
114・127・128　沼津市藤井原遺跡（沼津市教育委員会 1978）
116　沼津市目黒身遺跡（沼津市教育委員会 1970）
117　伊豆の国市宮原遺跡（韮山町教育委員会 1970）
118　伊豆の国市鳥居前遺跡（伊豆長岡町教育委員会 1981）
129・130　函南町五反田遺跡（(財) 静岡県埋蔵文化財調査研究所 2005）
132　富士市三新田遺跡（未発表資料／富士市教育委員会提供）
133　富士宮市東田遺跡（富士宮市教育委員会　2009）
135　函南町間宮川向遺跡（函南町教育委員会 1988）

6．高尾山古墳から見えてくる東海系文化

赤塚次郎

a．はじめに

列島内の地域社会が古墳時代へと移り行くその胎動は、これまで指摘されているような３世紀の中にあるのではなく、大きな環境変動が指摘されつつある２世紀を中心に考えていく必要がある。それは愛鷹山麓に広がる古代スルガという場面においても例外ではないであろう。具体的には当地域の土器編年でいう「雌鹿塚式」から「大廓式土器」への画期をどのように評価していくかという点に係ってくる。

ここでは現状での東海地域廻間編年との併行関係から推定できる暦年代観を踏まえて、おおむね２世紀後葉を中心として位置づけておきたいと思う。それは同時に古墳時代早期（弥生終末期）の後半段階において、スルガの地域社会に優れた方向性が突如具現し、地域社会が求めた新しい社会への志向性が動き始めた時期と評価したい。その明確な証は、まさに本書の高尾山古墳の存在にある。それまでの弥生社会には見られない大型墳丘墓の突然ともいえる造営に象徴されるのであり、その出来事性は当時の地域社会においては革新的なものであったに違いない。民衆は次の時代を担う新しいリーダーの登場に歓喜し、美しい愛鷹の森と駿河湾の海に挟まれた空間に、無限の可能性と未来への希望を夢見た事であろう。したがって本古墳を評価する事は、まさに「地域社会スルガ」という場面の新たな登場とその一体感、風俗風習を一にする部族社会の力強い地縁的まとまりからはじまる物語の序章でもある。古代スルガ國の開闢史を三世紀前半のこの段階にまでさかのぼり位置づけることが可能であると考えたい。

b．高尾山古墳の築造時期

高尾山古墳を評価する上で、まずもって重要な事柄はその造営時期を決定する事である。そのための情報は、本報告書の内容をもって明らかに提示されているが、ここでは「土器編年」を基軸に東海系土器との関係からあらためて整理しておきたい。なぜならば、副葬品は極めて近畿中心的な編年観・分布観が支配的であり、地域性をはなはだ過小評価する機運から未だ抜けきれず、異なる評価がくだされる可能性が高いと考えられるからである。同様な視点は墳丘の形やそのテクスチャーにおいても見られる。さて、高尾山古墳から出土した土器には幾つかの特徴が見いだされ、報告に基づけば以下のように整理できる。

まず第１に出土地点では周濠内の資料と後方部上（墓壙内含む）に大きく区分できる。第２に層位的に分布がまとまる土器集積地点が複数認められる。第３に時期幅があるものの、その中核はおおむね「大廓式期」にまとまりが認められる。それぞれの遺構がどの時期に所属するのかはなかなか難しい問題であるが、基本はその遺構が作られはじめた掘削加工面を問題にする以前に、まずもってその遺構が具体的に使用された最初の機能面を明確に位置づける事が重要である。その手がかりは、明らかに西周濠内を中心とした土器集積群である点は大方の意見の一致を見ているものと思われる。掘削された土木的時期というより、本来ある目的で機能した堆積層とその時期が重要である。その意味において集積群が大廓Ⅰ式期に一つのまとまりとして存在する点は注目したい。

さて、この土器集積資料の中に完全な形をもつ東海系土器が混在している。その特徴を概観すると、杯部と脚部の高さがほぼ同じであり、杯部の端面には特徴的な面が明瞭に見られる。脚部には内湾志向が残存する形で、上位外面には横線文が施される。こうした特徴は東海地域の土器編年である廻間Ⅱ式前半段階の資料と類似点が見いだされる。愛知県一宮市西上免遺跡から出土した報告書 197 高杯より新しい傾向をもち、169 まで下げる必要はない。おおむね廻間遺跡 SZ02 出土高杯と併行する段階の

資料と位置づけることができよう。したがって本資料は廻間Ⅱ式２段階を下る要素は見いだしがたい。この点は供伴する土器群の主体が大廓Ⅰ式期であるという評価と大きく矛盾するものではない。ちなみに墳丘上の墓壙から出土したパレス壷の体部片は、赤彩波線文と列点文･横線文の組合せ等の特徴より、やはり廻間Ⅱ式中頃を下る資料とはなりえない。

以上を総合すると、少なくとも西周濠が機能した最初の場面での時期設定は、廻間Ⅱ式前半期を中心とするものと考えておくことができよう。現在の研究段階においての暦年代としては、おおむね３世紀前葉を推定しておきたい。すると東日本において 60m 規模の墳丘墓、前方後方墳としては最古の段階である点は動かしがたい。したがって廻間式土器と重複する大廓Ⅰ式土器の成立が、どこまで遡るかは問題であるが、おおむね２世紀後半期の中で様式設定が準備されていくと理解してよいであろう。であるならば、高尾山古墳の主体者が活躍した時代とは、まさに２世紀後葉を中心とする、古代スルガの開闢に大きく関わる人物であることになる。そして３世紀前葉にこの地に奉られる。

ｃ．古代スルガという原景観

沼津市史によると、高尾山古墳が所在する場面はまさに駿河國駿河郡駿河郷になる。この地に、東日本最古・最大級の 60m クラスの前方後方墳が築造された意味は大変興味深い。そして立地する場面は、まさに駿河湾の最深部であり、木瀬川（黄瀬川）・狩野川が駿河湾と出会う場面であるとともに、愛鷹山麓から派生する台地面が岬状に突き出た半島状の景観が復元できる。全面には海が、背面には愛鷹の森、そしてその山麓を行交う古くからの街道が想定できるであろう。当時の優れたリーダーが奉られる場所としてはまさに相応しい場面であったに違いない。愛鷹の山から得る清き泉が湧き､海（湾）と河、そして道が出会う結節点でもある。

ところで高尾山古墳から見えてくる風景は愛鷹山麓の南西側に広がる浮島沼方面ではない。東側に広がる駿河湾を望む場面であり、木瀬川・狩野川水系を強く意識したものである。そこには台地端や低地部に広がる遺跡群が展開している。大廓式土器の時代を代表する集落遺跡は、高尾山古墳が存在する山麓地域から一段下った低地部に点在する可能性が高く、また木瀬川右岸には豆生田遺跡、左岸には恵ヶ後遺跡、狩野川左岸には御幸町遺跡や藤井原遺跡などが存在している。翻って山麓側の中腹には標高 100m に八兵衛洞遺跡などの足高尾上遺跡群が展開している。この愛鷹山麓に集中する不思議な遺跡群はいかなる意味を持つかが興味深い。市史等では、弥生後期からの浮島沼に展開する遺跡群が何らかの原因で収束し、それに変わるかのように足高尾上遺跡群が唐突に展開してくるという経緯を評価している。

しかし、土器群を精査すると、必ずしもそうした移動・展開という状況ではなく、一部重複しながら併存すると解釈した方が良いのではないかと思われる。つまり浮島沼という低地・沼の環境に住まう民と標高 100m という山麓に住まう民､そして高尾山古墳が築造された木瀬川･狩野川低地部に住まう人々と海の民、これらは愛鷹山麓の風景を背景に生業する多様な人々、伝統的な小地域社会を代表したものと思われる。そして重要な視点は、弥生後期社会からの継続する海辺・低地部に集住する浜の民と標高 100m に住まう山の民が何らかの理由でここ「スルガ」の地に集まってきた事にある。その契機が大廓式土器の時代と考えると、まさに彼らは高尾山古墳の主体者が目指す地域経営の意思に憧れて集まってきていると解釈したい。この地に育つ優れた地域の素材がここに集まってくる。そして海を越え、山を越えて異国のモノが往来する場面が出来上がったのだと考えたい。

これらの遺跡群を巻き込んだ、地域社会にはじめて新しい理念と文化がもたらされた。そこに東海系文化が深く関与したことは想像に難くないが、その目的が重要である（後述）。結果的に東海系文化とその担い手たちが、この古代スルガ國の建国に深く関わったことは間違いない。だがその主体はあくま

で弥生社会から受け継がれてきた伝統的な愛鷹山麓に割拠した部族社会の人々であった点は譲れない。なぜならば、受け入れた東海系を代表とする幾つかの文化は、スルガの地において独特の変化と独自の解釈が生み出され、定着していったからである。「スルガ」という國の歴史は、まさに高尾山古墳の造営を契機として、その機運の中から創出され、伊豆半島から愛鷹山麓を抱えこむこの場面から出発した。そしてその後の古代領域設定につながっていくものと推察できる。

ｄ．東海系のトレース（第１次拡散）の評価

では、なぜ東海系文化がその担い手の中心となりえたのかという点についてまとめておきたい。西暦200年前後、突然のように尾張低地部に端を発した伊勢湾沿岸部の部族社会から、主に東日本へ「東海系土器」の拡散現象が認められる。この現象を第１次拡散期として位置づけているが、その内容は土器様式にとどまらず、前方後方墳という墳墓とその祭式、木製の道具立てや人面文といった風習にいたるまでのパッケージされた東海系文化といっても過言ではない。そしてそれぞれの地域社会のニーズに基づいた選択制により、東海系文物が受け入れられる場合が多く見られる。つまるところ、東海系文化とその担い手たちが、各地の地域作りに参画していったというのが正確な評価と考えている。

２世紀は長周期変動の時代という評価がある。旱魃と洪水が長い間継続する時期、未曾有の災害が継続し、従来までの祭りや仕来りでは乗り越えられない事態が勃発した。また古墳寒冷期という表現に代表されるような気候変動期でもある。海が下がり干潟に広大な土地が生み出される、大河の河川敷に開発可能な広大な土地が出現するが、一方で洪水や土石流が多発した可能性が高い。こうした時期、優れた治水対策の歴史とその技術を有する技術者集団を抱える東海系文化の担い手たちが、「東海系文化」を佳しと認めたその真の理由であったと考えておきたい。もちろんそれは弥生時代から続く、濃尾平野を中心とした治水対策技術の蓄積が根底に存在していたものと想定している。高尾山古墳は「新規スコリア」の後に造営されている。富士山の噴火が大廓式土器の成立に深く関わる現象であったかは興味深い点であるが、少なくともこの地の山や海・低地部の民に大きな影響を与えた事は想像に難くない。あるいは泉や温泉の自噴地が大きく動くなどスルガの景観が大きく変わり、人々に新たな結束をもたらす契機になっていった可能性も考えられる。そこに東海系トレースが表面化する一つのモデルがある。

ここで、今ひとつ鉄生産の可能性を加えておきたい。濃尾平野には弥生時代後期にはすでに青銅器生産が定着し、独自のデザインが多く生み出されていった。同じように鉄製品も考えておく必要がある。箱根を超えた小田原市に、この段階の東海系文化がもたらされたことがわかる興味深い遺跡がある。千代南原遺跡第Ⅳ地点１号土坑。そこからは廻間Ⅱ式前半期の土器群に混じって鍛冶関連遺物が見つかっている。これを積極的に評価し、さらに「赤い塗料」ベンガラ作りとその技術を加えることもできよう。この時期、継続的な鉱山を想定する必要はまったくない。現在では実証する事は難しいようであるが、記紀には砂鉄生産が主体として記述されているように、自然銅・自然鉄がその素材として有効活用されていた可能性を今少し評価する必要がある。スルガにはまさにその自然「鉄」素材が広範囲に存在し、これらの技術開発にも東海系文化の担い手たちが大きく関与していったものと推測しておく必要があろう。現在の沼津市内には、駿河郡２座のうちの一つ、式内社丸子神社が鎮座するが、ここに「金山彦命」を奉る意味は、あるいはこうしたスルガ建国時まで遡る地域性豊かな歴史が反映されている可能性がある。

ｅ．大きさと二つの集団

墳長62mという高尾山古墳、その主墳丘は一辺約30mクラスである。ここではこの大きさを少し整理しておきたい。東日本に突如造成された各地の初期の前方後方墳を見ていくと、その大きさには一定

の企画が見られる。企画といっても明確な数値ではなく、当時の身体尺に基づく大まかな部族社会の慣習的規模といってもよい。それは長野県松本市の弘法山古墳が 60m で主墳丘が 30m を代表として、その他に滋賀県長浜市の小松古墳、栃木県那賀川町の那須八幡塚古墳、埼玉県東松山市の三ノ耕地 1 号墳などが廻間 II・III 式前半期を中心とする 60m から 50m クラスの前方後方墳である。おおむね主墳長が 30m 前後が、その地の族長クラスの大きさである点が容易に推察できる。したがって前方部が取り付くとなると、墳長は最大 60m から 50m クラスが一般的となり、高尾山古墳もこの大枠から外れる事例ではない。東海系のトレースによってもたらされた東海文化を基本にした大きさの共鳴現象と評価したい。

東海地域ではすでに弥生中期（朝日遺跡）からこの大きさが存在し、地域の優れたリーダーが眠る墓所は 30m クラスで弥生中期から古墳早期にかけて大きく逸脱する資料は見られない。つまりこれは地域の「大きさ」であり、後の倭王権が直接関与する問題とは考えにくいし、未だその時代ではない。2・3 世紀の墳丘墓の大きさはその地域が決定するものであり、あるミッションを成し遂げた優れたリーダーの評価と不可分な存在であったと考えている。加えて墳丘表面には石素材ではなく、地域の土素材をうまく活用するのであり、急速に立上がる傾斜は、まさに墳丘墓の延長上に位置付けられる。したがって表面テクスチャーは、基本的にはその地の風景にとけ込む形となる場合が多い。

高尾山古墳の前方後方墳という形は、まずは東海系文化に端を発した墳形を採用し、その大きさも優れて地域社会に存在する大きさの基準に基づくものである。同時にスルガという地域社会を代表する、リーダーがなし得た評価を、この地の民衆が決め表示したものという視点で考えておきたい。因に鉄鏃類に見られた、大きく見れば 2 つのまとまりについてであるが、部族社会の鏃の形や拵えは、まさに部族社会を象徴する独自の形や色を表示されるシステムである。したがって、高尾山に奉られた被葬者を支える部族集団には、大きく二つの集団が存在した事を示している可能性がある。それが、木瀬川・狩野川流域の民と愛鷹山麓の山の民であったかは今後の調査成果に委ねたい。

f．まとめにかえて

高尾山古墳を評価する第 1 は、古代スルガという場面をはじめて明確に形作った、その出来事を具体的に成し遂げた偉大な英雄の墳墓である点にある。彼が活躍した時代は 2 世紀後葉から 3 世紀初頭を中心とし、すでに変化の兆しが見えていた地域の器のカタチを決め、物流の拠点と示し、港湾と河、沼と山を繋ぐ道を整備し、広がった湿原の開発に積極的に乗り出していったものと考えておきたい。また富士山の噴火という自然災害を契機に、東海系の文化と技術を利用して、一つの地域活性化を成功させた。こうした優れた方向性が、浜の民や山の民を集めさせ、それぞれの優れた技術と素材を見事に結集させ、交易・交換を盛んにしていったに違いない。当地域の古墳時代は、この場面からこの時点からはじまるといっても過言ではないかもしれない。

高尾山古墳が、鎮守の森という風景を借りて現在まで地域の方々に奉られてきた新の理由は奈辺にあるのかもしれない。そしてこの古墳の発見、位置づけにより風化し消えかかった古代スルガの風景が、今再び蘇る事を強く希望したい。

引用参考文献

1987『千代南原遺跡第 IV 地点』小田原市文化財調査報告書 22 集
卜部行弘 2004『前方後方墳　もう一つの主役』橿原考古学研究所付属博物館　秋期特別展図録
滝沢　誠編 2005『神明塚古墳（第 2 次）発掘調査報告書』沼津市史編さん調査報告書　第 15 集
赤塚次郎 2006「古墳文化共鳴の風土」『研究紀要』第 7 号　愛知県埋蔵文化財センター
中塚　武 2010「気候と社会の歴史を診る」『安定同位体というメガネ』地球研叢書

7．高尾山古墳の評価をめぐる二・三の問題

―ヤマト王権からみたその考古学的位置―

寺沢　薫

a．はじめに

私が高尾山古墳（当時は「辻畑古墳」と呼称）の重要性を初めて目の当たりにしたのは 2009 年 2 月 12 日のことであった。沼津市文化財センターの調査責任者であった高尾好之さんから連絡が入り、全長 60 mほどの前方後方墳が発見されて目下調査中だという。廻間Ⅱ式前半に併行するようなので是非にも来沼して意見や今後の調査方針を協議したいという。願ってもないことと、内容も十分聞かずに逸る気持ちで沼津へと駆けつけた。現地では赤塚さん、渡井さん、滝沢さんと合流して、周壕の土器の出土状況やすでに取りあげられていた一部の土器なども見学させていただいた。

正直なところ、その時の私は平面的にも立面的にも前方部が未発達な前方後方墳を頭に描いていた。しかし、目前にあるのは紛れもなく前方部が長大に伸び発達した前方後方墳であった（ただし、今はこれは「定形型」ではなく、「定形化」段階であるとの認識に至っている）。土器の検討では、周壕出土土器群にはグループがあり、土器の型式学的検討からすれば大廓Ⅰ～Ⅳ式までを含むので、築造時から埋葬後の追祭祀や混入までの時間幅が考えられるとの意見が大勢であり、とくに脚部に沈線をもつ高杯の一群や、後方部頂出土の小形二重口縁壷、パレス形壷破片などが高尾山古墳の築造時期を示す土器として、大廓Ⅱ式前半≒廻間Ⅱ式前半≒庄内 2 式≒廻間 SZ01 ≒弘法山古墳≒小松古墳≒高部 32 号墳という暗黙の基軸を形成していった（註 1）。つまり、列島最古の前方後方墳の一つがスルガに存在したという認識であった（註 2）。

この地域や伊勢湾系土器に疎い私にも高杯やパレス形壷は型式的には古く写った。畿内との併行関係については多少の異論はあるけれど、それ以上に、前方部がこれほど発達した大形の前方後方墳が確実に庄内式併行期に遡ることへの違和感を禁じ得なかったのである。なぜならば、高尾山古墳を始めこうした発達した前方部をもつ前方後方墳が庄内式新段階に成立していたとなると、逆になぜ畿内以西においてはこの段階に、こうした前方後円（方）墳が皆目確認することができないのかが説明しがたいからである。畢竟、私には庄内式段階に 60m 級の完成した前方後方墳がアフミ、シナノ、スルガなど東方に突然出現することの歴史的脈絡とは何か、その因果関係は何かが納得のいくようには説明できなかったからである。こうした思考のスタンスは旧石器捏造事件以来、私がもっとも心がけていることだからでもある。帰りの新幹線では畏友赤塚氏とのビール談義とあいなった。

その後幸いにも、埋葬施設の調査、副葬品と土器の検討会、さらには報告書に向けての実測図や遺構図の検討会等々にも出席でき、神明塚古墳や子ノ神古墳への踏査も果たすことができた。またこの間、私なりに県内各所の前期古墳の踏査や遺物の見学をおこない（註 3）、列島規模での前方後円墳と前方後方墳の出現についての因果関係を私なりに整理する機会も得た（註 4）。もとより小論は要請に応じて、報告書の報告部分の作成と併行して作文したものであり、万が一、最終的な（公的な）事実認識との間に齟齬や誤解があったとすれば、その議論は将来の別の機会に委ねざるを得ない。ここでの評価はあくまで、現時点での私論の延長線上にあることを明記しておきたい。

b．高尾山古墳の属性と特質―事実認識から―

⑴ 墳形と築造規格

高尾山古墳は前方部平面形が長大に発達した前方後方墳である。後方部の高さは現地表面から約 4 m～ 4.5m で、平均 4m 前後の盛土が確認されている。墳丘はほとんどが旧地表面からの盛土によって

成形されていたものと考えられる。後方部周囲は後世の削平を受け切岸状になっているが、墳頂部の削平は埋葬施設や直上の土器の出土状態から勘案して 50㎝ほどと考えられている。

前方部は神社の建設によって地山基盤層 YL 上面まで削平されているので、はたして前方部にどれほどの盛土が行われていたかは知る由がない。しかし、前方部周壕内への盛土土壌（NL 層下のスコリア SC Ⅱ・Ⅲや黒色土 BB Ⅱ・Ⅲの混入崩壊土）の堆積はほとんどみられないとされているから、前方部への盛土は顕著ではなかった可能性が高い。

墳丘の周囲には幅 7.023 m～ 9.1m の周壕がもうけられている。周壕は基本的には墳丘に沿って前方後方形にめぐるが、前方部前端に向かって細くなり、前方部前面の周壕は幅 2.5 m～ 3.2m と細い。また南東隅は幅 6.4m にわたって切れ、陸橋部を形成している。

築造平面規格の検討に拠れば、後方部は正四角形ではなくわずかに台形（北辺がわずかに短い）を呈し、前方部側線は I 点で屈曲をもって、それぞれが後方部中心点（Y）と主軸上の周壕外端点（A）と交点を結ぶ。広義の撥形と考えて大過ない。ただし、狭義の撥形とは築造の際の土木技術上の問題であろうか、後方部の頂点（一般には P 点とされ、報告書の P とは異なる）と交点を結ぶことによって派生されるものであるから、この点からすると本墳の場合はむしろ纒向型前方後円墳の連結部の形成にも通底する、後円（方）部から前方部へのスロープの急角度の調整の目的があった可能性が考えられる。この点からしても、前方部の盛土は少なかったと見積もるべきであり、前方部に顕著な盛土と頂部 P 点、さらには壇上部を形成するような立面的に発達した前方部（私のいう「定形型」）には至っていなかったものと考えたい。

興味深いのは、後方部周壕の北東隅と南西隅が隅角を呈さずに弧状（多角隅）を呈している点である。このことは、調査担当者が後方部の設計企画を半径 15.627m（Y-N、Y-Z、Y-L）の円形規格で考えていることと深く関係する。つまり、周壕幅 A-N は 7.023m であるから、後方部周壕は Y-A、Y-C の 22.650m を半径とする円規格ということになる。この円弧上には後方部南東隅（K）、そして前方部側線の両屈曲点（I・I′）が乗ることも重要である。さらに、B1、B2 の周壕北東隅弧を通る半径約 28m 前後の円弧をめぐらすと周壕屈曲部内角の E が、同じく半径約 32m の円弧上には周壕屈曲部外角の D が線上に乗ってくる。

一方、後方部の規格円と同等の半径 15.627m の円を、後方部と前方部の接点である Z に接して中心点 Y′をもって設定すると、前方部前端 R-T、前方部周壕の S、H、F などがこの円弧上に乗ってくる。同様に、Y-A、Y-C と同値の 22.650m を半径とする円を描くと、弧上には後方部南東隅（K）が交差するだけではなく、SD 2 の中心軸上の V もまた乗ってくるのである。

このように、高尾山古墳は前方後方墳とはいっても、平面形の築造規格に円形原理が働いていることは無視できない事実であろう。もちろんこれらの交点や位置は多少の誤差をもつものではあるが、それは現場での遺構計測点の選定の際の誤差や築造時の測量技術の精度も考慮しなくてはならない。こうした現地での測定値と測量図を介しての誤差はまた、古墳築造の基準単位、つまりは基準尺が存在したものと考えればなおさらのことであろう。

以上の円半径値や各遺構の計測値がいかなる基準尺に拠ったものであるかを判断することは容易でない。はたして前期古墳の築造に関して、従来その適用が指摘されてきた後漢尺、魏・晋尺、あるいは近年、新井宏氏によって主張される古韓尺なるもの[註5]についての適応性は如何であろうか。表 1 は高尾山古墳の計測値のうち、その有意性が想定されるいくつかについて、それぞれの基準尺を適応した場合の尺度を示したものである。計測値は主観を避けるために調査担当者が報告した測定値をそのまま資料として使用した。残念ながらどの基準尺をもってしてもその適応性は大きくない。

一方、私が纒向型前方後円墳においてその適用のもっとも有意な可能性を論じた魯班尺は、高尾山

第１表　高尾山古墳の計測値と尺度換算

測定部位	計測値（m）	後漢尺（尺）	魏・晋尺（尺）	古韓尺（尺）	魯班尺（尺）
墳丘長	62.178	266.856 265	259.075 260	232.876 230	195.436 200
後方部長（径）	31.254	134.137 135	130.225 130	117.056 115	98.237 100
前方部長	30.453	130.67 130	126.888 125	114.056 115	95.719 95
全長（SD ２まで）	76.098	326.601 325	317.075 315	285.011 285	239.189 240
後方部背周壕幅	7.023	30.142 30	29.263 30	26.303 25	22.074 20
くびれ部幅	9.717	41.704 40	40.488 40	36.393 35	30.542 30
後方部長辺（1/2）	24.482	105.073 105	102.008 100	91.693 90	76.951 75
後方部短辺（1/2）	17.085	73.326 75	71.188 70	63.989 65	53.701 55
土橋幅	6.4	27.468 25	26.667 25	23.97 25	20.116 20

凡例
1 表中下半部の網掛け部分は有意な計測値とは考えられない部位を示す
2 後漢尺は23.3㎝、魏・晋尺は24.0㎝で平均値を示し、古韓尺は26.7㎝、魯班尺31.81とする。
3 尺度換算値は小数点第４位を四捨五入した。
4 太字で示した尺度換算値は、５尺単位に置き換えたもっとも近似した数値を示す。
5 計測値（m）は恣意性を排除するために、報告書での計測値をそのまま採用した。

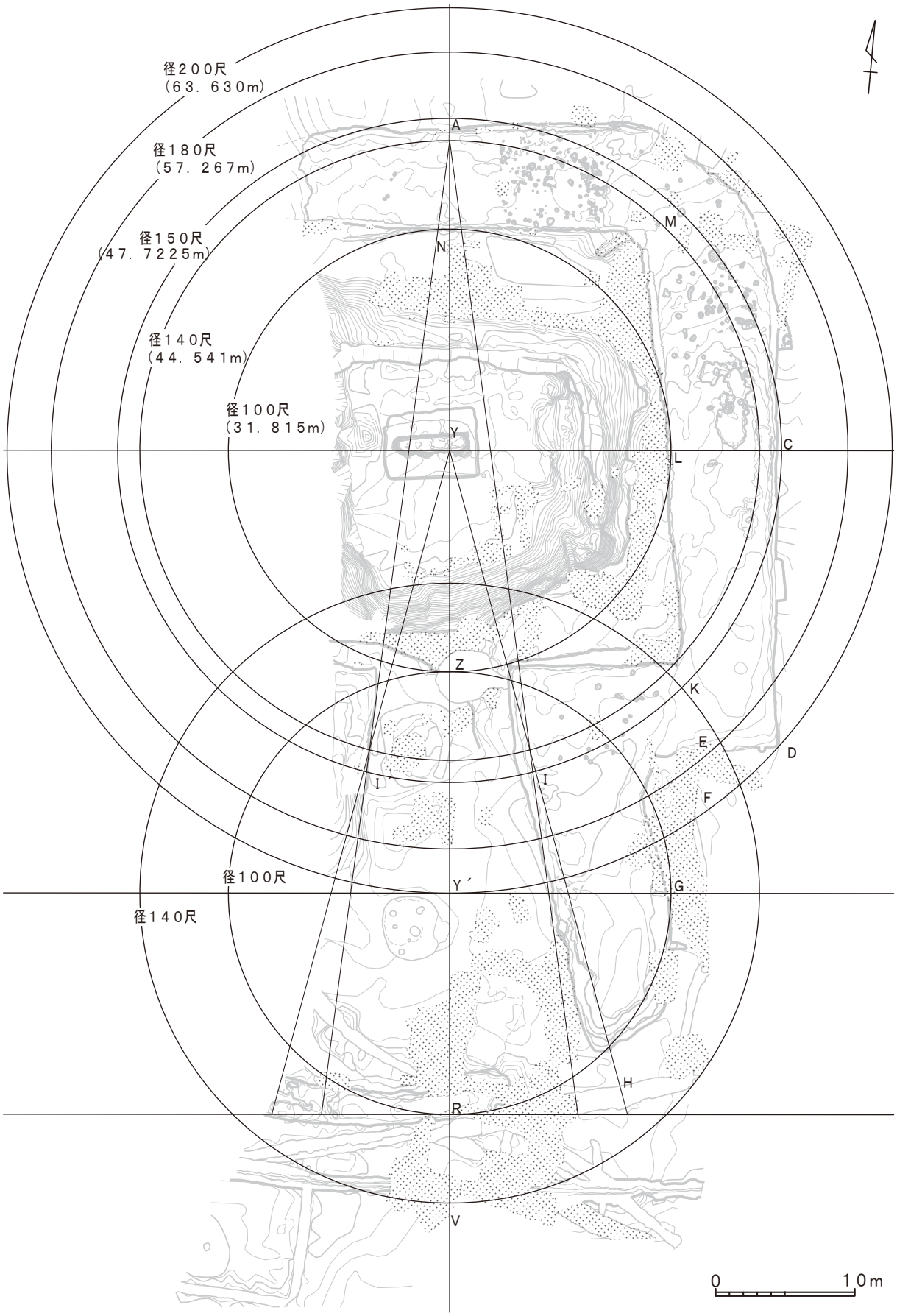
古墳についてももっとも適応性にすぐれた数値を示しているように思える。つまり、もし魯班尺が高尾山古墳の築造に適用されたものと考えてよいのであれば、前に見た円規格の半径（Y-N、Y-Z、Y-L）15.627m は 15.9075m（50 尺）に、周壕幅（A-N、C-L）7.023m は 6.363m（20 尺）ないしは 7.95375m（25 尺）で、Y-A、Y-C の円半径 22.650m は 22.275m（70 尺）ないし 23.86125m（75 尺）と考えるべきであろう。

このように考えれば、後方部長の 31.254m は 31.815m（100 尺）に、前方部長 30.453m も 31.815m（100 尺）に、墳丘長 62.178m は 63.630m（200 尺）に、周壕を含めた SD ２までの全長 76.098m は 76.356m（240 尺）または 79.5375m（250 尺）に、括れ部幅 9.717m は 9.5445m（30 尺）と設計企画を読み替えてみることが必然性を得てこよう。さらに、B1、B2 の周壕北東隅弧と E を通る円弧の半径約 28m とは 28.6335m（90 尺）なのであろうし、周壕屈曲部外角の D を通る円弧の半径約 32m とは 31.815m（100 尺）、土橋幅の 6.4m は 6.363m（20 尺）のこととなる。なお、周壕を含めた全長値 70.830m は 220 尺～ 225 尺と切りのいい尺度を示さず、むしろ後漢尺や魏・晋尺の方に有意性が感じられる。おそらくこの古墳の墓域は前方部前面の周壕ではなく、SD ２までとして企画されたためであろう。この意味で SD ２は墓域区画線であったものと考えられる（図 1 参照）。

とはいえ基準尺適用の問題は、現状では前期古墳の絶対的多数に関して厳密かつ積極的な根拠が整備されているとは思えないので、とりあえずここではその数値の比較例を披露することで、初期前方後円墳への円形規格の基準が高尾山古墳にも同等に採用されていた可能性を指摘するにとどめたい。

⑵ 埋葬施設と副葬品

高尾山古墳の埋葬施設は、後方部のほぼ中心に南北方向に企画された構築墓壙と、内部に設えられた刳抜き式船底形木棺である。 刳抜き式船底形木棺は近年、奈良県ホケノ山古墳や京都府黒田古墳、兵庫県権現山 1 号墳など、庄内 3 式～布留 0 式段階の古墳埋葬施設として事例を増しつつある。 副葬品は、破砕された斜縁「上方作」銘浮彫式（六像式）獣帯鏡 1、鉄槍 2、鉄鏃 32、鉇 1、石製勾玉 1 で、木棺痕跡の形状と副葬品の配置から東方頭位は間違いない。 これらの点では、「定形型」以前の様相を残しているとの評価も可能であるが、東方地域と前方後方墳では、北方頭位は「定形型」の時期決定要素とはならない。 また、木棺内落ち込み土上面出土の小形二重口縁壺口縁部 1、台付鉢（甕）脚台部 1、壺胴部 1、パレス形壺胴部細片 2 は、供献の可能性を想定する向きもある。



第１図　高尾山古墳の設計企画の推定

さて副葬品のうち、古墳の築造時期と被葬者像を考える上でもっとも注目すべきは中国鏡であろう。私見によれば、「上方作」銘浮彫式獣帯鏡が古墳出現期の時期の明らかな遺構から出土した例は 10 例あるが、福岡市野方中原遺跡 S1 石墓、京都府狸谷 17 号墓 M2 木棺墓、三重県東山古墳木棺など庄内 3 式併行期に遡る可能性があるものの、他はすべて布留 0 式に属している。しかも、東山古墳例は四像式、野方中原例と狸谷 17 号墓例は四像式で破鏡のため鏡縁形態も不明であるから、確実な斜縁「上方作」銘浮彫式（六像式）獣帯鏡は布留 0 式古相段階を遡らないことになる（註6）。

「上方作」銘浮彫式獣帯鏡は岡村編年の漢鏡 7 期第一段階に目されているが、列島での出土状況は明らかに第二段階の画文帯神獣鏡と同出ないし後出する。 漢鏡 6 期鏡が庄内式古段階まで、相変わらず北部九州を主体に分布していることから見れば、漢鏡 7 期鏡は、庄内式新段階になってようやく西日本各地や東日本にまで中国鏡の流入が顕在化した画期的な事態である。とくに六像式は四像式よりも面径が大きく、中東部瀬戸内から畿内に集中する傾向にある。東方へのこの種の鏡の流入に畿内勢力が関わっていた可能性は無視できない。いずれにせよ、鏡の示す年代観は遡っても布留 0 式古相段階に求めることが妥当と言えそうである。

なお鏡の破砕副葬という行為じたいは、中期初頭の長崎県里田原遺跡荻の下地区 3 号甕棺と佐賀市増田遺跡 6 区 SJ6242 甕棺の多鈕細文鏡が初現であるが、中国鏡では北部九州・後期 4 様式の佐賀県石動四本松遺跡 SJ-023 石蓋甕棺（異体字銘帯鏡）や福岡市飯氏遺跡Ⅱ区 K7 甕棺（四葉座鈕連弧文鏡）に始まり、北部九州で盛行し、後期末ないし古墳時代初頭には広く東方での副葬時に展開する（註7）。東方地域での破砕副葬鏡は岡山市矢藤治山古墳（纒向型前方後円墳、33m）から、福井市風巻神山 4 号墳（方墳、16.6m）、岐阜県象鼻山 1 号墳（定形型前方後方墳、40m）等まで、布留 0 式古相段階までは確実に存在し、鏡片副葬は布留 1 式併行期まで枚挙にいとまない。小山田宏一氏は三角縁神獣鏡副葬の思想的背景が破砕副葬鏡の終焉を促すと考えている（註8）。三角縁神獣鏡の副葬が布留 0 式古相段階の古墳まで遡らない現状では妥当な見解であろう。つまり、鏡の破砕行為という点からしても、副葬鏡式の示す埋葬（古墳築造）時期と矛盾するところはないのである。

今ひとつ注目すべき副葬品は鉄鏃であろうか。大きく柳葉式 14 と腸抉式 18 に分けられる。後者の内訳は腸抉の深い平根式 1 と浅い三角形鏃 17 で、後者は類例がない。腸抉式三角形鏃をのぞけば、型式的組成はホケノ山古墳に近い。しかし柳葉式には、ホケノ山古墳の主体を占める水野氏のいう小形 A 類は少なく、むしろホケノ山古墳にはない B 類、C 類という新しい型式が卓越している（註9）。腸抉式三角形鏃は類例がないが古くは福岡県津古生掛古墳から、滋賀県雪野山古墳、奈良県黒塚古墳などに類例をもつ小形多角形有稜鏃との関わりを考えるべきだろうか。鉄鏃から見た年代観もまたホケノ山古墳の庄内 3 式に遡ることはない。むしろ多くの布留 0 式期の副葬鉄鏃との類似を考えざるを得ないのである。こうしてみると、鉄槍 2 点も鉇もこの年代観に違和感を感じることはあるまい。古墳築造時期にもっとも発言力のあるべき副葬品の示す時期はこのように考えて大過ないものと思う。

⑶ 伴出土器の評価

埋葬施設に伴う副葬品以外で、高尾山古墳の遺構に伴う遺物には大量の土器がある。これらの土器群は＜Ⅰ＞墳丘内と＜Ⅱ＞周壕内に大別される。幸い調査担当者の方々の相当な努力によってすべての土器が平面、立面でプロットされているため出土分布を難なくみることができる。

それによれば、まず＜Ⅰ＞墳丘内の土器群はどのように評価できるであろうか。二度の検討会では、これらのうちにいくつかの土器に関しては供献、ないしは埋葬施設封土後の土器破砕行為も念頭に置かれているように思えた。確かに、埋葬施設の堆積土横断面に投影された土器の出土分布はあたかも墓壙に集中しているかに見える。しかし平面的な分布は、むしろ後方部全体に散漫に分布している。これはまた、保存を見越して墳丘の断割り調査など、後方部墳丘への発掘調査が中断されているためであって、

おそらく墳丘全体に調査が及べば墳丘の下部からもそれなりの土器群が出土するものと考えられる。

従って私は、現時点で墳丘上部盛土内から出土している土器群が埋葬にともなって供献あるいは埋葬後の儀礼等による破砕土器を含む資料とは断じがたいと思っている。とりわけ埋葬行為と何らかの関係を持つと説明されている小形二重口縁壷口縁部（1-14）や、壷胴部（T-95）、台付鉢（甕）、脚台部（3-23）、パレス形壷口縁部細片（T-114･119）なども、埋葬施設の直上から出土したということだけではその有意性は主張しにくいのではないか。これらの土器群はあまりに復元不能な細片過ぎ、通常の埋葬施設への供献や破砕集積土器との違和感を禁じ得ない。これらの土器群は墓壙内出土層位のバラツキからいっても、墳丘盛土中に混じた土器片の墓壙内への陥入と考えざるを得ないのである。

一方、＜Ⅱ＞周壕内の土器群についてもその有意性が前提になっている。ここでも平面的な分布をみると、周壕内にいくつかの集中範囲があり、一括集中破片が完形に復元される例も少なくない。こうした平面的状況からすれば、これらの土器群を周壕内への集中供献、あるいは廃棄とみることも不可能ではない。しかしそれを、築造時（あるいは直後）の供献（廃棄）→その後の土器廃棄・流入→追祭祀→後世の土器廃棄・流入というプロセスを反映しているとみるならばことは慎重を要する。その可否については古墳の築造時期決定とも絡んで等閑視できない問題であるので次項で再検討する。

むしろここで提起しておきたい問題は、前提としての周壕出土土器の性格そのものに関してである。そもそもこの古墳は、愛鷹山南麓の北から南に向かう低丘陵先端の緩斜面に築かれていて、古墳の築造に際して、墳丘北側ではBB Ⅰ層まで、南側では表土下に現れる黒色バンドまでがすっかり削平されていて、前者ではNL層が、後者では新期SC層が墳丘築造の基盤（作業面）となっている。墳丘東側では平安時代の竪穴住居がBB Ⅰ層上面で検出されており、深さは約50㎝を測るが、これに対して、古墳築造直前の経営と考えられている前方部下のSB 1や前方部外南西隅のSB 2は、わずかに平面プランと柱穴が痕跡として残る程度でその時期すら伴出遺物から特定できないほどだという。確かに先行する弥生時代後期と考えられている遺構（ほかにSX 1）や弥生～古墳築造時と考えられているSK 1は墳丘下に微かな痕跡をとどめているのに対して、平安時代の遺構（竪穴建物、溝、土坑など）のものは周壕外に検出されている。周壕上部出土の平安時代土器は周壕上の遺構出土ではなかったかとの憶測もあるという。

こうしてみると、たまたま標高の低い前方部やその前面にあった竪穴住居などだけが痕跡をとどめ、墳丘によって保存されたものと考えることができよう。造営直前には一体の広範囲にわたって集落が経営されており、古墳築造に際しての整地地業によって、とりわけ標高の高い北半部一体の多くの竪穴住居や土坑、溝などが跡形もなく削平され、遺物は破壊されて墳丘盛土中に混入したり、掘削された壕内に投棄されたであろうことは想像に難くない。さらにいえば、北半部周壕外の造営前の遺構にはこの平安時代の集落経営の際に削平された例もあったかも知れない。

つまり、様式的（編年的）に古いと考えられる一群の土器が存在するのであれば、こうして墳丘内や周壕でもとりわけ下部に集積されることは十分あり得ることなのである。私は後述する土器の出土状況からみても、周壕内の土器の大半は古墳造営前の集落に伴う土器群であるとみている。畢竟、高尾山古墳築造に伴うとされる古相を示すとされる一群の土器についても、築造時期との関係でいえば、その有意性はないものと考えざるを得ないのである。

c．高尾山古墳の築造時期

高尾山古墳の埋葬時期を決定する資料はいうまでもなく副葬品の種目にある。副葬品からの年代観（時期幅）はすでに前に述べた。一方、報告では伴出土器が築造から埋葬の時期、あるいは場合によっては古墳の追祭祀や後世の土器混入の時期をも考慮に含むと考えられるストーリーによって土器編年と築造

開始時期の推定が示されている。

しかし、伴出土器群の性格を上記のようにやや異なった視点から評価するのであれば、古墳築造の時期はおのずとこれら古相の土器群の時期に遡らせることはかなわない。そこで、今少しこれら土器群の出土状況と築造時期を古く考える年代観との関係をみていく必要がある。この地域の土器編年に不案内な私は、どうしても渡井氏の在地土器の編年観や、高尾山古墳築造時期の鍵を握るとされた伊勢湾沿岸部製（あるいは系）土器に対する赤塚編年から多くを学ばなければならない。

渡井氏は高尾山古墳出土土器を 4 段階に分期し、段階 1 を氏の設定する大廓Ⅰ式、段階 2 を大廓Ⅱ式、段階 3 を大廓Ⅲ式、段階 4 を大廓Ⅳ式（一部、中見代式段階）に対応させているようである。ただし、直口壷の顕在化という観点からすれば、段階 4 は「Ⅳ式新段階」といえるかも知れない。氏の併行観からいえば、大廓Ⅰ式は赤塚氏の廻間Ⅰ式 4 ～Ⅱ式 1 に、Ⅱ式は廻間Ⅱ式前半（中頃）に、Ⅲ式を廻間Ⅱ式末～Ⅲ式初頭、Ⅳ式を廻間Ⅲ式前半（中頃）に（註 10）、また畿内との関係では、Ⅲ式を米田敏幸氏の庄内式Ⅳ期、Ⅳ式を布留式Ⅰ期としている（註 11）。

渡井氏が高尾山古墳の S 字状口縁台付甕（以下、「S 字甕」と略称）をわずかに A 類を除いて、おしなべて段階 3 以降に置いたのは、「甕 A（在地産の S 字甕（註 12））の出現」が、大廓Ⅲ式の土器組成上の画期と見なすからである（註 13）。また杯部屈曲の高杯群（本報告の高杯 A）を段階 1 ～ 2 に置くのは、まさに駿河地方への S 字甕定着以前の廻間Ⅱ式初頭期の高杯の型式的位置に乗ったものといえよう。ちなみに、高尾山古墳の築造時期の年代観の鍵ともされる高杯 A のうち、脚上部に櫛描直線文を有する型式を最古に据えたのは、廻間Ⅱ -1 式期に典型とみたからであろう。いずれにせよ、高尾山古墳の築造時期が大廓Ⅰ式＝廻間Ⅰ - 4 ～Ⅱ - 1 式だという枠組みはこうした編年観の積み上げにある。

私は渡井氏の編年観を云々するだけの蓄積を持ち合わせてはいない。ただ、渡井氏の 4 段階分期が廻間Ⅰ式末期からⅢ期前半期にわたるものであり、1 段階こそが古墳築造期であるというのであれば、2 段階以降の土器はどのように位置づけられるのであろうか。おそらく、3 段階土器群は小形壷や小形鉢群の多数出土から、古墳への死者埋葬後の追祭祀の際に使用された供献土器の投棄などが想定されているのであろうか。

しかし、報告書で示された周壕の断面図と土器出土地点の投影プロットからはこれらの段階的土器群が層位（水準）的に新古の関係を示してはくれない。周壕北東隅の土器群では、層位的には段階 1 の高杯（3-2）、細頸短頸壷（1-19）も、段階 2 の大廓式壷口縁部（T-104）も、そして第 3･4 段階の直口壷（1-1・1-2・1-3・1-7・1-8）、広口壷（1-10）、短頸壷（2-11・2-12）、小形壷（1-5・1-32・4-1・4-2・4-4・4-8・4-9・4-12・4-19・4-32・4-35）、大廓式口縁部（T-103）、鉢（2-19・4-16）、S 字甕（2-15）も、段階 1 ～ 4 までの土器がほとんど壕底から遊離した状態で 2 層を中心に共存している。

こうした傾向は括れ部の土器群においても同様である。ここでも段階 1 ～ 3 の土器が溝底から遊離して 4 層を中心に共存する。なかには、段階 1 の高杯脚部（3-7）と甕上半部（2-31）は 4 層、甕口縁（T-24）は撹乱坑であり、段階 2 の甕上半部（T-27･2-34）の 5 層出土とは逆転関係になる例すら見られる。こと層位的な出土状況を見る限り、私には平安時代の土器群が最上層の 1 ～ 2 層にのみに分布することくらいしか土器の新古と層位を相関づけるだけの情報を得ることができない。

さらに括れ部では、段階 3 の小形広口壷（4-24･25）のように前方部墳裾に近い壕底（5 層）から出土した完形土器まであるから、壕底から遊離しているとはいえ、確かに段階 3 とされた多数の小形完形の壷や鉢の類こそ（あるいは段階 4 とされた直口壷群の一部も含めて）、高尾山古墳とは有意な関係で投棄された土器なのである。はたしてそれが築造に伴うものなのか、はたまた後世の追祭祀に伴うものとみるかは、総合的な判断が必要なようである。

後方部周壕東辺の土器出土状況はさらに興味深い。周壕北東隅でもそうした傾向はあるが、ここでは

広口壷（1-9）や小形壷（4-36、4-1、4-2、1-5、1-6）に破片の飛散した状況が見て取れることである。こうした目で見ると問題の高杯（3-4）も周壕東側の壕底に近く、東から投棄されたような位置にあるが、一部が 7m 離れて飛散している。また、高杯（3-2、3-3）は再掘削溝中で段階 3 の小形壷や広口壷計 8 点と共存している。ここでも層位的な有意性はみられないのである。段階 1 ～ 2 の土器群をもって高尾山古墳の築造年代とすることは、各所における土器の出土状況から判断して、極めて状況的根拠に乏しいと判断せざるを得ないのではないか。

ちなみに、あえて畿内ヤマトの土器製作技術からの目線でいえば、渡井氏の段階 3 の広口壷（1-32）の口縁部成形手法は布留式の技法である。墓壙上部から出土した小形二重口縁壷は畿内系であるが畿内製ではない。口縁部だけでは型式的にも時期決定は難しいが、東国でこうした畿内系小形二重口縁壷が出現する例は布留 0 式併行期（渡井氏の大廓Ⅲ式）を遡る例を知らない。ほかに近江北部製の甕の受口口縁細片 4 点も確認した。胴部が不明だが庄内 3 ～布留 0 式併行期であろう。

渡井氏の段階 3（大廓Ⅲ式）はおよそ私の布留 0 式に、段階 4（大廓Ⅳ）はおよそ布留 1 式に相当するようである。ただ私は、廻間Ⅱ式の後半から布留 0 式古相にオーバーラップする可能性大と考えているので、段階 2 の廻間Ⅱ式前半～中頃という想定は、やはり庄内 3 式～布留 0 式併行期だろうと思っている。問題は大廓Ⅰ～Ⅱ式の併行観だが、大廓Ⅱ式が庄内 3 式に併行するものとしても、Ⅰ式がはたして庄内式古段階（庄内 0 ～ 2 式）に併行するかどうかは未詳である。

以上、高尾山古墳出土の土器群の状況から、渡井氏の段階設定に頼った上で古墳築造の時期をあえて比定するならば、渡井氏の段階 1（とりわけ古相とされる伊勢湾沿岸系高杯など）を除く、段階 2 ないし 3、つまり大廓Ⅱ式（後半）ないしⅢ式（≒廻間Ⅱ -3･4 式～廻間Ⅲ -1･2 式）ということになろう[註 14]。私なりに言い方を換えれば、それは庄内 3 式併行期に遡る可能性は否定できないが、ほぼ布留 0 式古相併行期と考えることが妥当ということである。そしてこの年代観は前の副葬品による年代観とも合致する。

d．駿河における高尾山古墳の考古学的位置

さて、富士川以東の駿河東部（駿東郡）の前期前半期の古墳を瞥見すると、丸ヶ谷戸遺跡前方後方墳を最古に、高尾山古墳、神明塚古墳、子ノ神古墳、向山 16 号墳などが知られているようである[註 15]。

このうち最古の築造と考えられているのが富士宮市丸ヶ谷戸遺跡前方後方墳[註 16]で、墳長 27m、周壕までを含む全長は 32m を測る。後方部長は 18m であるから、私のいう纒向型前方後円墳規格の前方後方墳ということになる。墳丘は完全に削平されているが、前方部への盛り土はごく小さかったはずである。築造時期は周壕上部出土の土器片が竪穴住居 02 床面出土の伊勢湾沿岸部系高杯と接合関係にあることから大廓Ⅰ～Ⅱ式（≒廻間Ⅱ式前半≒庄内 2 ～ 3 式）と考えられている。しかしこの土器をのぞいて前方後方墳に確実に伴う土器は不詳であり、竪穴住居 02 の廻間Ⅰ式に遡りそうな高杯脚裾部や、逆にⅡ式後半以降に下りそうな手焙形土器の混在が気になる。仮に前方後方墳が竪穴住居 02 に先行したとしても私見では庄内 3 式併行期である。

沼津市神明塚古墳[註 17]は、駿河湾と潟湖（浮島沼）に挟まれた砂礫堆上に築造された墳長 57m、後円部径 38m、前方部長 19m の纒向型前方後円墳である。前方部は測量図では頂部（P 点）が存在するかに見えるが、踏査した感触では平坦感があり、後円丘に比べると比高差が 3m もある。ⅡA－α 1・2 類型であろう。周壕の存在は明確でない。墳丘全体にわたってトレンチ調査がなされ、墳丘内外から土器片が出土している。報告者は廻間Ⅲ式前半、渡井氏は築造前の弥生土器を除く大廓Ⅰ～Ⅲ式を築造期にあてている。しかし明らかな弥生後期中葉の土器が包括されているのであれば、「大廓Ⅰ・Ⅱ式土器」もまた築造以前の混入を疑うべきである。壷、甕、鉢、高杯のうち本墳の築造に確実に伴った可能

性のある土器は二重口縁壺の細片５点であろう。焼成前底部穿孔の存在から布留０式以降と考えている。結果的には渡井氏も、土器群中のもっとも新しい土器の時期から大廓Ⅲ式と認定しているので大過はない。

沼津市子ノ神古墳は、愛鷹山南麓の高尾山古墳の西 1㎞の丘陵上に築造されている。高尾山古墳同様、浮島ヶ原低湿地と奥の扇状地を広く望む。 測量調査とわずかなトレンチ調査によって墳長約 64m、後円部径 36m、前方部長 28m の前方後円墳と考えられているが（註 18）、渡井氏の指摘通り、「前方部の長さは調査時の見解より更に短くなる」（註 19） ことは必至で、私は墳長 53m、後円部径 35m、前方部長 18m の低平で撥形に開くⅡ A －β 1 類型の纒向型前方後円墳を想定している。壺胴部破片が伴出しており、築造時期は大廓Ⅲ・Ⅳ式に普遍化する大廓式特有の折り返し口縁壺との渡井氏の指摘（註 20） に同調する。

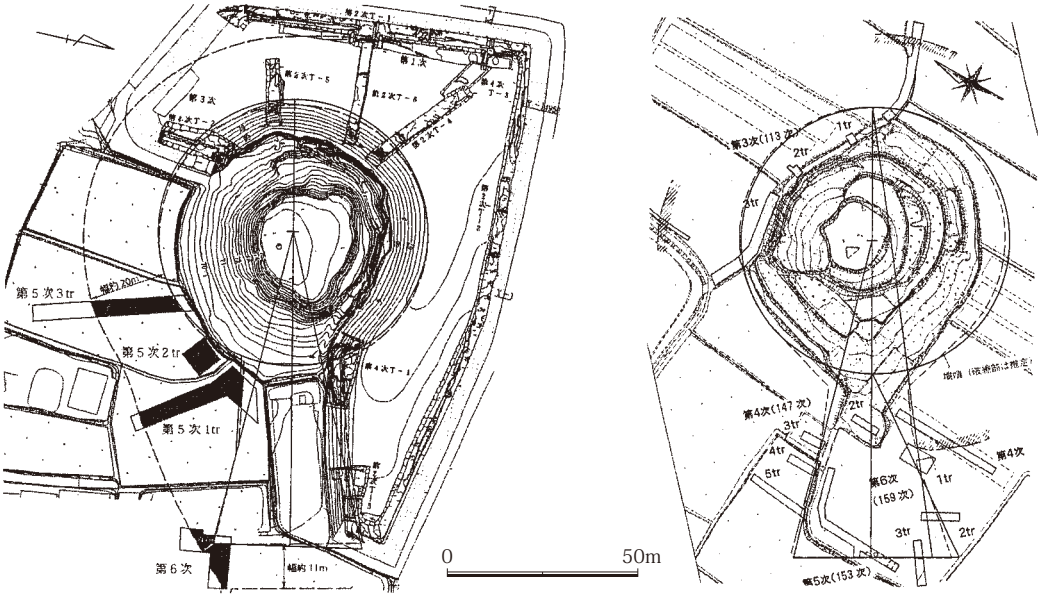
三島市向山 16 号墳は箱根山西南麓の丘陵末端に築かれた前方後円墳で、田方平野を一望できる。墳長約 70m、後円部径約 40m で、やはり葺石も埴輪も伴わない。後円部と前方部の比高は 3m というから、前方部の低平さは目立つものの前方部は明らかに発達した「定形化」前方後円墳であろう。主体部は竪穴式石槨が判明している（註 21）。時期決定資料を欠くがやはり大廓Ⅲ～Ⅳ式期と考えて大過あるまい。

そこで高尾山古墳の築造時期をこれらの古墳との関わりにおいて奈辺に位置づけるかである。すでに高尾山古墳の築造設計の規格については、第 1 項で詳しく見てきたように、墳長は 63.63m、後方部長（円の径）は前方部長（円の径）に等しく 31.815m であった。仮にその数値や想定する基準尺に齟齬があったとしても、三者の比率がほぼ 1:0.5:0.5 であることには大過あるまい。後述する定形化前方後円（方）墳の比率から 1：0.6：0.4 までを許容範囲にとれば、こうした比率を示すほぼ同時代、同規模の前方後方墳には、滋賀県小松古墳（約 60m）、大森古墳（約 60m）、愛知県市杵嶋神社古墳（約 60m）、長野県弘法山古墳（約 63m）、富山県勅使塚古墳（66m）、埼玉県三ノ耕地遺跡 1 号墳（69m）など東方に類例が多く、同範型で設計された可能性があろう。また、石川県国分尼塚 1 号墳（53m）、滋賀県冨波遺跡前方後方墳（42m）、兵庫県権現山 51 号墳（48m）、岡山県七つ執 1 号墳（45m）、備前車塚古墳（48m）などは 2/3 ないし 3/4 サイズで企画された可能性がある。

後方部が矩形となり括れ部の締まった前方部を示すのも、ほかの前方後方墳とはやや異形である。これも円系規格で設計され、前方部撥形を意識した結果なのであろうか。しかし、高尾山古墳がこれらの定形型前方後円墳や定形型規格の前方後方墳と決定的に異なる点は、第一に、前方部が極端に低平であったこと、第二に周壕が墳丘と相似形をなし前方部全面の濠が狭いことである。

そこで注意されるのが、私がヤマトの纒向遺跡において、纒向型前方後円墳と定形型前方後円墳とを型式的にも時間的にもつなぐ中間的な墳形として提唱した「定形化」前方後円墳の存在である（註 22）。纒向勝山古墳も纒向東田大塚古墳も墳長は約 120m、後円部径約 70m、前方部長約 50m とされるけれど、魯班尺を適用すれば、その数値は墳長 117.716m（370 尺）、後円部径 69.993m（220 尺）、前方部長 47.723m（150 尺）と考えられ、その比率は 1：0.6：0.4 となる。高尾山古墳よりも前方部長の比はわずかに短く未発達であるが、何よりも前方部が低平であるという共通点がある。周濠出土土器から勝山古墳は庄内３式ないし布留０式古相段階、東田大塚古墳は布留０式古相段階と考えられるから、私は高尾山古墳の築造の背景に、ヤマトにおける「定形化」前方後円墳の誕生が直接的な関わりを有している可能性を模索すべきだと考えている（図２参照）。

そもそも、駿河東部地域の最初期の古墳において、纒向型前方後円墳や纒向型規格の前方後方墳が存在することじたいも、ヤマトとの関係を等閑視することができない事情を示している。こうした状況は近隣では、駿河西部の午王堂山 1 号墳（纒向型前方後円墳、48m、布留０式古相併行期？）→神明山古墳（定形型前方後円墳の「箸墓類型」、69m、布留０式新相併行期）→午王堂山３号墳（定形型



纒向勝山古墳（定形化ⅠA—β2）　　纒向東田大塚古墳（定形化ⅡA—α2・β1）

第２図　纒向遺跡の「定形化」前方後円墳の築造企画 (註４ 寺沢文献に拠る)

前方後方墳、78m、布留０式新相～１式併行期？）や、遠江の新豊院山 D-2 号墳（纒向型前方後円墳、29m、布留０式新相併行期）でもみられる現象である。

さらに相模の秋葉山古墳群では、纒向型前方後円墳の３号墳（53m、庄内３式併行期？）に続いて、→庄内３式ないし布留０式古相併行期の２号墳（纒向型前方後円墳、53m）と４号墳（纒向型規格の前方後方墳、38 m）が前後して築造され、最後に定形化前方後円墳である１号墳（59m、布留０式新相併行期？）と５号墳（方墳、20m）が築造されるという興味深い手順が知られる。

また上総の国分寺台遺跡群でも、神門５号墳（43 m、庄内３式併行期）→４号墳（48 m、庄内３式ないし布留０式古相併行期）→３号墳（53m、布留０式古相併行期）という纒向型前方後円墳の築造に隣接して、諏訪台 33 号・セ -128 号墳（各 18m、16m、庄内３式ないし布留０式古相併行期)、東間部多２号墳（35m、布留１式）など小規模な纒向型規格の前方後方墳の築造が促されている。これらの築造場所が各地域での重要な交通路や要衝にあることも重要である。ちなみに秋葉山古墳群は相模国分寺、国分寺台古墳群は上総国府や国分寺の立地環境にある。

こうした例は東海道に限られることではない。北部九州の福岡市那珂遺跡群でも那珂八幡古墳（纒向型前方後円墳、86m）の築造後に小規模な纒向型規格の前方後方墳２基（19m と 29m）が確認されているし、東北南部の福島県会津坂下町臼ガ森古墳（纒向型前方後円墳、48m）の築造後に 13 m～24m の小規模な纒向型規格の前方後方墳７基が知られている。両者が存在するところ、纒向型前方後円墳の先行性と規模の卓越性は疑問の余地がない。

こうしてみると、高尾山古墳の築造にはヤマトを震源とする「定形化」前方後円墳の影響が、駿河東部地域における古墳築造の契機という点では、さらに型式的に先行する纒向型前方後円墳の築造も何らかの影響を及ぼしていたらしいことは無視できない。高尾山古墳の築造はこうした点からいっても、庄内３式併行期に遡る可能性は希薄であり、ましてや大廓Ⅰ式後半＝廻間Ⅱ -1 式（≒庄内２式）期にまで遡るかのような論調には到底与することはできないのである。

ｅ．高尾山古墳の被葬者像と重要性 ―ヤマトとオハリのはざまで―

高尾山古墳の築造の背景に、ヤマトの「纒向」に三世紀初頭に突如出現し、古代史上「ヤマト王権」

と呼ばれる新生なった倭国の政治体制との関係性の表徴として、そのイデオロギーの産物でもある前方後円墳の出現が影響を及ぼしていたのであれば、それでは高尾山古墳はなぜ前方後方墳なのか、またヤマトとの関係性の如何が問われることになろう。しかしこの問題は簡単ではない。関係性の直接的、間接的の如何、政治的・祭祀的、経済的な関係性の強弱には実に複雑な事情が内在していたように思える。

私には前方後円墳と前方後方墳に対する基本的なスタンスがある。前方後円墳という「かたち」や巨大な墳丘、諸々の構造や設備は、王権の大王の墓たる権威と階級的隔絶性を誇示し、大王を頂点とする新生倭国の政体に参画する各地の首長（王やオウ）との政治的関係を単純化、画一化、階層化し、それをビジュアルに人民の目前に晒すことで、中央－地方の関係を構築するためには有効なオブジェであった。

しかしそれだけではない。この新たな政権は、亡き大王の霊を次なる大王が引き継ぐという秘儀を執行することで、王権（ないしは首長権）を継承しうるという哲理を創出し、前方後円墳をその舞台装置として演出したのである。円形と矩形という二元的世界を合体させた舞台は霊を鼓舞、増幅し、この継承を滞りなく成就させるための観念の産物でもあったと考えている（註23）。

そもそも前方後円墳は、北部九州からキビ、サヌキ、ハリマ、アワなど瀬戸内海沿岸地域の前段階までの首長墓やマツリの諸属性が経時的に選択、凝縮され、新たな神仙的思想が加わって再構成されているのであって、前方後円墳とはまさしく identity（idea）と originanality（origination）が充満したオブジェなのである。それに対して、前方後方墳の系譜をいくら弥生時代の方系墓のなかに求めようと、設備を比較しようと、前方後方墳には前方後円墳に対峙するだけのそうした観念と哲理が脈打っているようには思えない。この点で私は、前方後円墳の被葬者を徳川幕藩体制の譜代大名に、前方後方墳を外様大名にたとえた都出比呂志氏の analogy には一定の共感を覚える（註24）。こうした観点から、各地域の前方後方墳の築造の背景を想定してみよう。そこには次のような事情と経緯が予測できる（註25）。

Case-A：王権との直接的で一次的な政治的関係によって築造される場合。当然に当該「地域」最古の古墳であることを一般とする。大共同体（クニ）首長以上の大規模な前方後方墳も想定されるが、被葬者と王権との関係は王権成立当初からの参政ではなく、概してやや遅れて王権の地域拠点への新規テコ入れに際して同調した外様的性格の強い人物が予測される。王権との政治的パイプは前方後円墳に比べて軟弱だが、地域的独自性と自主性は高い。

Case-B：各地域の先行する前方後円墳被葬者（王権との政治的関係が堅固な一次的参画者）の政治的介在によって、王権との間接的な政治的関係によって築造された場合で、「地域」が小共同体規模であるか大共同体（クニ）規模であるか、はたまた大共同体群（国）規模であるか、その地域統合の状況によって規模も副葬品内容も画一的ではあり得ない。

Case-C：各地域の先行する前方後方墳被葬（Case-A ないし B によって築造）との政治的紐帯によって、間接的に王権との二次的、三次的な政治的関係へと与された場合。小共同体規模かせいぜい大共同体（クニ）規模と考えられ、被葬者の王権との政治的関係や地域社会における階級的位相は大きくはない場合が一般的であると考えられる。

Case-D：王権との政治的関係性を一切排除した築造背景を想定する場合。政治的には各地域の先行する前方後方墳被葬者との同等ないしはそれに近い関係性が推察される首長層で、在地性の強い地域内での社会的、文化的影響のもとでの派生を想定した場合である。

Case-A ～ C は、前方後方墳の築造についても王権との何らかの政治的関係の存在を認めることになるのに対し、Case-D はそれを認めないことになる。Case-A と B は前方後方墳としてはより強固な王権との政治的関係を想定することになり、こうした体制が貫徹されているとすれば、先行する前方後円墳や前方後方墳の被葬者が、a：纒向型（規格の）前方後円（方）墳か、b：定形化前方後円（方）墳か、c：

定形型前方後円（方）墳かによって、築造される墳形も規定されるという厳密さすら想定される。前方後方墳の規模や副葬品目の豊富さは当然、Case-A が卓越し、Case-B、C がこれに続くことになる。とくに Case-A の場合は、その段階においては地域における突出した規模と副葬品内容をもった首長墓ということになるのではないか。

翻って駿河東部の状況を見ると、最古の丸ヶ谷戸遺跡前方後方墳は Case-A となる。副葬品内容は不明だが、墳長 27m と小規模であるのは、築造時期が庄内 3 式に遡る可能性があり、この段階では王権の纒向型前方後円墳の規模じたいが 96m だからである。神明塚古墳は纒向型前方後円墳であるので、布留 0 式段階になって新たに王権との政治的関係を締結した首長であったろう。子ノ神古墳も纒向型前方後円墳と考えられるので、王権との直結したパイプはそのまま次代へと引き継がれたことになる（註 26）。

これらの古墳は「駿東郡」（律令期には「駿河郡」）に相当するので、仮称「駿河」のクニに属することになる。しかし、現沼津市域と、現富士宮市・富士市域は領域面積からして別々の大共同体と考えるべきであるから、神明塚古墳と子ノ神古墳はいま仮に「駿東」のクニ、丸ヶ谷戸遺跡前方後方墳は「駿西」のクニと仮称しておくことにする。それぞれは別個に王権との関係を築いたと考えるべきであり、前者は甲斐へのルートの入り口としての介在役として、後二者は潟湖の奥まった場所に位置し、王権にとっては向後の東国支配の東海道ルート上の港市としての有効性に注目した結果であろう。

高尾山古墳も「駿東」のクニに属する。それどころか子ノ神古墳とは愛鷹山麓の遺跡群（足高尾上遺跡群）の南端にあたる至近距離にあって、領域的には同一小共同体の可能性がある。子ノ神古墳との先後関係は明らかでないが、いずれにせよ高尾山古墳は纒向型規格ではないので Case-A となる。王権は東海道ルート上の港市としてのこの地への最初の方策として、まずは愛鷹山南麓遺跡群小共同体から広く、浮島ヶ原周辺やその奥に展開する扇状地の小共同体の支配と開発に乗り出しつつあった「駿東」大共同体（クニ）の大首長（オウ）との双方的政治関係を持ち込んだのではなかったか。そしてこの場合の王権とは、纒向型前方後円墳を擁した王統とは別の、「定形化」前方後円墳を擁した新たな王統ではなかったかとも考えている（註 27）。

一方、神明塚古墳を布留 0 式併行期でも高尾山古墳に後続すると見てよいのであれば、それはすでに「駿西」のクニとの双方的政治関係を作り上げていたにもかかわらず、もはや王権内部では旧王統派となった「纒向型」系列との、再度の直接的関係（ストレートな政治的締結か）を明示するものであった（註 28）。港市を望む砂礫州上の「前方後円墳」こそは東方支配に向けてのシンボリックな楔でもあったと思うのである。こうした経緯と状況を見るとき、王権内の複雑な王統の実態と地域首長との重層的かつ複雑な関係性を物語っているように思えてならない（註 29）。

f．おわりに

最後に一言付記しておきたい。小論は私が初めて調査中の高尾山古墳の上に立ち、多量の遺物を目の当たりにしたときの感動と、反面、「最古の前方後方墳」とか「濃尾地域との深い関係をもつ多様性」といった囁きへのギャップと違和感を、現時点で与えられたデータをもとに書き綴ったものである。結果、築造時期については大方の見識とは異なり、やや新しいところに着地する結果となった。また、高尾山古墳（前方後方墳）は王権（前方後円墳）に対峙する反体制世界のオブジェという評価ではなく、王権の東方支配という政治的ベクトルに、間接的とはいえ連動していた点こそを評価しようと試みた。

しかし、このことは決して高尾山古墳のスルガにおける先進性や地域的独創性までを損なうことにはならない。いやむしろ、スルガという一地方の、そのまた小さな「駿東」という一つのクニが、すでに誕生して一つの画期を迎えんとしていた「倭国」という新体制（王権）との間に、直接、間接を問わ

ず、どのような政治的決断を模索し、この地域を創世期にあった列島史の一員へと押し上げていくことになったかを客観視するとき、この古墳の歴史的価値を地方と列島という重層性のなかで相乗的に高める結果となったものと確信している。そうした激動の時を経て、1700 年以上の長きにわたって巨大な前方後方墳という痕跡をとどめ現在に至った高尾山古墳の姿を、現代の叡智を持って後世に保存させることこそ今の我々の使命であろう。

註

1．目下、こうした年代観の牽引役は、廻間編年と前方後方墳＝狗奴国起源論の立役者である赤塚氏だが、かつては赤塚氏も弘法山古墳などを私のいう布留 0 式段階と考えていたという興味深い事実がある（赤塚次郎「前方後方墳覚書 89」『考古学ジャーナル』N0.307 1989 年）。

2．私にとってみれば、スルガ最古の前方後方墳は丸ヶ谷戸遺跡の前方後方墳であるので、「最古」（グループ）という認識にさほど驚きはしない。しかしこれを前方後方形周溝墓とみる大方にとっては、高尾山古墳はスルガ（いや列島においても）「最古」（グループ）の前方後方墳なのである。

3．多忙のなか、踏査や議論に参加くださった磐田市教育委員会木村弘之氏、浜松市教育委員会鈴木敏則氏、久野正博氏、栗原雅也氏、袋井市教育委員会松井一明氏、白沢崇氏、静岡県教育委員会中嶋郁夫氏らに感謝したい。

4．寺沢 薫「第二部第四章 前方後円墳出現論－纒向型前方後円墳再論－」『王権と都市の形成史論』吉川弘文館 2011 年

5．新井 宏『理系の視点から見た「考古学」の論争点』大和書房 2007 年

6．寺沢 薫「古墳時代開始期の暦年代と伝世鏡論（上・下）」『古代学研究』第 169・170 号 2005 年

7．寺沢 薫「首長墓の出現と副葬品」『考古資料大観』第 10 巻（弥生・古墳時代 遺跡・遺構）小学館 2004 年

8．小山田宏一「破砕鏡と鏡背重視の鏡」『弥生文化博物館研究報告』第 1 集 1992 年

9．水野敏典「古墳時代前期柳葉式鉄鏃の系譜」『橿原考古学研究所論集』第十五 八木書店 2008 年、水野敏典「前方後円墳出現前後の副葬品構成と鉄鏃－副葬品から見たホケノ山古墳の検討－」『ホケノ山古墳の研究』（橿原考古学研究所研究成果 第 10 冊）橿原考古学研究所 2008 年

10．渡井氏の伊勢湾沿岸地域（赤塚編年）との併行関係観については、氏の今までの業績や検討会での御教示を参考としたが、最終的には本報告書における渡井論文の校正稿を参考とした。

11．渡井英誉「東駿河における布留式併行期の様相（補遺）－前期古墳の年代を再検討する－」『静岡県考古学研究』No.41・42 2010 年

12．本報告書では、S 字甕は、「甕 E」に分類され、伊勢湾沿岸部製の S 字甕は「甕 E1」、在地製のそれは「甕 E2」に分類されている。なお赤塚氏によれば、前者の S 字甕（2-15）は S 字甕 B 類であるという。

13．渡井英誉「芙蓉の甕－富士もしくは岳南地域の S 字甕を考える－」『静岡県考古学研究』No.32 2000 年

14．ただしこのことは、渡井氏の編年案に基づく段階設定を是認するわけではない。すでにふれてきたように、高尾山古墳出土土器の新古は認められるが、段階 1 と 2、段階 3 と 4 ははたして分別可能なのか、2 と 3 の明確な時間差と弁別はあるのかなどである（渡井英誉「大廓式土器小考－大廓式土器の画期とその展開－」『庄内式土器研究』ⅩⅥ 1998 年）。

たとえば一例を挙げると、私見では、大廓式に特有な有段口縁大形壷の口縁端部内面の肥厚現象には、庄内式土器から布留式土器の口縁端部肥厚技法が影響しているのではないかと考えている。とすれば、庄内式併行期のものは口縁端がまっすぐに立ち上がるタイプが主体で、その後半期でも末に近い併行時期に、小規模な折り返しないしは付加状肥厚が始まり、典型的な平坦面を強調した大規模な貼付肥厚などは布留式併行期から出現すると見ている。肥厚部上端面が内傾するタイプが比較的新しい様相に位置するのもそうした背景によるのであろう。こうした視点に立てば、高尾山古墳出土の大形壷口縁部 3 片はいずれも布留 0 式併行期（その新古はあるにしても）のものということになる。

15．渡井英誉「東駿河における布留式併行期の様相（補遺）－前期古墳の年代を再検討する－」『静岡県考古学研究』No.41・42 2010 年

16．馬飼野行雄・渡井一信・山上英誉編『丸ヶ谷戸遺跡』富士宮市教育委員会 1991 年

17．滝沢誠・篠原和大編『神明塚古墳』沼津市教育委員会 1983 年、滝沢誠・篠原和大編『神明塚古墳（第 2 次）発掘調査報告書』沼津市教育委員会 2005 年

18．山本惠一「沼津市子ノ神古墳確認調査報告」『静岡県の前方後円墳』静岡県教育委員会 2001 年

19．渡井英誉「東駿河における布留式併行期の様相（補遺）－前期古墳の年代を再検討する－」『静岡県考古学研究』No.41・42 2010 年

20．渡井英誉「東駿河における布留式併行期の様相（前）－土器片年の設定－」No.28 1996 年

21．芦川忠利「向山古墳群」『文化財年報』第 18 号 三島市教育委員会 2006 年

22．（註 4）に同じ。以下の纒向型前方後円墳、纒向型規格の前方後方墳、定形化、定形型前方後円（方）墳についての説明と原報文はこれに拠りたい。

23．寺沢 薫「第三部第二章 首長霊継承観念の創出と前方後円墳祭祀の誕生」『青銅器のマツリと政治社会』吉川弘文館 2010 年

24．都出比呂志「前方後円墳墳出現期の社会」『考古学研究』第 26 巻第 3 号 1979 年、「前方後円墳の誕生」『古代を考える 古墳』吉川弘文館 1989 年、「日本古代の国家形成論序説－前方後円墳体制の提唱－」『日本史研究』第 343 号 1991 年（のちに『前方後円墳と社会』塙書房 2005 年に収録）

25．ただし、前方後方墳の出現背景をめぐる想定案にはイヅモ（山陰）は含まない。そこでは四隅突出方形墓が、布留 0 式併行期にいたっても前方後円（方）墳を寄せ付けずに存在するからである。

26．布留 0 式古相段階ではすでに定形型前方後円墳の典型ともいえる箸墓古墳の築造が始まり、埋葬を終えている。私は箸墓古墳の被葬者である大王は、纒向型前方後円墳の被葬者である大王とは王統を異にしていたものと考えているが、纒向型前方後円墳を擁した王統もいぜん大王家を構成する重要な位置を占め、弱体化したとはいえその政治的覇権を一定地方首長との間で顕示していたものと考えている。

27．赤塚氏の主張を援用すれば、その場合の仲介者として伊勢湾沿岸地域の政体が浮かび上がってくることにもなる。

28．一方、高尾山古墳と神明塚古墳の被葬者が同世代の人物であったのであれば、「駿東」のクニにはいまだ二系統の首長（つまり二つの小共同体首長）が併存し、それぞれが大王家のなかの別王統と政治的関係を模索したという解釈も不可能ではない。しかし布留 0 式段階での古墳の規模から考えても、小共同体首長墳としては大きにすぎよう。やはり大共同体首長（オウ）級の、世代の異なる先後関係を考えるべきであろう。

29．なお付記すれば、「廬原」大共同体（クニ）では、午王堂山 1 号墳（纒向型前方後円墳、48 m、布留 0 式古相併行期？）→神明山古墳（定形型前方後円墳の「箸墓類型」、69m、布留 0 式新相併行期）という大共同体首長（オウ）が世代を継いで同一小共同体から排出され、それぞれ時の王権と堅固な政治的関係を締結してきた可能性がある。

8．高尾山古墳とその被葬者

大塚初重

a．はじめに

静岡県沼津市東熊堂字北方に存在する高尾山古墳は、墳丘長約 62 mの前方後方墳である。2005 年（平成 17）頃までは方墳と見られていたが、2007 年（平成 19）に行われた第２次の試掘調査によって前方後方墳であると確認され、共伴土器の型式から静岡県下における最古級の古墳と考えられるようになった。翌年から高尾山古墳の本格的な調査が開始され、前方部長 30.77 m、後方部長 31.41 m、墳丘北側の周溝底面から墳丘頂部までの比高は約 4.7 mであることが確認された。

県下においても最古の古墳であり、しかも前方後方墳であったという事実は、多くの考古学研究者の注目するところとなった。

2009 年（平成 21）の古墳主体部を中心とした発掘調査では、後方部墳丘頂部および後方部北側から東側一帯にかけての周溝内より大量の供献土器が発見された。これらの土器が静岡東部において古墳出現期に編年されている大廓式土器であったことが、高尾山古墳の年代決定に直接影響を与えることで注目されたのであった。そのうえ大廓式土器群とともに、「外来系土器」と呼ばれている地元の静岡東部以外の地域的特性をもつ土器群が多く伴出することも問題になった。それら外来系土器群は調査者らによって「北陸系」「近江系」「東海西部系」「関東系」などと称される地域色の濃い土器だったのである。

b．古墳のもつ問題点

近年の日本考古学研究の中で、列島内の各地域における人とモノの交流の問題は、地域社会の発展と変革に大きな影響を与えるものとして注目されている。

高尾山古墳の被葬者の埋葬に際して、盛大な葬送の儀がいくたびか執行されたことは、大量の土器の供献から十分に想定できる。地元の沼津地域の土器群とともに他地域の「外来系土器」が存在することは、各地から搬入された土器と見るか、沼津に移住した各地出身者の製作になるものと理解するか、高尾山古墳の性格論に大きく影響するところである。さらに高尾山古墳出土土器の中に、畿内系土器群がほとんど含まれていないという所見が報じられていることも、本古墳土器群の示す大きな特徴といえるであろう。

高尾山古墳の造営に際しても、また執行された葬送の祭祀についても、畿内地方の関係者の参加が無かったことの証しかもしれない。すなわち高尾山古墳被葬者の生前の歴史的性格の一端 ―在地的な沼津周辺地域出身者であること― を物語っているのかもしれない。さらに重要な事実は、東海西部系土器の中にいわゆる「パレススタイル壺」が相当量含まれていることで、被葬者の遺体埋葬に際して、パレススタイル壺の破砕行為などがあったのかもしれない。

これらの外来系土器が示す型式特徴によって、高尾山古墳の造営年代をかなり絞り込むことが可能である。高尾山古墳の被葬者がとくに東海西部系地域と関係の深い人物であったのかどうか、この点は伊勢・尾張・三河地域からの外来系土器群の型式と年代が大いに問題となろう。東海西部地域からの搬入土器とみられるＳ字口縁甕形土器Ａ類からＢ類の変化、また高坏や小型高坏・器台などの型式から、東海西部地域の廻間遺跡の出土土器との関係が問題となり、高尾山古墳最古（段階１）の土器群である大廓Ⅰ式は、廻間Ⅰ式期４～Ⅱ式期１に併行する年代が考えられている（本書第Ⅵ章２渡井英誉「高尾山古墳の出土土器について」）。

高尾山古墳出土の土器群は多量であり、出土状態と出土位置から考えて、時間的な幅があるようにも

考えられる。初葬時の儀礼に伴う土器群と第２次、第３次の葬送祭祀があったとすれば、その供献土器群との間に多少の時間幅があり、沼津周辺に分布範囲をもつ大廓式土器にも時間幅を考慮しておく必要があると思われる。

外来系土器の存在は関連地域の人とモノの移動を示すものであり、土器だけではなく多くの物流・情報の伝達や思考の変化・祭式形態など、社会状況の変革にまで迫ることができるかもしれない。ただし、高尾山古墳の被葬者が東海西部地域の出身首長であったのかどうか、断定はしがたい。近年の調査成果が示す列島内の弥生時代中期から後期、特に終末期の外来系土器の移動は、連続的であったり小範囲であったり、あるいは短期間であったりと多様であり、外来系土器群の移動が示す実態が、直ちに政治的・社会的な、また時には軍事的な行動に結びつくものかどうか、なお検討を要する事項である。

北陸系・近江系とか東海西部系といった広汎な地域との交流は、海上交通や河川交通を多く利用した物流や社会的な人の移動・交流が中心となっていたものと思われる。列島内における２～３世紀の激しい人とモノの動きは、西日本とくに北部九州から瀬戸内海沿岸、さらに山陰・北陸・丹後・若狭から、越前・加賀地方と激動する汎列島的な社会状況を示しているように思われる。この事実は列島に社会的な変動をもたらすような政治的な動きがあったことを示しているのかもしれない。

もしこの２～３世紀における列島内で、大きな社会的変動が起きていたとすると、高尾山古墳の出現契機もこのような社会の動きの中で生まれてきたのかもしれない。高尾山古墳が３世紀の前半期に造営されたとすれば、当時、倭国内は動乱期の中から邪馬台国卑弥呼登場の時代となる。東アジアの激動しつつあった歴史のうねりの中に倭国がおかれていた時代である。

高尾山古墳をどう理解するか、埋葬された人物がどのような性格であったのかは、高尾山古墳の東国における歴史的な評価を検討する必要があろう。沼津周辺、特に愛鷹山麓一帯を含め、また三島方面を含む伊豆地方を包括しても最古の古墳が、高尾山古墳であることが明確となった。古墳出土の多量の供献土器は、静岡県最古の古墳年代を示す型式であり、日本列島における古墳出現年代論とも深く関係することとなり、注目度の高い古墳ということになる。

ｃ．高尾山古墳の被葬者とその歴史的性格

すでに指摘されていることだが、高尾山古墳は前方後方墳である。前方後方墳という墳丘形態は、弥生時代の前期から出現している方形周溝墓の系統にあって、方形周溝の一辺から短く方形に突出する部分が、周溝をめぐらしつつ前方後方型周溝墓を形成する。この前方後方型周溝墓は、やがて墳丘を形成して前方後方墳となることが知られている。

全国には約 500 基を超す前方後方墳が存在しているが、そのほとんどは前期古墳であり、地域的な分布に多少の偏在が認められている。

沼津市高尾山古墳は墳丘の西側部分が破壊されてはいるが、後方部をはじめ全長約 62 mの墳形を把握することができる。調査の結果、内部主体は舟形木棺の土坑内直葬であり、長さ 5.053 m、最大幅 1.252 mと報告されている。木棺の痕跡から頭部を東方に、脚部は西方に向けていた。典型的な３世紀後半期以降の前期古墳であるならば、竪穴式石室が採用されたのかもしれないが、出現期古墳であり静岡東部という地域性が、土坑内木棺直葬を採用したものであったと思う。墳丘も後方部が周溝底から 4.7 m という高さを示していて、前方後方墳として考えてよいと思う。

しかし棺内副葬品を見ると上方作系浮彫獣帯鏡１面の破鏡があり、これは内区に６乳を有する舶載鏡である。ほかに鉇１点・槍身２点・鉄鏃 33 点・勾玉１点と、槍の柄に塗布したらしい漆塗膜、棺底に塗布した水銀朱である。鉄鏃 33 点の中には類銅鏃の柳葉形鉄鏃 14 点があり、そのほかに腸抉三角形式で篦被風装置のある一風変わった鉄鏃が 10 数点認められる。

副葬品の種類と数量が前期古墳と比較してみると極めて少なく、鉄剣・鉄刀の副葬はないが槍身の1つには樋のように見えるつくりがある。

木棺直葬で破鏡をはじめ少量の副葬品を有する出現期古墳といえば、全国各地で現在問題となりつつある墳丘墓としての性格を有することになろう。近年の古墳出現期に関する ^{14}C 年代の較正値によれば、奈良県桜井市箸墓古墳は 240 ～ 260.A.D とされ、邪馬台国の年代と関わることから、大いに議論が沸騰している。また箸墓古墳の直前の墳墓とされる桜井市ホケノ山古墳は、80 m前後の前方後円墳であるが、石囲い木槨墓で庄内式土器とともに画文帯同向式神獣鏡や内行花文鏡片が出土している。

墳丘長 280 mの箸墓古墳が日本における最古の巨大前方後円墳とすると、ホケノ山古墳をはじめ石塚・勝山・東田大塚・矢塚古墳など、纒向型古墳と呼ばれている 100 m未満の前方後円墳は、古墳出現期の墳丘墓としての性格が濃いように思われる。

京都府京丹後市の赤坂今井墳丘墓は東西 36 m、南北 39 m、高さ 4 mもある方形墳丘墓である。埋葬施設は墳頂部に 6 基もあり、最初の埋葬土坑は南北 7 m、東西約 2.5 mであったが未発掘である。この 1 号埋葬墓坑の北端を切断する形で第 4 墓坑があり、墓坑内から長さ 4.6 m、幅 1.3 mの船底形木棺が発見された。棺底に厚く敷かれた大量の水銀朱上からガラス製勾玉と管玉からなる三連の頭飾りと碧玉製管玉と小型勾玉を連接する垂飾の耳飾りが出土している。このほか鉄剣 1 点と鉇 1 点が副葬されていたことから、装身具に比較して鉄製武器・工具が少なかったことが特色である。この丹後・赤坂今井墳丘墓の第 1 号墓坑は未調査であるが、1 号墓土坑上からも北端を切断している 4 号墓土坑上からも、埋葬に際しての供献土器一括が出土している。これらの土器型式は丹後地方における後期弥生土器である西谷式土器の新段階の特徴を示しており、赤坂今井墳丘墓の裾部周辺に展開している 19 基の埋葬主体の年代は、丹後の古墳初現期にあたる白米山北式に接する時間帯の中で理解できるとしている（『赤坂今井墳丘墓発掘調査報告書』2004.3　峰山町教育委員会）。丹後地方の弥生時代後期終末期が 2 世紀末から 3 世紀初頭という年代であるとすると、越前・伯耆・出雲といった日本海沿岸地域の弥生時代後期の墳丘墓の年代と深く関係することが想定される。

京都府南丹市の黒田墳丘墓は全長 52 mの前方後円形を呈し、主体部はコウヤマキ製の舟形木棺に木槨があり、双頭龍文鏡（破鏡）と鉄鏃と管玉が出土している。出土の壺形土器によって 3 世紀中頃と推定され、前方後円形の墳丘墓として破鏡行為とともに注目されている。

兵庫県龍野市綾部山 39 号墳丘墓は、墳形が不明だが、箱形木棺をもつ河原石積の竪穴式石室があり、面径 11㎝の画文帯神獣鏡と鉇と管玉など少量の副葬品が発見された 3 世紀前半代の墳丘墓である。兵庫県加古川市西条 52 号墳丘墓は約 20 m前後の前方後円形を呈し、竪穴式石室の木棺から径 18㎝の内行花文鏡の破鏡が出土している。石室周辺から出土した壺形土器は古墳出現期の特色を有し、3 世紀初頭の年代が考えられる。

徳島県鳴門市萩原 1 号墳丘墓は円形墳丘に突出部がつく積石塚で、主体部は石囲い木槨で画文帯神獣鏡（破鏡）と管玉と鉇が出土している。徳島県鳴門市西山谷 2 号墳丘墓は竪穴式石室を有する丘陵尾根上の円形墓だが、石室内から破鏡になった斜縁半肉彫獣帯鏡（6 乳）とともに鉄剣・鉄鏃・鉇などが出土し、3 世紀中葉の墳丘墓である。

近年、古墳とくに典型的な大型前方後円（方）墳が出現する前段階の墳墓が明確となり、1・2 面の鏡が破鏡として副葬され、舶載鏡である点も注目されている。これらの墳丘墓が出現してくる歴史的な過程は、汎日本的な地域における弥生時代社会の発展・拡大状況と深い関係にあると思われる。

千葉県市原市神門 3 ・ 4 ・ 5 号墳丘墓は鏡の出土はなかったが、東海地方との密接した社会的・文化的な関係が表現され、東日本で前方後方型の墳丘墓の卓越する中で、ここでは前方後円型の墳丘を維持し、庄内式土器直系と思われる土器群が多く供献された。東京湾沿岸における纒向型の前方後円墳とし

ての存在意義が大きな問題となっていた。

これに対して千葉県木更津市高部 30 号と 32 号墳は、全長 34 m前後の前方後方墳であるが、両墳とも木棺直葬を採用し箱形木棺を用いていた。高部 32 号墳からは斜縁半肉彫式獣帯鏡の破鏡と鉄槍２点、30 号墳から斜縁二神二獣鏡（破砕鏡）と鉄槍２点が出土し、多くの東海系の特色を有する土器群も発見されている。

千葉県の神門古墳群や高部古墳群は東国における出現期古墳というべきものであり、神門古墳群が先行し高部古墳群が続いて出現したことを伴出した土器型式が示している。東海地方の廻間遺跡や西上免遺跡の前方後方型周溝墓の出土土器との系統論から考えると、３世紀前半代から中頃の年代が与えられるのではなかろうか。

木更津市の高部古墳群は前方後方墳というべき墳丘の特色を有してはいるが、木棺直葬といい、破鏡と破砕鏡の副葬状況は、古墳というより墳丘墓としての葬送儀礼が強く看取されるのである。奈良県ホケノ山古墳が纒向古墳群の最後の古墳であり、三角縁神獣鏡の副葬がない出現期古墳－墳丘墓だと考えると、それは３世紀前半期の前方後円型墳丘墓というべき墳墓であると思う。

いまや典型的な前方後円墳の成立前のいわゆる古墳出現期の墳丘墓は、島根・鳥取から日本海沿岸を北上し新潟・福島・宮城の東北地方に達しており、北九州から瀬戸内海沿岸地域、さらに四国・近畿と全国的な分布の展開を見せている。かつては弥生時代から古墳時代への進展は、時間的に近畿先行と見られ、周辺地域、特に東国社会の歴史的な発展は大きく遅れるものという歴史観が支配的であった。

ところが激動する古代日本の弥生時代にあっては、列島内の人とモノ、情報・思考形態の伝播が加速度的に早くなり、全国的に政治的な社会への形成が進んだのであろう。

高尾山古墳は全長 62 mに達する堂々たる前方後方墳である。方形周溝墓から前方後方型周溝墓への変遷は各地の調査で実証されている。３世紀の中頃を迎え日本列島内では大和王権の成立があり、奈良盆地の一角に大王権力が生まれたことも考古学的に実証されている。その大和王権内の首長たちの中に、前方後方型の墳丘に埋葬される人物がいたことは間違いのない事実である。奈良県大和古墳群中には下池山古墳をはじめ波多子塚・ノムギ・フサギ塚古墳などの前方後方墳が存在し、纒向古墳群の中にもメクリ前方後方墳が存在している。これらは下池山古墳に後続する前方後方墳なので、大和古墳群が形成されていく過程の中で、前方後円墳が主流であった墓制に抗すように、前方後方墳という墳丘形態にこだわる首長集団が存在していたということになる。

東日本における出現期古墳といわれ、墳丘墓の性格が濃い墳墓の主流は、前方後方型の墳丘墓である。そして前方後方墳の成立は東海地方の尾張地域だとする見解もあるが、琵琶湖周辺をはじめ近江地域にも前方後方墳が分布している。むしろそれぞれの地方社会における経済的・政治的な成熟度と、それを統御した有力首長層の成長を背景として、前方後方型周溝墓の墳丘を巨大化させ周溝を施設した、地域最有力首長の墳墓が前方後方墳として誕生してきたといえるのではないだろうか。

ｄ．まとめ－古代交通路の拠点として－

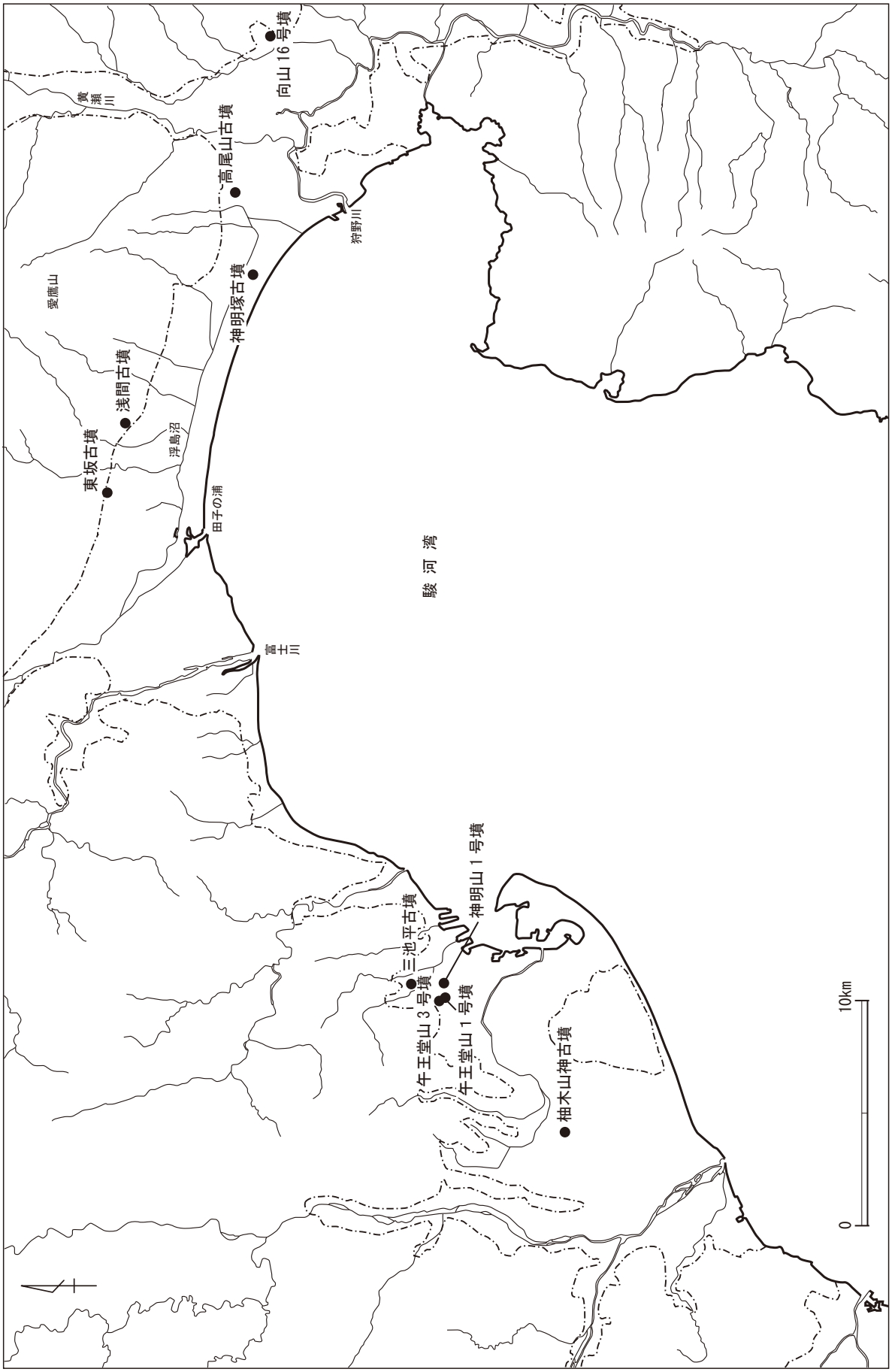
沼津市高尾山古墳に埋葬された人物は単独葬であり、西暦２世紀末頃から３世紀初頭に活躍した東海東部、つまり後代の駿河国・伊豆国に相当する地域に君臨した首長であったと思われる。多量の葬祭用の供献土器群は、沼津周辺の土器群が主体となっていることはもちろんだが、北陸・近江・東海西部をはじめ東京湾沿岸地域との関係を物語る土器群が供献されている。この事実は高尾山古墳の首長者が、それらの地域と密接な社会的関係、つまり物産の交換・交流や政治的情勢に対応した情報の伝達や軍事的な関係を結んでいたことの現れではないかと思う。何の目的もなしに生活用具を持った他地方への移動が日常的に行われる筈はない。人とモノの移動という事実の背景には、単なる経済的活動だけではな

く、より深刻な社会問題の生起があったのかもしれない。この沼津市東熊堂の地域が古代の地政学的からも、あるいは交通上からも極めて優位な戦略上の拠点であったからではないだろうか。高尾山古墳がこの地域に登場した事実は、愛鷹山麓一帯の弥生時代終末期からの大型集落の形成と、海上・河川交通の集約地点としての優位性があったからだと思われる。

高尾山古墳より高位置となる標高 150 m付近を中心とする愛鷹山麓には、弥生時代後期後葉から古墳出現期にかけての集落遺跡が群在する。八兵衛洞遺跡・八兵衛屋敷遺跡・中見代第Ⅰ遺跡など、高尾山古墳の年代とほぼ同時代の大規模な集落遺跡が谷筋をはさんで密集している。沼津市の調査担当者によれば、すでに数百軒に及ぶ住居址が調査されているというが、この遺跡群の存在は極めて重要な歴史的意義を有すると思われる。

八兵衛洞遺跡の東方１㎞ほどの植出遺跡からは、ガラス製の勾玉や小玉などが出土し、植出北Ⅱ遺跡ではガラス勾玉の鋳型が発見されていて、高尾山古墳の首長を支える村落社会が存在する地域として非常に重要な遺跡群でもある。さらにこれらの遺跡群の北限を画するように、幅・深さとも約２ｍの断面Ｖ字型を呈する直線状の空壕が、全長２㎞以上にわたって貫いている。この巨大な構築物の存在は、高尾山古墳の成立を可能とした社会構造の分析に大きな示唆を与えることになると思われる。

高尾山古墳の立地上の条件を考えると、西暦２～３世紀には、富士市田子の浦で海に開いていた浮島沼（「古浮島湾」）は、現在の沼津市街地に向けて奥深く入り込み、古墳の比較的近くまで船での進入が可能であったと推測されている。またこの沼津市域は伊豆国に向かう狩野川水運、黄瀬川に沿って相模に抜ける山北路、峠越えの箱根路の分岐点にあたり、駿河湾を北上する海路の終点ともなっていた。高尾山古墳が築かれた場所は、まさに古代交通路の拠点だったのである。沼津市の神明塚古墳・子ノ神古墳・長塚古墳、富士市の浅間古墳・東坂古墳といった前期古墳が、あたかも浮島沼を囲むかのように分布している（第１図）のは、この地域が古東海道筋の経済上また政治・軍事上、極めて重要な戦略的に優位な地域であったことを示している。高尾山古墳こそ、その象徴的存在なのである。



第1図　駿河湾周辺の前期古墳分布図

第Ⅶ章　自然科学的分析

1．主体部棺底付近から出土した炭化材の年代と材同定

パリノ・サーヴェイ株式会社

a．はじめに

高尾山古墳は、現存部分の南北軸の墳丘長が約 62m の前方後方墳である。これまでの発掘調査結果より、周溝から出土した高坏が古墳時代初頭頃のものと考えられており、東日本地域における最古級の前方後方墳の可能性があるとされる。今回の分析調査では、主体部の棺下から出土した炭化材を対象として、放射性炭素年代測定および樹種同定を実施する。

b．試料

試料は、主体部棺底付近から出土した炭化材 3 点（№ 6317,6375,6740）である。

c．分析方法

⑴ 放射性炭素年代測定

土壌や根など目的物と異なる年代を持つものが付着している場合、これらをピンセット、超音波洗浄などにより物理的に除去する。その後 HCl により炭酸塩等酸可溶成分を除去、NaOH により腐植酸等アルカリ可溶成分を除去、HCl によりアルカリ処理時に生成した炭酸塩等酸可溶成分の除去を行う（酸・アルカリ・酸処理）。

試料をバイコール管に入れ、1g の酸化銅（Ⅱ）と銀箔（硫化物を除去するため）を加えて、管内を真空にして封じきり、500℃（30 分）850℃（2 時間）で加熱する。液体窒素と液体窒素＋エタノールの温度差を利用し、真空ラインにて CO_2 を精製する。真空ラインにてバイコール管に精製した CO_2 と鉄・水素を投入し封じ切る。鉄のあるバイコール管底部のみを 650℃で 10 時間以上加熱し、グラファイトを生成する。

化学処理後のグラファイト・鉄粉混合試料を内径 1mm の孔にプレスして、タンデム加速器のイオン源に装着し、測定する。測定機器は、3MV 小型タンデム加速器をベースとした 14C-AMS 専用装置（NEC Pelletron　9SDH-2）を使用する。AMS 測定時に、標準試料である米国国立標準局（NIST）から提供されるシュウ酸（HOX- Ⅱ）とバックグラウンド試料の測定も行う。また、測定中同時に $^{13}C/^{12}C$ の測定も行うため、この値を用いて $\delta\ ^{13}C$ を算出する。

放射性炭素の半減期は Libby の半減期 5,568 年を使用する。また、測定年代は 1950 年を基点とした年代（BP）であり、誤差は標準偏差（One Sigma;68%）に相当する年代である。なお、暦年較正は、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV6.00（Copyright 1986-2010 M Stuiver and PJ Reimer）を用い、誤差として標準偏差（One Sigma）を用いる。

暦年較正とは、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が 5568 年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動、および半減期の違い（^{14}C の半減期 5730 ± 40 年）を較正することである。暦年較正に関しては、本来 10 年単位で表すのが通例であるが、将来的に暦年較正プログラムや暦年較正曲線の改正があった場合の再計算、再検討に対応するため、1 年単位で表している。いずれも炭化材を試料としていることから、北半球の大気中炭素に由来する較正曲線を用いる。

暦年較正は、測定誤差 σ、2σ 双方の値を計算する。σ は統計的に真の値が 68% の確率で存在する範囲、2σ は真の値が 95% の確率で存在する範囲である。また、表中の相対比とは、σ、2σ の範囲をそれ

ぞれ 1 とした場合、その範囲内で真の値が存在する確率を相対的に示したものである。

⑵ 樹種同定

試料を自然乾燥させた後、木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の 3 断面の割断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類を同定する。

なお、木材組織の名称や特徴は、島地・伊東（1982）や Wheeler 他（1998）を参考にする。また、日本産木材の組織配列は、林（1991）や伊東（1995,1996,1997,1998,1999）を参考にする。

d. 結果

放射性炭素年代測定結果および樹種同定結果を表 1、暦年較正結果を表 2 に示す。同位体効果による補正を行った測定結果は、№6317 が 1,930 ± 30BP、№6375 が 1,880 ± 30BP、№6740 が 1,880 ± 30BP である。また、測定誤差をσとして計算させた暦年較正結果は、№6317 が calAD54-123、№6375 が calAD78-208、№6740 が calAD78-208 である。

一方、これらの炭化材は、全て樹種が異なり、広葉樹 3 分類群（クスノキ科・サカキ・エゴノキ属）に同定された。各分類群の解剖学的特徴等を記す。

・クスノキ科（Lauraceae）

散孔材で、管壁は薄く、横断面では角張った楕円形、単独または 2 個が放射方向に複合して散在する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性、1-2 細胞幅、1-20 細胞高。柔組織は周囲状および散在状。柔細胞には油細胞が認められるが、小型で目立たない。

・サカキ（Cleyera japonica Thunberg pro parte emend. Sieb. et Zucc.）　ツバキ科サカキ属

散孔材で、小径の道管が単独または 2-3 個が複合して散在し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管の分布密度は高い。道管は階段穿孔を有し、壁孔は対列～階段状に配列する。放射組織は異性、単列、

表 1　放射性炭素年代測定結果

番号	位置	種別	樹種	補正年代 BP	δ 13 C (‰)	測定年代 BP	Code No.
6317	主体部棺底付近（中央）	炭化材	サカキ	1,930 ± 30	−22.14 ± 0.58	1,880 ± 20	IAAA-92716
6375	主体部棺底付近（東）	炭化材	クスノキ科	1,880 ± 30	−24.73 ± 0.70	1,870 ± 20	IAAA-92717
6740	主体部棺底付近（西）	炭化材	エゴノキ属	1,880 ± 30	−32.86 ± 0.77	2,010 ± 30	IAAA-92718

1) 年代値の算出には、Libby の半減期 5568 年を使用。
2)BP 年代値は、1950 年を基点として何年前であるかを示す。
3) 付記した誤差は、測定誤差σ（測定値の 68%が入る範囲）を年代値に換算した値。

表 2　暦年較正結果

番号	補正年代 (BP)		暦年較正年代（cal）													相対比	Code No.
6317	1,925 ± 26	σ	cal	AD	54	−	cal	AD	89	cal	BP	1,896	−	1,861		0.672	IAAA-92716
			cal	AD	101	−	cal	AD	123	cal	BP	1,849	−	1,827		0.328	
		2σ	cal	AD	21	−	cal	AD	129	cal	BP	1,929	−	1,821		1.000	
6375	1,876 ± 26	σ	cal	AD	78	−	cal	AD	139	cal	BP	1,872	−	1,811		0.846	IAAA-92717
			cal	AD	158	−	cal	AD	166	cal	BP	1,792	−	1,784		0.059	
			cal	AD	196	−	cal	AD	208	cal	BP	1,754	−	1,742		0.095	
		2σ	cal	AD	72	−	cal	AD	219	cal	BP	1,878	−	1,731		1.000	
6740	1,876 ± 28	σ	cal	AD	78	−	cal	AD	138	cal	BP	1,872	−	1,812		0.820	IAAA-92718
			cal	AD	157	−	cal	AD	167	cal	BP	1,793	−	1,783		0.075	
			cal	AD	196	−	cal	AD	208	cal	BP	1,754	−	1,742		0.105	
		2σ	cal	AD	71	−	cal	AD	221	cal	BP	1,879	−	1,729		1.000	

1) 計算には、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV6.0（Copyright 1986-2010 M Stuiver and PJ Reimer）を使用した。
2) 計算には表に示した丸める前の値を使用している。
3)1 桁目を丸めるのが慣例だが、暦年較正曲線や暦年較正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいように、1 桁目を丸めていない。
4) 統計的に真の値が入る確率はσは 68%、2 σは 95% である
5) 相対比は、σ、2 σのそれぞれを 1 とした場合、確率的に真の値が存在する比率を相対的に示したものである。

1-20 細胞高。

・エゴノキ属（Styrax）　エゴノキ科

散孔材で、横断面では楕円形、単独または 2-4 個が複合して散在し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は階段穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性、1-3 細胞幅、1-20 細胞高。

e. 考察

主体部棺底付近から出土した炭化材は、炭化していることから何らかの人間活動によって火を受けて炭化したことが推定される。これらの炭化材は、全て樹種が異なり、クスノキ科、サカキ、エゴノキ属が認められた。炭化材の年代測定結果は、1930 ± 30BP および 1880 ± 30BP で、暦年較正値は calAD54-208 であった。とくに、№ 6375 と№ 6740 は、出土位置が棺底付近の東と西で離れており、樹種も異なるが、年代測定結果は同時期を示している。これらの年代値は、樹齢による誤差等も考慮すれば、出土遺物から推定されている古墳時代前期頃の年代とも矛盾しない。

確認された樹種のうち、サカキは暖温帯性常緑広葉樹林を構成する常緑広葉樹である。クスノキ科には、常緑広葉樹と落葉広葉樹が含まれる。エゴノキ属は、林縁部等に多く見られる落葉広葉樹である。サカキは、愛鷹山麓の低標高地に他の常緑広葉樹とともに現在でも生育が確認できる。また、クスノキ科やエゴノキ属も現在の愛鷹山中に普通に見られる種類である。弥生時代後期から古墳時代にかけての古植生については、雌鹿塚遺跡で花粉分析が実施されており、スギやアカガシ亜属を主体とした植生が推定されている（パリノ・サーヴェイ株式会社 ,1990; 松原 ,1990）。今回確認された樹種は、雌鹿塚遺跡で推定されている古植生とも矛盾しないことから、炭化材は古墳周辺に生育していた樹木に由来する可能性がある。

今後さらにこの炭化材の由来や主体部との関連などについて検討を進めるためには、さらに炭化材の分布状況を考慮して試料を選択し、年代測定と樹種同定を実施することが望まれる。

引用参考文献

林　昭三 ,1991, 日本産木材　顕微鏡写真集 . 京都大学木質科学研究所 .

伊東隆夫 ,1995, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ . 木材研究・資料 ,31, 京都大学木質科学研究所 ,81-181.

伊東隆夫 ,1996, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ . 木材研究・資料 ,32, 京都大学木質科学研究所 .66-176.

伊東隆夫 ,1997, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ . 木材研究・資料 ,33, 京都大学木質科学研究所 ,83-201.

伊東隆夫 ,1998, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ . 木材研究・資料 ,34, 京都大学木質科学研究所 ,30-166.

伊東隆夫 ,1999, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ . 木材研究・資料 ,35, 京都大学木質科学研究所 ,47-216.

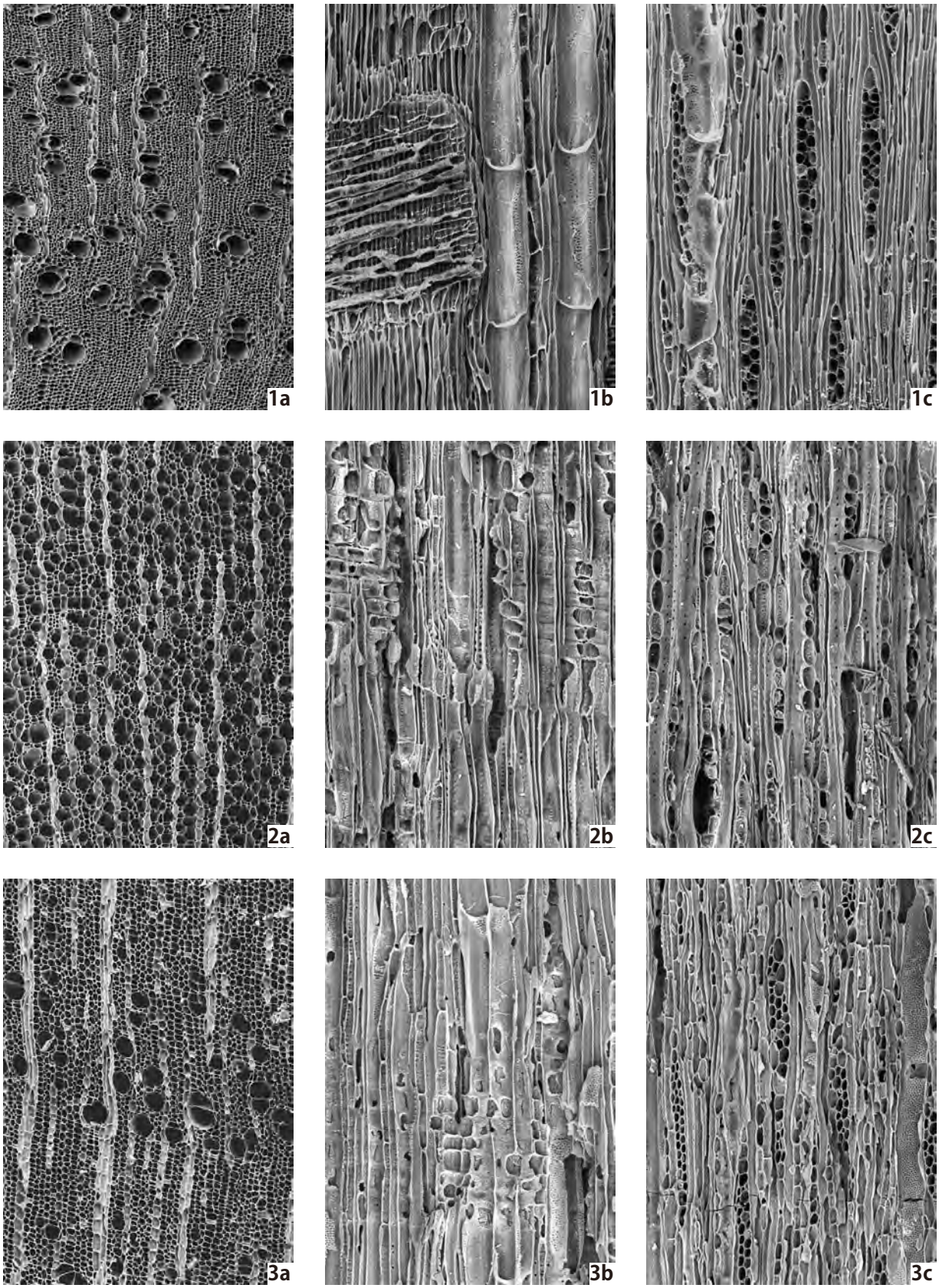
松原彰子 , 雌鹿塚遺跡周辺における自然環境の変遷 .「雌鹿塚遺跡発掘調査報告書Ⅰ 遺構編 －狩野川西部流域下水道事業処理場建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告－」, 沼津市文化財調査報告第 51 集 , 沼津市教育委員会 ,171-215.

パリノ・サーヴェイ株式会社 , 雌鹿塚遺跡の自然科学分析結果 .「雌鹿塚遺跡発掘調査報告書Ⅰ 遺構編 －狩野川西部流域下水道事業処理場建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告－」, 沼津市文化財調査報告第 51 集 , 沼津市教育委員会 ,153-170.

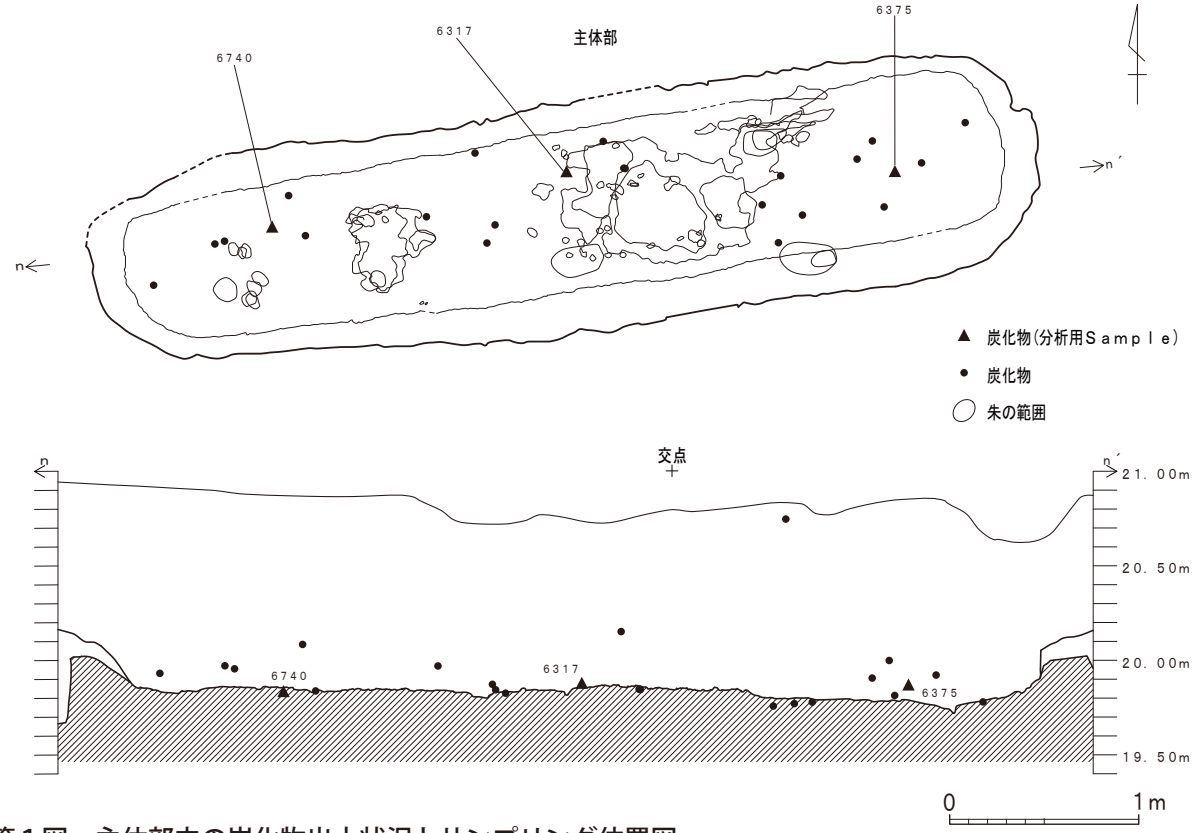
島地　謙・伊東隆夫 ,1982, 図説木材組織 . 地球社 ,176p.

Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E.（編）,1998, 広葉樹材の識別 IAWA による光学顕微鏡的特徴リスト . 伊東隆夫・藤井智之・佐伯浩（日本語版監修）, 海青社 ,122p.［Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E.（1989）IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification］.

図版１　炭化材



1. クスノキ科 (№6375)
2. サカキ (№6317)
3. エゴノキ属 (№6740)
   a: 木口 ,b: 柾目 ,c: 板目



第１図　主体部内の炭化物出土状況とサンプリング位置図

第２図　炭化物サンプリング直前の主体部の状況

2. 高尾山古墳の繊維遺物について

昭和女子大学　伊藤美香

a. はじめに

高尾山古墳は静岡県沼津市東熊堂の高尾山穂見神社・熊野神社旧境内地にある古墳出現期の前方後方墳である。本古墳から出土した繊維遺物２種についてフーリエ変換赤外分光光度計ならびに顕微鏡を用いて調査した。

b. 試料

鏃 22（写真１）に付着した布片の繊維（写真 2）ならびに土砂中より出土した布片の繊維（写真 3）の２種の試料を調査対象とした。両試料とも、錆びに覆われて硬化していた。

写真１　鏃 22

写真２　鏃 22 に付着した布片
未処理　（約 2㎝×約 1㎝～ 0.5㎝）

写真３　土砂中から出土の布片
（約 7㎜× 4㎜）

c. 分析方法

⑴ 前処理（錆の除去）

前処理として、両試料の錆び取りを行った。塩酸ならびに酸化還元剤としてアスコルビン酸（ビタミン C）を添加した溶液に浸す方法 1）に準じて、0.03％のアスコルビン酸を含む 1M 濃度の塩酸溶液（pH0.04）に 5 日間浸漬し、その間日に 1 度、溶液内に保持したまま超音波洗浄（3 秒× 5 回）を行い、浮いた錆びを除去するようにした。最終的に、蒸留水で吸引洗浄したものを自然乾燥させ、分析用試料とした。

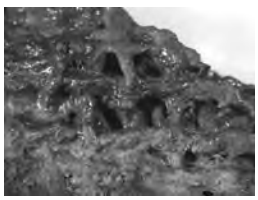


写真４　鏃に付着した布片
未処理（× 10）

写真５　鏃に付着した布片
錆除去処理後（× 10）

写真６　土砂中から出土の布片
未処理（× 20）

写真７　土砂中から出土の布片
錆除去処理後（× 20）

⑵ 糸幅の測定

実体顕微鏡（SZ-40：オリンパス製）にて観察し、接眼ミクロメーターにて糸幅を測定し、平均値を求めた。

⑶ フーリエ変換赤外分光光度計（FT-IR）による分析

FT-IR（FT/IR-480Plus: 日本分光製）を用いて、1 回反射 ATR（ATR PRO410-S: 日本分光製）で測定を行った。

⑷ 走査型電子顕微鏡による形態観察と繊維幅の測定

観察には走査型電子顕微鏡 (JSM-5310LV: 日本電子製) を用いて観察を行った。各試料は無蒸着状態にて高真空モード (加速電圧 5 ｋＶもしくは 10 ｋ V) で観察した。繊維幅測定は観察・計測ソフトウェア (デジキャプチャー) の側長機能を用いて、鏃に付着した布片については 24 本の単繊維の幅を測定し、土砂中から出土した布片については 30 本の単繊維の幅を測定し、それぞれ平均値を求めた。

d. 結果および考察

⑴ 糸幅・撚り方向

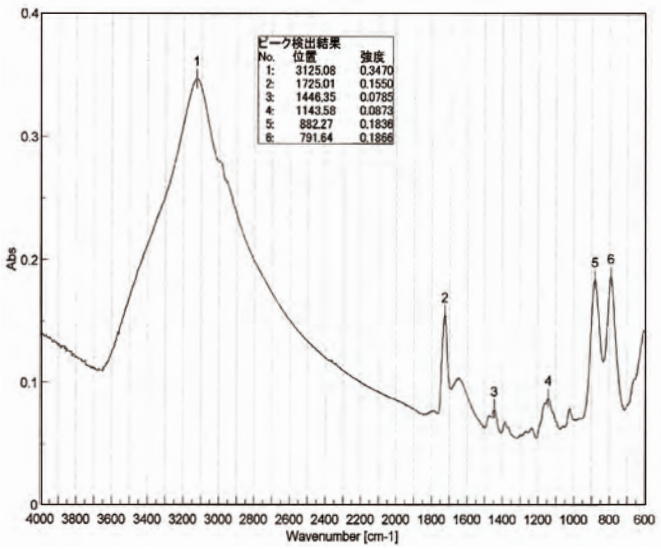
鏃に付着した布片の実体顕微鏡下で測定したタテ糸・ヨコ糸各 4 本の糸幅の平均は、タテ糸が 0.83㎜（0.75-1.0㎜）、ヨコ糸が 0.56㎜（0.5-0.6㎜）であった。土砂中から出土の布片はタテ糸ヨコ糸の判別は困難であったが、4 本の糸幅平均は 0.73㎜（0.65-0.8㎜）であった。また、撚り方向は写真 8、9 に示すとおり、両試料共に S 撚であった。

写真８　鏃に付着した布片（× 10）

写真９　土砂中から出土の布片（× 20）

⑵ フーリエ変換赤外分光 (FT-IR) 分析

FT-IR 測定の結果を図 1、2 に示す。赤外分光法は赤外線を利用して分子結合の運動エネルギーを測定することにより、分子構造を解析するものである。試料が植物繊維の場合は通常、図 3 に示すような多糖の構成要素に特徴的な 1105cm^{-1}(C-O-C: グリコシド由来) 付近、1155cm^{-1}(C-C: 環呼吸振動) 付近の吸収をはじめ、植物繊維 (セルロース) に帰属する吸収 [2] が確認され、動物性繊維の場合は図 4 に示すように、タンパク質を構成するアミノ酸に帰属する 3300cm^{-1} 付近と 1660-1610cm^{-1}(アミドⅠ)、1550-1485cm^{-1}(アミドⅡ) に吸収が確認される [3] が、本試料のスペクトルにはこれらの吸収は確認されなかった。一方、両試料共に 792cm^{-1} と 882cm^{-1} 付近に特徴的なピークを持ち、これらの存在から珪素化合物もしくは炭酸塩の存在が推察された。

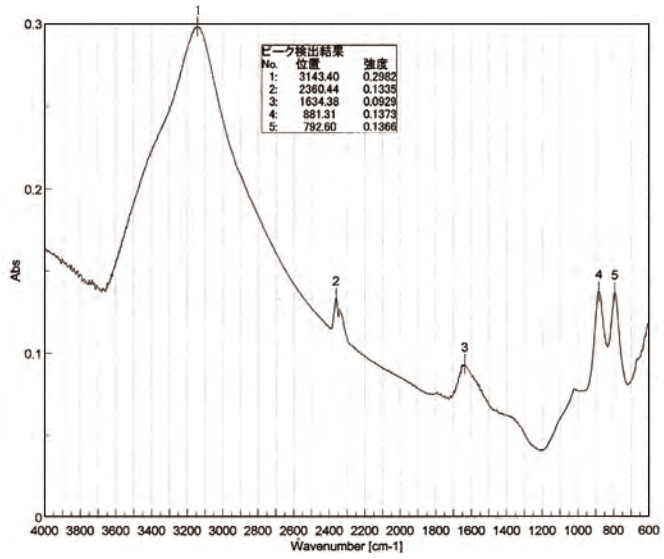


第１図　鏃に付着した布片繊維の FT-IR スペクトル

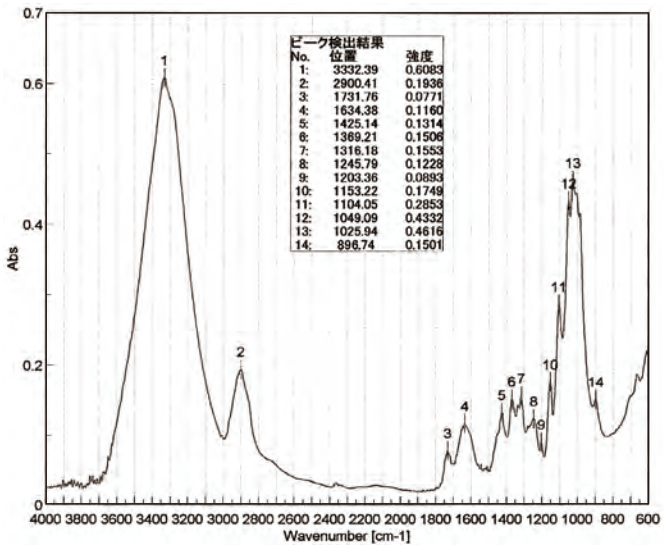
⑶形態観察と繊維幅 (長径) 測定

走査型電子顕微鏡で観察した、鏃に付着した布片の表面および断面像を写真 10 ～ 13、土砂中から出土した布片の表面像および断面像を写真 14 ～ 17 に示す。

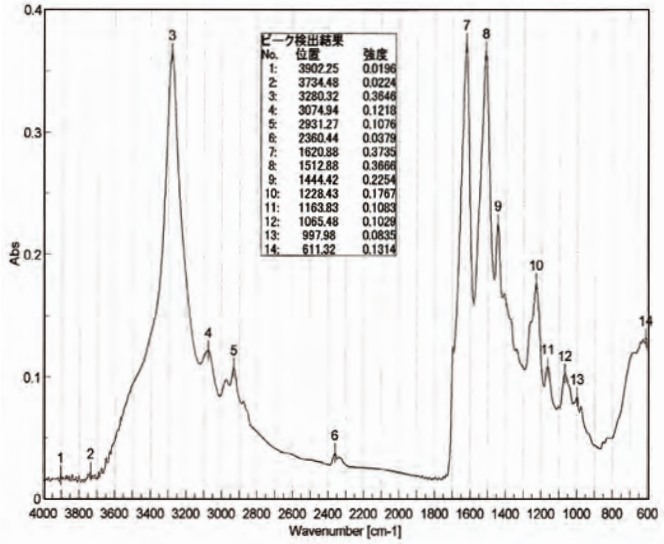
両試料共に、繊維表面には結節 (矢印で示す) が認められたが、多くの繊維は表面形態の型押しのようになっており、内部は空洞化している部分が多く認められた。横断面像では、繊維表面が金属化合物に被覆された後の



第２図　土砂中から出土した布片の FT-IR スペクトル



第３図　植物繊維 (大麻) の FT-IR スペクトル



第４図　絹繊維の FT-IR スペクトル

繊維内部の劣化分解に伴い、空洞化が進行していた。空洞化の度合いは、鏃に付着した布片の繊維の方が高く、中心に第３次膜を残すのみの状態となっていた。土砂中から出土した布片の繊維は２次膜の残存も認められた。

繊維幅は、鏃に付着した布片が単繊維 24 本平均で 20.6 μm(11.2-34.3 μm)、土砂中から出土した布片が単繊維 30 本平均で 21.8 μm(11.3-31.8 μm) であった。

これら走査型電子顕微鏡で観察された両試料の単繊維表面における結節の存在、横断面の形態、ならびに繊維幅の平均値が 22 μm(10-50 μm) という特徴[4] は大麻繊維に酷似しており、両試料は同一種の繊維であることが推察された。

また、写真 18-20 に示す著者が入手している大麻、苧麻、亜麻の繊維断面形態との比較においても、本試料は大麻繊維の形態に類似していた。ちなみに苧麻の繊維幅平均は 40 μm(10-90 μm)、亜麻は 22 μm(12-25 μ)[4] であり、亜麻の繊維幅平均は大麻と同じであるが、写真 20 で観察されるように、亜麻繊維の断面形態は大麻よりも円に近い多角形で壁が厚く、ルーメンが狭いといった形態的な特徴[4] を持っている点で大麻との違いがある。

以上、赤外分光光度分析ならびに走査型電子顕微鏡による形態観察と繊維幅測定の結果、本試料は大麻である可能性が高いと考えられる。

参考文献

1) 赤田昌倫ら 2009 日本文化財科学会第 26 回大会研究発表要旨集 p.202-203
2) Paul Garside and Paul Wyes 2003 Studies in Conservation Vol.48, p.269-275
3) 堀口　博 2001『赤外吸収図説総覧』三共出版 p.264
4) セルロース学会編 2000『セルロースの事典』朝倉書店：p.31-33

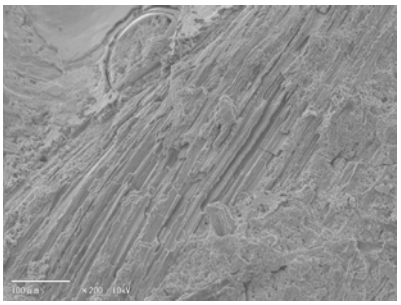


写真 10　鏃に付着した布片　表面（× 200）

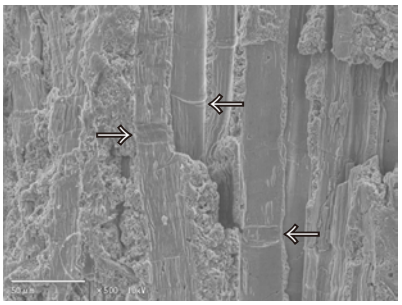


写真 11　鏃に付着した布片　表面（× 500）
矢印：結節

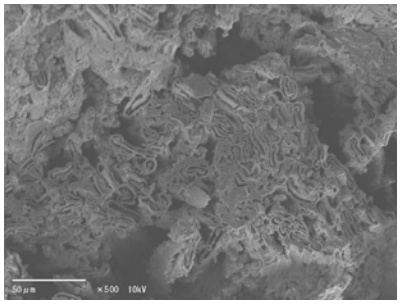


写真 12　鏃に付着した布片　断面（× 500）

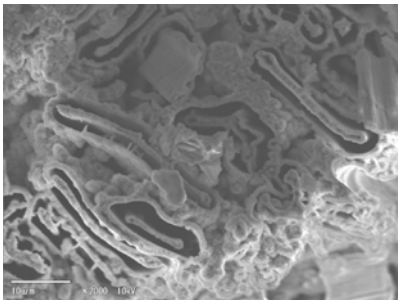


写真 13　鏃に付着した布片　断面（× 2000）

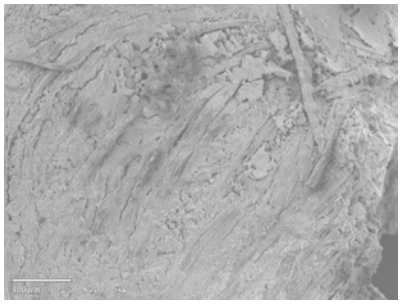


写真 14　土砂中から出土した布片　表面（× 200）

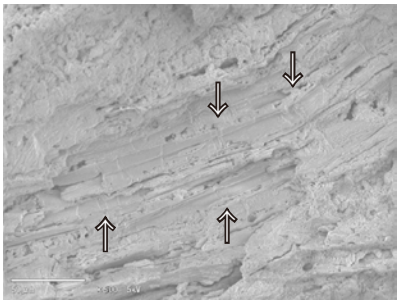


写真 15　土砂中から出土した布片　表面（× 500）
矢印：結節

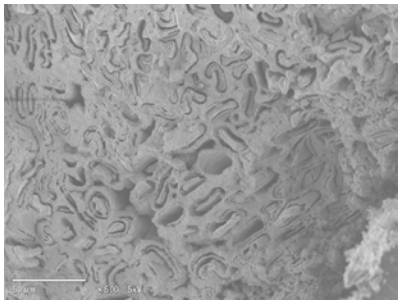


写真 16　土砂中から出土した布片　断面（× 500）

写真 17　土砂中から出土した布片　断面（× 2000）

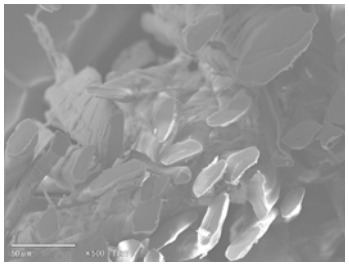


写真 18　大麻繊維　横断面（× 500）

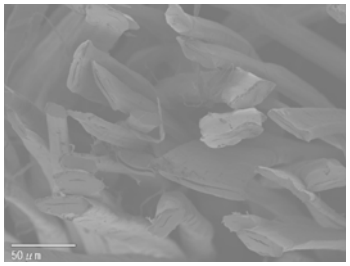


写真 19　苧麻繊維　横断面（× 500）

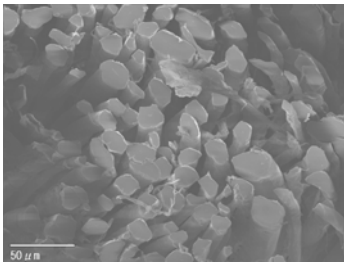


写真 20　亜麻繊維　横断面（× 500）

3．高尾山古墳出土大廓式土器の産地

増島　淳

a．目的

高尾山古墳出土の大廓式土器 10 点について、胎土全体の元素組成と、胎土中の砂粒鉱物の重鉱物組成を調べ、産地推定を行う。

比較試料は、大まかな産地を推定するための土製品 1528 点と（増島 2010a）、具体的な産地を推定するための瓦試料 329 点（第 1 表）および、5 遺跡出土の弥生時代～律令期の土器 70 点を用いた（第 2 表）。試料の調整および分析条件は全て同一である。

b．分析方法

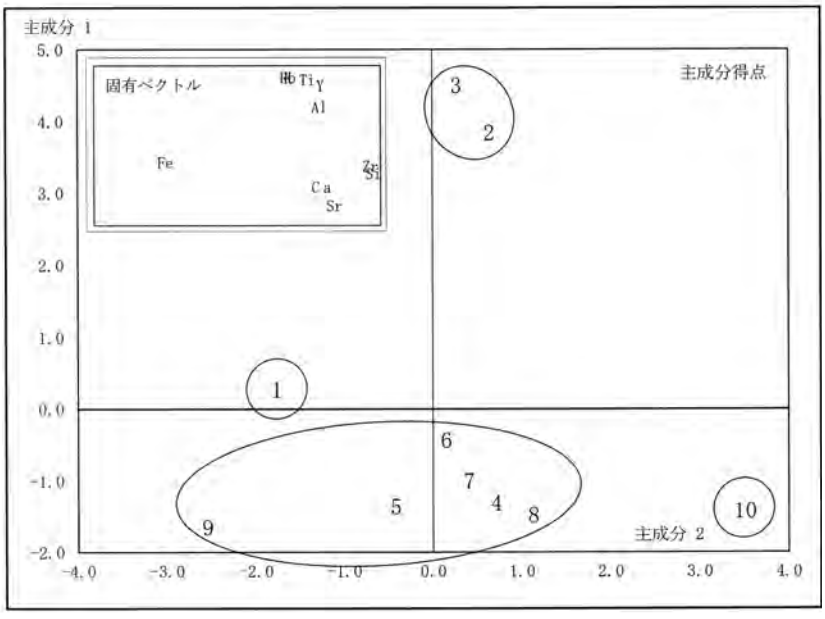
蛍光Ｘ線分析：各試料は岩石カッターで切断後、400 番のカーボランダムで磨きＸ線を照射し、元素組成を測定した。分析装置は沼津市文化財センターが所有する「島津 EDX-900HS, エネルギー分散型分析器」を用いた。定量した元素は Al. Si. P. S. Cl. K. Ca. Ti. Mn. Fe. Cu. Zn. As. Br. Rb. Sr. Y. Zr の 18 元素である。各試料の元素組成の特徴を識別するための数値は、蛍光Ｘ線強度の合計値で、個々の元素の強度を割り求めた各元素の「強度比」を用いた。（第 3 表）

重鉱物組成観察：試料を乳鉢で粉砕し、10% 塩酸で 2 回煮沸クリーニングした後、篩い分けを行い 106 μ m ～ 250 μ m の砂粒子を抽出し、カナダバルサムとキシレンの混液で加熱封入し、100 倍の鉱物顕微鏡で重鉱物 200 粒の同定を目安に行った。粒数が少ない場合はプレパラート 2 枚を検鏡した。雲母類は肉眼観察で有無を確認した。

c．蛍光Ｘ線分析結果

⑴ 試料土器の分類

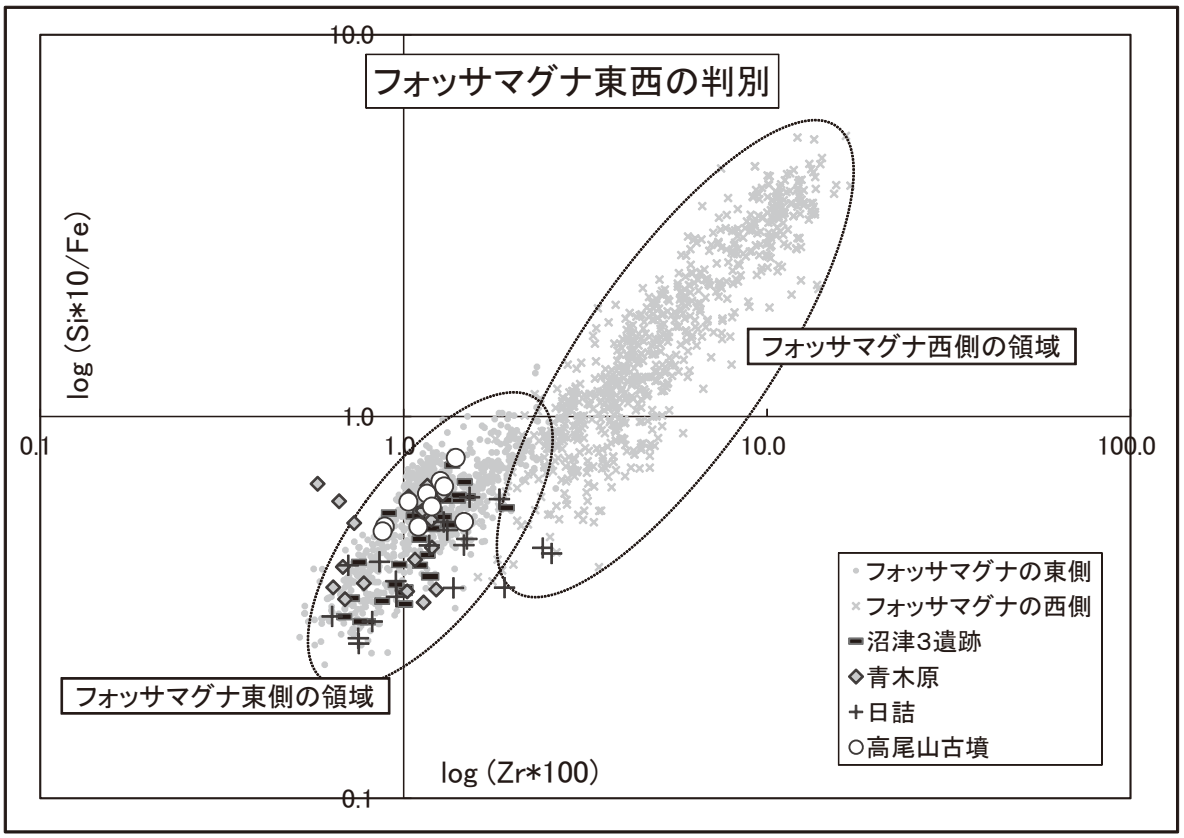
Al. Si. K. Ca. Ti. Fe. Rb. Sr. Y. Zr の 10 元素の強度比を用いて主成分分析を行い、元素組成の特徴から試料を 4 グループに大別した。10 点の元素組成はよく似ているが、No.2・3 は他に比べ K. Rb. Y に富み Sr が少なく、図上で上方に偏している。No.10 は Ca. Sr に富み右に偏している。No.1 は K. Ti. Rb. Y にやや富み、集団からやや外れている。



第１図　試料土器の分類

⑵ フォッサマグナ・糸魚川－静岡構造線、東西の判別

産地が明らかな土製品 1528 点を用いて、試料土器と比較試料 7 遺跡出土の土器が、糸魚川－静岡構造線（以下、糸－静線と略す）の東西どちら側に属するか Si/Fe. Zr の強度比で判別図を作り確認した。



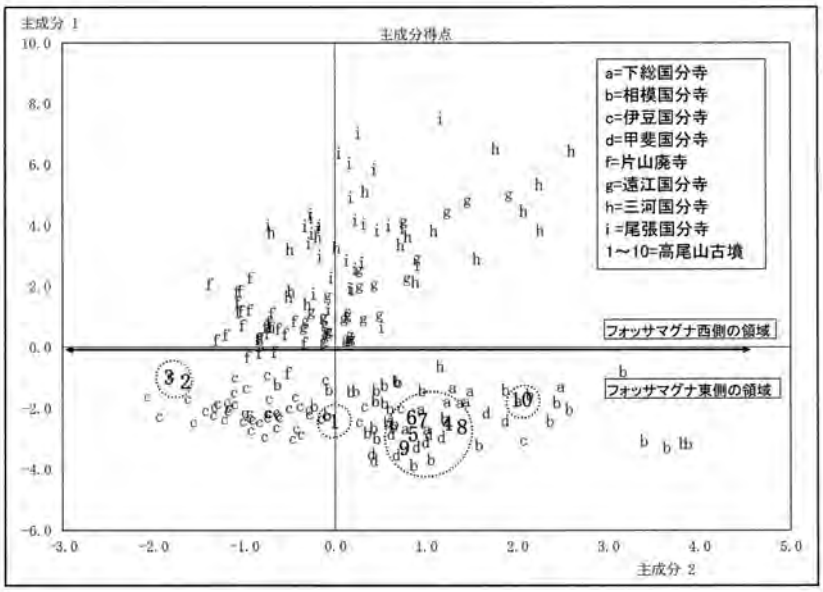
第２図　フォッサマグナ・糸魚川ー静岡構造線、東西の判別

試料土器は全て糸ー静線の東側領域に入り、一つの集団を形成している。

比較試料では、沼津３遺跡や青木原遺跡の土器が混在する。

⑶ 瓦試料との比較

９遺跡 329 点の瓦試料を用いて、試料土器が糸ー静線東西のどちら側に産地を持つのか主成分分析で確認した。分析には⑴同様の 10 元素を用いた。全点東側領域に入るが、No.2・3 の２点の位置が他と異なる。



第３図　瓦試料との比較

⑷ 周辺５遺跡試料との比較

⑴同様の 10 元素を用いて、主成分分析を行った。大集団の６点は周辺５遺跡の土器と混在する。No.2・3 の２点は集団から離れている。

ｄ．重鉱物組成の特徴

試料土器全点を検鏡した。結果は文末第４表に示す。

同定した ho（普通角閃石）、opx（斜方輝石）、cpx（単斜輝石）の量比で三角図を作製した。高尾山

古墳土器は全点を、周辺 5 遺跡試料は 3 鉱物が 20 粒を超えた個体だけを図示した。

試料土器全体の特徴は、両輝石に富み、角閃石をほとんど含まない安山岩系の風化土から砂粒鉱物が供給されているが、軽鉱物量が多いことから、粘土は酸性岩の風化土が用いられているようである。

No.5・6・7・8 にはカワゴ平パミス起源と思われる火山ガラスが付着した自形を示す opx が少量入る。カワゴ平パミス起源の鉱物は静岡県東部～中部に広く分布している（増島 2010b）。

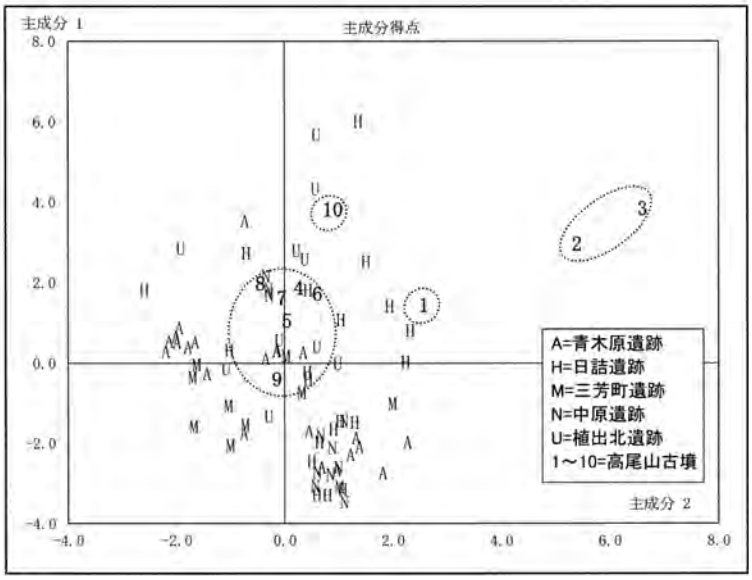
No.2・5 には富士火山起源と思われる ol（カンラン石）が少量認められる。

角閃石をほとんど含まないことから、花崗岩～閃緑岩類が分布する甲府盆地方面に産地を求めることはできない。

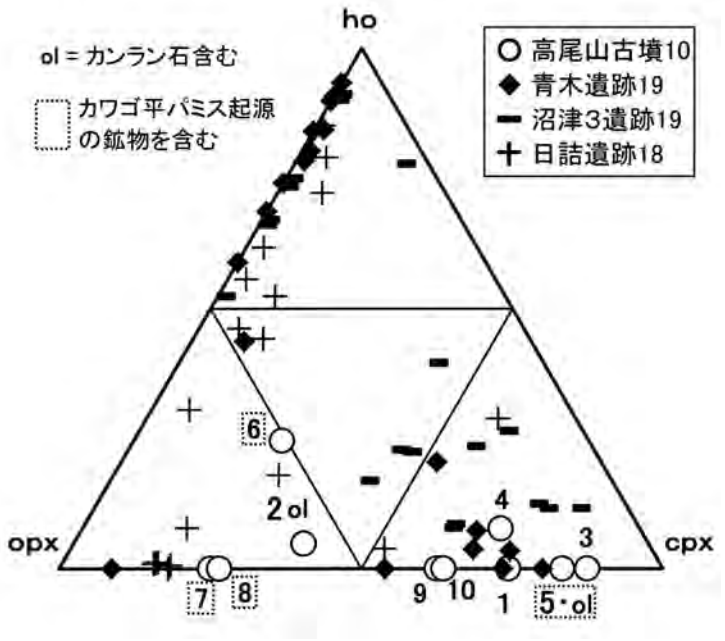
カンラン石が少ないことから、富士火山のテフラが厚く堆積する神奈川県方面に産地を求めることもできない（増島 2011）。

cpx に富む 6 点は青木原遺跡の土器と混在する。

opx に富む 4 点のうち、3 点はカワゴ平パミス起源の鉱物を含み、残る 1 点にはカンラン石が認められる。



第 4 図　5 遺跡試料との比較



第 5 図　重鉱物組成の特徴

e．考察・まとめ

本遺跡から出土した 10 点の大廓式土器は、胎土の元素組成の特徴から、糸－静線の東側に産地をもつことは明らかである。

No.2・3 の 2 点は蛍光 X 線分析で他の 8 点とはやや特徴が異なるが、重鉱物組成では混在する。

4 点はカワゴ平パミス起源の鉱物と特徴がよく似た鉱物を含み、2 点は富士火山起源と思われる ol（カンラン石）を含む、10 点とも県東部の比較試料と元素組成、鉱物組成ともに混在することなどから、これらの土器の産地は駿東・伊豆地域のいずれかにあり、さらに細分された産地を想定することも可能だろう。今後さらに大廓式土器の分析数を増やすことにより、正確な産地を知る必要がある。

引用参考文献

増島　淳 2010a「南伊豆町・日詰遺跡出土土器に含まれる鉱物」静岡地学 102p.p.1-8

増島　淳 2010b「土器胎土に含まれる火山ガラス付き角閃石の供給源」静岡地学 101p.p.15-28

増島　淳 2011「鉱物組成から見た三宅島・弥生土器の産地」静岡地学 103p.p.15-21

第１表　瓦試料一覧

位置	遺 跡 名	試料数
千葉県	下総国分寺	10
神奈川県	相模国分寺	34
山梨県	甲斐国分寺	10
三島市	伊豆国分寺	50
静岡市	片山廃寺	26
静岡市	尾羽廃寺	9
磐田市	遠江国分寺	30
愛知県	三河国分寺	20
愛知県	尾張国分寺	30
静岡市	秋葉山１号窯	23
静岡市	東山田瓦窯	21
静岡市	清泉寺窯地点	42
浜松市	篠場瓦窯１～３号窯	24

第２表　比較試料５遺跡土器

位置	遺跡名	時　期	形式	X 線分析	重鉱物組成
南伊豆町	日詰	弥生後期		20	18
沼津市	3遺跡 植出北	弥生後期		10	4
	3遺跡 三芳町	弥生後期		10	4
	3遺跡 中原	6～7世紀	駿東	11	11
三島市	青木原Ａ	弥生後期～古墳前期	在地系	19	19

第３表　試料土器の蛍光Ｘ線強度比

		Al	Si	P	S	Cl	K	Ca	Ti	Mn	Fe	Cu	Zn	As	Br	Rb	Sr	Y	Zr
高尾山古墳	1	0.004	0.044	0.000	0.003	0.006	0.016	0.009	0.022	0.017	0.851	0.001	0.002	0.000	0.000	0.004	0.009	0.003	0.009
高尾山古墳	2	0.006	0.050	0.000	0.005	0.007	0.026	0.006	0.033	0.012	0.828	0.001	0.002	0.000	0.000	0.006	0.004	0.003	0.010
高尾山古墳	3	0.005	0.043	0.000	0.006	0.008	0.028	0.006	0.031	0.009	0.829	0.003	0.003	0.000	0.001	0.008	0.004	0.004	0.011
高尾山古墳	4	0.005	0.052	0.000	0.004	0.007	0.010	0.010	0.019	0.030	0.831	0.000	0.002	0.001	0.001	0.003	0.013	0.002	0.012
高尾山古墳	5	0.005	0.049	0.000	0.006	0.007	0.007	0.009	0.018	0.027	0.843	0.000	0.002	0.000	0.001	0.003	0.010	0.002	0.012
高尾山古墳	6	0.005	0.045	0.000	0.004	0.007	0.010	0.006	0.020	0.022	0.845	0.000	0.001	0.000	0.001	0.003	0.013	0.002	0.015
高尾山古墳	7	0.005	0.057	0.000	0.005	0.006	0.006	0.005	0.018	0.018	0.842	0.000	0.004	0.000	0.001	0.003	0.013	0.002	0.013
高尾山古墳	8	0.005	0.055	0.000	0.003	0.007	0.006	0.009	0.017	0.028	0.835	0.000	0.002	0.000	0.002	0.003	0.012	0.002	0.013
高尾山古墳	9	0.004	0.043	0.000	0.004	0.006	0.005	0.007	0.017	0.040	0.850	0.000	0.002	0.000	0.001	0.002	0.010	0.001	0.009
高尾山古墳	10	0.004	0.063	0.000	0.003	0.008	0.012	0.010	0.023	0.022	0.813	0.001	0.002	0.000	0.001	0.003	0.017	0.003	0.014

第４表　試料土器の重鉱物組成

試料	No	砂	特　徴	bi	ol	opx	glopx	cpx	cho	glho	oho	zi	ep	glop	op	合計
高尾山古墳	1	土の色	土屑残る、砕屑多い、石片入る、	―		10		29							4	43
高尾山古墳	2	土の色	土屑残る、砕屑多い、石片入る、2枚見る	―	1	12		8	1					1	14	37
高尾山古墳	3	土の色	土屑残る、砕屑多い、軽鉱物多い、2枚見る	―		2		14							17	33
高尾山古墳	4	白	輪郭はっきりした軽鉱物非常に多い、2枚見る	―		6		18			2			1	212	239
高尾山古墳	5	白	輪郭はっきりした軽鉱物非常多い、緑直 1、2枚見る	―	1	1	1	10							222	235
高尾山古墳	6	桃白ごま	輪郭はっきりした軽鉱物非常に多い、発泡 gl 2	―		21	10	15	13		2			2	91	154
高尾山古墳	7	桃白	輪郭はっきりした軽鉱物非常に多い、2枚見る	―		20	1	7							17	45
高尾山古墳	8	桃白ごま	輪郭はっきりした軽鉱物非常に多い、2枚見る、glpl 1	―		22	3	9							118	152
高尾山古墳	9	桃白ごま	輪郭はっきりした軽鉱物非常に多い、2枚見る	―		3		5							86	94
高尾山古墳	10	桃白ごま	輪郭はっきりした軽鉱物非常に多い、2枚見る	―		4		7							82	93

4．高尾山古墳出土の赤色顔料の分析と東海西部系土器の産地推定

池谷信之

a．はじめに

高尾山古墳の棺内からは、その底部に敷きつめたと思われる赤色顔料が出土している。古墳の主体部内で使われる赤色顔料は、水銀朱であることが圧倒的に多く、本古墳においても調査時から「朱」であることを前提としてきた。本稿の第１の目的は、この経験的な判断を蛍光Ｘ線分析法によって検証することにある。

また出土土器の中に「パレススタイル壺」と呼ばれる外来系土器があり、これらは口縁部や肩部に赤色顔料が塗彩されている。また小型壺と分類されたものの中に、外面ではなく内面に赤色顔料の付着が認められるものがある（第 52 図 22）。これらの顔料が水銀朱（HgS）であるか、ベンガラ（Fe_2O_3）であるか、同じく蛍光Ｘ線分析法を用いて検討する。これが本稿第２の目的である。

本古墳出土土器の特徴のひとつは、いまふれたパレススタイル壺やいわゆる「Ｓ字甕」など、東海西部系土器の多さにある。特にＳ字甕はその変遷の初期段階では、製作地が東海西部にある「搬入品」が比較的多く、しだいにオリジナルな型式の意匠を、この地域で忠実に再現したもの（「模倣」）や、地域的な特徴を顕在化させたもの（「地方型式」）が増えていくと考えられている（本書第Ⅵ章２・渡井英誉「高尾山古墳の出土土器について」p.141）。これらの外来系土器が搬入品であるか否かについては、胎土に含まれる砂粒や色調等の観察によっても、大まかな判断は可能であるが、これを蛍光Ｘ線分析法によって判別する。これを第３の目的とする。

b．棺底付近出土の「朱」の蛍光Ｘ線による分析

分析対象　分析対象としたのは、棺内底部から出土した「朱」とされてきた顔料である。また比較試料として北海道常呂市イトムカ鉱山採取水銀朱の分析もあわせて実施した。

分析方法　棺内底部の「朱」の中から１㎝大の塊を引き抜き、半割して測定試料とした。

分析に用いた装置は、筆者が所有するセイコー電子工業社（現 SII ナノテクノロジー社）製エネルギー分散型蛍光Ｘ線装置 SEA-2110 である。 測定条件は以下のとおりである。

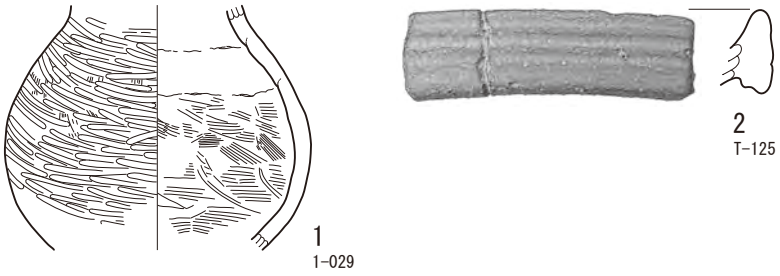
ターゲット：ロジウム管球　　検出器 Si（Li）半導体検出器　　電圧：50kV　　電流：５μＡ

照射径：10mm　　測定時間：200sec　　雰囲気：真空

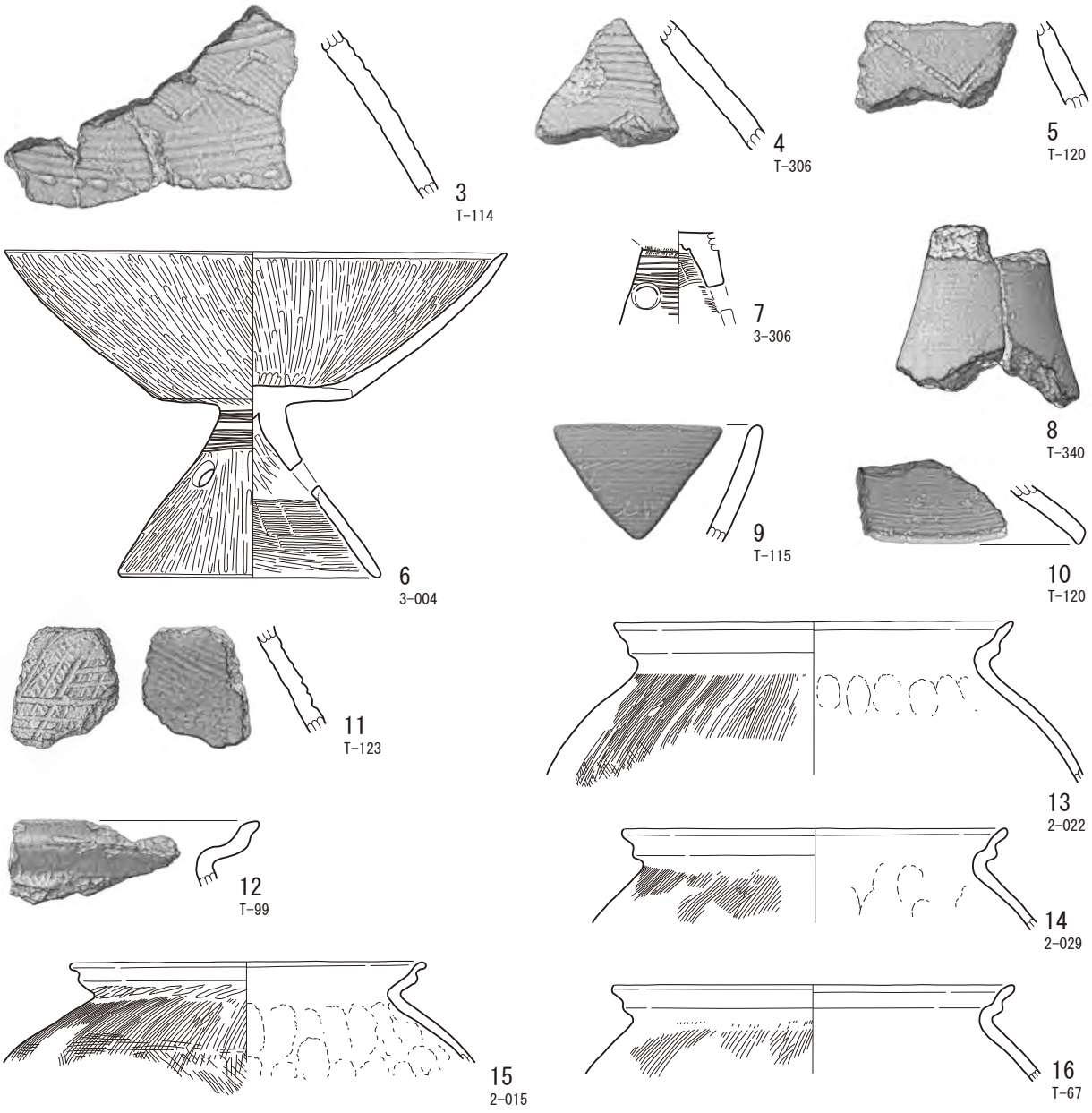
分析の目的は赤色顔料の成分が水銀朱（HgS）であるか、ベンガラ（Fe_2O_3）であるかの検証という限定されたものであるため、「定性分析」モードで Hg・Ｓ・Fe の３元素を手動同定した。

分析結果　（第３図・第４図）　第３図のスペクトルに示されたように、明瞭な水銀（Hg）のピークが認められた。水銀はＫ殻・M殻・Ｌ殻からそれぞれ異なる波長の蛍光Ｘ線が発生するが、判読を助けるために、第３図では相対的にピークが高い La 線・Lb 線・Lg 線に補助的なラインを引いておいた。また硫黄（Ｓ）は、ケイ素（Si）の Kb 線や水銀の Ma 線・Mb 線に一部重複するため、判別しにくくなっているものの、ピークは確かに認められる。したがって棺底に敷かれていた赤色顔料は、朱であると判断される。

参考資料としたイトムカ鉱山の朱は、標本業者から購入したものであり、どの程度精製されているか不明である。したがってあくまで参考値としての取り扱いにとどまるが、高尾山古墳出土の朱はイトムカのものに比べやや鉄（Fe）のピークが高くなっている。高尾山古墳出土の朱が鉱石として採取された段階から鉄を含んでいたこと、副葬品の鉄器による影響などがその理由として考えられる。



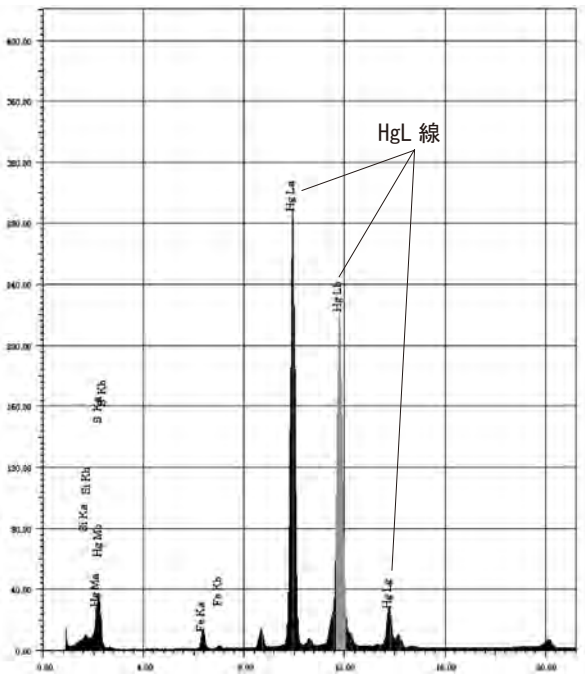
第１図　赤彩顔料分析土器



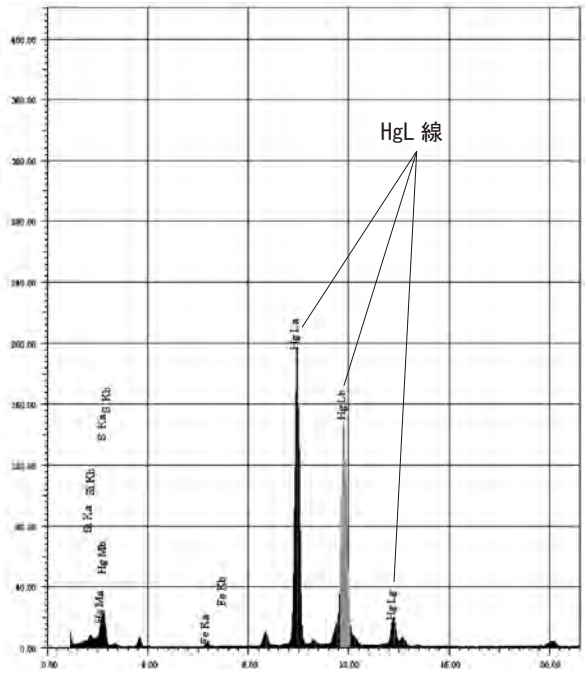
第２図　産地判別土器

ｃ．土器に付着した赤色顔料の蛍光Ｘ線による分析

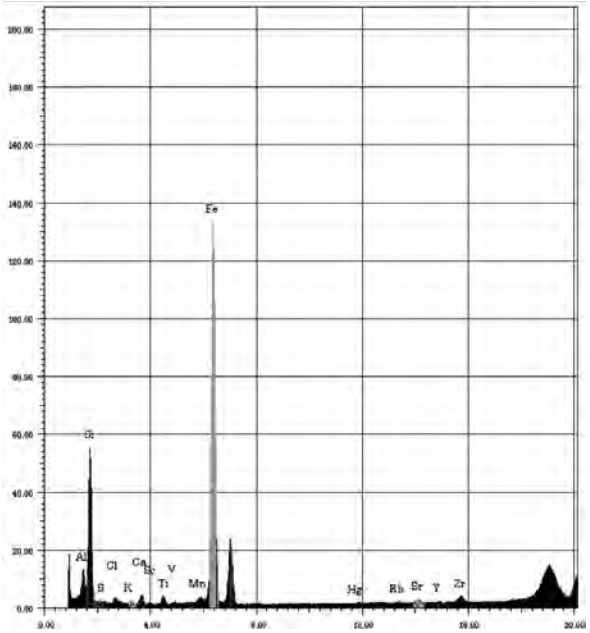
分析対象　小型壺（第１図１）の内面に残る赤色顔料、パレススタイル壺（第１図２）の口縁部凹線内に塗布された赤色顔料である。なお他のパレススタイル壺の沈線内にも、赤色顔料が確認できるものがあるが、最も塗布された面積が広く残存状況の良好なものを選択した。



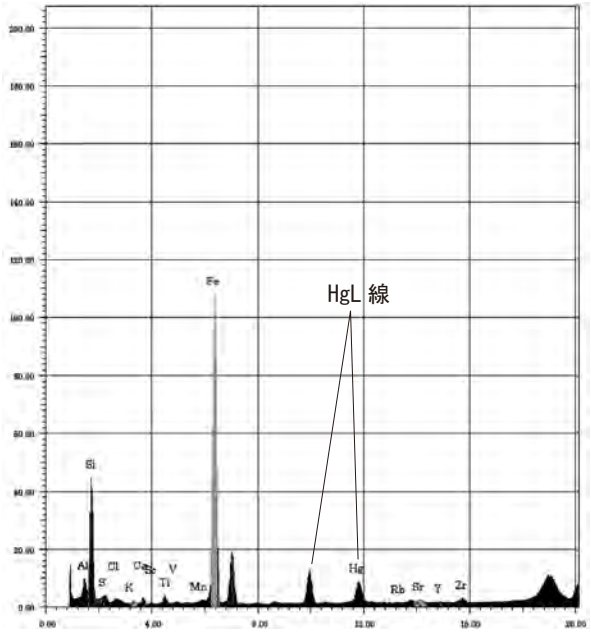
第３図　高尾山古墳棺底出土朱の蛍光Ｘ線スペクトル



第４図　イトムカ鉱山朱の蛍光Ｘ線スペクトル



第５図　高尾山古墳出土土器№１外面の蛍光Ｘ線スペクトル

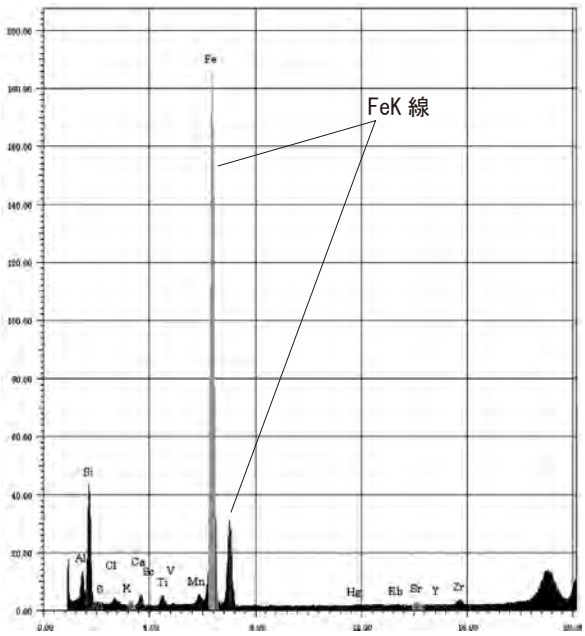


第６図　高尾山古墳出土土器№１内面の蛍光Ｘ線スペクトル

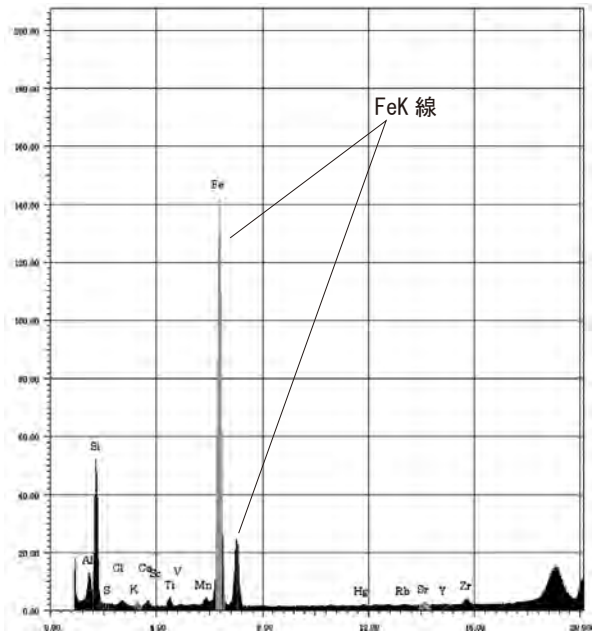
分析方法　第１図１の小型壺は「朱」の残存状況が良好な１片３㎝大の破片の内側を測定し、外側については径 1.5㎝程度の範囲を研磨して平坦な新鮮面をつくり測定した。第１図２のパレススタイル壺については、顔料の塗彩された外面側を測定し、内面は同様に研磨して新鮮面をつくり測定した。分析条件は、前項の棺底出土の朱と同一である。

分析結果・小型壺　（第５図・第６図）　第１図１の外面の測定結果を第５図に、内面の測定結果を第６図に示した。外面ではまったく水銀は検出されていないが、内面には明瞭なピークが認められる。また内面にはわずかながら硫黄のピークも認められる。

土器に朱が塗彩されるのは装飾的効果をねらったものと考えられるが、本例では内面のみに朱が認め



第７図　高尾山古墳出土土器№２外面の蛍光Ｘ線スペクトル



第８図　高尾山古墳出土土器№２内面の蛍光Ｘ線スペクトル

られた。しかも完形状態であれば内部をほとんど見ることができない壺形土器である。土器の残存状況は全周の 1/2 弱であり、胴部外面の最大径付近には明瞭な磨滅が認められる。本資料は小型壺の一部を朱の加工や保存の容器として転用したものであろう。

分析結果・パレススタイル壺（第７図・第８図）　赤色顔料が塗彩された外面と内面では、鉄（Fe）のピークに有意な差を認めることができる。したがって塗彩されたのはベンガラ（Fe_2O_3）である可能性が高い。

ｄ．外来系土器の蛍光Ｘ線分析法による産地推定

フォッサマグナ西縁を境界とする区分　その産地が窯址という地理的に限定された地点と対比可能な須恵器や瓦に対して、場合によっては集落の数だけ産地が存在する可能性もある縄文土器や弥生土器については、化学組成に基づいた産地推定が試みられることは少なかった。しかしフォッサマグナや中央構造線といった、列島を大きく分かつ地質的な境界を基準とした「産地」であれば、縄文土器や弥生土器についてもその推定は可能となろう。ここではフォッサマグナ西縁を境界とした「西側」と「内側」という区分をもって、高尾山出土の外来系土器を蛍光Ｘ線分析法によって産地推定する。

フォッサマグナはドイツ人の地質学者エドムント・ナウマンによって命名された本州中央部を南北に貫く大地溝帯である。フォッサマグナと呼ばれている地帯は、かつては本州島南側と本州島北側に挟まれた「海溝」となっており、その後の火山活動やフィリピン海プレート北上の影響を受けて陸地化したものである。またその西縁は糸魚川－静岡構造線と名付けられた大断層となっている。

太平洋側における糸魚川－静岡構造線は、静岡市街地の北部にある浅間神社の背後の山稜から、その西側を流れる安倍川の流路に並行しながら北上し、安倍峠付近に抜ける。そこからは富士川の山梨県内の支流である早川を上流方向にたどり、さらに赤石山地の一部を抜け、甲斐駒ヶ岳を東に迂回しながら釜無川に至るといわれている。したがって静岡県内では、その境界はおおむね安倍川の流路を意識すればよい。しかし、かつて安倍川の河口は現在の位置より東側にあり、その堆積物が久能山東照宮で知られる有度山一帯の丘陵地を形成したといわれている。

平野部では断層の観察が難しく、静清平野におけるフォッサマグナ西縁のラインは、推定の域を出ないが、安倍川の流路変更によって静清平野における堆積物は、フォッサマグナ西縁の西側のものと、東

側のものが輻輳していることが予想される。

基準資料の収集　フォッサマグナ西縁を挟んだ東西の地域で、出土地が製作地からほとんど動いていないと考えられる資料の収集を行い、これらを「準原産地資料」として扱うことにした。「準原産地資料」の規定に最も合致するものは、古窯址出土の須恵器や灰釉陶器・瓦である。しかしこれらのみに基づいて縄文土器や弥生土器の産地を推定するのは危険が大きいため、地域的に限定された製作と分布が想定されている土器、静岡県東部で例を挙げれば「大廓式土器」の大型壺、駿東甕、駿東地方に分布する大型埦などについても、「準原産地資料」として収集することにした。

収集・測定した資料の一覧を第 1 表に示した。現在までにフォッサマグナ西縁の西側では、静岡県・岐阜県・愛知県の資料 997 点を、フォッサマグナ西縁の内側の地域では 347 点を分析している。現在もこの収集・分析の作業は継続中であり、西側の地域ではさらに西側の滋賀県や三重県に分布する資料を加えていく必要がある。また隣接する神奈川県内ではいくつかの窯址出土資料が欠けており、これらの追加作業を計画している。

推定方法　分析装置は前項までの分析に用いたものと同じエネルギー分散型蛍光Ｘ線分析装置 SEA-2110 を用いた。分析資料は砥石を用いて表面を 1 ㎜～ 2 ㎜程度研磨して平坦面を作り、さらに樹脂製の硬質なブラシを用いて流水下で 1 分程度洗浄した。測定条件は以下のとおりである。なおＸ線の励起効率を考慮して軽元素側と重元素側では異なる電圧と電流を設定した。

管電圧：15kV（Al ～ As）/50kV（Rb ～ Y）　管電流：40 μ A（Al ～ As）/6 μ A（Rb ～ Y）

照射径：10mm　　測定時間：それぞれ 200sec　　雰囲気：真空

第 1 表　「準原産地資料」一覧

フォッサマグナ西縁西側

	市町名	遺跡名	種 類	資料数
愛知	大府市	高根山Ａ古窯群	山茶碗	20
	大府市	高根山Ｂ古窯群	灰釉陶器	7
	大府市	ハンヤ古窯址	山茶碗	25
	刈谷市	井ヶ谷古窯址群松ヶ崎２号窯	須恵器	27
	清洲市	朝日遺跡	弥生土器 / 土師器	5
	清洲市	廻間遺跡	弥生土器 / 土師器	3
	瀬戸市	紺屋田Ａ窯	山茶碗	10
	瀬戸市	小田妻窯	山茶碗	10
	瀬戸市	門前Ｂ窯	山茶碗	10
	高浜市	（個人窯元）	瓦（近代）	14
	長久手町	I-G-2 号窯跡	山茶碗	20
	東浦町	八巻古窯	山茶碗	10
	みよし市	黒笹 34 号窯跡	須恵器	11
	みよし市	黒笹 16 号窯跡	須恵器	9
	みよし市	黒笹 17 号窯跡	灰釉陶器	7
	みよし市	黒笹 40 号窯跡	須恵器	41
	みよし市	黒笹 89 号窯跡	須恵器 / 灰釉陶器	40
	常滑市	出地田古窯跡 1	山茶碗 / 陶器	20
	常滑市	大曽公園１号古窯跡	山茶碗 / 陶器	20
	常滑市	三郎谷１号窯跡	陶器	5
	常滑市	毘沙グゼ古窯跡	陶器	10
	常滑市	福住古窯跡	山茶碗 / 陶器	17
	常滑市	金色東古窯跡	陶器	10
	常滑市	鑓場御林古窯跡	山茶碗 / 陶器	20
	常滑市	亀塚池古窯跡	山茶碗 / 陶器	12
	常滑市	子森Ｂ１古窯跡	陶器	10
	常滑市	高坂古窯跡	陶器	10
	岡崎市	追挟間古窯	須恵器	19
	岡崎市	松本古窯	山茶碗	9
	岡崎市	上地古窯跡群・上矢崎古窯	須恵器 / 灰釉陶器	10
	岡崎市	上地古窯跡群・堤ヶ入古窯	灰釉陶器	10
	岡崎市	上地古窯跡群・下矢崎古窯	須恵器 / 灰釉陶器	9
	幸田町	百皿窯	山茶碗	20
	幸田町	乳母ヶ懐窯	山茶碗	20
	豊川市	赤塚山１号窯	瓦（古代）	19
	豊田市	七曲１号窯	須恵器 / 灰釉陶器	10
	豊田市	高根越１号窯	山茶碗	10
	豊田市	高根越２号窯	須恵器	10
	豊橋市	百々池Ｂ古窯	灰釉陶器	17
岐阜	中津川市	上県２号窯	陶器	32
	中津川市	尻無１号窯	陶器	40
静岡	浜松市	宮口窯跡吉名窯跡	灰釉陶器	30
	浜松市	宮口窯跡大屋敷窯跡	灰釉陶器	10
	島田市	旗指第１地点	灰釉陶器	15
	島田市	旗指第８地点	灰釉陶器	19
	島田市	向山２号窯	灰釉陶器	18
	島田市	釜谷西古窯	灰釉陶器	16
	島田市	城ノ壇１号窯	灰釉陶器	19
	菊川市	皿山古窯跡群	山茶碗	59
	牧ノ原市	白百合遺跡	弥生土器（菊川式）	20
	牧ノ原市	窯谷古窯跡	山茶碗	9
	牧ノ原市	土器谷古窯跡	山茶碗	19
	牧ノ原市	蛭ヶ谷古窯跡	山茶碗	20
	藤枝市	助宗古窯跡群	須恵器	46
	静岡市	宮川瓦窯群清泉寺窪地点	瓦（古代）	33
	静岡市	秋葉山１号窯跡	須恵器	22
	静岡市	瓦ヶ谷瓦窯跡	瓦（古代）	4
			合計	997

フォッサマグナ西縁内側

	市町名	遺跡名	種 類	資料数
静岡	静岡市	東山田瓦窯跡	瓦（古代）	21
	沼津市	二ツ洞遺跡	弥生土器（後期）	13
	沼津市	土手上遺跡 de 区	土師器（大廓式壺）	3
	沼津市	中見代Ｉ遺跡	土師器（大廓式壺）	22
	沼津市	中原遺跡	土師器（塝）	29
	沼津市	中原遺跡	土師器（駿東甕）	20
	伊豆の国市	戸沢窯跡	須恵器	17
	伊豆の国市	花坂島橋窯跡	瓦（古代）	31
山梨	甲斐市	天狗沢瓦窯跡	瓦（古代）	36
	甲府市	大坪遺跡	土師器（甲斐型坏）	20
	甲府市	川田瓦窯跡	瓦（古代）	18
	甲府市	上土器瓦窯跡	瓦（古代）	22
神奈川	小田原市	山ノ神遺跡	弥生土器（中期）	10
	厚木市	愛名鳥山遺跡	弥生土器（中期）	10
	三浦市	赤坂遺跡	弥生土器（中期）	20
	横須賀市	乗越瓦窯跡	瓦（古代）	25
千葉	市川市	北下遺跡瓦窯跡	瓦（古代）	30
			合計	347

計測された元素は以下の 14 元素である。

アルミニウム (Al)、ケイ素 (Si)、カリウム (K)、カルシウム (Ca)、チタン (Ti)、マンガン (Mn)、鉄 (Fe)、銅（Cu)、亜鉛（Zn）ヒ素（As)、ルビジウム (Rb)、ストロンチウム (Sr)、イットリウム (Y)、ジルコニウム (Zr)

標準物質として JG －1を用い、プレス機で 10t の圧力を加えて成形した。作業日ごとに標準物質も測定を行い、標準物質の元素強度に対する各資料の相対強度を用いた。

得られた各元素の強度比をもとに、Si/Fe、Ca/K、Zr を指標とする２つの判別図を作成した（第９図ほか)。第９図左では一部で「西側」資料と「内側」資料の重複があるが、第９図右では、ほぼ完全に分離されている。この２つの図に遺跡出土資料を重ねてプロットすることによって、土器の産地がフォッサマグナ西縁の「西側」であるか「内側」であるか推定する (註1)。

分析結果・赤彩顔料分析土器　（第９図）　内面に付着した顔料が朱であると判明し、朱の容器と考えられた小型壺（第１図１）の分析結果を第９図に示した。

左右の判別図とも「内側」の領域に入った。つまりこの土器の産地は、フォッサマグナ西縁より東の地域、つまり静岡東部あるいはその周辺で製作された可能性が高いと判断される。

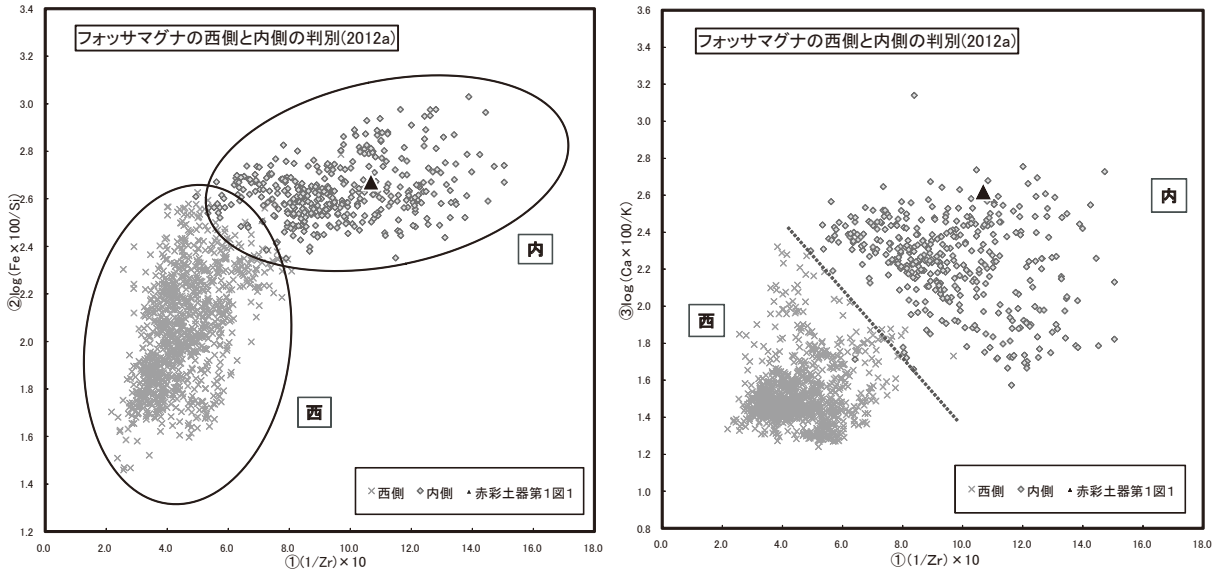
高尾山古墳の周辺地域には、朱の産地として知られた場所はなく、西南日本の中央構造線沿いに分布する水銀鉱床からも遠い。産地推定の結果とあわせて解釈すれば、この小型壺は朱を運搬するための容器ではなく、運ばれてきた朱を入れるために用いられた容器であったと考えられよう。

分析結果・パレススタイル壺　（第 10 図）　パレススタイル壺（第２図３～５）について、第１図２も含めた分析結果を第 10 図に示した。

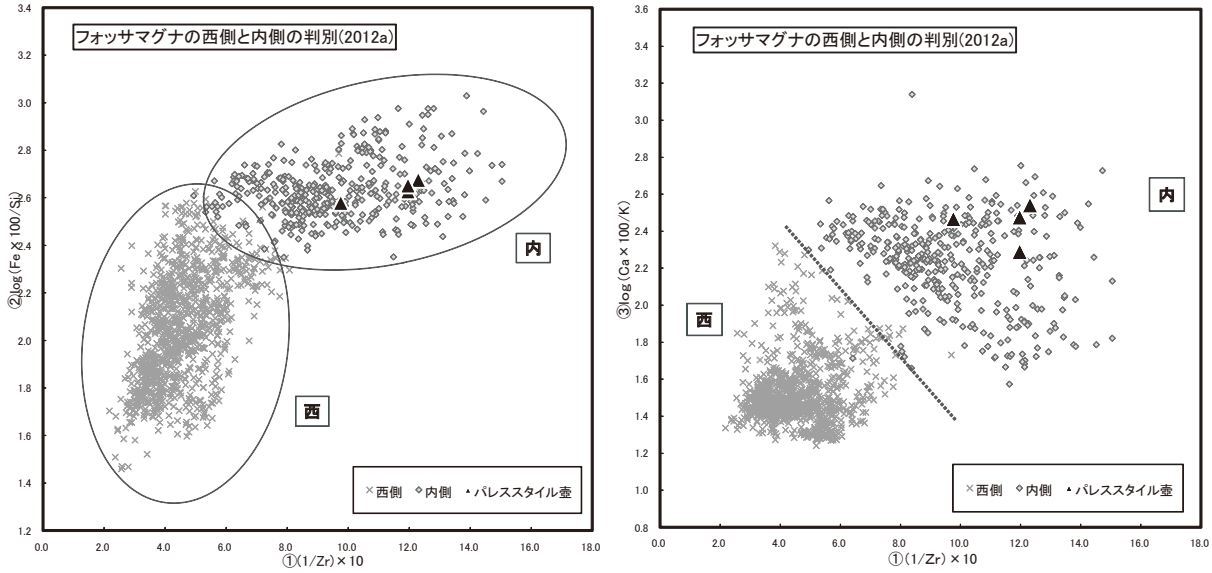
結果は４点とも「内側」の領域に属した。これらを含めた本古墳出土のパレススタイル壺（壺Ｈ類）は、三河湾周辺地域のものと、施文上の差異や口縁部の接合方法などの成形上の差異を見いだしにくい。したがって静岡東部周辺の粘土を用いて、オリジナルなパレススタイル壺の成形・施文上の規範を保った製作が行われていたと考えられる。

分析結果・廻間式高坏　（第 11 図）　本遺跡において高坏Ａ（類）あるいは高坏Ｆ（類）と分析された廻間Ⅰ式～Ⅱ式に帰属する高坏（第２図６～ 10）の分析結果を第 11 図に示した。

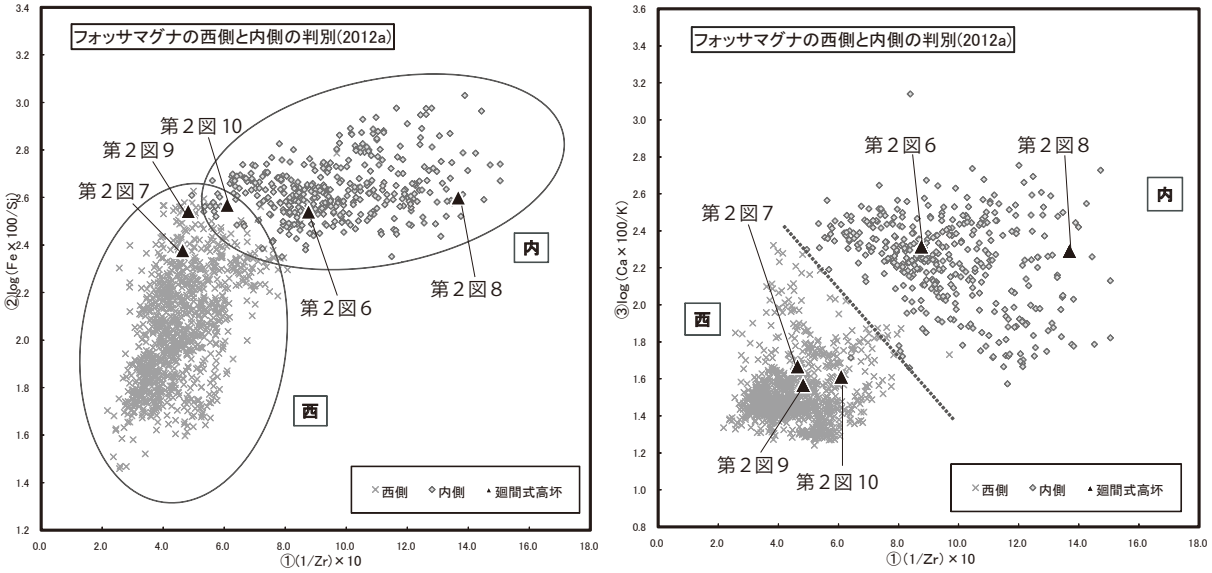
「西側」という判別結果となったものは第２図７・９・10 であり、第２図６・８が「内側」という結果となった。この廻間式の高坏もパレススタイル壺と同様に、オリジナルな東海西部の高坏と胎土を除



第９図　赤彩顔料分析土器（第１図１）の判別



第 10 図　パレススタイル壺（第１図２・第２図３～５）の判別

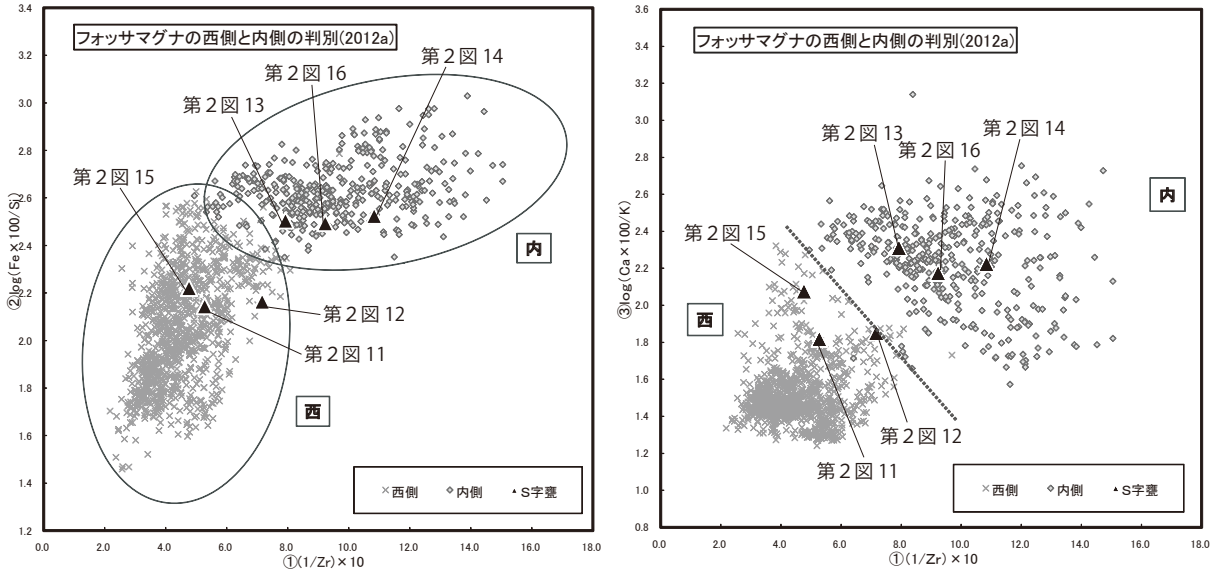


第 11 図　廻間式高坏（第２図６～ 10）の判別

けば識別が難しい。特に第２図６は精製された緻密な胎土に微細な黒雲母がわずかに含まれるという胎土の特徴まで酷似しており、緻密なヘラミガキ、内側にわずかに無文部を設ける口唇部、微妙に湾曲する脚部などの特徴も、東海地方西部の同式と一致している。しかしこの土器は判別図で用いた元素だけでなく、ルビジウム（Rb）が比較的少ないという「内側」の土器に共通する特徴も示しており、その判断に疑問を挟む余地はないと考える。

したがって本遺跡から出土する廻間式の高坏は、東海地方西部から搬入されたものと、静岡東部周辺の粘土を用いて同型式を正確に模倣したものが存在することになる。また今回は分析の対象となっていないが、本遺跡出土土器の中には、「口縁端部の面取りや脚部上位の横線文などを採用しない」（本書第Ⅵ章２・渡井英誉「高尾山古墳の出土土器について」p.140）といった在地化を進行させたものも多く、これらは「内側」に産地があるものと考えられる。

分析結果・S 字甕　（第 12 図）　本遺跡において甕 E 類と分類されている、いわゆる S 字甕（第２図 11 ～ 16）の分析結果を第 12 図に示した。



第 12 図　S字甕（第２図 11 ～ 16）の判別

第２図 11・12・15 が「西側」の領域に入り、第２図 13・14・16 が「内側」の領域に入った。「西側」と判別された３点は表裏の色調が灰褐色を示し、「内側」の３点は赤褐色である。前者が搬入土器であり、後者が在来の土器であるという認識は、この地域の研究者に広く共有されてきたが、今回の分析によってその妥当性があらためて検証されたことになる。

本書に掲載した「渡井編年」（第Ⅵ章２「高尾山古墳の出土土器について」）では、第２図 11・12・15 のような搬入品を甕Ｅ１（類）とし、第２図 13・14・16 のような在来の土器を甕Ｅ２（類）としている。渡井は前者を段階１（大廓Ⅰ式）から段階３（大廓Ⅲ式）に、後者を段階３から段階４（大廓Ⅳ式）に対比させ、Ｅ２（類）が在地の台付甕として、土器型式の中で一定の構成比を示すようになるとの見解を示している（ pp.136-138,140-141）。

註

１．本書第Ⅶ章３「高尾山古墳出土大廓式土器の産地」において増島淳が示した「フォッサマグナ・糸魚川－静岡構造線、東西の判別」（第２図）、と基本的な着想・方法は同じである。筆者の方法は Ca/K 比を加えて２枚の図で判別を行ったこと、両グラフとも東海西部地方が右側になるようにジルコニウム（Zr）の数値を逆数としたこと、標準物質を用いて測定値の安定と標準化を図ったところなどが増島とは異なっている。

写　真　図　版

神殿移設後の高尾山祭興
（平成 21 年 11 月）

調査着手前の後方部墳丘
（北西から）

熊野神社（前方部側）

PL．2

移設前の高尾山神社（後方部上）

試掘調査の状況
（H 17－1 トレンチ）

神社撤去後の後方部（南から）

前方部調査状況

主体部調査状況

主体部調査状況

ＰＬ．４

主体部調査状況

副葬品取り上げ状況

墓坑剥ぎ取り状況

前方部南東側周溝調査状況

後方部北東側周溝調査状況

後方部東側周溝調査状況

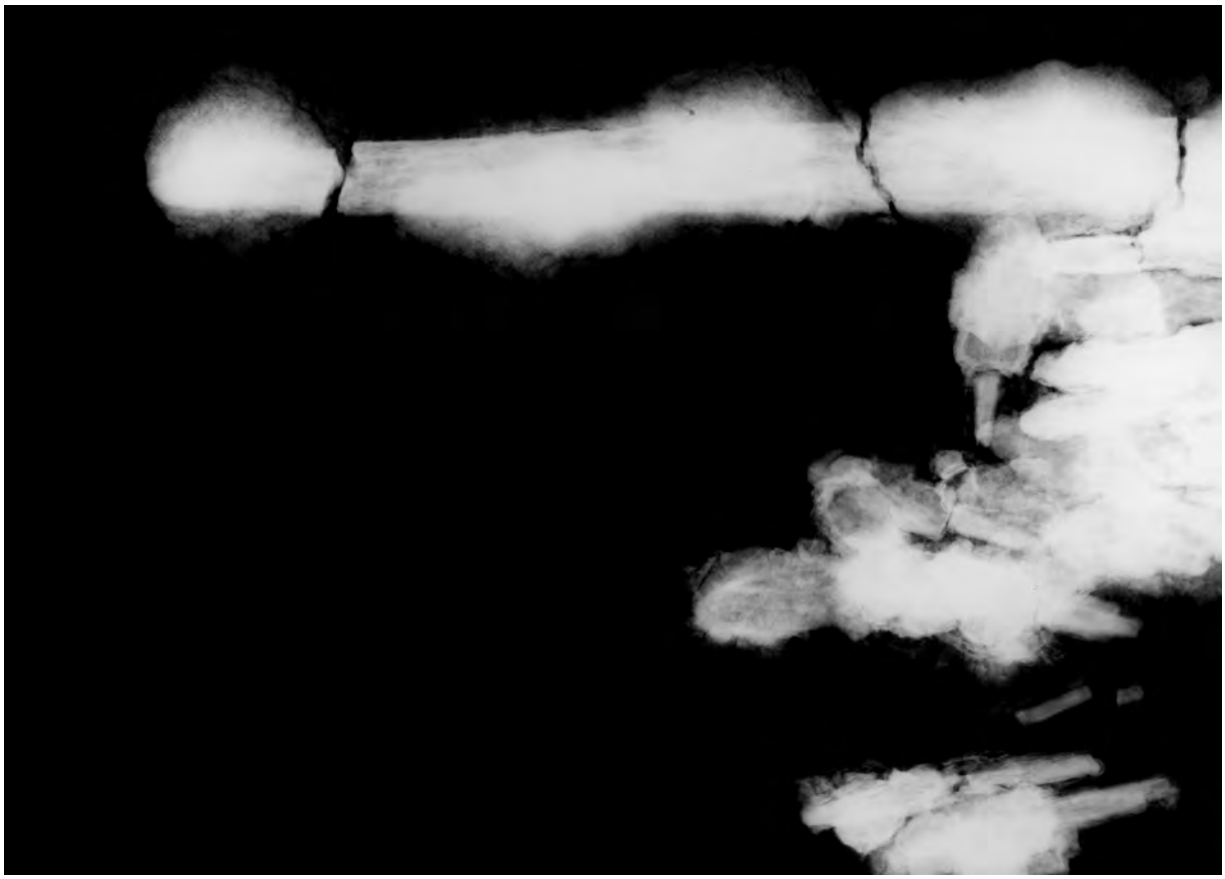
PL．6

現地説明会

現地説明会

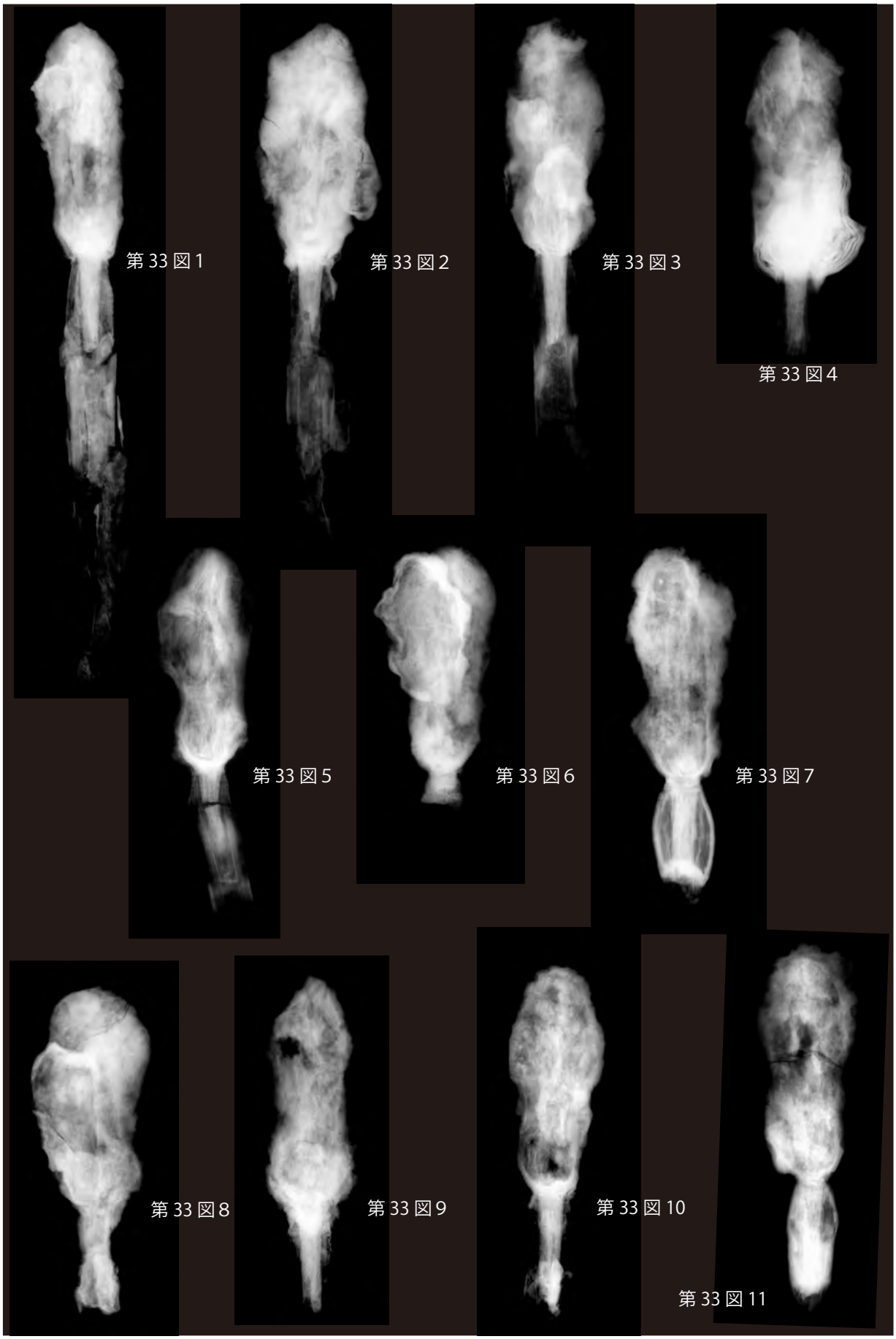
出土遺物検討会

槍・鉇X線写真



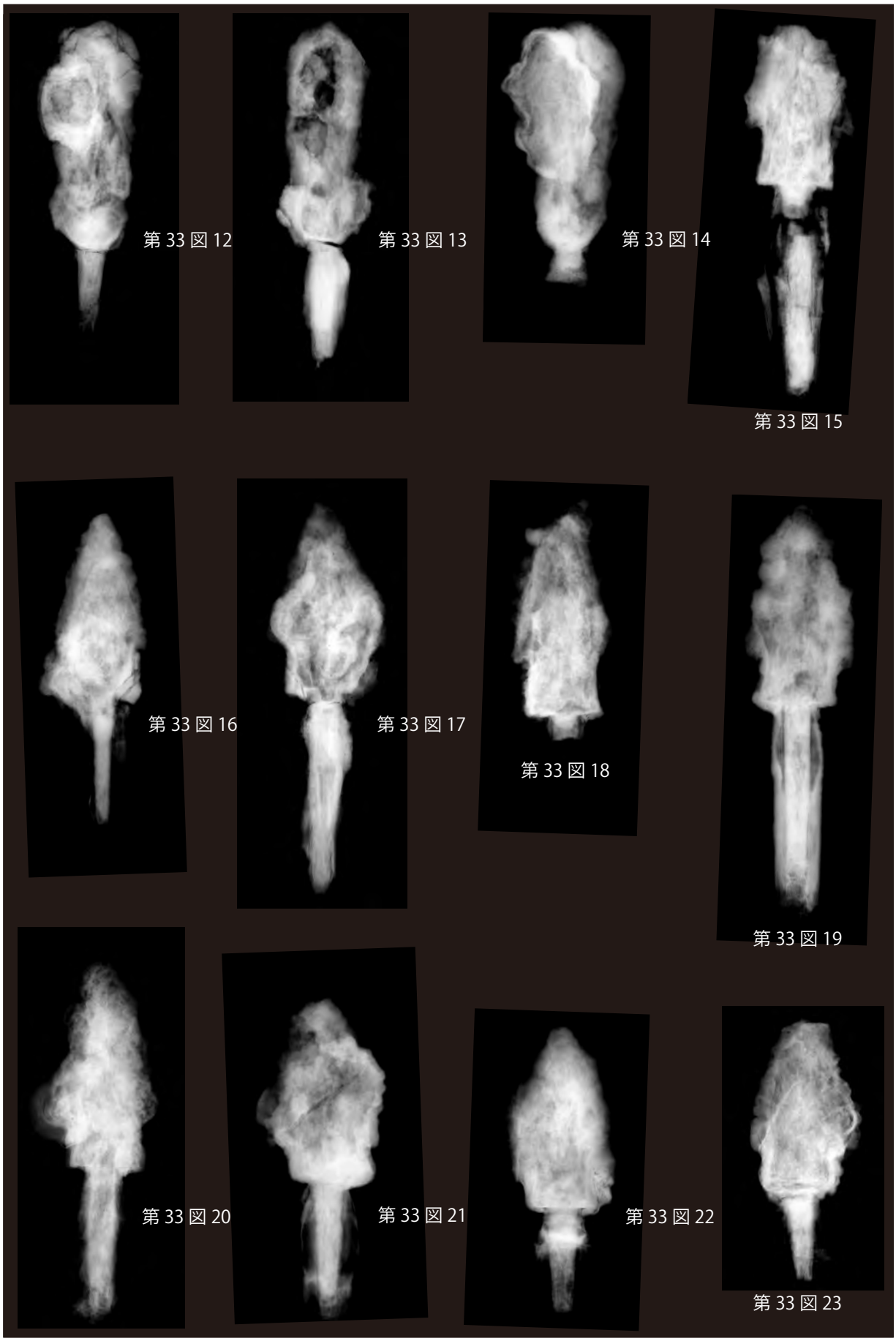
槍１（先端付近）と鉄鏃集中部分Ｘ線写真

槍１と鉄鏃集中部分Ｘ線写真


第 33 図 1
第 33 図 2
第 33 図 3
第 33 図 4
第 33 図 5
第 33 図 6
第 33 図 7
第 33 図 8
第 33 図 9
第 33 図 10
第 33 図 11

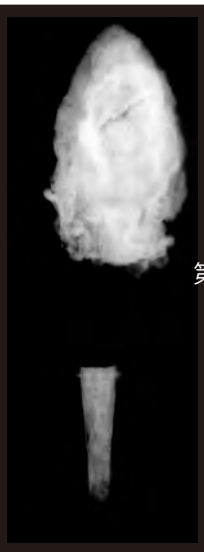
鉄鏃X線写真

ＰＬ．10


第 33 図 12
第 33 図 13
第 33 図 14
第 33 図 15
第 33 図 16
第 33 図 17
第 33 図 18
第 33 図 19
第 33 図 20
第 33 図 21
第 33 図 22
第 33 図 23

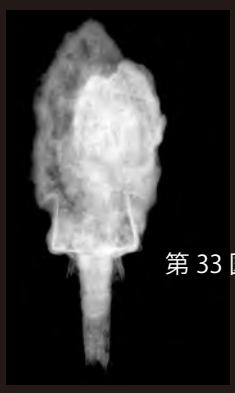
鉄鏃Ｘ線写真

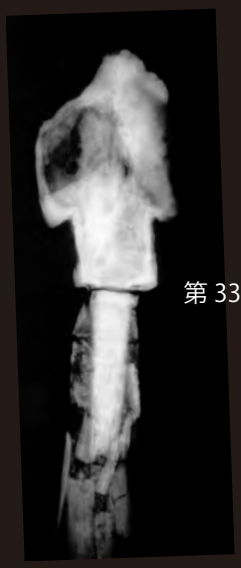
第 33 図 24


第 33 図 25

第 33 図 26

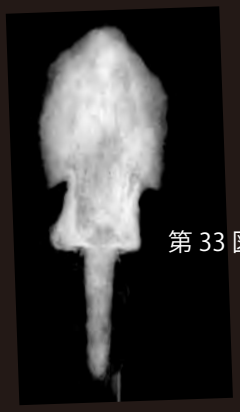
第 33 図 27

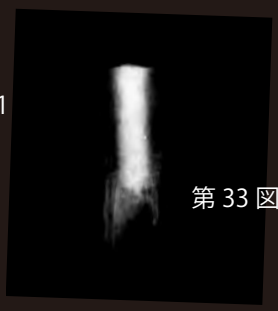

第 33 図 28


第 33 図 29

第 33 図 30

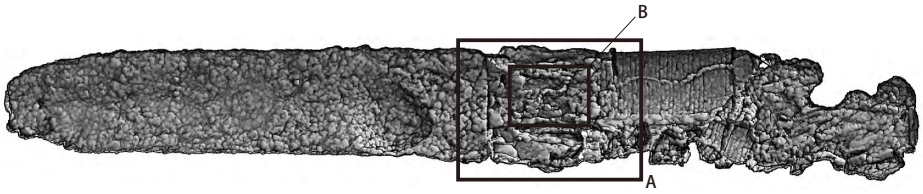
第 33 図 33


第 33 図 31

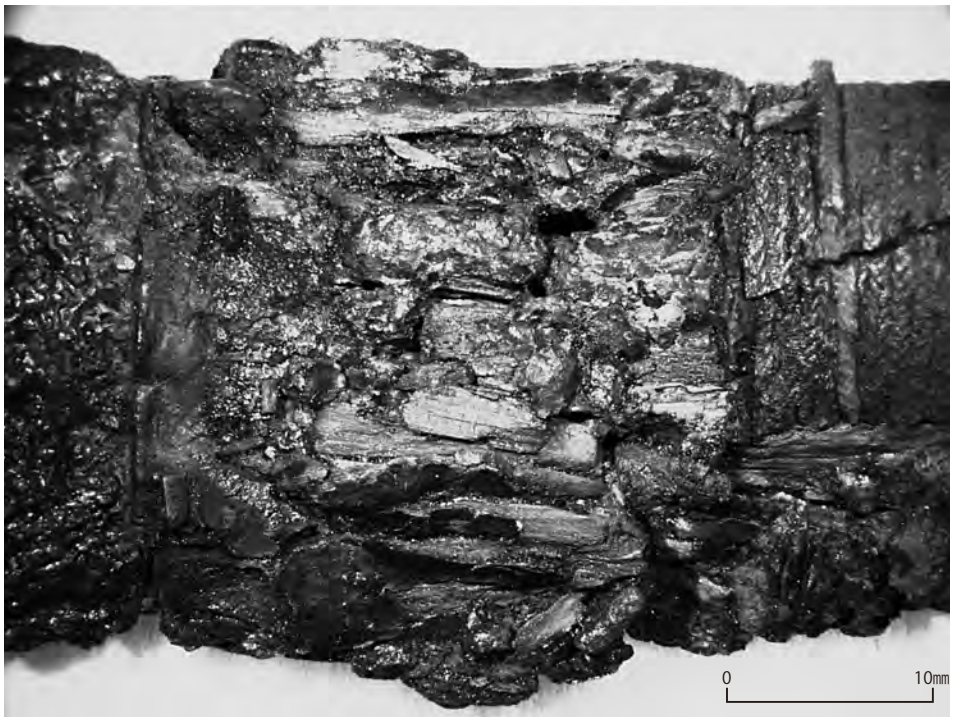

第 33 図 32

鉄鏃Ｘ線写真

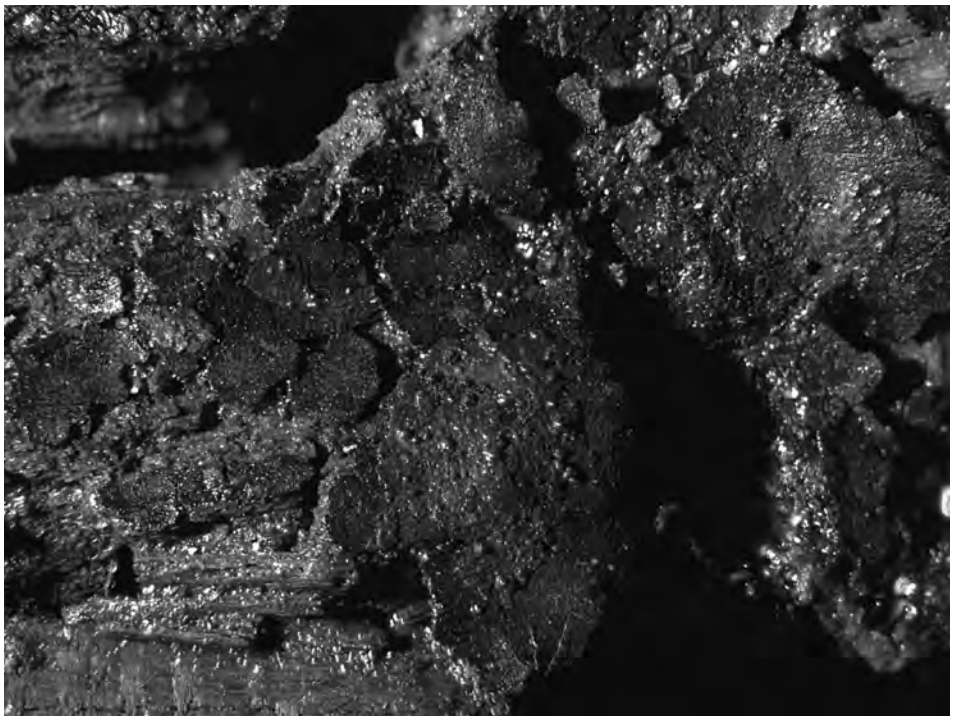
PL．12



第 36 図 2　正面

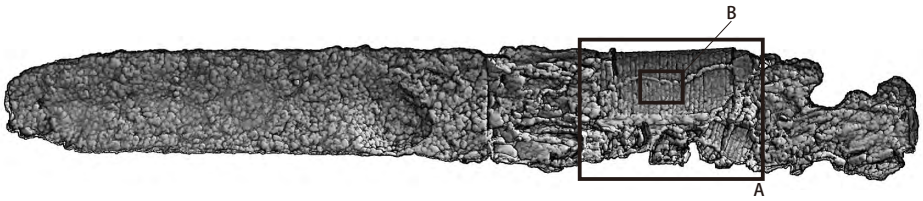


A　拡大写真（1）

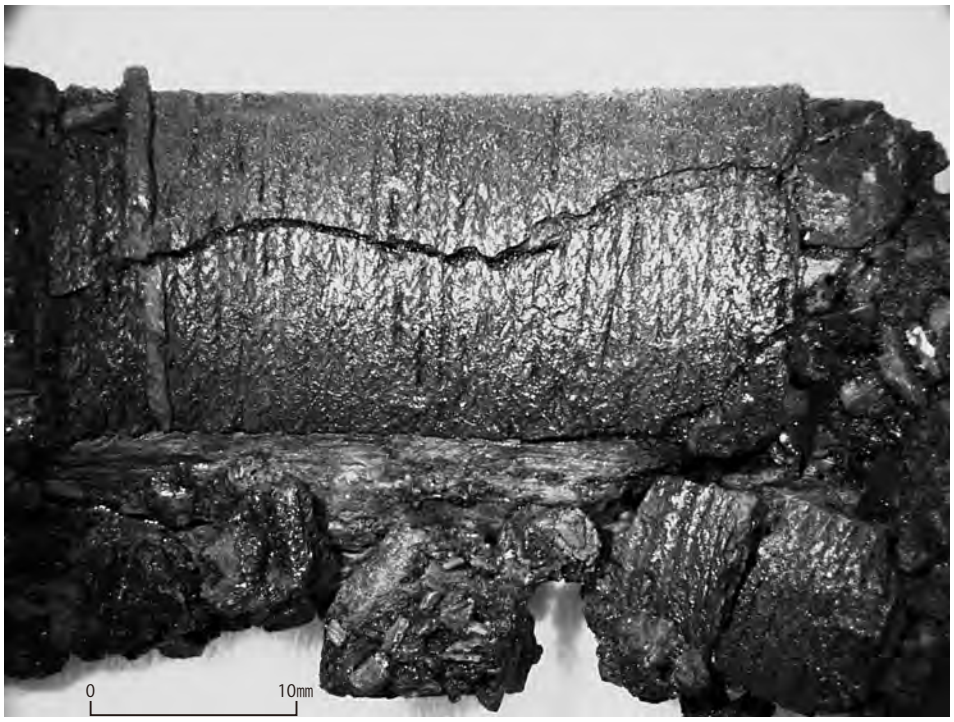


B　拡大写真（2）

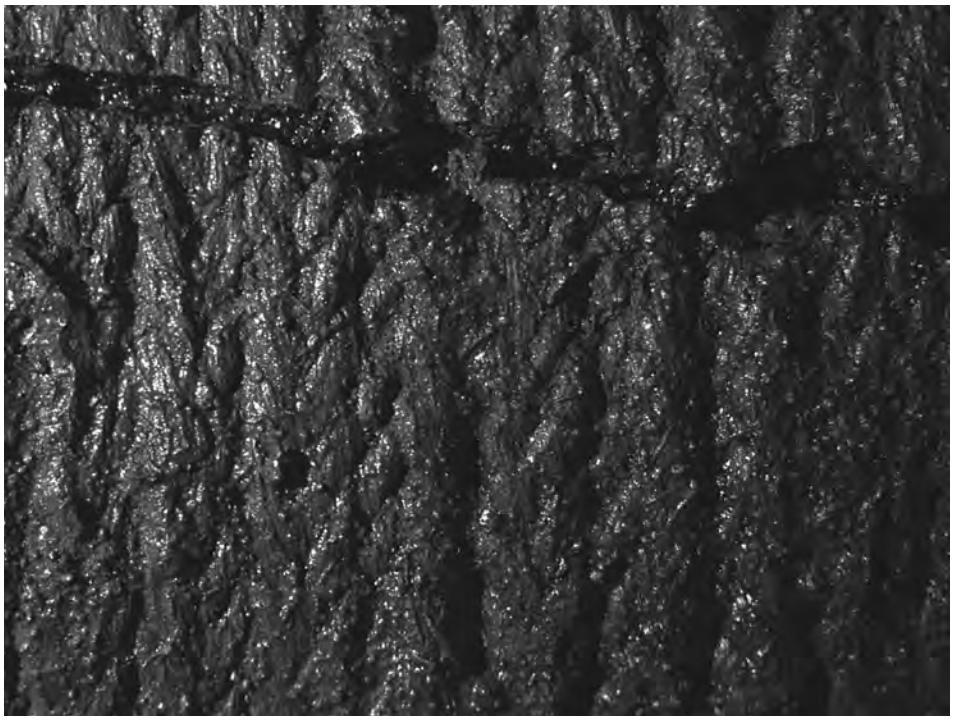
槍 2 詳細写真（1）



第 36 図２　正面



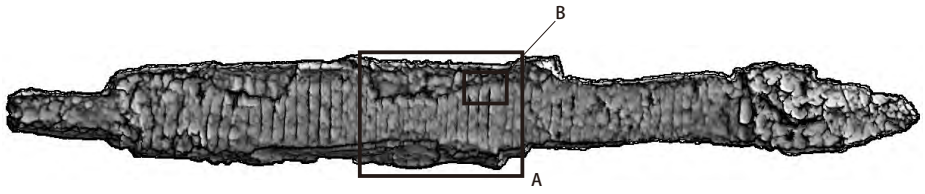
A　拡大写真（1）



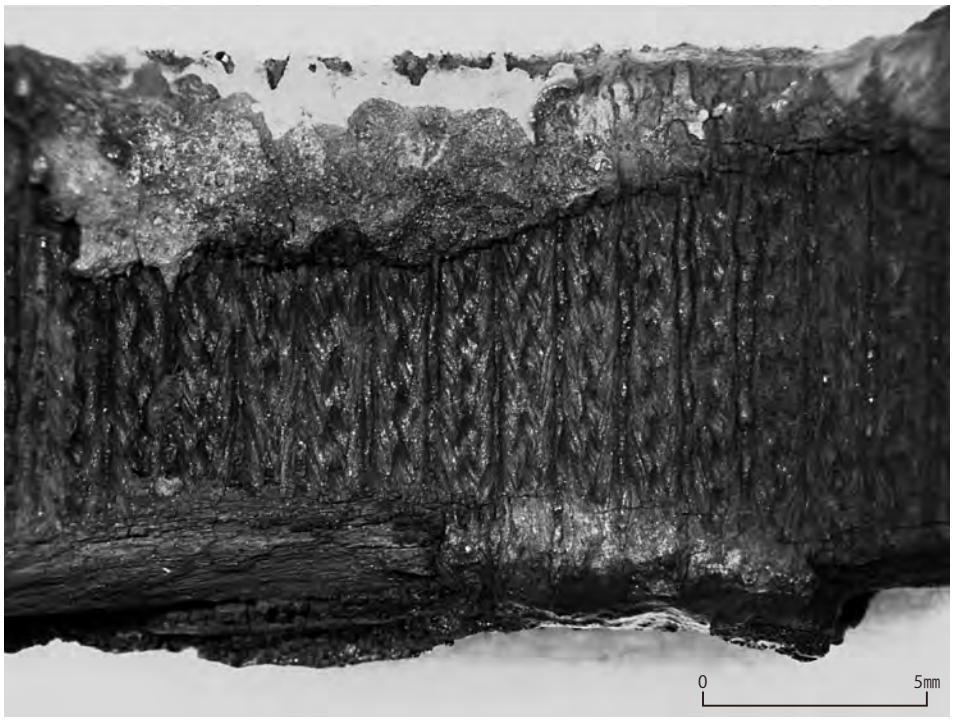
B　拡大写真（2）

槍２詳細写真（2）

PL．14



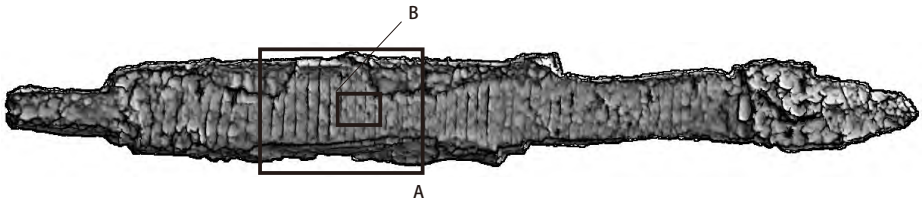
第 36 図 3　裏面



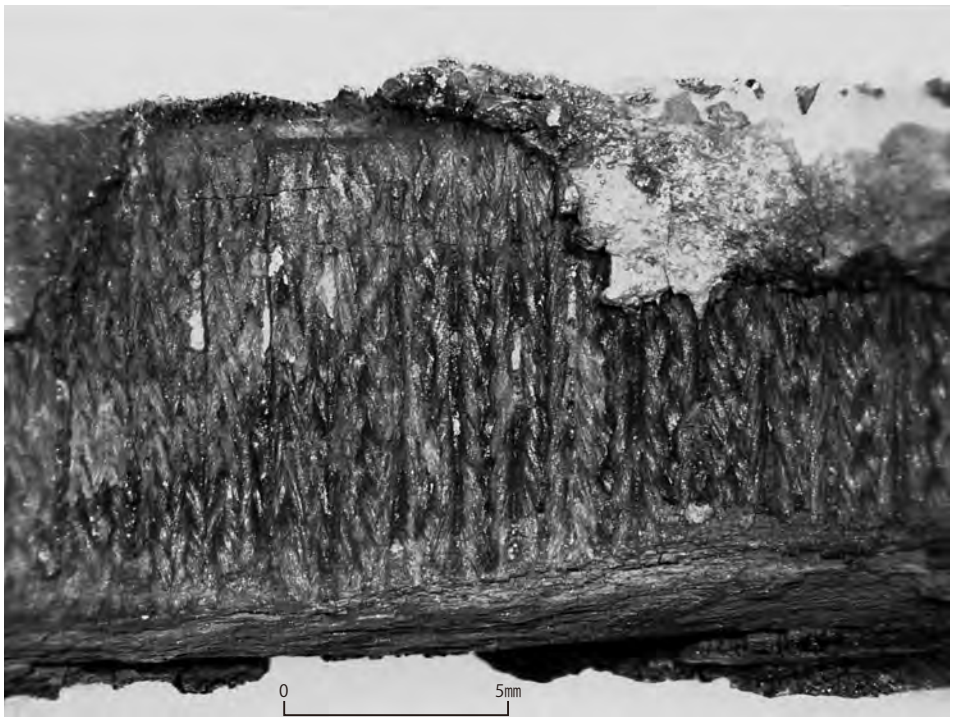
A　拡大写真（1）

B　拡大写真（2）

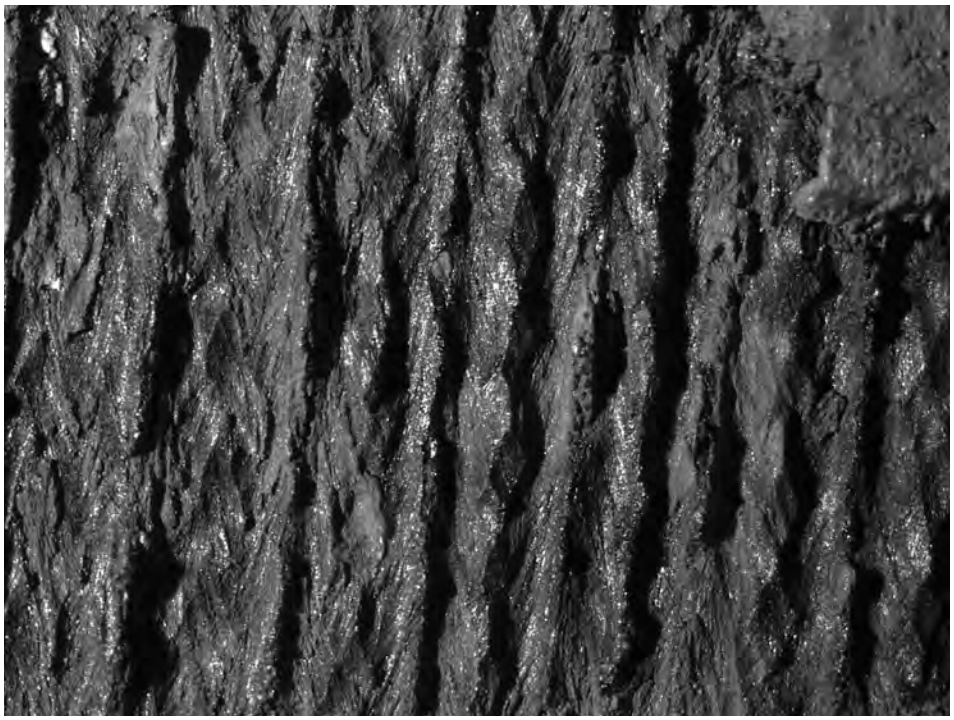
鉇詳細写真（1）



第 36 図 3　裏面



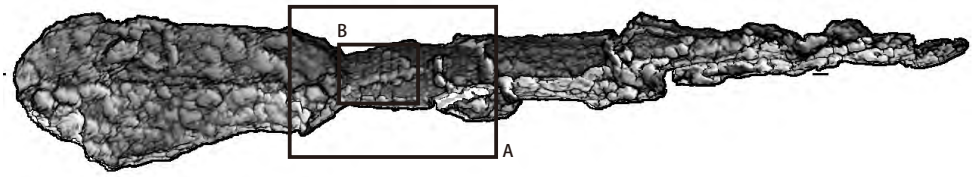
A　拡大写真（1）



B　拡大写真（2）

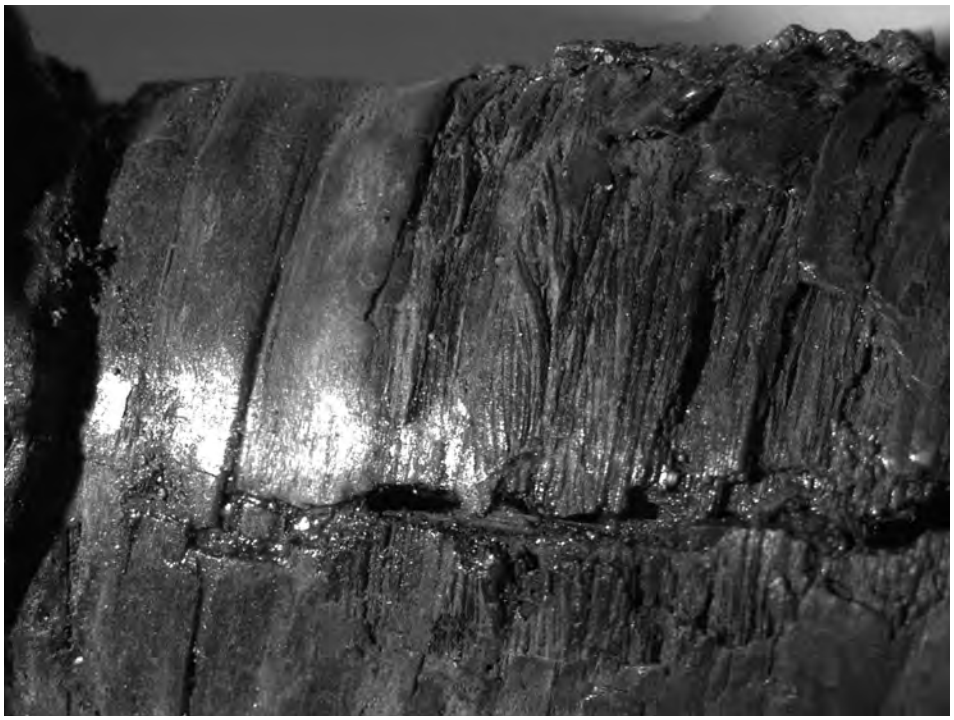
鉈詳細写真（2）

ＰＬ．16



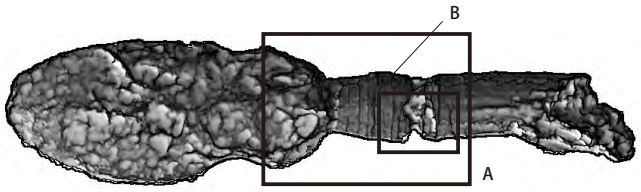
第 37 図 1　正面

A　拡大写真（1）



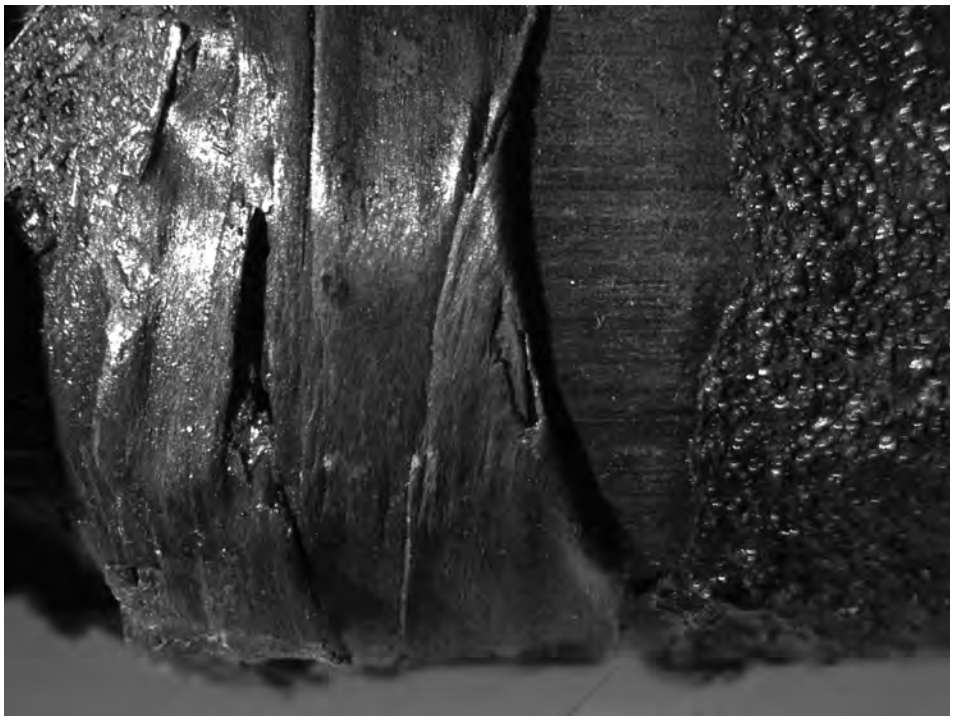
B　拡大写真（2）

鉄鏃詳細写真（1）



第 37 図 3　裏面

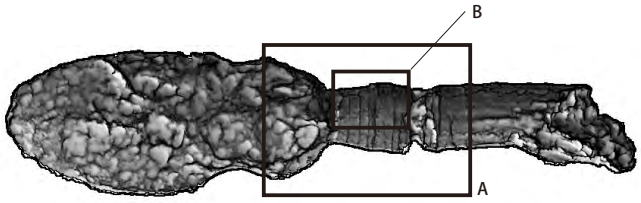
A　拡大写真（1）



B　拡大写真（2）

鉄鏃詳細写真（2）

PL．18

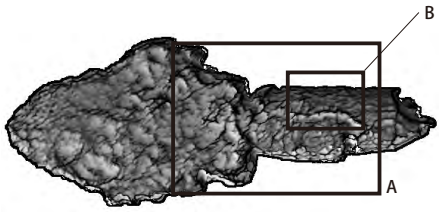


第 37 図 3　裏面

A　拡大写真（1）

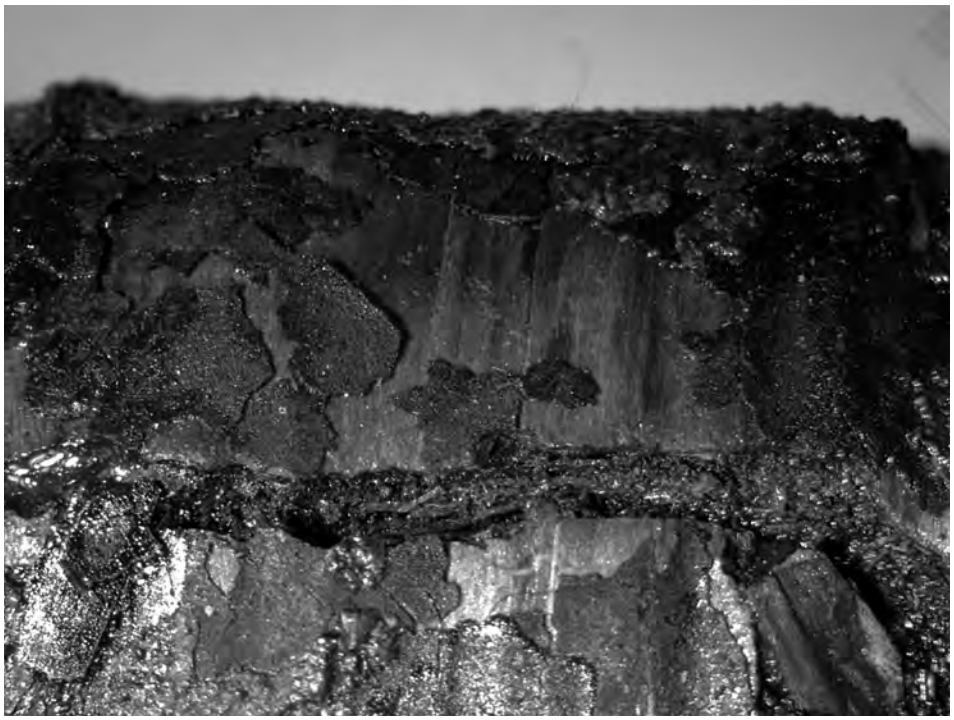
B　拡大写真（2）

鉄鏃詳細写真（3）



第 38 図 21　正面

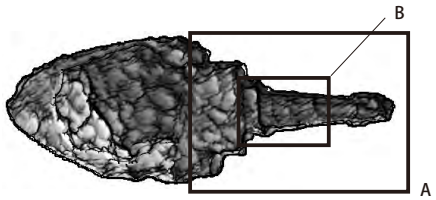
A　拡大写真（1）



B　拡大写真（2）

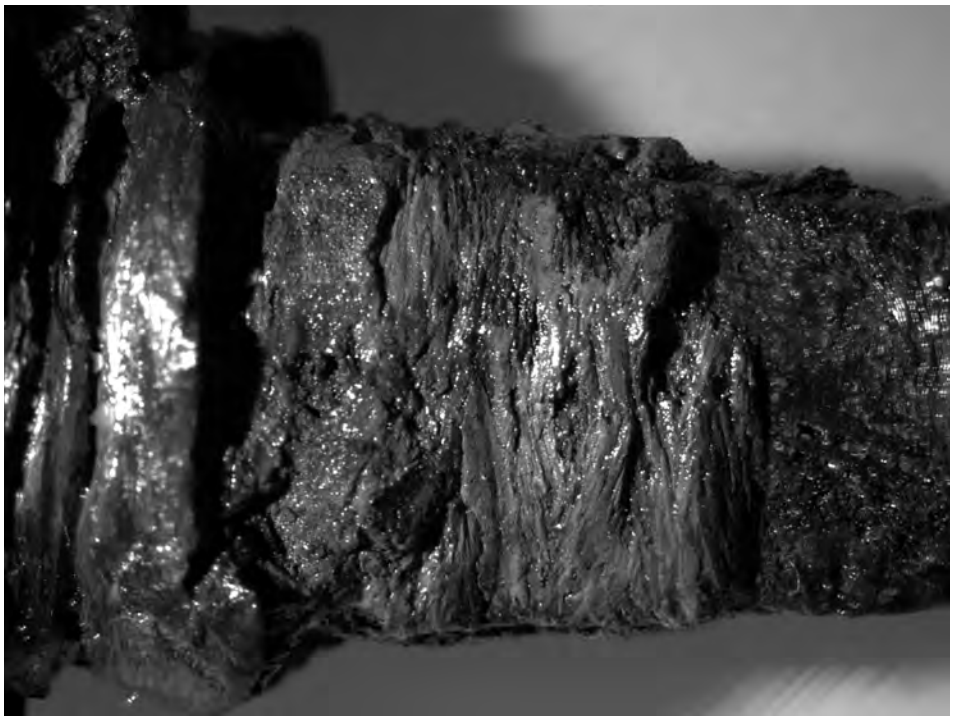
鉄鏃詳細写真（4）

ＰＬ．20



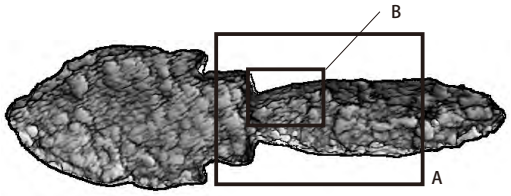
第 38 図 25　正面

Ａ　拡大写真（１）



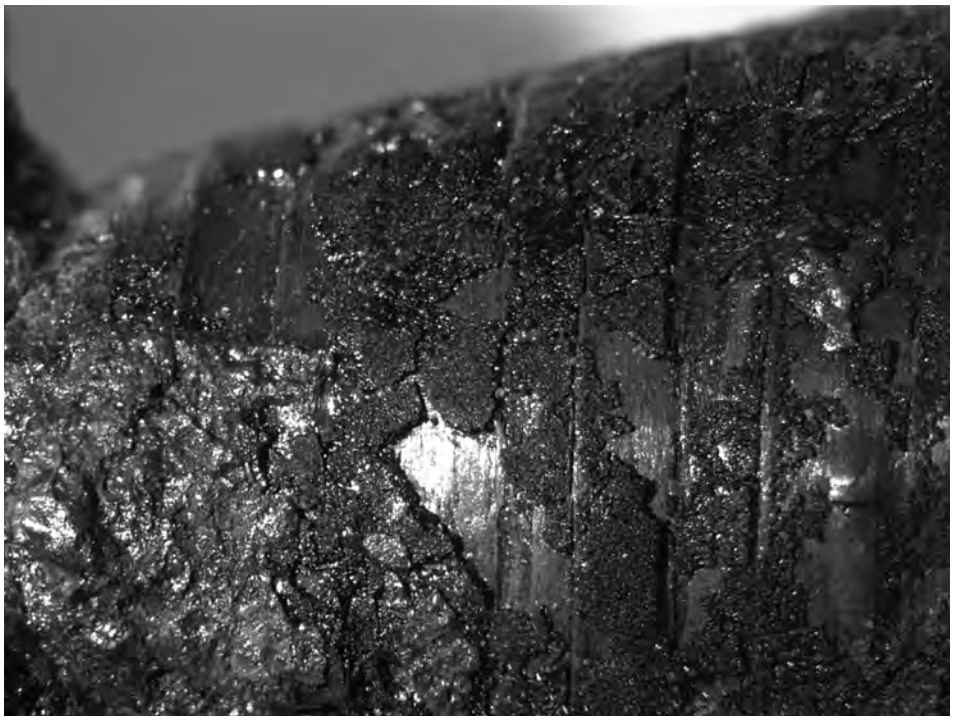
Ｂ　拡大写真（２）

鉄鏃詳細写真（５）



第 38 図 26　正面

A　拡大写真（1）



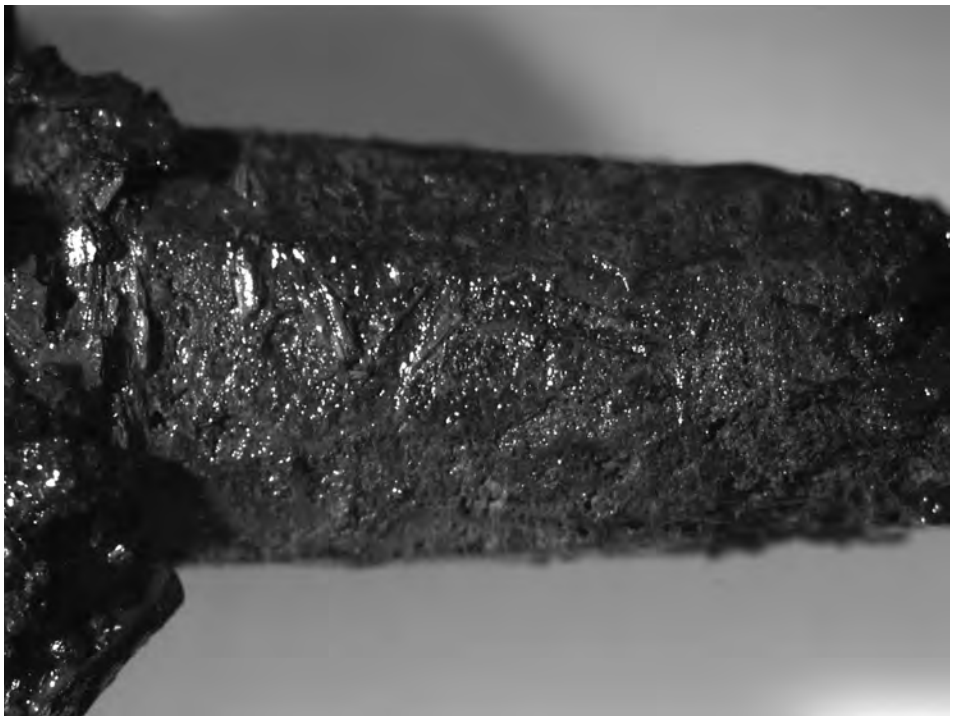
B　拡大写真（2）

鉄鏃詳細写真（6）

ＰＬ．22

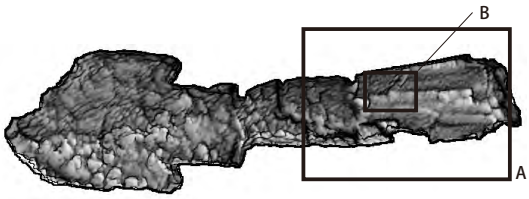
第 38 図 28　裏面

A　拡大写真（1）

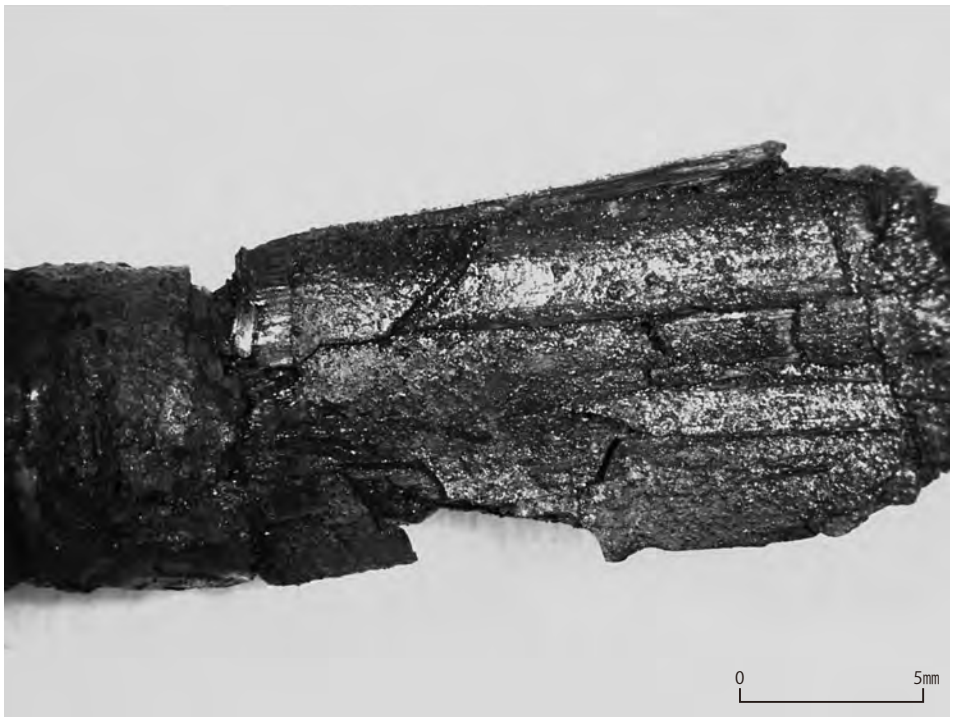


B　拡大写真（2）

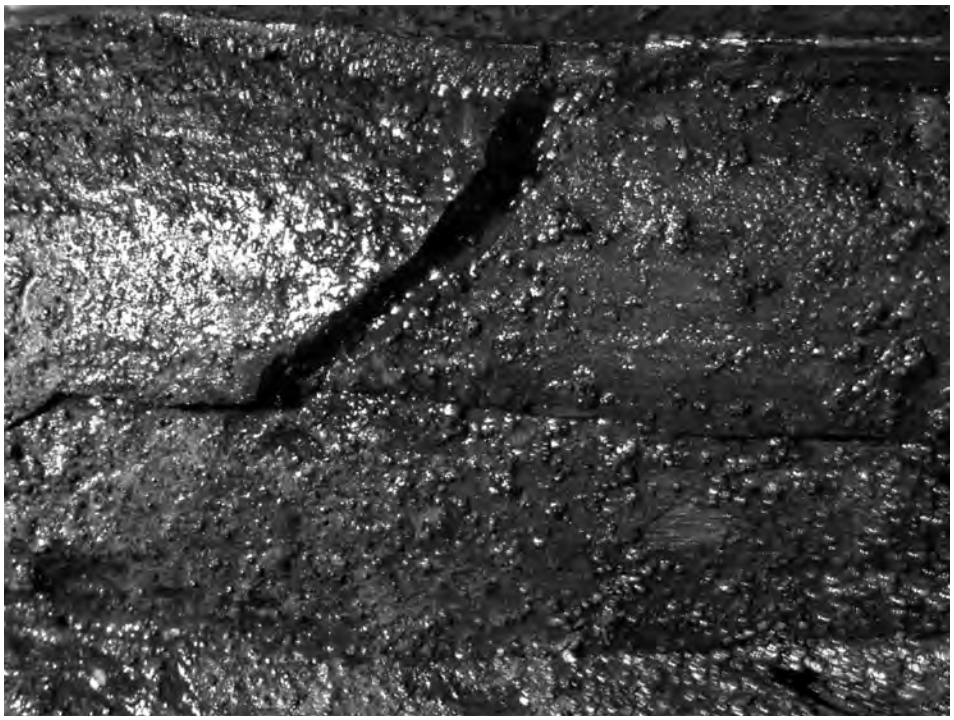
鉄鏃詳細写真（7）



第 38 図 29　正面



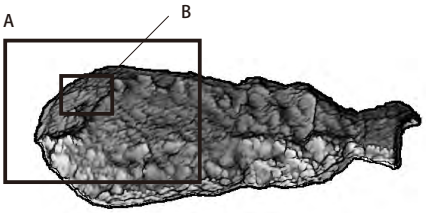
A　拡大写真（1）



B　拡大写真（2）

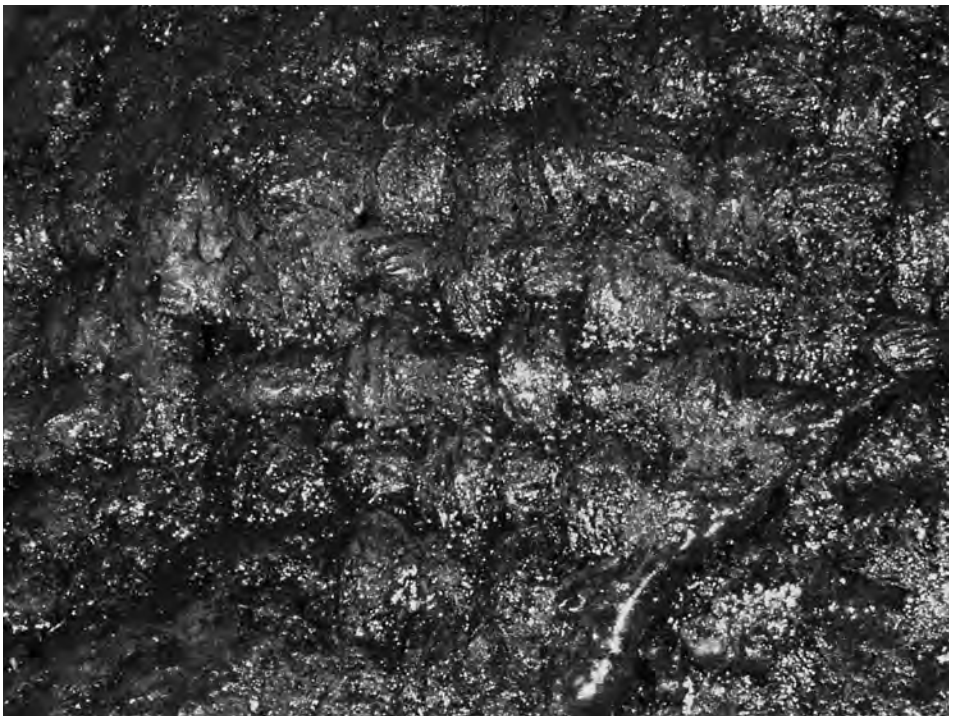
鉄鏃詳細写真（8）

ＰＬ．24



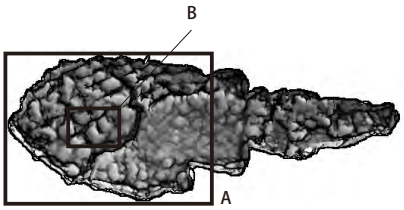
第 37 図６　正面

Ａ　拡大写真（１）

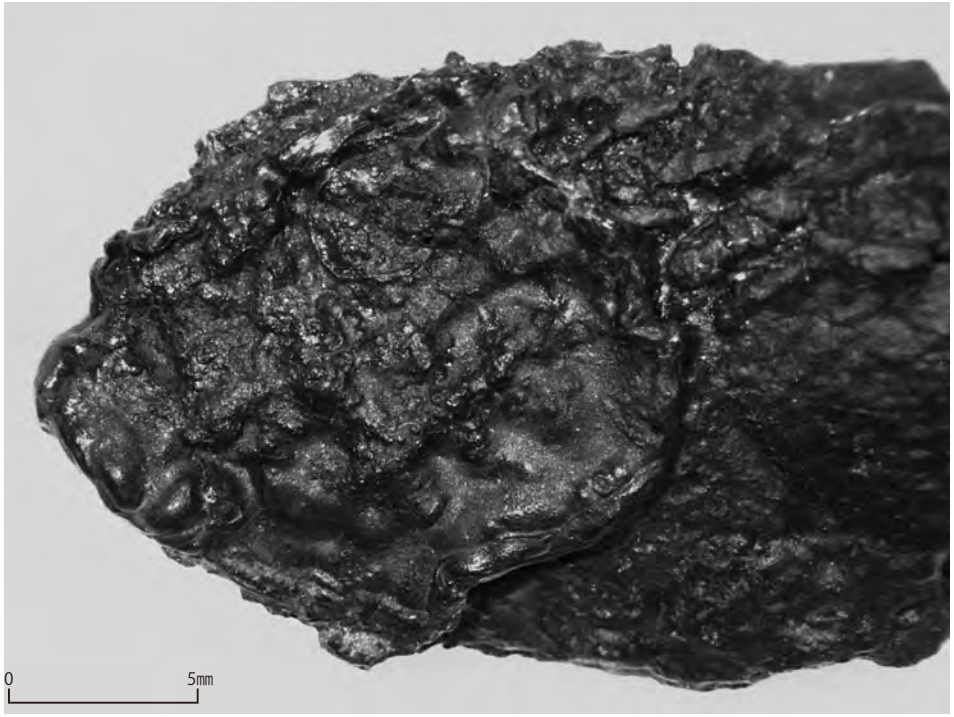


Ｂ　拡大写真（２）

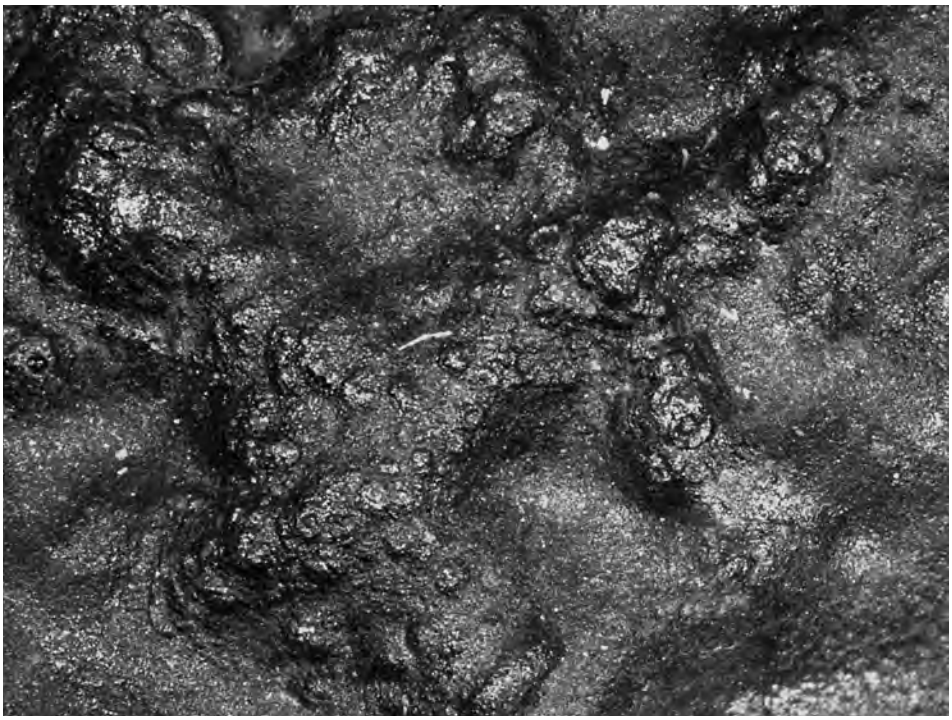
鉄鏃詳細写真（９）



第 38 図 24　正面



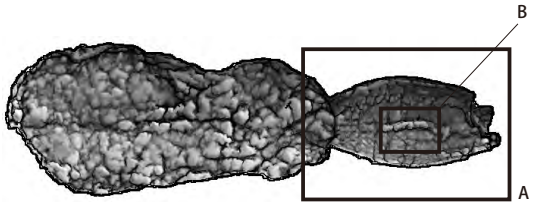
A　拡大写真（1）



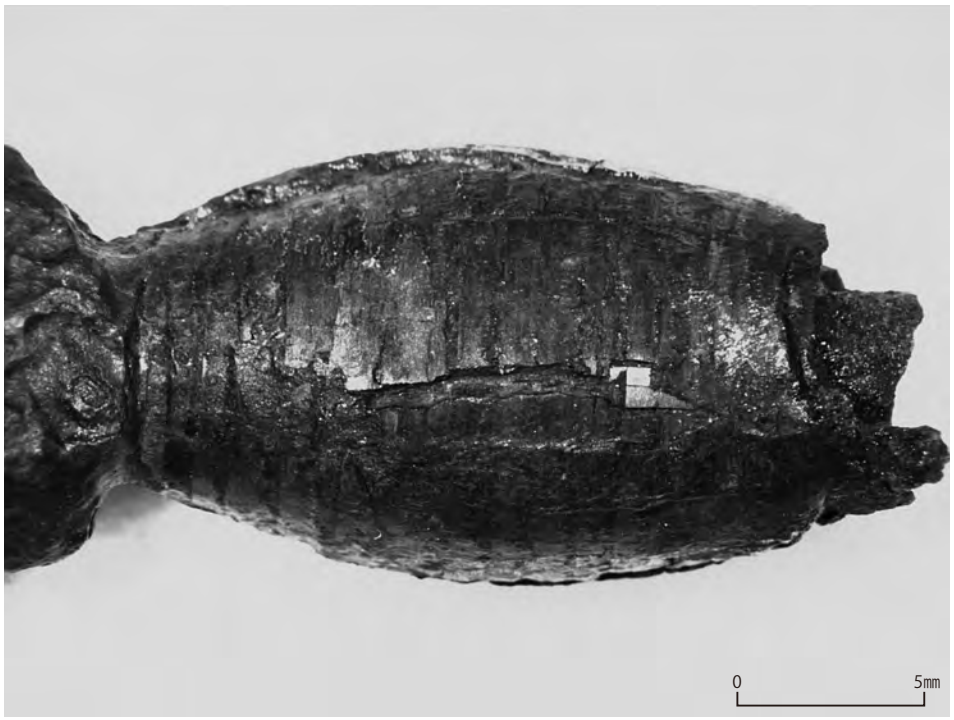
B　拡大写真（2）

鉄鏃詳細写真（10）

ＰＬ．26



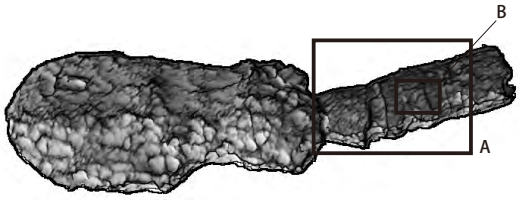
第 37 図 7　裏面



A　拡大写真（1）

B　拡大写真（2）

鉄鏃詳細写真（11）



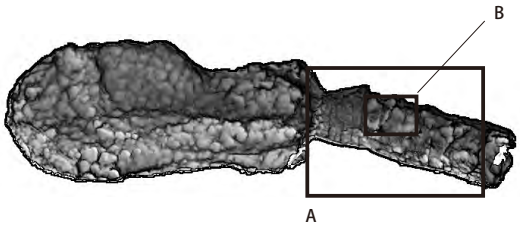
第 37 図 5　正面

A　拡大写真（1）

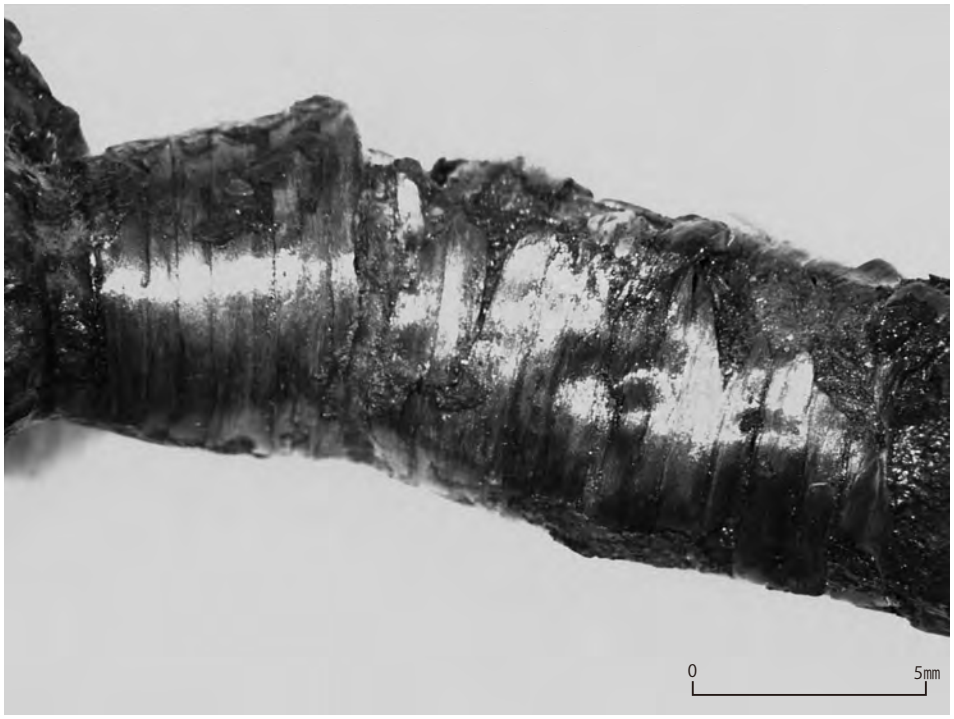
B　拡大写真（2）

鉄鏃詳細写真（12）

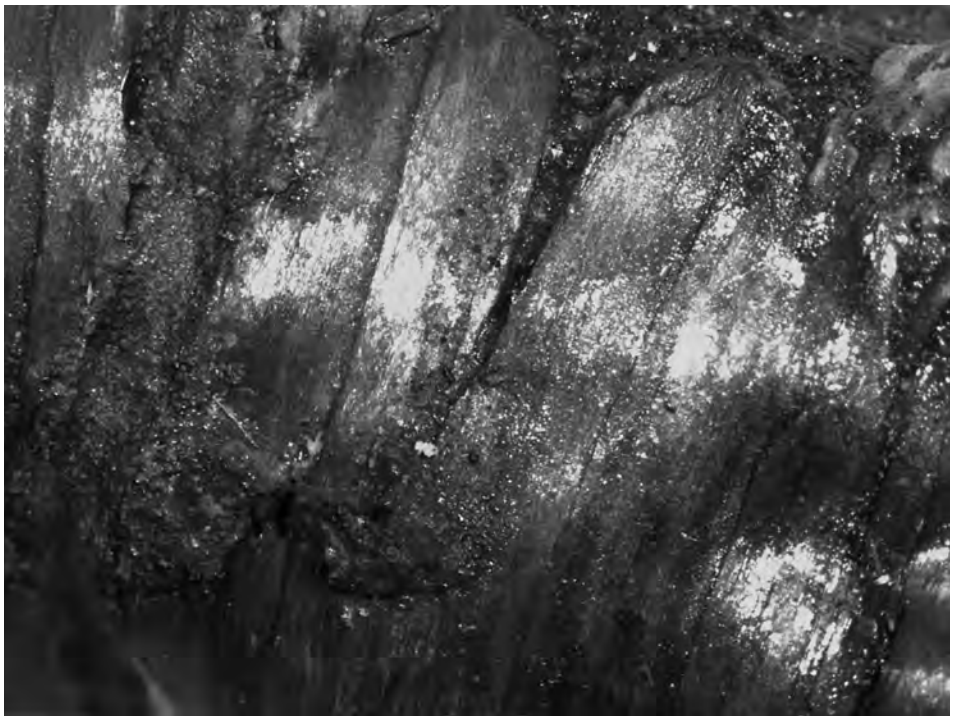
ＰＬ．28



第 37 図 5　裏面



A　拡大写真（1）



B　拡大写真（2）

鉄鏃詳細写真（13）

高尾山古墳と周辺風景（右が北）

調査状況（着手直後）

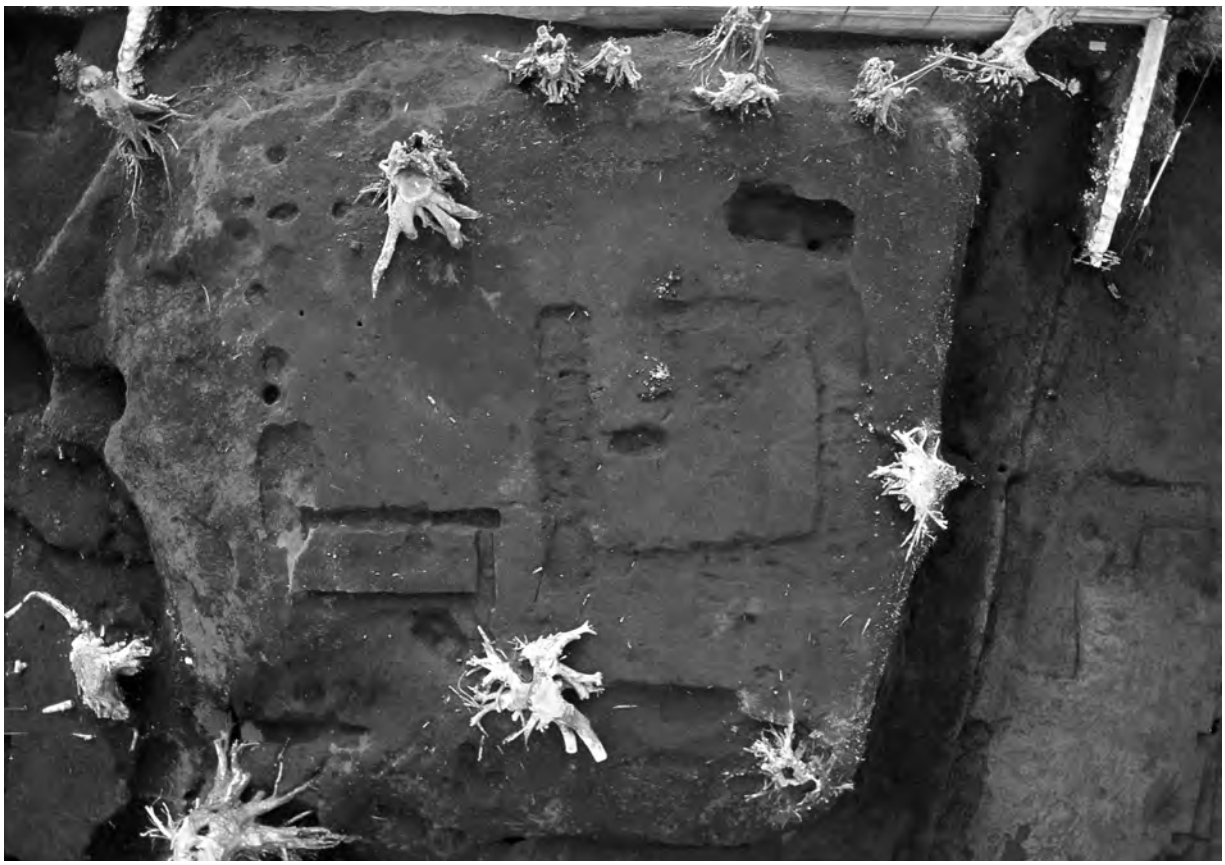
調査状況（周溝検出前）

調査状況（周溝調査中）

調査状況（周溝調査終了）

調査状況（主体部調査中）

調査状況（主体部墓坑完掘）



主体部調査状況（棺上遺物検出）

後方部墳丘トレンチ設定状況

主体部調査状況（副葬品出土）

主体部セクション（n－n' 方向）

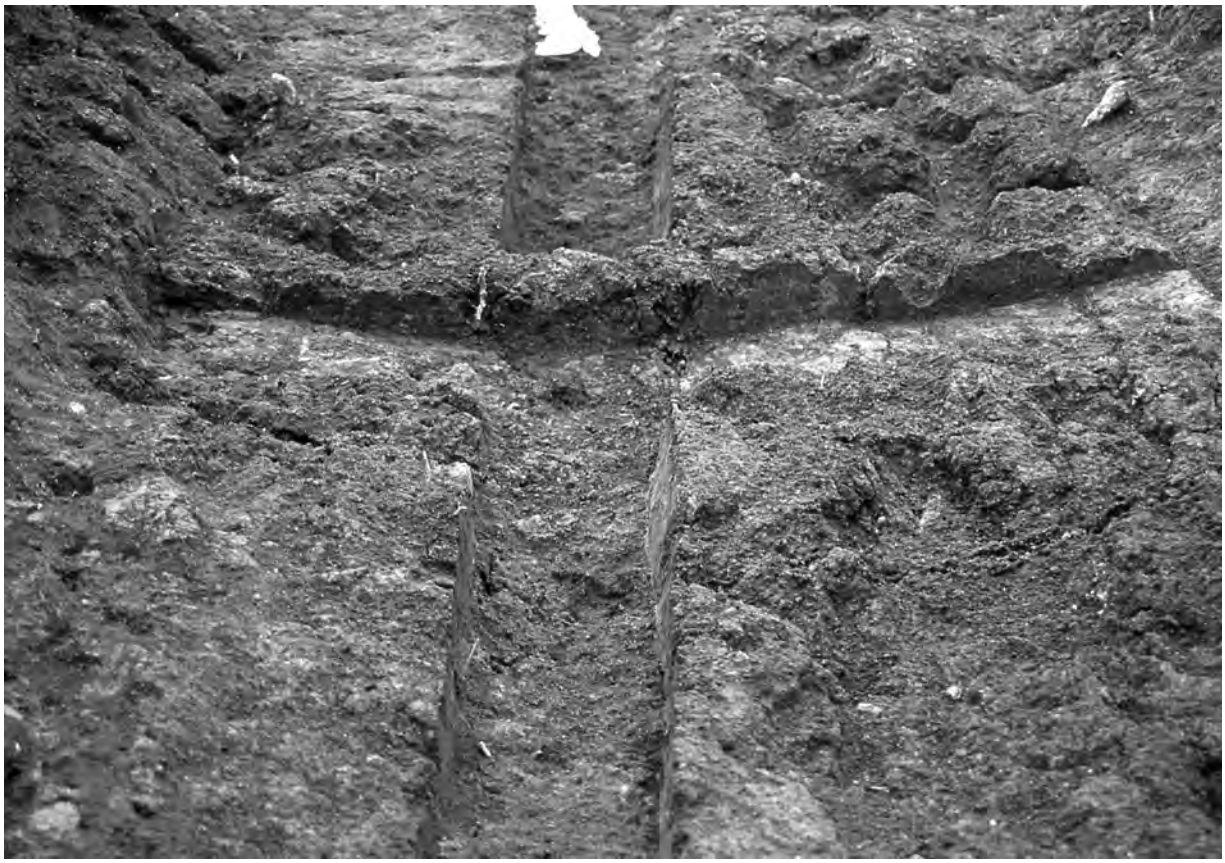
主体部セクション北側（O－O' 方向）

墓坑検出状況（1）

墓坑検出状況（2）

墓坑調査状況

墓坑底部調査状況



墓坑底部セクション

主体部全景（北より）

主体部副葬品出土状況（西より）

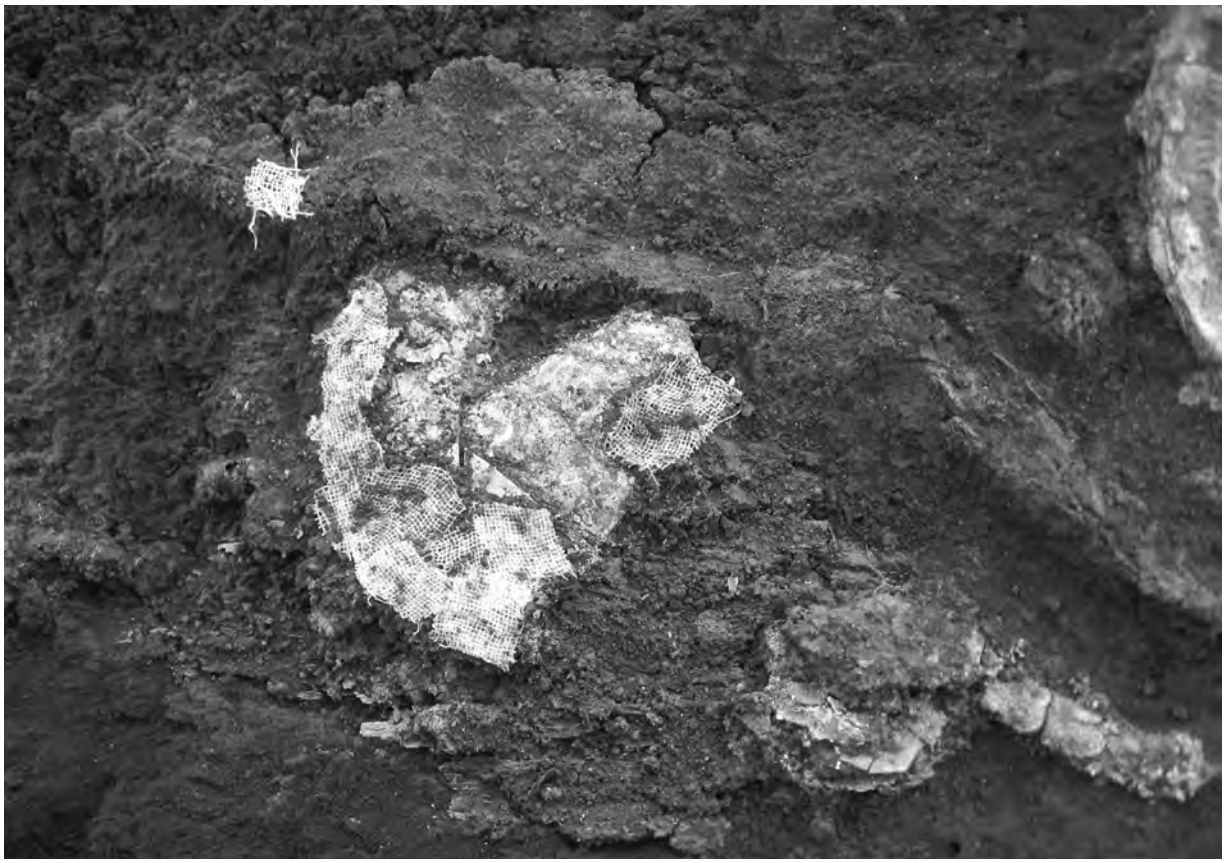
主体部副葬品出土状況（東より）

棺上遺物出土状況

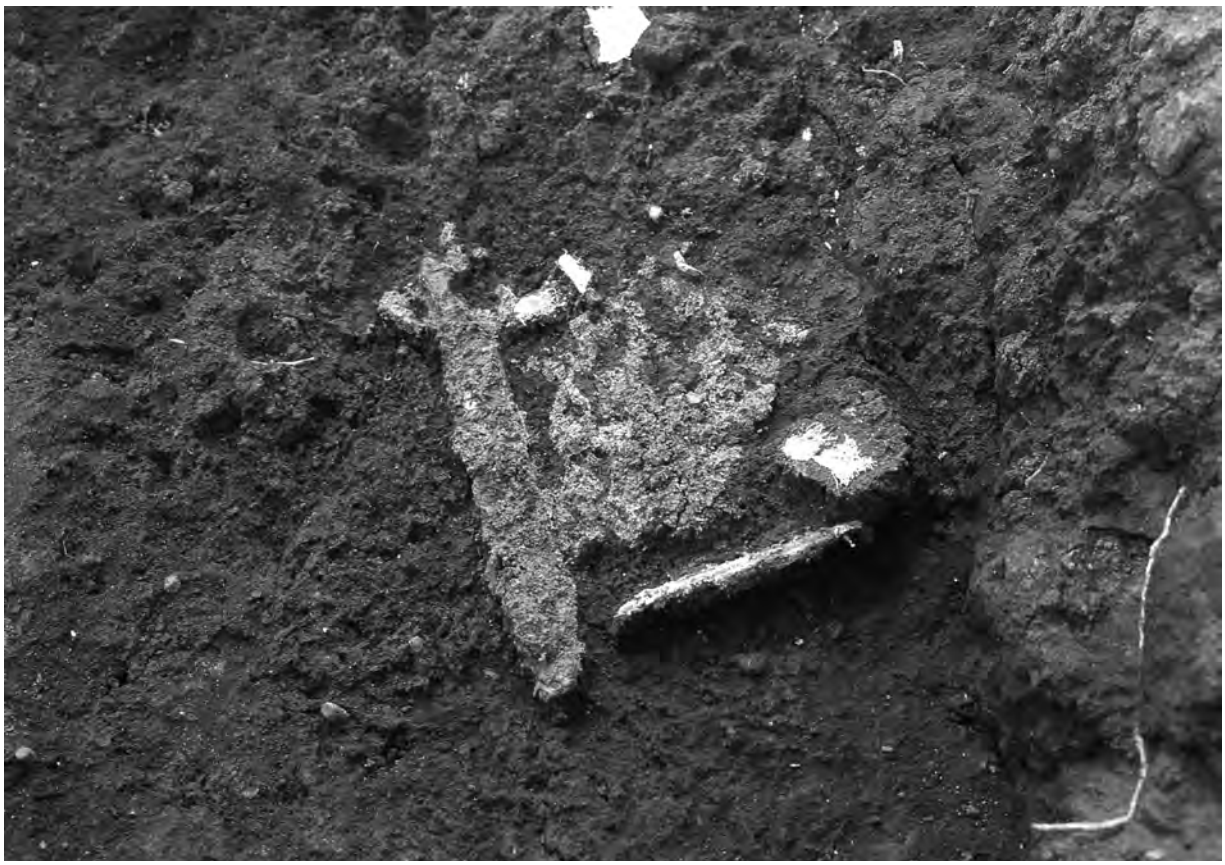
棺上出土土器（1）

棺上出土土器（２）

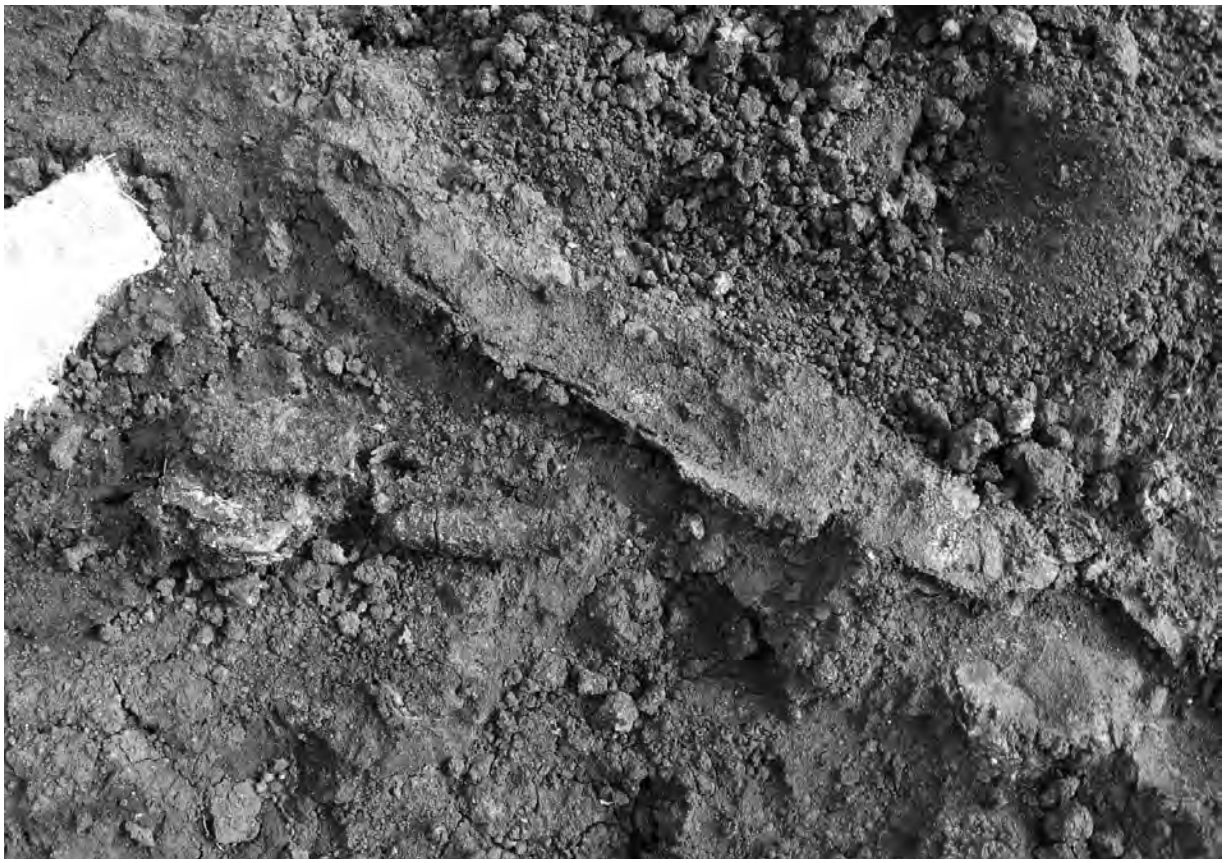
副葬品



銅鏡と柄の痕跡



槍２と鉇



柄の痕跡

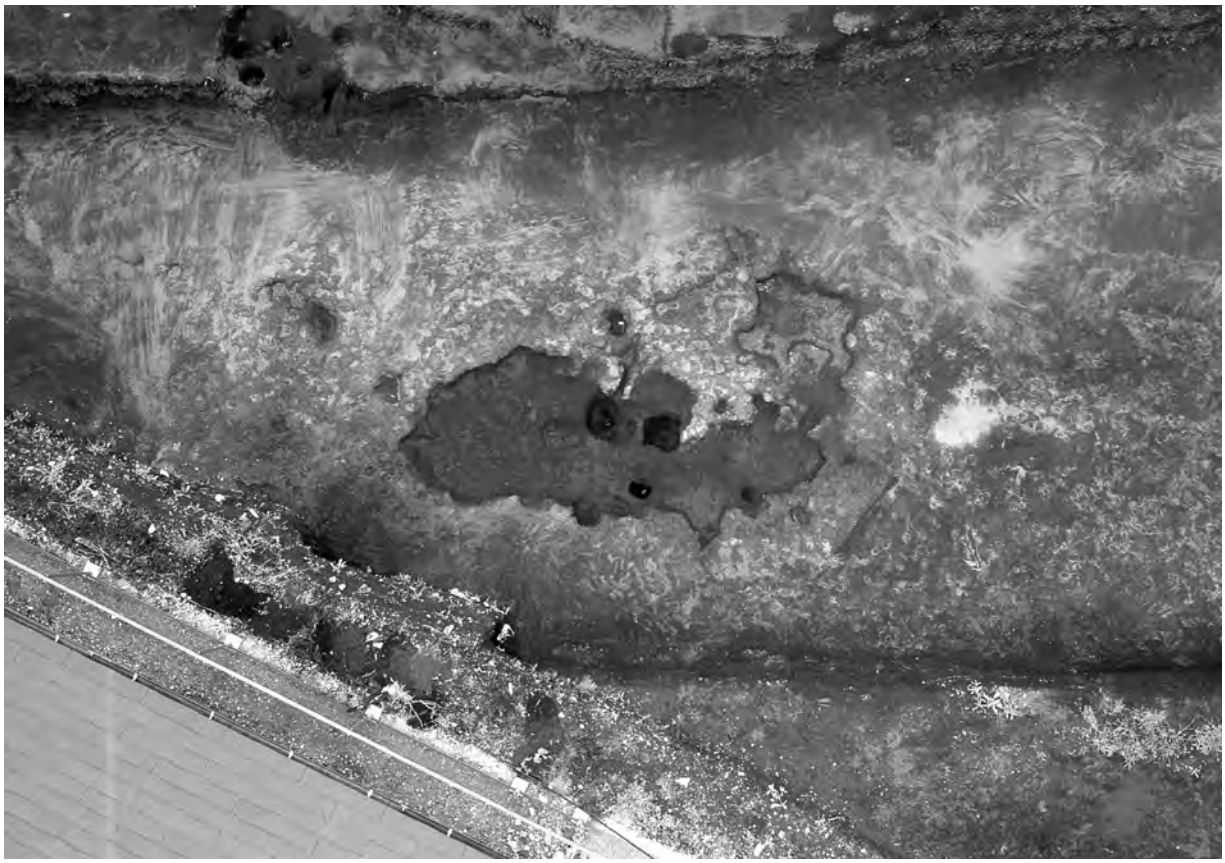
後方部東側周溝調査状況（1）

後方部東側周溝調査状況（２）

後方部東側周溝調査状況（３）

前方部東側周溝南端部

前方部東側周溝完掘



後方部東側周溝完掘

後方部北側周溝セクション（T－T'）

後方部東側周溝セクション（H － H'）

東側周溝くびれ部分セクション（J － J'）

前方部東側周溝セクション（C － C'）

後方部北側（①区）周溝遺物出土状況

後方部北東（②～③区）周溝遺物出土状況（１）

後方部北東（②～③区）周溝遺物出土状況（２）

後方部北東（②～③区）周溝遺物出土状況（３）

後方部南東（④区）周溝遺物出土状況

後方部北東周溝出土遺物（1）

後方部北東周溝出土遺物（2）

高坏（第 59 図 1）出土状況（後方部東側周溝）

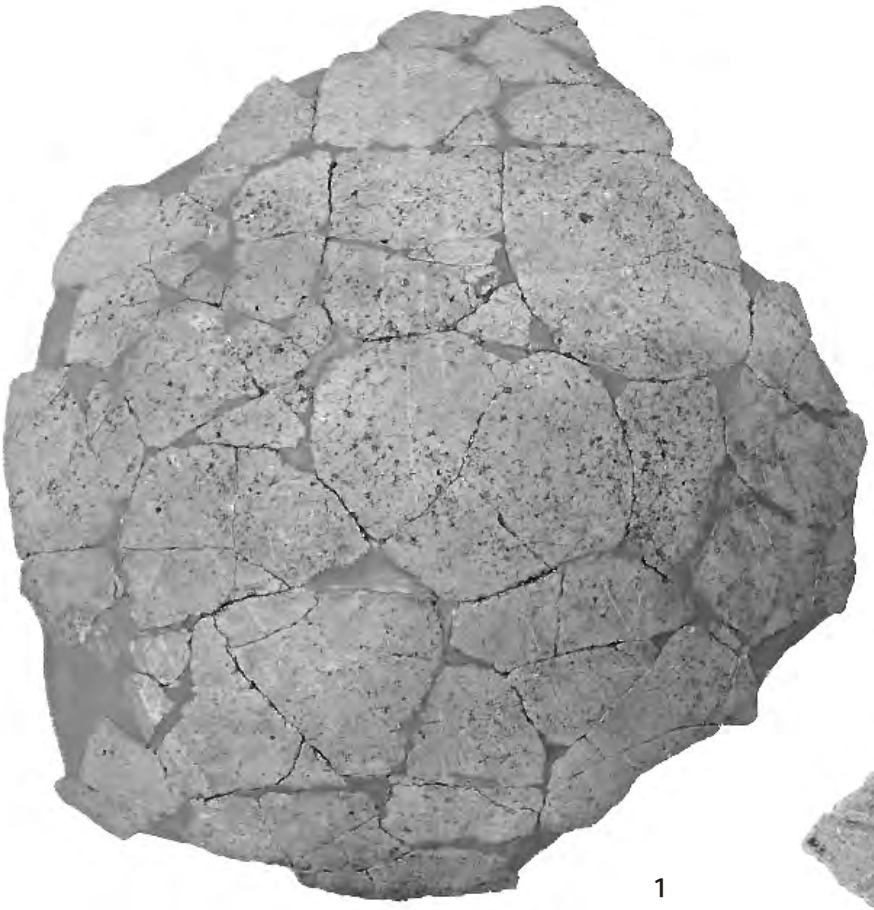
高坏（第 59 図 1）脚部出土

第２号溝状遺構断面（O － O'）

南側遺構分布状況

第１号住居址

第２号住居址



1

2

3

4

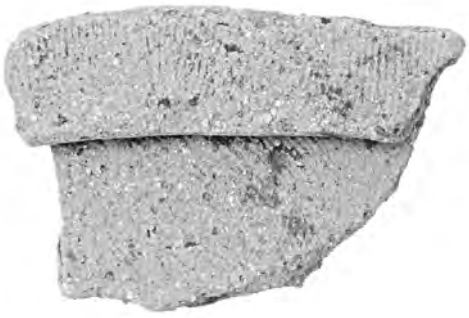
5

6

1：第 40 図 1 (T-95)　2：第 40 図 3 (T-119)　3：第 40 図 4 (1-014)　4：第 40 図 2 (T-114)
5：第 40 図 6 (3-023)　6：第 40 図 5 (T-29)

棺上出土土器

ＰＬ．56



1

2

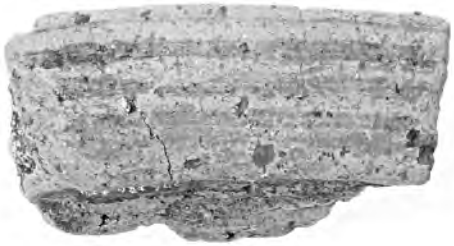
3

4

5

6

7



8

1：第 41 図 1 (T-128)　2：第 41 図 2 (T-117)　3：第 41 図 3 (T-123)　4：第 41 図 4 (T-82)
5：第 41 図 5 (T-124)　6：第 41 図 6 (T-99)

棺外および墳丘出土土器

1

2

3

5

4

6

7

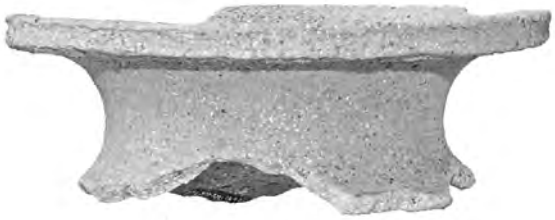
1：第 41 図 9 (T-125)　2：第 41 図 10(2-034)　3：第 42 図 1　4：第 42 図 2　5：第 44 図 7 (1-019)
6：第 44 図 8 (1-025)　7：第 44 図 11 (1-027)

棺外および墳丘出土土器、周溝および周辺出土土器、土製玉類

PL．58

1

2



4

3

6

5

1：第 44 図 9 (1-012)　2：第 44 図 10(T-69)　3：第 44 図 12(1-023)　4：第 44 図 14(1-024)
5：第 44 図 13(1-037)　6：第 45 図 1 (1-010)

周溝および周辺出土土器

1

2

3

4

5

6

1：第 45 図 2 (T-75)　2：第 45 図 3 (1-035)　3：第 45 図 4 (1-009)　4：第 45 図 5 (1-031)
5：第 45 図 6 (1-034)　6：第 45 図 7 (1-020)

周溝および周辺出土土器

ＰＬ．60

1

2

3

4

5

6

1：第 46 図 22(T-201)　2：第 46 図 23(1-017)　3：第 46 図 24(1-018)　4：第 46 図 25(1-007)

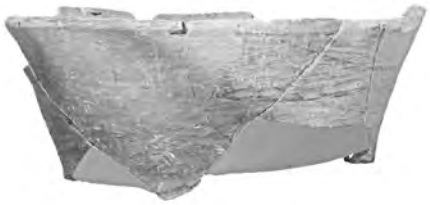
5：第 46 図 26(1-008)　6：第 47 図 1 (1-002)

周溝および周辺出土土器

1

2

3



4

5

6

7

1：第 47 図 2 (1-003)　2：第 47 図 3 (1-001)　3：第 47 図 4 (1-016)　4：第 47 図 5 (T-71)
5：第 47 図 6 (1-028)　6：第 47 図 7 (1-033)　7：第 47 図 8 (1-026)

周溝および周辺出土土器

ＰＬ．62

1

2

3

4

5

6

1：第 47 図 9 (1-030)　2：第 47 図 10(1-013)　3：第 49 図 2 (2-012)　4：第 47 図 11(1-022)

5：第 49 図 3 (2-011)　6：第 49 図 1 (T-46)

周溝および周辺出土土器

1

2

4

3

5

6

7

1：第 49 図 4 (2-035)　2：第 49 図 5 (2-019)　3：第 49 図 6 (2-013)　4：第 49 図 7 (2-010)
5：第 49 図 8 (T-58)　6：第 50 図 1 (1-036)　7：第 50 図 2 (4-008)

周溝および周辺出土土器

ＰＬ．64

1

2

3

4

5

6

1：第 50 図 3 (1-006)　2：第 50 図 4 (4-007)　3：第 50 図 5 (4-025)　4：第 50 図 6 (1-004)
5：第 50 図 7 (1-032)　6：第 50 図 8 (1-011)

周溝および周辺出土土器

1

2

3

4

5

6

1：第 50 図 9 (4-005)　2：第 50 図 10(4-006)　3：第 50 図 11(4-023)　4：第 50 図 12(4-024)
5：第 50 図 13(4-001)　6：第 50 図 14(T-57)

周溝および周辺出土土器

ＰＬ．66

1

2

3

4

5

6

1：第 50 図 15(4-020)　2：第 50 図 16(4-009)　3：第 51 図 1 (4-035)　4：第 51 図 2 (1-015)

5：第 51 図 4 (1-005)　6：第 51 図 3 (4-038)

周溝および周辺出土土器

1

2

3

4

5

6

7

1：第 51 図 5 (4-039)　2：第 51 図 6 (T-59)　3：第 51 図 8 (T-56)　4：第 51 図 7 (4-034)
5：第 51 図 9 (T-55)　6：第 51 図 12(T-62)　7：第 51 図 10(T-53)

周溝および周辺出土土器

ＰＬ．68

1

2

3

4

5

6

1：第 51 図 11(4-019)　2：第 51 図 13(4-004)　3：第 51 図 14(4-002)　4：第 51 図 15(4-021)
5：第 51 図 16(4-003)　6：第 51 図 17(4-032)

周溝および周辺出土土器

1

2

3

4

5

6

7

8

1：第 51 図 18(4-028)　2：第 51 図 19(4-018)　3：第 51 図 20(4-033)　4：第 51 図 21(4-040)
5：第 52 図 1 (4-011)　6：第 52 図 2 (4-029)　7：第 52 図 3 (4-014)　8：第 52 図 4 (4-013)

周溝および周辺出土土器

ＰＬ．70

1

2

3

4

5

6

7

8

1：第 52 図 5 (4-015)　2：第 52 図 6 (4-022)　3：第 52 図 7 (4-036)　4：第 52 図 8 (T-54)
5：第 52 図 9 (4-031)　6：第 52 図 10(4-012)　7：第 52 図 11(4-016)　8：第 52 図 12(4-026)

周溝および周辺出土土器

1

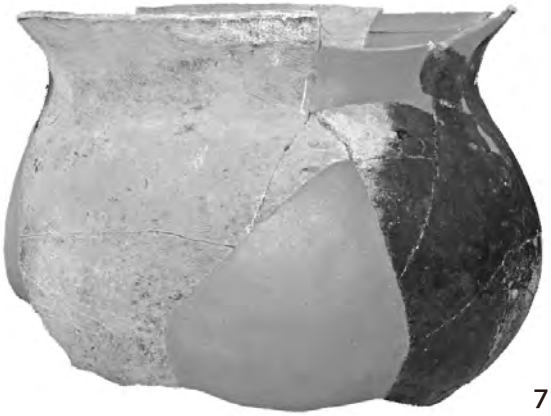
2

3

4

5

6



7

8

1：第 52 図 13(4-027)　2：第 52 図 14(2-014)　3：第 52 図 15(4-037)　4：第 52 図 16(4-010)
5：第 53 図 1 (T-24)　6：第 53 図 2 (2-032)　7：第 53 図 3 (2-016)　8：第 53 図 4 (T-26)

周溝および周辺出土土器

ＰＬ．72

1

2

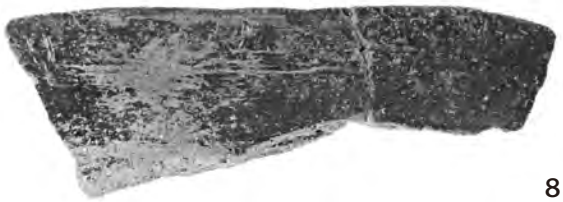
3

4

5

6

7



8

9

1：第 53 図 5 (T-33)　2：第 53 図 6 (2-031)　3：第 53 図 7 (T-25)　4：第 53 図 8 (T-60)　5：第 53 図 9 (T-31)
6：第 53 図 10(T-23)　7：第 53 図 11(T-36)　8：第 53 図 15(T-47)　9：第 53 図 12(T-51)

周溝および周辺出土土器

1

2

3

4

5

6

7

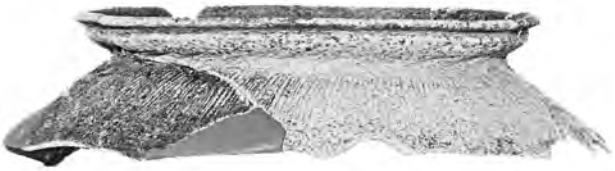
8

1：第 53 図 13(T-39)　2：第 53 図 14(T-27)　3：第 53 図 16(T-34)　4：第 53 図 17(T-73)
5：第 54 図 1 (T-43)　6：第 54 図 2 (2-036)　7：第 54 図 3 (T-40)　8：第 54 図 4 (T-49)

周溝および周辺出土土器

ＰＬ．74

1

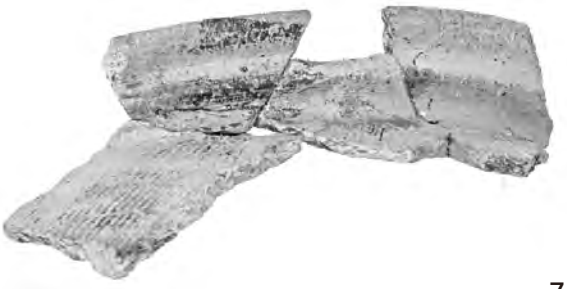


2

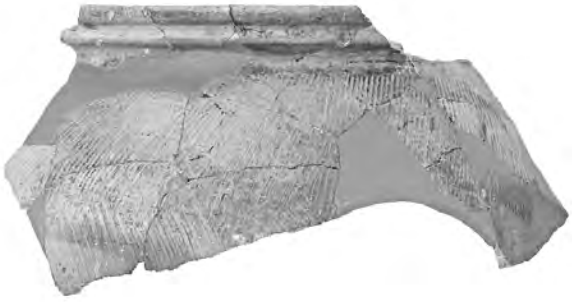
4

3

5



7



6

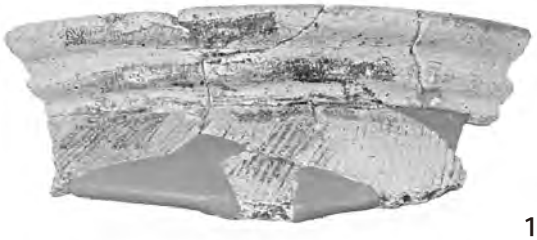
8

9

10

1：第 54 図5(T-38)　2：第 54 図7(2-015)　3：第 54 図8(2-027)　4：第 54 図9(2-028)　5：第 54 図 10(2026)
6：第 54 図 11(2-021)　7：第 54 図 12(T-67)　8：第 54 図 13(T-66)　9：第 54 図 16(T-65)　10：第 54 図 15(T-64)

周溝および周辺出土土器



1

2

3

4

5

6

7

8

9

1：第 55 図1(2-029)　2：第 55 図2(2-022)　3：第 55 図3(2-020)　4：第 55 図4(2-006)　5：第 55 図7(2-033)
6：第 55 図5(2-023)　7：第 55 図8(2-030)　8：第 55 図9(T-68)　9：第 55 図6(2-025)

周溝および周辺出土土器

ＰＬ．76

1

2

3

4

5

7

6

1：第 56 図 1 (2-003)　2：第 57 図 1 (T-28)　3：第 57 図 2 (T-35)　4：第 57 図 3 (T-61)

5：第 57 図 4 (2-002)　6：第 57 図 6 (T-42)　7：第 57 図 5 (2-004)

周溝および周辺出土土器

1

2

3

4

5

6

7

8

9

1：第 57 図 7 (2-001)　2：第 57 図 8 (T-45)　3：第 57 図 9 (T-44)　4：第 57 図 10(2-007)　5：第 58 図 1 (T-37)
6：第 58 図 2 (T-41)　7：第 58 図 3 (T-32)　8：第 58 図 9 (T-2)　9：第 58 図 4 (T-48)

周溝および周辺出土土器

ＰＬ．78

1

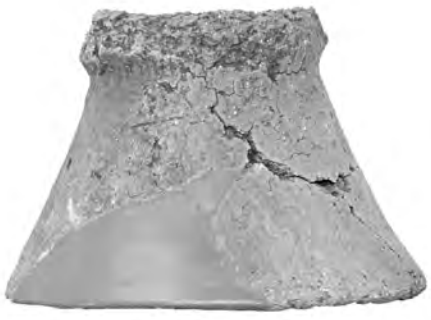
2

3

4

5

6



7

8

1：第 58 図 11(2-024)　2：第 58 図 12(2-005)　3：第 58 図 13(2-008)　4：第 58 図 15(T-5)
5：第 58 図 17(T-11)　6：第 58 図 18(T-1)　7：第 58 図 20(T-19)　8：第 58 図 25(T-22)

周溝および周辺出土土器

1

2

3

4

5

6

7

8

1：第 58 図 26(T-14)　2：第 58 図 27(T-7)　3：第 58 図 28(T-20)　4：第 58 図 29(T-4)
5：第 59 図 2 (3-015)　6：第 59 図 3 (3-014)　7：第 59 図 4 (3-002)　8：第 59 図 6 (3-003)

周溝および周辺出土土器

1

2

1・2：第 59 図 1 (3-004)

1

2

3

4

5

6

7

8

1：第 59 図 7 (3-008)　2：第 59 図 8 (3-007)　3：第 59 図 9 (3-017)　4：第 59 図 10(3-011)
5：第 59 図 11(3-009)　6：第 59 図 12(3-001)　7：第 59 図 14(T-63)　8：第 59 図 13(3-010)

周溝および周辺出土土器

ＰＬ．82

1

2

3

4

5

6

7

8

9

1：第 59 図 15(T-74)　2：第 59 図 17(3-016)　3：第 59 図 16(3-013)　4：第 60 図 1 (3-005)

5：第 60 図 3 (3-012)　6：第 60 図 2 (3-020)　7：第 60 図 5 (T-72)　8：第 60 図 6 (4-030)　9：第 60 図 7 (4-017)

周溝および周辺出土土器

1

2

3

4

5

6

7

8

9

10

11

12

1：第 68 図 1 (3-033)　2：第 68 図 2 (3-030)　3：第 68 図 3 (3-035)　4：第 68 図 4 (3-034)
5：第 68 図 6 (3-028)　6：第 68 図 5 (3-029)　7：第 68 図 8 (3-031)　8：第 68 図 7 (3-019)
9：第 68 図 10(3-018)　10：第 68 図 9 (3-006)　11：第 68 図 11(3-032)　12：第 68 図 12(3-024)

遺構外出土遺物

ＰＬ．84

1

2

3

4

5

6

7

8

9

10

1：第 68 図 13(3-025)　2：第 68 図 14(3-026)　3：第 68 図 15(3-027)　4：第 68 図 16(1-021)　5：第 68 図 17(T-50)
6：第 69 図 2 (2-037)　7：第 69 図 1 (T-52)　8：第 69 図 3 (2-018)　9：第 69 図 4 (2-017)　10：第 69 図 5 (5560)

遺構外出土遺物

報告書抄録

ふりがな	たかおさんこふんはっくつちょうさほうこくしょ
書　　名	高尾山古墳発掘調査報告書
副 書 名	
巻　　次	
シリーズ名	沼津市文化財調査報告書
シリーズ番号	第 104 集
編著者名	池谷信之
編集機関	沼津市教育委員会
所 在 地	〒 410-8601　静岡県沼津市御幸町 16 番 1 号　TEL055-931-2500㈹
発行年月日	西暦 2012 年 3 月 30 日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積	発掘原因
		市町村	遺跡番号	世界測地系				
高尾山古墳（たかおさんこふん）	沼津市東熊堂字北方（ひがしくまんどうあざきたかた）	22203	276	35° 07′ 23″	138° 51′ 44″	20080418	5800㎡	道路建設工事
				日本測地系		～		
				35° 07′ 11″	138° 51′ 55″	20091207		

所収遺跡名	種別	主な年代	主な遺構	主な遺物	特記事項
高尾山古墳	古墳	古墳時代初期 平安時代	前方後方墳	土師器	東国最古級の前方後方墳

要　約

高尾山古墳の概要
① 愛鷹山末端の標高約 20 mの尾根上に築造。
② 主軸をほぼ北に向ける墳丘長 62.178 mの前方後方墳、前方部南東側に土橋、南側の周溝が他に比べて狭い。
③ 主体部は舟形木棺？、棺底に水銀朱。
④ 主要な副葬品は「上方作系浮彫式獣帯鏡」（破砕鏡）1 点、槍 2 点、鉄鏃 32 点、鉇 1 点、勾玉 1 点。
⑤ 主体部周辺の墳丘盛土に、パレススタイル壺、S 字甕、大廓式土器。
⑥ 周溝から祭祀に伴う大量の土器。在地の大廓式土器、廻間Ⅱ式高坏、同ヒサゴ壺、同器台、S 字甕、北陸系甕など。
⑦ 造営～埋葬の時期は 230 年代～ 250 年代。

その他の時期
① 前方部に造営直前の弥生時代後期後葉の住居址。
② 前方部周溝周辺に律令時代末期の住居址、高台付坏・坏・鉢・甕。

沼津市文化財調査報告書　第 104 集
高尾山古墳発掘調査報告書

平成 24 年 3 月 15 日　印刷
平成 24 年 3 月 30 日　発行

編　集／沼 津 市 教 育 委 員 会
発　行／沼 津 市 教 育 委 員 会
沼津市御幸町 16 番 1 号
TEL（055）931－2500㈹
印　刷／みどり美術印刷株式会社